東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 14

東京大学本郷構内の遺跡

医学部教育研究棟地点

研究編

2020

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 14

東京大学本郷構内の遺跡

医学部教育研究棟地点

研究編

2020

東京大学埋蔵文化財調査室

例　　言

1．本書は、東京大学本郷構内、医学部教育研究棟新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　研究編である。

2．本書は、医学部教育研究棟地点の発掘調査に関わる諸問題について、調査、研究を行った成果である。阿部常樹（國學院大學学術資料センター）、金子智（乃村工藝社）、長佐古真也（東京都埋蔵文化財センター）、西本右子（神奈川大学）、村上尚子（石川県立美術館）、丸山殼真（神奈川大学大学院）の各氏から研究論考をいただいた。記して感謝申し上げたい。

3．本報告の編集は、堀内秀樹、小林照子が行った。

4．調査の概要、個別の層序、遺構、遺物などの内容の詳細は、『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 14　東京大学本郷構内の遺跡　医学部教育研究棟地点　報告編』に記録している。参照されたい。

5．本書は、印刷物の他に平成 29 年の文化庁報告『埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について２』にそって、低解像度 PDF（150dpi）を東京大学埋蔵文化財調査室ウェブサイト内オンライン刊行物として公開を行っている（http://www.aru.u-tokyo.ac.jp/e-book.htm）。

東京大学本郷構内の遺跡
医学部教育研究棟地点発掘調査報告書 14
研究編

目　　次

例　　言
目　　次

【研究 1】医学部教育研究棟地点の発掘調査成果と土地利用 1
－天和 2（1682）年まで－　堀内　秀樹 …… 1

【研究 2】医学部教育研究棟地点の発掘調査成果と土地利用 2
－天和 2（1682）年以降－　小林　照子 ……23

【研究 3】加賀藩本郷邸南域の地業について
－医学部教育研究棟地点および周辺の調査から－　堀内　秀樹 ……41

【研究 4】医学部教育研究棟地点の瓦について　金子　智 ……57

【研究 5】火災処理と武家儀礼道具コレクション形成にみる本藩と支藩の関係について
－天和 2（1682）年の火災を例に－　堀内　秀樹 ……69

【研究 6】医学部教育研究棟地点出土の動物遺体　阿部　常樹 ……81

【研究 7】表御殿における応接
－「賓客応接記事」をもとに－　増田　晴夫 …… 119

【研究 8】地下室を思考する
－医学部教育研究棟地点と他地点との比較から－　大成　可乃 …… 159

【研究 9】加賀藩江戸屋敷における能
－ 13 代藩主斉泰の時代を中心に－　村上　尚子 …… 203

共同研究 東京大学本郷構内遺跡出土「白色系手づくねかわらけ」の研究
西本右子・丸山毅真・長佐古真也・堀内秀樹・小林照子 …… 231

【研究 10】本郷構内出土白色系かわらけの消長　小林　照子 …… 233

【研究 11】東京大学本郷構内遺跡出土かわらけ試料の蛍光 X 線分析における元素分析
丸山毅真・西本右子 …… 251

【研究 12】東京大学本郷構内遺跡出土手捏ねかわらけの元素分析による生産地推定
長佐古　真也 …… 265

医学部教育研究棟地点の発掘調査成果と土地利用　1

－天和２（1682）年まで－

堀内 秀樹

はじめに

医学部教育研究棟地点（以下、「医研」と略す）の立地は、本郷台地頂部からやや東にあたる台地上に位置しており、平坦地を確保するための大きな盛土や切土などが必要ない場であった。発掘調査は４次に分けて行われ、調査面積は2,901㎡、7枚の主要な遺構面、2,470基の遺構、コンテナ箱で548箱の遺物が出土した。この数量は、本地点の特徴であり、本郷構内の他地点と対比しても、面積に対して遺構数は多い反面、遺物量は少なく、塵芥廃棄を行なわない場（御殿空間）の性格が反映していると思われる。特に遺物は、天和２（1682）年、元禄16（1703）年の被災資料、瓦など藩邸内の日常的な生活で廃棄されるものとは異なるものが出土量の大半を占めている。

これまで何度か指摘しているように、「東邸沿革図譜」（文政６（1823）年成立）によると、加賀藩本郷邸は、慶長19（1614）年に改易になった大久保忠隣の屋敷地を元和２～３（1616～17）年ころに拝領したと伝わっている。本地点における明確な考古学的痕跡は、それ以降になるが、江戸時代前期の状況の復元は、近代初頭に前田侯爵邸整備に伴って行われた土地改変によって多くの地中情報が失われた点、遺構や層に伴う出土遺物が少ない点に加えて、元禄元（1688）年以前の絵図面が現存していない点など、土地利用の復元に際しての文字情報も限定的で、少ない考古学的成果を中心とせざるを得ない。

本稿では、藩邸成立から八百屋お七の火災（1682年）による本郷邸の全焼と翌年の上屋敷への唱替までの時期を、発掘調査によって得られた遺構とその変遷、遺物の状況を中心に、関連した文献史料、絵図面などとの対比によって医研地点の歴史的景観の復元を行いたい。

１．検出された遺構面と段階

江戸時代から大学以前の主要な遺構面は、最下面ローム面を含めてＡ面～Ｇ面の７枚が確認された（１図）。報告編で記したように藩邸が拝領した初期には、本地点中央域と北域が加賀藩下屋敷、南域が幕臣同心屋敷であった。明暦の大火（1657年）以降には全域が加賀藩邸となるが、上屋敷となった天和３（1683）年以降は、御殿空間、あるいは詰人空間との境界を含むエリアに該当している。これら本地点の調査で確認された土地利用や出土陶磁器の状況と藩邸の歴史的変遷から、以下の４段階に分けて考えると理解しやすい。

○Ⅰ期　加賀藩下屋敷・幕臣地併存段階
（フェイズ１～４）：D、E、F、G面（東大編年Ⅰｂ～Ⅱ期）

○Ⅱ期　加賀藩下屋敷段階（フェイズ５）：D、G面（東大編年Ⅲａ期）

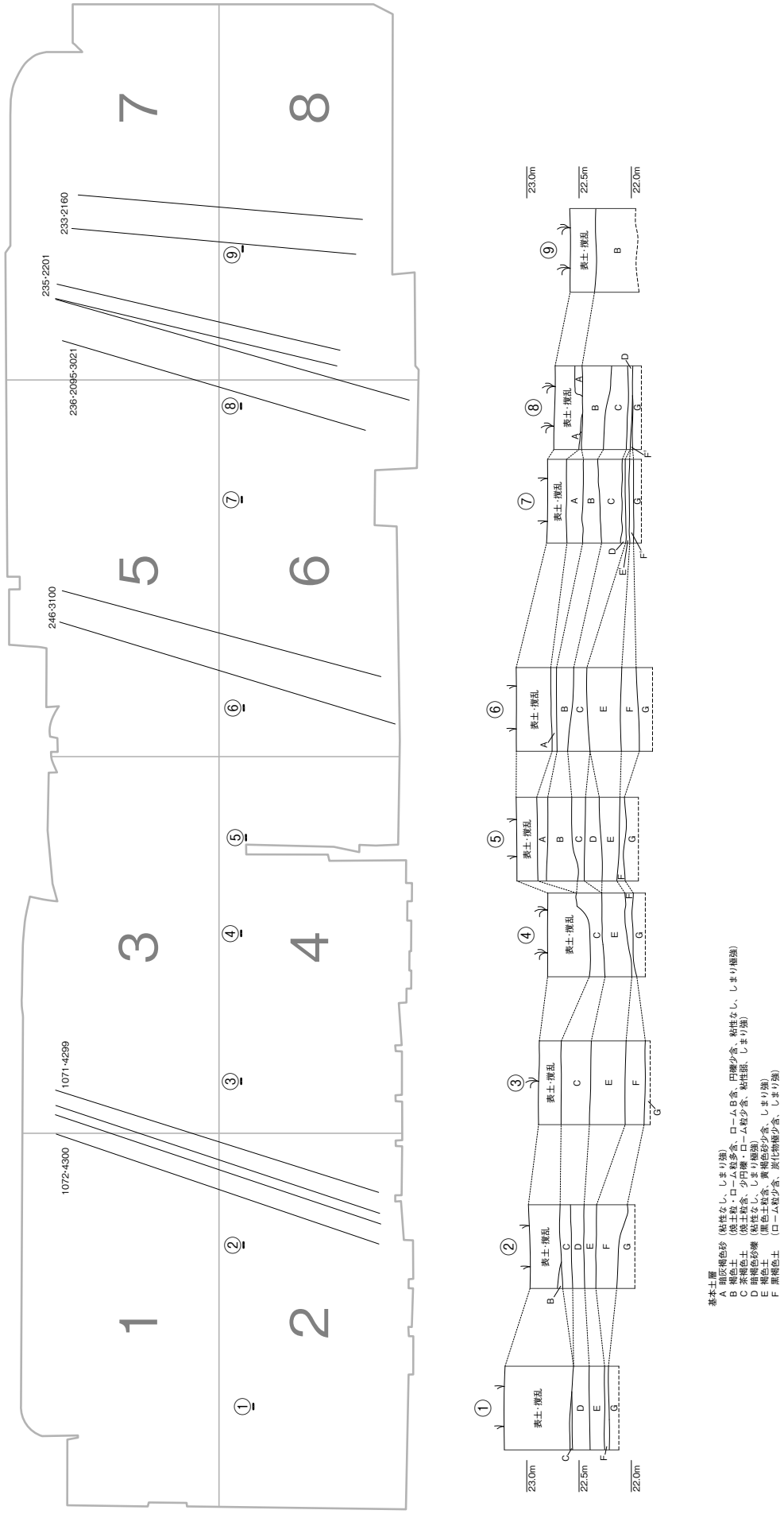
○Ⅲ期　加賀藩上屋敷段階

Ⅲ－１期　南通町軸御殿段階（フェイズ６）：C面（東大編年Ⅳ期）

Ⅲ－２期　中山道軸御殿段階（フェイズ７）：C面、G

１表　天和２（1682）年までの土地利用の変遷

年代		事項	段階			調査区の状況						備考
			調査区	土地利用	東大編年	面	北域	境			南域	
元和2-3	1616-17	拝領	Ⅰ期	フェイズ1	Ⅰb	G	未開発	不明	道無	境無	同心屋敷	金箔瓦
寛永3	1626	四界に木塀を環らす		フェイズ2	Ⅱ		藩邸	簡易？	道無	不明		
寛永6	1629	御成				F						
				フェイズ3				246･3100		235･2201		
寛永16	1639	利常隠居		フェイズ4		E						
寛永17	1640	御成										
慶安3	1650	本郷邸全焼		フェイズ5	Ⅲa	D						綱紀移住
明暦3	1657	明暦の大火	Ⅱ期						道（邸内）	236･2095･3021	藩邸	（詰人空間）
万治元	1658	利常死去										
天和2	1682	八百屋お七の火災	Ⅲ-1期	フェイズ6	Ⅲb	C	（御殿空間）	境無				
天和3	1683	上屋敷に唱替										（御殿空間）
元禄15	1702	御成			Ⅳ							
元禄16	1703	水戸様火事	Ⅲ-2期	フェイズ7				233･2160（邸内）				（詰人空間）


1
2
3
4
5
6
7
8
1071·4299
1072·4300
246·3100
236·2095·3021
235·2201
233·2160
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
23.0m
22.5m
22.0m
表土・撹乱
基本土層
A 暗灰褐色砂（粘性なし、しまり強）
B 褐色土（焼土粒・ローム粒多含、ローム B 含、円礫少含、粘性なし、しまり極強）
C 茶褐色土（焼土粒含、少円礫・ローム粒少含、粘性弱、しまり強）
D 暗褐色砂礫（粘性なし、しまり極強）
E 褐色土（黒色土粒含、黄褐色砂少含、しまり強）
F 黒褐色土（ローム粒少含、炭化物礫少含、しまり強）

1図　基本層序

面（東大編年Ⅴ～Ⅷ期）

○Ⅳ期　前田侯爵邸段階（フェイズ8）：A、B面（東大編年Ⅸ期）

以下では、各段階について説明を加えたい。

２．各段階の様相

（１）Ⅰ期　加賀藩下屋敷・幕臣地併存段階

①Ｇ面から確認された遺構群（フェイズ１、フェイズ２）

本地点の調査における最下面は、G面と命名したローム面である。G面で確認された遺構は、824基であるが、遺構は調査区西域、南域に多く分布していることが判る（16、17図、附図5、6）。特に南域に多い点は、本研究編研究3で触れているように北域と南域の土地利用の違いによるものと考えている。調査区中央付近を東西に横断するSD246･3100以南（おおむね5～8区）が、加賀藩邸に組み込まれた明暦3（1657）年以降、御殿空間内であった天和2（1682）年～元禄16（1703）年までを除いて、基本的にG面付近が生活面であったことによる。

本地点における北域最初の痕跡であるが、調査区2区に位置するG面のSE4577からは梅鉢文の金箔瓦（2図1）が出土しており、G面は加賀藩邸として利用された時期を含でいたことが確認できる。金箔瓦はこれまでの加賀藩邸の調査で、相当量が出土している。本地点では21遺構から出土しており、このうちE～G面から確認されているのはSD870･980･4498（F面）、SK938（F面）、SK940･941（E･F面）、SK954（E面）、SK961（F面）、SP1026（F面）、SD1032･4685（F面）、SK1091（E面）、SK1105（F面）、SK4532（F面）、SP4546（G面）、SK4553（F面）、SE4577（G面）、SE4705（G面）の14遺構で、これらは全てSD246･3100以北の地域（1～4区）に位置している。また、金箔瓦は、寛永6（1629）年に本郷邸で行われた将軍徳川家光、大御所徳川秀忠を迎えるための建造物に使用されたと推定されているが（金子2006）、これらは全て二次的な被熱は確認されない。

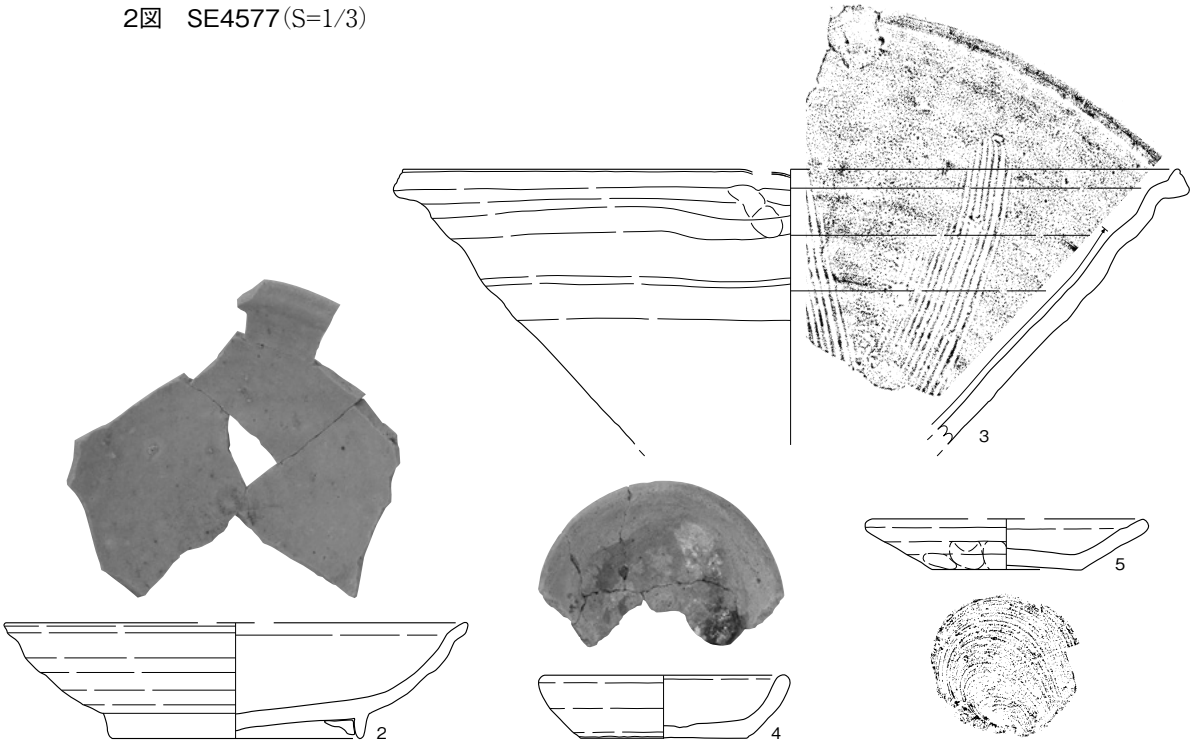
一方、南域から確認されたSK2266･3243、SK2288などを含む6区の遺構群は、フェイズ2～4までは加賀藩邸と同心屋敷の境界道、また、フェイズ5は藩邸内の道として機能していた硬化面「道路D面」[(1)]下に存在しており、道路構築以前に廃絶したと考えられる。これら遺構には、溝状遺構（SD2260）、井戸（SE3122）、植栽痕（SK2381、SK2455、SK3312･3315など）、廃棄土坑（SK2266･3243、SK2288など）生活に伴う遺構が複数確認されていた状況が看取されており、生活空間として利用していたと考えられる。この場合問題になる点は、道路の敷設時期であろう。

これらを検証するために、まず出土遺物を概観したい。これらの遺構からは梅鉢文の瓦は出土していない。SK2288から出土している擂鉢は、口唇部が短いw字状に屈曲しており、瀬戸市穴田窯出土の古い様相の製品と類似している（3図3）。藤澤良裕氏の研究では、穴田窯古段階は「穴田Ⅰ期」とし、瀬戸村の段階との対比では「穴田Ⅰ期は第1段階第2小期」（瀬戸市1998）と位置づけており、「第2小期年代は17世紀第2四半期に成立していた」とされる。また、SK2266･3243の1は口唇部の一部を押し、5弁の輪花にした総織部の鍔皿、2は黄瀬戸釉の鍔皿である（4図）。これらは土岐市窯ヶ根窯出土遺物の「圏線輪花皿」あるいは「段皿」と分類されている製品であり、同報告書では「様相2」段階として位置づけられている（4図参考資料）（土岐市教育委員会・土岐市埋蔵文化財センター2006）。様相2は、同市元屋敷窯廃窯後の整地層出土資料群から出土している「元和八年」（1622年）の紀年銘資料との対比からおおむね元和年間（1615～24）の年代が与えられている。

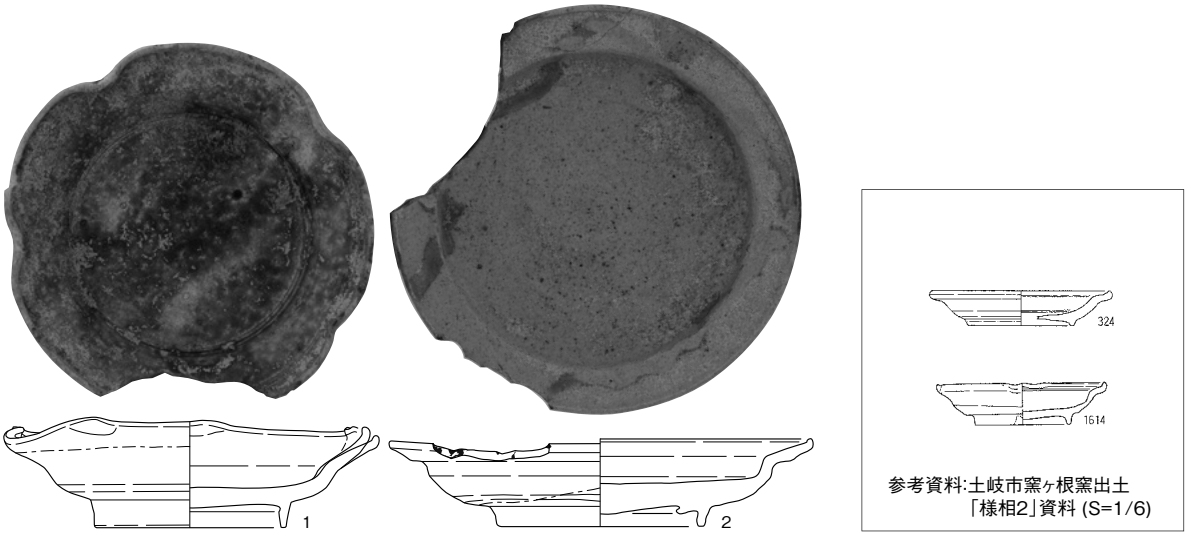
一方、江戸遺跡での段階設定では、千代田区丸の内一丁目遺跡10号遺構からは、SK2288のものと口縁部形態が類似した擂鉢（5図40）と口縁部がやや内傾し、器高が低いタイプの「ミなと藤左右衛門」銘のロクロ成形の塩壺（同67）が出土している[(2)]（千代田区丸の内1-40遺跡調査会1998）。また、同区丸の内三丁目遺跡52号遺構からSK2266･3243出土製品（4図1、2）と類似した総織部の鍔皿（6図645）や外反皿（同641）などが出土していることから（東京都埋蔵文化財センター1994）、年代的にはこれらと近いと判断される。長佐古真也氏の17世紀前半の江戸遺跡出土陶磁器様相の研究では、丸の内三丁目遺跡52号遺構が「1610年代中葉～後葉前後」、丸の内一丁目遺跡10号遺構が「1610年代末～20年代前半」と推定しており（長佐古2008）、これらから両遺構の出土資料は、おおむね元和年間に比定されると判断される。

他方、これまでの文献調査の成果では、加賀藩が本郷邸を拝領するのが元和2～3（1616～17）年（「東邸沿革図譜」）、「寛永三年丙寅、始て四界に木墻を環らし」（「東邸沿革図譜」）、「先四方ニ塀を懸させられ」（「三壺聞書」）と本郷邸の開発が始まるのが寛永3（1626）年秋とされている。また、「三壺聞書」によるとそれ以前は「草ほうほうたる小笹原に谷峯も有て、所々に番人又は下々の者のミ有て、屋敷ノ内またらに茶園してそ居たりける」（石川県金沢城調査研究所2017）とほぼ休閑地になっていたと判断される。「所々に番人又は下々の者のミ有て」

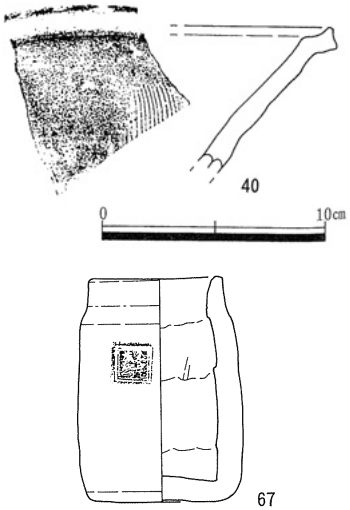
2図　SE4577(S=1/3)



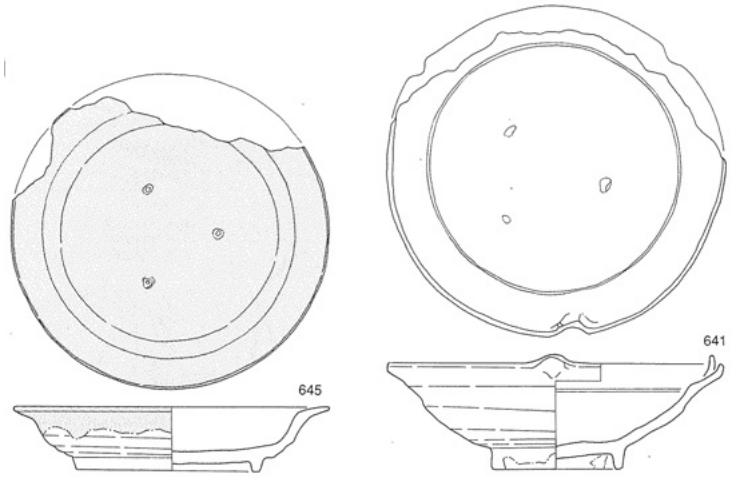
3図　SK2288(S=1/3)



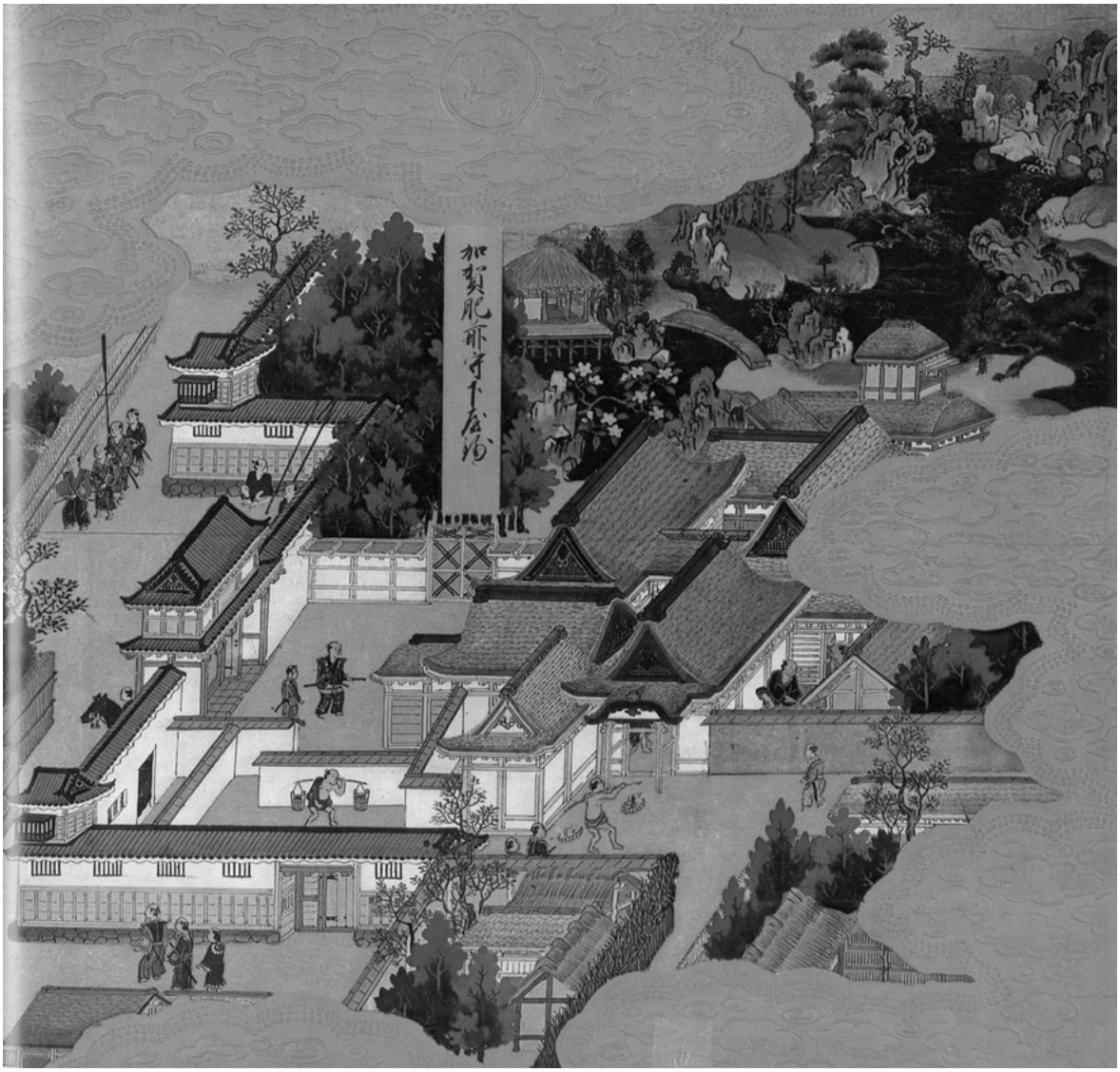
4図　SK2266･3243(S=1/3)



5図　丸の内一丁目遺跡10号遺構(S=1/3)



6図　丸の内三丁目遺跡52号遺構(S=1/3)



7図　「寛永江戸図屏風」(部分)(国立歴史民俗博物館蔵)

の程度は不明であるものの、調査で確認された6区の状況とは齟齬を感じる。道（道路D面）が敷設する前の加賀藩邸と近藤登之助、大森半七、高木筑後などの同心屋敷境の状況は不明であるものの、寛永19～20（1642～43）年頃の状況が描かれた「寛永江戸全図」（臼杵市立臼杵図書館蔵）や寛永10～11（1633～34）年に描かれたとされる「寛永江戸図屏風」（7図）（国立歴史民俗博物館蔵）では加賀藩邸と同心屋敷間の道が描かれていることから、こうした時期に整備されたと推定される。おそらく外縁を含めて本郷邸が本格的に開発される寛永初期段階でこうした整備が行われたと推定でき、道路D面下の遺構群はそれ以前の同心屋敷に伴う施設であったと考えていいだろう。

また、加賀藩邸内の状況はSD246･3100以北で、ピットなどの小遺構が多く確認されている一方、調査区北側を東西に横断するSD1148･4669･4674（塀か）以北（おおむね1区、2区）では、井戸（SE4577、SE4581）、植栽痕（SK4019、SK4399、SK4531など）など明確な生活の痕跡が検出されている。一方、これの広がりについては本地点北側がこれまで大きな調査が行われておらず、考古学的な状況は明確ではない。また、現在本地点北側に建っている医学部2号館を挟んで三四郎池庭園があり、この間は約100mを測る。現在の庭園との境は、ほぼ江戸時代末の溶姫御殿と育徳園庭園の境を継承しているが、藩邸成立期の庭園域や御殿の状況等は当該期の絵図面も存在しないことから判らない点が多い。

藩邸の開発に伴って、藩邸境に道路はできたもののG面で後に石組溝（SD246･3100）となるラインには大きな遺構が確認できない。これらからこの段階では藩邸内外の比高差はなく、境施設も存在しても簡易なものであったと推定される。また、同心屋敷側についても何らかの境界施設が構築されたと推定されるが、明確ではない。

これら調査成果および生産地と江戸遺跡における出土遺物の状況から加賀藩邸が拝領したとされる元和2～3（1616～17）年を遡る遺物群は、本地点最下層（G面）出土資料からも確認されていないものの、G面の遺構は、藩邸境（SD246･3100）と道（道路D面）が成立する時期の前後を挟んでいたことが推定された。整理すると以下のようになろう。

・フェイズ1（16図）：藩邸境（SD246･3100）が明確な形で成立しているか不明であるものの、境以南の同心屋敷と推定される地域では、生活の痕跡が確認される。一方、境以北の藩邸に伴う遺構は明確ではない。G面（関東ローム層上面）の上位堆積層の削平は、これ以前に行われていたと判断される。おおむね元和年間（1615-24）に相当すると思われる。

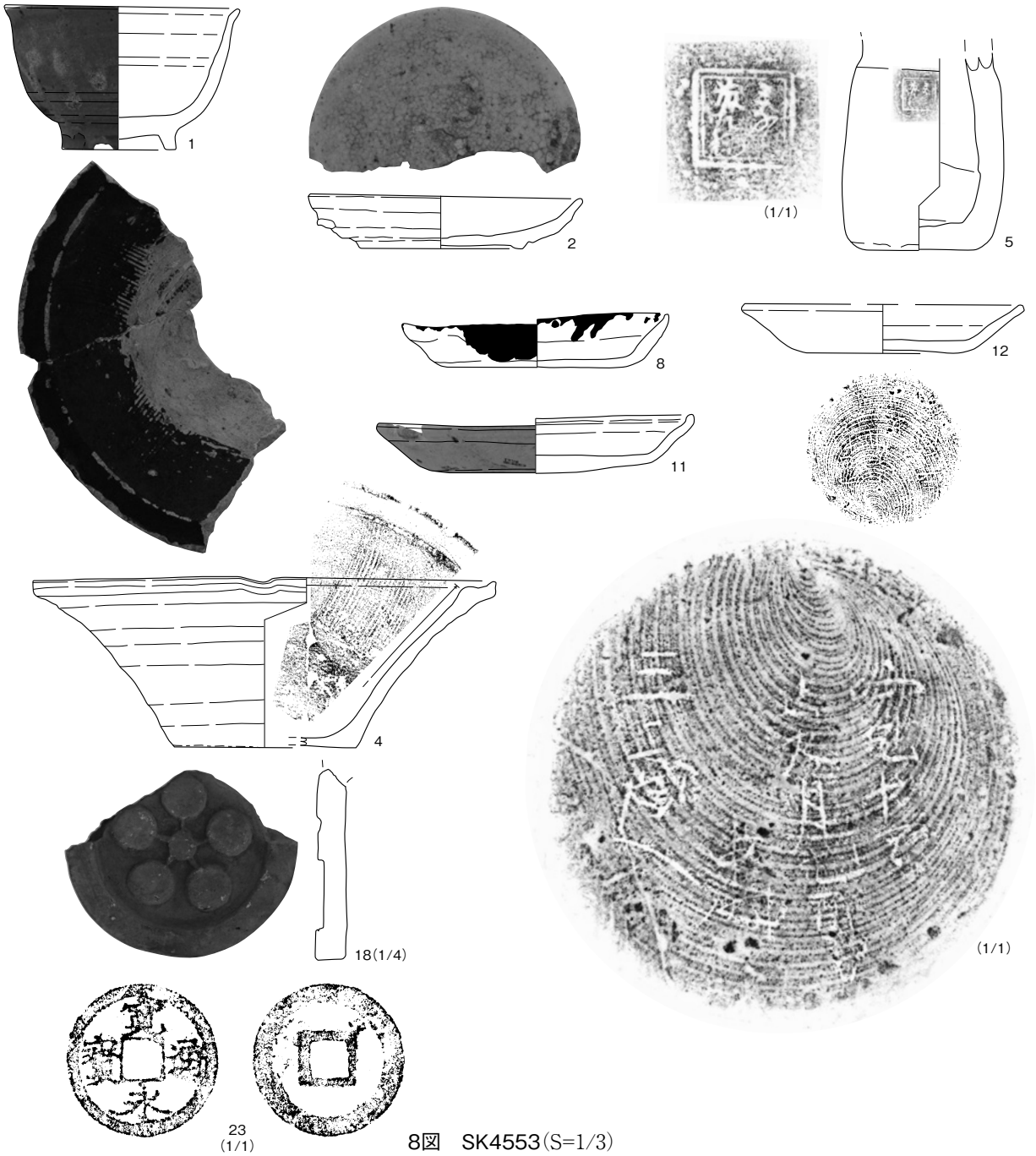
・フェイズ2（17図）：藩邸と同心屋敷間には、境構造物（後のSD246･3100、SD235･2201となるライン）と道（道路D面）が構築され、藩邸内に生活遺構が確認される。ただし、最初期はローム面（G面）を生活面に利用していたと判断される。おおむね寛永年間（1624～45）前期に相当すると思われる。

②F面から確認された遺構（フェイズ3）

F面から確認された遺構数は234基で、G面で確認された遺構数からかなり減少している（18図、附図7）。F層が藩邸境であるSD246･3100以北で確認されていたことから、藩邸側にのみに分布している。目立つのは調査区東西に走る布堀の溝状遺構（1～2区SD870･980･4498、SD1032･4685、SD1062･4687、3～4区SD1039、SD1040、SD1211･4426など）で、このうちSD1032･4685とSD870･980･4498は礎石と思われる大型礫を配し、SD1211･4426はピットが1間間隔で確認され、これらはその構造から屋敷内の境塀施設と推定できる。また、これら溝と同軸にSK4553、SK4683などのやや大型の土坑が確認さおり、境塀付近に設けられた廃棄土坑の可能性が高い。こうした遺構の状況は、藩邸内において建物が多く建ち並んでいる地域と言うより、空間が多くある周縁部的な状況であったと推定される。

藩邸境の状況は、道は継続的に維持されているものの、藩邸内ではG面より10cm前後嵩上げされたF面が作られたが、道路D面とほぼ同レベルであることから、この段階においても藩邸内外は大きな比高差は確認されない。境遺構もフェイズ2で構築された施設を継続して利用している可能性が高い。

F面の年代を考える上で、SK4553の出土遺物に注目したい（8図）。4の擂鉢は口唇部上端を内部に折り返す「擂鉢Ⅱ」タイプに相当し、その形態から瀬戸大窯第8～9小期に相当すると考えられる。第8～9小期は、大窯第4段階末～第5段階初頭に該当し、おおむね慶長末～寛永初期に位置づけられている（瀬戸市史編纂委員会1993）。また、G面でも出土している梅鉢文の金箔瓦（8図18）、「白色かわらけ」（同11）（詳細は本研究編研究10を参照されたい）などが伴っている。6は先述したG面SK2288でも出土している口縁部がやや内傾し、器高が低いタイプの「ミなと藤左右衛門」銘のロクロ成形の塩壺である。12と23は特に年代を考える際に重要な資料である。12は体部が薄く開くタイプで、ロクロ成形糸切り離しのかわらけであるが、底部に「寛十四／丑九



8図　SK4553(S=1/3)

月廿日／申時／三度入」と刻書されており、焼成年代が寛永 14（1637）年と推定される。また、23 の寛永通宝は寛永 13（1636）年初鋳のいわゆる古寛永で、かわらけに書かれた年代にきわめて近い。

・フェイズ３（18 図）：これらから F 面は寛永年間（1624 ～ 45）の後半を含む時期が推定でき、藩邸側ではそれ以前の G 面から比較的短期間うちに地業が行われ、生活面を若干嵩上げしている状況が看取される。

③Ｅ面から確認された遺構（フェイズ４）

E 面から確認された遺構数は 226 基で、E ～ F 層が藩邸境である SD246･3100 以北で確認されていることから、これに伴って遺構も藩邸側に濃密に分布している（19 図、附図 8）。同溝以南に分布している遺構は、E、F 層に相当する土層の堆積が薄かったことで、「E 面以下」と判断せざるを得なかった遺構が約 100 基程度存在する。この段階で土層図作成位置④～⑤のレベルは周囲よりもやや下がっているものの（1 図）、調査区北端から SD246･3100 までの標高は約 22.3m で、おおむね平準化されている。SD246･3100 付近では上の D 層が確認されていないことから、おそらくこの段階で藩邸内外を明確に区画する溝や門とそれに繋がる建物（SB250）が構

築された可能性が高い。SB250 の基礎は、後代のように坑底に設置した大型の根石の上に玉砂利と黄褐色土が混入する土とを交互に根固めとして突き固め、その上部に礎石を置く、上位面（C ～ D 面）の殿舎基礎に多く見られる構造を取っておらず、根石の設置は共通しているものの砂利混じりの土を用いて、あらかじめ上部を平坦にした礎石を埋め込むような構造であった。こうした構造は、上位面の形態に先行する基礎構築形式であった可能性がある。ただし、この違いは門（櫓門であった可能性が高い）といった象徴的な建築物の基礎であったことに拠るかも知れない。

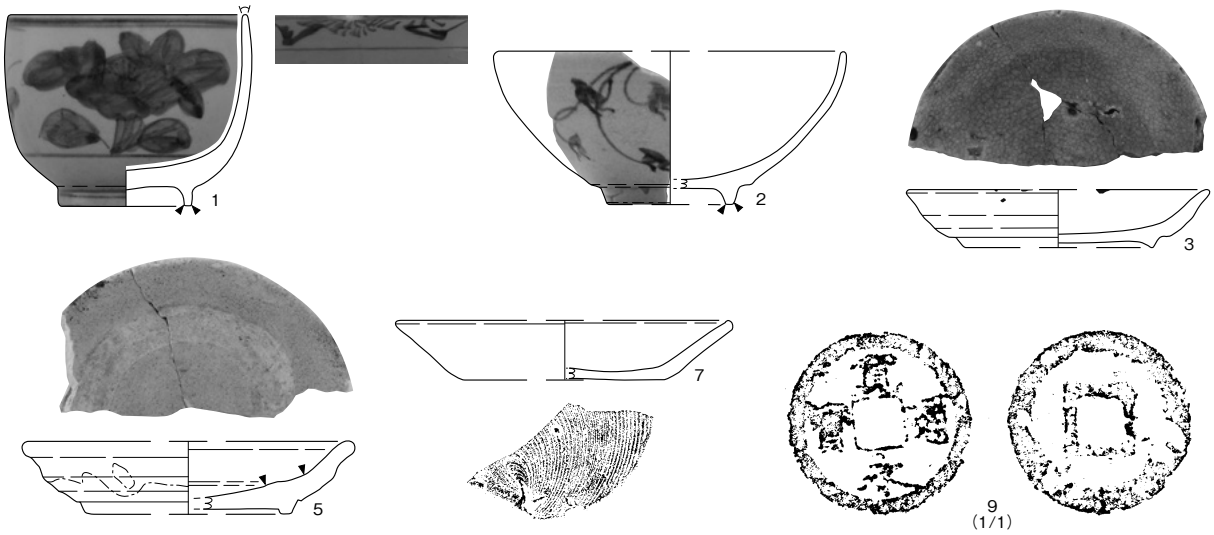
ひとつ年代的に指摘しておきたい点は、SB250 に刻書が施されている石が存在する点である。門扉が取り付けられる建物脇（報告編Ⅲ -35 図参照）の礎石裏に「田」の字が刻印されているもの（SB250-12）があり、この印は寛永 13（1636）年に行った江戸城外郭石垣を前田家の担当した一ツ橋門～錦橋東部分からも確認されているもので、前田家が石積みを担当したエリアに多くみられる（野中編 2007、後藤 2011 など）。また、金沢城では刻印が多く確認される石垣は、寛永年間頃に構築された 4 期に比定される石垣で、金沢城石川二ノ門下東面を指標としている（滝川 2012）。SB250 に使用されている礎石の石質は全て安産岩製のいわゆる伊豆石であり、大型礎石として加工されていることから、当初から礎石用に加工されたものであろう。ちなみに刻印を持つ石積みは、藩邸の庭部分に該当する山上会館地点からも確認されている。宮崎氏はこの石積みを「寛永江戸図屏風」に描かれた庭園内の位置関係から高楼の茶室であろうと推定し、金沢城に見られる刻印の対比から寛永の御成時（寛永 6（1629）年）に備えて作られたと推定しているものである（宮崎 2008）。

E 面で確認された遺構は、藩邸境であった SD246･3100 以北に分布している。遺構は、溝 SD838･4013、SD4297、SD4278 などがおそらく藩邸内を区画する溝として機能していたと考えられる。特に調査区最北域から確認された SD838･4013 と同軸で直角に折れる SD4297 は、6 尺 3 寸（191cm）間隔で溝底に礎石が配され、礎石上には柱痕が明確に確認されたことから区画塀施設の可能性が高い。この間尺は、医学部附属病院中央診療棟地点の分析で、天和 2（1682）年以前の遺構に基準間尺として使用されたものと合致している（藤本 1990）。また、SD4297 を挟んでほぼ 2 区全域に硬化面が広がっており、当該域が御殿空間のオープンエリアであったことが推定される。北端域では E 面は F 面から約 10 ～ 15cm 程度嵩上げされており、F 面で確認された溝 SD1032･4685、SD870･980･4498 とは主軸方位も 6 度ほど北に振れていることから、屋敷の作り替えが窺える。また、この溝のやや南に SD1071･4299、SD1072･4300 の 2 本の並行する溝が東西に横断し、区画溝として機能していたと推定される。この区画溝はこの上部に SD4301 として作り替えられる際には石組溝として構築されるが、この段階では石を伴ってはいなかったと思われる。溝の周囲には、SK950、SK1008、SK1064 などの植栽痕とその東側に性格は不明であるが、同主軸で砂質土を覆土に持つ長方形の遺構（SK940･941、SK1063）などが繰り返し作り替えられながら機能している。

一方、同心屋敷内にあたる南域では、近代以降に受けた大きな削平によって、土地利用の詳細が不明確となったものの、この段階も盛土は認められず、遺構確認面である G 面（ローム面）を生活面として利用していたと推定される。南域で、17 世紀前半を中心とした遺物が出土している遺構は 24 遺構あり、藩邸側に比べて少なく、木組みの廃棄施設と考えられる SK2045、樹木の移植痕と考えられる SK2416･3097 等をはじめ西側の 8 区に偏って分布しており、調査区内では西側にこの段階の痕跡が濃く認められる。

E 面の藩邸境付近は、石組溝遺構として SD246･3100 が構築され、合わせて藩邸側は E 面まで 30cm 程度の盛土地業が施されたことで、藩邸内が道（道路 D 面）より約 30cm の比高差が生じることになり、藩邸側に作られた門と続き建物（SB250）とそれに伴う北側の排水溝（SD247･248）、藩邸境の石組溝（SD246･3100）、道路 D 面が完成した段階と推定できる。また、道を挟んで、同心屋敷側には SD235･2201 と SD236･2095･3021 の 2 条の溝が確認されている。調査区内で切り合い関係にはないものの、前者が 17 世紀前半、後者が 17 世紀後半の遺物が出土していることから、この段階の境は先行する SD235･2201 と溝西側で南に折れる SD2096 で、両溝の南東側が高木筑後の同心屋敷であったと推定される。この 2 条の溝は、主軸、構造が異なっており、SD235･2201、SD2096 内には切石が確認されているものの、SD236･2095･3021 と対比すると簡略な構造をしており、主軸も藩邸境として機能していた SD246･3100 とやや異なっている。これは、加賀藩邸に取り込まれた後に道と詰人空間を区画する石組溝（SD236･2095･3021）として SD246･3100 と並行に作り直されたものと推定される。

E 面の年代を考える上で、SK940･941 出土遺物を取り上げてみたい（9 図）。1、2 は肥前磁器碗で E 面の遺構



9図　SK940･941（S=1/3）

で初めて肥前磁器製品が出土するようになる。1の文様は、天神山窯採集の寛永16（1639）年銘の染付碗に類似している（有田町編纂委員会1988）。7のかわらけは、体部が薄く開く江戸タイプへと続く形態で、SK4555から出土している寛永14（1637）年の刻書資料（8図12）と類似している。9の寛永通宝は寛永13（1636）年初鋳のいわゆる古寛永である。出土資料数が少なく、明確性を欠く部分はあるが、これらの特徴はF面で触れたSK4555に近い様相を呈しているものの、肥前磁器製品が複数個体出土し、新しい様相も看取される。また、SD2096から出土している銭貨は、6枚中5枚が渡来銭・模鋳銭で､1枚古寛永が含まれていた（報告編Ⅳ-49図）。

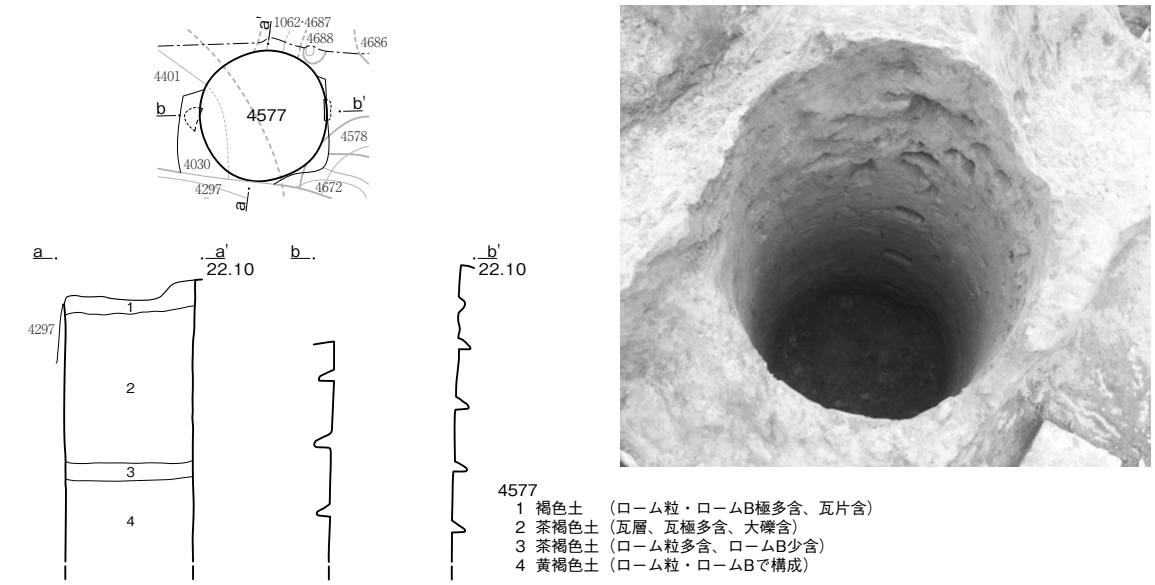
・**フェイズ4**（19図）：藩邸域は、櫓門（SB250）と石組溝（SD246･3100）、道（道路D面）、同心屋敷との境界（SD235･2201）が相応の施設によって区画された段階である。藩邸内は門内、硬化面と塀状遺構、移植痕などが存在したオープンエリアであった。年代的にはフェイズ3出土の遺物とそれほどの年代差がないことから、短期間の中で移行したと推定され、寛永年間（1624～45）後期以降と推定される。

④藩邸初期の井戸の配置

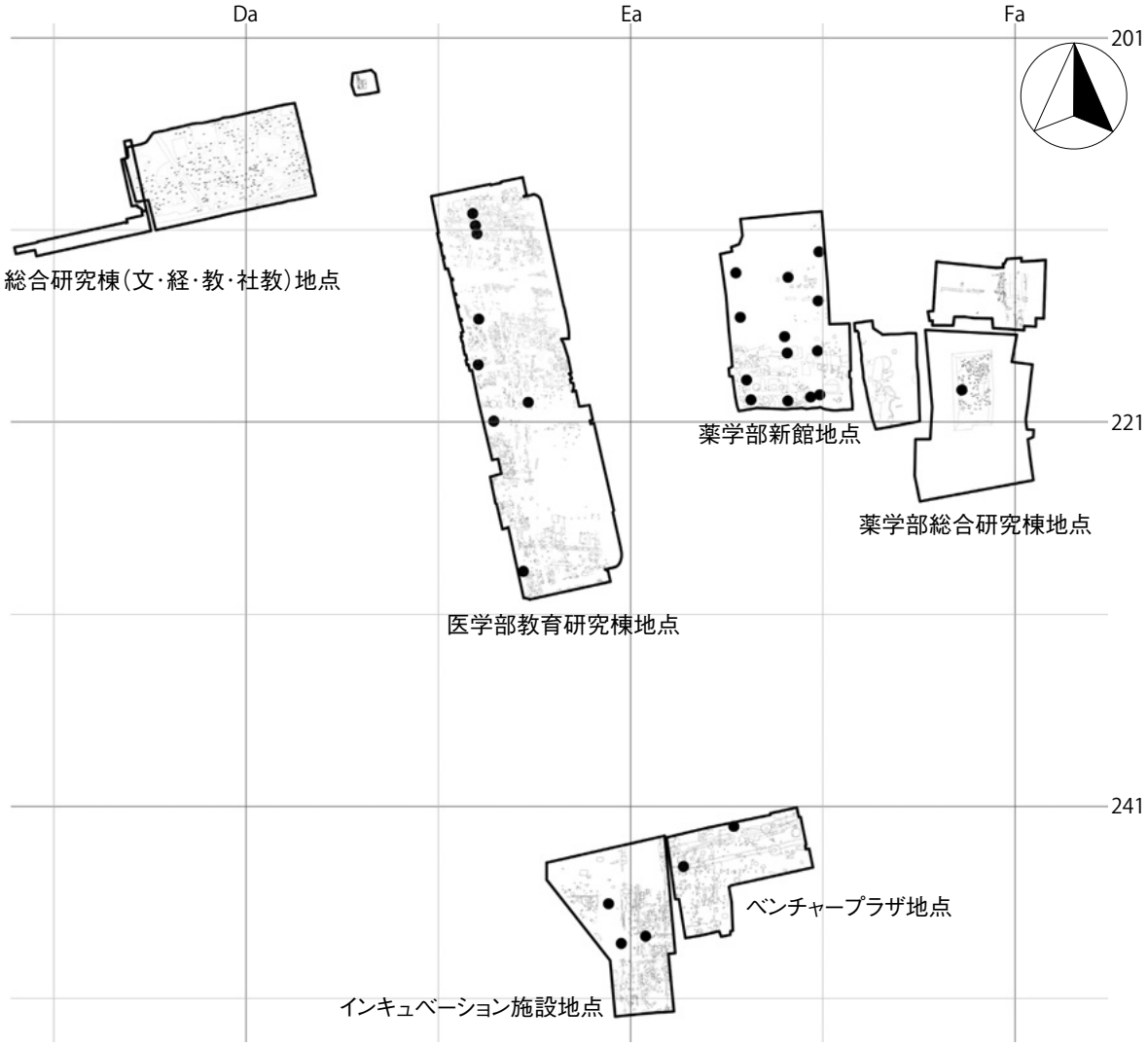
本地点周囲の調査地点の藩邸成立期の状況を考えるにあたり、これまでの発掘調査で確認されている、SE4577、SE4581などと同じ形態の足掛けと推定される施設が壁面に一定間隔で設けられている井戸（10図）に注目したい。これまでの学内調査でも井戸は各地点から多く確認されており、邸内の上水の取得は、基本的には井戸によってまかなわれていたと推定している。このことは加賀藩本郷邸が台地上に立地おり、上水の帯水層が低い位置[(3)]に存在していることによると思われる。一方、上水道は、調査では医学部附属病院外来診療棟地点、懐徳門地点、経済学研究科学術交流棟地点、アカデミックコモンズ地点など複数の地点から出土している。記録では邸内には千川上水が引水されていたものの、その年代は、元禄9（1696）年～享保7（1722）年および天明元（1781）～天明6（1786）年の短期間であった。

この形態の井戸の多くは、直径が1m程度で内側に井戸側、石積などの施設が伴わない素掘りのものである。また、覆土には粒子の細かい黒色土（F面下層を構成している土に類似する）やローム土などで構成されていることが多いのも特徴である。本地点で確認されたこのような形態の井戸は、SE990、SE2001、SE3122、SE4577、SE4581、SE4610、SE4705、SE4706の8基[(4)]である。これら井戸の確認面は、SE3122を除いてF面、あるいはG面であり、SE3122も明確ではなかったもののE面より下位面である。これまでみてきたようにF～E面の出土遺物の様相が類似していることから、面の変遷が短期間であったことを考えるとおおむね17世紀前半を中心とした時期にこのタイプの井戸が構築されたと推定される。

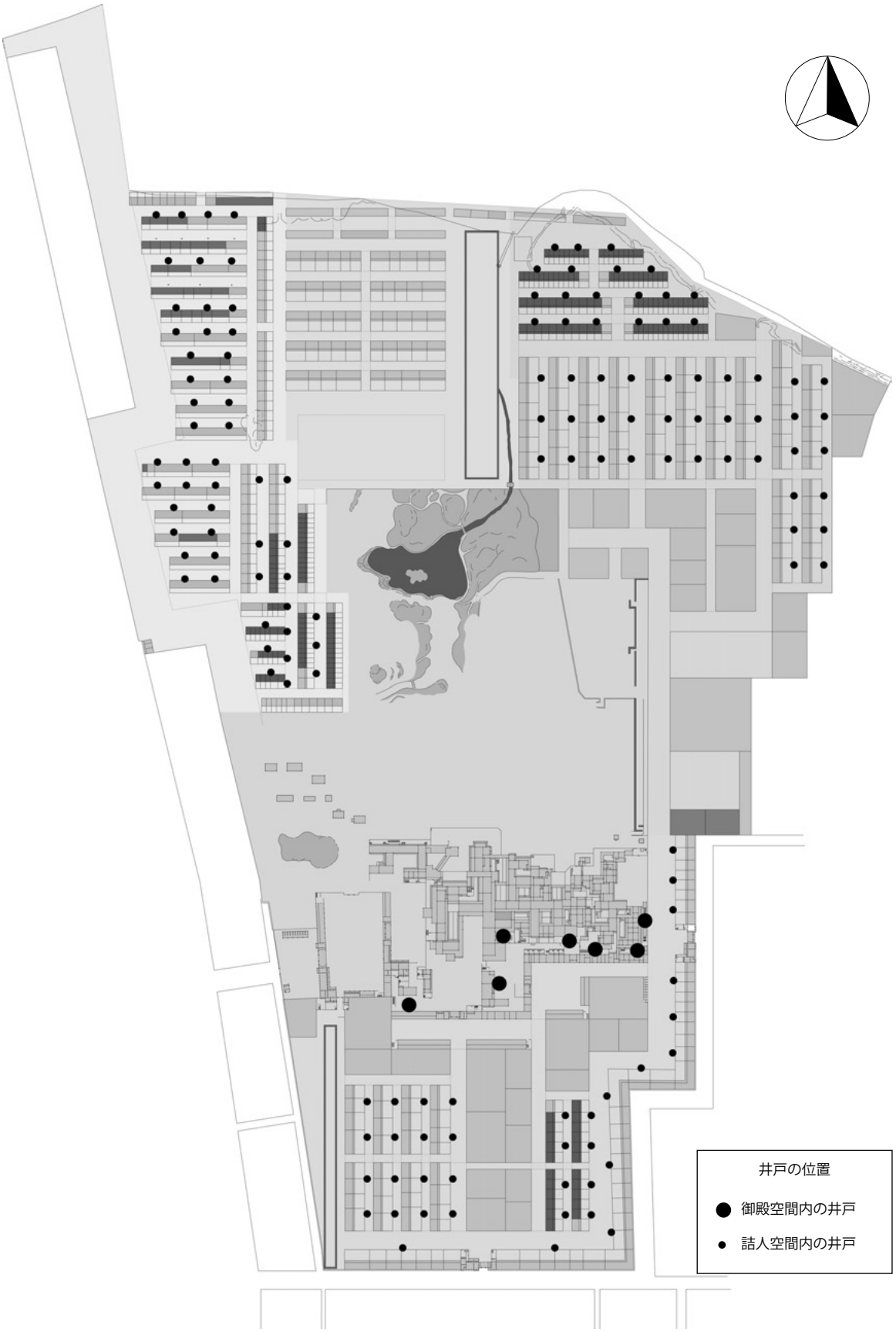
同様に本地点周辺の同じ形態を有する井戸の分布を示したものが11図である。これを見ると他地点では、薬学部新館地点が13基、薬学部総合研究棟1基、総合研究棟（文・経・教・社教）地点0基、インキュベーション施設地点3基､ベンチャープラザ地点2基である。また、現在の三四郎池を挟んで北側の法学部4号館地点、文学部3号館地点、東側の山上会館地点、御殿下記念館地点とも確認されていないことからこの形態の井戸は、庭園の南側、特に本地点から薬学部新館地点付近に多く分布



10図　SE4577（S=1/60）



11図　医学部教育研究棟地点周囲の足掛井戸の位置



12図　「御上屋敷殿閣図」に記された井戸の位置

していることが看取された。

次に井戸が藩邸のどこに掘られているのかを確認したい。12 図は「御上屋敷殿閣図」（前田育徳会蔵）をトレースしたものに井戸の位置を落としたものである [5]。井戸は屋敷全体で 133 基存在し、このうち御殿空間に位置する井戸は 7 基（図中大黒丸）、詰人空間にある井戸は 126 基（図中小黒丸）で、数量的には圧倒的に詰人空間に多い。ただし、御殿周りの東側、南側には上級家臣に割り当てられた区画が 20 程度存在し、この中の状況は不明である。

次に、井戸の配置をみると詰人空間の井戸は詰人が居住する長屋建物に沿って等間隔に、多くは 1 棟に対して 2 ～ 3 基作られ、直線的に配置されている。これに対して、御殿内の井戸は、おそらく御膳所などに近接する場所と思われるが、不規則に空間境の近くに位置している。これは、元禄 16（1703）年の火災によって屋敷が全焼し、再建された邸内の状況を見てもほぼ同様である。このように井戸は居住空間と近接して作られる施設であり、井戸の分布は当該時期の居住エリアを示すものと判断される。一方、御殿内の井戸は、例えば御殿下記念館地点で確認された 21 号井戸は、梅之御殿 [6] 御台所内の中心的位置にある井戸であるが、確認面における直径が 170cm あり、当該時期の詰人空間内の井戸と対比しても大型であった。年代的に相違があるので、当該期の御殿の井戸が大型であったかは不明であるが、ここで分析の対象とした相対して足掛けがある井戸には大型のものは確認されていない。

大きく井戸の平面分布を見ると、明らかに本地点から薬学部新館地点にかけての地域が藩邸初期（G ～ E 面期）に開発され、建物範囲に含まれていたと判断される。ただし、詳細に位置を確認すると、規則性が感じられない。唯一薬学部新館地点東側に南北に並ぶ 3 ～ 4 基の井戸は、この時期の主軸方位である真北方向（南通町軸）に約 13m 間隔で並んでいるが、後の時代のように長屋建物に付随するものであれば、これと関連づけられる井戸が他にも存在するはずである。一方、御殿空間であれば井戸が密すぎるようにも思え、現段階において場の性格まで言及を行うことは難しい。また、11 図東大グリッド 221 ライン以南は、同心屋敷にあたる地域であるが、井戸の構造は加賀藩邸と同タイプで、当該期の鑿井法か、あるいは同じ集団の鑿井であろうと思われる。

⑤「寛永江戸図屏風」、史料の記録と調査

この時期の加賀藩邸の状況を復元する上で、「寛永江戸図屏風」と「三壺聞書」を中心とした史料を取り上げておきたい。これらの記録から当時の加賀藩邸の状況等に言及した先行研究が少なからず存在する（白幡 1997、宮崎勝美 2008、小野健吉 2014 など）。特に宮崎氏はこれらと藩邸初期の考古学的成果に照射して考察を加えており、その成果は調査地点の状況と対比しても現在も大きな変更を伴うものではない。

a「寛永江戸図屏風」

「寛永江戸図屏風」（国立歴史民俗博物館蔵）は、黒田日出男氏によると制作年代を寛永 11 ～ 12（1634 ～ 35）年と推定し、将軍家光との関係、押紙や地紋の分析などから寛永 14（1637）年の松平信綱邸への御成の際に飾られたと推定している（黒田 1993）。また、白幡洋三郎氏は、本郷邸をはじめとする大名屋敷の庭園描写の分析から「屏風絵描写の相当な客観性が浮かび上がっている」と江戸図屏風の写実性を検証している（白幡 1997）。

屏風絵には、加賀藩本郷邸が「加賀肥前守下屋敷」として描写されている（7 図）。宮崎氏も指摘しているように、周囲には神田明神、湯島天神、東照大権現宮などの社寺が描かれており、またこれらの位置関係や「寛永江戸図」（杵築市図書館蔵）の屋敷内に「松平肥前守」と南を頭に書かれていることなどから、本郷邸の当時の表門の位置が南向きであったことが判る。邸内の状況を観察すると藩邸を取りまくように巡っている塀は、屋根の色調から瓦葺きの長屋塀と瓦塀で、特に長屋塀は下半に石垣を伴っていることが確認できる。この石垣を伴ったこの状況は、SD246･3100、SB250 などの様相と合致している。ただし、藩邸周囲には溝状の水路は描かれていない。塀から連続する櫓門も瓦葺きと思われるが、それ以外に邸内には瓦を全面に葺いた建物は描かれていない。邸内の土塀は板屋根がつけられるが、建物は屋根の濃淡がある。檜皮葺と柿葺が描き分けられているのだろうか。ただし、こうした植物系材の屋根の棟はいわゆる甍棟で、瓦が使用されている点も注意したい。また、加賀藩邸の南側道路を挟んだ同心屋敷にあたる場所には、竹垣と思しき塀が巡らされている。一方、発掘調査で確認された境施設と考えている SD235･2201 は石で組まれた構造をしており、竹垣の基礎よりは強固なものであったと思われるが、いずれにしても加賀藩邸との構造の差は明らかである。

b「三壺聞書」、「東邸沿革図譜」など史料

これまでに発掘調査報告書、著書、論文等で言及された藩邸成立期の様子が書かれた史料がある。繰り返す部分もあるが、まとめて紹介したい。

〇寛永 3（1626）年の開発

･「寛永三年丙寅、始て四界に木墻を環らし」（「東邸沿

革図譜」）

・「草ほうほうたる小笹原に谷峯も有て、所々に番人又は下々の者のミ有て、屋敷ノ内またらに茶園してそ居たりける。先四方ニ塀を懸させられ、御屋形共建させ給ひ、別而寿福院様 (7) の御屋形も立、又ハ御姫君様の御屋形、千勝様 (8)、宮松様 (9) の御屋敷も建させらる」（「三壺聞書」）

これらから藩邸の最初の開発が寛永３（1636）年から始まり、御屋形（加賀藩主御殿）をはじめ、生母、娘、後に富山藩主、大聖寺藩主となる利次と利治らの御殿が建てられたことが書かれている。ただし、全てが建てられたか、建てられた時期がいつかは不明である。

〇寛永９（1632）年の火災

・寛永九年十二月廿七日宵之間之事成に、江戸ニて松平新太郎殿 (10) 屋形より火事出来し、近所の大名屋形共悉類火に及ぶ、肥前守利常公、神田の御屋敷に被成御座、御出馬可被成ニて」（「三壺聞書」）

これによって寛永９年には利常が本郷邸にいたことが確認できる。

〇寛永 15（1638）年の御成

・寛永拾五年春・夏之内ニ、将軍家光公御成之義、前年より被仰上、不時ニ御成可被成御内意有に付て、十四年より茨木小刑部に御作事奉行被仰付、御露地・泉水・つき山出来シ、つまりつまりに富士見ノ亭、麻木亭。達磨亭・からかさ亭・三角亭・鳩亭などと名付て、珎敷御物数寄ノ御亭出来シ」（「三壺聞書」）

寛永 15 年の家光の御成時に庭を大きく作り替えた様子が窺える。

〇慶安３（1650）年の火災

・慶安三年四月十九日午之刻の事成に、天気能してから風烈吹けるに、本郷五町目の加賀の御屋敷へ行道筋に富士塚とて小山有、其きわにハ小家有之、火を出シ其火粉長屋を打越し御式台の唐破風、獅子ニ牡丹の張物の内へ吹付たり、下よりハ見へけれ共、中々消えきやうハなし、天井の内に年々微塵三尺もつもりて有ける、それに燃付、こけら屋ねの内をつたひ、下ハ瓦て先天井より御書院・御居間・御台所へ焼通り、其内ニ屏風・唐紙一面に火懸りて、一軒も不残火失して」（「三壺聞書」）

この慶安３年の火事では、相当な殿舎の存在と一軒も不残火失してしまったことが記されている。ただし、本地点をはじめキャンパスのこれまでの発掘調査では、この火災に該当する焼土層や処理遺構、被災遺物などが確認されていない。

〇明暦３（1657）年の火災

・明暦三年正月十八日江戸本郷御屋敷の内 ･･･（中略）･･･ 御屋敷坤の角の塀に火付て、大門の方へ三十間程焼る」（「関谷政春古兵談）

明暦の大火では、本郷邸の被害は軽微であった。ただし、南西の角から大門（東）へ 30 間（54m）ほど焼けたとある。これを現在の地図に照射すると当時の藩邸の南西隅は、ほぼ現在の理学部２号館前の大学の境、大学外の公道が直角に折れる部分に該当する。ここから東に 54m にあたる場所は理学部２号館の東側付近に相当し、本調査区までは延焼していないことになる。

〇天和２（1682）年の火災

・天和二年極月廿八日未之刻、白山原竹町之追分大円寺といへる寺内之小家より出火して、本郷湯嶋・浅草口・本庄まで夥敷焼之砌、邦君之亭本郷常住之亭、筋違之亭、天神之後切通し之屋敷、永代嶋蔵屋敷もこのらず類火におよぶ。此本郷之亭は、微妙公之御好物を以造作なされ、世上に名高き一本柱之間など云、夥敷御作事なり。今の世ならば、いか計にては出来む。昔なりとも過分之物入にてこそあらめなどといふ（高卑雑談）

これから天和２年段階で藩主が本郷邸に常住していることと焼けた屋敷が非常に豪奢であったことが窺える。

（２）Ⅱ期　加賀藩下屋敷段階

①Ｄ面から確認された遺構（フェイズ５）

Ｄ面から確認された遺構数は 473 基で、遺構は調査区全域に分布している（20 図、附図９）。これまで触れて来たように、Ｄ面上には天和２（1682）年と考えられる火災層が覆っており、火災を契機として上屋敷に唱え替えする以前の下屋敷時代最終段階の様相に該当する。前代のＥ面からの継続的に利用しているエリアが多く確認できた。藩邸北域を横断する SD1071･4299、SD1072･4300 は溝北側を約 20cm ほど盛土を行なった（1 図①、②参照）と同時に石組溝（SD4301）に作り替えられ、その北側標高 22.6m 付近には新しい建物基礎遺構が確認されるようになる。この段階から基礎遺構が坑底に設置した大型の根石の上に玉砂利と黄褐色土が混入する土とを交互に根固めとして突き固め、その上部に礎石を置く構造をしたものが出現する。こうした基礎は、18 世紀以降の藩邸を描いた絵図面との対比から御殿の主要建物の構造と判断されることから、当該域にも殿舎が存在していたとみていいだろう。また、SD4301 と藩邸境である SD246･3100 との間は、おおむね東大グリッド 217 ラインを境として、北域（おおむね３区、４区の北側）の一段低い部分（22.3m 付近）がＥ面のまま利用されているのに対し、南域（おおむね３区、４区南側）では一段盛土され（あるいは斜面であった可能性もある）、

それと共にフェイズ4で存在したSB250、SD247･250、SD246･3100、道路D面などの諸施設は継続して利用されていたと考えられる。この範囲には、硬化面が広がっており、当該地域が門（SB250）を通して藩邸内外にアクセスする動線として利用されたオープンエリアであったと推定される。一段盛土された最北域は、1区東側に南北に延びる石列（SX740、SX805、SX806、SX810）などが建物外縁の基壇や排水施設に相当すると考えているが、これに伴う建物は明確ではない。

また、新たに藩邸として組み込まれた南側では、SD246･3100と同じ軸で道南端に新たに境施設としての石組溝（SD236･2095･3021）が構築される。この石組溝の石材は、道の北側にあるSD246･3100が安産岩製の間知石を用いて組まれていたのに対して（報告編Ⅲ-30図、SD236･2095･3021は軟質な凝灰岩製の石が用いられており、比較的簡易なものであった（報告編Ⅲ-28図）。

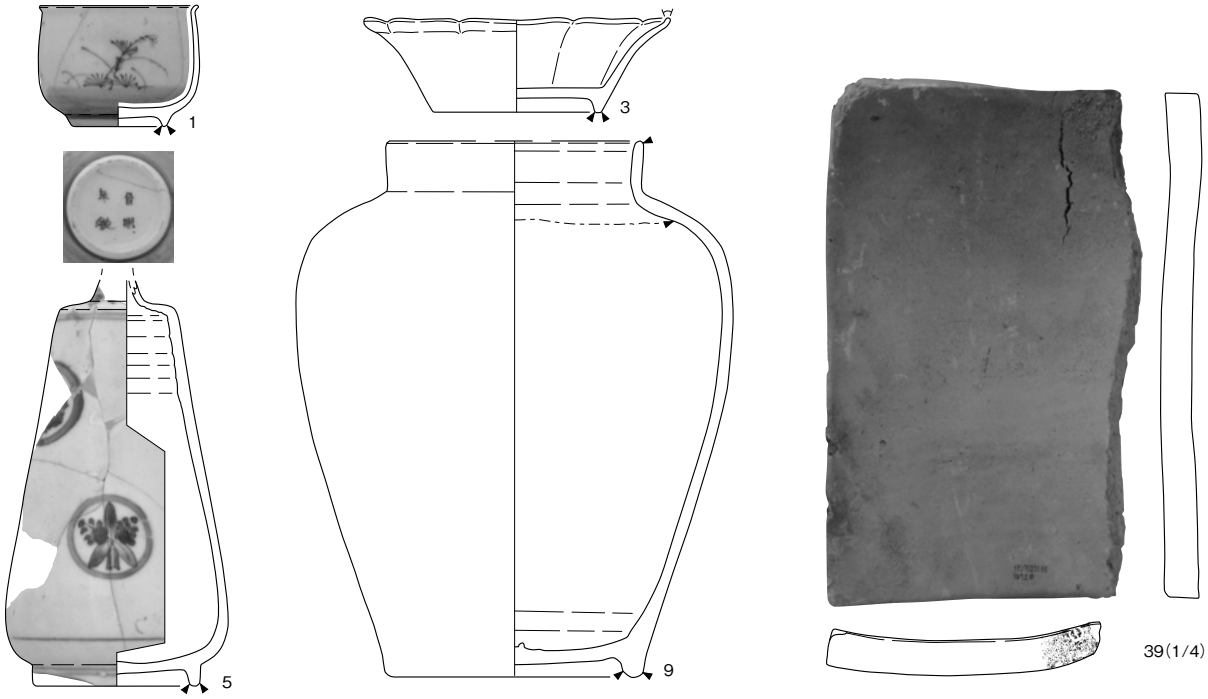
SD236･2095･3021より南域では大型の生活遺構が増加する。井戸（SE196）、地下室（SU139、SU161、SU162、SU279、SU280、SU281、SU288、SU2051、SU2159、SU2190、SU2422）、廃棄土坑（SK2472）などである。これらはほぼ南通町軸で構築されており、SE196、SU139、SU161、SU162のある1区東側、SU279、SU280、SU281、SU288、SU2159、SU2190、SK2472のある1区と2区との境周辺、SU2051、SU2422のある2区西側周辺と3つの地域に集中して確認されている。これら井戸、地下室、廃棄土坑の遺構組成と並列的な遺構配置は、長屋が並ぶ詰人空間の特徴的な様相であり、当該地に長屋建物が存在した可能性が高い。以前理学部7号館地点で行った井戸、地下室の位置と前述した元禄期の「武州本郷第図」や「御上屋敷殿閣図」（共に前田育徳会所蔵、12図）に描かれた長屋建物（奥行6間半～8間）を対比した成果では、居住空間としての長屋は建物と建物前の空間地で構成されており、地下室は建物前の空間地に、井戸は居住空間の外側に存在していた（東京大学遺跡調査室1990）。これに対して、同じ天和2（1682）年の火災が下限と推定される医学部附属病院入院棟A地点から出土した8棟の長屋建物群（SB429、SB1612、SB1697、SB1772、SB1780、SB1782、SB1812、SB1822）には前庭部が存在せず、奥行3間、建物間は1間半～3間間隔で建てられていたことが確認されている（東京大学埋蔵文化財調査室2016）など同じ藩邸内でもバリエーションが存在することがわかる。調査区内の長屋建物の構造は不明であるが、井戸や地下室がある点で近似する武州本郷第図に近い長屋建物だと仮定すれば、井戸から詰人空間境のSD236･2095･3021まではおよそ13m（7間強）で、奥行き3間程度の長屋建物の南側に3間半程度の前庭部が付属する構造が想定される。この前庭部の境には板塀が想定できるが、柱痕を有するSD169・2130がこれに該当すると考えている。この想定は井戸（SE196）より南側には地下室が確認されていないことからも大過ないと思われる（20図、附図9推定長屋建物位置参照）。

これら遺構の確認面は、いずれもG面であったが、例えばSU139の天井部ロームの厚さは約100cm、同じくSU161は120cm、SU279とSU280は100cm、SU2159は200cm、SU2422は90cmと他地点で確認されている地下室と比べても薄いものではなかったことから、遺構確認面と当時の生活面には大きなレベル差はないと考えられる。つまり同心屋敷から加賀藩邸に組み込まれた後においても大きく嵩上げされることなく、継続して生活面として利用していたことを証明している。

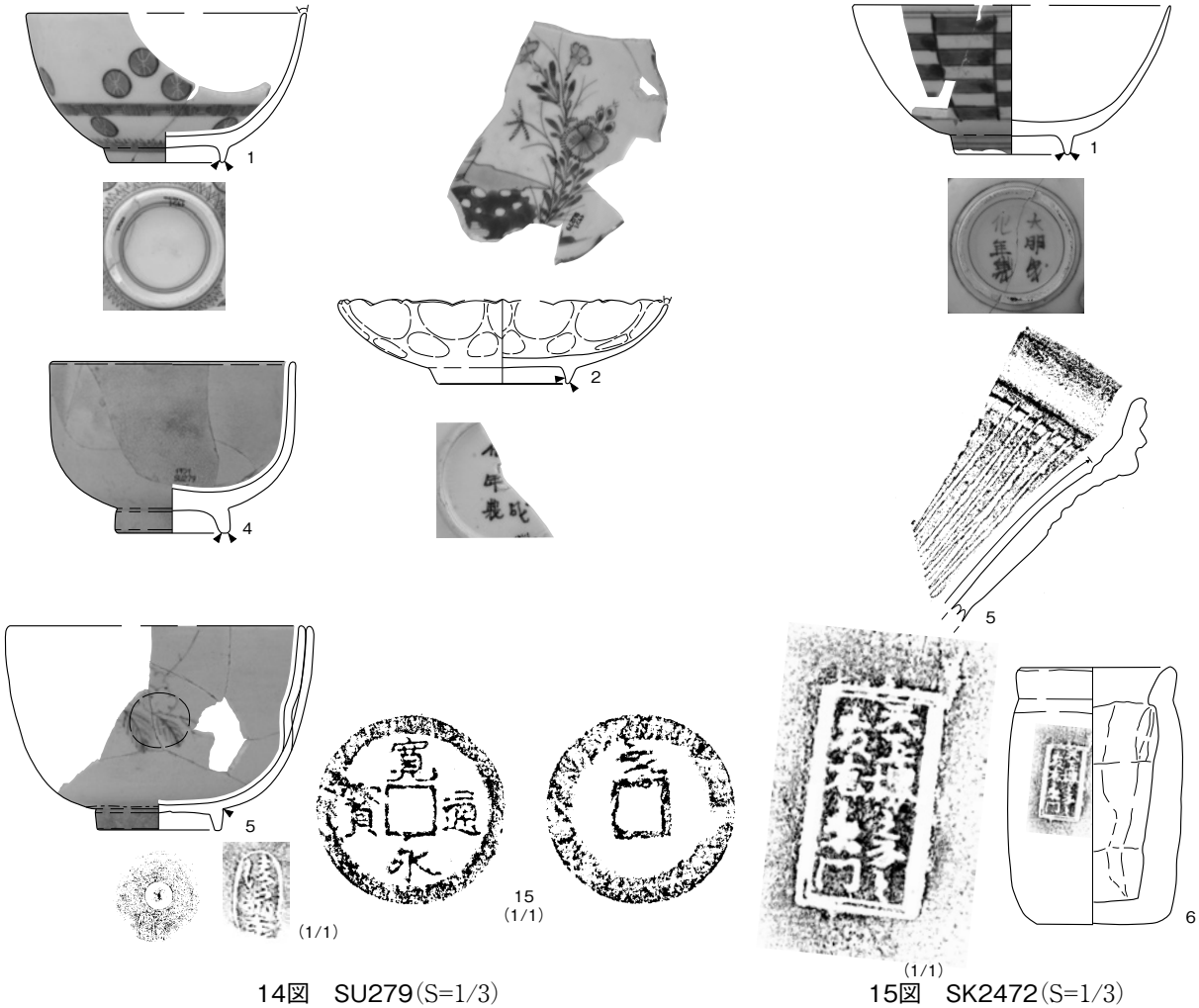
D面の年代を考える上で、SD246・3100、SU279、SK2472出土遺物を取り上げてみたい。SD246･3100は覆土上層に多量の二次的な火熱を受けた遺物（13図）を包含する焼土が確認されており、遺構自体も火災に伴う廃絶と推定される。13図1は宣明年製銘の肥前磁器碗で、大橋康二氏によると1670～80年代ごろに付けられる銘款としている（大橋1984）。3は乳白手の白磁型打皿で、有田南川原の1770年代ころの製品であろう。SU279では、14図1が肥前磁器高台内二十圏線の染付碗で、東大編年Ⅲb期に比定している御殿下記念館276号遺構から類例が出土している。4は肥前陶器呉器手碗、5は「清閑寺」印が付けられた京焼銹絵染付碗である。15はいわゆる文銭で寛文年間（1661～73）に初鋳年がある新寛永である。SK2472では、15図6が「天下一堺ミなと藤左衛門」の刻印を持つ塩壺で、小川氏によると承応3（1654）年に「天下一」の号を許され、天和2（1682）年に禁令を出される間に生産された製品とされる（小川2008）。この他、前述のSE169の覆土には焼土が多く含まれており、出土遺物も二次的に被熱している。

・フェイズ5（天和2年の火災前）

調査で広域に確認された2枚の焼土層のうち、下位の焼土層に覆われた面がD面で、最北域が標高約22.6mと最もレベルが高く、SD4301を挟んで前代から利用していたE面（約22.3m）、217ライン付近からやや上がりSB250、SD246･3100で藩邸境となる。藩邸内に取り込まれた以降も前代からの道（道路D面）は継続して利用され、道の南側境はSD236･2095･3021に作り替えられる。その南の新たに藩邸に組み込まれた地域は、詰人空間として長屋建物が建てられていたと考えられる。



13図　SD246･3100(S=1/3)



14図　SU279(S=1/3)　　15図　SK2472(S=1/3)

これらの面を覆っている焼土は、出土遺物から天和２（1682）年の火災であると思われる。

（３）Ⅲ期　加賀藩上屋敷段階

本郷邸が上屋敷になったのは、天和２（1682）年の火災の翌年、天和３年３月 21 日で、本郷邸を上屋敷、駒込邸を中屋敷、平尾邸を下屋敷として幕府に届け出ている。ただし、藩主は、明暦の大火(1657 年）以降本郷邸常住していたので、これ以降、本郷邸が実質的な上屋敷としての機能を有していたと考えてよい。本郷邸を描いた絵図面は、1990 年に『山上会館地点・御殿下記念館地点』をまとめた段階で 180 点と記されている（細川 1990)。現在はそれより若干増加しており、200 点をやや越える程度であると思われる。確認されている絵図面の中で、最古のものと知られるものは「武州本郷第図」で、図中に「元禄戊辰臘月初六蓂」（元禄元（1688）年）と書かれている。ただし、細川氏によると元禄元年の屋敷の状況を描いているという点で、御殿の規模や普請計画を想定させる記述がある点からやや遡る年代を想定している。これ以降､多くの絵図面が遺存していることで、土地利用の復元に際しては、発掘の成果と絵図面との照射が重要な作業になってくる。この詳細は、本研究編研究２を参照されたいが、ここでは考古学的な概略を提示するしたい。

①Ｃ面から確認された遺構

Ｃ面から確認された遺構は、715 基である。遺構は SB233･2160 以南の調査区最南域を除いて全体的に濃密に分布している。特におおむね 220 ライン以北には、殿舎のものと推定できる建物基礎遺構が重複関係を持ちながら広がっており、殿舎の建て替え、改築、増築などが頻度高く行われていたことを示している。ただし、南域の遺構が少ない点は、冒頭でも触れたように、近代初頭に行われた前田侯爵邸整備によって、調査区南域（７区、８区）のＣ面（Ｃ層)、Ｄ面（Ｄ層）が大きく削平されたことによると考えられる。

これまでの調査成果や絵図面の分析から、本郷邸が全焼した元禄 16（1703）年の火災を契機に御殿空間内の建物軸がそれまでの南通町軸から中山道軸に変化することが確認されている（成瀬 2000、堀内 2017 など)。

Ｃ面は、これまで藩邸境から藩邸内の内境として機能していた SD246･3100、道（道路Ｄ面)、SD236･2095･3021 などが天和２（1682）年の火災を契機に廃棄し、その上に調査区全域に 22.7 ～ 22.8m の標高でフラットに盛土（Ｃ層）を施し､新たな生活面（Ｃ面）の利用が始まる。これは調査区全域に行ったと推定しているが、その後の近代～現代にかけての整地や撹乱によって、特に南域（５～８区）では大きく削除され、断定できない。殿舎の下にあたると推定している調査区北域では明確な硬化面は確認されず、Ｄ面からの盛土も厚くなかったことから､両者の分別が困難であった。また、江戸中期以降の絵図面との対比で御殿内の藩邸内境に相当する SD233･2160 とその北側のオープンエリア付近においても溝状施設や明確な硬化面などが確認されなかった。

調査区に関わる歴史的変遷より、御殿空間が南通町軸の段階をⅢ－１期（フェイズ６、東大編年Ⅳ期）中山道軸の段階をⅢ－２期（フェイズ７、東大編年Ⅴ～Ⅷ期）とする。

３.各フェイズの年代的検討と変遷の契機

発掘調査から上記のような土地利用の段階と出土遺物から年代が推定できたが、これをまとめたものが１表である。ここではフェイズ１～５までの土地利用の変遷概要を再確認し、史料や絵図面との対比などからその変遷の契機について検討を加えたい。

・フェイズ１

フェイズ１は、出土遺物によって元和年間（1615 ～ 24）に相当する時期と推定された。元和年間は、元和２～３（1616 ～ 17）年に加賀藩が当該地中央から北域を拝領されたとされ、南域の同心屋敷地域にのみこの時期の遺構が確認されている。ただし、慶長に遡りそうな遺物は確認されないことから、南域の開発も元和年間以降であろうと推定できる。

・フェイズ２

フェイズ２は、出土遺物によって、寛永年間（1624 ～ 45）前期に該当すると推定された。加賀藩邸側に相当する調査区中央から北域にも遺構が確認され、利用が開始され、藩邸と同心屋敷間に境構造物と道が構築された。前述の史料から加賀藩の開発が寛永３（1636）年とされることから、開発を契機に土地利用が変化したと考えられる。

・フェイズ３

フェイズ３は、出土遺物から、寛永年間（1624 ～ 45）の後半を含む時期が推定できた。藩邸境などの施設は大きな変化は認められないが、次のフェイズ４への変化時期が近接していることから、段階的に整地などよって平坦地を拡張し､藩邸の整備が加えられた時期と思われる。史料からは寛永９（1632）年段階で利常が本郷邸にいた

ことが確認でき、相応な整備が想起される。ただし、本調査区内では明瞭な痕跡が確認されていないことで、当該期の殿舎の中心は調査区北域にあったと推定される。「寛永江戸図屏風」の描画年代（寛永 10 ～ 11 年）はこの段階と想定されるが、藩邸南側はこの段階では藩邸境の石積遺構は作られておらず、「寛永江戸図屏風」との齟齬が認められる。

・フェイズ４

フェイズ４は、出土遺物から寛永年間（1624 ～ 45）後期以降と推定される。この段階には藩邸側境に門と石積溝が構築され、藩邸内の平準化と硬化面を伴うオープンエリアが整備された。寛永年間後半には、利常の隠居（寛永 16 年）、家光の２回目の御成（寛永 17 年）などがあり、これらの契機よる整備である可能性を考えている。

・フェイズ５

フェイズ５は、遺構面を覆っている焼土に含まれる遺物から、下限が天和２（1682）年火災であると判断できる。明暦の大火（1657）後に、藩邸南側の同心屋敷が本郷邸に組み込まれたことによって、当該域は藩邸境から藩邸内の御殿空間と詰人空間の境へと変化する。それ以前、屋敷全焼の記録がある慶安３（1650）年の火災以後の再建によって大きく変化した可能性が高い。新たな邸内は場所によって凹凸が確認されるが、調査区最北域が殿舎が建てられた空間であったと推定している。

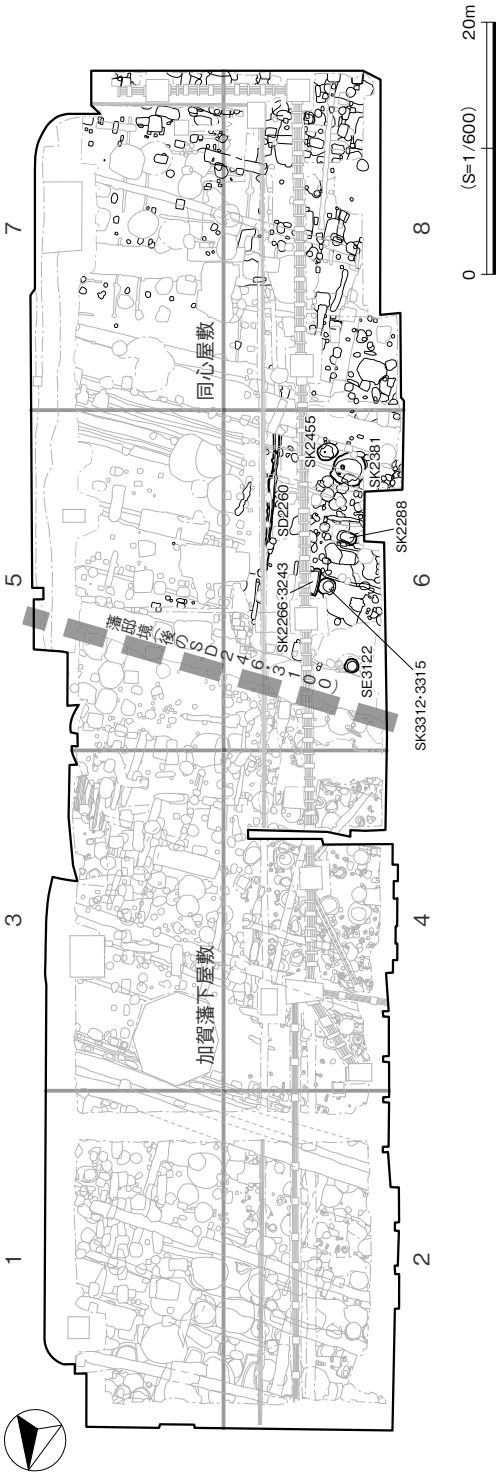
【註】

(1) 詳細は本研究編研究３を参照されたい。
(2) 小川氏によると同刻印を持つ塩壺のうち、器高が低いタイプが高いタイプより先行すると指摘されている（小川 2008）。
(3) 御殿下記念館地点の調査で出土した井戸 21 号遺構では、最下段の井戸側下端が確認面より約 10m であった。
(4) SE4296 は足掛け状の施設は確認できるものの、一列のみで相対していない点、規模が大きい点、土層の観察より井戸側の存在が想定される点、付帯施設が存在している点など井戸の構造が大きく異なっていることからこれに含めない。
(5)「御上屋敷殿閣図」は天和２（1682）年の火災の後に再建された邸内の様子を描いたもので、元禄元（1688）年と但し書きされた「武州本郷第図」（前田育徳会蔵）から再建が進んだ様子が描かれている。
(6) 享和２（1802）年に既に亡くなっていた第 10 代藩主重教の正室寿光院の為に隠居所として建築された御殿。
(7) 前田利家の側室千代。利常の生母。
(8) 前田利次。前田利常の次男。初代富山藩主。
(9) 前田利治。前田利常の三男。初代大聖寺藩主。
(10) 池田光政。３代姫路藩主。その後鳥取藩主を経て岡山藩主となる。

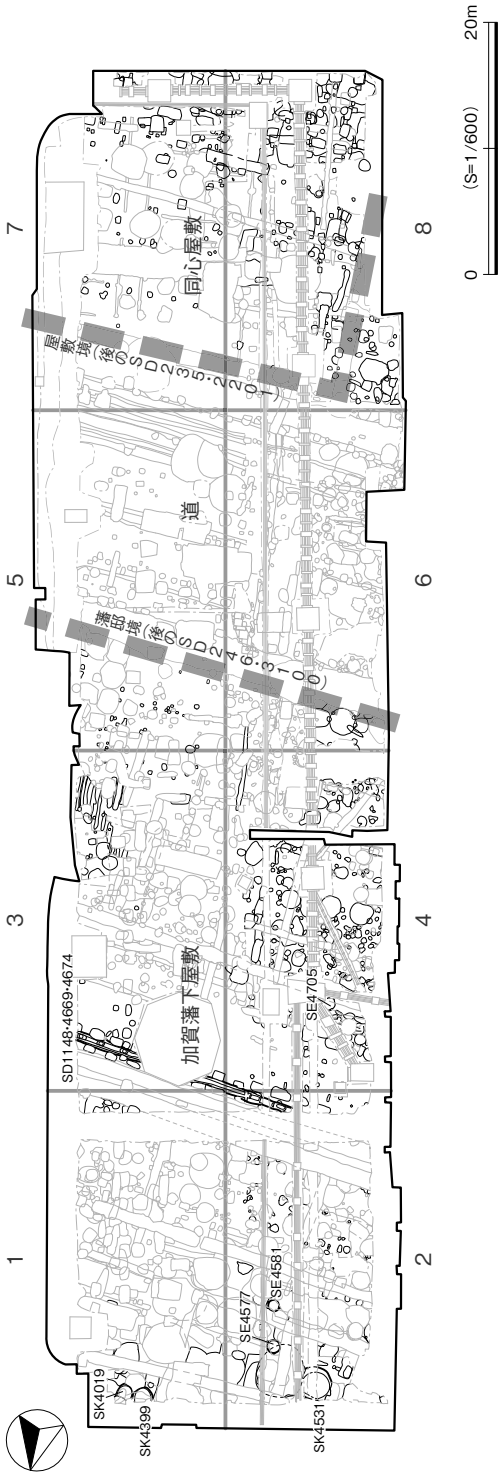
【参考引用文献】

有田町史編纂委員会　1988 『有田町史　古窯編』
石川県金沢城調査研究所　2017 『金沢城普請作事史料５　三壺聞書』
石川県図書館協会　1972 『三壺聞書』
追川吉生　2017 『江戸の大名屋敷の考古学的研究』
大橋康二　1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布－－発掘資料を中心として」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館
小川　望　2008 『焼塩壺と近世の考古学』同成社
小野健吉　2014 「『江戸図屏風』から読み解く寛永期の江戸の庭園」『日本研究』50
金子　智　2006 「資料紹介　江戸遺跡出土の金箔瓦」『江戸の大名屋敷』江戸遺跡研究会
黒田日出男　1993 『王の身体　王の肖像』平凡社
後藤宏樹　2011 「江戸城跡と石丁場遺跡」『江戸築城と伊豆石』吉川弘文館
白幡洋三郎　1997 『大名庭園　江戸の饗宴』講談社
瀬戸市史編纂委員会　1993 『瀬戸市史　陶磁史篇 四』
瀬戸市史編纂委員会　1998 『瀬戸市史　陶磁史篇 六』
滝川重徳　2012 「金沢城石垣の変遷と特徴」『城郭石垣の技術と組織』石川県金沢城調査研究所
東京大学遺跡調査室　1989 『東京大学本郷構内の遺跡　理学部７号館地点』
東京大学埋蔵文化財調査室　1990 『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』
東京大学埋蔵文化財調査室　2002 「総合研究棟（文・経・教・社教）地点発掘調査概報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』3
東京大学埋蔵文化財調査室　2004 「薬学部総合研究棟地点発掘調査概報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
東京大学埋蔵文化財調査室　2004 「インキュベーション施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
東京大学埋蔵文化財調査室　2006 「薬学部系総合棟地点（2004 年度）１次調査」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5
東京大学埋蔵文化財調査室　2008 「ベンチャープラザ地点（HVP06）発掘調査概報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』6
東京大学埋蔵文化財調査室　2017 「本郷 146･168　アカデミックコモンズ（HAC13）」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10
東京大学埋蔵文化財調査室　2019 『東京大学本郷構内の遺跡　医学部教育研究棟地点　報告編』
東京都埋蔵文化財センター　1994 『東京都千代田区　丸の内三丁目遺跡　－東京国際フォーラム建設予定地の江戸遺

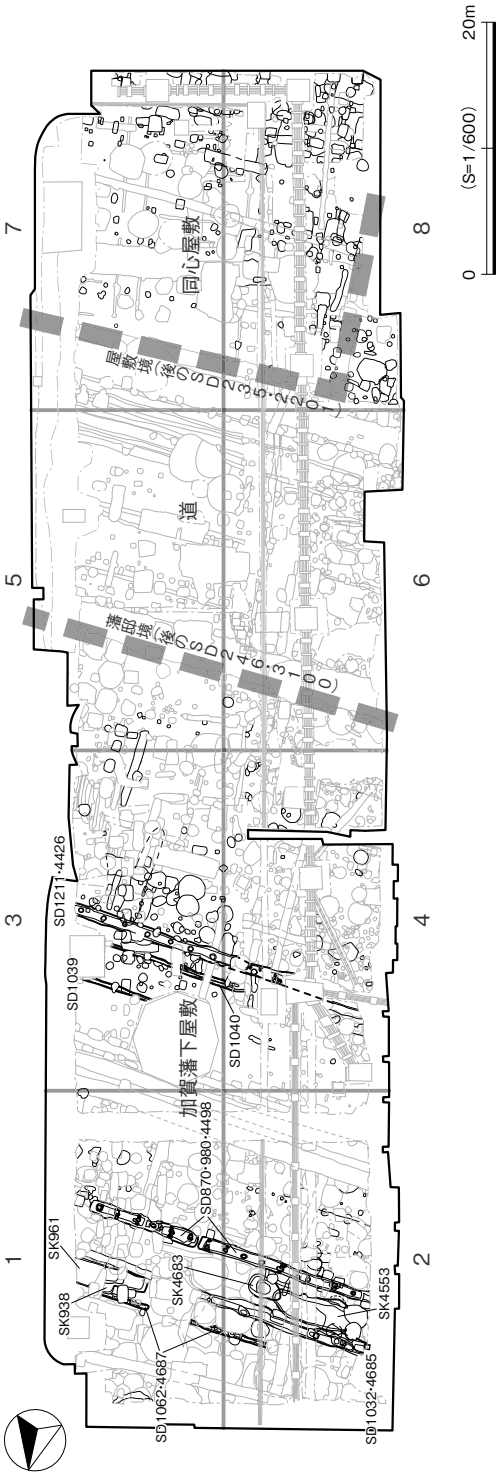
跡の調査－』
土岐市教育委員会・土岐市埋蔵文化財センター　2006 『窯ヶ根窯跡発掘調査報告書－平成 13･14 年度の調査成果－』
千代田区丸の内 1-40 遺跡調査会　1998 『東京都千代田区　丸の内一丁目遺跡』
長佐古真也　2008 「江戸における慶長・元和・寛永期の陶磁器相～千代田区内の一括資料による陶磁器編年試案～」『研究論集 ＸＸⅣ』東京都埋蔵文化財センター
成瀬晃司　2000 「考古学からみた加賀藩本郷邸「詰人空間」」『東京大学コレクションＸ　加賀殿再訪－東京大学本郷キャンパスの遺跡－』東京大学総合研究博物館
野中和夫編　2007 『石垣が語る江戸城』
藤本　強　1990 「江戸時代の基準尺度について－本地点の遺構にみられる尺度を中心に－」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室
細川　義　1990 「加賀藩本郷邸の全体図について」『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』東京大学埋蔵文化財調査室
堀内秀樹　2017 「本郷邸の中にみえる前田と徳川」『赤門－溶姫御殿から東京大学へ－』東京大学総合研究博物館
前田育徳会　1930 『加賀藩史料』
宮崎勝美　2008 『大名屋敷と江戸遺跡』山川出版



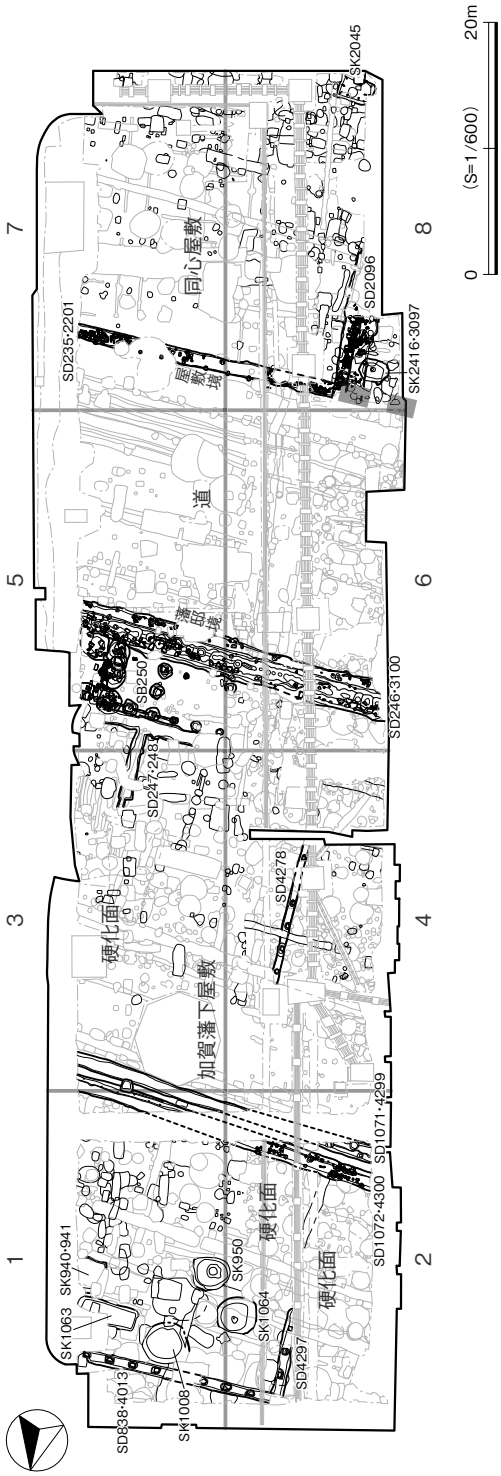
16図　I期遺構全体図(1)　(G面、フェイズ1)



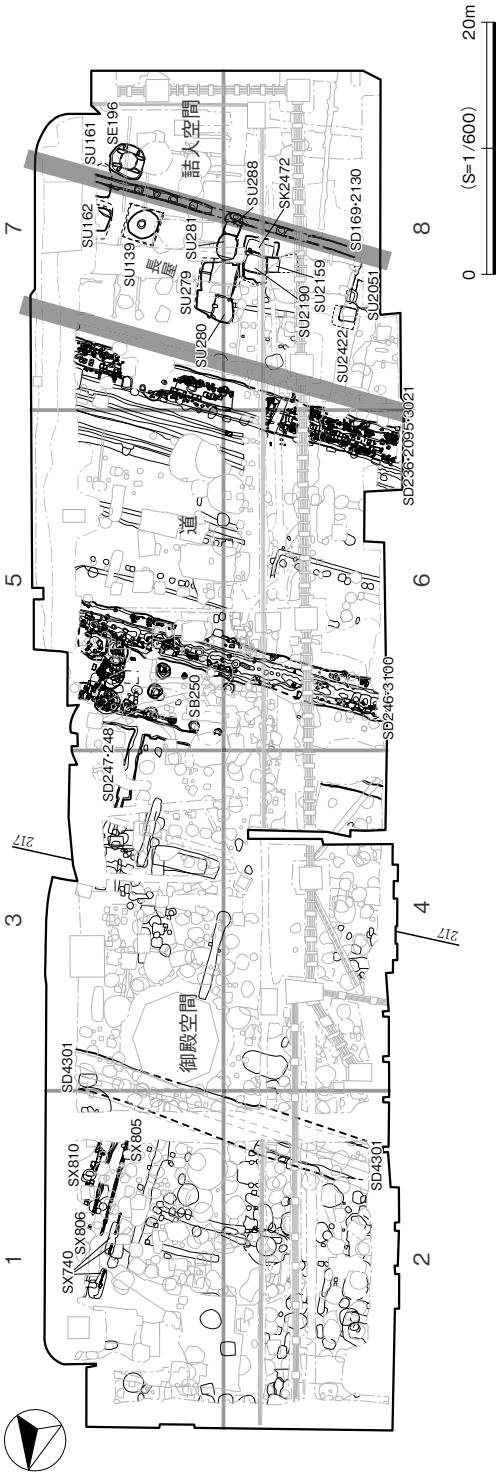
17図　I期遺構全体図(2)　(G面、フェイズ2)



18図　I期遺構全体図(3)　(F面、フェイズ3)



19図　I期遺構全体図(4)　(E面、フェイズ4)



20図　Ⅱ期遺構全体図　（D面、フェイズ5）

医学部教育研究棟地点の発掘調査成果と土地利用　2

―天和２（1682）年以降―

小林　照子

はじめに

本稿では「医学部教育研究棟地点の発掘調査成果と土地利用１」で設定された段階のⅢ期－加賀藩上屋敷段階および、Ⅳ期－前田侯爵邸段階の遺構を対象として、本地点の土地利用の変遷をみていく。

本地点は、現在確認されている絵図で最も古い元禄から、幕末に描かれたものまで、御殿空間とされている場所に位置している。調査区北側は、複雑に切り合った多数の建物基礎遺構が確認されており、建物の増改築が繰り返されたことが窺えた。しかし、建物基礎遺構の多くは、掘方に根石を置いた上に栗石をつき固めるという構造で、覆土が殆どないため遺構の新旧がつかみにくいうえ、遺構の平面形は円形で、単体では主軸をもたないため、配列をとらえることが難しく、考古学的な手法のみでは景観の復元が難しい状況であった。

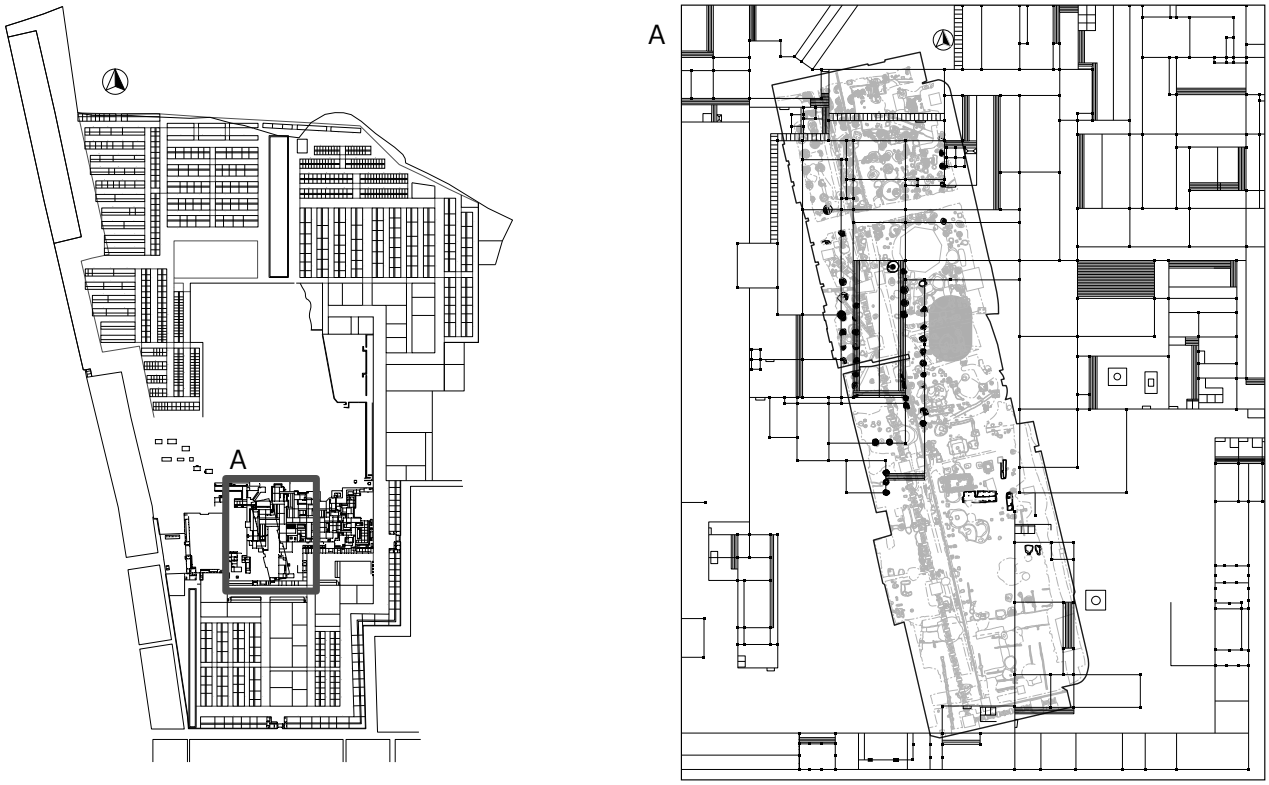
幸い加賀藩には文献資料や絵図が数多く残されているため、ここでは各期に対応する絵図と調査の成果を重ね合わせ、屋敷の変遷を検討していきたい。

1. 各期の様相

（1）Ⅲ期　加賀藩上屋敷段階

Ⅲ期に比定される遺構面は、調査区北側ではＣ面、調査区南側ではＧ面である。実年代では本郷邸、大聖寺藩、富山藩上屋敷が全焼した天和２（1682）年の火災以降、溶姫御守殿表門を残し全焼した慶応４（1868）年の火災以前に相当する。

Ｃ層はＤ面の上面に確認された焼土面の上に堆積した盛土層で、最も多数の遺構が確認された面である。調査時点では明確な生活面の違いは確認できなかったが、遺構の主軸が南通町に平行する軸と、中山道に平行する軸の２軸が確認されており（堀内 2017）、少なくとも１回以上の全面的な建替が行われ、主軸を異にする建物が



「御上屋敷殿閣図」(前田育徳会蔵）をトレースに加筆

1図　「御上屋敷殿閣図」と C2 面の遺構

存在していたことが確認されている。このうち御殿の主軸を南通町軸にもつ段階をフェイズ6、中山道軸にもつ段階をフェイズ7として各段階の様相をみていく。

①Ⅲ－１期　フェイズ６（1図、21図）

「御上屋敷殿閣図」では、御殿の主軸は南北に並ぶ詰人空間と同軸である。本地点は御殿空間の本宅表御殿部に該当する。

Ⅲ-1期の主な遺構は建物基礎遺構、土坑、植栽痕で、主軸方位をN-1°-Eにもつ遺構群である。また3区南側の一部に砂利を含んだ硬化面が確認されている。この硬化面のレベルは約22.6mで、フェイズ2で構築されたと考えられている道路D面（本書　研究1「医学部教育研究棟地点の発掘調査成果と土地利用1」）とされたSD246･3100とSD235･2201間の硬化面より60cm高く、Ⅲ-1期に属すると考えられる。「御上屋敷殿閣図」では殿舎の空閑地にあたる位置である。

・建物基礎遺構

2区から4区に位置する建物礎石遺構で、南北に延びている列が4列確認できる。主な礎石は西の1列目としてSP4186、4161、4188、4143、4133、4104、4129、4130、4262、4144。上記の列から約2m東に2列目としてSP4119、4111、4115、4125、4131、4279、3053、3050、3040、3065。3065から直角に東へ3042、3041が並ぶ。

2列目から約8m東にある3列目としてSP545、546, 615、3052、3141、3137・3138、3049、3024。その約3m東に4列目としてSP544、547、582、616、563、590、413、461、114・3091、3124が並ぶ。2列目と3列目の間の南に同軸をもつSP3074、3083、3078・3138・3139が並ぶ。

いずれも確認面は22.2～22.4m、坑底は21.9～22.2mである。礎石の構造は坑底中央にバレーボール大の切石もしくは自然石を置き、その周囲にやや小形の切石をひまわり状に配し、上から小円礫を多量に含む土を充填している。底石は坑底にめり込んでおり、強い加重がかかっていたことが窺える。ピット間は約190㎝である。

②Ⅲ－２期　フェイズ７（22図）

Ⅲ-2期の主な遺構は、建物基礎遺構、土坑、地下室、便所遺構、溝で、主軸方位をN-8°-Wにもつ遺構群である。

元禄16（1703）年の火災で全焼した本郷邸は、表御門が中山道に面した形で再建される。殿舎も中山道に沿った軸で建造され、幕末まで大きく姿を変えることなく使用されている（堀内2017）。本地点では1・2区から能舞台遺構が確認されているが、絵図資料では、能舞台が屋敷の一部である状態から、独立した舞台となる状態へと変化していることが確認できる。

能舞台が座敷に接続した状態の時期として「加賀前田家江戸屋敷図」、能舞台が独立した状態の時期として「江戸屋敷総図」を対象とし、遺構と対比しながら各期の様相をみていきたい（2図）。

a. 能舞台独立以前

2図左は江戸東京博物館所蔵の「加賀前田家江戸屋敷図」である。

絵図中、役人詰所に「淡路守様飛騨守様御留」との記載がある。これは支藩である大聖寺藩主と富山藩主をさすと考えられ、淡路守と飛騨守が同時に任官している享和1（1801）年～文化3（1806）年に描かれたものとされている。

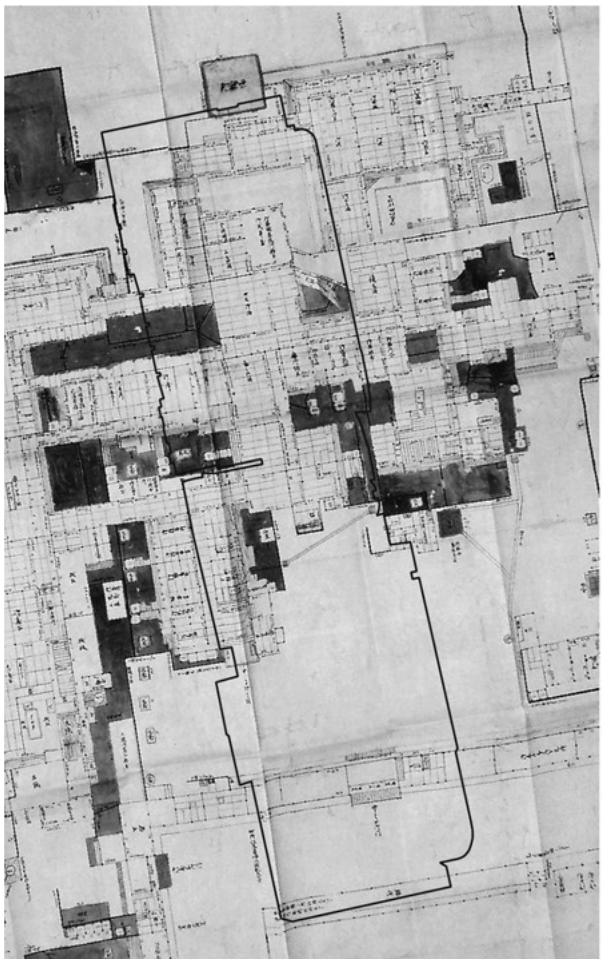
絵図と対比できる遺構は「江戸屋敷総図」と重なるものが多いため、ここでは「加賀前田家江戸屋敷図」と「江戸屋敷総図」で変化のある部分のみをみていきたい。

大きく変わるのは御居間書院、二之御間、御居間書院御勝手御式舞台の北側である。

・御居間書院御勝手御式舞台周辺の建物基礎遺構（3図、4図）

「加賀前田家江戸屋敷図」では、舞台は独立しておらず、御居間書院御勝手御式舞台（以下「御式舞台」）として二之御間、三之御間の東に接続している。御式舞台の柱に該当する建物礎石遺構は北西から時計回りに、SP894、SP595、SP525、SP527、SP701、SP541、SP530、SP558、SP559である。このうちSP530は「江戸屋敷総図」の三之御間北側の柱と同位置である。御式舞台北の逆L字形の空地には橋がかりから北上し、座敷手前から西に折れ、御居間書院方向へ向かう二重線が描かれている。この二重線は、絵図の他の場所では、枡と枡をつないでいるもの、井戸から邸外へ伸びているものがみられることから、下水関連の溝、管等の施設を描いているとおもわれる、橋がかり南の便所へ続いていた可能性も考えられる。

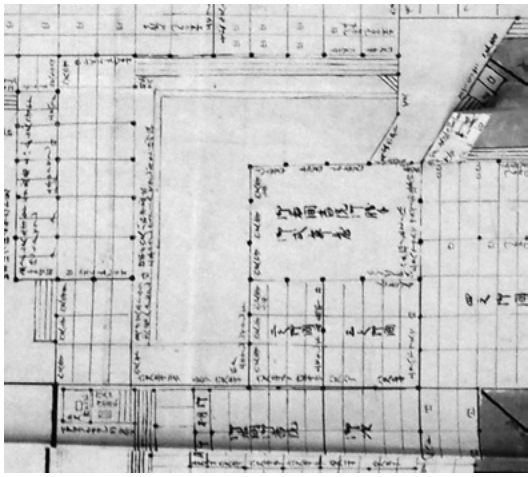
御居間書院の北側は空地をはさみ座敷となっている。座敷の柱に該当する建物基礎遺構は西から東へSP4037、SP4033、SP837、SP891、SP896、SP897。さらに北側の柱列をSP4029、SP824・4064。その北側にSP4021であ



「加賀前田家江戸屋敷図」（江戸東京博物館蔵）部分に加筆

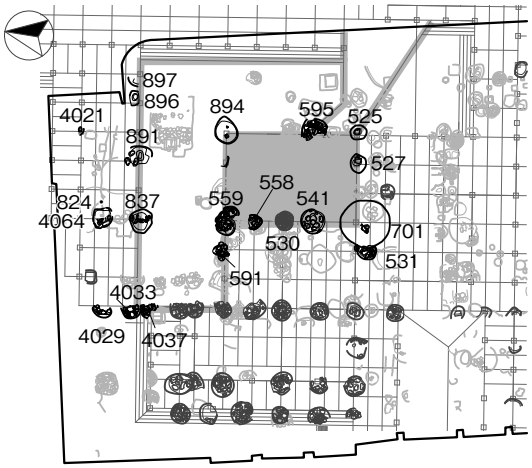
「御表御殿廻」（金沢市立玉川図書館蔵「江戸屋敷総図」）部分に加筆

２図　「加賀前田家江戸屋敷図」と「江戸屋敷総図」にみる医研地点の変化



「加賀前田家江戸屋敷図」（江戸東京博物館蔵）

3図　御式舞台周辺



4図　御式舞台周辺の建物基礎遺構

る。

・下水枡関連遺構－ SK72、SD59（5 図）

SK72 は 5 区に位置する正方形の土坑である。規模は一辺約 120 ㎝、深さ約 70 ㎝である。土層断面に木枠の痕跡が確認されており、木枠内部の覆土最下層に粘性の強い灰褐色土が堆積していることから、水性の堆積物が存在していたことが推測される。上層には焼土と瓦が大量に堆積している。遺物は 19 世紀に比定される陶磁器類が確認されており、慶応の火災で焼失した施設と考えられる。底部には径 30 ㎝、深さ約 70 ㎝の柱穴が 4 か所確認されており、重量のある構造物を支える柱の存在が窺える。西壁には坑底から約 50 ㎝の高さに SD59 が接続し SK87 の東南へ延びる。SD59 は幅約 60 ㎝、深さ約 20 ㎝で、溝底のレベルは 22.3m で溝の東西で差は無く、傾斜は認められない。SK87 の東南以西は撹乱に破壊されている。

「加賀前田家江戸屋敷図」では屋敷南側屋外に方形の桝 2 基とそれをつなぐ溝が描かれている。屋敷と桝の位置関係、溝の方向が一致するため、SK72 と SD59 はこの桝と溝に該当する可能性が高い。西側の桝に該当する遺構は確認されていない。

・地下室－ SU4203（6 図）

SU4203 は 4 区に位置する地下室である。東から西へ下る階段部分が検出されている。段の幅は約 100 ㎝、奥行き 30 ㎝で、蹴込に近い位置に 3 カ所、一辺 10 ㎝の方形小穴が穿たれており、補強の板材などを固定した杭痕と推測されている。また各段の両端に一辺 20 ㎝の方形小穴が検出されており、階段に伴う手すりもしくは階段付近の上屋を支えた柱痕と推測されている。遺物は 17 世紀後半～ 18 世紀の陶磁器類が出土している。建物基礎遺構と穴蔵の位置関係から蔦之間南の御席南側の屋外部分に描かれている穴蔵に該当する可能性が高い。

「江戸屋敷総図」では穴蔵という文字の上に紙が貼ってあり、すでに使用を終えた施設として描かれている。

b. 能舞台独立後（7 図）

2 図右は表御殿廻りを描いた「江戸屋敷総図」である。畳、柱、上水、下水まで詳細に描かれており、絵図中の役人詰所の「淡路守様備後守様御溜め」との記載より、文政 10 ～ 12（1827 ～ 29）および文久 3（1863）年以降に比定されている。7 図（下段）はこの絵図を CAD でトレースしたもの [1] を、遺構図に重ねたものである。1 間は 6 尺 3 寸（1919 ㎜）としている。

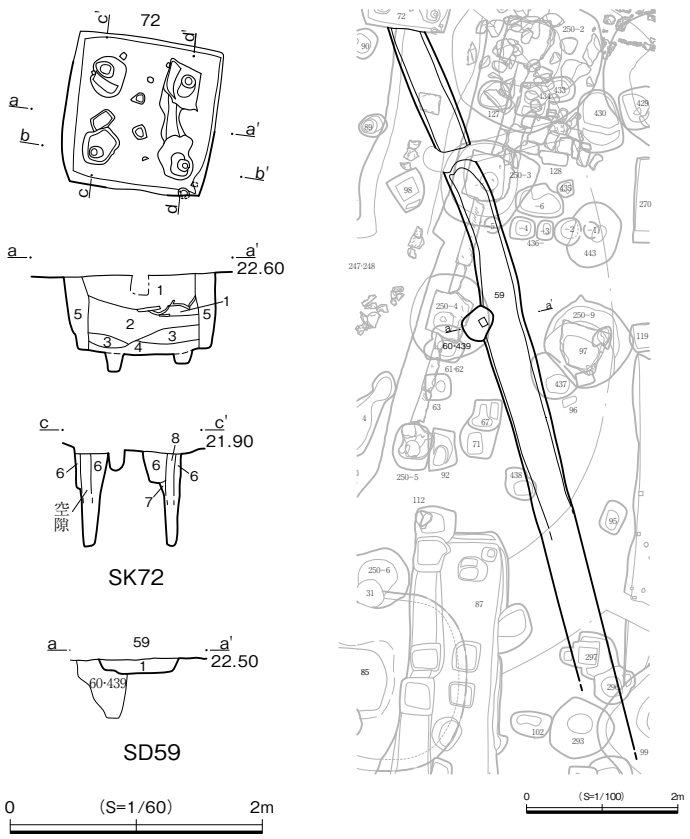
・能舞台関連遺構（8 図）

能舞台とその関連遺構として SX555・4059、SP4016、SP4001、SP674、SP638、SP1301、SP598、SP637、SP639 があげられる。舞台、橋掛かりという特徴的な形状から能舞台と判断した。絵図では SX555・4059 は、正方形と長方形を組み合わせた掘方と掘方に接続して東南に延びる溝状施設で構成されている。掘方と溝状施設の坑底には 10-20cm の厚さで漆喰を貼りつけており、漆喰の表面は平滑で磨き込まれている。溝状施設の長さは残存部で約 5.5m、東端は構成の撹乱により破壊されているため、二の松から三の松の間の柱まで残存している。掘方は本舞台および後座、地謡座、溝状施設は橋掛かりに該当すると考えられる。周囲の SP4016、SP4001、SP674、SP638 はそれぞれ目付柱、脇柱、シテ柱、笛柱に、SP1301 は後見柱、SP598、SP637、SP639 は橋掛かりの脇柱に該当する。各々のピットの規模は直径 90-160cm、深さ 40-60cm で、坑底に一辺 70-110cm の切石を 1 段から 3 段設置しており、南側に多数確認されている建物基礎遺構とは構造が異なっている。出土遺物は肥前系磁器広東碗、皆折釘など少量である。

・拝見所下通路－ SD4014（9 図）

SD4014 は 2 段の石段と間知石を積み上げた壁面に挟まれた硬化面を有する溝状遺構である。遺構の形状および SX555・4059 との位置関係から、「江戸屋敷総図」中の拝見所下通路と判断した。「江戸屋敷総図」では階段は 4 段で、拝見所の下約 4 間の通路を通り、拝見所の西へ出る構造に描かれている。

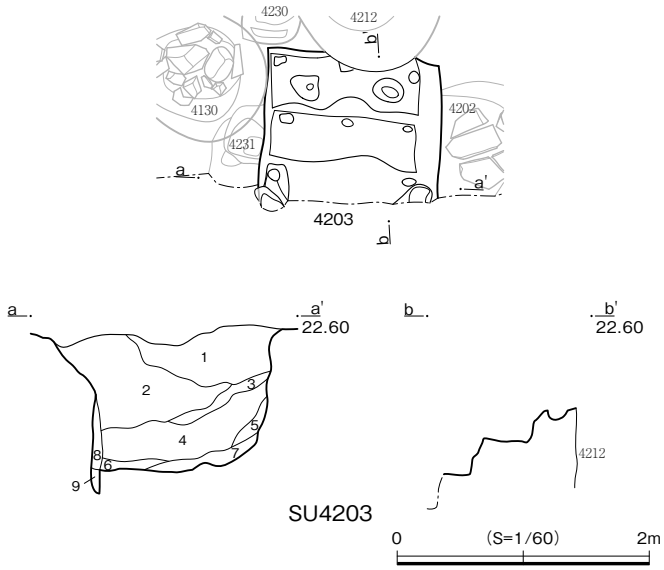
SD4014 は中央を撹乱により破壊され、東西に分断されている。東側は西に下る 2 段の平坦面があり、下段には長方形の平石 2 個を並べて設置しており、階段として使用したと思われる。1 段の幅は 120cm、奥行きは約 20 ㎝、高さは約 18 ㎝である。平石の両脇側面には切石を配しており、北脇には間知石が 1 個残存している。撹乱を挟んだ西側は、両脇に間知石を向い合わせに配した硬化面が確認されている。間知石の間は約 100 ㎝である。石段は下部 2 段のみ残存しており、西側の硬化面に続いている。硬化面のレベルは 21.9m で、階段 1 段の高さは約 18 ㎝であり、絵図では階段が 4 段描かれていることから、能舞台回りの地表レベルは約 22.7m、地表から 72 ㎝程度の深さに通路が存在していたと推定される。この拝見所下通路は、「加賀前田家江戸屋敷図」では描かれておらず、能舞台独立後に作成されたと考えられる。通路は能舞台周囲から拝見所の下を通り、拝見所裏の出



72
1 褐色土　（焼土粒含、炭化物・小円礫極少含）
2 暗褐色土　（円礫多含）
3 暗褐色土　（円礫・小円礫極少含、粘性強）
4 暗灰褐色土（ローム粒微含、粘性強）
5 暗褐色土　（ローム粒子・小円礫少含）
6 暗灰褐色土（灰褐色粘土多含、炭化物・ローム粒子　極少含、しまり強）
7 黄褐色土　（ほぼロームで構成）
8 暗褐色土　（炭化材が認められる、柱痕、しまりなし）

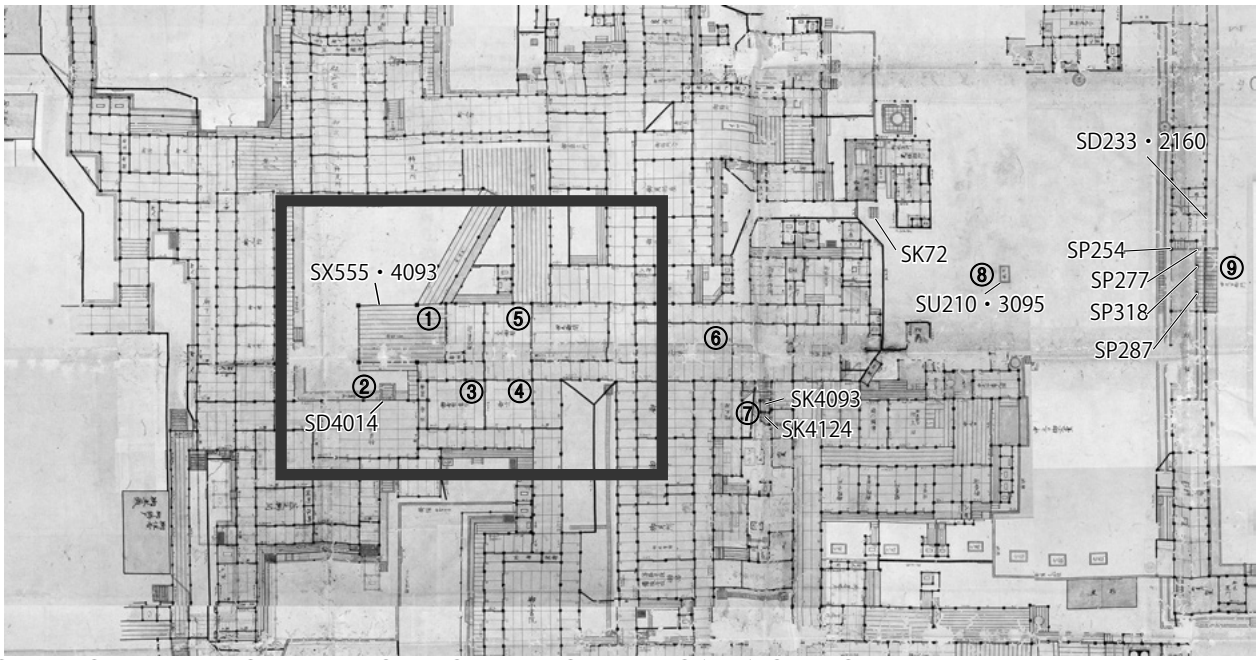
59
1 茶褐色土（焼土粒子多含、ローム粒子少含）

5図　SK72、SD59



4203
1 褐色土　（砂質、礫少含、ローム粒・ロームB極少含、しまり弱）
2 褐色土　（瓦片含、ローム粒・ロームB・黒色土粒・黒色土B少含）
3 褐色土　（ローム粒・焼土粒・炭化物極少含、粘性・しまりなし）
4 褐色土　（黒色土粒・ローム粒多含、破砕礫・瓦片少含、しまり弱）
5 暗褐色土　（黒色土粒多含、ローム粒・ロームB少含、焼土粒・炭化物極少含、粘性・しまり弱）
6 黄褐色土　（砂質、ローム粒多含、黒色土粒少含）
7 黄褐色土　（ローム粒・ロームB多含、黒色土粒少含）
8 黒褐色土　（黒色土粒多含、ローム粒少含、粘性・しまりなし）
9 暗黄褐色土（ローム粒主体、黒色土粒少含、粘性・しまりなし）

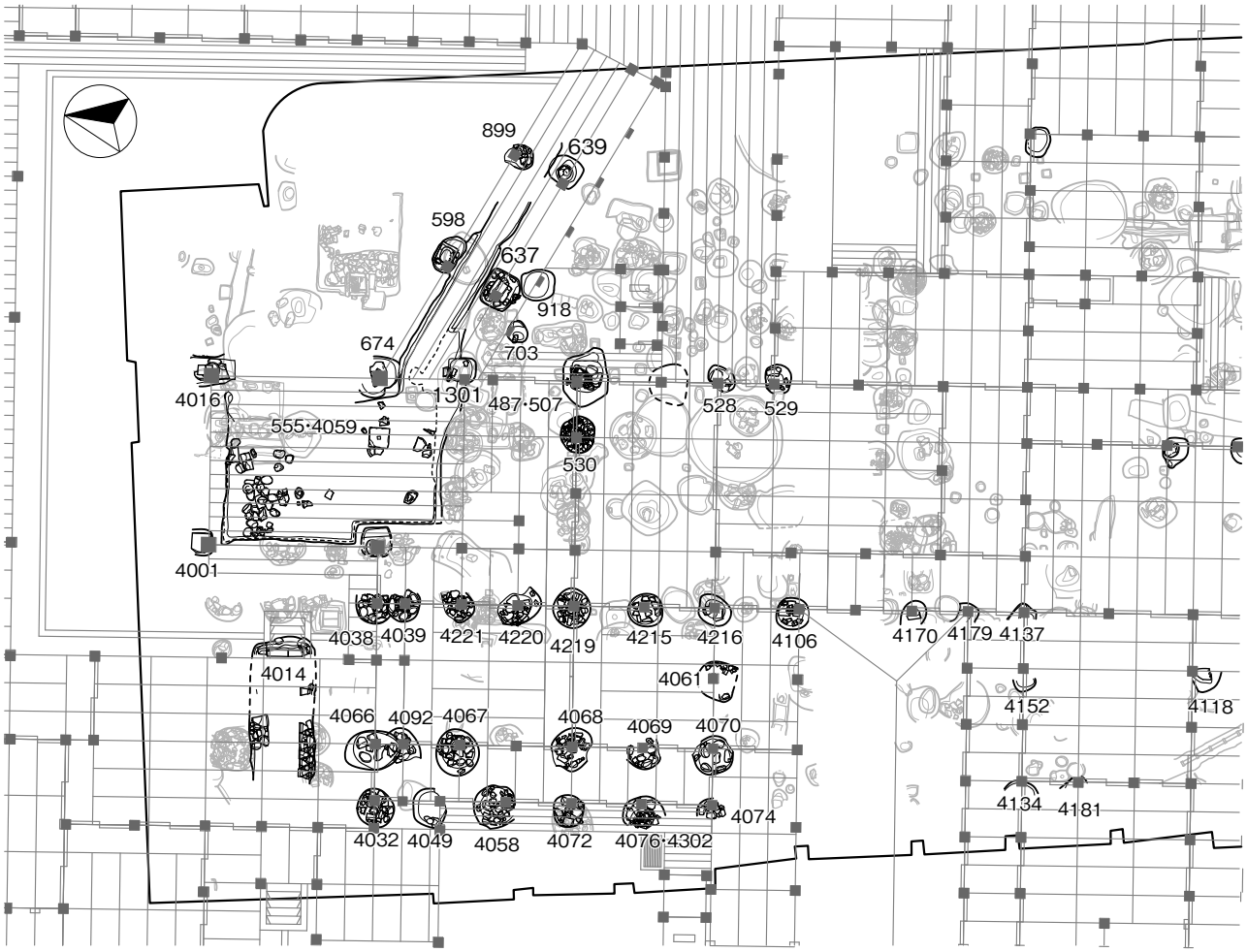
6図　SU4203



①能舞台 ②拝見所下通路 ③御居間書院 ④御次 ⑤三之御間 ⑥蔦之御間 ⑦(便所) ⑧穴蔵 ⑨中之口御門

「御表御殿廻」(金沢市立玉川図書館蔵「江戸屋敷総図」)部分に加筆

枠内拡大図



「御表御殿廻」(金沢市立玉川図書館蔵「江戸屋敷総図」)をトレース

7図　「江戸屋敷総図」と遺構重ね図

口付近に出る。能舞台橋掛かり脇に作られた便所の下掃除のための通路であろうか。遺物は頭巻釘、鋲、合釘が出土している。

・御居間書院、御次、三之間周辺の建物基礎遺構　（7 図）

御居間書院、御次之間関連遺構として２区に位置する建物基礎遺構群があげられる。1、2 区は建物基礎遺構が集中しており、切合が激しいため、絵図との照合は困難だと思われた。しかし、Ⅳ期の調査は電子平板で測量しているため、正確な遺構の位置をとらえることができていることと、絵図のトレース図は CAD で作成されており、紙の歪みや手図面の曖昧さが排除されていることから、両者を重ねることで、この時期に比定される遺構の手がかりが得られることができた。能舞台、拝見所下通路を基準に、絵図と遺構図を重ね合わせたものが 7 図である。

御居間書院の西側畳敷きの通路の柱に該当する遺構として、通路西側を北から SP4032、SP4049、SP4058、SP4072、SP4076・4302、SP4074、通路東側を北から SP4066、SP4092、SP4067、SP4068、SP4069、SP4070 があげられる。柱間は芯々で約 200 ㎝である。

御居間書院東側の柱としては北から SP4038、SP4039、SP4221、SP4220、SP4219、SP4215、SP4216、SP4106 があげられる。

三之間北側柱としては SP530、SP487・507、東側の柱としては SP528、SP529 があげられる。礎石の構造は SP4038、SP4039 を例にとると、径 100 ～ 150 ㎝、深さ 60 ～ 70 ㎝の円形の掘方の坑底に、人頭大の石や切石を置き、その上に砂利と土をかけている。坑底の石は地下に深くめり込んでおり、上部から強い加重がかかったことを示している。

・蔦之間周辺の建物基礎遺構

蔦之間関連遺構として、3、4 区の建物基礎遺構群があげられる。4 区東側は広い範囲を撹乱に破壊されており、配列が確認出来るのは 3、4 区間を南北に延びる建物基礎遺構で北から SP580-7、SP580-6、SP580-5、SP580-4、SP580-3、SP580-2 、SP580-1、SP100、SP93、SP94 である。これらは　能舞台関連遺構、御居間書院周辺建物基礎遺構との位置関係から、蔦之間から奥御納戸東側の柱に該当すると考えられる。

次に調査区南側 5 ～ 8 区の遺構をみていきたい。

・トイレ遺構－ SK4124、SK4193（10 図）

SK4124、SK4193 は東西に隣接する土坑である。SK4124 の側面には炭化材と箍の痕跡が残っており、SK4124、SK4193 とも底部に円形の窪みと炭化材の痕跡がみとめられることから、円形の桶状のものが並べて埋設されていたと考えられる。SK4193 は円形の窪みの外側に、長方形の掘方が確認されている。覆土中には、大量の被熱した瓦と炭化物が堆積しており、SK4193 の覆土最下層には、水性堆積物と考えられるシルト状の灰黄色土が堆積している。以上の点から、方形区画中に木製の円形桶を埋設した 2 基のトイレ遺構と考えられる。遺物は小口に「四菱」の刻印がある桟瓦と瓦当に「＾庄」の刻印をもつ軒桟瓦、および 19 世紀に比定される被熱した陶磁器類である。慶応 4（1868）年の火災で焼失した遺構であると推察されている。

東側の建物基礎遺構との位置関係、東西に 2 基隣接している配置、遺構の性格から蔦之間南西のトイレに該当すると考えられる。

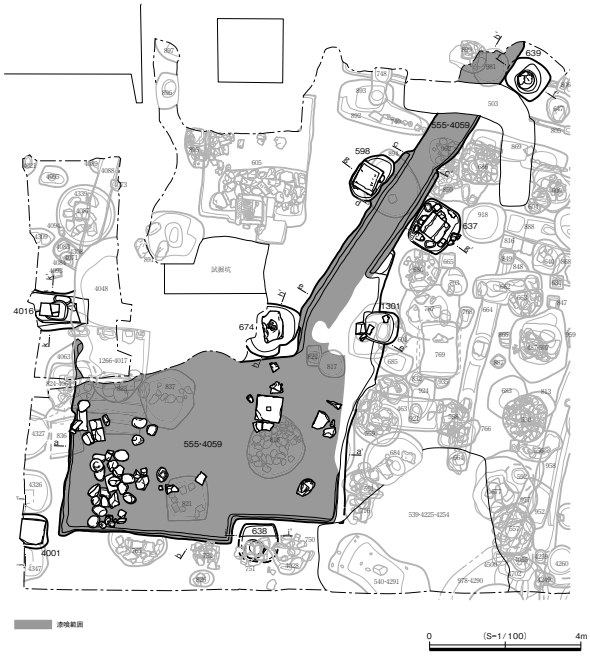
・地下室－ SU210・3095（11 図）

5・6 区に位置する地下室 SU210・3095 は、瓦で壁面を構築した地下室である。規模は長軸 445cm、短軸 279cm、深さ 257cm と大形である。壁面を構成する瓦は、平瓦 1 枚と縦に分割した平瓦 2 枚を 1 単位とし、側面を内側に向けて積んでおり、坑底から約 40 段検出された。床面と思われる硬化面の下から、根石を伴う柱穴が検出されており、硬化面上に部分的に検出されていた板材の痕跡と柱穴は、平行する位置にあることから、木組みの地下室だったものを瓦積みに作り替えていると考えられる。遺物は瀬戸・美濃の磁器皿や、紐状把手がついた山水土瓶など、19 世紀中葉に比定される陶磁器類が出土しており、覆土中には焼土が認められることから、慶應 4（1868）年の火災で廃棄した遺構と推察される。

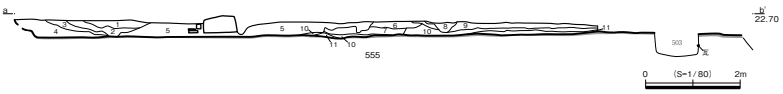
「江戸屋敷絵図」では中之口御門の正面で、門と屋敷の中間に「穴蔵」が描かれている。絵図中の穴蔵は、SU210・3095 とは大きさが異なるが、位置的にはほぼ重なること、年代的に合致することから、SU210・3095 がこの「穴蔵」に該当する可能性が高いと思われる（7 図上）。

・中之口御門周辺の溝・建物基礎遺構－ SD233・2160、SP287、SP318、SP277、SP254（12 図）

SD233・2160 は 7、8 区に位置し、中山道に直交する主軸をもつ溝である。確認されている規模は、長さ 20m40cm、幅 2m66cm、深さ 32cm である。調査区を東西に横断している。調査区南側は近代初頭に大きく削平されているため、SD236・2095・3021 以南の遺構はロー



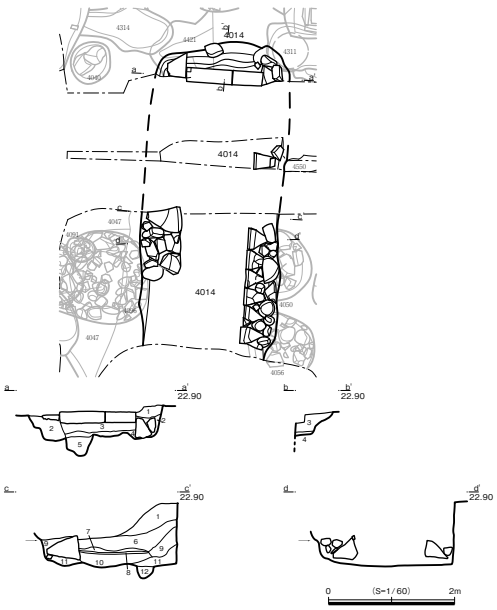
SX555·4059漆喰検出状況



SP4016断面図

555
1 灰褐色土 （ローム粒・ロームB多含、焼土粒・炭化物・礫・瓦少含、しまり強）
2 灰褐色土 （砂質シルト、焼土粒多含、ローム粒・黒色土、礫少含、しまり強）
3 灰色土 （礫・瓦多含、ローム粒・ロームB・炭化物少含、しまり弱）
4 褐色土 （ローム粒・ロームB・焼土粒・炭化物少含、粘性・しまり強）
5 暗褐色土 （ローム粒・ロームB多含、灰色シルトB含、焼土粒少含、炭化物極少含、しまり強）
6 褐色土 （砂質強、ローム粒・焼土粒・炭化物少含、しまり弱）
7 褐色土 （ローム粒・焼土粒・礫少含、炭化物極少含、しまり強）
8 褐色土 （ローム粒・ロームB・焼土粒・焼土B・炭化物・礫少含、粘性弱、しまり強）
9 褐色土 （貝多含、ローム粒・ロームB・炭化物・礫少含、焼土粒極少含、しまり強）
10 褐灰色土 （やや砂質、礫多含、ローム粒・ロームB・炭化物少含、焼土粒極少含、しまり強）
11 明褐灰色土 （砂礫・漆喰多含、ローム粒・焼土粒・炭化物極少含、しまり弱）
12 明灰白色 （漆喰に砂利を混ぜたものが主体、粘性なし、しまり極強）
13 暗褐色土 （ローム粒多含、礫極少含）
14 黄褐色土 （粘性・しまり強）
15 暗茶褐色土 （焼土含、砂利少含、粘性弱）

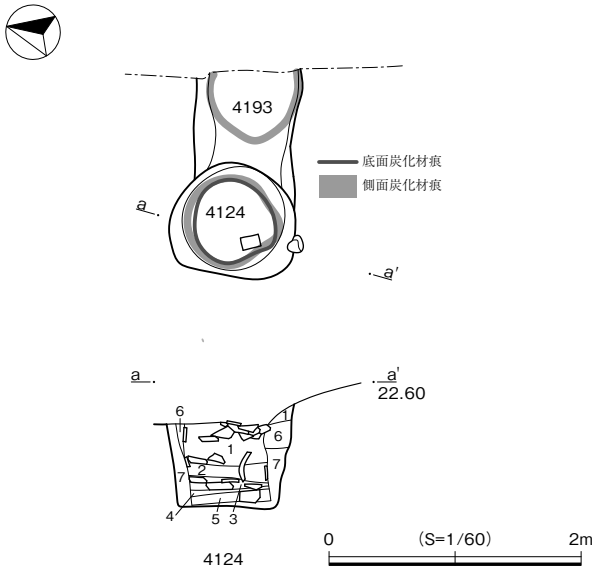
8図　SX555·4059



SD4014検出状況

4014
1 橙褐色土（焼土粒極多含、焼石多含、小円礫・漆喰片含、しまり弱）
2 茶褐色土 （ローム粒・灰褐色粘土粒含、ロームB・小円礫少含）
3 茶褐色土 （ローム粒・ロームB含、円礫少含）
4 明茶褐色土（ローム粒・ロームB含、炭化物・灰褐色粘土・小円礫極少含、しまり強）
5 茶褐色土 （ローム粒・ロームB・小円礫少含、しまり弱）
6 褐色土 （焼土粒・ローム粒含、しまり弱）
7 炭化物層（破砕礫〔切石〕片多含）
8 暗褐色土（円礫多含、ローム粒・切石片含、しまり極強、硬化面）
9 暗褐色土（ローム粒・ロームB含）
10 茶褐色土（ローム粒・ロームB含、小円礫少含、しまり強）
11 茶褐色土（ローム粒少含、ロームB・小円礫極少含）
12 褐色土 （ローム粒・ロームB極多含）

9図　SD4014

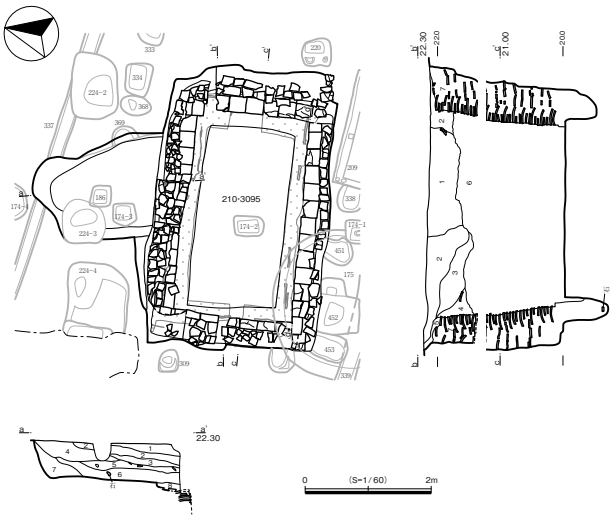


SK4124炭化材検出状況

SK4124完掘

4124
1 暗灰褐色土（瓦片〔焼瓦含〕極多含、漆喰B少含、粘性なし、しまり弱）
2 灰褐色土　（ローム粒・焼土粒少含）
3 焼土層　（焼瓦多含）
4 黒色土　（炭化物主体、しまりなし）
5 灰色土　（礫多含、角石含、ローム粒・黒色土粒少含、しまり弱）
6 灰色土　（炭化材片含、しまり弱）
7 黄褐色土　（ロームB主体、黒色土B少含、しまり弱）

10図　SK4124、SK4193

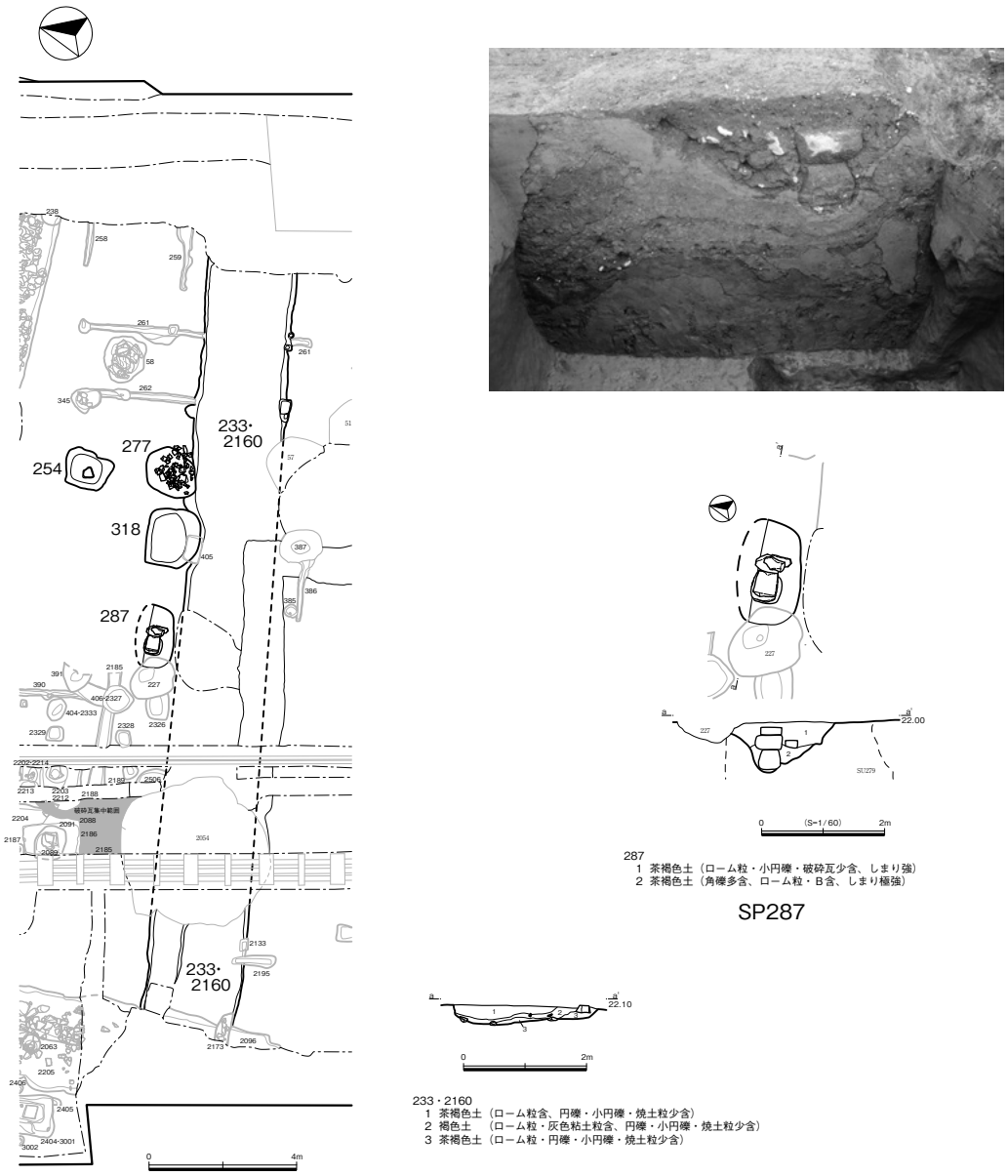


SU210･3095完掘

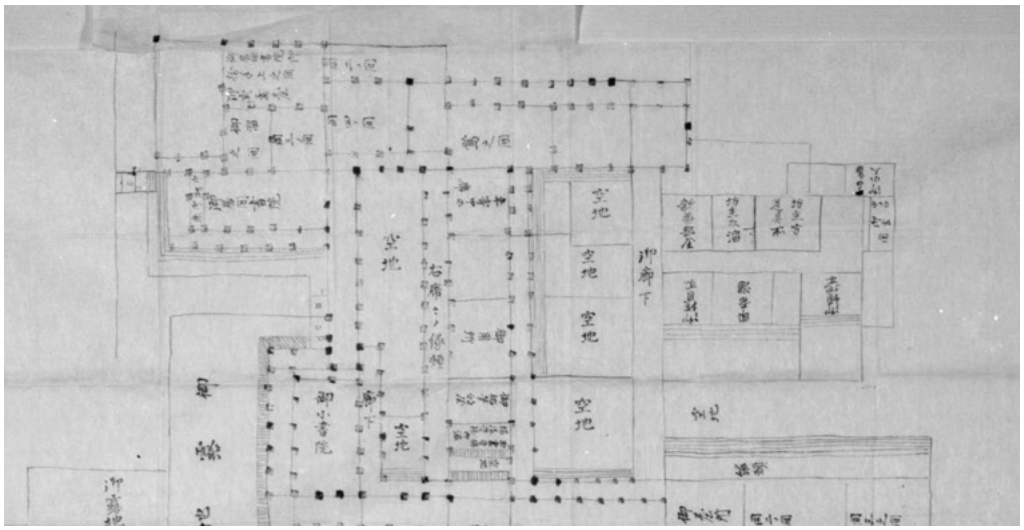
210・3095　a-a'
1 暗褐色土　（ロームB・焼土・砂利多含）
2 暗褐色土　（焼土粒・ロームB含、しまりなし）
3 暗褐色土　（1・2層に加えて灰褐色土B多含）
4 暗褐色土　（ロームB多含、しまりなし）
5 暗茶褐色土（焼土多含、焼瓦含、粘性・しまりなし）
6 暗黄褐色土（大ロームBを大量に含む暗褐色土）
7 暗褐色土　（ロームB・砂利多含、粘性・しまりなし）
8 暗褐色土　（焼土・砂利含）

210・3095　b-b'、c-c'
1 暗黄褐色土（ロームB・焼土粒・礫多含、焼瓦含、粘性・しまり弱）
2 暗褐色土　（ロームB・礫多含、焼瓦少含、焼土極少含）
3 暗黄褐色土（ロームB多含、礫含、焼土極少含、粘性弱）
4 暗褐色土　（ローム粒・焼土・炭極少含、粘性・しまり弱）
5 暗褐色土　（ローム粒多含、粘性弱）
6 焼土瓦層　（焼瓦主体、間に焼土を含む暗褐色土を挟む、粘性・しまりなし）
7 暗黄褐色土（ローム土・暗褐色土を主体とした粘質土、ロームB少含、しまり強）
8 暗黄褐色土（ローム土・暗褐色土が縞状に重なる、焼土・砂利極少含、粘性強）

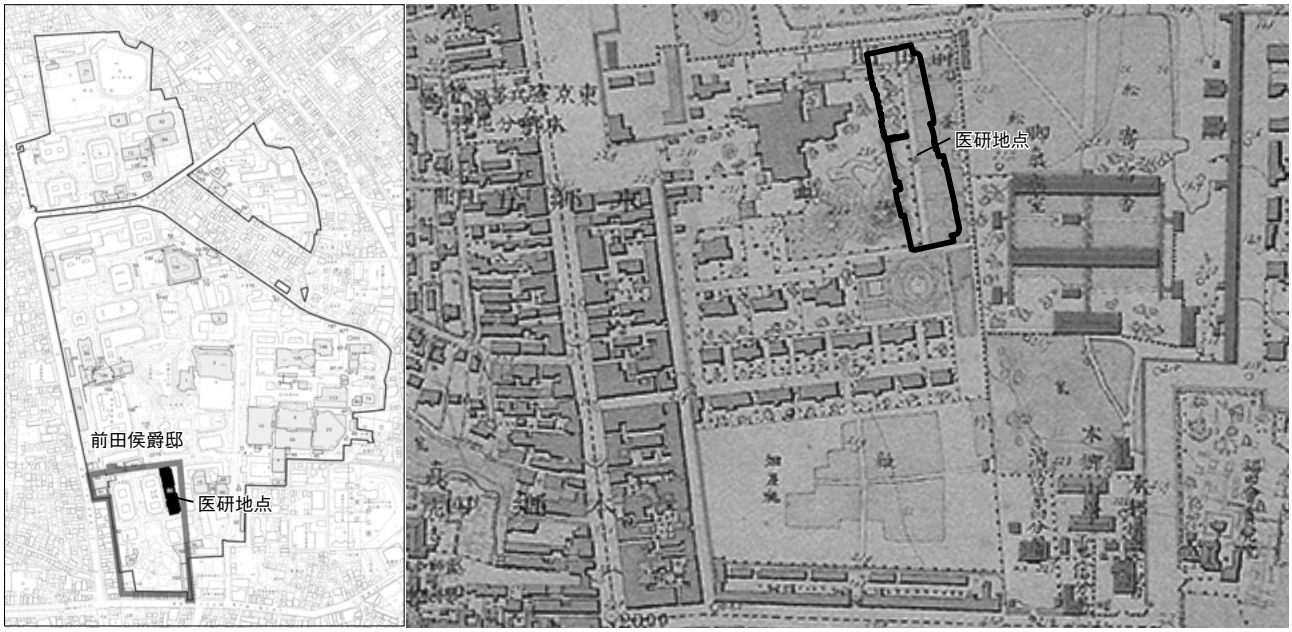
11図　SU210･3095



12図　SD233･2130、SP287



13 図　18 世紀の御殿－御居間書院周辺　「江戸御殿客之図」（金沢市立玉川図書館蔵）部分



「東京府武蔵國本郷區本郷元富士町近傍」（明治 16（1883）年　参謀本部測量局）部分に加筆

14 図　本郷キャンパス内前田侯爵邸位置と医研地点

ム直上で確認されており、遺存状態は非常に悪く、溝底のみ残存している状態である。SD233・2160 の中央北側には SP287、SP318、SP277 と建物基礎遺構を伴っている。一番西の SP287 は円形の掘方に、一辺 40cm の切石を 3 段積み重ね、周りに破砕礫を充填しており、能舞台の礎石と同様の構造である。SP287 の石は地中にめり込み、下部遺構の SU279 の土層には大きく湾曲がみられ、相当な加重がかかっていたことが窺える。遺物は 17 世紀から 19 世紀の陶磁器類が少量出土している。「江戸屋敷総図」では東西にのびる長屋門と、その南北に水路が廻り、石製と思われる橋がかけられている。門の南北は 1 間半、門の東西幅は約 2 間で 4 本の柱が描かれている。柱の間隔は西から 1 間、2 間、1 間である。SP287 と SP318 の距離は約 270cm、SP318 と SP277 の距離は約 180cm で、西から 2 ～ 4 番目の柱ほぼ一致する。溝の規模、主軸方位、殿舎との位置関係および SP287、SP318、SP277 と SD233・2160 の位置関係、柱間の距離から SP287、SP318、SP277 は中之口御門の南側にかかる石橋北側の柱に、SD233・2160 は南側を廻る溝および水路に該当する可能性が考えられる。

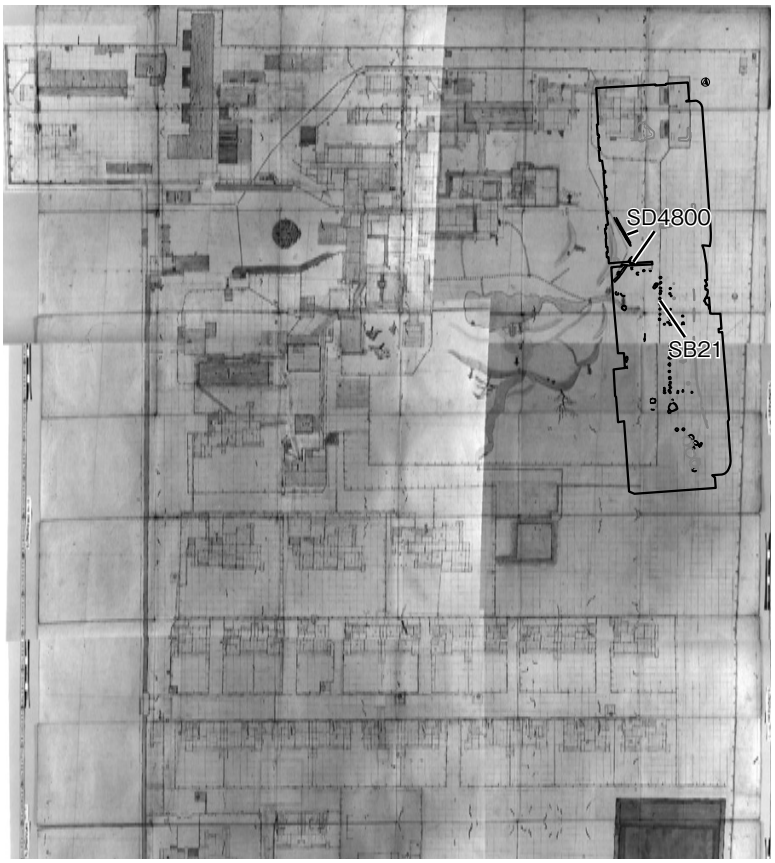
これらは 19 世紀になってからの絵図であるため、18 世紀の史料にも若干触れておく。13 図は御殿本宅の部分図「江戸御殿客之図」である。図中に大聖寺藩主、富山藩主を指す「出雲守様備後守様御溜」との記載があり、この支藩主の組み合わせは享保 15（1730）年～宝暦 12（1762）年、もしくは安永 6（1777）年～天明 2（1782）年に該当する。この絵図と「加賀前田家江戸屋敷図」では、御居間書院の東側の柱から蔦之間の南座敷までの西側柱筋はほぼ変化していない。御居間御書院、御次の南にある空地も「江戸御殿客之図」から「江戸屋敷総図」まで変わらず空地の南北の柱筋も同様である。調査区北側では能舞台の独立という改築が行われてはいるが、能舞台以南は 90 年近く大きく変わることが無かったと思われる。

（2）Ⅳ期　前田侯爵邸段階（フェイズ 8）

慶応 4（1868）年の火事で、本郷邸は大部分を焼失するが、当時江戸に在住していた人数は少なく、再建は最低限にとどまった。明治維新後、武家地は東京府の管轄に移り、前田家の屋敷地も明治 4（1871）年に収公され、大半は文部省用地となったが、赤門から南西側 15,000 坪は、前田家の敷地として残された。本地点は前田侯爵邸敷地の東北端にあたる（14 図）。明治 17（1884）年、華族令が公布され、前田家は侯爵の爵位を授与される。天皇行幸を望んだ利嗣（15 代当主）の遺志を継いだ利為（16 代当主）は明治 38（1905）年に日本館、明治 40（1907）年に西洋館を竣工する。

前田侯爵邸期に比定される遺構面は A、B 面である。おおむね懐徳館造営以前の生活面を B 面、懐徳館造営以後の生活面を A 面と推定している。

A ～ B 面は近代以降の盛土層である。調査区南側では近世層を削平して盛土しており、ローム直上に堆積していることが確認されている。B 面からはピット列、A

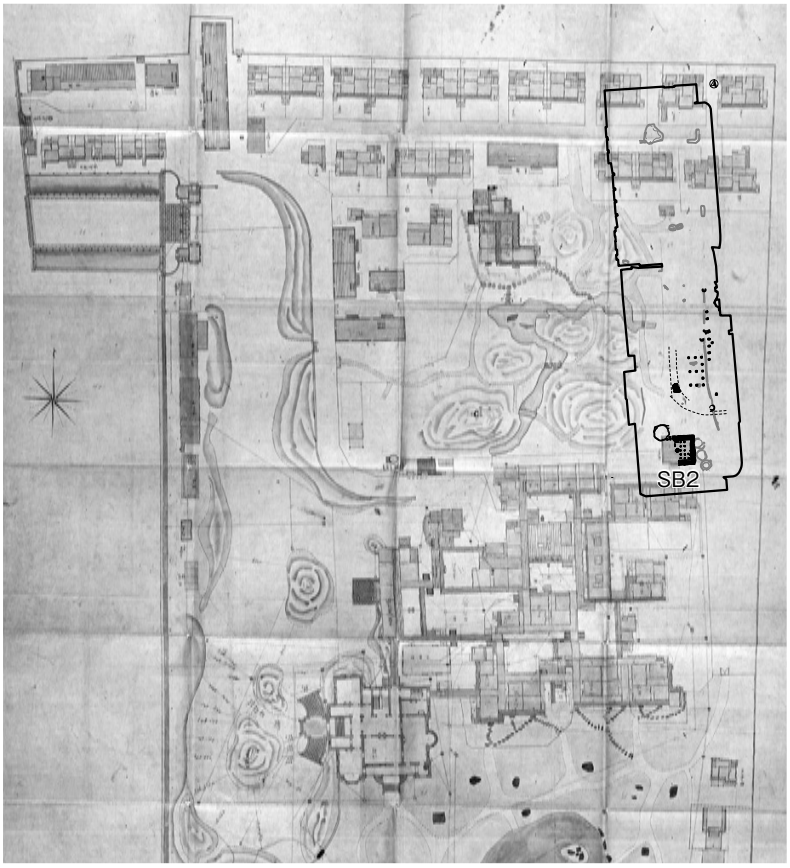


「本郷御邸総絵図」（前田育徳会蔵）部分に加筆

15図　明治35年以前の本郷邸と医研地点

16図　SD4800

17図　SD4800　土管と甕埋設状況



「本郷本邸平面図」（前田育徳会蔵）部分に加筆

18図　大正元年の本郷邸と医研地点

19図　SB2

面からは植栽痕、土蔵基礎が確認されているが、前田侯爵邸敷地の辺縁部にあたるため、全体的に遺構数は少ない。

①懐徳館造営以前（15 図）

15 図は慶應 4（1868）年以降、明治 35（1902）年以前の前田侯爵邸を描いた「本郷御邸総絵図」と医研地点の遺構配置である。この時期は敷地の北側に本宅がおかれ、本宅の南東に池と庭園がみられる。本宅南側には使用人宅が続き、敷地の南境には長屋が 2 列に建ち並び、各区域は柵で区切られている。医研地点は本宅と庭園の東側の空閑地にあたる。

・柵列－ SB21（15 図）

SB21 は 3・4・6 区に位置する柵列である。南北に 9 基のピットが確認されている。ピットの平面形は隅丸長方形、径 40 ㎝、深さ約 60 ㎝のものが主体で、ピット間は約 120 ㎝である。SB21-2、3、5、7、9 には柱痕が確認されている。「本郷邸総絵図」では土蔵区域、居住区域などを区切る塀と支柱が描かれており、支柱に該当すると推察される。

・土管埋設溝－ SD4800（16 図、17 図）

SD4800 は 4・6 区に位置する土管埋設溝である。長さ 56 ㎝、径 12 ㎝の常滑産の土管をつなげ、配水管としており、方向転換する位置には甕を接続し、貯水桝としている。「本郷邸総絵図」では本宅南の庭園内池の東側から北へ向かい、本宅の北側を周り、西側敷地外へ延びる排水溝が描かれている。この排水溝の最東逆 V 字部分の突端部に該当すると推察される。

②懐徳館造営以降（18 図）

18 図は大正元（1912）年に描かれた「本郷本邸平面図」である。明治天皇行幸を願った利嗣の遺志を継いだ利為は、敷地南側に日本館と西洋館を建造する。敷地中央に本宅、本宅の北側は庭園と使用人の居住区域になっている。医研地点は庭園の東端にあたり、絵図では北側には使用人居住区、南側は土蔵が描かれている。

・土蔵基礎　SB2（19 図）

SB2 は 7、8 区に位置する布掘り状の建物基礎遺構である。平面形は一辺 750 ㎝の方形で、幅約 100 ㎝、深さ約 50 ㎝の切石と破砕礫を充填した溝を廻らせている。溝で囲まれた内側は、床柱基礎の切石を敷いた浅いピットが 180 ㎝間隔で並んでおり、中央部には方形の切石を小切石で円形に囲った施設が確認されている。遺物は銅版転写の燗徳利、瀬戸・美濃系磁器の湯呑碗が出土している。

「本郷本邸平面図」で本宅北東端に「弐号」と描かれている土蔵にあたる。

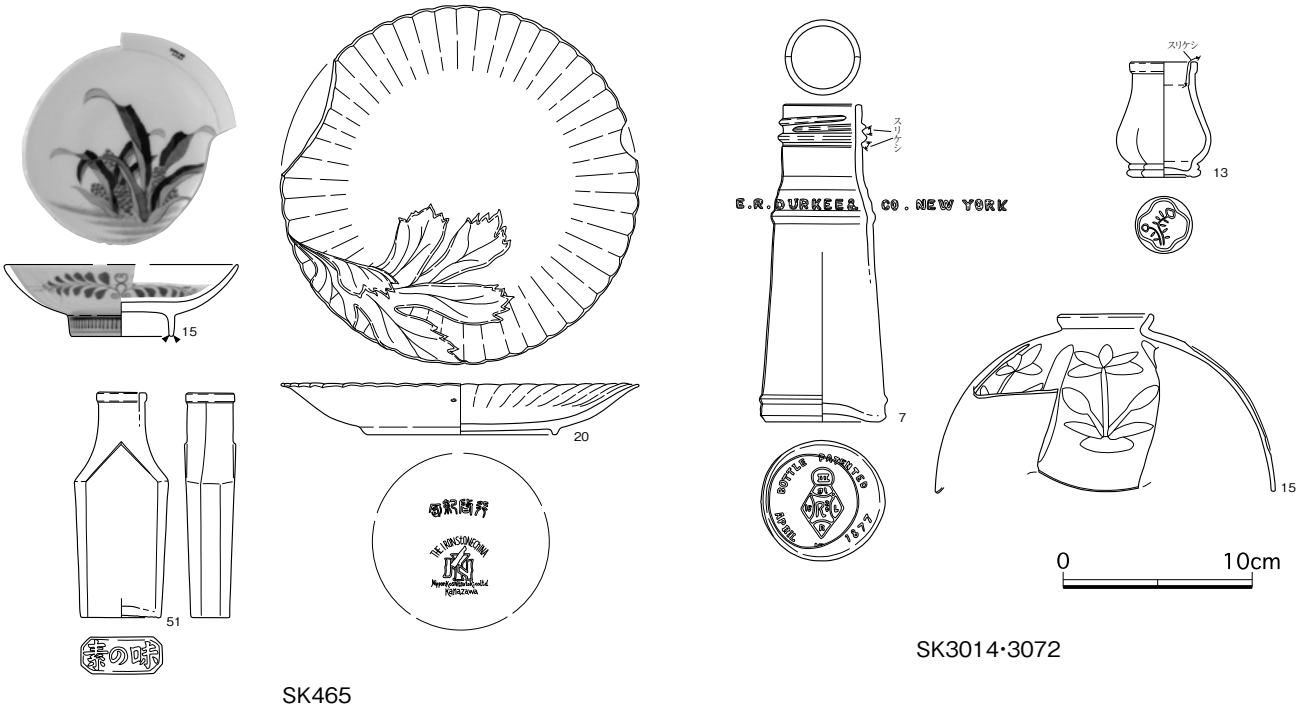
・A ～ B 面の遺物

遺構の密度が薄い区域で、遺構からは当時の様相が追いにくいため、SK465 および SK3014・3072 の遺物の様相から当時の生活を概観してみたい（20 図）。

SK465_20 は硬質陶器の型皿である。裏面には篆書体で「行啓紀念」とあり、その下に「THE IRONSTONECHINA」「NipponKoshitutoki coltd」「Kanazawa」との裏印がある。日本硬質陶器は明治 41（1908）年に金沢で前田家と当地の有力者により創業された製陶会社である。前田家本郷邸ではこの 2 年後の明治 43（1910）年に明治天皇の行幸を果たしている。共伴する SK465_15 は鍋島様式の皿、SK465_51 は味の素の瓶である。創業当時の瓶で明治 42（1909）年から昭和元（1926）年頃まで使われていた瓶である。

SK3014・3072_7 はドレッシングボトルである。型吹き成形ガラス瓶で、胴部上位には、「E.R.DURKEE&Co.\NEW\YORK」、底部には、「BOTTLE PATENTED」、「APLIL 1877」、中心にはいわゆるダイヤモンド形のレジストリマークが陽刻されている。E.R.DURKEE&Co. は 1857 年に Eugene　R.Durkee によって設立された調味料会社で、1877 年にサラダドレッシングボトルの特許を得ている。レジストリマーク「Ⅲ、L、R、16、□」はⅢ：ガラス、L：1882 年、R：August、16：登録数、□：日にち（9 とキズか）をあらわしている。共伴する SK3014・3072_13 は型吹きガラス瓶で、クリームもしくはポマード瓶である。底部には資生堂の花椿マークが陽刻されている。花椿マークは大正 4（1915）年から使用されており、椿の葉が 9 枚なのは大正 10（1921）年以前のものである。SK3014・3072_15 は吊り下げランプの傘で、透明ガラスで白色ガラスを挟んだ被せガラスである。

日本で初めてドレッシングが作られたのは 1958 年であり（https://www.kewpie.co.jp/dressing/history/）、当時の一般家庭では、まだ生野菜が食卓にのぼることが少なかったようだ。明治から大正へと移り、化粧クリーム、ランプと日常生活の西洋化が進む中、前田家では西洋風の食生活もいち早く取り入れられていたことが、遺物からも窺える。



20 図　SK465、SK3014・3072

2. まとめ

以上、絵図資料と遺構を対応させながら、土地利用の変化について検討を行ってきた。以下に各段階の契機となった要素を考察する。

フェイズ 6（21 図）

フェイズ 6 は上限が天和 2（1682）年の火災、下限が元禄 16（1703）年の火災に相当する。

天和の火災後、上屋敷となった本郷邸だが、再建は思うようには進まず、5 代藩主綱紀が本郷邸の仮屋に移ったのは貞享 2（1685）年、殿舎の再建が完了し綱紀が移徒したのは貞享 4（1687）年であった。元禄 15（1702）年には将軍綱吉を迎え、藩邸南東部には御成御殿が建設されたが、翌年元禄 16（1703）年のいわゆる水戸様火事で再び全焼している（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）。

フェイズ 7（22 図）

フェイズ 7 は元禄 16（1703）年の火災から、慶応 4（1868）年の火災以前に相当する。

フェイズ 7 は 150 年以上の期間にわたるが、全面的な建替などはみられない。最も大きな変化は能舞台が独立した構造に変わったことである。この変化の契機となる事象は 11 代藩主斉泰と将軍徳川家斉娘溶姫との婚礼であろう。婚礼にあたり、溶姫の御住居を設けるため、御殿内は大改築が行われる。溶姫の御住居は本宅の北西に作られた（小松 2017）。本地点の北側は溶姫御住居と本宅が接続する部分にあたるため、当然大きな改築が必要になったと考えられる。斉泰は幼少の頃から能に親しんでおり（本編研究 9 参照）、この改築にもうなづける。

フェイズ 8（23 図）

慶応 4（1868）年の火事から昭和 2（1927）年の前田家駒場移転完了までの約 60 年間に相当する。

江戸幕府の瓦解、版籍奉還、その後の東京大学との土地交換による駒場移転という形で、約 300 年間の本郷邸の歴史は幕を閉じる。

【註】

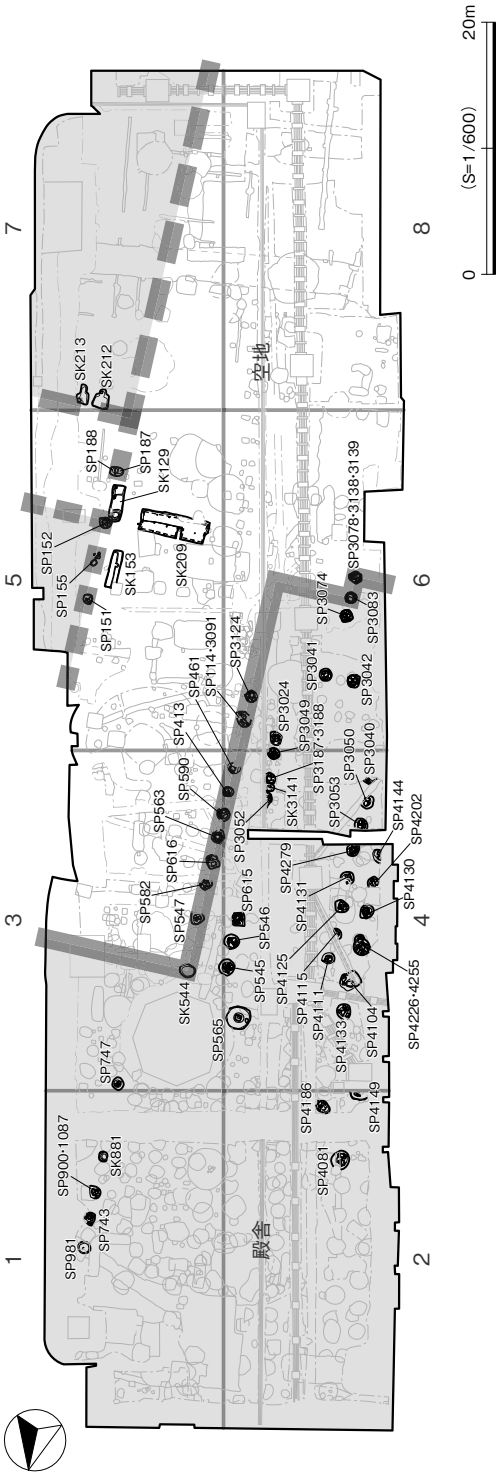
(1) Ⅳ次調査 -4000 番台の遺構 - は電子平板で測量を行っており、位置関係の精度が高い。トレース図は当調査室特任助教増田晴夫氏が CAD ソフトを用い 1 間 1800 ㎜として作成したものを、1 間 1919 ㎜（6 尺 3 寸）して遺構図と重ねた。

【引用・参考文献】

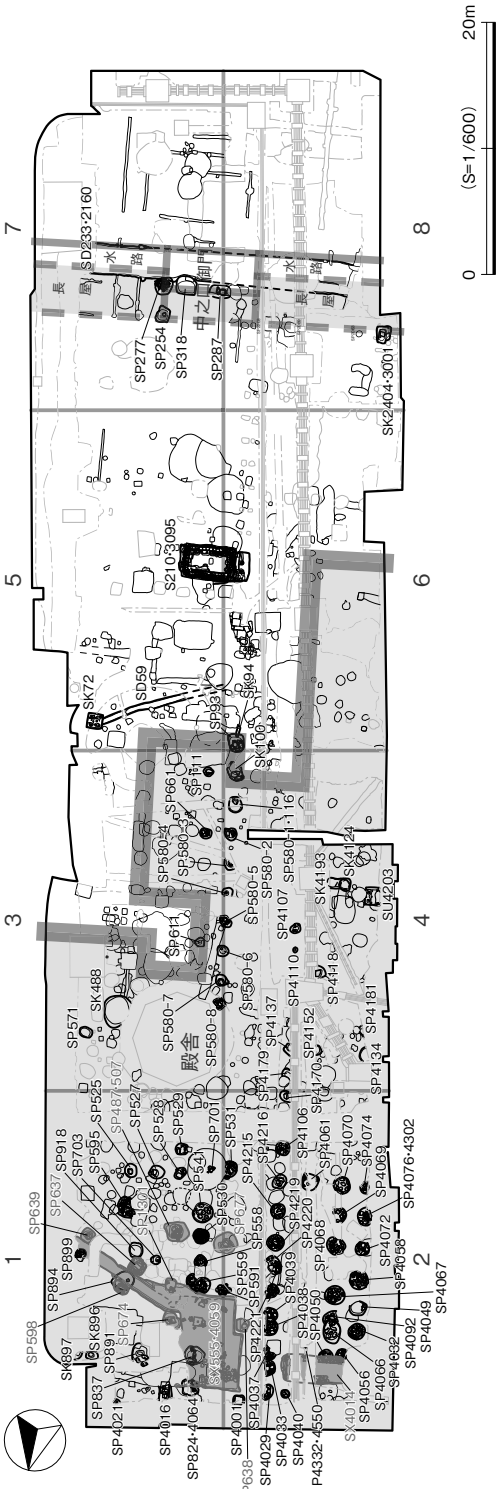
小松愛子 2017「溶姫の引移り婚礼」『赤門』東京大学総合研究博物館

東京大学埋蔵文化財調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』

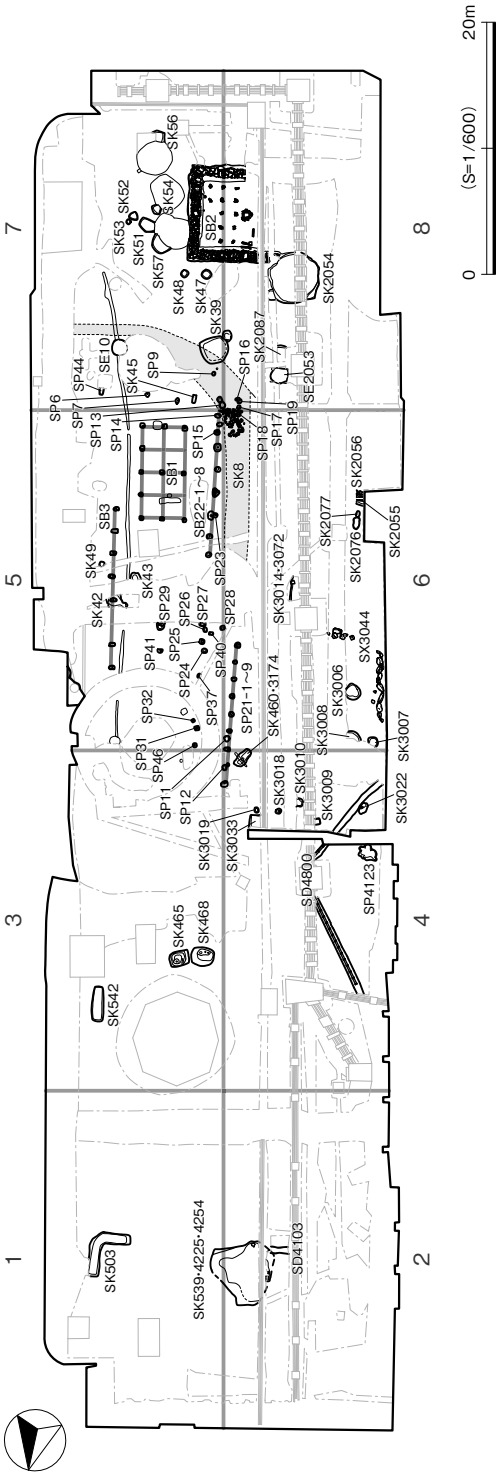
東京大学埋蔵文化財調査室 2019『東京大学本郷構内の遺跡 14
医学部教育研究棟地点　報告編』
堀内秀樹 2017「本郷邸の中に見える前田と徳川」『赤門－溶姫御殿から東京大学へ』堀内秀樹・西秋良宏編　東京大学総合研究博物館



21図　Ⅲ−1期遺構全体図　（C面・C〜D面、フェイズ6）



22図　Ⅲ−2期遺構全体図　（C面・C〜D面、フェイズ7）



23図　Ⅳ期遺構全体図　（A面･B面･A～B面、フェイズ8）

加賀藩本郷邸南域の地業について

－医学部教育研究棟地点および周辺の調査から－

堀内　秀樹

はじめに

加賀藩とその支藩である富山藩や大聖寺藩、水戸徳川家の江戸屋敷が存在した東京大学本郷構内は、本郷台地頂部から東側、旧石神井川へと続く緩斜面に位置している。

学内調査が開始された1984年以降、本郷構内で行った発掘調査は、立会調査、試掘調査を含めるとを2018年度末で270件を超え、調査面積はおおよそ11万7千㎡に達している。これらの成果から、台地東部から入り込んでいる小支谷や台地頂部から谷にいたる小段丘などが存在していることが明らかになっており、江戸時代には旧地形を改変しながら屋敷地として利用していたことが窺える。

本稿では､医学部教育研究棟地点(以下､｢医研｣と略す)の土地利用を明らかにする上で、本郷邸南域内外の地業について復元するものである。

１．医学部教育研究棟地点の地業

（１）調査地点に関連した藩邸土地利用と地業

本地点は、江戸時代には17世紀前半をのぞいてその全域が加賀藩本郷邸として利用され、少なくとも17世紀末以降は北側の大半を御殿空間[(1)]として機能していたことが、絵図面、史料などから知られる。また、絵図面の分析とこれまでの発掘調査の検証より、元禄16（1703）年の火災を契機に御殿空間内の建物が南通町軸（現在の春日通り）から中山道軸（現在の本郷通り）に変化していることが確認されている一方、詰人空間に建てられていた長屋建物は、幕末まで南通町軸[(2)]であったことが判っている。2図は､元禄年間に作成された｢御上屋敷御殿閣図｣（右、前田育徳会所蔵）と天保後期に作成された「江戸御上屋鋪惣御絵図」（左、金沢市立玉川図書館所蔵）をトレースしたものである。これを見比べると御殿空間内の建物軸が南通町軸から中山道軸に変化している様子が看取できる。

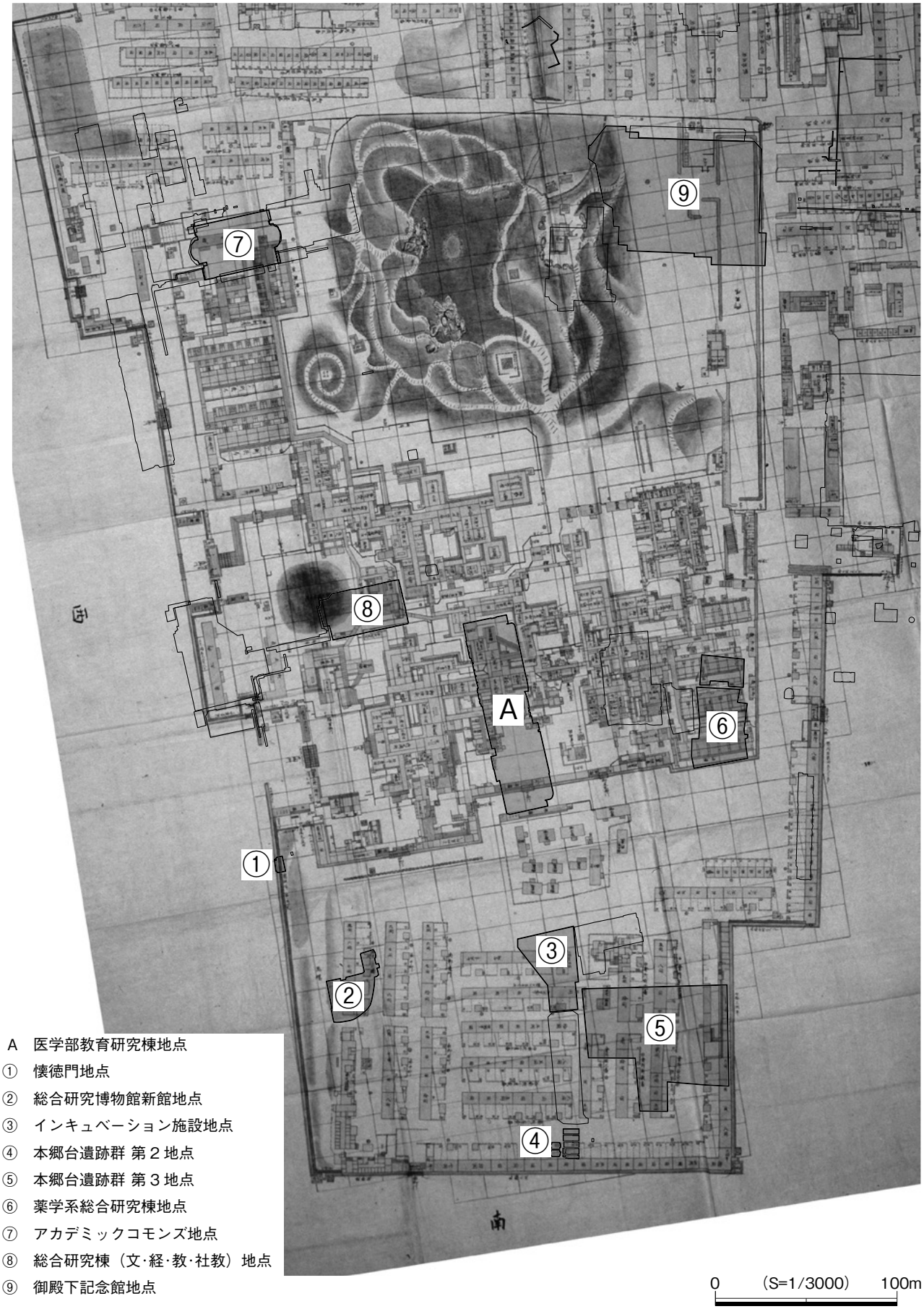
（２）確認された生活面の造成と屋敷内の土地利用（3図：報告編Ⅱ－5図を加筆再録）

医研の発掘調査では、広域に確認された生活面7面を上位面からＡ～Ｇ面と命名した。このうちＡ、Ｂ面が前田侯爵邸時代に比定される面、Ｃ～Ｆ面が近世加賀藩（南域の一部幕臣地）に伴う遺構面、Ｇ面が関東ローム上面で、縄文から近世までの遺構が確認されている。詳細は、報告編を参照されたいが（東京大学埋蔵文化財調査室2019a)、Ｄ面上部には数cm～十数cmの焼土層に覆われ、含まれている遺物の年代から天和２（1682）年の火災層と推定された。これから、Ｄ層以下が17世紀に比定される面で、Ｃ面は天和２年以降、幕末までの面と判断された。以下、場所ごとに詳細にみていくことにしたい。

①調査区南域（東大グリッド221ライン以南）**の変遷**

調査ではおおむね東大グリッド221ラインに沿って確認されたSD246・3100と225ラインに沿って確認されたSD236・2095・3021、SD235・2201間、幅約17mに小礫、砂利を非常に堅固にたたき締めた硬化面が広がっていた（3図⑦、⑧)。この硬化面は、調査当初は藩邸内のオープンエリアであると想定していたが、硬化面上には焼土層が広がっていたこと、焼土層に含まれていた遺物から天和２（1682）年に屋敷が全焼した八百屋お七の火災によるとしぼり込めたことで、それ以前に機能していた面であると判断された。また、この硬化面が南通町軸であること、SD246・3100が石組溝であり、境溝の可能性が考えられること、同溝廃絶以前の溝以北の遺構面が道路面より高かったことから、寛永江戸図に記載されている加賀藩邸と大森半七同心、高木筑後同心と書かれた屋敷地との境をなす道と推定された（以下、「道路Ｄ面」と称す)。したがって調査区南側SD235・2201、SD246･3100以南は、同心屋敷内であったと推定できる。当該地域は、Ｇ面（ローム面）が標高約22.0ｍで、以上に存在していたと思われる縄文時代以降の層は全て削平されていた（3図⑨)。この状況は調査区全域も同様であったが、これについては後述したい。

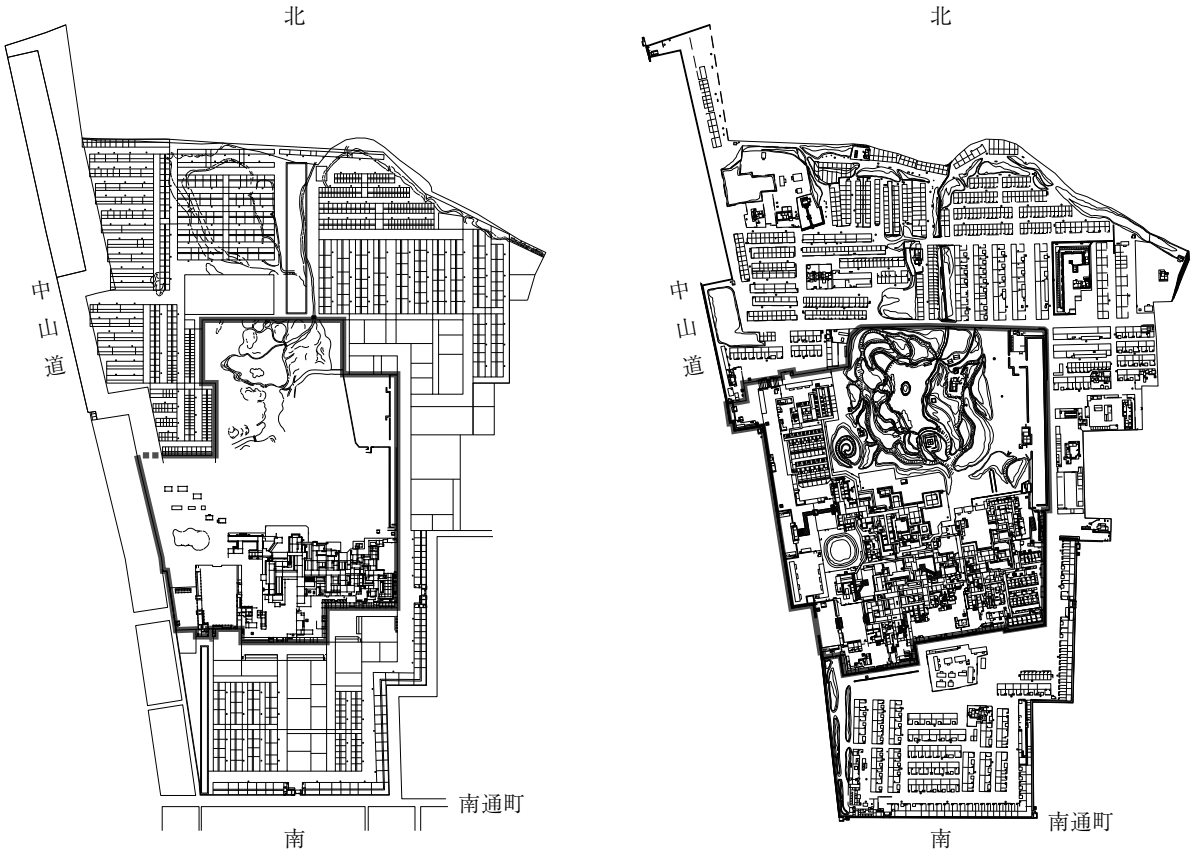
Ｇ面の上位層は、調査区南端229ライン以南では表土層、以北では近世の盛土層はなく、近代の盛土層であるＡ、Ｂ層が確認されている。近世層が確認されたのは、SD233･2160以北であった（3図⑦、⑧以北)。前述の道路Ｄ面下は、数cmの以下の厚さでそれ以北に堆積し



A　医学部教育研究棟地点
①　懐徳門地点
②　総合研究博物館新館地点
③　インキュベーション施設地点
④　本郷台遺跡群 第２地点
⑤　本郷台遺跡群 第３地点
⑥　薬学系総合研究棟地点
⑦　アカデミックコモンズ地点
⑧　総合研究棟（文･経･教･社教）地点
⑨　御殿下記念館地点

１図　医学部教育研究棟地点周辺の主な調査

「江戸御上屋敷絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）に加筆



２図　本郷邸の建物軸の変化

右：「江戸御上屋敷惣御絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）をトレース
左：「御上屋敷御殿閣図」（前田育徳会蔵）をトレース

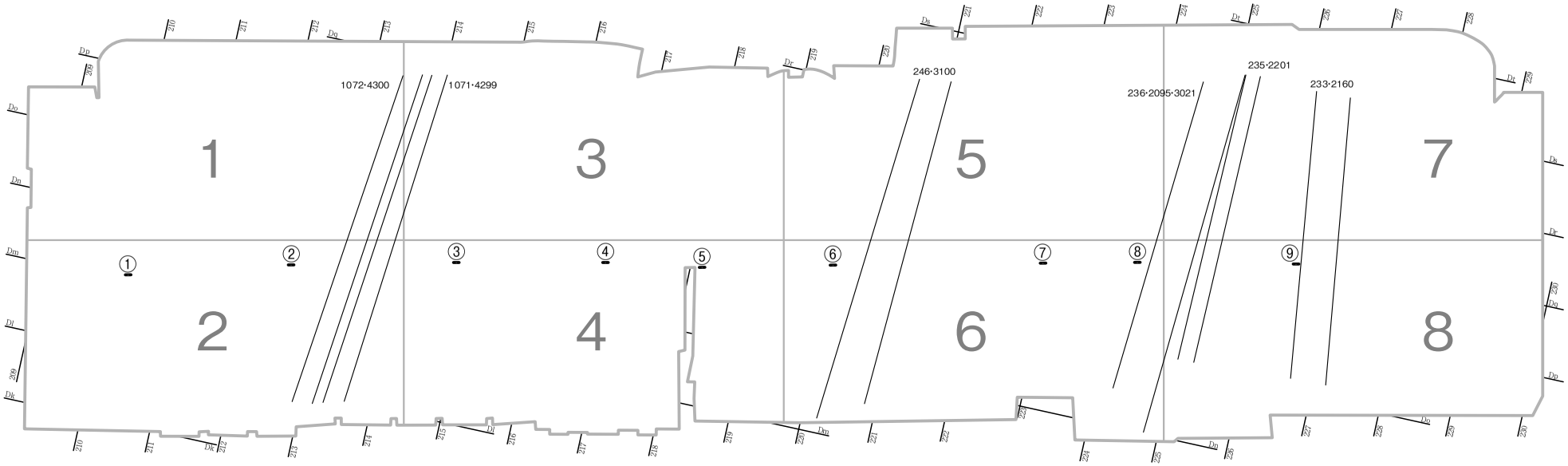
ていたＥ層あるいはＦ層に相当する時代の層が確認されたが、層厚などが明らかに藩邸内の状況とは異なっていることから、路面構築時の工事過程によるものの可能性が高い（E'、F' 層と記載）。また、道路Ｄ面上位には20cm 程度の厚さでＣ層が確認された。

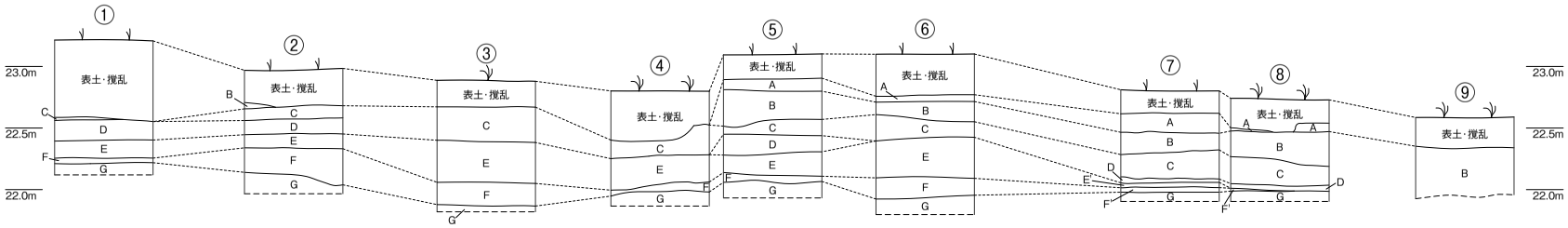
Ｃ層について触れてみたい。調査区南域におけるＣ層上面の標高は 22.2m 付近にあり、調査区北側のレベル（22.5 ～ 22.7m、３図①～③など）と比べると明らかに低い。調査区中央から北側では、Ｃ層上面から多くの建物礎石遺構や能舞台などが出土している。能舞台を例に削平状況を推定してみると、彦根城表御殿復元工事に伴う発掘調査では、ほぼ撹乱されていない能舞台下部に漆喰で構築された江戸期の枡状遺構が出土した。この遺構の形態は、谷口の能舞台Ｂ類（舞台の床下全体を数尺掘り下げたもの）に分類され（谷口 2017）、本地点から確認された SX555･4059 他の構造と近似している。彦根例では漆喰の桝状遺構上端が遺存しており、桝状遺構は坑底縁辺部との比高差は約 50cm､縁辺部から中央に向かって 15cm ほど凹んでいた。他方、SX555･4059 では 40cm 程度立ち上がっていたことから、能舞台下部の桝状遺構の規模が大きく異ならないと仮定すれば、近代以降の整地によりに削平を受けていると思われるものの、能舞台が機能していた時期の生活面の標高は、舞台が確認された 22.6m から若干の嵩上げが想定できるものの、それほど厚い土盛りは行ってないと思われる。

これらの点から、表御殿中央部である調査区北側から SD233･2160 間に同じレベルで広がっていたであろうＣ面およびＣ層はおそらく近代初期に南側を中心に削平されたと思われる。この点は、後述する中ノ口御門やそれに伴う長屋、排水溝などの遺構がほぼ確認できないことからも指摘できよう。当該域で、Ｃ層上面（Ｃ面）で確認された遺構は、きわめて少ない。これは、上記のようにＣ層が近代以降の削平によって遺存していなかったことに加えて、建物が密集していないオープンエリアであったことによると判断される。

②調査区中央から北域（東大グリッド 221 ライン以北）

当該域での基本層序は、上記で触れた南側と大きく異なっていた。Ｇ面（ローム上面）の上位には、黒褐色土を主体とするＦ層、褐色土を主体とするＥ層、焼土層が上面に被るＤ層、近世最上層のＣ層がほぼ全域から相応の厚さの盛土層が確認された他に（３図①～⑥）、小範囲な硬化面や石列などが少なからず確認され





基本土層

A	暗灰褐色砂	（粘性なし、しまり強）
B	褐色土	（焼土粒・ローム粒多含、ロームＢ含、円礫少含、粘性なし、しまり極強）
C	茶褐色土	（焼土粒含、少円礫・ローム粒少含、粘性弱、しまり強）
D	暗褐色砂礫	（粘性なし、しまり極強）
E	褐色土	（黒色土粒含、黄褐色砂少含、しまり強）
F	黒褐色土	（ローム粒少含、炭化物極少含、しまり強）

3図　基本層序

ている。F 層上面（F 面）から確認された遺構のうちSK4553 から出土したかわらけ裏面には「寛十四／丑九月廿日／申時／三度入」と刻書があり、寛永 14（1637）年に近い時期に同遺構の年代的下限が求められることから、F 層は藩邸が経営された初期段階から盛土され、F 面は生活面として利用していたと推定される。F 面のレベルは SD1071･4299、SD1072･4300 より北側ではやや高く、標高 22.3 ～ 22.4m 程度であるが、同溝以南は 22.1 ～ 22.2m になっている。この凹凸は E 層上面(E 面)にはほぼ解消され、おおむね標高 22.4 ～ 22.5m に平坦化される。それより上位の面は、近代以降の削平や盛土によって断定できないが、3 図①～③から C 面のレベルは 22.7m 付近であったと思われる。また、御殿空間として利用された D 面、C 面には殿舎のものと考えられる建物基礎遺構が重複して確認されていることから、詳細は研究 2 で触れるが、新営、増築、改築を繰り返し行ったと思われる。

２．天和２（1682）年以降の調査区付近の地業

（１）「御上屋敷御殿閣図」との対比（4 図）

天和 2 年以降の当該地の状況は、多くの絵図面によって知られる。天和 2 年から元禄 16（1703）年の状況は、元禄元（1688）年に作成された「武州本郷第図」とその後の「御上屋敷御殿閣図」（共に前田育徳会所蔵、後者は以降「殿閣図」と略す）の 2 枚が残るが、この 2 枚は多くの部分が一致していることから、時代が新しい殿閣図は「武州本郷第図」を基にして作ったと推定される。

殿閣図では、先述のように御殿空間内の建物が南通町軸をしており、本調査地点との対比では、調査区東側で御殿空間が大きく南側に張り出し、全域が御殿空間内に取り込まれている。詳細は、本研究編研究 2 を参照されたいが、調査区北側は御殿の玄関に近い表御殿と推定される殿舎が建ち並ぶエリアで、南側は殿舎の狭間のオープンエリアに該当する。南側では東に殿舎の一部が延びているが、該当する遺構は確認できない。天和の火災の焼土層に覆われていた SD246･3100 は、廃棄、埋め立てられ、その上部に C 層が盛土される。ただし、前述のように近代に C 層が削平されたために、この段階の生活面の標高は不明である。北域では SD1072･4300、SD1071・4299 以北のみに D 層が確認されて一段高い状況であった。近代以降の C 層の削平状況は不明確であ

４図　「御上屋敷御殿閣図」との対比

「御上屋敷御殿閣図」（前田育徳会蔵）をトレースに加筆

５図　薬学系総合研究棟地点　SB75

るものの、こうした段差は解消されたと推定している。殿閣図を詳細に観察しても段差と推定できる記載は確認できない。

殿閣図に描かれている元禄年間の当該地付近の状況であるが、SD1072･4300、付近で観察された天和２（1682）年と元禄16（1703）年の焼土層の標高は、おおむね22.5～22.6mであった。また、この遺構を切って構築されるSD4301の上部には、元禄16年の焼土層と宝永４（1707）年の富士山噴火による火山灰層が確認されており、その標高は、22.6mであった。両焼土層が、均質な層として広域に広がってなかったことで、焼土の特定ができない場所も多かったが、両焼土層の比高差は数～10cm程度であり、天和の火災後には、方つけ行為は行ったものの、調査区北域においては、大規模な盛土は行われなかったと判断される。一方、南側は道路Ｄ面の標高が22.1～22.2mなので、40cm程度の盛土を行ない、御殿を再建したと推定された。

この時期の御殿の状況が確認された他地点の調査は、本調査区の東約100mに位置する薬学系総合研究棟地点のみである。ここは殿閣図の記載、建物の構造から広式の局にあたる場所と判断できるエリアである。発掘調査では、元禄16（1703）年火災と宝永４（1707）年噴火にパックされた石組みの溝状遺構伴う長屋建物遺構（SB75）とその北側に展開する建物基礎遺構群が確認されている（５図）。これらの基礎遺構群は、本地点と同様に大形の自然石あるいは人工的な加工石と砂利とを用いて強固に転圧を加えた構造であったことで、元禄16年以前の御殿の建造物基礎と推定できるものであった。これと殿閣図と対比を行うと、基礎遺構は広式東側の局部分に、長屋建物遺構は局南側の御殿と詰人空間とを仕切る長屋に相当する位置であり、元禄期の御殿に伴う遺構群であることが確認された。これらの遺構確認レベルは、おおむね高い部分で標高20.5～20.6mであり、本調査区で確認された該期の遺構面より約2m程度低い。これから本郷台地頂部から東に緩斜面に位置する本郷邸内の御殿が、元禄期にはレベル差をもって構築されていたことになる。

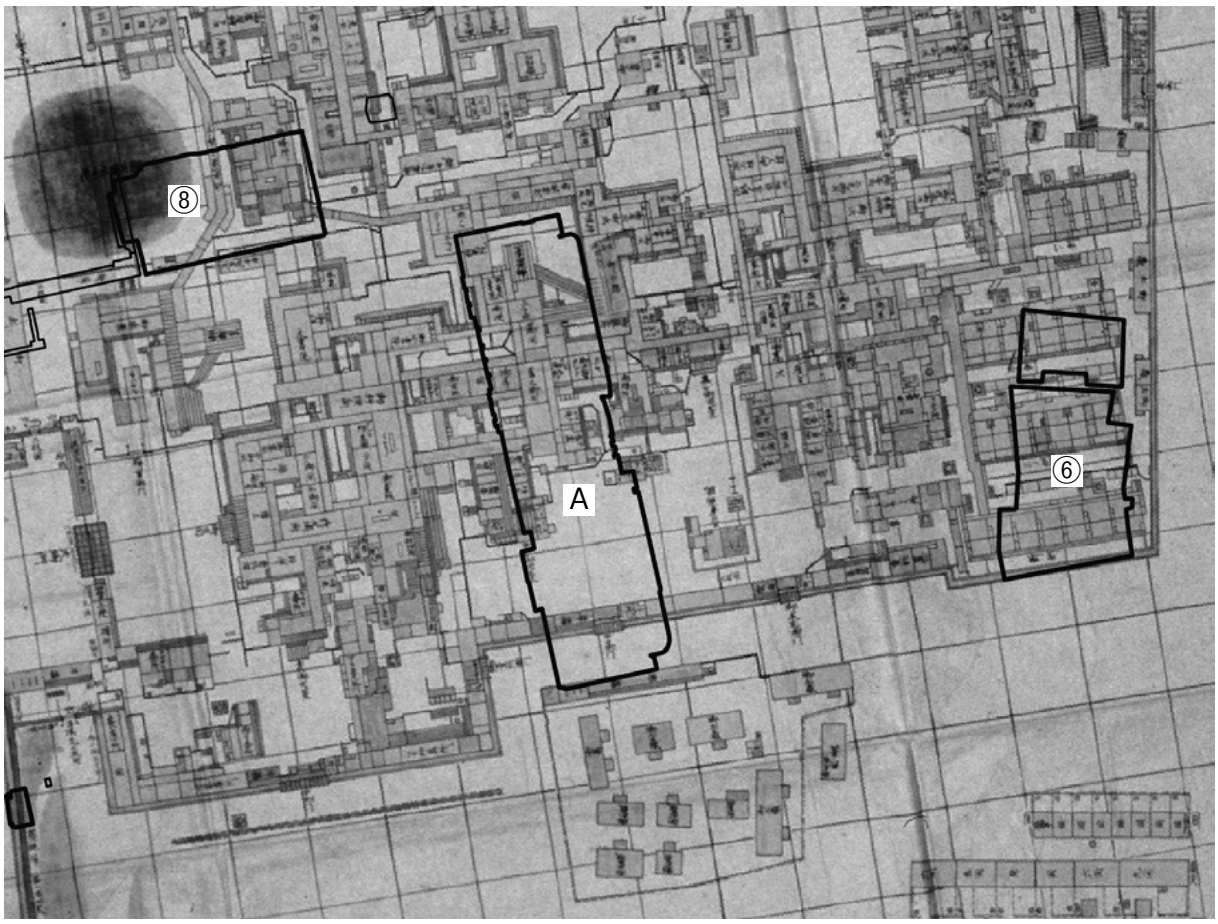
（２）「江戸御上屋敷絵図」との対比（６図）

本郷邸の屋敷図は、19世紀の状況が描かれているものが最も多い。この中で正確に描かれているものの一枚が、「江戸御上屋敷絵図」である。これは本郷邸の建物

変遷から溶姫入輿以降の年代が推定されているものである。

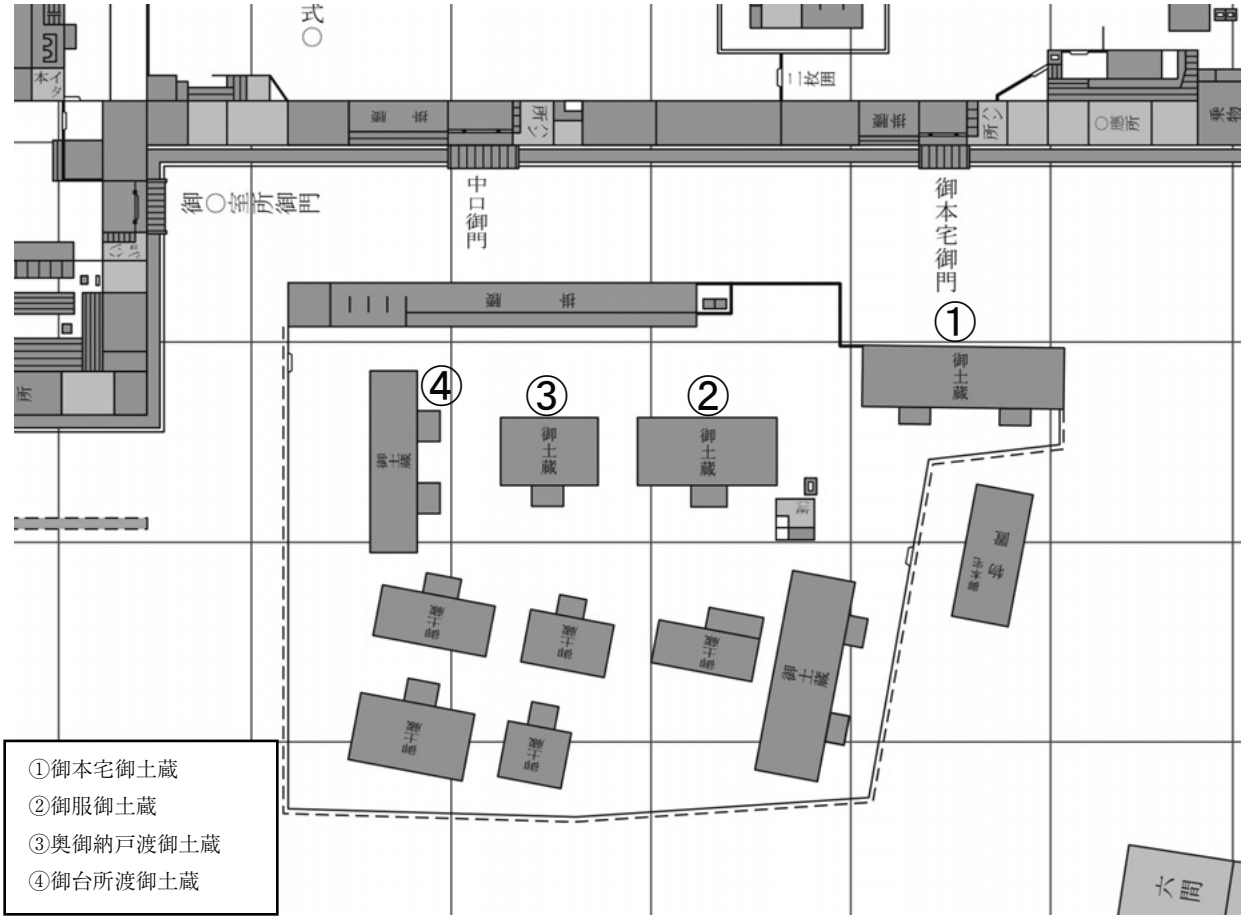
調査区との対比では、調査区南域において東西方向に横切るように御殿空間と詰人空間との境が位置するが、当該地には中ノ口御門とそれに伴う長屋で仕切られ、長屋塀として機能していたことが看取できる。また、同時期に描かれた「江戸屋敷絵図」（前田育徳会所蔵）には長屋建物北（御殿側）、南（詰人側）両側沿って「溝」と書かれた石組の排水溝と思われる構造物が確認される。中ノ口御門内外の溝には、絵図に描かれた色調から内側には木質、外側には石製の蓋が被せられていたと思われる。絵図面にはこのように比較的認識しやすい構造物が描かれているのも関わらず、調査では長屋建物、石組溝などが確認されていない。位置的には東大グリッド225 ～ 227 ライン付近であると推定されるが、この位置にある中山道軸の溝状遺構は、SD233･2160 のみで、これが石組溝などの施設に相当すると思われるが、同遺構の確認面は約 22.0m で、推定される当時の生活面のレベル差から考えると、近代以降の削平は 60 ～ 70cm くらいであろうと思われる。

先述した薬学系総合研究棟地点（6 図⑥）では、近代以降の撹乱、削平によって 18 世紀以降の遺跡の遺存状況が悪かったが、1 次調査北壁面での土層では、江戸時代最終面（C 面）の標高は 21.6m 程度であり、元禄 16 年の火災～幕末までの間に 1m 程度の盛土が行われている。薬学系総合研究棟地点 2 次調査では、最も新しい中山道軸を持つ建物基礎遺構や地下室は、前述した元禄火災に伴う焼土と宝永噴火の火山灰が確認された面の直上から確認されているが、SB100 などの建物基礎遺構の状況は、坑底付近の根固めの根石と思われる円礫や破砕礫が食い込んだ状態で検出しているのみで、深さも 20cm 前後しか遺存していなかった。医研で出土した建物基礎遺構は深いものでも 80cm 前後であったことから、薬学系総合研究棟地点の 18 世紀以降の遺構面は、50cm 程度は削平されていると思われる。これらから、医研北側では、前述のように元禄期以降の生活面はおおむね 10cm 程度の嵩上げを行っていたと考えられるが、薬学系総合研究棟地点では 1m 程度の嵩上げを行い、双方のレベル差は少なくなったものの、幕末期においても 1m 程度の比高差は存在したと判断できる。



６図　「江戸御上屋敷絵図」との対比

「江戸御上屋敷絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）をトレースにしたものに加筆



７図　中ノ口御門外「御土蔵屋敷」の建物配置

「江戸御上屋敷絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）をトレースの上一部加筆

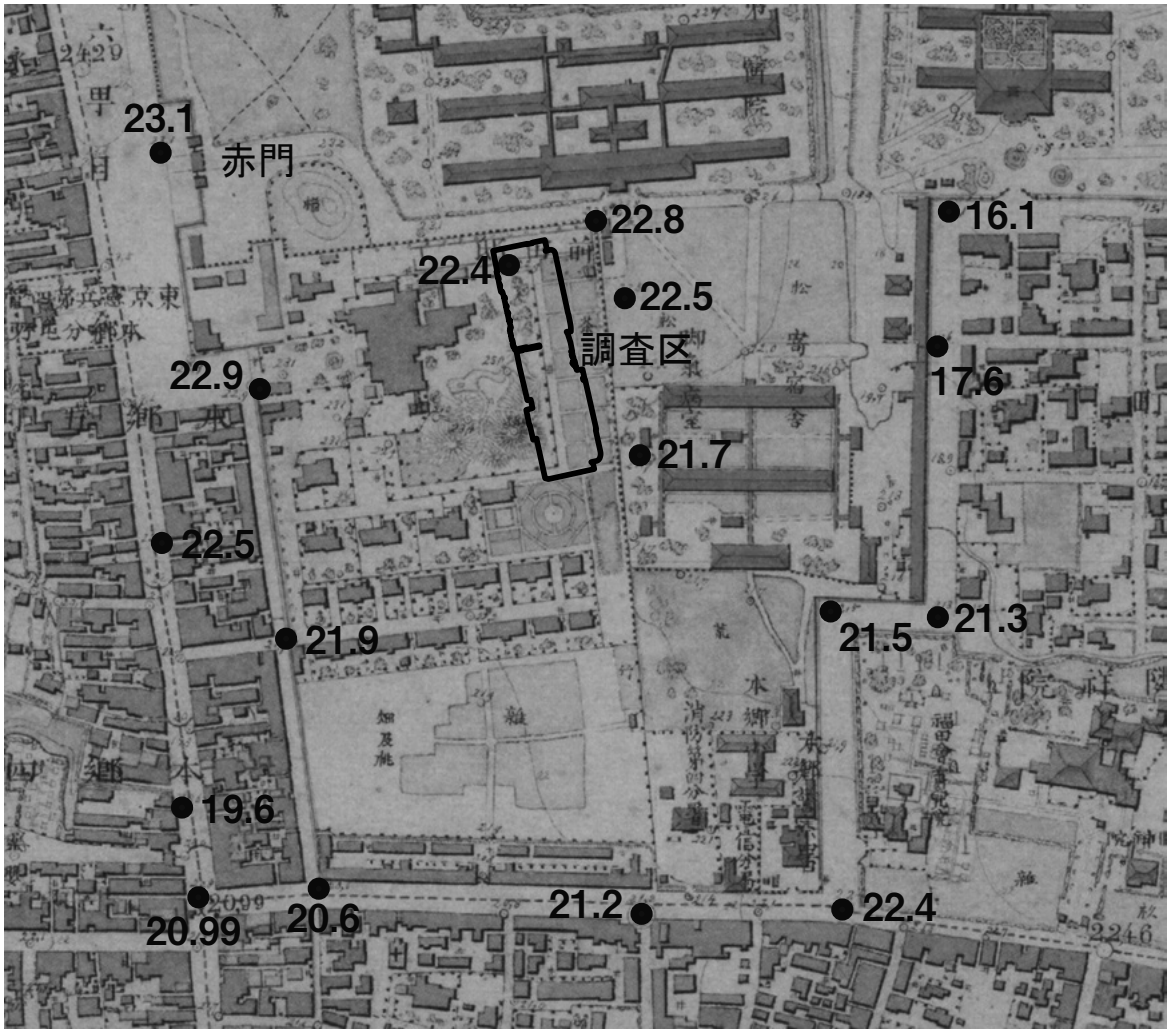
一方、前述の「江戸屋敷絵図」を見ると、医研がある表御殿と薬学系総合研究棟地点のある広式（奥御殿）との間には、北から「御廊下」、「御鈴廊下」、「引出橋」と書かれた３本の廊下で繋がっている。 絵図に描かれた彩色の違いからこれらの廊下は畳敷であったと思われるが、最も北方に位置する「御廊下」にはごく薄くではあるが、廊下を横切るように何本かの筋状の線が描かれており、滑り止めのようなものか、あるいは小さな段のようなものか、このあたりの構造は不明確ではあるものの、表御殿と広式にはレベル差があった可能性が考えられる。

次に、中ノ口御門以南の状況であるが、門外（南側）には塀に囲まれた土蔵群があり、中ノ口御門同じ中山道軸を持つ腰掛が塀の一部として描かれている（7図）。これまでの屋敷絵図や発掘調査成果から、元禄 16（1703）年以降の御殿の建物は、南通町軸から中山道軸に変わっていることが確認されているが、中ノ口御門外にあっても、「御土蔵屋敷」と書かれた塀に囲まれた 11 棟の土蔵のうち、「御本宅御土蔵」、「御服御土蔵」、「奥御納戸渡御土蔵」、「御台所渡御土蔵」と書かれた北側４棟および北側の腰掛は、中山道軸で建てられていることが看取される。

発掘調査では、「御土蔵屋敷」北端にあった「腰掛」がかかる位置に調査区南端－おおむね 229 ライン－に該当すると推定されるが、当該域にこれに対応する明確な遺構は確認できなかった。先述のように中ノ口御門に対応する遺構は確認されていないが、近代以降の削平によるものと思われる。「江戸屋敷絵図」では、門、長屋塀を挟んで南北に２本の溝が確認できるが、対応すると思われる遺構は SD233･2160 のみである。前述のように同溝は位置的に南側門外の溝に対応すると推定されるが、最大深度が確認面のローム面（G 面）以下 30cm 程度しかなく、長屋塀沿いの側溝は浅いものであったと推定される。また、門内に存在していた溝は削平によって全て失われてしまったと思われる。

（３）『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』との対比

明治 16（1883）年５月に測量した陸軍参謀本部東京図測量原図の掲載されている調査地点は、前田侯爵邸北東部、西側に本邸に付属する庭園の一部と大きく占めるのは道路を挟んだ東側に「茶」と書かれた畑と思われるエリア付近に位置している。また、藩邸南部周囲の標高は、赤門前 23.1m、中山道と日陰町通り角大御門前 22.9m、



８図　藩邸南域周辺の標高　　（枠内は医学部教育研究棟地点）

「参謀本部陸軍部測量局 五千分一東京図測量原図」を一部加筆

日陰町通り本郷４丁目と５丁目の仲通り角 21.9m、日陰町通りと南通町（藩邸南西隅）角 20.6m、南通町現在の東京大学本郷キャンパス南東角 21.2m、南通町現在の本郷警察（藩邸南東隅、隣祥院方の辻番所）角 22.4m、現在の龍岡門前 21.5m と読みとれる（8 図）。

残念ながら前田侯爵邸内はあまり測量点がないが、本地点北端周辺で 22.4m と書かれており、調査で得られたＣ面で最高レベル（22.6m）と大きな差異はない。一方、邸外帝国大学側にはある程度測点が記されているが、これを見ると調査区北側（おおむね 210 ラインくらい）で 22.8m、中央（219 ラインくらい）で 22.5m、南端脚気病室脇（228 ラインくらい）で 21.7m である。侯爵邸内も同レベルであるかは不明であるが、少なくとも邸外においては、北から南へ緩やかに傾斜しており、上記 22.6m 程度と推定される江戸時代の御殿空間の生活面の南側を大きく削平し、中ノ口御門から東西に続く御殿と詰人空間境に存在した段差を削り取っていると判断できる。侯爵邸の建物配置は、明治 35 年以前と判断される「本郷御邸惣絵図」（前田育徳会所蔵）では、西側の庭園はほぼ同じ位置に確認できるものの、東側には何も描かれておらず、茶畑があったかは不明である。さらに懐徳館が描かれている大正元（1912）年の「本郷惣絵図」のうち「本郷邸本邸平面図」（前田育徳会所蔵）では、北側（おおむね 213 ライン以北）に使用人と思われる住居が建てられる地域に該当するが、西側庭園と東側描かれていない部分を含んでいる状況に変化はない。調査成果では調査区中央以南（3 図⑥以南）に近代の盛土層が厚く確認され、表土の標高が南側に緩やかに下がっていくが、こうした地業は近代初頭に行ったと推定され、昭和３年に大学に編入されて以降も基本的には維持されていると考えられる。

３．本地点周囲の地形と行われた地業

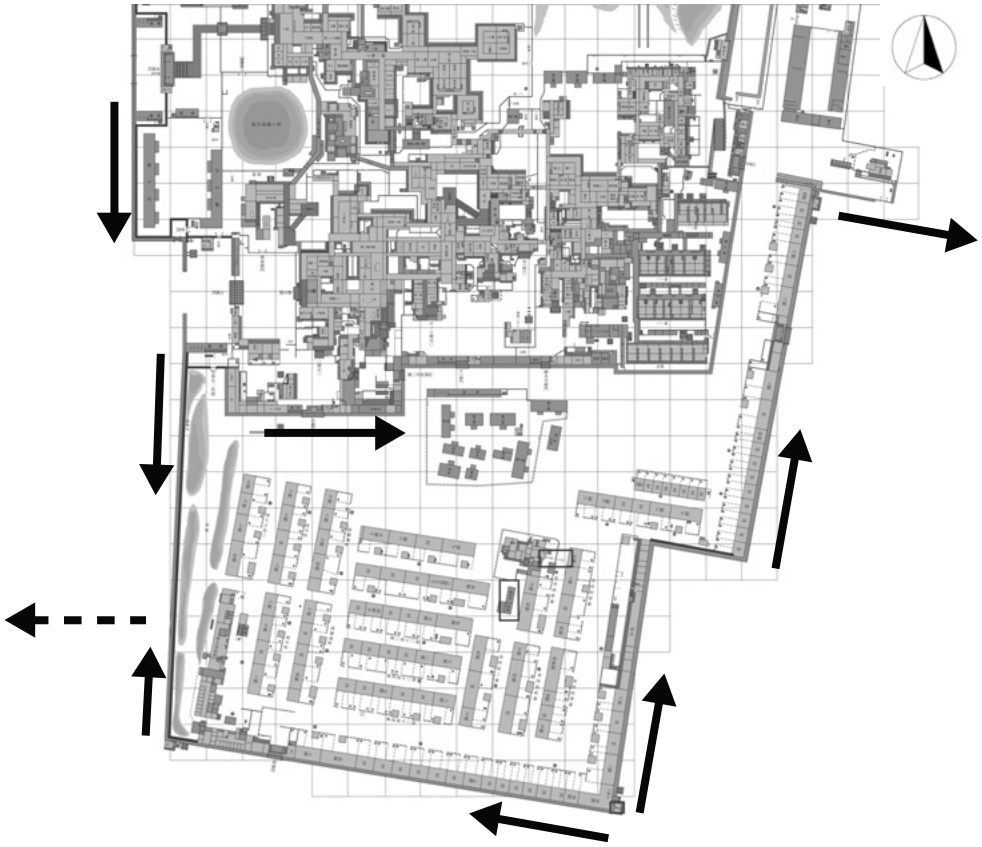
（１）調査区以南

前田育徳会所蔵天保 13（1842）年の「御上屋鋪御地

面之絵図」に書かれている覚えでは、加賀藩が本郷邸として拝領した面積は 11 万 2708 坪 6 分 3 厘（362,590 ㎡）と記録されており、富山藩邸、大聖寺藩邸を含んだ屋敷地として拝領している。これまでの調査によって屋敷地は、本郷台地頂部から旧石神井川に向かって落ちる東斜面に位置しているが、旧地形は石神井川から伸びる支谷や埋没谷によって、複雑な地形を呈していたことが確認されている。加賀藩は、屋敷を拝領した元和期以降に地形を利用あるいは改変して屋敷地として利用してきたと思われる。

本郷邸南域では、先述のように明治 16（1883）年段階では、比較的大きな比高差が確認される。一方、殿閣図、「江戸御上屋敷絵図」には、共に大御門から日陰町通りを南下、南通町を東折、隣祥院方の辻番所を北上、東門先大聖寺藩邸境まで屋敷境の外周には水路が描かれており、藩邸南域の雨水や生活雑排水が流れていたと考えられる。当時は、自然流下であることから排水溝の坑底のレベルは下がるはずであるが、藩邸南側の路面レベルは、南西端が 20.6m、南東端は 22.4m で 1.8m も東側が高い。さらに詳細に見ると南西端から、現在の本郷消防署西端にあたる場所は、21.2m と書かれており、それ以西の標高差（0.2m）と対比すると東側は急激に高くなっている（比高差 1.2m）ことが判る。現況においてもこの斜度の相違はほぼ同様である。また、藩邸南東端から北方へは緩やかに降っており、現在、龍岡門がある角が 21.5m、東に折れて次の角が 21.3m、東御長屋沿いに北に折れて、無縁坂へと続く角は 16.1m と急激に落ちている。これらから藩邸南域外周で最も標高が高い場所は、南東端である。ここから北方へは加賀藩邸東側、大聖寺藩邸南側を不忍池方面へ降ると考えられる。また、西側の流路方向では、仮に大御門→日陰町通（南へ）→南通町（東へ）→とすると、最も高い藩邸南東端では 2m 近い深さが必要になることから、西への傾斜が自然であると考えられる。

『新撰東京名所図会』には、「勧業場本郷館の辺りは、地層やや低く、弓形のへこみを印す。其くぼめる所、一条の小渠、上に橋を架し，別れの橋といひきとぞ」（東洋堂 1907）とあり、また、加賀藩邸から流路があり菊坂の谷への流れがあり、中山道を横断する橋が架かっていたと記されている。この地形は現在でも確認でき、本郷三丁目の交差点から北側菊坂に降りていく辻付近が低くなっている。一方、この記載が正しいのであれば、当



9 図　藩邸南域の流水方向

「江戸御上屋敷絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）をトレースの上一部加筆

該地付近において中山道を横切る流路を作るためには、本郷四丁目町屋を横断する必要がある。中山道については、文化４（1807）年刊行の街道やその周囲の状況を詳細に記載した「中山道分間延絵図」がある。これには街道を横断する石橋などが多く描かれているが、本郷町屋と書かれている付近に橋は存在しない。また、加賀藩本郷邸や本郷町屋付近を描いた絵図の中にも、日陰町通や本郷四丁目町屋を横断するような施設は確認できない。ただし、藩邸南域の地形を勘案すると、藩邸南西域からの排水口であった可能性はあると思われる（9 図破線矢印）。

以下、各調査地点の状況について略述したい（1 図）

①懐徳門地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2019b）

懐徳門地点（本 82）は、本地点の南西、藩邸南西側に位置し､大御門から南に続く日陰町通りに面している。調査区は、江戸時代初期に幕臣同心屋敷地であったが、明暦の大火（1657 年）以降に本郷邸（詰人空間に組み込まれる。同心屋敷期から藩邸期幕末までに屋敷境の構造の変化に伴って、最下層のローム面を含めて 4 枚の生活面が確認され、近世末の面は、ローム面から約 30cm 盛土されていることが確認された。ただし、懐徳門地点のある藩邸側は南馬場と称される馬場が藩邸南西端まで続いており、馬場との間が嵩上げされているのに応じて生活面の標高が上がっているかは判断できない。最下面（ローム面）は約 22.1m であり、いわゆるローム漸移層に比定できる。

②総合研究博物館新館地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2012）

総合研究棟地点（本 20）は、本地点の南西、藩邸南西側に位置し、江戸時代初期には幕臣同心屋敷地であったが、明暦の大火（1657 年）以降に本郷邸（詰人空間）に組み込まれる。江戸時代の生活面は 2 枚確認されているが、上位面はローム面直上に数センチ程度の厚さで、調査区南域を中心に広がっていた。下位面は、ローム面で約 21.1m で確認され、いわゆるローム漸移層に比定できる。明確に下位面から切り込まれている遺構は、SD100、SD120 など 17 世紀前半の遺物が出土し、遺構の主軸が中山道軸を有するもので、これらは加賀藩邸以前に比定できると考えている。一方、上位面の遺構は南通町軸を持つ 17 世紀後半以降の遺物が出土する加賀藩邸のものと推定され、江戸時代を通じて本地点では、ほぼ同じ面を生活面として利用しており、面の嵩上げを行った痕跡は窺えなかった。絵図面との対比では、最も古い「武州本郷第図」以降、ほぼ変化なく西側を馬場、東側を長屋が建ち並ぶ詰人空間として利用していたことが判っている。

③インキュベーション施設（INC）地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2004）

インキュベーション施設地点（本 68、以下「INC 地点」と略す）は、本地点の南、藩邸南側に位置し、総合研究博物館地点同様 、江戸時代初期には幕臣同心屋敷地であったが、明暦の大火（1657 年）以降に本郷邸に組み込まれる。発掘調査では、6 枚の生活面が確認された。本報告が未刊で詳細に言及できないが、ここにおいてもローム層以上の自然堆積層は削平され、最終確認面のローム層上面の標高は 21.6m で、天和 2（1682）年もしくは元禄 16（1703）年の焼土層で覆われていた第 4 面はそこから数 cm 高いだけであった。

また、調査区中央付近で近代に比定される 1 面から確認された基礎遺構 SB201 は、遺構の規模や位置から大正元（1912）年に描かれた「本郷惣絵図」のうち「本郷邸本邸平面図」（前田育徳会所蔵）の中で前田侯爵邸東端の「神殿」と書かれた建物に該当すると考えられ、この遺構の標高は、22.3m 程度である。

④本郷台遺跡群第３地点（大成エンジニアリング株式会社他 2017）

本郷台遺跡群第 3 地点は、本地点の南方、本郷邸の南側の屋敷境付近に位置し、江戸時代初期には幕臣同心屋敷地であったが､明暦の大火（1657 年）以降に本郷邸（詰人空間）に組み込まれる。調査では近世の生活面が 4 枚確認されており、自然堆積層はローム漸移層の上に一部縄文時代の包含層の存在が報告されている。報文によると最上位層（第 1 面）は､18 世紀以降に相当すると書かれ、標高は調査区北端で 20.7m である。その下第 2 面は 17 世紀後葉から 18 世紀初頭で標高 20.6m、第 3 面は 17 世紀前葉から後葉で標高 20.5m、第 4 面（自然堆積層上面）は 17 世紀初頭で 20.3m であった。上記歴史的変遷と照射すると、3 面以降が加賀藩邸と推定され、おそらく第 2 面が天和 2（1682）年の火災まで､第 3 面が元禄 16（1703）年の火災まで､第 4 面がそれ以降と生活面と推定される。

当該地は､「江戸御上屋敷絵図」では南御長屋と書かれており、長屋塀が藩邸南縁に続いていた場所である。本調査地点の南御長屋は、元禄 16 年の火災後、屋敷が全焼する享保 15（1730）年の火災では焼け残ったことが確認されており（小松 2017）、元禄の火災以降幕末までに大きな改変がなされていないことが推定されるが、これは第 4 面の状況と合致している [(3)]。また、殿閣図と「江戸御上屋敷絵図」の南御長屋の構造が大きく異なっていることから、元禄 16 年の火災被災後に新規に建て替えが行われたと考えられ、第 3 面から第 4 面への

調査成果と齟齬はない。調査成果から当該地の生活面は、加賀藩邸に組み込まれた当初（20.5m）から幕末まで約20cmの嵩上げが行われたに過ぎない。

⑤本郷台遺跡群第２地点（文京区教育委員会 2011）

本郷台遺跡群第２地点は、本地点の南東方、本郷邸南東隅からやや北方（現在の文京総合体育館）に位置し、江戸時代初期には幕臣同心屋敷地であったが、明暦の大火（1657年）以降に本郷邸に組み込まれる。本文では、部分的に近世の盛土の可能性がある層が確認されたものの明確ではなく、武蔵野標準層位Ⅲ層上面で多くの遺構が確認されている。遺構確認面の標高は、約20.5mである。

当該地は、加賀藩時代には天和２（1682）年以降幕末まで、基本的に詰人空間にあたるが、元禄15（1702）年に将軍徳川綱吉の御成御殿が建てられた場所であった。調査では御成御殿に関わると思われる建物の痕跡が確認できなかったことから、あるいはそれ以降に大きな削平が行われた可能性も考えられるが、調査で確認された４号建物は「武州本郷第図」（前田育徳会蔵）の長屋に、１号建物は文久３（1863）年以降に描かれた「大鋸コレクション江戸屋敷長屋絵図」（石川県立歴史博物館蔵）の会所南横三番長屋に合致すると推定され、これら遺構の遺存状況から、17世紀末以降大きく地面を削平したとは考えにくい。

⑥薬学系総合研究棟地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2004、2006）

薬学系総合研究棟地点（本66）は、本調査区の東側、少なくとも武州本郷第図が描かれる元禄期以降では、加賀藩邸御殿空間に位置している。薬学系総合研究棟地点は、旧石神井川へと下る小支谷が東西方向に入っており、ローム面の標高は15.0m、藩邸最下面が17.5mであることから、藩邸初期の段階に谷を埋め立て、さらに御殿空間として利用が確認される元禄期には厚く盛土を行っていたことが確認できる。絵図面から元禄期以降幕末まで御殿空間の広式にあたる部分を専有していたことが看取できる。

土地利用は先述したので、各時代の標高のみを再述すると2004年度調査（６図⑥北側）において江戸時代の最下面が18.0m、元禄16年の焼土と宝永４年の火山灰面が20.5～20.6m、2002年度調査（６図⑥南側）の藩邸最上面は21.6mであった。ただし、盛土された面の標高及び傾斜に関しては、例えば医学部附属病院中央診療棟地点（本４、東京大学遺跡調査室 1990a）、同入院棟A地点（本23、東京大学埋蔵文化財調査室 2016）確認された遺構面Ⅰ-3期（成瀬 2016）段階で天和２（1682）年以前に黒田門邸と大聖寺藩邸との境道脇の側溝であった12号組石は、地形的に南から北へ流れる傾斜がついていたと思われるが、薬学系総合研究棟地点へと続く谷がかかっていたことで、「後世の土圧のため、沢の中央部にあたるHライン付近がもっとも低い」（東京大学遺跡調査室 1990a）と土圧による沈下が確認されている。このあたりは十分注意する必要があろう。

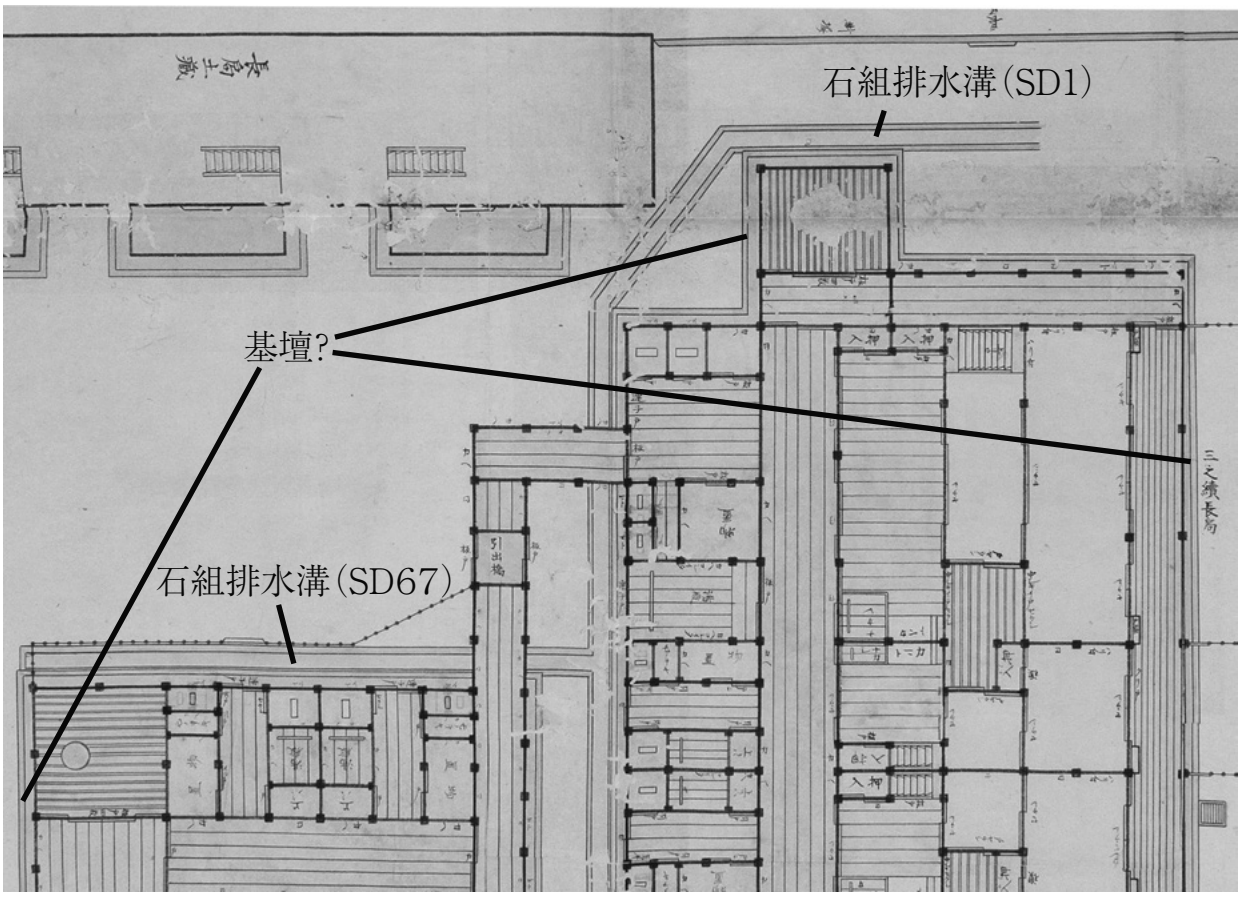
（２）調査区以北

⑦アカデミックコモンズ地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2017）

アカデミックコモンズ地点（本146･168）は、本地点の北西方に位置している。元和２～３（1616～17）年の加賀藩拝領後は、詰人空間であったが、文政10（1827）年以降溶姫御殿の長局部分であったことが絵図などにより確認される。本報告が刊行していないので、最終的な成果ではないが、調査では江戸時代に２枚の生活面が確認され、上位の溶姫御殿に伴う面からは、長局に伴う石組溝、便所、井戸などの遺構が絵図面に対応する形で確認された。このうちもっとも遺存状況の良好な便所遺構SK204、SK672の切り込み面の標高は22.6mであった。同遺構には焼土を多量に含む覆土が確認されており、慶応４（1868）年の火災で廃棄したと判断できた。本来この周辺には御殿基礎が密に確認できるはずであるが、全く確認できなかったことから、相当の厚さの土が近代以降に削平されていると推定される。溶姫御殿の基礎の全容は明確ではないが、アカデミックコモンズ地点が長局であることで、御殿主体部より簡易な基礎構造と仮定すると、溶姫御殿縁辺部にあたる総合研究棟（文･経･教･社研）地点（本54）で確認された、やや大形の石を数段重ねて根石にする医研などの表御殿と比較するとやや簡易な構造であることが想定され、幕末の生活面から50cm～1m程度の削平が考えられる。

下位面（B面）は、調査区北側を中心に確認されたが、その他のエリアはローム面が遺構切り込み面であった。ローム面は上位面より10～20cm程度レベルであり、当該地点の盛土は、溶姫御殿に伴う改変が大きかったと判断される。

「江戸屋敷絵図」（前田育徳会所蔵）は、非常に詳細に藩邸の様子が描かれており、アカデミックコモンズ地点が該当する「三之側長局」や「三之続長局」周囲、「長局土蔵」の入口部分には灰色の二重線が描かれている（10図）。また、SD1、SD67として調査を行った石組排水溝（11図）も描かれており、これは平行した二重線と挟まれが部分が灰色に着色されている。したがってこの平行



10 図　溶姫御殿の長局部分

「御住居部屋方并六丁目御物見」（金沢市立玉川図書館蔵「江戸屋敷総図」）を一部抜粋の上加筆

11 図　アカデミックコモンズ地点 SD1 石組排水路

二重線は石組排水路であることが判るが、前者の二重線は建物周りを巡っており、着色から建物の石組の基壇であろうと推定される。この二重線は図示した部分のみならず、表御殿、溶姫御殿の主要殿舎外周に確認でき、主要な殿舎には石を外縁部に用いた基壇が設けられていたことが判る。ただし、こうした基壇は発掘調査では本郷構内やその他の遺跡からもほとんど確認されていない。おそらく火災などによって被災した御殿再建の際の平坦化に伴なう石の再利用と地業によって削平されたと推定される。

⑧総合研究棟（文・経・教・社研）地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2002、堀内 2017）

総合研究棟（文・経・教・社教）地点（本 54）は、本地点の西方に位置している。調査区は全体が少なくとも元禄 16（1703）年以降は御殿空間内である。近世の生活面は 2 枚確認され、上位面（A 面）が、文政 10（1827）年に建てられた溶姫御殿に伴う面で、下位面（B 面）がローム面である。上位面の標高は 22.6m であり、下位面の約 30cm 上であった。上位面から確認されている溶姫御殿の基礎遺構や石積みの地下室（SK107）などがあり、特に SK107 は多量の焼土が覆土に含まれており、出土遺物や溶姫御殿の火災記録から慶応 4（1868）年の火災であると判断された。ただしこれらの遺構は、検出状況から遺構上部が数十 cm 程度削平されていると思われ、上位面の生活面の標高は 23.0m 前後と考えられる。

⑨御殿下記念館地点（東京大学埋蔵文化財調査室 1990b）

御殿下記念館地点（本 3）は、本地点の北東側に位置している。調査では、ローム面を入れて 9 段階の遺構面が確認された。江戸時代の 1650 年頃が下限の最下面（Ⅰ期、ローム面）の標高は約 16.0m、元禄 16（1703）年の火災面（Ⅲ期）が約 16.3 ～ 16.6m、厩面が約 16.8m、梅之御殿造営面が約 17.2m、江戸時代最上面が約 17.3m であった。文献から御殿下記念館地点の土地利用は、時代によって大きく変化しており、文献、絵図から元禄以前が上級家臣や役場、18 世紀には厩、享和 2（1802）年～文政 8（1825）年までは梅之御殿、その後幕末までは馬場として利用されていることが判っている。

小結－御殿と詰人空間の地業－

こうして各地点の地形、地業の状況を再検討すると、いくつかの特徴が看取できる。

1 点目は、全ての調査地点とも関東ローム層上位面（ローム漸移層から武蔵野標準層位Ⅲ層）程度まで削平されている点である。

2 点目は、御殿域内に多くの盛土が施されている点である。おそらく御殿造営に適した面を構築する為であろう。17 世紀から御殿であった医研地点が 5 面、⑥薬学系総合研究棟地点が 4 面、⑨御殿下記念館地点が 9 面の遺構面が確認されている一方、一時的に御殿になった⑦アカデミックコモンズ地点は 3 面、⑧総合研究棟（文･経･教・社教）地点は 2 面と多くの地業は御殿の変遷によってなされている状況が窺える。

3 点目は、御殿内の高低差が少なからず存在している点である。幕末の御殿内における標高は、医研が 22.7 ～ 22.8m 程度、表門に近い西側の⑧総合研究棟（文･経･教・社教）地点では 23.0m 前後、北側の⑦アカデミックコモンズ地点では 23m 前半、北東側の御殿下記念館地点では 17.3m、東側の薬学系総合研究棟地点では 21.6m と絵図面では看取することができない凹凸があり、御殿造営を行うために平坦化を志向していると思われるものの、完全にフラットにしているわけではない。これは地形に合わせて邸内の雨水を排水するためかも知れない。

4 点目は、御殿に対して詰人空間内では頻繁な地業は確認されず、特に生活空間に位置している②総合研究博物館地点が藩邸時代で 1 面、③インキュベーション施設地点が藩邸時代で 3 面、⑤本郷台遺跡群第 2 地点で 1 面と江戸時代初期にローム面まで下げた面をほぼそのまま利用していることも多い。

5 点目は、主要殿舎周囲には石を用いた基壇が存在している可能性が高い点である。先述のように発掘調査によって基壇相当施設が確認されていないものの、再建時の地業によって削平され、遺跡化しない可能性を指摘した。

以上、藩邸内の地業、御殿内の地業、詰人空間と御殿空間の地業の相違などの一端を明らかにした。こうした解明にあたって、藩邸と藩邸外あるいは御殿と詰人空間の境にあたる医研地点の調査成果は大きかったと評価できる。

本稿を草するにあたって、小林照子、小松愛子、香取祐一、成瀬晃司、原祐一、増田晴夫の各氏には大変お世話になりました。感謝いたします。

【註】

1. 加賀藩本郷邸の絵図面、藩邸の機能の分析を行った吉田伸之によって本郷邸が御殿空間と詰人空間とで構成されることを指摘した（吉田 1988）
2. 南通町は、17 世紀後半以降の加賀藩邸南辺を東西に走る通

り（現在の春日通り）であり、道路の主軸はほぼ東西を示している

3. その後、弘化３年、慶應４年に当該地の一部が被災している記事が確認できるが、全てを破却あるいは新規にしたことは記録にはない

【参考引用文献】

財団法人日本地図センター　2011 『参謀本部陸軍部測量局五千分一東京図測量原図』

大成エンジニアリング株式会社他　2017 『本郷台遺跡群　第３地点』

谷口　徹　2017 「御殿－能舞台と庭園を中心に－」『近世城郭の考古学入門』高志書院

東京大学遺跡調査室　1990a 『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　1990b 『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2002 「総合研究棟（文・経・教・社教）地点発掘調査概報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』3

東京大学埋蔵文化財調査室　2004 「インキュベーション施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4

東京大学埋蔵文化財調査室　2004 「薬学部総合研究棟地点発掘調査概報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4

東京大学埋蔵文化財調査室　2005 『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院外来診療棟地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2006 「薬学部系総合棟地点(2004年度）１次調査」『東京大学構内遺跡調査研究年報』5

東京大学埋蔵文化財調査室　2012 『東京大学本郷構内の遺跡　総合研究博物館新館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2016a 『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟Ａ地点　報告編』

東京大学埋蔵文化財調査室　2016b 『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟Ａ地点　研究編』

東京大学埋蔵文化財調査室　2017 「本郷 146･168　アカデミックコモンズ（HAC13)」『東京大学構内遺跡調査研究年報』10

東京大学埋蔵文化財調査室　2019a 『東京大学本郷構内の遺跡　医学部教育研究棟地点　報告編』

東京大学埋蔵文化財調査室　2019b 「懐徳館地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』11

東陽堂　1907 『新撰東京名所図会　本郷巳之部』

成瀬晃司　2016 「加賀藩本郷邸における斜面地開発と変遷」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟４地点　研究編』

文京区教育委員会　2011 『本郷台遺跡群　第２地点』

堀内秀樹　1999 「東京大学構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1

堀内秀樹　2016 「江戸大名藩邸出土陶磁器の消費モデル－加賀藩本郷邸の出土資料の分析から－」『中近世陶磁器の考古学』第二巻

堀内秀樹　2017 「第六章　溶姫御殿の発掘調査」『赤門－溶姫御殿から東京大学へ－』

吉田伸之　1988 「近世の城下町・江戸から金沢へ」『週刊朝日百科日本の歴史別冊　歴史の読み方　2　都市と景観の読み方』朝日新聞社

医学部教育研究棟地点の瓦について

*金子　智

はじめに

医学部教育研究棟地点（以下、本地点）からは、構内の他地点同様、多くの近世瓦が出土している。ここではその概要を述べるとともに、本地点で瓦がまとまって出土した遺構および特徴的な資料について概観する。以下、瓦の分類については、現在までにある程度まとまって分類作業がなされている御殿下記念館地点出土瓦の分類（以下、御殿下分類）を基準とした。

本地点出土の瓦は、いずれも加賀藩前田家の屋敷に伴うものと考えられ、江戸時代の初期から幕末まで幅広い年代のものが見られる。ただし、その出土量には偏りがあり、江戸時代前期と19世紀代のものが目立ち、18世紀代の資料は比較的少ない。これは18世紀代の瓦を伴う遺構（特に瓦の廃棄土坑）が少なかったことに由来し、周辺の状況からみて必ずしも同時期に周辺で瓦の利用が少なかったというわけではない。

今回の調査で特に注目されるのは、17世紀前半代の瓦（金箔瓦を伴う）が多く確認された点が挙げられる。本郷構内では従前より多くの金箔瓦が出土しているが、良好な資料は少なく、今次調査のものは比較的良好な資料が目立つ点からも注目される。

1. 瓦の出土した主な遺構

以下、本地点で瓦の出土が見られた遺構のうち、量的にまとまりのあるものを挙げる。

SK209

19世紀代の瓦が中心に出土している。唐草・子葉の肥大化した折衷式（金子1996）の軒平瓦が報告されており（2図4）、19世紀でも中葉に近い時期が想定される。熨斗瓦で御殿下分類16類と同文のものがあるが（2図6）、中心飾りの形状が異なり異笵とみられる。類品はSU210・3095でも出土している（3図33、4図35）。

SU210・3095

19世紀代の瓦が中心に出土している。軒平瓦、軒桟瓦をみると17世紀中葉～後葉（2図17）、18世紀前～中葉（2図18､26）と思われるものもわずかに混じるが、大半は19世紀代の資料である。「江戸式」文様主体で、唐草Ｋ・Ｌという肥大化した文様が中心である。東海式に似た文様もあるが（2図16）、胎土や文様構成から江戸在地産と思われる（御殿下未確認）。熨斗瓦に御殿下16類（3図32～34、4図35）、17類（4図36）、19類（3図31）、やや時期が遡るが広く分布する15類（4図37）が見られる。御殿下16類や15類には従来確認されているものと笵型が異なるものも含まれ、今後既出資料との対照が必要である。桟瓦には御殿下などでも多く出土している「丸に「庄」」の刻印資料も確認され（2図28・29）、19世紀代の、ある程度大規模な作事に伴う瓦の可能性が高い。

本遺構は瓦積みの地下室であり、側壁は平瓦によって構築されていた。慶応4年（1868）の火災による廃棄が想定されているが、瓦もこの時期の廃棄として矛盾はない。

SD246・3100

17世紀代の瓦が出土している。軒平瓦に初期の「江戸式」文様がみられるが（4図38）、他の軒平瓦は江戸式以外であることから、「江戸式」文様の出現前後、17世紀中葉の一群と考えられる（ただし剣梅鉢紋の軒丸瓦（4図44）はやや下るかもしれない）。江戸前期～中期の過渡期の資料として注目される。

SD1071・4299

17世紀前半代の瓦がまとまって出土している。金箔瓦は未確認であるが同時期の瓦と推定され、家紋はいずれも梅鉢紋である。

SK1091

梅鉢紋の軒丸瓦がまとまって出土している。17世紀前半代の資料と思われ、金箔瓦が伴う。

SE4296

17世紀前半代の資料が出土しており、金箔瓦が多くみられる。棟飾瓦（5図SE4296_5）は方形で梅鉢紋を配しており、織豊期に多く見られるものである。御殿下からも出土している。

SD4301

17世紀前半代の瓦がまとまって出土している。金箔瓦を含み、家紋はいずれも梅鉢紋である。文様を有

*㈱乃村工藝社

する熨斗瓦には御殿下4類（5図14）、同8類（5図SD4301_15）が見られ、これらは文様を有する熨斗瓦の中でも古い段階に属することがわかる。

SK4553

金箔瓦多数を含む17世紀前半代の瓦がまとまって出土している。梅鉢紋の軒丸瓦、三角垂面形の瓦当を有する軒平瓦（御殿下1類、5図SK4553_15）の他、小菊瓦や梅鉢紋の鬼瓦も含まれ、一括性の高い資料と思われる。寛永14（1637）年の箆書きを有するかわらけが出土しており、金箔瓦の年代を推定する上で参考となる遺構である。

SE4577

17世紀前半代の瓦が出土している。金箔瓦を含む。SE4296等でも出土している棟飾瓦（5図8・9）は良好な資料である。

SE4706

17世紀前半代の瓦が出土している。三角垂面形の瓦当を有する軒平瓦（御殿下1類）の良好な資料（5図4）が含まれる。

この他、少数の資料を含む遺構にも17世紀前半代の金箔瓦を含む遺構が多く見られた点は、本地点の特徴といえよう。逆に18世紀中葉の瓦を中心的に含む遺構が少ない点は特徴的である。SK209、SU210・3095は19世紀の一括性の高い資料といえる。

2. 御殿下記念館・山上会館出土瓦との対照

1表に報告編添付の遺物観察表を基に、御殿下記念館・山上会館出土資料の対照および想定可能な資料について、推定年代を示した。ただし軒丸瓦、江戸式の軒平・軒桟瓦、及び丸瓦、平瓦、桟瓦の分類については近似する資料が多く、現物の対照を行う余裕がなかったため、ここでは割愛した。

以下に御殿下記念館・山上会館での出土が確認されていないものを示す。

SK209_4の軒平瓦（1図1）は、江戸式に似るが、中心飾りに大坂瓦の影響が見える資料で、同種のものは18世紀後葉に出現する。御殿下では瓦3期以降に類品が見られる。

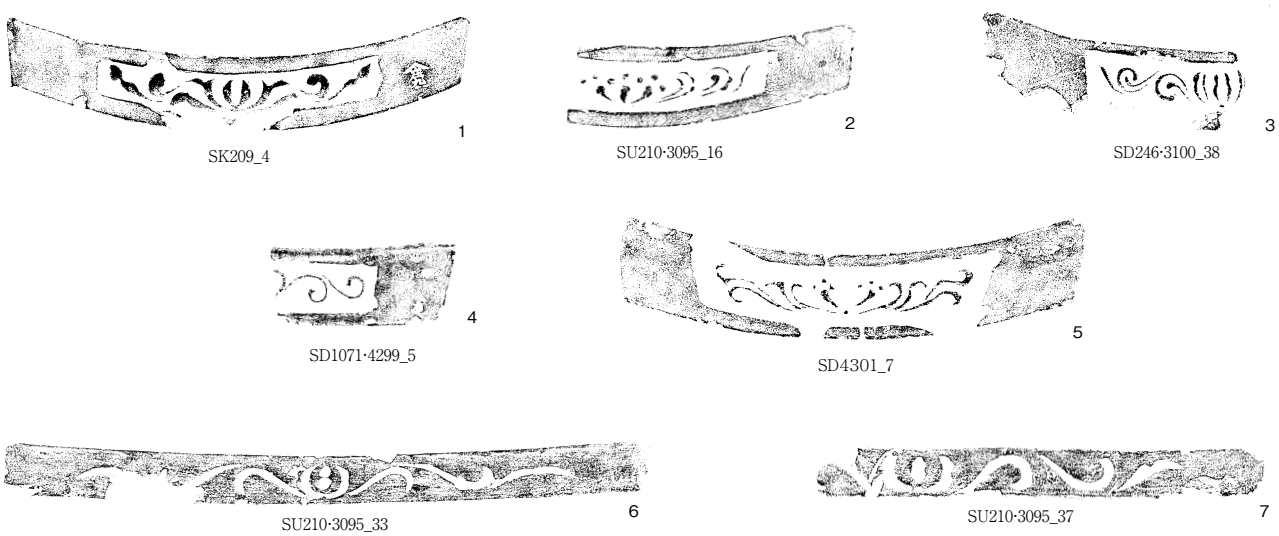
SU210・3095_16の軒平・軒桟瓦（1図2）は、中心飾りが三枝の丁子、唐草にくびれがあるなど「東海式」の文様に似るが、胎土や調整は江戸式に近く、東海式の瓦を模倣して江戸在地で生産されたものと考えられる。おそらく19世紀代の軒桟瓦であろう。

SD246・3100_38の軒平瓦（1図3）は、御殿下軒平瓦36類に似るが、文様構成が異なる。「江戸式」で17世紀中葉頃か。

SK1071・4299_5の軒平・軒桟瓦（1図4）は古様で、文様、時期から見て軒平瓦である。17世紀前葉のものであろう。

SD4301_7の軒平瓦（1図5）は、中心飾りに二枝の丁子を配したもので、遺構外から金箔瓦も確認されており、17世紀前葉のものである。

熨斗瓦では、御殿下既出の文様で異笵と思われる資料



1図　新出資料拓影

が出土している。

SU210・3095_33 の熨斗瓦（1 図 6）は、御殿下 16 類に該当するが、中心飾りの点珠がダルマ状に連続し、唐草の巻き込みが弱いなど、既分類資料とは異笵である。

SU210・3095_37 の熨斗瓦（1 図 7）は、御殿下 15 類に該当するが、子葉が長く、既分類資料（3 笵型）とは異笵である。SD246・3100_40 は小片だが、同種かもしれない。

3. 金箔瓦の出土状況

本地点では、多数の金箔瓦が出土している。瓦種では軒丸瓦・軒平瓦・熨斗瓦・小菊瓦・棟飾瓦・鬼瓦・鯱瓦がみられ、屋根の棟・軒に金箔瓦を使用した様子がうかがわれた。

報告編掲載資料以外にも多くの出土が見られ、分類可能な資料では SK978・4290 から軒平瓦御殿下 12 類 1 点、SK4498 から軒平瓦御殿下 1 類 1 点、SK4553 から軒平瓦御殿下 25 類 1 点及び熨斗瓦御殿下 20 類 -2 が 2 点、SE4577 から軒平瓦御殿下 8 類 2 点、御殿下 12 類 2 点、御殿下 25 類 1 点、および棟飾瓦 1 類 1 点が出土している。遺構外からは、軒平瓦御殿下 9 類 2 点、御殿下 12 類 1 点、御殿下 25 類 1 点、鯱瓦 1 点のほか、SD4301_7 と同笵の軒平瓦 1 点が確認されている。このうち軒平瓦御殿下 25 類は、金箔瓦としては新出である。

これら金箔瓦のうち、軒丸瓦（梅鉢紋）については、御殿下の資料を含め明確な分類をしえていないが、少なくとも花弁の大きいもの（SK961_1 資料など）と小さいもの（SK978_1 資料など）の 2 種が存在する。

軒平瓦では、御殿下分類で 1 類、8 類、9 類、11 類、12 類、25 類が確認されている。

熨斗瓦は御殿下分類 20 類 -1（無文で金箔を貼るもの）が見られた。

棟飾瓦は板状の梅鉢紋を配したもの、小菊瓦も同じく梅鉢紋を配したもので、いずれも御殿下でも確認されている 1 種のみである。鬼瓦、鯱瓦はいずれも破片であるが、文様表面に金箔を配したもので、鬼瓦には梅鉢紋を配したものが見られる。

まとめ

前田家本郷邸の瓦には、他の大名屋敷と比べいくつかの特徴的な点が指摘されているが、本地点の出土品からも同様の傾向が指摘できる。以下にその諸点を挙げる。

①江戸在地系の瓦が多く、搬入品が少ない

江戸の瓦は、江戸時代を通じてみると在地系が八割以上を占めるが、一方で一定量の搬入品が見られる。例えば江戸城では大坂瓦が多く使用され、町家等では幕末に東海系（尾州・三州系）の瓦が多く使用されている。また、大名屋敷では諸藩の国元の瓦が持ち込まれる事例も多い。

これに対し、前田家本郷邸の瓦には搬入品がほとんど含まれず、家紋瓦も胎土からみておおむね江戸在地の生産品と考えられる。本地点の報告資料についても、17 世紀前半代の瓦には産地不明のものも多いものの、それ以降のものはいずれも軒平・軒桟瓦の「江戸式」文様を指標とする江戸在地系が主体である。

国元の瓦がみられないのは、領国が遠くまた寒冷地に位置するため、瓦の生産・搬入が難しかったことが理由として考えられる。東海系の瓦の利用が少ない理由ははっきりしないが、大規模な作事を行う前田邸では江戸在地の瓦の入手先が確保されており、新生産地の瓦を導入する必要がなかったためとも考えられる。

②軒丸瓦を中心に家紋瓦（梅鉢紋・剣梅鉢紋）が多用される

軒丸瓦における家紋瓦の使用は大名屋敷では普遍的に見られ、特に外様の大大名には顕著である。ただ多くの大名屋敷では、既製品の文様である連珠三巴文が中心的に使用され、家紋瓦は補助的である場合が多いのに対し、前田家本郷邸の場合は家紋瓦の比率が高い。

本地点でも、軒丸瓦以外にも、軒平瓦や鬼瓦、小菊瓦、棟飾瓦に多数の家紋瓦が確認された。

家紋瓦は自ずと特注となるため、ある程度指定の瓦師が継続的に瓦を納めていたことが想定される。次に挙げる他の屋敷でほとんど見られない文様付き熨斗瓦の恒常的な存在も、同様の理由によるものと考えられよう。

③熨斗瓦に専用品が多く、側面に文様を有する

熨斗瓦は一般的には平瓦を半截して使用し、専用品はそもそも非常に少ない。また専用品でも裏面に条線や分割線を施す程度で、正面は無地である。

一方、前田家本郷邸の熨斗瓦には、正面に唐草文を配したものが多数存在する。「江戸式」軒平瓦に似た文様のものも見られ、胎土から見ても江戸在地産と思われるが、江戸市中でも他の大名屋敷ではほぼ見られないことから、本邸の特色ということができる。家紋瓦同様、特注で納入されていることがあきらかである。

御殿下記念館では、これらを 19 分類 26 笵型（うち 1 分類は同笵。1 分類は無文）に分類している。本地点のものもおおむねこの分類に含まれるが、笵の異なるものが存在するため、同系統の熨斗瓦でも複数の笵が使われ

た大規模な作事があったことがうかがえる。

④金箔瓦の存在

前田家本郷邸の金箔瓦は、江戸遺跡では最も多くの点数が出土しており、きわめて特徴的な資料である。そもそも江戸遺跡における金箔瓦はそのごく初期に存在するのみの珍しいものであり、現在まで相当数の金箔瓦が出土している本遺跡は稀有な例といえる。おそらく江戸遺跡全体の中でも、単純な総数でいえば、現在までの出土総点数の九割以上が本郷邸で出土した計算になるであろう。

前田家本郷邸の金箔瓦は、寛永６年（1629）の将軍家光の御成に伴う作事によるものと推定しているが、これは桃山期以来の金箔瓦の歴史の中でも、最も新しい部類に属する。織豊期に盛行する金箔瓦は、江戸遺跡でもほとんどの資料が慶長期前後の江戸ごく初期のものであり、寛永期に降る事例は他に確認されていない。

本地点では、多数の瓦種に金箔瓦が確認され、屋根の棟・軒に広く使用した建物が存在したことがわかる。軒瓦には複数の笵型があるため、建物も複数あったことがうかがわれ、各瓦種のセット関係は、出土状況も考慮しつつ今後吟味していく必要がある。また鯱瓦の存在は城郭瓦に特徴的なものであるが、江戸の大名屋敷ではほとんど出土が見られず、金の鯱を乗せた建築が存在する屋敷という点でも特異な例といえる。

本地点の調査では、紹介した遺構以外からも 17 世紀前半代に遡る瓦が多数出土している。多くは金箔瓦を伴うため、17 世紀第２四半期前後のものとなりそうだが、現状ではこの段階の江戸の瓦の変遷については十分検討されていない。本地点の出土瓦は今後の検討材料として貴重である。

江戸遺跡においては明暦の大火以前、とりわけ 17 世紀第２四半期以前の瓦が出土する遺跡は多くなく、大部分が江戸城東側の武家地に集中している。その点で、前田家本郷邸はやや遠隔地にあたる点で異例といえるが、大大名前田家の江戸における拠点として早い段階から機能していたとすれば、不自然ではない。

【引用・参考文献】

加藤晃 1989「江戸時代の瓦における「江戸式」の展開」『國學院大學日本史学専攻大学院会史学研究集録』第 14 号

加藤晃・金子智 1990「第２章　御殿下記念館地点 , 山上会館地点の瓦について」『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書４　東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』第３分冊考察編

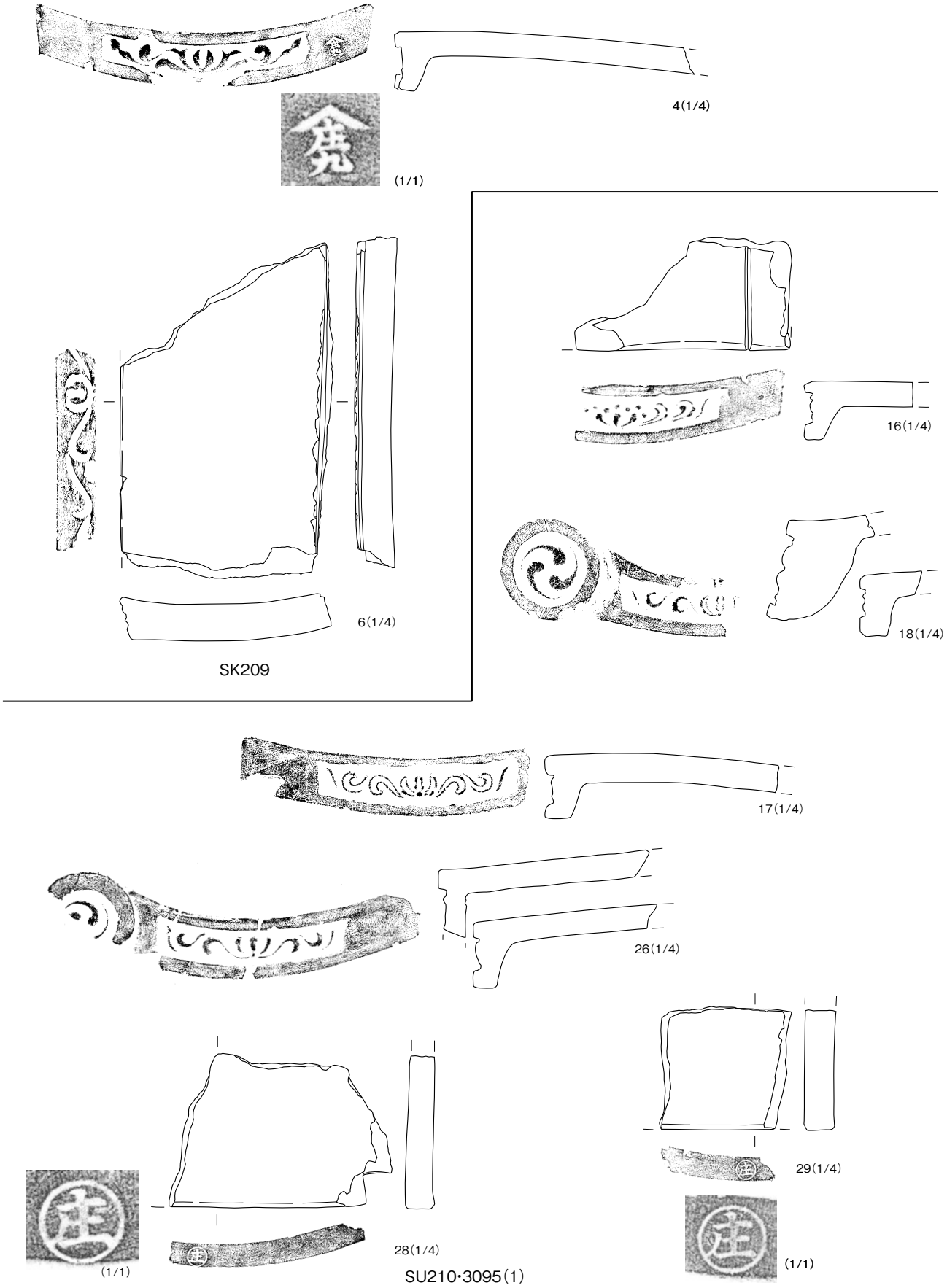
金子智 1996「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒桟瓦の地方色」『古代』101 号

1表　御殿下記念館・山上会館出土瓦との対比

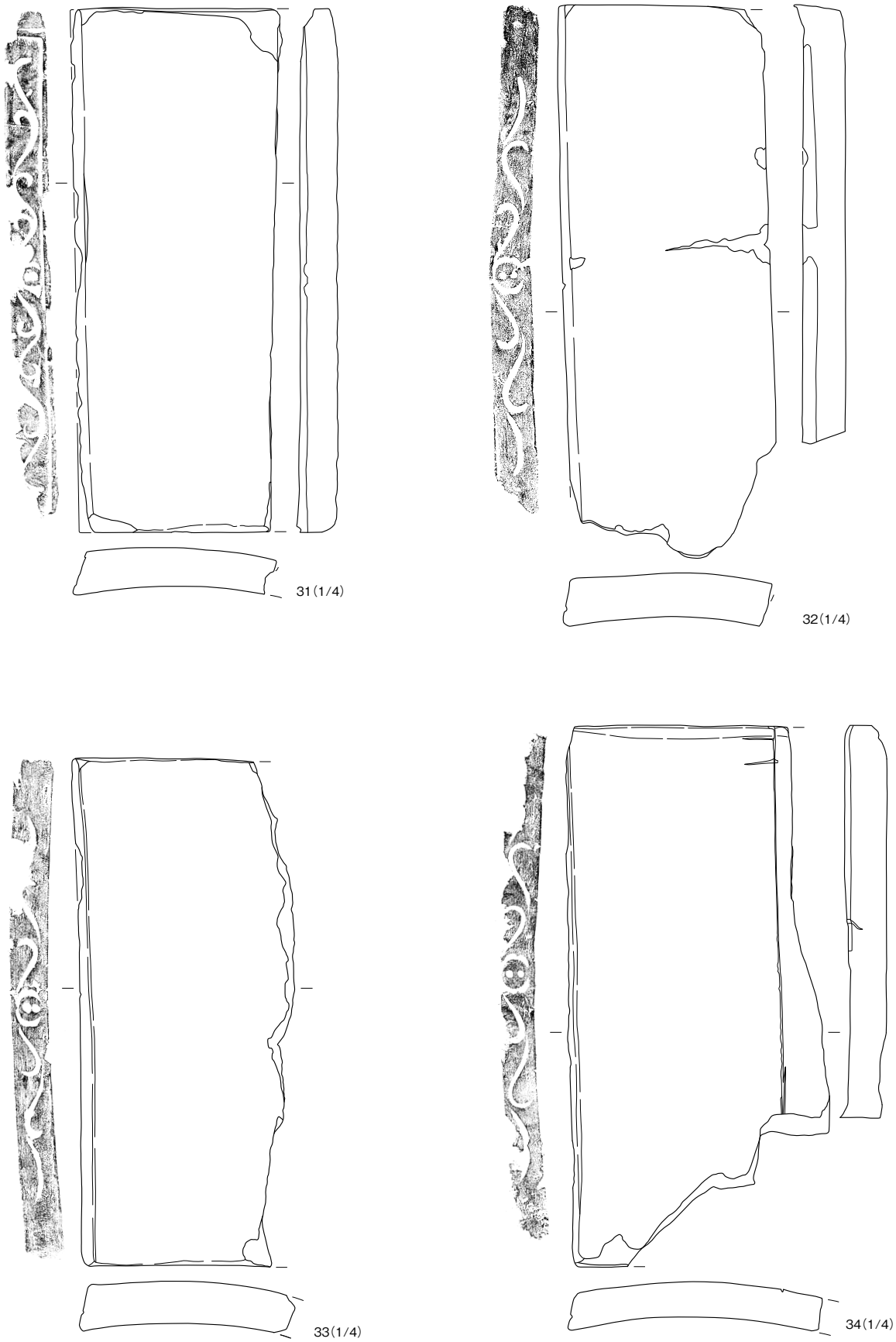
遺構番号	図版番号	No.	瓦種	御殿下分類	備考	年代
SP12	Ⅳ-1図	1	丸瓦	不明	刻印	18-19世紀
SK209	Ⅳ-4図	4	軒平瓦	（未確認）	折衷式	19世紀
SK209	Ⅳ-4図	5	熨斗瓦	15類-2		
SK209	Ⅳ-4図	6	熨斗瓦	16類	異笵か	
SK209	Ⅳ-4図	7	軒丸瓦	不明	剣梅鉢紋B	
SK209	Ⅳ-4図	8	鬼瓦	—	梅鉢紋	
SU210・3095	Ⅳ-5図	4	塀桟瓦	—		18-19世紀
SU210・3095	Ⅳ-5図	5	丸瓦	不明		
SU210・3095	Ⅳ-5図	6	丸瓦	不明		
SU210・3095	Ⅳ-6図	7	軒丸瓦	不明	連珠三巴文C右巻	
SU210・3095	Ⅳ-6図	8	軒丸瓦	不明	剣梅鉢紋C	
SU210・3095	Ⅳ-6図	9	軒桟瓦	不明	軒丸部（連珠三巴文C右巻11珠）	19世紀
SU210・3095	Ⅳ-6図	10	軒桟瓦	不明	軒丸部（連珠三巴文C右巻8珠）	19世紀
SU210・3095	Ⅳ-6図	11	軒桟瓦	不明	軒丸部（連珠三巴文C右巻8珠）	19世紀
SU210・3095	Ⅳ-6図	12	軒桟瓦	不明	軒丸部（連珠三巴文C右巻10珠）	19世紀
SU210・3095	Ⅳ-6図	13	軒桟瓦	不明	軒丸部（三巴文C右巻）	18-19世紀
SU210・3095	Ⅳ-6図	14	軒桟瓦	不明	軒丸部（三巴文C左巻）	18-19世紀
SU210・3095	Ⅳ-6図	15	軒平瓦または軒桟瓦	不明	江戸式ＩＬi。角平瓦	19世紀
SU210・3095	Ⅳ-6図	16	軒平瓦または軒桟瓦	（未確認）	東海式の模倣。廻隅瓦か	19世紀
SU210・3095	Ⅳ-6図	17	軒平瓦	不明	江戸式ＩAa	17世紀後
SU210・3095	Ⅳ-6図	18	軒桟瓦	不明	三巴文C右巻/江戸式ＩHg	18世紀前-中
SU210・3095	Ⅳ-6図	19	軒桟瓦	不明	軒丸部不明/江戸式ＩKj	19世紀
SU210・3095	Ⅳ-6図	20	軒桟瓦	不明	連珠三巴文C右巻8珠/江戸式ⅡKj	19世紀
SU210・3095	Ⅳ-6図	21	軒桟瓦	不明	連珠三巴文C右巻8珠/江戸式ⅡKj	19世紀
SU210・3095	Ⅳ-7図	22	軒平瓦	不明	江戸式ⅣKi	19世紀
SU210・3095	Ⅳ-7図	23	軒桟瓦	不明	軒丸部不明/江戸式ⅢKi	19世紀
SU210・3095	Ⅳ-7図	24	軒桟瓦	不明	連珠三巴文C右巻10珠/江戸式ⅢKj	19世紀
SU210・3095	Ⅳ-7図	25	軒桟瓦	不明	三巴文C右巻/江戸式ⅢKj	19世紀
SU210・3095	Ⅳ-7図	26	軒桟瓦	不明	三巴文C右巻/江戸式ⅣFk	18世紀中
SU210・3095	Ⅳ-7図	27	軒平瓦または軒桟瓦	不明	江戸式？Kj	19世紀
SU210・3095	Ⅳ-7図	28	桟瓦		刻印	
SU210・3095	Ⅳ-7図	29	平瓦または桟瓦		刻印	
SU210・3095	Ⅳ-7図	30	桟瓦		刻印	
SU210・3095	Ⅳ-8図	31	熨斗瓦	19類		
SU210・3095	Ⅳ-8図	32	熨斗瓦	16類		
SU210・3095	Ⅳ-8図	33	熨斗瓦	16類	異笵か	
SU210・3095	Ⅳ-8図	34	熨斗瓦	16類		
SU210・3095	Ⅳ-9図	35	熨斗瓦	16類	異笵か	
SU210・3095	Ⅳ-9図	36	熨斗瓦	17類-3		
SU210・3095	Ⅳ-9図	37	熨斗瓦	15類	異笵か	
SU210・3095	Ⅳ-9図	38	鬼瓦	—	梅鉢紋	
SU210・3095	Ⅳ-10図	39	鬼瓦	—	剣梅鉢紋	
SU210・3095	Ⅳ-10図	40	熨斗瓦	18類-2か		
SU210・3095	Ⅳ-10図	41	熨斗瓦	18類-3		
SU210・3095	Ⅳ-11図	42	海鼠瓦	—		18-19世紀
SU210・3095	Ⅳ-11図	43	海鼠瓦	—		18-19世紀
SU210・3095	Ⅳ-11図	44	海鼠瓦	—		18-19世紀
SU210・3095	Ⅳ-11図	45	平瓦	不明		
SU210・3095	Ⅳ-11図	46	平瓦	不明		
SU210・3095	Ⅳ-11図	47	平瓦	不明		
SU210・3095	Ⅳ-11図	48	平瓦	不明		
SU210・3095	Ⅳ-11図	49	平瓦	不明		
SU210・3095	Ⅳ-11図	50	平瓦	不明		

遺構番号	図版番号	No.	瓦種	御殿下分類	備考	年代
SU210・3095	Ⅳ-13図	51	平瓦	不明		
SU210・3095	Ⅳ-14図	52	平瓦	不明		
SU210・3095	Ⅳ-14図	53	平瓦	不明		
SD236・2095・3021	Ⅳ-15図	4	熨斗瓦	15類		
SD236・2095・3021	Ⅳ-15図	5	熨斗瓦	15類		
SD246・3100	Ⅳ-19図	35	軒平瓦	41類		17世紀中
SD246・3100	Ⅳ-19図	36	軒平瓦か	（未確認）		17世紀中
SD246・3100	Ⅳ-19図	37	軒平瓦	58類		17世紀中
SD246・3100	Ⅳ-19図	38	軒平瓦	不明	江戸式ⅠDa	17世紀中
SD246・3100	Ⅳ-20図	39	平瓦	不明	刻印	
SD246・3100	Ⅳ-20図	40	熨斗瓦	15類	異笵か	
SD246・3100	Ⅳ-20図	41	丸瓦	不明		
SD246・3100	Ⅳ-20図	42	丸瓦	不明	軒丸瓦体部か	
SD246・3100	Ⅳ-20図	43	軒丸瓦	不明	梅鉢紋B	
SD246・3100	Ⅳ-20図	44	軒丸瓦	不明	剣梅鉢紋C	
SU279	Ⅳ-23図	14	軒平瓦	1類		17世紀前
SU280	Ⅳ-24図	6	軒平瓦	不明	江戸式ⅠAa	17世紀中
SU280	Ⅳ-24図	7	軒丸瓦	不明	剣梅鉢紋C	
SU280	Ⅳ-24図	8	丸瓦	不明		
SU280	Ⅳ-24図	9	熨斗瓦	15類-2		
SU280	Ⅳ-25図	10	熨斗瓦	15類-1		
SK518・519	Ⅳ-33図	1	軒桟瓦	不明	連珠三巴文C右巻10珠/江戸式ⅢKj	19世紀
SK871	Ⅳ-37図	19	軒丸瓦	不明	梅鉢紋B	17世紀
SP891	Ⅳ-38図	3	軒平瓦	15類	異笵か	17世紀前-中
SK938	Ⅳ-39図	6	軒丸瓦	不明	梅鉢紋A・金箔	17世紀前
SK938	Ⅳ-39図	7	鯱瓦	―	金箔	17世紀前
SK940・941	Ⅳ-40図	8	軒丸瓦	不明	梅鉢紋B・金箔	17世紀前
SK940・941、SK961	Ⅳ-40図	1	鯱瓦	―	金箔	17世紀前
SK961	Ⅳ-40図	1	軒丸瓦	不明	梅鉢紋A・金箔	17世紀前
SK954	Ⅳ-41図	2	軒丸瓦	不明	梅鉢紋B・金箔	17世紀前
SK978・4290	Ⅳ-41図	1	軒丸瓦	不明	梅鉢紋A・金箔	17世紀前
SK978・4290	Ⅳ-41図	2	軒平瓦	9類-1	金箔	17世紀前
SD1026	Ⅳ-42図	1	軒平瓦	1類	金箔	17世紀前
SD1071・4299	Ⅳ-43図	3	平瓦	―		
SD1071・4299	Ⅳ-43図	4	丸瓦	―	軒丸瓦体部か	
SD1071・4299	Ⅳ-43図	5	軒平瓦	（未確認）		17世紀前-中
SD1071・4299	Ⅳ-43図	6	軒平瓦	29類		17世紀前-中
SD1071・4299	Ⅳ-43図	7	軒丸瓦	不明	梅鉢紋B	17世紀
SD1071・4299	Ⅳ-43図	8	軒丸瓦	不明	梅鉢紋A	17世紀
SD1071・4299	Ⅳ-43図	9	軒丸瓦	不明	連珠三巴文B	
SK1091	Ⅳ-44図	1	軒平瓦	11類	金箔	17世紀前
SK1091	Ⅳ-44図	2	軒丸瓦	不明	梅鉢紋A	17世紀
SK1091	Ⅳ-44図	3	軒丸瓦	不明	梅鉢紋B	17世紀
SK1091	Ⅳ-44図	4	軒丸瓦	不明	梅鉢紋B	17世紀
SK1091	Ⅳ-44図	5	軒丸瓦	不明	梅鉢紋C	17世紀
SK3141	Ⅳ-57図	1	軒平瓦または軒桟瓦	不明	刻印	18-19世紀
SU3146	Ⅳ-58図	5	桟瓦	不明	刻印	
SK3242	Ⅳ-58図	1	平瓦または桟瓦	不明	刻印	
SK3305	Ⅳ-58図	1	軒丸瓦	不明	梅鉢紋A。刻印	17世紀
SU3333	Ⅳ-59図	1	海鼠瓦	―		18-19世紀
SU3333	Ⅳ-59図	2	海鼠瓦	―		18-19世紀
SK4124	Ⅳ-60図	1	桟瓦	不明	刻印	18-19世紀
SK4124	Ⅳ-60図	2	軒平瓦または軒桟瓦	不明	江戸式？Ki。刻印	19世紀
SU4203	Ⅳ-61図	4	丸瓦	不明	刻印	18-19世紀
SP4295	Ⅳ-62図	1	棟飾瓦	1類	梅鉢紋A	17世紀前
SE4296	Ⅳ-62図	3	軒平瓦	8類-1		17世紀前

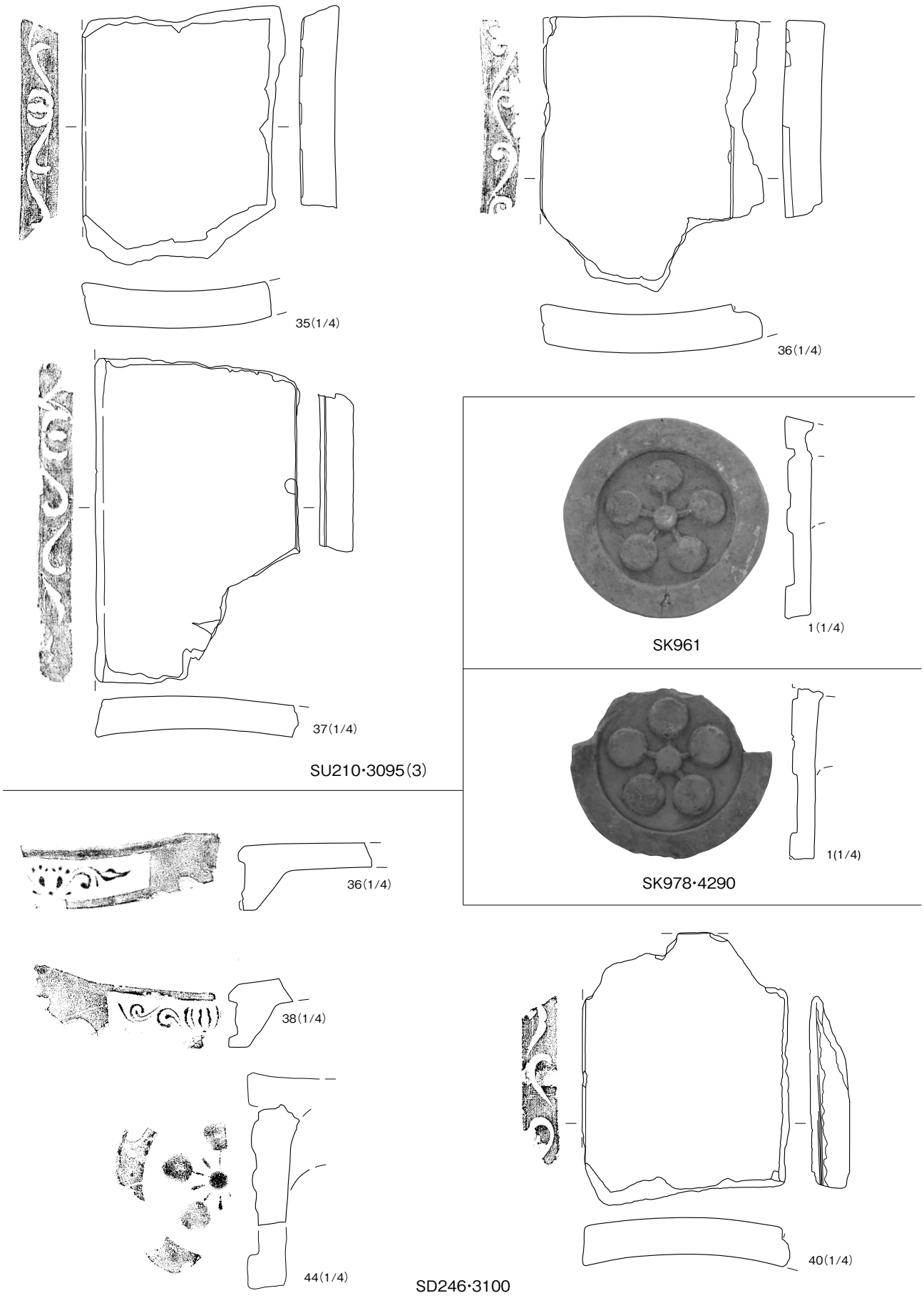
遺構番号	図版番号	No.	瓦種	御殿下分類	備考	年代
SE4296	Ⅳ-62図	4	軒丸瓦	不明	梅鉢紋A・金箔	17世紀前
SE4296	Ⅳ-62図	5	棟飾瓦	1類	梅鉢紋A・金箔	17世紀前
SD4301	Ⅳ-63図	1	平瓦	不明		
SD4301	Ⅳ-63図	2	平瓦	不明		
SD4301	Ⅳ-63図	3	平瓦	不明		
SD4301	Ⅳ-63図	4	平瓦	不明		
SD4301	Ⅳ-63図	5	平瓦	不明	敷平瓦か	
SD4301	Ⅳ-63図	6	軒平瓦	12類		17世紀前-中
SD4301	Ⅳ-63図	7	軒平瓦	（未確認）		17世紀前-中
SD4301	Ⅳ-63図	8	軒平瓦	25類		17世紀前-中
SD4301	Ⅳ-64図	9	丸瓦	不明		
SD4301	Ⅳ-64図	10	軒丸瓦	不明	梅鉢紋A	17世紀
SD4301	Ⅳ-64図	11	軒丸瓦	不明	梅鉢紋A	17世紀
SD4301	Ⅳ-64図	12	軒丸瓦	不明	連珠三巴文C	17世紀
SD4301	Ⅳ-64図	13	小菊瓦	1類	梅鉢紋A	17世紀
SD4301	Ⅳ-64図	14	熨斗瓦	4類		17世紀前-中
SD4301	Ⅳ-64図	15	熨斗瓦	8類		17世紀前-中
SK4535	Ⅳ-66図	1	軒丸瓦	不明	梅鉢紋B・金箔	17世紀前
SK4553	Ⅳ-68図	14	鬼瓦	―	梅鉢紋B・金箔	17世紀前
SK4553	Ⅳ-68図	15	軒平瓦	1類	金箔	17世紀前
SK4553	Ⅳ-68図	16	熨斗瓦	1類		17世紀前
SK4553	Ⅳ-68図	17	軒丸瓦	不明	梅鉢紋B・金箔	17世紀前
SK4553	Ⅳ-68図	18	軒丸瓦	不明	梅鉢紋B・金箔	17世紀前
SK4553	Ⅳ-68図	19	小菊瓦	1類	梅鉢紋A・金箔	17世紀前
SK4553	Ⅳ-68図	20	軒丸瓦	不明	連珠三巴文C・金箔	17世紀前
SK4577	Ⅳ-69図	1	丸瓦	不明		17世紀
SK4577	Ⅳ-69図	2	軒平瓦	8類	金箔	17世紀前
SK4577	Ⅳ-69図	3	軒丸瓦	不明	連珠三巴文	
SK4577	Ⅳ-69図	4	軒丸瓦	不明	連珠三巴文	
SK4577	Ⅳ-69図	5	軒丸瓦	不明	刻印	
SK4577	Ⅳ-69図	6	軒丸瓦	不明	梅鉢紋A	
SK4577	Ⅳ-69図	7	軒丸瓦	不明	梅鉢紋A・金箔	17世紀前
SK4577	Ⅳ-70図	8	棟飾瓦	1類	梅鉢紋A	17世紀前
SK4577	Ⅳ-70図	9	棟飾瓦	1類	梅鉢紋A・金箔	17世紀前
SK4577	Ⅳ-70図	10	甎	不明		
SE4706	Ⅳ-71図	1	平瓦	不明		
SE4706	Ⅳ-71図	2	丸瓦	不明		
SE4706	Ⅳ-71図	3	丸瓦	不明		
SE4706	Ⅳ-71図	4	軒平瓦	1類		17世紀前
SE4706	Ⅳ-71図	5	軒丸瓦	不明	梅鉢紋A	17世紀
遺構外	Ⅳ-73図	10	鬼瓦	―	剣梅鉢紋	18-19世紀
遺構外	Ⅳ-73図	11	鬼瓦	―	連珠帯	



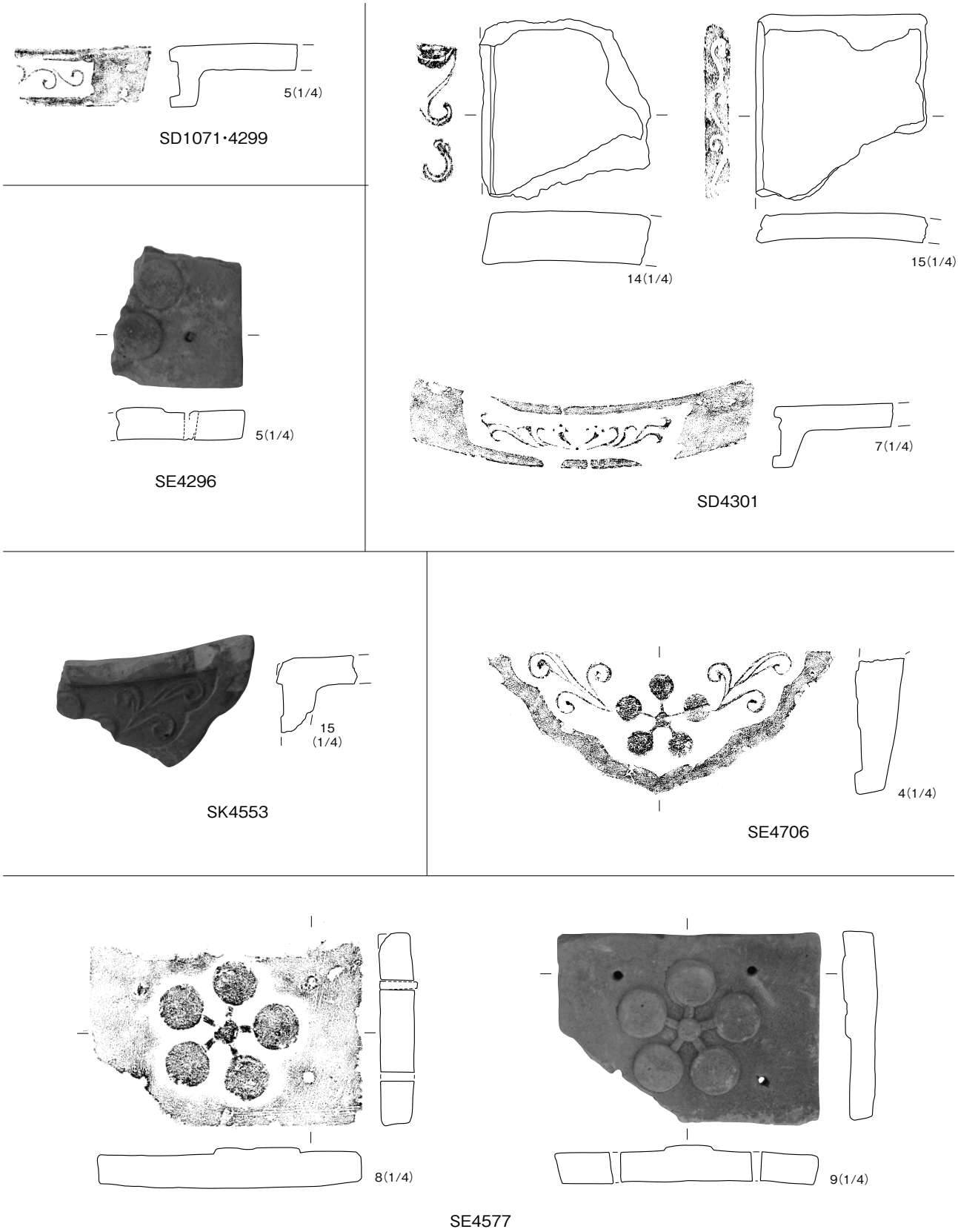
２図　医学部教育研究棟地点出土瓦（1）



３図　医学部教育研究棟地点出土瓦（2）



4図　医学部教育研究棟地点出土瓦（3）



５図　医学部教育研究棟地点出土瓦（4）

火災処理と武家儀礼道具コレクション形成にみる本藩と支藩の関係について

－天和２（1682）年の火災を例に－

堀内　秀樹

はじめに

医学部教育研究棟地点の発掘調査では、調査面積2,901㎡、遺構数2,470基に対して548箱の遺物が出土している。その大部が近世加賀藩本郷邸に伴うものであり、瓦、陶磁器類が主体を占めている。報告編でも触れたように、単位面積あたりの出土量は少なく、特に陶磁器類は少ない反面、瓦が多く出土していることが特徴的である。これは、御殿という性格を反映しているものと判断でき、災害による廃棄など非日常的な廃棄に伴う遺物は多いが、日常的なゴミの廃棄などに伴う行為が行われる場ではないことに起因していると思われる。

本地点から確認された非日常的な廃棄として、天和２（1682）年の焼土層から出土した陶磁器については、以前より藩邸で行われた年中行事や人生儀礼などの道具として筆者らが評価していたものである（堀内2005a、同2009、成瀬2018など）。本地点から約300m離れた医学部附属病院入院棟Ａ地点C2層出土遺物（以下、「C2層」と略す）は、本地点の遺構出土の陶磁器類と接合し、「加賀藩御殿空間内で使用されていた食器類」（東京大学埋蔵文化財調査室2016）としての評価視点から考察してきたものである。

本論では、前半を天和２年火災によって廃棄されたC2層およびC3層出土資料との様相差、遺跡間接合した陶磁器分析と造成のプロセスから、後半は武家儀礼道具の年代分析から、本藩と支藩との関係について考えてみたい。

１．天和２（1682）年の焼土中から出土した陶磁器と医学部附属病院入院棟Ａ地点出土遺物

（１）本地点の天和２年火災廃棄資料とC2層、C3層出土遺物

本地点では、Ｄ面と名付けた調査区中央部を中心に広がっていた硬化面とそれに続く生活面上に焼土が覆っていた。また、これにパックされたいくつかの遺構には焼土層と二次的な被熱を受けた陶磁器類が多く出土した。

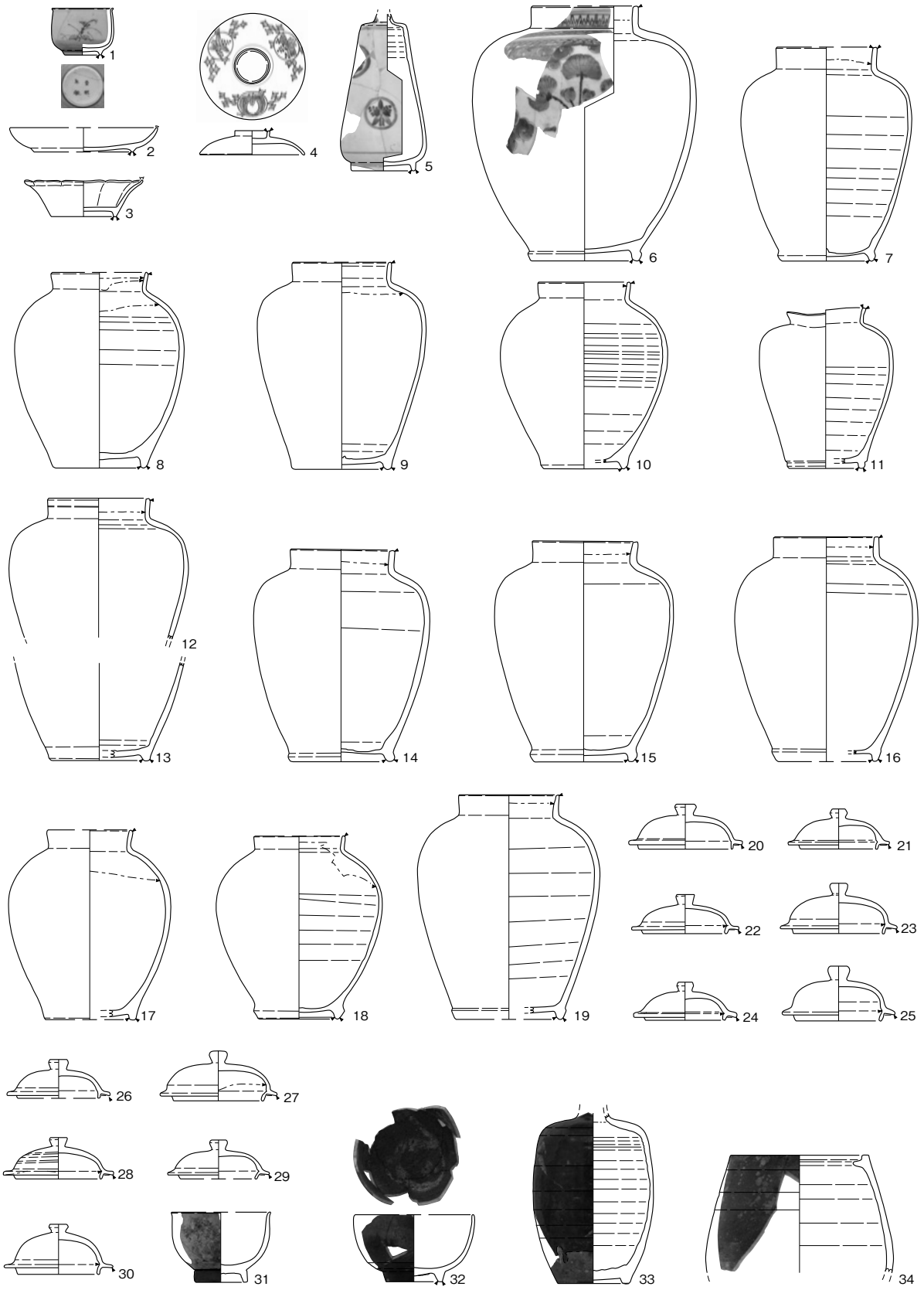
①医研地点SD246･3100出土陶磁器（１図）

本地点で天和２（1682）年の火災によって遺物が廃棄された遺構で、最も多くの出土量であった遺構は、SD246･3100であった。多量に出土した瓦を除くと最も多かったものは、器高25cm前後の蓋付白磁壺であった（7～30）。これは破片数にして3,000点強カウントされた。他の器種が磁器碗･坏類50点、皿類130点、壺（染付）14点、瓶３点、蓋物４点、香炉２点、陶器では、碗･皿（瀬戸･美濃、肥前）75点、壺（信楽腰白壺）61点、擂鉢（瀬戸･美濃、丹波、備前）７点、瓶（瀬戸･美濃、志戸呂、備前）20点、土器では、かわらけ22点、火鉢14点、ホウロク１点であったことを考えると、白磁壺の量は顕著であり、きわめて偏った構成であった。また、1図１の染付鉢、２の青磁皿、３の白磁皿、４の染付碗など上質な磁器製品は出土しているが、量的には少なく、揃いで廃棄された様な状況ではなかった。特に３の白磁皿はいわゆる乳白手の輪花に整形された南川原の製品と推定できるものであるが、後述するC2層、C3層からは出土しておらず、他の類似した製品も散見できる程度で、皿・鉢類自体の量も多くはなかった。

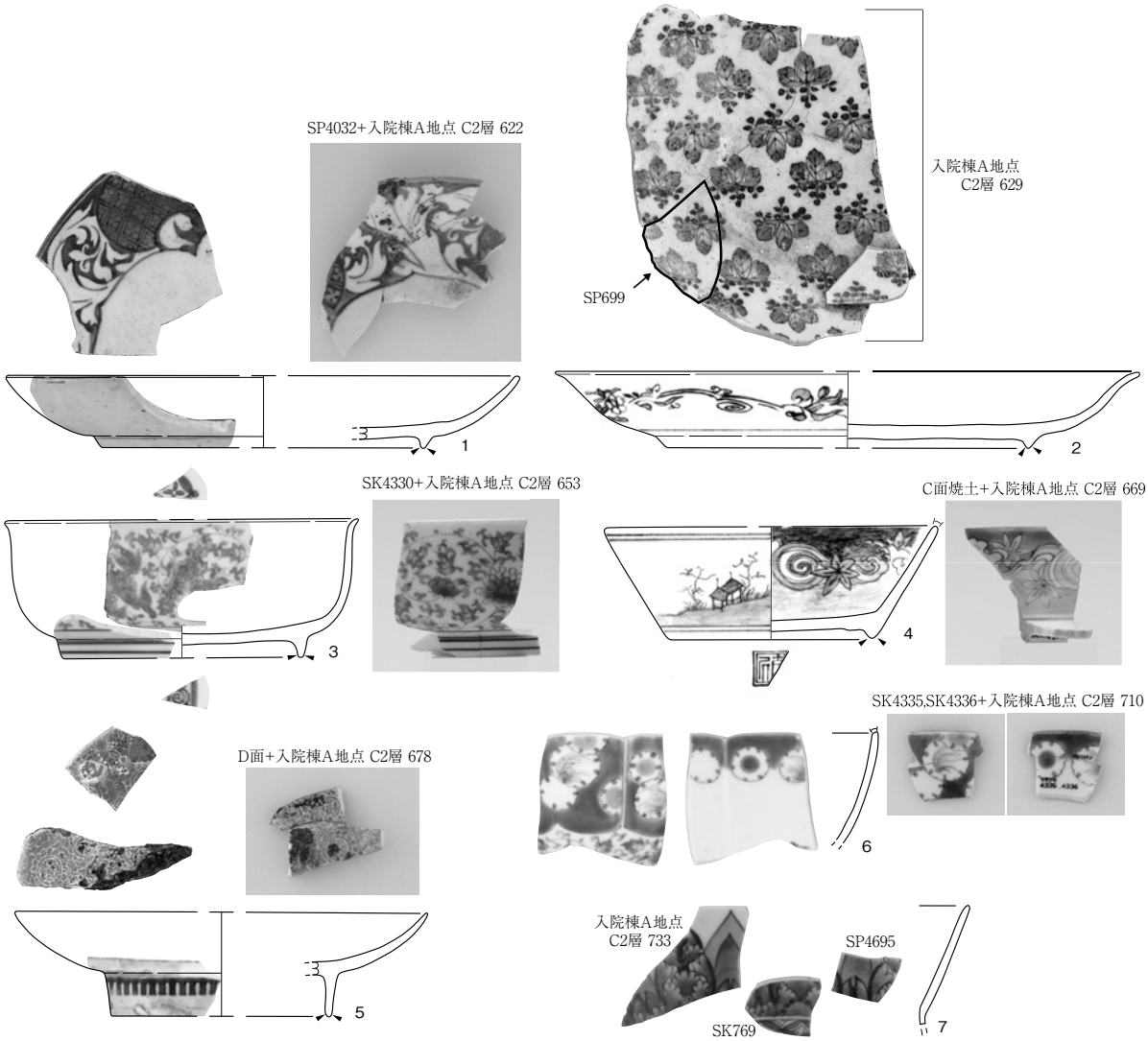
②C2層出土陶磁器と本地点との接合資料（２図、３図）

本地点の出土遺物とC2層出土遺物の接合は、出土磁器片が火災によって小片に破損しており、接合可能な全てを復元することはとても不可能であった。しかし、全部で９点が接合し、このうち６点を図示した。また、接合資料ではないが同じセットとして保管されていたと思われる鍋島１点を図示した。

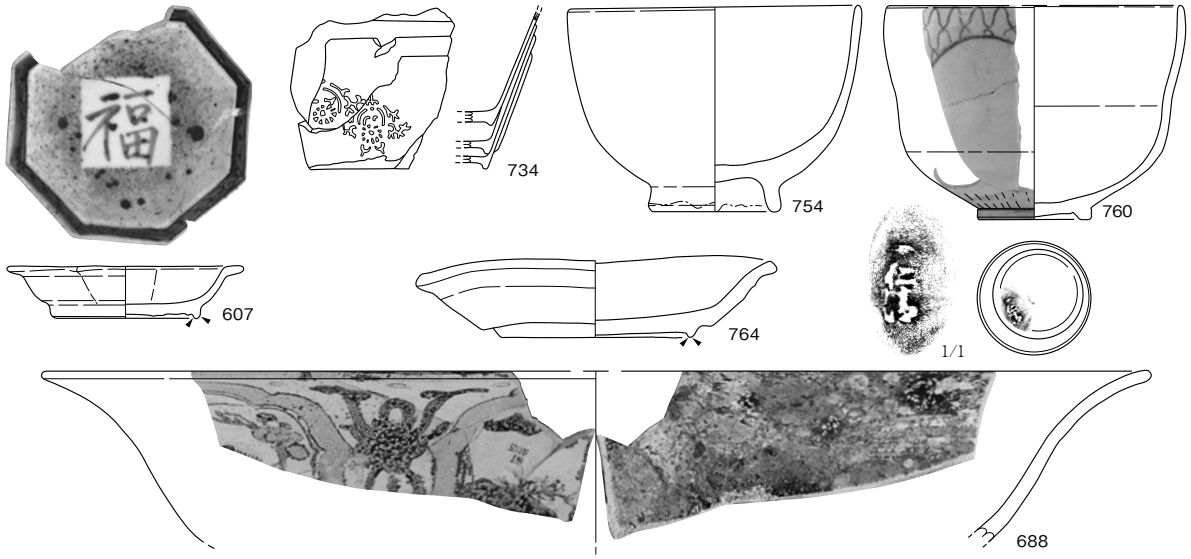
２図１は実測個体とは異なるもののC2層622と同手のC2層出土の皿であり、本地点SP4032と接合関係がある。SP4032はＣ面の基礎遺構である。２は本地点SK609とC2層629と接合資料である。この他にも同手の皿で本地点SK465との接合例と本地点SP4032との接合例とが存在する。SK609は覆土に焼土を含む遺構である。SK465は近代の遺構、SP4032は前述の様にＣ面の基礎遺構である。３は実測個体とは異なるもののC2層653と同手のC2層出土の皿で、本地点SK4330との



1図　医学部教育研究棟地点SD246･3100出土遺物　(S=1/6)



2図　医学部教育研究棟地点、入院棟A地点遺跡間接合資料(S=1/3)



3図　入院棟A地点 C2層出土資料(S=1/3)

接合資料である。文様の描法、畳付の削りから有田南川原の製品と推定される。SK4330 はＤ面（天和２年下限の遺構面）の遺構である。4 は実測個体とは異なるものの C2 層 669 と同手の C2 層出土の皿で、天和２年の火災層と本地点元禄 16（1703）年の焼土層との接合資料である。これも銘款や文様の描法などから南川原の製品と推定される。5 は実測個体とは異なるものの C2 層 678 と同手の C2 層出土の鍋島で、本地点Ｄ面遺構外との接合資料である。6 は実測個体とは異なるものの C2 層 710 と同手の C2 層出土の鉢で、本地点 SK4335、SK4336 との接合資料である。両遺構はＤ面の遺構で、出土資料の多くは二次的に被熱されている。7 は直接接合する資料ではないが、非常に珍しいタイプの鍋島の猪口で、おそらく同じセットとして保管、使用されていた可能性が高いと思われる。C2 層 733 と本地点 SK769、SP4695 で出土している。SK769 はＣ～Ｄ面の遺構である。この他、図示されてはいないが、C2 層と本地点 SP578 の接合例がある。これらの接合例が確認される遺構は、後の土地造成に伴なう土の移動によって上位面の遺構から出土しているものもある。接合資料の出土位置であるが、1 区 1 点、2 区 5 点、3 区 2 点、4 区 1 点といずれも藩邸北側のみである。こうした点は、調査区北域付近にこうした食器の保管場所である天和以前の御殿御膳所の蔵が、存在していた可能性が高いと推定できる。

C2 層出土陶磁器は、成瀬氏によって、器種、産地、個体数、法量、装飾技法、成形技法、裏銘、個体数、文様などについての詳細な提示と分析が行われている（成瀬 2018）。この分析およびその成果を修正する点は全くない。これまで筆者は C2 層や後述する医学部附属病院中央診療棟地点 L32-1 出土遺物について、器種組成などの分析から、以下のように特徴付けてきた（堀内 2005a、2011、2016 など）。

・遺物群は大皿を含む磁器皿・鉢・坏類が多く、偏った胎質・器種組成を示している

・遺物群は上質な磁器製品がその主体を占めている

・皿・鉢・坏類の多くは揃いで使用・保存されている

・皿類の法量は、5～7 寸が主体を占めている [(1)]

C2 層出土資料についても、胎質組成では、全体の推定残存個体数 [(2)] 490 個体中、磁器が 379 個体（77%）、陶器が 65 個体（13%）、土器が 46 個体（10%）で、磁器が多くを占めているのが大きな特徴と言える。

上記註 1 で示した法量のうち、鉢に相当する大型製品は 3 図 688、大皿が 2 図 1、2、中皿が 2 図 3～5、小皿が 3 図 607、猪口が 2 図 6、7、3 図 734 で、陶器ではあるが 760 の仁清の刻印が押印されるものも猪口として利用されていたものと推定している。推定残存個体数は、2 図 1 が 8 個体 、2 が 2 個体、3 が 2 個体、4 が 8 個体、5 が 2 個体、3 図 607 が 2 個体、688 が 1 個体、734 が 18 個体であり、鉢以外は複数個体で出土してる。この他、3 図 754 は肥前系陶器のいわゆる呉器手と呼ばれる灰釉碗、764 は瀬戸・美濃系の腰が折れる灰釉皿であるが、こうした製品階層が高くない日常品と思われるものも少量含まれており、これらは瓦礫処理の際に混入したものと推定される。

③ C3 層出土陶磁器（4 図）

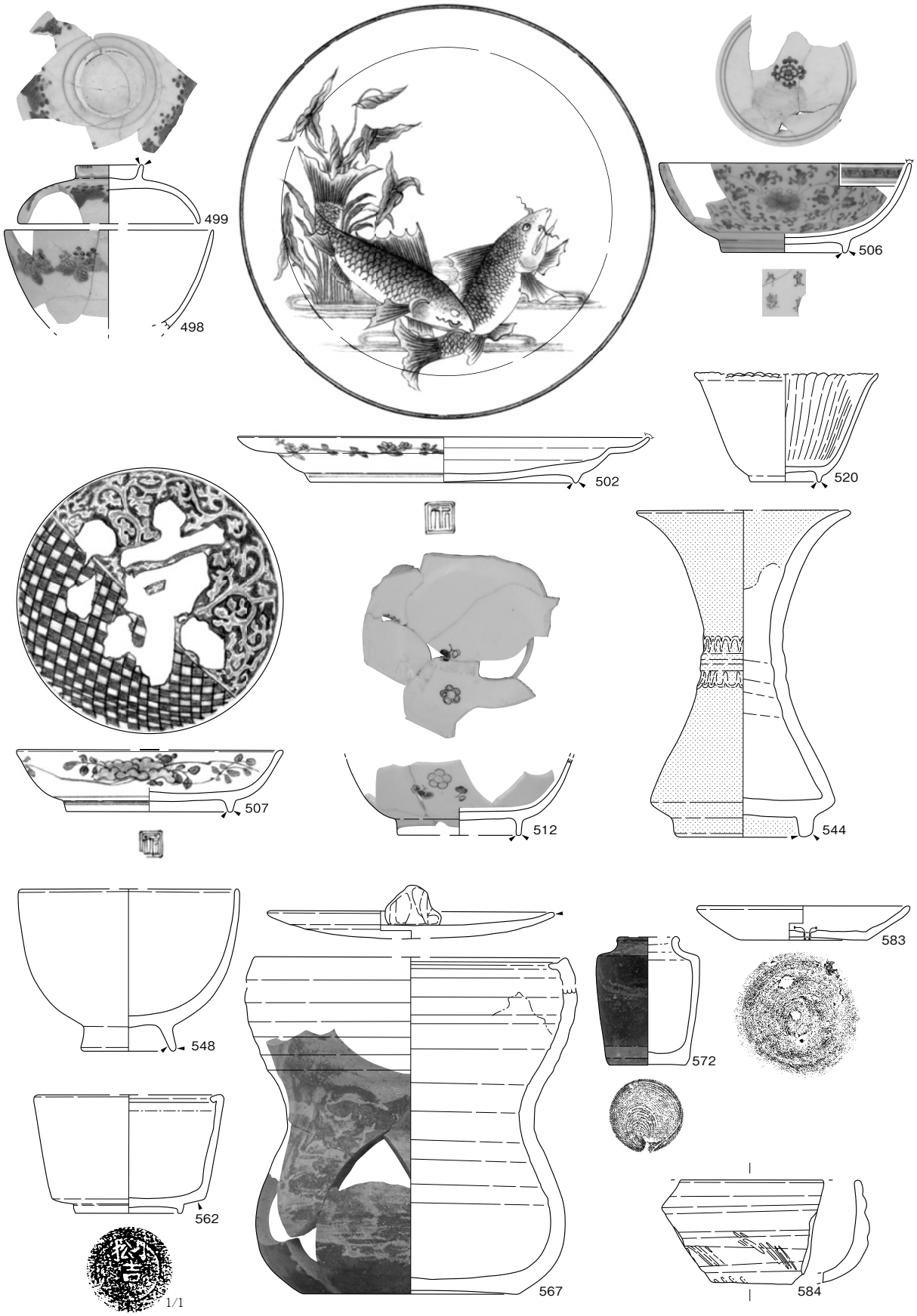
C3 層の遺物は、「天和２年の造成土のうち、C2 層下に堆積したロームブロック主体土に包含された遺物群」（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）である。遺物の大部は二次的な被熱を受けており、後述するように揃いで上質な磁器、茶陶、日常的な陶磁器などが混在している。

4 図 498･499、502、506、507、512、520 などは上質な磁器製品で、ここでは 1 尺を越えるような磁器製品は図示しなかったが、鉢（東京大学埋蔵文化財調査室 2016、Ⅳ-296 図 514 など）、大皿（502）、中皿（506、507）、小皿（512）、猪口（498･499、520）など法量のバリエーションが存在している。これらの推定残存個体数は、498･499 が 9 個体、502 が 8 個体、506 が 4 個体、507 が 6 個体、512 が 7 個体、520 が 2 個体と揃いで出土している点で、量的に少ないものの武家儀礼にも対応した道具の可能性がある。

また、544 は青磁瓶、567 は水指、572 は茶入、584 は土師質の灰器など、茶の湯の道具が確認され、この他、層中には肥前系磁器色絵合子、いわゆるトラディスカント壺、信楽の腰白茶壺、高麗茶碗なども出土しており、医学部附属病院看護師宿舎地点 SK299 で出土したような唐物を主体とした道具類とは異なるものの（成瀬 2013、堀内 2013、同 2017）、一定の質の道具であると言える。

この他に、548 は肥前系陶器のいわゆる呉器手と呼ばれる灰釉碗、562 は「小松吉」の刻印が押印される肥前系陶器のいわゆる京焼風陶器香炉など、揃いの磁器製品と茶の湯の道具とともに製品階層の高いとは言えない製品も一定量存在している。

上記の様相は、本地点の SD246･3100 や C2 層出土遺物とも異なっていることが指摘できる。ここで留意したいことは、C3 層出土資料と医研地点との接合例はない点である。



4図　入院棟A地点 C3層出土資料(S=1/3)

④器種組成からみたSD246･3100、C2層、C3層

これまでみてきたように、SD246･3100では白磁壺が最も多く、C2層では揃いの上質な磁器類が中心で若干の日常陶器類、C3層では揃いの磁器類、茶の湯の道具、日常陶器類で構成されているなど、この3者の様相が異なっていることが確認される。また、接合関係を有する資料は、医研地点北側にある遺構とC2層出土資料のみで､この3ユニット同士の接合は確認されない。しかし、それぞれ白磁壺、茶陶、揃いで上質の陶磁器などが主体的であることから、御殿空間から持ち込まれたものと判断される。また、いずれも少量ではあるが、日用品も混ざっており、純粋に保管状態が反映しているものではない可能性が高い。こうした状況は、後述するように火災後の陶磁器廃棄の方法と過程に起因すると考えられる。

（2）天和2（1682）年の火災後の再建過程に関わる史料

天和2年の火災は、その年の年末12月28日のことであった。その後の屋敷再整備に関しては、史料によると以下のようなプロセスで行われている。

・天和3（1683）年3月15日 〔袖裏雑器〕（前田育徳会1931）

西之方隅に而十間餘之所、飛騨守様御屋敷之内江御囲込被成度由に御座候へ共、十間餘四方へ出はり、御両方様御屋敷なり悪敷成申候。大蔵大輔様御屋敷と飛騨守様御屋敷との間空地出来に付、此分飛騨守様御屋敷歩高に御入､其並西之隅右空地之幅ほと飛騨守様御屋敷へ御入、御屋敷なり能被仰付候事。

などとあり、翌年3月にその後の加賀藩本郷邸内の屋敷境についてのアウトラインが固められている。このあたりは、大聖寺藩邸に関わる部分であり、その詳細は入院棟A地点の報告書宮崎論考を参照されたい（宮崎2016）

・同年3月21日 〔菅綱記〕（前田育徳会1931）

旧臘東都三邸共に延焼するが故に、駒込の邸に仮館を設く

と火災後は、三屋敷とも消失し、駒込の中屋敷仮の御殿を建てて居住している。

・貞享2（1685）年3月1日〔政隣記〕（前田育徳会1931）

三月朔日江戸御上邸御普請奉行御小将頭山崎半左衛門、下奉行御大小将宮井武兵衛・坂野忠兵衛・御馬廻組外作事奉行より広瀬市助江被命。半左衛門は御留守中御簡略奉行も被命。四月廿五日釿始、十一月廿八日柱立御祝被下之。十二月十九日棟上、御扶持人大工等江拝領物被仰付。翌年九月御作事一切済、右奉行罷帰賜有。

と本格的な再建は、火災からおよそ2年3ヶ月後の貞享2年3月から開始されていることが確認され、翌年9月の完成までに1年半程度かかっている。

・貞享4（1687）年7月廿五日〔聖藩年譜草稿〕（石川県図書館協会1937）

江戸御上屋敷御普請出来、七月廿五日移徒。

これは大聖寺藩邸の普請で、正確には引っ越した時が7月25日であり、屋敷の再建が終わったのは、それ以前である。加賀藩邸が貞享3年9月には終わっているのに対してやや遅れて完成している。

・貞享4（1687）年9月13日〔参議公年表〕（前田育徳会1931）

十三日江戸。御上屋敷御移徒、御作事方山崎半左衛門延隆奉行之､御一門方並御家中御家老中より献上物有之。辰剋御中屋敷御出、戸田山城守御勤、御上屋敷江被為入、御屋敷へ御帰。申下剋重而御中屋敷御出、御上屋敷へ御移徒。段々昨十二日以御書立上屋敷被仰出有之。御在住。

と前史料では加賀藩邸は前年の9月に完成しているとされる一方、理由は不明ではあるが、5代藩主前田綱紀が本郷邸に移ったのは1年後のことであったことが判る。この段階で火災の後始末が完了したとみて良いだろう。

（3）加賀藩邸と大聖寺藩邸の再建の過程

本格的な再建が開始された貞享2（1685）年3月までに、その前処理として必要な瓦礫処理や屋敷地の地業整備などを行っていたのか不明である。しかし、被災から再建へのプロセスは、比較的時間を掛けて行っていることが判る。ここで加賀藩と大聖寺藩との関係についてみると、屋敷造成、再建は連動して行っており、発掘状況と照射すると以下のような手順で行われていることが推定される。

①加賀藩の瓦礫を大聖寺藩邸内に処理～入院棟A地点C2、C3層の形成

屋敷復興の最優先は御殿の再建にあるが、これまでの調査から詰人空間内に作られる建物の多くは単独の長屋建物であり、広い平坦地を必要としていない。これに対して御殿は建物が複雑に連結される為に、広い平坦地を必要としており、建築前に広い面積確保する為の造成することになる。したがって、火災後の再建に向けての最初のアクションは、平坦地の造成と、それ以前に行う瓦礫処理と言える。瓦礫処理は基本的に屋敷内で行なわれ付近に存在する井戸や地下室などの地

面を掘って構築する施設への廃棄の他に、本地点と入院棟Ａ地点のように大きな移動を伴う廃棄が行われる場合もある。本地点天和２年以前の土地利用（フェイズ５）は、調査成果からSD4301以北に御殿空間の建物、SD4301とSD246･3100間は御殿空間内のオープンエリア、SD246･3100とSD236･2095･3021間は御殿空間外のオープンエリア、SD236･2095･3021以南は詰人空間になっていたと考えられる（本研究編研究１参照）。御殿内であるSD246･3100以北で確認された遺構のうち井戸はSE4296、地下室はSU4346のみである。このうちSE4296は土層堆積から井戸側を使用した新しいタイプの構造をしているものの足掛けのある古い形態が残っているのに加えて、出土遺物の主体は17世紀前半にあり、覆土にも焼土が確認されていないことから天和２年の火災時にはすでに埋められており、機能していなかったと推定している。また、SU4346は帝国大学時代に埋設された電気設備の配管によって大部分が壊され、完掘できていないことから詳細は不明である。こうして当該地周囲をみると火災後の瓦礫処理が可能な深い遺構はほとんど存在せず、その後処理は大きな移動を伴う必要があったと推定される。

一方、大聖寺藩邸では、入院棟Ａ地点の天和２年火災後の屋敷再整備に伴う嵩上げ地業もC2層の他にC3層が存在するが、C3層が下位層であり、ここでも期間は不明であるもののタイムラグが想定される。藩邸火災直後には、藩邸仮門として建築されたとされる医学部附属病院第２中央診療棟地点SB1335が、藩邸内外の屋敷変遷（前掲、天和３年３月15日史料）と造成過程（C3層の埋立）から、少なくとも天和３（1683）年３月まで機能していたことで、入院棟Ａ地点、第２中央診療棟地点Ｄ面への造成が火災直後ではなかったと判断できる。火災時の生活面（Ｃ面）直上の盛土（C3層）から出土した陶磁器類は、本地点との接合関係がない点、および出土陶磁器の器種や文様などの様相は、本地点出土遺物との共通性があまり感じられない。このことから、C3層を形成した造成土は加賀藩邸の御殿付近から運ばれた可能性は高いと思われるものの、少なくとも医研地点付近からのものではなかったと判断される。次いでその上層に盛られたC2層は、接合関係にある資料が、医研地点の特定の遺構ではなく北域から出土している。これらのことから火災後の処理に関わる焼土や廃棄物が本地点北側を中心として広範囲に持ち込んだことが看取された。

②加賀藩の御殿空間の造成～入院棟Ａ地点SK3の構築

医研地点で、最も多くの被災資料が出土したSD246･3100からはC3層、C2層との接合資料は確認されないのみならず、廃棄された製品の様相が大きく異なっていることが指摘でき、これらと遺物からみた関係性は希薄であった。SD246･3100は、土層の観察から石組溝であった石の抜去した後に、遺構を埋め戻す過程の上層に焼土および被熱した陶磁器類が確認された。したがって、陶磁器類は、火災直後の後処理ではなく、Ｄ面からＣ面に造成を行う御殿再整備で埋め立てられた中に含まれていたものであった。おそらくSD246･3100の埋め立てとその後の生活面であるＣ面への盛土は、①で述べた瓦礫処理後に同時に行われたと推定される。

造成土について触れてみたい。大聖寺藩邸である入院棟Ａ地点では、C3層、C2層が盛土された後の確認面であるＣ面から切り込まれた巨大な土坑（SK3）が掘削される（東京大学埋蔵文化財調査室2016）。この土坑は東西約20m、南北約55m、深さは最大4.3mを測る巨大なもので、掘削後泥炭を用いて短期間のうちに埋め戻されていたことが報告されている。以前、筆者が遺構容量が数百㎥を超える532号土坑（320㎥）、270号土坑（312㎥）、618号土坑（292㎥）、678号土坑（1,000㎥）などの大型土坑について、遺構容量と遺物の包含量から、主に御殿造営のために使用する土を得る目的と推定した（堀内2005b）。SK3の遺構容量はその中では飛び抜けて大きく、その稿では2,500㎥としたが、その後、調査を担当した成瀬氏によって「3,000立方メートルを越える」と修正された（成瀬2011）。

ここで、火災後に天和２年までの生活面からそれ以後盛土された土量を推定したい。天和火災以降それまで使用していたＤ面上に盛土を行い、御殿空間として殿舎が建てられる（Ｃ面）。Ｃ面の標高はおおむね22.7mであった。別項（本研究編研究１）で指摘したように元禄16（1703）年までは調査区南端、それ以降はSD233･2160までが御殿空間域として平坦面にして利用していたと推定できる。したがってＤ面上の土盛りは、北端からSD4301までが約10cm、SD4301から東大グリッド218ラインまでが30～40cm、218ラインからSD246･3100までが約20cm、SD233･2160から調査区南端までが約60cmの厚さで行われた事になる。本地点内だけであるが、本地点の東西幅がおよそ30mなので、計算とすると本地点内のみで1,300㎥程度にものぼる。成瀬氏も指摘しているが、大聖寺藩邸内のSK3が加賀藩御殿造成目的で採土されたと推定されるものの（成瀬2011）、採

られた土が本地点の造成に使用されたのかは明確にはできない。ただし、「武州本郷第図」とその後の「御上屋敷御殿閣図」（共に前田育徳会所蔵）に描かれた御殿全域の造成に使用された土量は、SK3 から出た土量では足りなかったと思われる。

③本藩の庭園整備、建物再建に伴う残土および建築残滓処理～ SK3 埋土と建築関連遺物

入院棟 A 地点 SK3 は、報文によると「坑底直上から埋没後の庭園整地層直下まで全て泥炭層で構成されている」（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）特殊な覆土で、これは土壌分析の結果「池沼地特有の植物遺体が含まれていることが判明した。･･･（中略）･･･本郷邸内でこれだけの土量の供給源といえば、育徳園心字池とその周辺以外には考えがたい」（成瀬 2011）と加賀藩邸庭園整備による土の移動が指摘されている。加えて、埋土には加賀藩邸か大聖寺藩邸かは明確にはできないものの、屋敷再建の過程で出たと思われる建築部材や鉋のくずなどが含まれていた。しかし、加賀藩の再建完了は貞享 3 年 9 月であったのに対して、大聖寺藩邸の再建は貞享 4 年 7 月（ヵ？）で、本藩の再建・整備が優先されていたことが看取される。そして、SK3 が「完全に埋め戻されたのは、元禄年間前半」と屋敷完成後も完全には埋められていなかったと推定されている（成瀬 2016）。

上記のように、造成の過程と造成土に含まれている焼土、遺物の様相、および文献史料との検討から、火災後の加賀藩邸と大聖寺藩邸の造成・再建のプロセスと具体的状況を推定した。こうした過程で、加賀藩とその支藩である大聖寺藩の屋敷整備が連動しており、いくつかの点で明確に加賀藩の屋敷再建のために大乗寺藩域が利用され、本藩の作事が優先されていたことが看取できた。

2．武家儀礼道具のコレクション形成と本郷邸

C2 層、医学部附属病院中央診療棟地点 L32-1（以後、「L32-1」と略す）は、共に天和 2（1682）年の火災によって廃棄された食膳具を中心とした一括資料である。しかし、C2 層が接合関係から加賀藩邸から持ち込まれたものと考えられるのに対して、L32-1 は大聖寺藩邸内に廃棄された資料であった。これらの陶磁器群は、これまで何回か指摘したように御殿で行われる年中行事や人生儀礼などの武家儀礼の場で使用する目的で具備された道具と考えられる。筆者は、以前 L32-1 出土陶磁器のコレクション形成について論じたことがある（堀内 2009）。ここでは同様に C2 層出土陶磁器の年代的分析を加えた上で両者の違いとコレクション形成について触れ、一括資料の成立要因について考えてみたい。

（1）分類の基準と C2 層、L32-1 出土遺物の生産年代

①分類の基準

「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類」（以降、「東大編年」と略す）では、「年代相の復元」を分類目的としたことで、設定した分類コード「小器種」は器形的特徴だけではなく時間的に変化する技法をも分類基準にしている（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）。こうした点からここで分析を加える C2 層、後述する L32-1 などから多く出土する肥前系磁器皿・平鉢の分類である JB-2-a、JB-2-c、JB-2-d などは生産年代を加味したものとなっており、一括資料における小器種の存否、多寡などが遺構や層の年代的判断基準になっている。だたし、この分類の母体となった『医学部附属病院地点』の調査報告（東京大学遺跡調査室 1990）では分類基準と同じ表記法であるが、小器種の説明の中で、当時の研究成果を踏まえた生産年代を表記している。例えば、JB-2-a は「所謂初期伊万里の皿で、高台径が小さく、生掛けのもの」で 1600-1650、JB-2-c は「高台の断面は三角で、径が大きいもの」で 1650-1680、JB-2-d は「高台の断面が U 字状で、畳付際まで施釉されている･･･南川原窯ノ辻窯の製品が指標」で 1690-1730 である。しかし、その後の研究の進展に伴って、この段階で提示した年代が修正されており、また、これ以降は共通の年代アセンブリッジの様相から東大編年を構築しており、小器種ごとに推定生産年代表記は行っていない。一方、提示した報告刊行から 30 年が経過しており、その後の研究の進展に伴って 17 世紀後半の上質な磁器製品の技術的変化サイクルから詳細な編年が可能となっている。

資料群の、年代的な再検証を行う上で、L32-1 の年代組成の成果を参考に以下のように分類した。

ⅰ、16 世紀以前の製品
ⅱ、16 世紀末～ 17 世紀初頭の製品
ⅲ、1630 ～ 50 年代の製品
ⅳ、1650 ～ 60 年代の製品
ⅴ、1660 ～ 70 年代の製品

このうちⅰとⅱは、国産磁器が江戸への流通以前のもので全て中国製品であり、ⅰは江戸時代より前の製品で伝世品として理解して良いもの、ⅱは本郷邸成立より前のものである。したがって、ⅰ、ⅱは加賀藩本郷邸が生産時に持ち込まれたものではない。ⅲは本郷邸成立後の

製品で、中国製品は崇禎期、日本産はいわゆる初期伊万里（皿では東大分類の JB-2-a と JB-2-b、大橋氏の分類「寛永様式」、一部の「正保様式」（大橋 2003））が該当する。ⅳは技術革新によりハリ支え、糸切細工などの使用によって質の向上したもの（皿では東大分類 JB-2-c、大橋氏の一部の「正保様式」、一部の「寛文様式」）が該当する。ⅴはいわゆる柿右衛門様式、髙島氏の提唱した南川原山様式（髙島 2013）（皿では東大分類 JB-2-d、大橋氏の一部の「寛文様式」と「延宝様式」）が該当する。年代に特徴的な銘款、主文様、裏文様、技法などから判断を加えたが、こうした属性が少ない白磁や年代をまたがってしまう可能性を有するものなどは両方を表記した。

② C2 層、L32-1 出土磁器の年代、器種、推定生産地

C2 層の 154 点、L32-1 の 103 点の磁器製品について分析を加えた。

・ⅰ段階の製品

C2 層では、皿・平鉢類は、龍泉青磁盤が 1 点である。他は、景徳鎮の金襴手や青花の瓠形徳利、大型の青花壺などが出土している。L32-1 では、龍泉青磁皿、盤、水注、鉢、景徳鎮青花盤が該当する。両遺構ともこれらは大型製品が多く、全て 1 点のみで複数個体で確認されているものはないのが特徴である。

・ⅱ段階の製品

C2 層では、景徳鎮明末の揃いの皿や鉢、漳州の大平鉢がこの段階の製品である。L32-1 では、景徳鎮色絵や青花皿、大鉢、坏で、景徳鎮の大鉢と漳州の大平鉢が 1 点のみで出土している他は複数個体で出土しているものが多くなる。

・ⅲ段階の製品

前段階までは全て中国製品であったが、本段階から国産磁器が加わる。C2 層では、景徳鎮皿、鉢、瓶、坏、蓋物と肥前染付皿、鉢である。L32-1 では、景徳鎮碗、皿と肥前染付皿である。中国製品にはいわゆる古染付や祥瑞風の文様や型成形の製品が確認される。肥前はいわゆる初期伊万里と呼ばれる製品である。この段階の碗、皿、坏類は複数個体で出土している。

・ⅳ段階の製品

この段階の磁器製品は全て国産である。C2 層では、碗、大皿・大平鉢、皿、鉢、坏、猪口、合子である。皿類が最も多い。L32-1 では、この段階の製品が最も多い。碗、皿、大皿・大平鉢、坏、鉢、瓶、壺である。大皿・大平鉢は、景徳鎮、漳州、龍泉などの中国製品から肥前染付やいわゆる古九谷様式の色絵製品などもが確認される。大型の鉢や皿、壺、瓶、合子などは単体で出土するが碗、皿、坏などは複数個体で出土する。

・ⅴ段階の製品

C2 層では、この段階の製品が最も多い。碗、皿、鉢、坏、猪口、蓋物、銚子などであるが、皿、鉢が最も多い。L32-1 では、数量が激減する。明らかにこの段階の製品は 1 点である。特に C2 層ではいわゆる柿右衛門様式の色絵製品、南川原山様式の型物の染付や白磁の製品が多く確認される。

年代組成をみると最大の相違点は、製品の年代的ピークが異なる点である（1 表）。白磁・青磁製品を中心に分類が難しいものが一定量認められるが、C2 層はⅴ段階の 1660 ～ 70 年代の製品が最も多いのに対して、L32-1 はⅳに分類した 1650 ～ 60 年代が 6 割を占めている。また、ⅰ～ⅲに分類した古い段階の製品も、C2 層はⅰが 5%、ⅱ - ⅲが 4%、ⅲが 9% で合計 18% と 17 世紀前半までのものが少ないのに対して、L32-1 はⅰが 8%、ⅱ - ⅲが 12%、ⅲが 15% で合計 35% と 2 倍の開きがある。また、新しい段階では L32-1 はⅴ段階に比定される製品は 1 点（1%）のみである。

L32-1 の分析では、年代に相関した器種や生産地に一定の傾向がみられた。C2 層出土製品も基本的には同様の傾向を示すが、C2 層を含めた陶磁器群の分析を踏まえて、以下のように整理できそうである。

① 16 世紀以前の大型龍泉青磁、景徳鎮青花

② 明末の漳州の大平鉢と揃いの景徳鎮の青花を中心とした皿・鉢類

③ 1650 ～ 60 年代を中心とした揃いの肥前の染付、白磁を中心とした皿・鉢類

④ 1660 ～ 70 年代を中心とした揃いの肥前の染付、白磁を中心とした皿・鉢類

⑤ 17 世紀後半の肥前系色絵大皿類

このうち C2 層では、③～⑤を中心に④が最も多い組成で、L32-1 では、①～④を中心に③が最も多い組成と

1 表　年代組成

	ⅰ	ⅱ - ⅲ	ⅲ	ⅳ	ⅳ - ⅴ	ⅴ	不明	合計
C2	8	6	14	36	21	62	7	154
	5%	4%	9%	23%	14%	40%	5%	
L32-1	8	12	15	62	5	1	0	103
	8%	12%	15%	60%	5%	1%	0%	

2 表　産地組成

	景徳鎮	漳州	龍泉	肥前	その他	合計
C2	17	2	1	134	0	154
	11%	1%	1%	87%	0%	
L32-1	23	2	5	73	0	103
	22%	2%	5%	71%	0%	

なる。

（2）C2 層、L32-1 のコレクション形成

このように C2 層と L32-1 では、年代的下限は同時期であるもののコレクション形成のプロセスに差異があることが看取された。L32-1 では、上記分析から 3 段階に分けて購入、買い足しを行い、コレクション形成されたことを指摘した。

a 段階：崇禎期の中国磁器と初期伊万里を一括購入・使用していた段階

b 段階：1650 ～ 60 年代に肥前磁器を一括購入し、これと合わせて使用していた段階

c 段階：若干の買い足しをしながらコレクションを使用・維持していた 1670 年代の段階

一方、C2 層でも同様の形成過程を考えてみたい。分析ではⅲ段階（17 世紀前半）までの製品は、全体の 2 割にも満たない。量的に増加するのはⅳ段階（1650-60 年代）になってからで、本藩の儀礼道具と考えるのであればこの段階から本格的に開始された可能性が強い。なぜなら前代から武家儀礼道具として引き継がれている製品があれば、多くの中国製品や初期伊万里が存在していると考えるからである。図示されている以外にも龍泉の青磁などは 2 個体しか確認されていない。これらから、C2 層は以下のようなコレクション形成のプロセスが想定される。

b 段階：1650-60 年代に肥前磁器を一括購入し、使用開始した段階

c 段階：1660-70 年代に肥前南川原山様式の製品を買い足し、合わせて使用していた段階

（3）本郷邸と C2 層、L32-1 －可能性の指摘－

筆者は、量的にみて L32-1 のコレクションが大聖寺藩によって使用・保管していたのか？について疑問を持っていた。L32-1 から出土した磁器は膨大な量で、出土した地下室が近代以降に大きく撹乱され、覆土の 3/4 程度が喪失したにも関わらず、遺存している磁器の推定個体が 726 個体カウントされ、さらに分類すらできなかった小破片が数多く存在することから、コレクション全体の総量は、おそらく数千個体に上ると思われる。

大聖寺藩は、周知のように加賀藩の支藩として寛永 16（1639）年に立藩した加賀国江沼郡を領国とする石高 7 万石の藩である。藩史大辞典によると幕末の士分は、320 人である。これは加賀藩の明治 2（1869）年の士分の 5,594 人と対比するとおおむね石高に比例していると言える。

本郷邸に目を向けてみたい。宮崎氏によると寛政 10（1798）年の調査史料では、江戸屋敷全体の詰人数が 2,824 人で、直臣が 240 人、陪臣が 837 人、足軽以下の小者が 1,747 人となっていること、加えて藩主とその家族、奥女中などが加わり「本郷邸居住者の総数は 3 千数百人か、あるいは 4 千人を超えていたかもしれない」（宮崎 1990）と推定しており、家臣を集めての儀礼時には相応の量の道具が必要であったと考えられる。これに対して大聖寺藩士の人数から勘案すると本郷邸に居住している家臣は、陪臣、小者を入れてもおそらく 200 ～ 300 人程度と推定されることから、明らかに磁器だけで数千枚の量は過大であろう。

ここで本郷邸の利用状況を再確認したい。大聖寺藩が立藩するのが、寛永 16（1639）年で同時に 3 代藩主前田利常が本郷邸に隠居している。ただ、利常はそれより以前から、本郷邸を利用しており、寛永 9（1632）年の上屋敷辰口邸の火災時には、本郷邸から駆けつけている。利常は 20 万石の巨大な隠居料を得ることになり、隠居所であった本郷邸も「此本郷之亭は、微妙公之御好物を以造作なされ、世上に名高き一本柱之間など云、夥敷御作事なり。今の世ならば、いか計にては出来む。昔なりとも過分之物入にてこそあらめなどといふ」（高卑雑談）と相当な豪奢な殿舎があったと考えられる。

一方、隠居後の加賀藩は 4 代光高が跡を継ぐが、正保 2（1645）年 31 歳で亡くなる。子の綱紀が嗣ぐが、この際に綱紀が幼少であったことから後見人として藩政を補佐することになる。明暦 3（1657）年に明暦の大火によって辰口邸が全焼し、藩主綱紀は本郷邸に避難している。こうした出来事から、本郷邸は当該時期には上屋敷ではなかったものの、寛永期の後半ころから、－少なくとも正保 2 年以降には－実質的に加賀藩の中心的な藩邸として機能していたと思われる。したがって、藩邸で行われる道具類も相応に取りそろえられていたことが考えられ、明暦の大火以後に藩主綱紀が本郷邸に居を移したこと、翌万治（1658）元年に保科正之の娘摩須姫が来嫁したことは、道具の調達などにも大きな画期となったに相違ない。このように本郷邸では、1650 年代末に新たに多くの表向きの道具が必要であった点、他方、利常は綱紀の婚礼から 3 ヶ月後に小松で死去するが、その時点では生きていたことから、利常所有の表向の道具も存在していたことが考えられる。

状況証拠のみで断定できる論拠は明示できていないが、こうした本郷邸の変遷とを勘案することによって、以下の 2 点の可能性を提示してみたい。1 点目は、C2

層の陶磁器は、これまでみてきたように1650～60年代の製品と1660～70年代の製品が主体を占めており、新たに必要になった道具の一部であった可能性。2点目は、L32-1出土陶磁器は量的に大聖寺藩には過大と思われ、多くは中国崇禎期、日本の寛永期の製品から1650～60年代の製品で構成されていることから、万治元年に死んだ利常が使用していた道具であったものが、遺産として大聖寺藩に贈与された可能性である。ちなみに「三壺聞書」によると前田利治への遺産は、古瀬戸肩衝、一休一行物、住古玉津嶋、橋本壺、左ノ刀、行光小脇差、銀子千貫目と記録されている（石川県金沢城調査研究所2017）。おそらくここに記されているものは御道具として管理されているもののみと思われる。

おわりに

本稿前半では、天和2年火災後の加賀藩と大聖寺藩の藩邸再建過程を発掘調査成果と史料とで具体的に復元した。後半では、出土した加賀藩邸と大聖寺藩邸で所有していた武家儀礼道具の陶磁器様相の相違から、コレクション成立過程の復元をを試みた。共に前田一族の中で同じ本郷邸内にありながら、本家と分家あるいは本家と本家隠居という異なる関係について考察を加えた。本郷藩邸では、御成、火災、屋敷替、冠婚葬祭などの要因で、大きく藩邸の新築、増改築が行われてきたことが判っている（堀内2017b）。そうした改変に伴って使用する道具や内容も変化していると考えられる。藩邸内の造成や出土資料を詳細に検討を行うことで、その一部に言及できたと考えている。

本稿を草するにあたり、大成可乃、大橋康二、小林照子、髙島裕之、成瀬晃司、村上伸之の各氏にはお世話になりました。

【註】

(1) 武家儀礼道具の必要な器種と枚数を知る上で一つの目安として、鍋島の月次献上の数量を参考にしたい。宝暦10（1760）年、月次献上の鍋島について「鉢二、大皿二十、中皿二十、皿二十、小皿二十、茶碗･皿 猪口 此内二十」（大橋2007）の器種や数量に対して、第7代藩主鍋島重茂が幕府に確認を求めた伺書がある。この法量バリエーションが武家の食事に必要であったと思われる。

(2) 残存している中での推定個体数をさす

【引用・参考文献】

石川県金沢城調査研究所　2017 『金沢城普請作事史料５　三壺聞書』

石川県図書館協会　1937 「聖藩年譜草稿」『大聖寺藩史談』

大成可乃　2018 「SK3から出土した陶磁器に関する一考察」『東京大学埋蔵文化財調査室調査研究プロジェクト４　医学部附属病院入院棟Ａ地点の成果－17世紀後葉の陶磁器から－』東京大学埋蔵文化財調査室

大橋康二　2003 『柴田コレクション総目録』佐賀県立九州陶磁文化館

大橋康二　2007 『将軍と鍋島・柿右衛門』雄山閣

髙島裕之　2013 「有田・南川原窯製品の生産技術の背景－江戸遺跡での出土状況と合わせて考える－」『江戸の武家地出土の肥前磁器－罹災資料と初期色絵・鍋島・柿右衛門－』近世陶磁研究会

髙島裕之　2018 「C2層出土資料にみる有田南川原窯産高品質製品の製作技術」『東京大学埋蔵文化財調査室調査研究プロジェクト４　医学部附属病院入院棟Ａ地点の成果－17世紀後葉の陶磁器から－』東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学遺跡調査室　1990 『医学部附属病院地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　1999 「東京大学構内遺跡出土陶磁器･土器の分類（１）」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2

東京大学埋蔵文化財調査室　2004 「医学部附属病院第２中央診療棟地点調査概報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4

東京大学埋蔵文化財調査室　2016 『医学部附属病院入院棟Ａ地点』

成瀬晃司　2011 「加賀藩本郷邸東域の開発－斜面地にみる大名藩邸の造成－」『江戸の大名屋敷』吉川弘文館

成瀬晃司　2013 「罹災資料にみる大名藩邸の陶磁器諸相－天和２年･元禄16年の加賀･大聖寺･富山藩邸出土資料から－」『江戸の武家地出土の肥前磁器－罹災資料と初期色絵・鍋島・柿右衛門－』近世陶磁研究会

成瀬晃司　2016 「加賀藩邸における斜面地開発と変遷」『医学部附属病院入院棟Ａ地点　研究編』東京大学埋蔵文化財調査室

成瀬晃司　2018 「天和２年火災廃棄資料の２側面－C2層とD面焼土出土資料－」『東京大学埋蔵文化財調査室調査研究プロジェクト４　医学部附属病院入院棟Ａ地点の成果－17世紀後葉の陶磁器から－』東京大学埋蔵文化財調査室

堀内秀樹　2005a 「加賀藩・大聖寺藩江戸屋敷で使用された肥前磁器と「古九谷」」『医学部附属病院外来診療帳地点』東京大学埋蔵文化財調査室

堀内秀樹　2005b 「加賀藩本郷邸における廃棄物処置に関する考察」『工学部１号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室

堀内秀樹　2009 「宴会道具としての貿易陶磁器の再評価－大聖寺藩邸出土の貿易陶磁器L32-1」『竹石健二先生・澤田大多郎先生古希記念論文集』

堀内秀樹　2011 「大名藩邸で使用された陶磁器と御殿の生活」『江戸の大名屋敷』吉川弘文館

堀内秀樹　2013 「加賀藩邸の貿易陶磁器出土様相と「蔵帳」に記された陶磁器－『加賀藩前田家表御納戸御道具目録帳』を中心として－」『貿易陶磁研究』33
堀内秀樹　2016 「江戸大名藩邸出土陶磁器の消費モデル－加賀藩本郷邸の出土資料から－」『中近世陶磁器の考古学』第２巻　雄山閣
堀内秀樹　2017a 「近世城郭・城下町の陶磁器」『近世城郭の考古学入門』高志書院
堀内秀樹　2017b 「本郷邸の中ににみる前田と徳川」『赤門－溶姫御殿から東京大学へ－』東京大学総合研究博物館
宮崎勝美　1990 「加賀藩本郷邸とその周辺」『山上会館・御殿下記念館地点』東京大学埋蔵文化財調査室
宮崎勝美　2016 「江戸時代の文献・絵図史料からみた入院棟Ａ地点」『医学部附属病院入院棟Ａ地点　研究編』東京大学埋蔵文化財調査室

医学部教育研究棟地点出土の動物遺体

＊阿部　常樹

はじめに

医学部教育研究棟地点より出土した動物遺体についてはSK2472などの一部で水洗選別法による資料の抽出がおこなわれているが、ほとんどのものは、現場にて肉眼で確認のできたものを任意に採集している。以下、本地点出土の動物遺体の概要を述べると共に、特に17世紀代における加賀藩本郷邸における食文化の一端について考察を深めたい。

1. 分析方法

分析方法は以下のとおりである。なお、脊椎動物の同定作業には、筆者所蔵標本及び国立歴史民俗博物館西本豊弘先生研究室（2013年度以前）所蔵標本を用いた。また、松井（2008）、西本（2002・2003・2005～2009）なども参考にした。さらに、鳥類は松岡他（2009）、イルカ類の頭骨に関しては加藤他（2014）を参考にした。また、魚貝類を中心とした動物遺体に関する近世の食材としての価値について、『黒白精味集』（延享３年（1746年）成立）を基に評価をおこなう（松下他1988･1989）（特に魚貝類に関する詳細は27表を参照）。具体的に、本書の下巻に食材としての価値が、上・中・下の３段階に分けて記されている。

（1）　貝類遺体

計数方法と概要　貝種組成は最小個体数で表している。なお、計数方法は以下のとおりである。まず、基本的に巻貝類は殻高が２分の１以上残存している資料を計数対象とした。しかし、アワビ類やキクスズメなど殻口部分が広くそれによって形状が笠・皿形の巻貝類は、殻頂部分が残存している資料を計数対象とした。一方、二枚貝類は、殻頂部分の残存している資料を計数対象とし、それらを左殻と右殻に分類してからそれぞれ計数した。そして、そのうち多いほうを最小個体数とした。以上の計数対象以外の資料は、「破片」として一括して扱った。なお、各サンプルの分類群内において、計数対象資料が残存せず、「破片」のみである場合は、一括して１個体として計数をおこなった。

主要貝種のサイズ分析（1、2図）　可能なものすべての貝種のサイズ計測作業をおこなった。計測の定義は、阿部（2006）にもとづく（1、2図）。なお、破損が激しく、主要計測部位（殻長など）が計測できないものが多い。そこで、他の欠損の少ない部位からその主要計測部位のサイズを推定した。その際、回帰・相関分析によってその推定式の導出を試みた。具体的にアカガイ、サルボウガイ、ヤマトシジミは鉸歯長（歯間長）から、アサリは殻高から、ハマグリは外靭帯溝長からそれぞれ殻長を推定するための式の導出を試みた。以上の分析結果は、4、6、11、14、16表を参照されたい。以上の式によって推定された主要部位は、「推定○○」として報告する。

（2）　魚類

分類方法　魚類遺体の分析方法は樋泉（1999）に準拠する。具体的には、綱より下位まで同定可能な部位である主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・擬鎖骨・前鰓蓋骨・主鰓蓋骨・椎骨を中心に抽出して「同定対象資料」とし、それ以外の綱より下位まで同定することが難しい部位は「同定対象外資料」とした。また、「同定対象資料」の内、同定するための特徴的な部分が欠損しているために同定することのできなかった資料は「同定不可」と記載した。さらに、本来、同定が可能な資料であるが、一致する現生標本が手元にないなどの理由から同定するに至らなかった資料を「未同定」と記載した。なお、組成は破片数で提示する。

（3）　鳥類・哺乳類

分類方法　同定作業をおこなうにあたって、綱より下位の同定が困難な部位は「同定対象外資料」として対象からはずした。また、同定対象資料において、長骨の端部などの同定の決め手となりうる部分が欠損しているものに関しては「同定不可」と記載した。本来、同定が可能な資料であるが、一致する現生標本が手元にないなどの理由から同定するに至らなかった資料を「未同定」と記載した。なお、組成は破片数で提示する。

サイズの計測方法　サイズの計測定義は、Driesch（1976）に基づく。また、イヌの四肢骨全長からの体高推定には山内（1958）を、ウシの四肢骨計測値からの体高推定には西中川他（1991）の式をそれぞれ用いた。

＊國學院大學学術資料センター

2. 分析結果

分析の結果、本地点から出土した動物遺体は60群であった。種名を表1に示す。以下、貝類、魚類、鳥類、哺乳類のカテゴリーごとに詳細を概観する。

(1) 貝類遺体

(1)-1. 貝種組成（2表、3図）

23群1,424個体が出土している。最も多いのが、シジミガイ属で838個体出土しており、全体の58.8%を占める。ついで、サザエが多く220個体出土し、全体の15.4%を占める。そのほかに、サルボウガイ（88個体・6.2%）、ハマグリ（79個体・5.5%）、アサリ（52個体・3.7%）、アカガイ（42個体・2.9%）、アカニシ（36個体・2.5%）、アワビ類（20個体・1.4%）、マガキ（10個体・0.7%）、ミルクイ、バイ（各7個体・0.5%）、シオフキガイ（3個体・0.2%）などが出土している。

以上の出土した貝種の『黒白精味集』における食材としての価値は、以下の通りである。

上：シジミガイ属（蜆），アカガイ（蚶），アワビ類（鮑），マガキ（蠣），ミルクイ（海松喰），バイ（海贏），タイラギ（蛟）

中：サザエ（栄螺），サルボウガイ（さるぼう），ハマグリ（蛤），アサリ（蜊），アカニシ（蓼贏［ニシ］）

なお、本書に掲載されている貝類で唯一、「下」であるのはバカガイ（ばか※但し柱は「中」）である。そのほかは、「中」以上の評価になっている。つまり、出土個体数4以上の主要な貝種は、「中」以上の価値である上、本書で取り上げられる点で食材としてメジャーなものであったことが指摘できる。

一方で、記載のなかったものは、シオフキガイ、ダンベイキサゴ、ナガニシ、キクスズメ、ハナエガイ、カガミガイ、ナミマガシワ、イワガキ、チョウセンハマグリであった。本地点において3個体以下のもののみである。まず、ハナエガイとキクスズメはサイズ的に食材として持ち込まれたものと考えにくい程、微小である。ハナエガイは潮間帯から水深20mを生息域としている（奥谷編著2000）ことから、ハマグリなどを採集した際に混獲されたものである可能性が推測される。キクスズメは腹足綱の殻上に着生している種である（奥谷編著2000）ことから、共伴するサザエとともに持ち込まれたものと推測される。また、ナミマガシワも基本的にはマガキをはじめ他の貝に着生していることから、キクスズメと同様の可能性が高い。シオフキガイとカガミガイは、アサリやハマグリと生息域が近いことからこれらを採集した際に混獲されたものである可能性も考える必要がある。イワガキとチョウセンハマグリは攪乱より出土していることから、少なくとも本報告では、議論から除いても大丈夫であろう。ナガニシは、アカニシの評価として用いたものが「蓼贏（ニシ）」であり、ナガニシも含まれる可能性も想定される。そもそも、ナガニシ自体、江戸の遺跡から出土することが少なく、そのなかでも、管見の限りでは大名上屋敷跡で比較的出土していることを鑑みると、食材としての価値は比較的高いことも想定される。ダンベイキサゴも、管見の限りでは、文京区春日町遺跡をはじめ上屋敷跡（加藤他1999）から出土している傾向にあり、食材としての価値は高かったと想定される。また、外洋の砂底に生息している種であり、本地点で出土している他の貝種を採集した際に混入したものとは考えにくい。

・遺構別

次に10個体以上出土している遺構に関して傾向を概観する。

SK2020　2群20個体が出土している。内訳は、シジミガイ属が13個体で65.0%、サルボウガイが7個体で35.0%を占める。

SK2121　3種10個体が出土している。内訳は、サザエが7個体で70.0%、アカガイが2個体で20.0%、クロアワビが1個体で10.0%を占める。

SK2174　2種13個体が出土している。内訳は、サルボウガイが12個体で92.3%、サザエが1個体で7.7%を占める。

SK2419　2種10個体が出土している。内訳は、アサリが9個体で90.0%、サザエが1個体で10.0%を占める。

SK2472　6群36個体が出土している。シジミガイ属が17個体で最も多く42.7%を占め、ついでサザエが10個体で多く27.8%を占める。そのほかにハマグリ（5個体・13.9%）、キクスズメ（2個体・5.6%）、ハナエガイ（1個体・2.8%）、ミルクイ（左1点・2.8%）が出土している。

SD3021　6群23個体が出土している。アサリが7個体で最も多く30.4%を占め、ついでサザエとシジミガイ属が各6個体で多く各26.1%を占める。そのほかに、アカガイ（2個体・8.7%）、クロアワビ（1個体・4.3%）、ハマグリ（左1点・4.3%）が出土している。

SK3046　4群14個体が出土している。サザエが11個体で最も多く78.6%を占めるほかは、アワビ類種不明、アカニシ、ハマグリが各1個体（7.1%）出土しているのみである。

SK3082　3種15個体が出土している。ハマグリが12個体で最も多く80.0%を占める。そのほかに、アサリ（2

個体・13.3%）、サザエ（1 個体・6.7%）が出土している。

SK4553[中層]　6 群 41 個体が出土している。サザエが 21 個体で最も多く 51.2%を占め、ついでハマグリが 10 個体で多く 24.4%を占める。さらにアカニシが 6 個体で比較的多く、14.6%を占める。そのほかに、アワビ類（1 個体・2.4%）、アサリ（左 1 点・2.4%）、シオフキガイ（右 1 点・2.4%）が出土している。

SK4556　4 群 22 個体が出土している。サザエが 18 個体で最も多く、81.8%を占める。そのほかに、ハマグリ（左 2 点・9.1%）、アワビ類種不明（1 個体・4.5%）、アカガイ（左 1 点・4.5%）が出土している。

SE4610　6 群 14 個体が出土している。サザエが 8 個体で最も多く、57.1%を占める。そのほかに、バイ（2 個体・14.3%）、ナガニシ、シジミガイ属（各 1 個体・7.1%）、アカガイ、ミルクイ（各左 1 点・7.1%）が出土している。

SK4612　4 種 22 個体が出土している。サザエが 15 個体で最も多く、68.2%を占める。そのほかに、アカニシ（4 個体・18.2%）、アカガイ（2 個体・9.1%）、カガミガイ（左 1 点・4.5%）が出土している。

SK4623　7 群 940 個体が出土している。シジミガイ属が 798 個体で最も多く 84.9%を占め、ついでサルボウガイが 60 個体で多く 6.4%を占める。さらに、ハマグリが 37 個体（3.9%）、アサリが 32 個体（3.4%）で、それぞれ出土しており比較的多い。そのほかに、アカニシ（9 個体・1.0%）、サザエ（2 個体・0.2%）、ナミマガシワ（左 2 点・0.2%）が出土している。

小結　10 個体以上出土している 13 遺構の内、6 基がサザエを主体としている。一方、地点全体で最も多く出土しているシジミガイ属を主体としているのは 3 基で、さらに、地点全体の 95%にあたる 798 個体が SK4623 より出土している。

(1) -2. 主要貝種のサイズ分析の結果と傾向

15 群の貝種に関して、サイズの計測をおこなった。計測及び分析の結果は、3 ～ 17 表及び 4 ～ 7 図を参照されたい。その内、ヤマトシジミとハマグリの推定殻長に関して以下に詳述する。

・シジミガイ属（3、4 表、4 図）

SP2020　データは 10 点である。平均値は 19.3 ㎜、中央値は 19.6 ㎜であった。

SK2472　データは 11 点である。平均値・中央値ともに 27.2 ㎜であった。

SD3021　データは 4 点である。平均値・中央値ともに 25.5 ㎜であった。

SK4623　データが 371 点で、調査地点全体のデータの 93%を占める。平均値は 20.1 ㎜、中央値は 19.6 ㎜であった。ヒストグラムは、18 ㎜以上 19 ㎜未満をピークとする単峰型を示す。

全体の傾向及び小結　データは 400 点である。先述したようにその 93%にあたる 371 点が SK4623 のデータである。つまり、全体の傾向はほぼ SK4623 によるものであるといえる。なお、平均値は 20.4 ㎜、中央値は 19.8 ㎜であった。ヒストグラムは、18 ㎜以上 19 ㎜未満をピークとする単峰型を示す。遺構間で比較すると SP2020 と SK4623 の平均値が 20 ㎜前後であるのに対し、SK2472 と SD3021 の平均値が 25 ㎜前後で後者より前者のほうが明らかに小さい。このことは、箱ひげ図からも明らかである（4 図）。貝種組成において共にシジミガイ属の出土率が、後者 2 基は 50%未満であるのに対して、前者 2 基は 60%を超えている。また、後者はサザエをはじめ大型巻貝類を比較的多く含んでいるのに対して、SK4623 は、アカニシが 1.0%、サザエが 0.2%であまり多くなく、中小型二枚貝類が主体であり、SP2020 に至っては、シジミガイ属とサルボウガイしか含んでいない。現場での資料のサンプリング方法の問題があり、さらに想像の域をでないが、前者、特に SK4623 はむき身にした際の貝殻群であることが想起される。SK4623 の資料の腹縁の一部にむき身の際に欠損したことが想起される小剥離をもつものがある（PL.2）。また、後者のほうは、量が少ないことから食後廃棄されたものであるもの、つまり、殻ごと料理に使われたものであったため、見栄えのする比較的大きいものが含まれていたことも想像される。

・ハマグリ（5、6 表、5 図）

SD2260　データは 4 点と少ない。平均値は 41.6 ㎜、中央値は 41.6 ㎜であった。最大値が 45.0 ㎜であり、すべて 50 ㎜未満に収まる。

SK2472　データは 5 点である。平均値は 51.4 ㎜、中央値は 52.4 ㎜であった。ヒストグラムは、50 ㎜以上 55 ㎜未満をピークとする単峰型を示す。最小値である 47.5 ㎜以外は全て 50 ㎜以上 55 ㎜未満に含まれる。

SK3082　データは 10 点である。平均値は 61.5 ㎜、中央値は 65.0 ㎜であった。ヒストグラムは、45 ㎜以上 50 ㎜未満と 65 ㎜以上 70 ㎜未満にピークをもつ双峰型を呈している。しかし、45 ㎜以上 50 ㎜未満は 2 点のみで、四分位数は 58.7 ㎜～ 66.9 ㎜となっている。

SK4623　データが 27 点で、調査地点全体のデータの 45%を占める。平均値は 43.4 ㎜、中央値は 42.2 ㎜であった。ヒストグラムは、40 ㎜以上 45 ㎜未満をピークとする単峰型を示す。一部、50 ㎜以上のものを含むが、四分位数は 39.4 ㎜～ 48.1 ㎜で 50 ㎜未満に収まる。

全体の傾向及び小結　データは60点である。平均値は50.4㎜、中央値は46.3㎜であった。ヒストグラムは、40㎜以上45㎜未満と65㎜以上70㎜未満にピークをもつ双峰型を呈している。しかし、50㎜未満の36点の75％が、SK4623（23点）とSD2260（4点）のものである。この2基出土のハマグリは、50㎜未満の所謂“中小型”のものを主体に構成している。つまり、一部、イレギュラーとして50㎜未満のものを含む場合もあるが、基本的にほとんどの遺構では50㎜以上の所謂“大型”とされるもので構成されている。一方で、“中小型”のもので構成されている主要な2基の遺構も平均値及び中央値さらに第3四分位数が40㎜台あり、比較的大型であるといえる。『黒白精味集』の「蛤」に関する調理例のなかで、「大蛤」「中蛤」「小蛤」で使い分けている様子が見られる。一般的に、近世遺跡出土のハマグリの殻長に関する度数分布は、先述したように50㎜を境に以上と未満で２つのピークをもつ。その解釈として、料理における使い分けがあったことが桜井準也によって指摘されている（桜井1986）が、『黒白精味集』の記載はそれを裏付けるものといえる。一方で、50㎜未満の“小型”もしくは“中小型”は30㎜台のものが多い。しかし、一部40㎜台でピークを示すものもある。本書の分類にあてはめると、「小蛤」＝30㎜台以下、「中蛤」＝40㎜台前後、「大蛤」＝50㎜台以上とも想起される。つまり、SK4623とSK2260のものは、食材として「中蛤」であった可能性も想起される。しかし、まだ、想像の域は出ておらず、改めて、今後、近世遺跡（特に都市部）全体のハマグリのサイズに関する整理をおこなう必要性があろう。

(2)　魚類遺体（18、19表、8～11図）

魚類遺体は、359点＋αが出土している。その内、綱より下位まで同定できたものは、311点（同定資料）であった(8図)。同定の結果、24群が含まれていた。以下、タイ科の歯（犬歯･臼歯:9点）とアジ亜科の稜鱗（5点）を除く同定資料内297点で組成を算出する。

最も多いのがキス属で78点出土しており、全体の26.3％を占めている(9図、18、19表)。ついで、ハモ属(34点・10.9％）とタイ科（30点・10.1％）の2群が多く、以上の3群以外は10％を超えない。その他に、アユ（21点･7.1％）、アジ亜科（19点･6.4％）、サバ属、ハゼ科（各19点･6.4％）、タラ科（16点･5.4％）、スズキ属（14点･4.7％）、サヨリ科（13点･4.4％）、コイ科（9点･3.0％）、コチ科（6点･2.0％）、ボラ科（5点･1.7％）、マグロ属、カレイ科（各3点・1.0％）、マカジキ科（2点・0.7％）、サケ属、カマス属、ブリ属、サワラ属、ヒラメ、フグ科（各1点・0.3％）が出土している。

(2) -1　遺構別

3群以上の種類が含まれている遺構のみ、詳細を概観する。

SK2472（10、11図、18表）　出土破片数全体の約8割にあたる285点がSK2472に含まれている。その内、綱より下位まで同定できたものは、267点（同定資料）であった。同定の結果、16群が含まれていた。以下、タイ科の歯（犬歯・臼歯：9点）とアジ亜科の稜鱗（5点）を除く同定資料内253点で組成を算出する。

最も多いのがキス属で78点出土しており、全体の30.8％を占めている。次いで、ハモ属が33点で多く、13.0％を占める。以上の2群以外は10％を超えない。その他に、アユ（21点･7.1％）、ハゼ科、アジ亜科（各18点･7.1％）、タラ科（16点･6.3％）、スズキ属（14点･5.5％）、サヨリ科（13点・5.1％）、サバ属（11点・4.3％）、コイ科(9点･3.6％)、タイ科（7点･2.8％）、コチ科(5点･2.0％)、ボラ科（4点・1.6％）、カレイ科（3点・1.2％）、サケ属、カマス属、サワラ属（各1点・0.4％）が出土している。そのうち、キス属、アユ、タラ科、スズキ属、サヨリ科、コイ科、カレイ科の7群は本遺構からしか出土していない。逆に、本調査地点から出土している魚種のうち、マグロ属、マカジキ科、ブリ属、フグ科、ヒラメの5群は本遺構からは出土していない。なお、タイ科で科より下位まで同定できたものは16点中2点で、マダイ（頭骨:前頭骨・上後頭骨・副蝶形骨）とマダイ亜科（左歯骨）であった。

椎骨のサイズに注目すると、同群のなかでもタラ科、マアジ、サバ属、ボラ科はそれぞれ2つ、タイ科は3つに分けられる。なお、コイ科の詳細は「(2) -2.　種類別」にて述べる。

SK4553（19表）　本遺構に魚類遺体は44点含まれている。その内、綱より下位まで同定できたものは、15点（同定資料）であった。同定の結果、4群が含まれていた。以下、その同定資料内で組成を算出する。

最も多いのがサバ属で8点出土しており、全体の53.3％を占めている。その他に、タイ科、マグロ属（各３点・20.0％）、ヒラメ（1点・6.7％）が出土している。なお、タイ科で科より下位まで同定できたものは3点中2点で共にマダイ亜科であった。

SK4623（19表）　本遺構に魚類遺体は14点含まれている。その内、綱より下位まで同定できたものは、12点（同定資料）であった。同定の結果、4群が含まれていた。以下、その同定資料内で組成を算出する。

最も多いのがタイ科で９点出土しており、全体の75.0％を占めている。その他に、ハモ属、マアジ、ハゼ科（各１点・8.3％）が出土している。なお、タイ科で科より下位まで同定できたものは９点中３点で、マダイ２点とキダイ属１点、すべて前頭骨であった。

（2）-2. 種類別

次に、特に説明を要する種類に限り、詳述する。また、近世当時の食材としての価値についても検討する。

ハモ属　ハモ属は、SK2472（腹椎 26 点，尾椎７点）とSK4623（腹椎１点）から出土している。サイズは、すべて小型である。SK2472 は 17 世紀後葉に比定されている。SK4623 は時期が不明とされているがＧ面から検出しており、17 世紀代である可能性が高い。さて、『黒白精味集』において、“鱧”そのものは価値が記されていなかった。しかし、「塩物干物の類」に「干鱧」があり、その価値は「上」とされていた。「干鱧」の説明で、「ごん切也」と記されていた。「ごんぎり（五寸切）」は、辞書によると「小さいハモの干物。細かく刻んでなますなどにする。干鱧。小鱧。」（『大辞林（第三版）』より）とされている。本資料群は小型であることから、「干鱧」であったことも想起される。

タイ科　タイ科は科より下位まで同定できたものとして、比較的多く出土しているマダイ及びマダイ亜科のほかに、クロダイ属とキダイ属が出土している。具体的に、キダイ属はSK4623 から前頭骨が１点出土している。クロダイ属は、遺構外でＦ面から右前上顎骨が１点出土している。なお、「鯛」は「上」であるが、「黒鯛」に関しては「下の上」である。「鯛」は一般的にマダイ亜科（マダイ、チダイ）を指す。キダイ属に関しては、「祝膳などではマダイの代用品」として用いられる（望月監修2005）ことや色が赤であることから、食材としての価値はマダイ亜科と同様に「上」であったと考える。

アジ亜科　アジ亜科で科より下位まで同定できたものは、マアジのみであった。「鰺」は「中の上」である。

ハゼ科　ハゼ科は、SK2472（18 点）と SK4623（前鰓蓋骨右１）から出土している。２基ともに、ハモ属やキダイ属など珍しい種類が含まれている上、食材としての価値が「上」とされるものが目立つ。一方、「沙魚」（はぜ）は、「下の中」である。しかし、「摺身」として使用された場合、「中」であることが記されている。想像の域はでないが、このような「摺身」に用いられた可能性もあるだろう。

サバ属　サバ属は、SK2472（11 点）と SK4553（８点）から出土している。サバ属は「生鯖」である場合は、「下の上」とされている。しかし、「塩物干物の類」である「刺鯖」は「上」とされ、特に「能登」と「加賀」は「吉」とされている。

マカジキ科　マカジキ科は、SK2097・3082 の１層と２層から各１点、吻部が出土している。『黒白精味集』のなかでは、記載が見られなかった。

コイ科　コイ科は、SK2472 からのみ出土している。科より下位まで同定できたものは、下咽頭骨２点で共にコイのものであった。なお、下咽頭骨はもう１点出土しているが、少なくともコイのものではなかった。その下咽頭骨１点も含めて、左歯骨１点、腹椎３点は極めて小型であり、コイの下咽頭骨２点、コイ科の角骨右２点とは別個体由来のものである。なお、「鯉」と「鮒」は「上」であるが、比較的小型の種類である「鮠」（ウグイ属）と「鮠」（オイカワ）は「下の中」であり、特に小型の資料に関して評価しにくい。

スズキ属　スズキ属は、SK2472 からのみ出土している。属より下位まで同定可能な主鰓蓋骨は出土していない。なお、椎骨に大型のものが含まれている反面、右前鰓蓋骨や椎骨に小型のものが含まれている。少なくとも、椎骨のサイズから３つに分けられる。「鱸」は「上」であるが、成長途中である「ふっこ」と「鮗」（セイゴ）は「中」とされている。サイズが３つに分類されたが、最も大きい種類は「鱸」、そのほかの２種類は「ふっこ」と「鮗」と考えるべきであろう。

ボラ科　ボラ科は、SK2472（舌顎骨右１，腹椎２，尾椎１）と C-D 面（尾椎１）から出土している。C-D 面の尾椎は大型である。SK2472 の椎骨は、C-D 面のものに比べてやや小型であった。また、SK2472 のなかでも腹椎２点に比べて尾椎１点はやや小型である。「鯔」は「中」である。

その他の魚種の価値　以上の魚種以外の『黒白精味集』における価値は、「上」が、キス属、アユ、タラ科、カレイ科、サケ属、サワラ属、「中」が、コチ科、ヒラメ、「下」が、マグロ属、カマス属、フグ科、ブリ属となっている。

（3）　鳥類遺体（20、21 表、12、13 図）

鳥類遺体は、89 点＋ α 出土している。その内、綱より下位まで同定できたものは、35 点であった（同定資料）（12 図）。同定の結果、５群が含まれていた。以下、比率は、同定資料内で算出する。

最も多いのがカモ亜科で 18 点出土しており、全体の51.4％を占めている（20 表、13 図）。ついでキジ科（８点・22.9％）とガン亜科（６点・17.1％）が比較的多い。その他に、タカ科［ワシ類］（２点・5.7％）、ハト科（１点・2.9％）が出土している。なお、サイズの計測値データは、

21 表を参照されたい。

さて、出土している鳥類の『黒白精味集』での食材としての価値は、まず、ガン亜科とカモ亜科に属する種類は全て「上」である。キジ科は、キジ（雉子）、ウズラ（鶉）は「上」であるが、ニワトリは「下」とされている。ハト科は、キジバト（雉子鳩）が「上」とされている。また、種類はわからないが、「小鳥」は「中」である。なお、タカ科の記載をなかった。ほとんどのものは、食物残滓であると想定される。タカ科に関しては、近世において加賀藩上屋敷で飼育していたものである可能性が推測される。

(3) -1　遺構別

次に 3 群以上の種類が含まれている遺構のみ、詳細を概観する。

SK2472　本遺構からは 50 点出土しており、その内、綱より下位まで同定できたものは 14 点であった（同定資料）。同定の結果、3 群が含まれていた。以下、比率は同定資料内で算出する。最も多いのがカモ亜科で 12 点出土しており、全体の 85.7％を占めている。その他に、ガン亜科とキジ科が 1 点（7.1％）出土している。なお、キジ科の右足根中足骨は極めて小型であり、ウズラなどの可能性が考えられる。さらに、本遺構には、未同定とした脛足根骨左右各 1 点であり、極めて小型である。この 2 点は、サイズと形状から同一個体と考えられる。また、本遺構は 32 点も同定対象外とした資料が含まれている。その内、部位がわかるものが 19 点である。趾骨 15 点で多く、サイズから 3 つに分けられる。本遺構から出土している 3 群共に足根中足骨が含まれており、それぞれに対応するものと想定される。また、上顎骨（嘴）が 1 点出土しているが小型でスズメ標本などに比較的似ている。

Ⅱ・井戸脇　本遺構からは 9 点出土しており、その内、綱より下位まで同定できたものは、5 点であった（同定資料）。同定の結果、3 群が含まれていた。具体的に、タカ科［ワシ類］、ニワトリ（各 2 点・40.0％）、カモ亜科（1 点・20.0％）が含まれている。本遺構は、残念ながら具体的に報告されているどの遺構にあたるか不明である。Ⅱ次調査において、井戸（SE）は、SE2001 と SE2053 の 2 基である。SE2001 は 17 世紀前葉から中葉に比定されている。対して SE2053 は近代と比定される。さて、タカ科は、鷹狩用に飼育されていたものであることが想定される。そのことから、近代の侯爵邸や大学時代のものよりも近世の大名屋敷時代のものと想定され、SE2001 の掘方の覆土より出土したものであることが想定される。

(3) -2. 種類別

次に種別に詳述する。

キジ科　キジ科にはニワトリが 5 点含まれている。内、SK0465（左上腕骨）と SK3014（左烏口骨）は共に大正時代と比定されている。なお、SK3014 の左烏口骨は化骨化の途上である。SK4553 中層（右大腿骨）は 17 世紀前葉に比定されている。なお、内側顆背面に切断面が認められる。また、調査時に「Ⅱ - 井戸脇 sec」と注記された資料が出土している。具体的に、「Ⅱ - 井戸脇 sec」からは、右上腕骨と右脛足根骨が出土している。キジ科とした資料 3 点のうち、SP0891 の左脛足根骨や右橈骨もサイズからニワトリである可能性が高い。なお、SP0891 は 17 世紀中葉に比定されている。

ガン・カモ類　本遺跡から出土しているカモ科の内、ガン亜科は、SK2472 から 1 点（右足根中足骨）と SP4091 から 5 点出土している。SP4091 より出土している 5 点は同一個体のものと想定され、左の橈尺骨から翼部の先端にかけて廃棄されていたものと想定される。カモ亜科は、本調査地点で最も多く出土している。SK2288 からは上顎骨（嘴）も出土している。また、SK2472 では最小で 2 羽分含まれており、共に上肢部分と下肢部分が出土している。

ハト科　ハト科は、SD0233 から右大腿骨が 1 点出土している。骨頭部分にわずかであるが、切断面を有することから、食用もしくは鷹餌などに使われた可能性が想起される。

タカ科　タカ科は、「Ⅱ - 井戸脇 sec」から左烏口骨と左上腕骨が出土している。サイズが比較的大きいことから「ワシ類」であることも想定される。

(4)　哺乳類遺体（22、23 表、14、15 図）

哺乳類遺体は、53 点出土している。その内、綱より下位まで同定できたものは 38 点であった（同定資料）（14 図）。同定の結果、8 群が含まれていた。さらに、ウシかウマのものと想定される大型家畜としたものが 4 点含まれていた。以下の比率は、先の同定資料に大型家畜を含む 42 点で算出している。

最も多いのがイヌで 14 点出土しており、全体の 33.3％を占めている（22 表、15 図）。ついでニホンジカとウマ（ウマ？も 1 点含む）が各 6 点で 14.3％を占める。さらに、イルカ類が 5 点で 11.9％を占めている。その他に、ウシ、大型家畜（各 3 点･7.1％）、ネコ、ネズミ科（各 2 点・4.8％）、ウサギ科（1 点・2.4％）が出土している。以下、特に説明の要するニホンジカ、ウシ、ウマ、大型家畜、イルカ類について詳述する。なお、サイズの計測

値データは、23 表を参照されたい。

『黒白精味集』に記されている本調査地点より出土している哺乳類は、ニホンジカ（鹿）、ウシ（牛）、ウサギ科（兎）、イヌ（赤犬）である。その内、食材としての価値が記されているのは、ニホンジカのみである。ニホンジカは、「女鹿　若鹿二歳上也」とされている。

なお、ウシとウサギ科は、近代以降に比定されている遺構・面や攪乱より検出している。イヌに関しては、解体痕などの積極的に食されたものとして評価のできる痕跡は観察されず、むしろ、屋敷内に棲んでいたものと考えるほうが妥当である。以上から、近世の食物残滓と想定されるものは、ニホンジカとイルカ類の一部である。

・動物種別

以下､特に説明の要する種類に限って個々に記載する。

ニホンジカ　ニホンジカは、2 基の遺構から 2 点と出土地不明のものが 4 点含まれている。2 基の遺構は共に 17 世紀前葉に比定されるものである。SK2049 からは右上腕骨、SK3082 から右大腿骨が出土している。対して、出土地不明の 4 点は角の破片であり、内 2 点は切断痕を有している。これらの角は、製品を作成した際の端材と考えられる。

ウマ　ウマは、6 カ所から 6 点出土している。SK3044 上層から後脚基節骨が 1 点出土しているほかは、すべて歯である。なお、SK3044 上層は明治時代に比定されている。歯 5 点中 3 点は、時期が不明であった。時期のわかっている SK2049（右上顎第 1 後臼歯）と SK4628（左上顎第 3 後臼歯）は、共に 17 世紀前葉から中葉と比定されている。

ウシ　ウシは 2 基の遺構から 2 点出土している。SK0244 から左上腕骨、SK3014 から右上腕骨が出土している。推定体高は SK0224 が約 115 ㎝、SK3014 が約 123 ㎝であり、現生の在来和牛のメス（125 ㎝）ほどのサイズであった。SK0224 は骨幹部分に鋸によるものと想定される切断面を有しており、尾方（Caudal）から頭方（Cranial）へ切断されている。つまり､久保（1998）の分類では B 種である。また、骨頭の内側に 2 条の刀傷が横位についている。SK3014 は骨幹部分に鋸によるものと想定される切断面を有さないが、所謂、スパイラル状の割れ痕がみられる。つまり、人為的な打撃によって破壊されたものと想定される。SK3014 は大正時代に比定されている。対して、SK0244 は時期が不明（17 世紀中葉から 19 世紀中葉）とされている。おそらく、ともに、西洋料理の出汁に用いられたものと想定され、近代以降に廃棄されたものと想定される。また、推定体高から在来和種であることが示されており、改良和種が導入される明治 42（1909）年以前、もしくは近い時期（大正時代であれば前半）のものと想定される。

大型家畜　大型家畜とした資料は、3 点中 2 点が表土であり、もう 1 つも A 面と最上面から出土している。つまり、比較的新しい時期に廃棄されたものであることが想起される。また、これらの資料はいずれも鋸によるものと想定される切断痕を有していることから、先述したウシ 2 点と同様、西洋料理の出汁に使われたものと想定される。以上からも、これらもおそらくウシである可能性が高い

イルカ類　イルカ類は、SK4553 から椎骨が 4 点出土し、さらに、SK3312・3315 からマイルカ科の頭蓋骨が 1 点出土している。SK4553 は F 面で 17 世紀前葉に比定されている。それに対して、SK3312・3315 は、時期が不明であるものの、F 面の直下にあたる G 面より検出されていることから、ほぼ同じ時期のものと想定される。マイルカ科の頭蓋骨は、背側が上になった状態で検出されている。

まとめ

以上、本調査地点からは、17 世紀に比定される遺構・面を中心に動物遺体が出土している。さらに、貝類・魚類・鳥類・哺乳類の 4 つのカテゴリーの内 2 つ以上のカテゴリーのものが出土し、且つまとまった量の動物遺体が出土している遺構・面においてその傾向が強い（24 表）。その条件にあう遺構は 16 基あり、その内、本地点の報告編（東京大学埋蔵文化財調査室 2019）にて 17 世紀と比定されているものが 10 基である。これらは、貝類はサザエとハマグリ、魚類はタイ科を伴うものがほとんどである。ハマグリも SK4623 が殻長 40 ㎜台の「中蛤」である他は、殻長 50 ㎜以上の「大蛤」が主体である。つまり、食材の価値が高く、身分の高い人々によって食されたものか、宴席などの特別な場に供されたことが想定されるものが中心である。そして、これらの遺構のほとんどがカワラケ、さらに塩壺など饗宴の際に用いられたことが想定される器を伴っており、宴席の際の廃棄物である可能性も想起される。なお、これらを伴わない遺構は、SX3044、SP4091、SK4623、SK4628 の 4 基で、SK4623 以外は出土している動物遺体が極めて少ないもののみである。SK4623 は、そもそも動物遺体以外の遺物の出土が見られなかった遺構である。

さて、次にハモ属の出土している SK2472 と SK4623 について考察をおこなう。まず、ハモ属は、江戸大名屋敷跡、さらには江戸遺跡全体でほとんど出土しない魚種である（阿部 2017）。一方で、京阪の上方の近世遺跡で

は多く出土している（丸山 2013）。そして、ハモ属をはじめ江戸ではあまり出土しないが上方の遺跡で比較的出土する魚種に関して、西日本に領国を有する大名の江戸屋敷跡より出土していることから、筆者は西日本、特に上方の食文化との関係性を指摘した（阿部 2017）。なお、ハモ属は、本遺跡以外の江戸大名屋敷跡では、港区汐留遺跡と文京区目白台一丁目遺跡で出土している。汐留遺跡は詳細が不明であるが、目白台一丁目遺跡の資料に関して報告者である惟村忠志が以下のように指摘している（惟村 2017）。目白台一丁目遺跡は、志摩鳥羽藩稲垣家下屋敷・抱屋敷跡である。惟村は、「18 世紀前半期においては 5 代藩主の正室が少なからず本屋敷において生活した可能性が高」く、出土したハモ属を含む一連の魚類遺体は丹波園部藩（現在の京都府南丹市）小出家の出身である正室との関係性を指摘している。その背景として、これらと共に京焼の優品が出土しており、京焼は儀礼の道具の性格を有さず、「女性に嗜好性が強いもの」（堀内 2006）であることからもその可能性を指摘している。なお、目白台一丁目遺跡で出土したハモ属は 1 点のみである。それに対して、本遺跡では現段階で 673 点の出土が確認されている。最も多く出土しているのは、総合研究棟（文・経・教・社研）地点（以後、「総研」、未報告）SK600 番台遺構群（以後、「SK600 台」）で、635 点出土している（阿部 2017）。そして、ついで多いのは本地点 SK2472 の 33 点となる。なお、本地点 SK4623 も含めてその他の遺構からは 1 点～ 3 点である。本遺跡においてハモ属が出土しているのは、いずれも 17 世紀代の遺構である。近世の初期において上方の料理を供することは最上級のもてなしであったことを表していることが想起される。特に 17 世紀の前半は徳川秀忠（1629 年）・徳川家光（1629・1639 年）の御成があったことからその際に供されたものが含まれていることや、加賀藩は外様大名で最も石高の高かったことも他の大名屋敷跡に比べてハモ属の出土量が非常に多かった背景として考えられる。また、梶原勝のよると、本遺跡出土のカワラケは「京都系カワラケ」であるⅠa1 群・Ⅰa2 群・Ⅰb 群が他の江戸遺跡に比べて圧倒的に多いことが指摘されており（梶原 2012）、このことは、上方料理との関連性が強いと考えられるハモ属が、同様に本遺跡において他の江戸遺跡よりも圧倒的に多く出土している傾向との関連性が想起される。

さて、総研の SK600 台は 17 世紀前葉と比定されている。タイ科はもちろんのこと、アジ亜科やキス属の出土も顕著であり、アユやコイ（コイ科）も含まれているなどの共通点も多い。特に、「大草流や四条流などでは、将軍家にご覧に入れる御前料理でコイに限られていた」（吉川 1996）とされている。また、総研 SK600 台で、貝類はシジミガイ属が最も多く、4,899 個体出土し 73％を占めている。なお、ついで多いのがハマグリで、688 個体で 11.8％を占める。そのほかにサザエ（473 個体・8.1％）、バイ（26 個体･0.4％）、ミルクイ（9 個体･0.9％）を占めるなど、極めて本地点 SK2472 と魚貝類共に出土傾向が似ている。この 2 か所の遺構（群）は同じ 17 世紀ではあるものの、総研 SK600 台は前葉、SK2472 は後葉と離れており、魚貝類の種類の共通性を鑑みると、公な饗宴の際に供する定型のメニューが存在し、それに基づいて供された料理の残滓である可能性も想起される。なお、SK4623 は、魚類に関して全体で 14 点と上記の遺構（群）と比べて極めて少ないため比較は難しい。しかし、構成する魚種はハモ属をはじめほぼ同じである。また、タイ科にはハモ属と同様に上方との関係性が強いことが指摘される（阿部 2017）キダイ属が含まれている。貝類に関しても構成する種類が近似しており、特にシジミガイ属が 798 個体と、極めて多く含まれている点で総研 SK600 台と共通している。

総合研究棟地点は整理途中である。今後、総合研究棟地点の整理の進捗を待って、特にハモ属をはじめとする上方ゆかりの魚種の出土状況とその背景について検討を深めたい。

【引用・参考文献】

阿部常樹　2006「貝類遺体のサイズに関する計測方法」『東京大学本郷構内の遺跡　工学部 14 号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室

2017「加賀前田家江戸藩邸の食生活における国元の影響とその変遷」『東京大学埋蔵文化財調査室　調査・研究プロジェクト３　江戸藩邸と国元・金沢の食生活―動物考古学の研究成果から―』東京大学埋蔵文化財調査室・加賀藩食文化史研究会

奥谷喬司編著　2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会

梶原　勝　2012「【趣旨説明】第 25 回大会「江戸在地系カワラケの成立」開催にあたって」『江戸遺跡研究会第 25 回大会　江戸在地系カワラケの成立〔発表要旨〕』江戸遺跡研究会

加藤久雄・阿部常樹　1999「貝類遺体」『春日町遺跡第Ⅵ地点』文京区遺跡調査会

加藤秀弘・荒井一利・中村玄・内田詮三編　2014『鳥羽山鯨類コレクション～東京海洋大学所蔵鯨類骨格標本の概要～』生物研究社

久保和士　1998「住友銅吹所跡出土の動物遺体」『住友銅吹所跡発掘調査報告』大阪市文化財協会

惟村忠志　2017「第 5 章　考察」『東京都文京区目白台一丁目

遺跡』学校法人日本女子大学・大成エンジニアリング株式会社
桜井準也　1986「貝類･魚類の大きさとその分布について」『麻布台一丁目郵政省飯倉分館構内遺跡』港区麻布台一丁目遺跡調査会
樋泉岳二　1999「魚類」西本豊弘･松井章編『考古学と動物学』同成社
東京大学埋蔵文化財調査室　2019『東京大学本郷構内の遺跡　医学部教育研究棟地点　報告編』
西中川駿・他　1991『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛，馬の渡来時期とその経路に関する研究』（平成２年度文部省科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告）
西本豊弘　2002「哺乳動物骨格図集（1）」『動物考古学』第 19 号　動物考古学研究会
2003「哺乳動物骨格図集（2）」『動物考古学』第 20 号　動物考古学研究会
2005「動物骨格図集（3）」『動物考古学』第 22 号　動物考古学研究会
2006「動物骨格図集（4）」『動物考古学』第 23 号　動物考古学研究会
2007「動物骨格図集（5）」『動物考古学』第 24 号　動物考古学研究会
2008「動物骨格図集（6）」『動物考古学』第 25 号　動物考古学研究会
2009「動物骨格図集（7）」『動物考古学』第 29 号　動物考古学研究会
長谷部言人　1952「犬骨」『吉胡貝塚』文化財保護委員会 (p.145-150)
堀内秀樹　2006「江戸大名藩邸における京焼の消費―京焼と伊万里の出土様相の相違から―」『京焼の成立と展開―押小路、粟田口、御室―研究集会資料』関西陶磁器史研究会
松井章　2008『動物考古学』京都大学学術出版会
松岡廣繁（総指揮）・安部みき子編　2009『鳥の骨探』株式会社エヌ・ティー・エス
松下幸子・吉川誠二・山下光雄　1988「古典料理の研究（十三）―『黒白精白集』について―」『千葉大学教育学部研究紀要』第 36 巻第２部　千葉大学教育学部
1989「古典料理の研究（十四）―『黒白精白集』中・下巻について―」『千葉大学教育学部研究紀要』第 37 巻第２部　千葉大学教育学部
丸山真史　2013「「近世、京都の魚食文化の特徴―近世三都の魚貝類の比較を通じて―」『動物考古学』第 30 号　動物考古学研究会
望月賢二監修･魚類文化研究会編　2005『図説　魚と貝の事典』柏書房株式会社
山内忠平　1958「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』第７号，鹿児島大学農学部
吉川誠次　1996「コイ　鯉」日本風俗史学会編『図説江戸時代食生活事典（新装版）』雄山閣
Driesch (1976) A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHEOLOGICAL SITES, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology Harvard University.

1表　医学部教育研究棟地点出土動物遺体種名表

軟体動物門　Phylum MOLLUSCA

腹足綱 Class Gastropoda
- 古腹足目 Order Vetigastropda
  - ミミガイ科 Family Haliotidae
    - メガイアワビ *Halitosis (Nordotis) gigantea*
    - マダカアワビ　*Haliotis (Nordotis) madaka*
    - クロアワビ *Haliotis (Nordotis) discus discus*
  - ニシキウズガイ科 Family Trochidae
    - ダンベイキサゴ *Umbonium giganteum*
  - サザエ科 Family Turbinidae
    - サザエ *Turbo (Batillus) cornutus*
- 盤足目 Order Discopoda
  - スズメガイ科 Family Hipponicidae
    - キクスズメ *Hipponix conica*
- 新腹足目 Order Neogastropoda
  - アクキガイ科 Family Muricidae
    - アカニシ *Rapana venosa*
  - エゾバイ科 Family Buccinidae
    - バイ *Babyronia japonica*
  - イトマキボラ科　Family Fasciolariidae
    - ナガニシ　*Fusinus perplexus*

二枚貝綱 Class Bivalvia
- ウグイスガイ目 Order Pterioida
  - ハボウキガイ科 Family Pinnidae
    - タイラギ *Atrina (Servatrina) pectinata*
- フネガイ目 Order Arcoida
  - フネガイ科 Family Arcidae
    - ハナエガイ *Barbatia (Ustularca) stearnsii*
    - アカガイ *Anadara (Scapharca) broughtonii*
    - サルボウガイ *Scapharca kagoshimensis*
- カキ目 Order Ostreoida
  - ナミマガシワ科 Family Anomiidae
    - ナミマガシワ *Anomia chinensis*
  - イタボガキ科 Family Ostreidae
    - マガキ *Crassostrea gigas*
    - イワガキ *Crassostrea nippona*
- マルスダレガイ目 Order Veneroida
  - バカガイ科 Family Mactridae
    - シオフキガイ *Mactra veneriformis*
    - ミルクイ　*Tresus keenae*
  - シジミ科 Family Cobicalidae
    - ヤマトシジミ　*Corbicula japonica*
  - マルスダレガイ科 Family Veneridae
    - カガミガイ *Phacosoma japonicum*
    - アサリ *Ruditapes philippinarum*
    - ハマグリ　*Meretrix lusoria*
    - チョウセンハマグリ *Meretrix lamarckii*

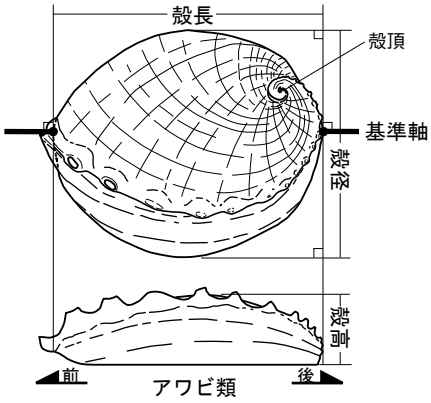
脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA

硬骨魚綱　Class Osteihthyes
- ウナギ目 Order Anguilliformes
  - ハモ科 Family Muraenesocidae
    - ハモ属　*Muraenesox* sp.
- コイ目　Order Cypriniformes
  - コイ科　Family Cyprinidae
    - コイ *Cyprinus carpio Linnaeus*
- サケ目 Order Salmoniformes
  - アユ科 Family Plecoglossidae
    - アユ　*Plecoglossus altivelis altivelis*
  - サケ科 Family Salmonidae
    - サケ属 *Oncorhychus* sp.
- タラ目 Order Gadiformes
  - タラ科 Family Gadidae
    - 属種不明 gen. et sp. indet.
- メダカ目　Order Cyprindontiformes
  - サヨリ科　Family Hemiramphidae
    - 属種不明 gen. et sp. indet.
- カサゴ目 Order Scorpaeniformes
  - コチ科　Family　Platycephalidae
    - 属種不明 gen. et sp. indet.
- スズキ目 Order Perciformes
  - スズキ科 Family Serranidae
    - スズキ属 *Lateolabrax* sp.
  - キス科　Family Sillaginidae
    - キス属　*Sillago* sp.
  - アジ科　Family Carangidae
    - ブリ属 *Seriola* sp.
    - アジ亜科　Subfamily Carangidae
      - マアジ　*Trachurus japonicus*
  - タイ科 Family Sparidae
    - クロダイ属　*Acanthopagrus* sp.
    - マダイ亜科 Subfamily Pagrinae
      - マダイ *Pagrus major*
    - キダイ属 *Dentex*.sp
  - ボラ科 Family Mugilida
    - 属種不明 gen. et sp. indet.
  - カマス科　Family Sphyraenoidae
    - カマス属　*Sphyraena*.sp
  - ハゼ科　Family Gobiidae
    - 属種不明 gen. et sp. indet.
  - サバ科 Family Scombridae
    - サバ属 *Scomber* sp.
    - サワラ *Scomberomorus niphonius*
    - マグロ属 *Thunnus* sp.
  - マカジキ科 Family Istiophoridae
    - 属種不明 gen. et sp. indet.
- カレイ目 Order Pleuronectiformes
  - ヒラメ科　Family　Paralichthyidae
    - ヒラメ　*Paralichtys　olivaceus*

カレイ科 Family Pleuronectidae
属種不明 gen. et sp. indet.
フグ目 Order Tetraodontiformes
フグ科　Family Tetraodonidae
属種不明 gen. et sp. indet.

鳥綱　Class　Aves
カモ目　Order Anseriformes
カモ科　Family Anatidae
ガン族 Tribe Anserini
属種不明 gen. et sp. indet.
カモ亜科 Subfamily Anatinae
属種不明 gen. et sp. indet.
タカ目　Order Falconiformes
タカ科　Family Accipitridae
属種不明 gen. et sp. indet.
キジ目　Order Galliformes
キジ科　Family Phasianidae
ニワトリ　*Gallus gallus var.domesticus*
属種不明 gen. et sp. indet.
スズメ目 Order Passeriformes
科属種不明　fum indet
ハト目 Order Columbiformes
ハト科 Family Columbidae
属種不明 gen. et sp. indet.

哺乳綱　Class　Mammalia
齧歯目 Order Rodentia
ネズミ科 Family Muridae
属種不明　gen. et sp. indet.
ウサギ目　Order Lagomorpha
ウサギ科　Family Leporidae
属種不明 gen. et sp. indet.
食肉目　Order　Carnivora
ネコ科　Family Felidae
イエネコ　*Felis silvestris catus*
イヌ科　Family　Canidae
イヌ　*Canis　familiaris*
クジラ目　Order Cetacea
ハクジラ亜目 Suborder Odontoceti
マイルカ科　Family Delphinidae
属種不明 gen. et sp. indet.
偶蹄目　Order Artiodactyla
シカ科 Family Cervidae
ニホンジカ *Cervus nippon*
ウシ科 Family Bovidae
ウシ *Bos taurus*
奇蹄目　Order Perissodactyla
ウマ科　Family Equidae
ウマ　*Equus caballus*



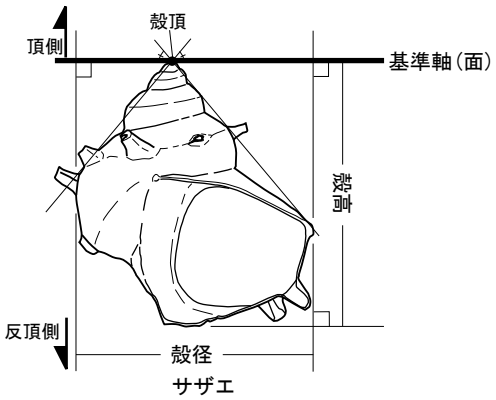
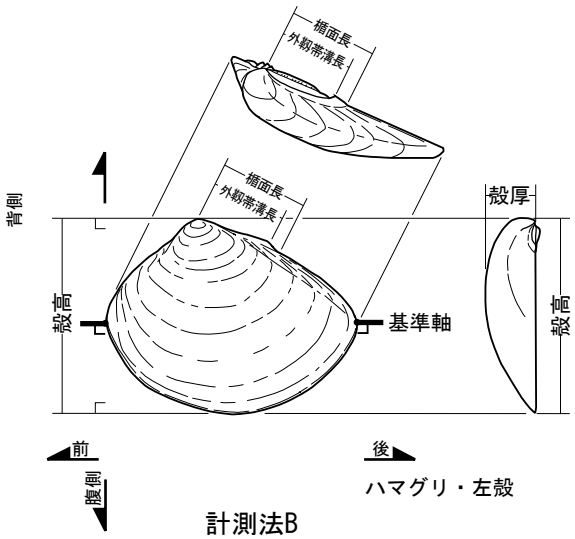
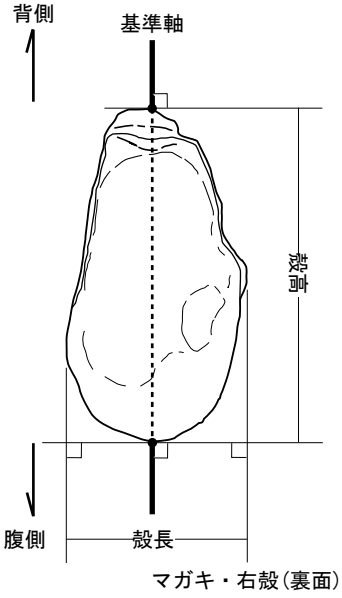
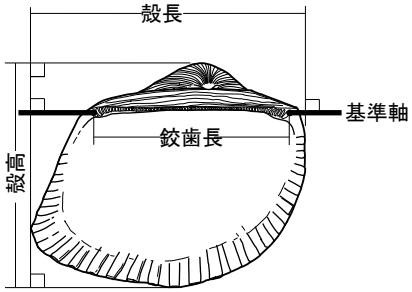
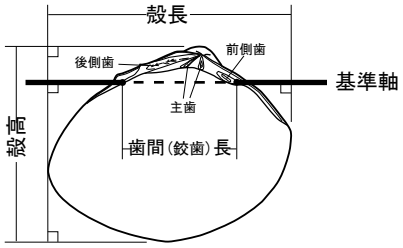


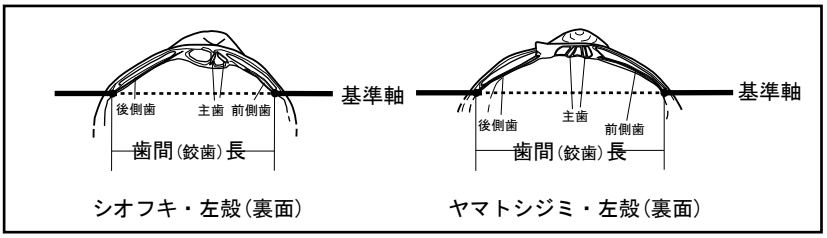
図1　巻貝類計測凡例











計測法A-2

2図　二枚貝類計測凡例

２表　医学部教育研究棟地点出土貝類遺体組成表（１）

種別	遺構No.	面	区	時期	アワビ類				サザエ		アカニシ	バイ	アカガイ		サルボウ			マガキ		ハマグリ		アサリ		シオフキ		シジミガイ属		ミルクイ		その他	合計	その他内訳及び備考
					メガイ	クロ	マダカ	不明	殻	蓋			左	右	左	合	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右			
SU	0139	G	07	17末					1				5	2																	6	
SK	0468	A～B	03	明治																△						1					2	
SX	0555北埋土（・4059）	C	01・02	19前														4	1												4	
SX	0605石組下	C	01	17					2																						2	
SP	1135	E	04	17前											7		4														7	
SE	2001	G	08	17前～中					7						1					1											9	
SK	2014	G	08	19前										1					1		1										3	
SK	2020	G	08	?											6		7									12	13				20	
SK	2049	G	08	17前～中					2	1																					2	
SU	2052	G	08	17中					4																						4	
SK	2054	A	08	明治					1				1																1		3	
SD	2058内側	C	06・08	17と19		1				1																					2	
SD	2058堀方	C	06・08	17と19				1																							1	
SK	2121	G	07	17後		1			7				2	1																	10	
SU	2159	G	08	17後					3																						3	
SK	2174	G	08	17前～中					1						12		9														13	
SU	2190	G	08	17中					4																						4	
SK	2210	D	06・08	17～18			1			1				1																	3	
SD	2260	G	06	17前																6	4		1	1							8	
SK	2288	G	06	17前		1			3	1			2	2																	6	
SK	2413（・0417）	G	08	17後						2																					2	
SK	2419	G	08	17前					1													8	9								10	
SK	2472	G	08	17後					10	7										5	5					10	17	1		3	36	キクスズメ（2），ハナエガイ（左1右1）
SP	2475	G	08	?					2	3																					3	
SK	3014（・3074）	A～B	06	大正（＋18前）					1	1																				1	2	ダンベイキサゴ(1)
SD	3021（・0236・2095）	D	05～08	1682年［天和2］（17前・後）		1			4	6			1	2						1		7	3			4	6				23	
SK	3046	F	06	17前				1	11		1									1	1										14	
SK	3082（・2097）	C	06・08	17前						1										3	3	1	1								5	
SK	3082-1層	C	06・08	17前																1	3										3	
SK	3082-2層	C	06・08	17前					1											7	4	1	1								9	
SK	3082-3層	C	06・08	17前																1											1	
SK	3112・3145	C	06	19?					1			2																			3	
SK	3213	F	04	17前					2		1																				3	
SP	3229	E～	06	17						3																3					6	
SK	3271	E～	06	17前～中					3																						3	
SP	4101	C	02	?															2												2	
SK	4246	C	02	17後					2																						2	
SK	4353	D	02	17後					1		1																				2	
SK	4513	F	02	17前				1	5		1																				7	
SK	4532	F	02	17前					5				1																		6	
SK	4553	F	02	17前							1									2	1										3	
SK	4553(中層)	F	02	17前				1	21		6		1							10	4	1			1						41	
SK	4556	F	02	19				1	18				1							2											22	※アワビ類破片：クロ？
SK	4569	F	02	17前～中					9																						9	
SE	4610	F	04	17前					8	2		2	1													1	1	1		1	14	ナガニシ(1)
SK	4612	G	04	17前					15	2	4		1	2																1	22	カガミガイ(左1)
SK	4623	G	04	?					2	2	9				59	1	46			27	37	32	30			775	798			2	940	ナミマガシワ（左2）
SK	4628	G	04	17前～中					3																						3	

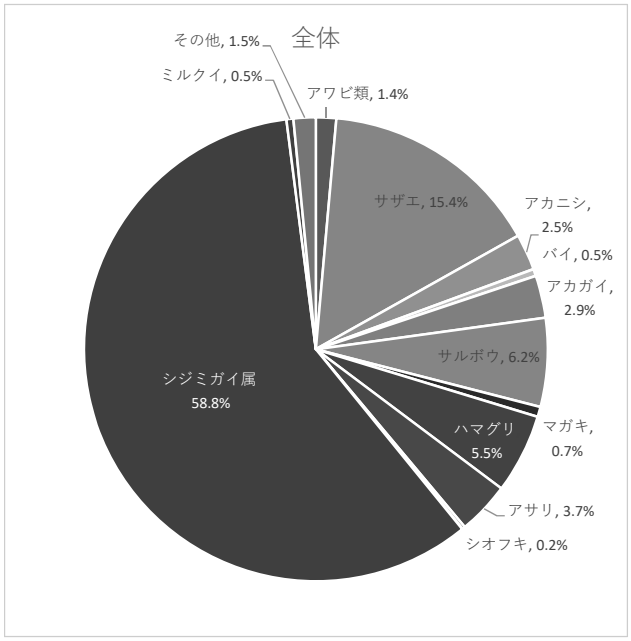
種別	遺構No.	面	区	時期	アワビ類 メガイ	アワビ類 クロ	アワビ類 マダカ	アワビ類 不明	サザエ 殻	サザエ 蓋	アカニシ	バイ	アカガイ 左	アカガイ 右	サルボウ 左	サルボウ 合	サルボウ 右	マガキ 左	マガキ 右	ハマグリ 左	ハマグリ 右	アサリ 左	アサリ 右	シオフキ 左	シオフキ 右	シジミガイ属 左	シジミガイ属 右	ミルクイ 左	ミルクイ 右	その他	合計	その他内訳及び備考
−	C面	C		近世中～後					3	2								3	1								1				7	
−	D面	D		1682年(天和2)以前					2																						2	
−	E面	E		近世前期				1	2	4	2		1		2				1			1	1							3	13	ナミマガシワ(片)，カガミガイ(片)，同定不可(片：不明)
−	F面	F		近世前期					2	1	1																				3	
−	G面	G		近世前期					2																						2	
−	B-C面	B～C		近世中～後					2		2									1									1	1	7	同定不可(片：ミルクイ？)
−	B-C面(攪乱中含む)	B～C		近世中～後				1	1											1			1					1			5	
−	B-D面	B～D		近世中～後(1682年以降)					2	1		1	5	2							1				1	2		1		1	14	タイラギ(1)
−	B-J面	B～J		近世					1				1						1									1			4	
−	C-D面	C～D		近世中～後(1682年以降)	1				4	4	2	1	10	7						4	4						1		1		24	
−	D-G面	D～G		1682年(天和2)以前					3		1																				4	
−	D-H面	D～H		1682年(天和3)以前					1	2																					2	
−	D-I面	D～I		1682年(天和2)以前				1	3		1		2	1																	7	
−	F-G面	F～G		近世前期					2											1											3	
−	遺構外			17中					2											1											3	※旧・SK2194
−	G-H面	G～H											1					1						1							3	※シオフキ左：マガキが付着⇒死貝
−	井戸脇セクション	−							2				1					1		1					1					2	8	ダンベイキサゴ(1)，陸産貝類(1)
−	表土	−						1	2																						3	
−	遺構外	−			1				2				1	4						1							1	1			10	
−	攪乱	−						1	8	1	1		1	1					1		1									3	16	イワガキ(右1)，チョウセンハマグリ(右1)，同定不可(片：ミルクイ？)
その他（1点のみ出土の遺構）					1			2	14	1	2	1	3					1	2	2		1	1					1		1	30	同定不可(片：ミルクイ？)
合計					3	4	1	12	220	49	36	7	42	26	87	1	66	10	10	79	69	52	48	2	3	808	838	7	3	19		
								20		220	36	7		42			88		10		79		52		3		838		7	22	1424	
						1.4%			15.4%		2.5%	0.5%	2.9%			6.2%		0.7%		5.5%		3.7%		0.2%		58.8%		0.5%		1.5%		

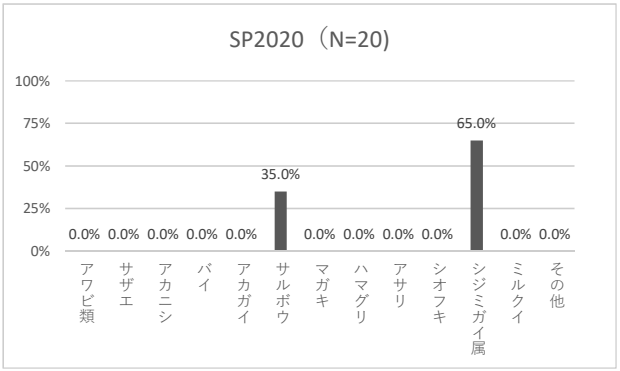
△：破片のみ、且つ少量。（計数対象資料なし）

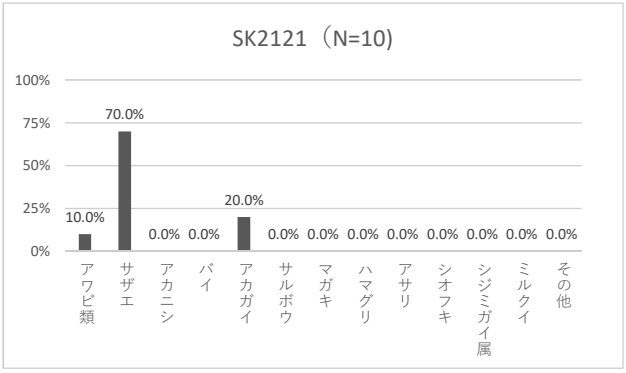
２表　医学部教育研究棟地点出土貝類遺体組成表（2）　※1 点のみ出土の遺構

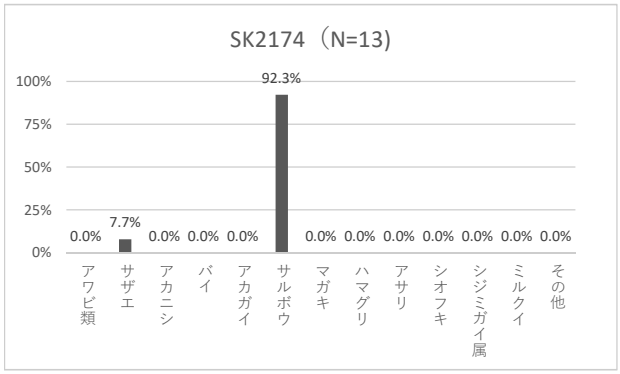
種別	遺構No	面	区	時期	分類群	左／右・殻／蓋	数	左／右・殻／蓋	数	備考
SB	0001-P09	A	05	明治前半	マガキ	右	1			
SK/SD	0087/0112	C	05・06	18後～19初/18後	同定不可	－	片			ミルクイ？
SD	3100（・0246）	D	05・06	17後	アカニシ	－	1			
SP	0395	E	03・04	明治前	サザエ	殻	1			
SK	0465	A～B	03	大正	アワビ類不明	－	片			
SK	0542	A～B	03	明治	サザエ	殻	1			
SP	2037	G	08	?	メガイアワビ	－	1			
SK	2251	C	08	17前	バイ	－	1			
SK	3018	B	04	?	ミルクイ	左	1			
SK	3033	A～B	04	明治	ハマグリ	左	1			
SX	3044	C	06	上層(明治)下層(17後)	サザエ	殻	1			
SK	3046	F	06	17前	サザエ	殻	1			
SP/SK	3091（・0114）/3092C層	C	06	18?（・19前）/18後	マガキ	左	1			
SP	3199	G	06	19	ハマグリ	左	1			
SK	3301	G	04	?	サザエ	殻	1			
SK	3331	E～	06	17前～中	サザエ	殻	1			
SP	3376	E～	04	?	サザエ	殻	1			
SP	4032	C	02	17後	サザエ	殻	1			
SP	4091	D	02	17～18?	アカガイ	左	1			
SP	4155	C	04	?	サザエ	殻	1			
SP	4215	C	02	19	アカニシ	－	1			
SP	4224	D	04	?	サザエ	殻	1			
SP	4319	D	02	17末?	サザエ	殻	1			
SP	4376	F	02	?	サザエ	殻	1			
SK	4731	G	04	17前?	サザエ	殻	1			
－	B面	B	－	近世中期～後期	アカガイ	左	1			
－	B-G面	B～G	－	近世	アワビ類不明	－	片			
－	H面	H	－		アカガイ	左	1			
－	配管掘方内	－	－		サザエ	蓋	1			
－	Ⅳ期Ⅱ層	－	－		マガキ	右	1			
－	遺構外			17後	サザエ	殻	1			旧・SK0245
－	遺構外			17	アサリ	左	1	右	1	旧・SK2458

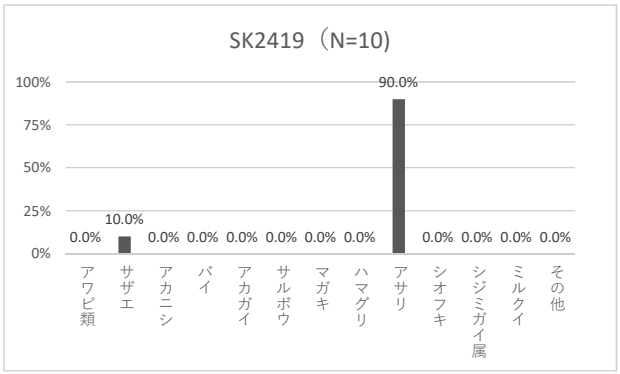
片：破片のみ（計数対象資料なし）

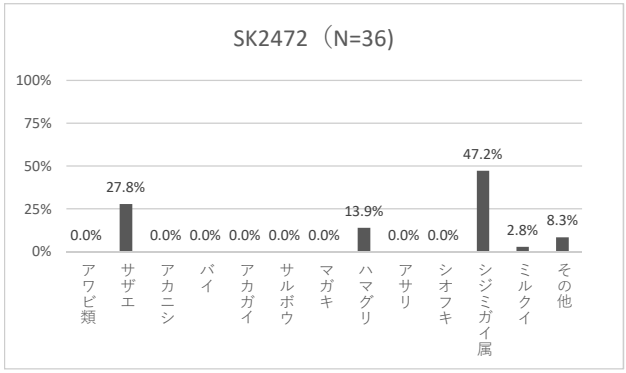


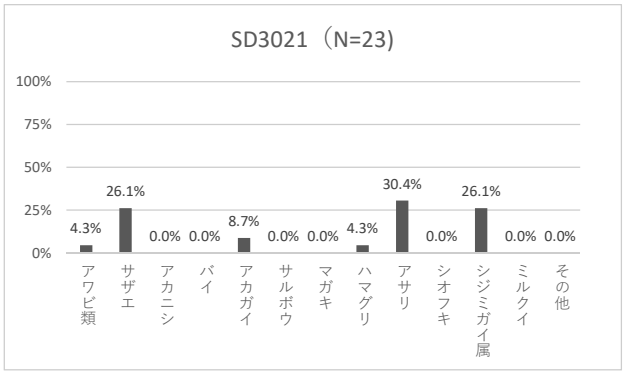




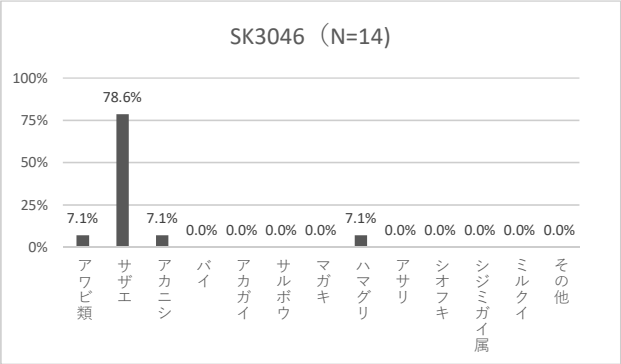


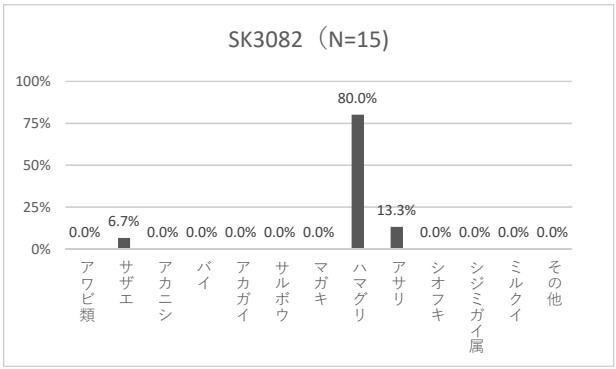


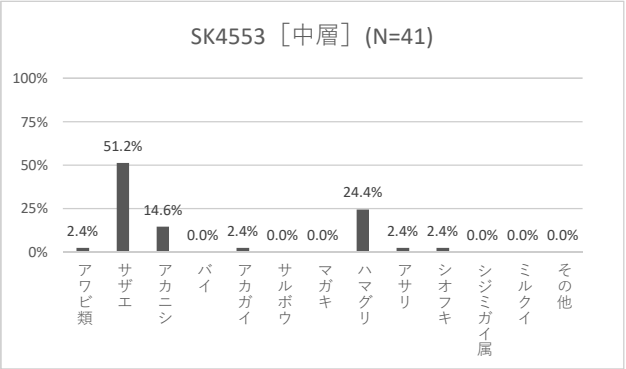


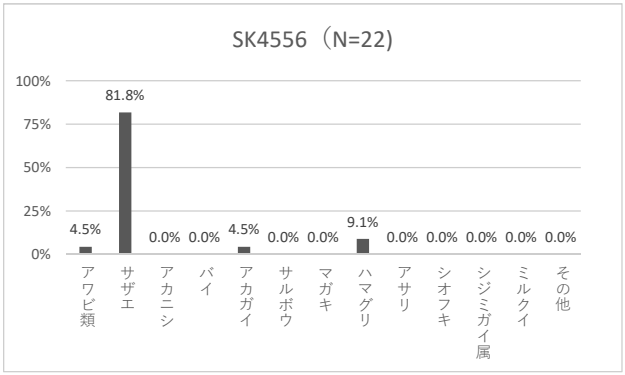


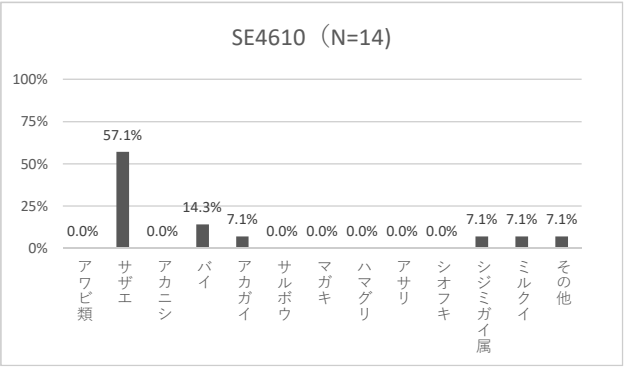
３図　医学部教育研究棟地点出土貝類遺体組成グラフ（１）

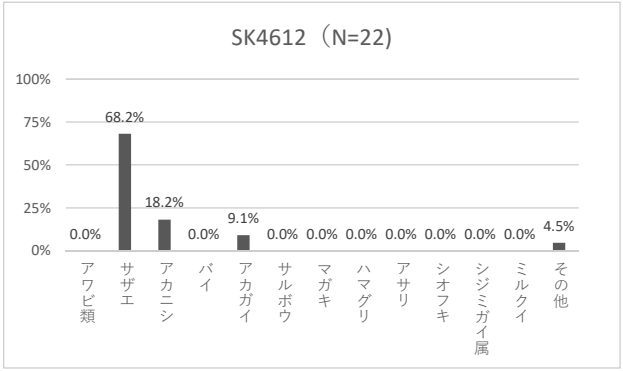


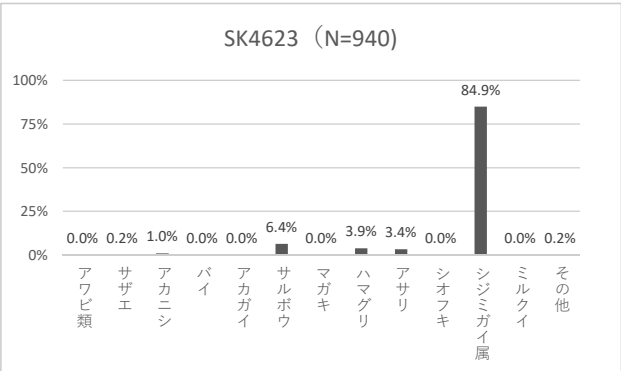






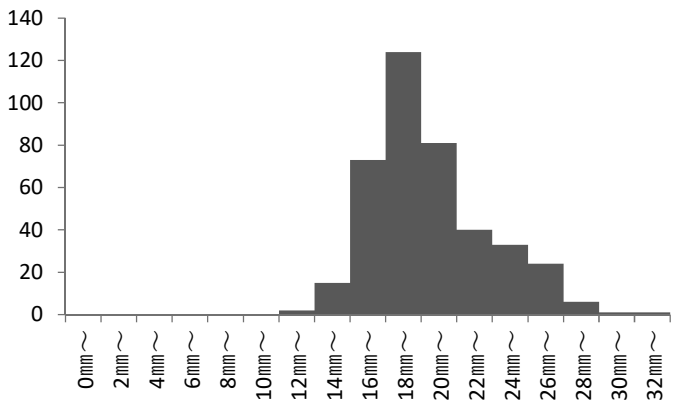


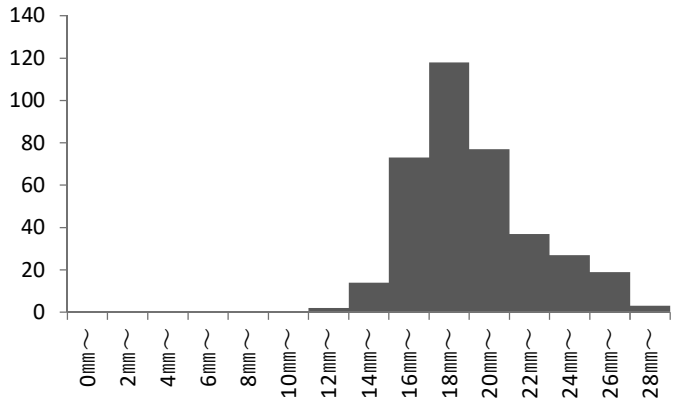




３図　医学部教育研究棟地点出土貝類遺体組成グラフ（2）

３表　医学部教育研究棟地点出土シジミガイ属のサイズに関する記述統計量

	全体				
	殻長		殻高	側歯	ヒストグラム［横軸：殻長(推定値)，縦軸：サンプル数］
	計測値	推定値		間長	
n	385	400	387	400	
平　均	20.3	20.4	18.6	17.0	
標準偏差	3.1	3.3	2.8	2.7	
不偏分散	9.9	10.6	7.8	7.6	
標準誤差	0.2	0.2	0.1	0.1	
範　囲	18.6	21.0	16.3	17.8	
最小値	12.3	12.3	10.3	10.2	
最大値	30.9	33.4	26.6	28.0	
中央値	19.7	19.8	18.1	16.5	
第1四分位数	18.1	18.2	16.6	15.2	
第3四分位数	21.6	22.1	20.2	18.5	
四分位範囲	3.5	3.9	3.7	3.3	
変動係数	0.2	0.2	0.2	0.2	
尖　度	0.5	0.5	0.0	0.5	
歪　度	0.8	0.8	0.6	0.8	

	SK4623（右）				
	殻長		殻高	側歯	ヒストグラム［横軸：殻長(推定値)，縦軸：サンプル数］
	計測値	推定値		間長	
n	371	371	371	371	
平　均	20.1	20.1	18.5	16.8	
標準偏差	3.1	3.0	2.7	2.6	
不偏分散	9.4	9.2	7.4	6.6	
標準誤差	0.2	0.2	0.1	0.1	
範　囲	18.6	18.2	16.1	15.3	
最小値	12.3	12.3	10.3	10.2	
最大値	30.9	30.5	26.4	25.5	
中央値	19.6	19.6	18.0	16.3	
第1四分位数	18.0	18.1	16.5	15.1	
第3四分位数	21.5	21.7	20.0	18.1	
四分位範囲	3.5	3.6	3.5	3.0	
変動係数	0.2	0.2	0.1	0.2	
尖　度	0.7	0.4	0.1	0.4	
歪　度	0.8	0.8	0.6	0.8	

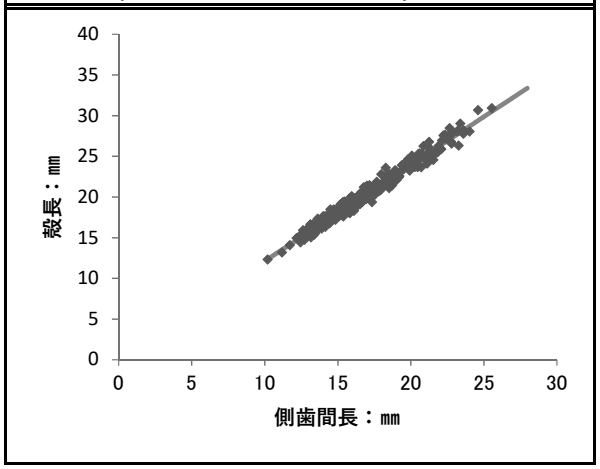
	SP2020（右）				SK2472（右）				SD3021（左）			
	殻長		殻高	側歯	殻長		殻高	側歯	殻長		殻高	側歯
	計測値	推定値		間長	計測値	推定値		間長	計測値	推定値		間長
n	4	10	5	10	4	11	4	11	4	4	4	4
平　均	20.1	19.8	19.3	16.5	26.3	27.2	23.1	22.8	25.6	25.5	23.4	21.3
標準偏差	2.4	2.3	2.6	1.9	1.3	2.5	1.3	2.1	2.4	2.1	2.3	1.8
不偏分散	6.0	5.3	6.6	3.8	1.7	6.1	1.6	4.3	5.9	4.6	5.1	3.3
標準誤差	1.2	0.7	1.1	0.6	0.6	0.7	0.6	0.6	1.2	1.1	1.1	0.9
範　囲	5.2	8.2	6.3	6.9	3.0	8.9	3.0	7.6	5.6	5.3	4.9	4.4
最小値	18.4	15.0	16.8	12.4	24.8	24.4	21.6	20.4	22.6	23.0	21.7	19.2
最大値	23.6	23.2	23.1	19.3	27.8	33.4	24.5	28.0	28.2	28.2	26.6	23.6
中央値	19.2	19.6	18.5	16.4	26.3	27.2	23.1	22.7	25.8	25.5	22.6	21.3
第1四分位数	18.5	18.9	17.4	15.7	25.5	25.7	22.4	21.5	24.3	24.8	21.8	20.7
第3四分位数	20.8	21.2	20.6	17.7	27.0	27.9	23.8	23.3	27.1	26.2	24.2	21.9
四分位範囲	2.3	2.3	3.2	1.9	1.5	2.2	1.4	1.8	2.8	1.4	2.4	1.2
変動係数	0.1	0.1	0.1	0.1	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
尖　度	2.4	1.1	-0.5	1.1	-1.6	3.4	-0.4	3.4	-1.1	1.5	1.5	1.5
歪　度	1.6	-0.7	0.8	-0.7	0.1	1.6	-0.1	1.6	-0.4	0.2	1.4	0.2

（計測単位：㎜）

	殻長		殻高	側歯
	計測値	推定値		間長
4610（右）		20.91		17.43
B-D面（左）	22.49	22.48	19.31	18.75
	18.73	18.74	17.11	15.59
C-D面（右）		26.03	24.57	21.75

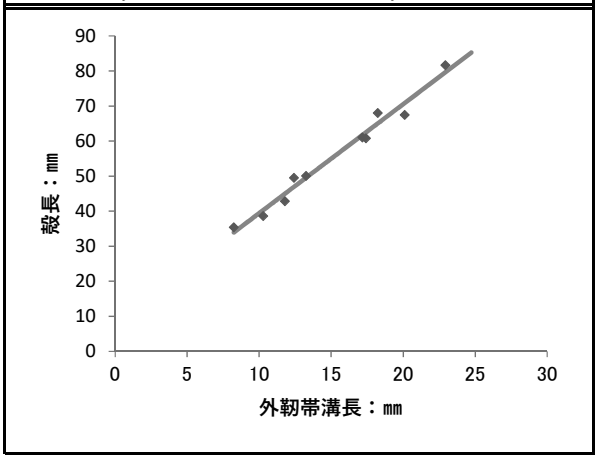
４表　医学部教育研究棟地点出土シジミガイ属の殻長と歯間長に関する回帰・相関分析の結果

相関係数	0.99	決定係数	0.97	ﾀﾞｰﾋﾞﾝﾜﾄｿﾝ比	2.06
P　値	0.0000	判　定	**	［**:1%有意 *:5%有意］	
y = 1.18 x +0.29				［y：殻長，x：側歯間長］	



６表　医学部教育研究棟地点出土ハマグリの殻長と外靭帯溝長に関する回帰・相関分析の結果

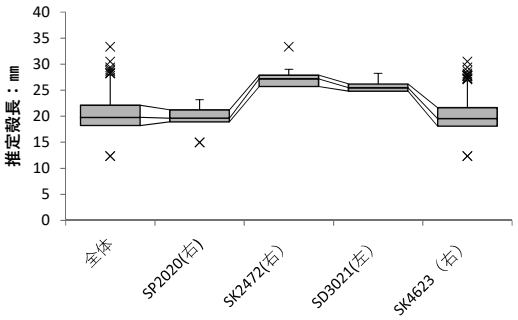
相関係数	0.99	決定係数	0.98	ﾀﾞｰﾋﾞﾝﾜﾄｿﾝ比	0.85
P　値	0.0000	判　定	**	［**:1%有意 *:5%有意］	
y = 3.11 x +8.31				［y：殻長，x：外靭帯溝長］	



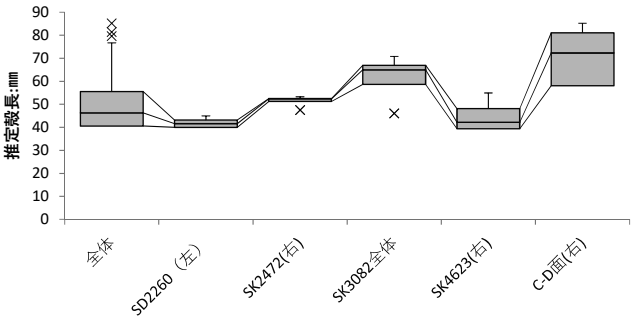
７表　医学部教育研究棟地点出土サザエ(殻)のサイズに関する記述統計量

変　数	全体	SK2472	SK4556	SK4610	SK4612
n	23	5	4	4	12
平　均	92.3	101.2	86.5	87.7	92.4
標準偏差	15.0	8.8	10.7	20.0	8.0
不偏分散	226.1	77.5	113.7	400.1	64.1
標準誤差	3.1	3.9	5.3	10.0	2.3
範　囲	57.4	20.7	24.9	44.2	24.8
最小値	58.4	88.7	76.4	58.4	83.8
最大値	115.7	109.3	101.3	102.5	108.5
中央値	97.4	103.0	84.2	95.0	92.9
第1四分位数	83.1	96.2	80.5	84.1	84.8
第3四分位数	101.9	108.8	90.1	98.7	95.9
四分位範囲	18.8	12.7	9.6	14.6	11.0
変動係数	0.2	0.1	0.1	0.2	0.1
尖　度	0.3	-1.1	1.6	3.2	-0.3
歪　度	-0.8	-0.7	1.1	-1.8	0.7

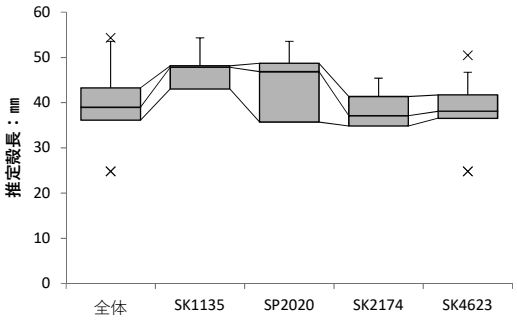
（計測単位：mm）



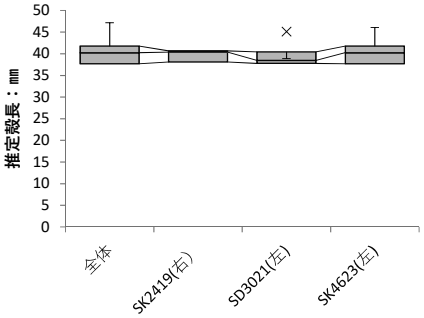
４図　医学部教育研究棟地点出土シジミガイ属の推定殻長に関する箱ひげ図



５図　医学部教育研究棟地点出土ハマグリの推定殻長に関する箱ひげ図

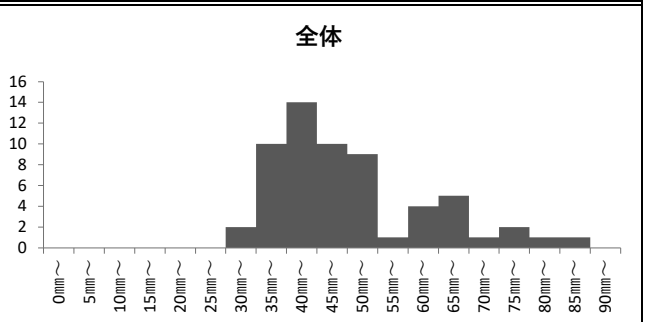


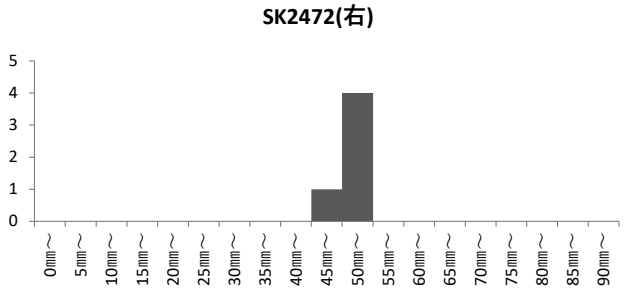
６図　医学部教育研究棟地点出土サルボウガイの推定殻長に関する箱ひげ図

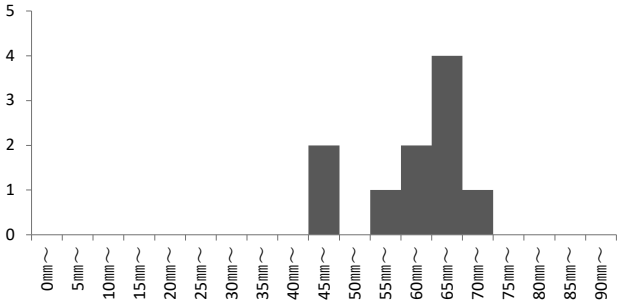


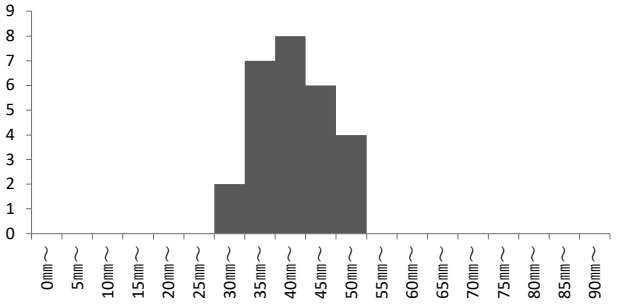
７図　医学部教育研究棟地点出土アサリの推定殻長に関する箱ひげ図

５表　医学部教育研究棟地点出土ハマグリのサイズに関する記述統計量

	全体				
	殻長		殻高	外靭帯溝長	ヒストグラム［横軸：殻長(推定値)，縦軸：サンプル数］
	計測値	推定値			
n	11	60	18	60	
平　均	58.0	50.4	44.9	13.5	
標準偏差	16.2	12.5	10.1	4.0	
不偏分散	260.9	156.5	102.8	16.2	
標準誤差	4.9	1.6	2.4	0.5	
範　囲	46.9	51.3	35.3	16.5	
最小値	35.4	33.9	29.7	8.2	
最大値	82.3	85.2	65.0	24.7	
中央値	60.8	46.3	43.2	12.2	
第1四分位数	46.2	40.6	36.9	10.4	
第3四分位数	67.7	55.6	52.5	15.2	
四分位範囲	21.6	15.0	15.6	4.8	
変動係数	0.3	0.2	0.2	0.3	
尖　度	-1.1	0.4	-0.7	0.4	
歪　度	0.2	1.0	0.5	1.0	

	SK2472(右)				
	殻長		殻高	外靭帯溝長	ヒストグラム［横軸：殻長(推定値)，縦軸：サンプル数］
	計測値	推定値			
n	0	5	0	5	
平　均		51.4		13.8	
標準偏差		2.3		0.7	
不偏分散		5.2		0.5	
標準誤差		1.0		0.3	
範　囲		5.8		1.9	
最小値		47.5		12.6	
最大値		53.3		14.5	
中央値		52.4		14.2	
第1四分位数		51.2		13.8	
第3四分位数		52.5		14.2	
四分位範囲		1.2		0.4	
変動係数		0.0		0.1	
尖　度		3.1		3.1	
歪　度		-1.7		-1.7	

	SK3082全体				
	殻長		殻高	外靭帯溝長	ヒストグラム［横軸：殻長(推定値)，縦軸：サンプル数］
	計測値	推定値			
n	1	10	6	10	
平　均	67.4	61.5	48.6	17.1	
標準偏差		8.8	6.3	2.8	
不偏分散		77.7	39.7	8.0	
標準誤差		2.8	2.6	0.9	
範　囲		24.8	17.0	8.0	
最小値		46.0	38.0	12.1	
最大値		70.9	55.1	20.1	
中央値		65.0	50.1	18.2	
第1四分位数		58.7	46.0	16.2	
第3四分位数		66.9	52.8	18.9	
四分位範囲		8.3	6.8	2.7	
変動係数		0.1	0.1	0.2	
尖　度		0.0	0.4	0.0	
歪　度		-1.1	-1.0	-1.1	

	SK4623(右)				
	殻長		殻高	外靭帯溝長	ヒストグラム［横軸：殻長(推定値)，縦軸：サンプル数］
	計測値	推定値			
n	3	27	5	27	
平　均	45.0	43.4	36.7	11.3	
標準偏差	8.3	6.0	4.6	1.9	
不偏分散	69.1	35.5	21.3	3.7	
標準誤差	4.8	1.1	2.1	0.4	
範　囲	14.7	21.0	11.3	6.7	
最小値	35.4	33.9	29.7	8.2	
最大値	50.1	54.9	41.0	15.0	
中央値	49.5	42.2	38.0	10.9	
第1四分位数	42.5	39.4	34.9	10.0	
第3四分位数	49.8	48.1	40.2	12.8	
四分位範囲	7.3	8.7	5.3	2.8	
変動係数	0.2	0.1	0.1	0.2	
尖　度		-0.9	0.2	-0.9	
歪　度	-1.7	0.3	-1.0	0.3	

（計測単位：㎜）

８表　医学部教育研究棟地点出土
サザエ（殻）のサイズデータ

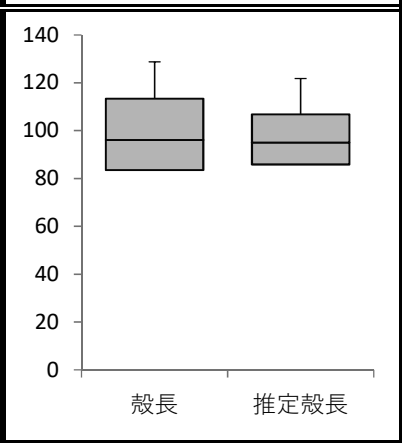
遺構	殻高
0542	59.59
2001	109+
2001	95+
2052	106.85
2121	98.44
2121	84.64
2121	104+
2174	97.06
2288	107.55
2288	77+
2288	103.05
2419	95+
3021(焼土中)	100.43
3021(焼土中)	78+
3044	100.53
3046	79.82
SK3082・2層	78.80
3376	115.73
4246	84.30
B-C面	112.38
C-D面	111.42
C-D面(焼土中)	115.89
D-I面	101.53
遺構外（旧・SK2194）	112+

（計測単位：mm）

10表　医学部教育研究棟地点出土アカガイのサイズに関する記述統計量

変　数	殻長		鉸歯長
	計測値	推定値	
n	13	24	24
平　均	99.73	63.88	98.23
標準偏差	16.94	10.92	13.02
不偏分散	286.91	119.20	169.63
標準誤差	4.70	2.23	2.66
範　囲	47.90	34.05	40.62
最小値	80.89	49.63	81.23
最大値	128.79	83.68	121.84
中央値	96.09	61.18	95.00
第1四分位数	83.51	53.52	85.86
第3四分位数	113.42	71.06	106.79
四分位範囲	29.91	17.55	20.93
変動係数	0.17	0.17	0.13
尖　度	-1.31	-1.08	-1.08
歪　度	0.37	0.52	0.52

箱ひげ図(横軸単位：mm)



（計測単位：mm）

９表　医学部教育研究棟地点出土
サザエ（蓋）のサイズデータ

遺構	長径
SK2288	48.5
SK2472	45.8
SK2472	46.2
SK2472	46.8
SK2472	47.5
SK2472	47.7
SK2472	49.3
SK2472	50.1
SK3014	54.2
SD3021(焼土中)	33.3
SD3021(焼土中)	45.9
SD3021(焼土中)	47.4
SD3021(焼土中)	54.4
SK4553(中層)	43.7
SK4553(中層)	46.4
SK4612	48.3
Ⅱ・B-D面	52.8
Ⅲ・C-D面	44.1
Ⅲ・C-D面	48.0
Ⅲ・C-D面(焼土中)	49.5

（計測単位：mm）

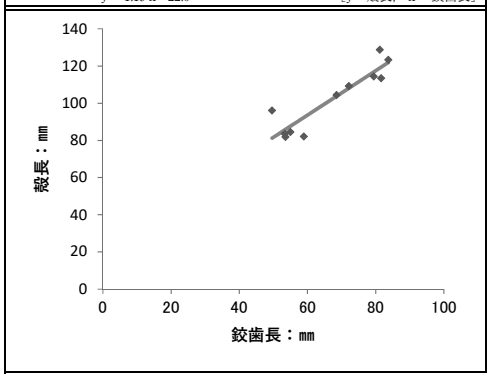
12表　医学部教育研究棟地点出土アカガイの
サイズデータ

	左右	殻長		鉸歯長
		計測値	推定値	
0139	L	80.89		
0139	L		82.91	51.04
0139	L		85.39	53.12
0139	L		85.56	53.26
2014	R		90.71	57.58
2121	L		96.39	62.34
2121	L		97.34	63.14
2210	R	123.33	121.84	83.68
2288	L	128.79	118.93	81.24
2288	L		115.30	78.19
3021(焼土中)	L		93.62	60.02
3021(焼土中)	R	84.55	87.61	54.98
B-D面	L	81.82	85.93	53.57
B-D面	L	83.51	85.63	53.32
B-D面	L		104.71	69.32
B-D面	R	94.01		
B-D面	R	96.09	81.23	49.63
B-J面	L	109.2	108.11	72.17
C-D面	L		91.65	58.37
C-D面(焼土中)	L	114.42	116.80	79.45
C-D面	R	82.07	92.32	58.93
C-D面	R	104.37	103.77	68.53
C-D面	R	113.42	119.40	81.63
C-D面	R		100.28	65.6
C-D面	R		106.35	70.69
D-I面	L		85.66	53.35

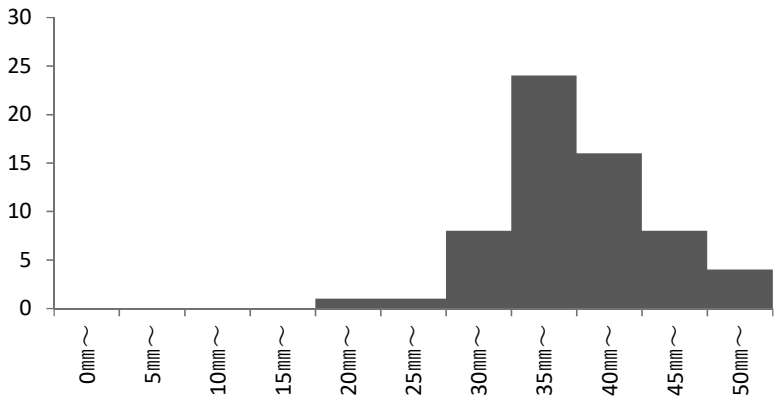
（計測単位：mm）

11表　医学部教育研究棟地点出土アカガイの殻長
と鉸歯長に関する回帰・相関分析の結果

相関係数	0.91	決定係数	0.83	ﾀﾞｰﾋﾞﾝｸﾞﾄｿﾝ比	1.65
P　値	0.0001	判　定	**		[**:1%有意 *:5%有意]
y = 1.19 x +22.0					[y：殻長，x：鉸歯長]



13 表　医学部教育研究棟地点出土サルボウガイのサイズに関する記述統計量

	全体			
	殻長		鉸歯長	ヒストグラム［横軸：殻長(推定値)，縦軸：サンプル数］
	計測値	推定値		
n	37	62	62	
平　均	40.7	40.1	25.6	
標準偏差	6.3	5.8	3.9	
不偏分散	39.9	33.3	15.5	
標準誤差	1.0	0.7	0.5	
範　囲	24.5	29.5	20.2	
最小値	30.1	24.8	15.1	
最大値	54.6	54.3	35.3	
中央値	39.2	39.0	24.8	
第1四分位数	36.8	36.1	22.9	
第3四分位数	44.1	43.3	27.8	
四分位範囲	7.3	7.2	4.9	
変動係数	0.2	0.1	0.2	
尖　度	-0.2	0.5	0.5	
歪　度	0.7	0.4	0.4	

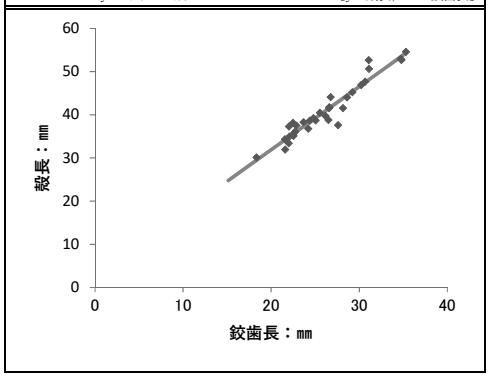
	SK1135			SK2174			SP2020			SK4623		
	殻長		鉸歯長	殻長		鉸歯長	殻長		鉸歯長	殻長		鉸歯長
	計測値	推定値		計測値	推定値		計測値	推定値		計測値	推定値	
n	6	6	6	9	10	10	5	5	5	16	40	40
平　均	47.2	45.9	29.6	37.3	37.5	23.8	43.1	43.8	28.1	38.7	39.0	24.9
標準偏差	7.1	6.4	4.4	5.3	5.0	3.4	7.8	8.5	5.8	2.8	4.4	3.0
不偏分散	50.3	40.5	18.9	27.9	25.2	11.8	61.5	71.6	33.4	7.8	19.3	9.0
標準誤差	2.9	2.6	1.8	1.8	1.6	1.1	3.5	3.8	2.6	0.7	0.7	0.5
範　囲	18.5	18.4	12.6	15.1	15.9	10.9	18.4	19.4	13.2	12.1	25.7	17.6
最小値	36.1	35.9	22.7	30.1	29.5	18.3	34.4	34.2	21.6	31.9	24.8	15.1
最大値	54.6	54.3	35.3	45.2	45.4	29.2	52.7	53.6	34.8	44.0	50.5	32.7
中央値	49.2	47.8	30.9	37.3	37.1	23.6	46.0	46.9	30.2	38.7	38.1	24.2
第1四分位数	43.1	43.0	27.6	33.4	34.8	22.0	35.8	35.7	22.6	37.6	36.5	23.2
第3四分位数	52.2	48.2	31.1	40.5	41.4	26.5	46.9	48.7	31.5	40.0	41.7	26.7
四分位範囲	9.1	5.1	3.5	7.1	6.5	4.4	11.1	13.0	8.9	2.4	5.2	3.5
変動係数	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1
尖　度	-0.7	0.3	0.3	-1.1	-0.9	-0.9	-2.2	-2.5	-2.5	1.6	2.3	2.3
歪　度	-0.8	-0.6	-0.6	0.2	0.0	0.0	-0.1	-0.2	-0.2	-0.6	-0.2	-0.2

（計測単位：㎜）

	殻長		鉸歯長
	計測値	推定値	
E面	52.94	53.43	34.71

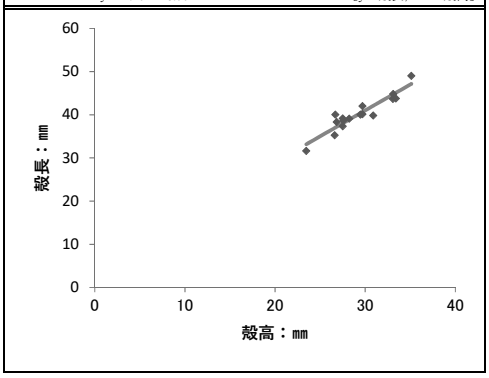
14 表　医学部教育研究棟地点出土サルボウガイの殻長と鉸歯長に関する回帰・相関分析の結果

相関係数	0.96	決定係数	0.92	ﾀﾞｰﾋﾞﾝﾜﾄｿﾝ比	1.96
P　値	0.0000	判　定	**	［**:1%有意 *:5%有意］	
y = 1.46 x +2.65				［y：殻長，x：鉸歯長］	

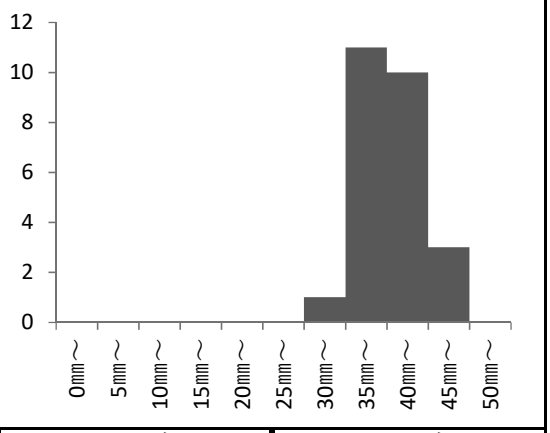


16 表　医学部教育研究棟地点出土アサリの殻長と殻高に関する回帰・相関分析の結果

相関係数	0.93	決定係数	0.87	ﾀﾞｰﾋﾞﾝﾜﾄｿﾝ比	1.80
P　値	0.0000	判　定	**	［**:1%有意 *:5%有意］	
y = 1.20 x +5.00				［y：殻長，x：殻高］	



15 表　医学部教育研究棟地点出土アサリのサイズに関する記述統計量

	全体			
	殻長		殻高	ヒストグラム ［横軸：殻長(推定値)，縦軸：サンプル数］
	計測値	推定値		
n	17	25	25	
平　均	40.4	40.1	29.2	
標準偏差	4.0	3.4	2.9	
不偏分散	16.3	11.7	8.1	
標準誤差	1.0	0.7	0.6	
範　囲	17.4	14.0	11.7	
最小値	31.6	33.2	23.5	
最大値	49.1	47.2	35.1	
中央値	40.0	40.2	29.3	
第1四分位数	38.7	37.7	27.2	
第3四分位数	43.7	41.8	30.6	
四分位範囲	5.1	4.1	3.4	
変動係数	0.1	0.1	0.1	
尖　度	0.9	-0.2	-0.2	
歪　度	0.0	0.4	0.4	

	SK2419(右)			SD3021(左)			SK4623(左)		
	殻長		殻高	殻長		殻高	殻長		殻高
	計測値	推定値		計測値	推定値		計測値	推定値	
n	4	5	5	4	4	4	6	13	13
平　均	40.2	39.3	28.6	40.5	39.8	29.0	39.8	40.1	29.2
標準偏差	1.4	1.7	1.4	2.2	3.6	3.0	3.7	3.0	2.5
不偏分散	1.9	3.0	2.1	4.9	13.3	9.2	13.4	8.9	6.2
標準誤差	0.7	0.8	0.6	1.1	1.8	1.5	1.5	0.8	0.7
範　囲	3.4	3.7	3.1	4.7	8.1	6.7	9.3	9.3	7.7
最小値	38.7	36.9	26.6	39.1	37.0	26.7	35.3	36.8	26.5
最大値	42.0	40.7	29.7	43.8	45.1	33.4	44.6	46.1	34.2
中央値	40.1	40.4	29.5	39.6	38.5	27.9	39.1	40.2	29.3
第1四分位数	39.7	38.1	27.6	39.2	37.8	27.3	37.6	37.7	27.2
第3四分位数	40.6	40.7	29.7	41.0	40.4	29.5	42.7	41.8	30.6
四分位範囲	0.9	2.6	2.1	1.8	2.7	2.2	5.2	4.1	3.4
変動係数	0.0	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
尖　度	1.6	-1.8	-1.8	3.2	3.2	3.2	-1.5	-0.2	-0.2
歪　度	0.5	-0.8	-0.8	1.8	1.7	1.7	0.3	0.8	0.8

（計測単位：㎜）

	殻長		殻高
	計測値	推定値	
SK3082（合弁）	44.8	44.7	33.1
SK3082・2層（左）	49.1	47.2	35.1
B-C面(右)	31.6	33.2	23.5

17 表　医学部教育研究棟地点出土その他の貝種のサイズデータ

マダカアワビ

遺構	殻長	殻径
SK2210	132+	104.3

クロクロアワビ

遺構	殻長	殻径
SK2288	162+	120.8

ダンベイキサゴ

遺構等	殻径
Ⅱ-井戸脇sec	28.0
SK3014	36.4

バイ

遺構等	殻高
SK2251	60+
SK3112	63+
SK3112	61+
SE4610	63+
Ⅱ区B-D面	66.8
Ⅲ区C-D面(焼土中)	71.2

アカニシ

遺構等	殻高
SK4513	95+
SK4553(中層)	120+
SK4553(中層)	128.7
SK4612	103.7
SK4612	94.0
Ⅱ区D-I 面	154.1
Ⅲ区B-C面	73+
Ⅲ区C-D面	91+
Ⅲ区C-D面	112.3
Ⅳ区E面	119+
Ⅳ区E面	90+

ナガニシ

遺構	殻高
SE4610	101.1

マガキ

遺構等		殻長	殻高
SX0555	左	67.7	128.0
SP3091・3092・C層			77.6
Ⅱ区G-H面		32.4	60.7
Ⅳ区C面		54.2	128.2
SB0001-P9	右	34.4	68.3
SX0555			82.8
SK2014		69.2	97.9
Ⅳ区C面		54.9	

シオフキガイ

遺構等		殻長	殻高
SD2260	左		30.3
Ⅱ区井戸脇sec	右	39.9	35.2

ミルクイ

遺構等		殻長	殻高
SE4610	左	127.3	88.4
Ⅲ区C-D面	右		98.9

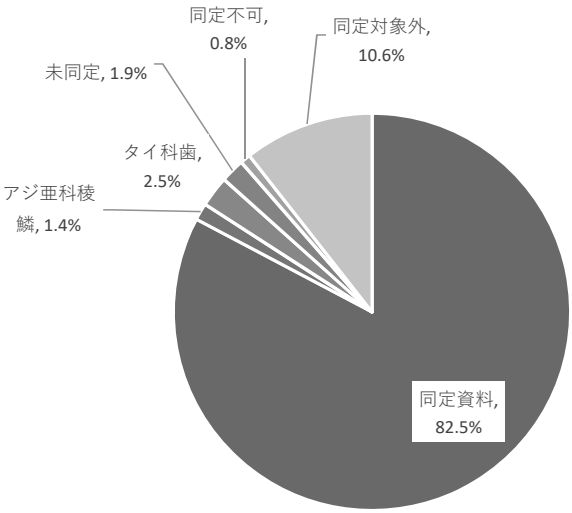
（計測単位：㎜）

18 表　医学部教育研究棟地点 SK2472 出土魚類遺体一覧

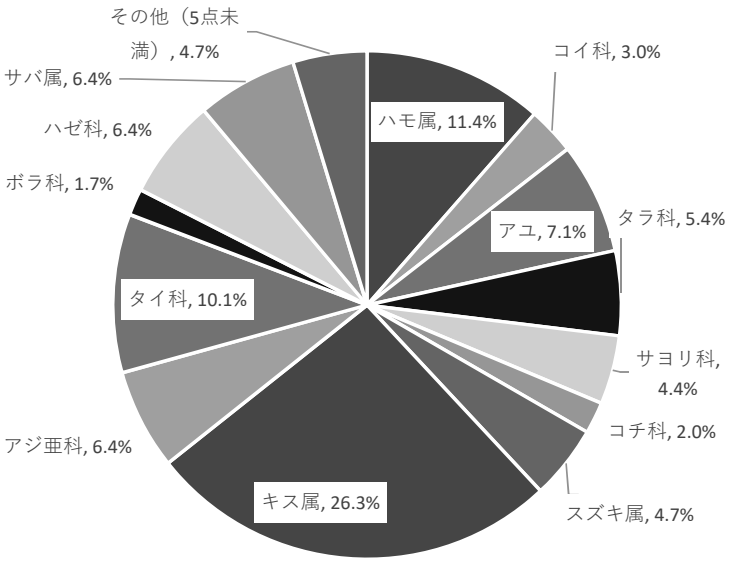
種別	遺構No.	層位	面	区	時期	分類群	部位	左／右	破片数	備考
SK	2472		G	08	17後	ハモ属	腹椎	－	26	
							尾椎	－	7	
						コイ	下咽頭骨	右	1	
								－	1	
						コイ科	下咽頭骨		1	小型。フナ属？
							歯骨	左	1	小型
							角骨	右	2	
							腹椎	－	3	小型
						アユ	舌顎骨	左	1	
							腹椎	－	16	
							尾椎	－	4	
						サケ属	腹椎	－	1	
						タラ科	主上顎骨	右	1	
							角骨	右	1	
							角舌骨	右	1	
							第１椎骨	－	1	
							腹椎	－	2	内1点に切断痕有
							尾椎	－	10	内2点に切断痕有
						サヨリ科	前上顎骨	右	1	
							前鰓蓋骨	左	1	
								右	2	
							腹椎	－	9	
						コチ科	腹椎	－	3	内2点に切断痕有
							尾椎	－	2	内1点に切断痕有
						スズキ属	前鰓蓋骨	右	1	小型。
							方骨	左	1	
							腹椎	－	4	内3点やや小型。
							尾椎	－	4	3種類の大きさ有。1点やや小型。
							椎骨	－	4	
						キス属	前上顎骨	左	1	
							主上顎骨	左	1	
								右	2	
							歯骨	左	2	
								右	1	
							角骨	左	1	
								右	2	
							舌顎骨	右	1	
							方骨	右	5	
							擬鎖骨	左	1	
								右	1	
							主鰓蓋骨	右	1	
							第１椎骨	－	1	
							腹椎	－	39	
							尾椎	－	19	
						アジ亜科	歯骨	右	1	
							主上顎骨	右	1	
							前鰓蓋骨	左	1	
								右	1	
							方骨	右	1	
						マアジ	腹椎	－	5	
							尾椎	－	8	
							稜鱗	－	5	
						マダイ	頭骨	－	1	前頭骨・上後頭骨・副蝶形骨
						マダイ亜科	歯骨	左	1	
						タイ科	角骨	右	1	
							臼歯	－	7	
							犬歯	－	2	
							腹椎	－	1	
							尾椎	－	3	
						ボラ科	舌顎骨	右	1	
							腹椎	－	2	
							尾椎	－	1	
						カマス属	腹椎	－	1	前端部が横位に切断されている。
						ハゼ科	主上顎骨	左	1	
							前上顎骨	左	1	
								右	2	
							歯骨	左	4	
								右	4	
							舌顎骨	右	1	
							擬鎖骨	左	1	
							主鰓蓋骨	左	1	
							方骨	左	1	
								右	1	
							第１椎骨	－	1	
						サバ属	主上顎骨	右	1	
							腹椎	－	1	
							尾椎	－	6	
							終尾椎	－	3	
						サワラ属	尾椎	－	1	
						カレイ科	方骨	左	1	
							角骨	左	1	
								右	1	
						未同定	擬鎖骨	右	3	小型
							方骨	右	1	小型
							第１椎骨		1	小型(キス属近似)
							角骨	右	1	
							椎骨		1	タラ科腹椎？
						同定不可	椎骨	－	1	小型
							腹椎	－	1	スズキ属？
						同定対象外	－	－	9	

19 表　医学部教育研究棟地点出土魚類遺体一覧（SK2472 以外)

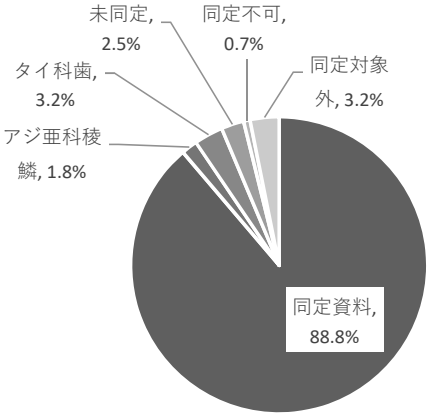
種別	遺構No.	層位	面	区	時期	分類群	部位	左／右	破片数	備考
SB	0002		A	05	明治前半	マダイ亜科	主上顎骨	右	1	
SU	0288		G	07・08	17後	マダイ亜科	歯骨	右	1	
SX	3044		C	06	上層(明治)下層(17後)	コチ科	前鰓蓋骨	右	1	
SK	2097・3082	1層	C	06	17前	マカジキ科	吻部	―	1	破片資料。
		2層				マカジキ科	吻部	―	1	破片資料。
SP	3111		C	06	?	フグ科	歯骨	右	1	歯の部分に縦に刀傷が認められる。
SK	4553	中層	F	02	17前	マダイ亜科	主上顎骨	左	1	
						サバ属	主上顎骨	左	1	
								右	1	
							前上顎骨	左	1	
								右	1	
							歯骨	左	1	
								右	1	
							方骨	左	1	
							舌顎骨	右	1	
						マグロ属	椎骨	―	3	腹尾不明。
						同定対象外	―	―	◎	破片資料＋鱗。
		一括	F	02	17前	マダイ亜科	歯骨	左	1	
						タイ科	口蓋骨	左	1	
						ヒラメ	腹椎	―	1	椎体前面に切断面有り。
						同定対象外	鱗	―	27	
							―	―	○	
SE	4610		F	04	17前	マダイ	前頭骨	―	1	正中線よりも右側寄りで切断。左側が残存。
							上後頭骨	―	1	
						タイ型	尾椎	―	1	タイ科
SK	4612		G	04	17前	タイ科？	基蝶形骨	―	1	
SK	4623		G	04	?	ハモ属	腹椎	―	1	
						マアジ	尾椎	―	1	
						マダイ	前頭骨	―	2	
						キダイ	前頭骨	―	1	
						タイ科	口蓋骨	左	1	
							主鰓蓋骨	左	1	
							臼歯	―	2	
							腹椎	―	1	
							尾椎	―	1	
						ハゼ科	前鰓蓋骨	右	1	
						同定不可	椎骨	―	1	横位に切断され、前端部のみが残存。
						同定対象外	―	―	○	硬状鰭棘、鰓蓋骨片など
―	B面		B	―		マダイ亜科	主上顎骨	左	1	
―	C面		C	―	近世中～後	タイ型	腹椎	―	1	タイ科
―	C-D面		C-D	―	近世中～後	ボラ科	尾椎	―	1	
―	F面		F	―	近世前	クロダイ属	前上顎骨	右	1	
						ブリ	腹椎	―	1	
―	井戸脇sec			―		マダイ	前頭骨	―	1	正中線で切断。右側が残存。
―	遺構外			―	17後	マダイ亜科	前上顎骨	左	1	旧・SK245
破片総数									360	＋α。



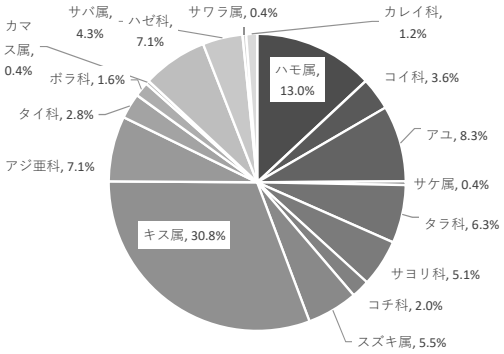
８図　医学部教育研究棟地点出土魚類遺体における同定対象資料の比率



９図　医学部教育研究棟地点出土魚類遺体組成グラフ



10 図　医学部教育研究棟地点 SK2472 出土魚類遺体における同定対象資料の比率

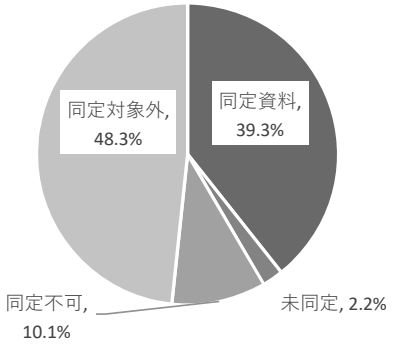


11 図　医学部教育研究棟地点 SK2472 出土魚類遺体組成グラフ

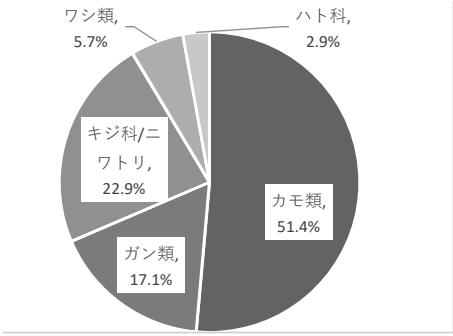
20 表　医学部教育研究棟地点出土鳥類遺体一覧

種別	遺構No.	層位など	面	区	時期(世紀)	分類群	部位	左／右	破片数	備考
SD	0233(・2160)		C	07・08	17～19	ハト科	大腿骨	右	1	ほぼ完存。骨頭部分に僅かであるが切断面を有する。
SK	0465		A～B	03	大正	ニワトリ	上腕骨	左	1	完存。
SP (SK)	0891 (0871)		D	01 (03)	? (17中)	カモ類	上腕骨	右	1	完存。カルガモ標本に近似。近位端、遠位端共に切断面有り。
							手根中手骨	左	1	完存。近位端に切断面あり。
						キジ科	脛足根骨	左	1	完存。
							橈骨	右	1	完存。
SK	2288		G	08	17前	カモ類	上顎骨(嘴)	―	1	
SK	2472		G	08	17後	ガン類	足根中足骨	右	1	完存。
						カモ類	下顎骨		1	
							上腕骨	右	1	比較的小型。近位端付近のみ。
							橈骨	左	1	
							尺骨	左	1	
							手根中手骨	左	1	
							脛足根骨	左	1	小型
									1	
							脛足根骨	右	1	小型
									1	
							足根中足骨	左	1	小型
									1	近位端部欠損。小型。
								右	1	小型
						キジ科	足根中足骨	右	1	小型。蹴爪なし。♀？
						未同定	脛足根骨	左	1	
								右	1	
						同定不可	尺骨	左	1	小型。遠位端部のみ残存。
							手根中手骨	―	1	小型。近位端部のみ残存。
						同定対象外	頭蓋骨	―	1	眼窩部分破片。
							上顎骨		1	小型
							趾骨	―	15	内小型5，大型2、そのほかは中型。
							末節骨	―	2	
							―	―	13	骨幹部分破片が主体。
SK	3014(・3072)		A～B	06	大正 (・18前)	カモ類	烏口骨	左	1	ほぼ完存。遠位に食肉目(イヌ？）によるものと推測される齧り痕が見られる。
						ニワトリ	烏口骨	左	1	遠位欠損。全体的に骨化が完了していなく、未成熟。
						同定不可	胸骨	―	1	完存であるが、骨化完了しておらず、端部が未癒合のため、同定できなかった。ニワトリ左烏口骨と同一個体？
SP	4091		D	02	17～18?	ガン類	尺骨	左	1	近位欠損。
							橈骨	左	1	ほぼ完存。
							手根中手骨	左	1	ほぼ完存。
							大指基節骨	左	1	完存。
							橈側手根骨	左	1	完存。
						同定対象外	―		○	破片資料。
SK	4553	中層	F	02	17前	ニワトリ	大腿骨	右	1	完存。
						同定不可	脛足根骨	右	1	骨幹部分のみ残存。
						同定対象外	趾骨	―	2	
							―	―	2	骨幹部分1、破片１
		一括				同定対象外	―	―	4	骨幹破片資料。
SE	4610		F	04	17前	同定不可	尺骨	右	1	遠位端部のみ残存。遠位端の一部も欠損。
SK	4628		G	04	17前～中	同定不可	上腕骨	―	1	骨幹部分のみ残存。
―	C面焼土					カモ類	尺骨	右	1	骨幹の一部が欠損。
―	井戸脇sec		―	―	?	カモ類	上腕骨	左	1	近位のみ残存。
						ワシ類	烏口骨	左	1	完存。
							上腕骨	左	1	ほぼ完存。
						ニワトリ	上腕骨	右	1	完存。
							脛足根骨	右	1	近位と骨幹の一部が欠損。
						同定不可	大腿骨	左	1	近位～中位にかけて残存。
							足根中足骨	左	1	遠位欠損。近位端は化骨化の途上。
						同定対象外	肩甲骨	―	2	骨幹部分のみ残存。
―	遺構外		―	―	17後	同定不可	脛足根骨	左	1	骨幹部分のみ残存。※旧・SK0245
破片総数									89	＋α

同一個体



12 図　医学部教育研究棟地点出土鳥類遺体における同定対象資料の比率



13 図　医学部教育研究棟地点出土鳥類遺体組成グラフ

21 表　医学部教育研究棟地点出土鳥類遺体に関するサイズ計測値

烏口骨

遺構	分類群		計測箇所		計測値
3014	カモ類	左	最大長	GL	51.52
			内側長	Lm	48.48
			胸骨関節面幅	BF	20.99
			烏口骨下端幅	Bb	24.39
井戸脇sec	ワシ類	左	内側長	Lm	43.55

上腕骨

遺構	分類群		計測箇所		計測値
0465	ニワトリ	左	最大長	GL	77.16
			近位端最大幅	Bp	19.41
			遠位端最大幅	Bd	15.48
0891(0871)	カモ類	右	最大長	GL	88.31
			近位端最大幅	Bp	18.23
			遠位端最大幅	Bd	11.40
井戸脇sec	ワシ類	左	最大長	GL	134.37
			近位端最大幅	Bp	25.39
			遠位端最大幅	Bd	21.81
	カモ類	左	近位端最大幅	Bp	18.03
	ニワトリ	右	最大長	GL	81.93
			近位端最大幅	Bp	22.40
			遠位端最大幅	Bd	17.03

尺骨

遺構	分類群		計測箇所		計測値
2472	カモ類	左	遠位端関節面最大幅	Did	11.05
	同定不可	左	遠位端関節面最大幅	Did	4.85
4091	ガン類	左	最大長	GL	134±
			遠位端関節面最大幅	Did	12.44
C面焼土	カモ類	右	近位端最大幅	Bp	10+
			近位端関節面最大幅	Dip	12+
			遠位端関節面最大幅	Did	10.64

橈骨

遺構	分類群		計測箇所		計測値
4091	ガン類	左	最大長	GL	132.25
			遠位端最大幅	Bd	9.45
2472	カモ類	左	遠位端最大幅	Bd	7.05
0891(0871)	キジ科	右	最大長	GL	66.65
			遠位端最大幅	Bd	7.26

手根中手骨

遺構	分類群		計測箇所		計測値
0891(0871)	カモ類	左	最大長	GL	50.77
			近位端最大幅	Bp	10.63
			遠位端関節面最大幅	Did	6.05
2472	カモ類	左	最大長	GL	56.71
			近位端最大幅	Bp	12.92
			遠位端関節面最大幅	Did	7.32
4091	ガン類	左	最大長	GL	79.99
			近位端最大幅	Bp	20.48

大腿骨

遺構	分類群		計測箇所		計測値
0233	ハト科	右	最大長	GL	40.86
			内側長	Lm	39.15
			近位端最大幅	Bp	9.04
			遠位端最大幅	Bd	7.26
4553(中層)	ニワトリ	右	最大長	GL	71.06
			内側長	Lm	66.39
			近位端最大幅	Bp	17.70
			遠位端最大幅	Bd	18.06
井戸脇sec	同定不可	左	近位端最大幅	Bp	16.35

脛足根骨

遺構	分類群		計測箇所		計測値
井戸脇sec	キジ科	右	遠位端最大幅	Bd	12.98
			遠位端最大厚	Dd	14.17
0891(0871)	キジ科	左	最大長	GL	118.48
			骨軸長	La	114.10
			近位端関節面最大幅	Dip	23.86
			遠位端最大幅	Bd	12.50
			遠位端最大厚	Dd	12.18
2472	カモ類	左	遠位端最大幅	Bd	5.52
			遠位端最大厚	Dd	5.99
		左	遠位端最大幅	Bd	8.34
			遠位端最大厚	Dd	9.21
		右	遠位端最大幅	Bd	14.85
			遠位端最大厚	Dd	14.82
		右	遠位端最大幅	Bd	5.12
			遠位端最大厚	Dd	5.81
	未同定	左	遠位端最大幅	Bd	2.52
			遠位端最大厚	Dd	2.17
		右	遠位端最大幅	Bd	2.50
			遠位端最大厚	Dd	2.42

足根中足骨

遺構	分類群		計測箇所		計測値
2472	カモ類	左	遠位端最大幅	Bd	6.26
	ガン類	右	近位端最大幅	Bp	15.62
			最大長	GL	72.32
			遠位端最大幅	Bd	16.45
井戸脇sec	同定不可	左	近位端最大幅	Bp	13+

（計測単位：㎜）

22表　医学部教育研究棟地点出土哺乳類遺体一覧

種別	遺構No.	面	区	時期	分類群	部位	左／右	破片数	備考
SU	0139	G	07	17末	イヌ	寛骨	左	1	腸骨から寛骨臼までが残存。腸骨体背面にイヌの齧り痕(上顎P4）がある。
					イヌ	腰椎	－	1	
					同定不可	大腿骨	－	1	骨幹部分。イヌ?
SK	0244	C	07	17中～19中	ウシ	上腕骨	左	1	近位のみ残存。上腕骨頸で鋸状の刃物によって切断されている。
SK	0465	A～B	03	大正	イヌ	頸椎	－	1	
SP	0501	C～D	03	?	ウマ？	臼歯	－	1	
SK	0539(･4225･4254)	A～B	01・02	19c後・明治前	同定対象外	－	－	5	破片資料
SP	0395	E	03・04	明治前	イヌ	大腿骨	右	1	近位のみ残存。
SK	2049	G	08	17前～中	ウマ	上顎第1後臼歯	右	1	歯根部分及び歯冠舌側が欠損。
					ニホンシカ	上腕骨	右	1	近位が欠損。
SK	2472	G	08	17後	ネズミ類	頸椎	－	2	
SK	3014(・3072)	A～B	06	大正(・18前)	ウシ	上腕骨	右	1	遠位が残存。
					同定不可	四肢骨	－	1	中形哺乳類。骨幹部分のみ残存。
SX	3044	C	06	上層(明治)下層(17後)	イヌ	大腿骨	右	1	骨頭部分が食肉目(イヌ？）による齧りによって欠損。
					イヌ	脛骨	右	1	両端と骨幹の一部が残存。
					同定不可	腓骨	－	1	骨幹部分破片資料。イヌ？
				上層(明治)	ウマ	基節骨(後脚)	－	1	近位部分のみ残存。
SK	3082(・2097)	C	06・08	17前	ニホンシカ	大腿骨	右	1	遠位部分残存。遠位骨端未癒合。
	3082-1層				同定不可	中手/足骨	－	1	骨幹部分のみ残存。イヌ？
SK	3312・3315	G	06	?	マイルカ科	頭蓋骨	－	1	
SP	4091	D	02	17～18?	ネコ	橈骨	右	1	完存。遠位のみ骨端が未癒合であることから生後7ヵ月以上1歳10ヶ月未満のものと推定。
SP	4162	C	04	?	ネコ	下顎骨	右	1	ほぼ完存。
SK	4553	F	02	17前	イルカ類	椎骨	－	4	4点椎体部分、そのほかに破片資料もあり。
					イヌ	上腕骨	左	1	近位端欠損。
					イヌ	大腿骨	右	1	ほぼ完存。
SK	4628	G	04	17前～中	イヌ	軸椎	－	1	近位～中位残存。欠損は発掘時のものと思われる。
					ウマ	上顎第3後臼歯	左	1	歯根部分欠損。
－	A面	A	―		ウシ	上腕骨	右	1	内側上顆部分。遠位部分に切断面を有する。
－	B-G面	B～G	―		同定対象外	肋骨	－	1	中形哺乳類。
－	B-J面	B～J	―		ウマ	下顎臼歯	左	1	歯根部分及び咬合面が欠損しているため位置が不明。
					同定不可	四肢骨	－	1	中形哺乳類(イヌ?)。骨幹部分のみ残存。
－	F-G面	F～G	―		イヌ	下顎犬歯	左	1	遊離歯。歯根部分は欠損。
					イヌ	下顎第3前臼歯	左	1	遊離歯。歯根部分は欠損。近遠心径：8.61mm，頬舌心径：4.62mm
					イヌ	下顎第1後臼歯	左	1	遊離歯。歯根部分は欠損。最大長(近遠心径)：16.45mm，近心部頬舌径：6.68mm，遠心部頬舌径：5.98mm
－	井戸脇sec	－	―		イヌ	橈骨	右	1	骨幹やや遠位～遠位端にかけて残存。遠位端は未癒合。生後1歳未満。
－	表土	－	―	?	同定不可	橈・尺骨	－	2	大型哺乳類。骨幹部分破片資料。内１点横位に鋸状の刃物によるものと推定される切断面を有する。
					同定対象外	肋骨	－	1	大型哺乳類。近位に切断面とその面と平行する切断痕が見られる。切断面の観察から鋸状の刃物によるもの
－	攪乱	－	―	?	ウサギ科	大腿骨	右	1	遠位端が欠損。
－	遺構外			17～19	ウマ	下顎第2後臼歯	右	1	※旧・SK4420
－	不明				ニホンシカ	角	－	4	内3点破片資料。1点分岐部分。上部下部それぞれに鋸状の刃物によると推定される切断面を有する。
					未同定	不明	－	1	
破片総数								53	

23 表　医学部教育研究棟地点出土哺乳類遺体に関するサイズ計測値

イヌ

出土遺構	部位		計測箇所	計測値 (mm)	推定体高 (cm)	形種分類 長谷部(1952)	
0139	寛骨	左	寛骨臼最大幅	21.6			
			腸骨最小幅	18.2			
			腸骨厚(最小幅位)	9.5			
3044	大腿骨	右	全長	171+	48	股骨長	中
			遠位端最大幅	31.2			
			中央横径	13.8			
			中央矢状径	14.2			
	脛骨	右	近位端最大幅	34.3			
			近位端最大矢状径	34.4			
4553	上腕骨	左	中央横径	10.6			
			中央矢状径	11.7			
	大腿骨	右	全長	160.2	46.45	股骨長	中小
			近位端最大幅	35.2			
			遠位端最大幅	29.1			
			中央横径	12.6			
			中央矢状径	12.7			
井戸脇sec	橈骨	右	遠位端最大幅	19+			

ネコ

出土遺構	部位		計測箇所	計測値 (mm)
4162	下顎骨	右	全長(1)	55+
			全長(2)	56.1

ウシ

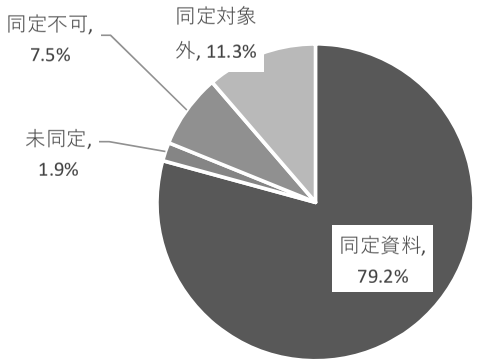
出土遺構	部位		計測箇所	計測値 (mm)	推定体高(cm) Ⅰ	Ⅱ
0244	上腕骨	左	近位端最大幅	88.6	115.36	114.89
3014	上腕骨	右	遠位端最大幅	85.3	122.57	122.85

ニホンシカ

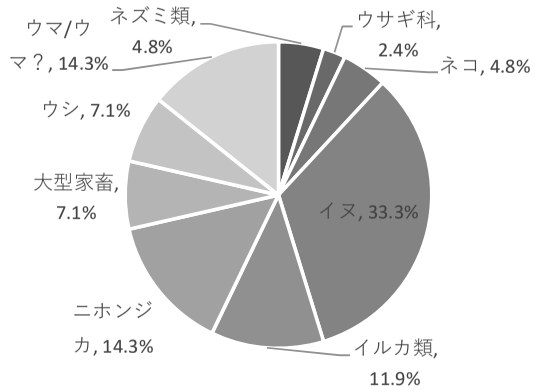
出土遺構	部位		計測箇所	計測値 (mm)
2049	上腕骨	右	遠位端最大幅	38+
3082	大腿骨	右	遠位端最大幅	36+

ウマ

出土場所	部位		歯冠高	推定年齢
2049	上顎第1後臼歯	右	50+	6歳
4628	上顎第3後臼歯	左	23.00	15～16歳
遺構外	下顎第2後臼歯	右	55.64	6～7歳



14 図　医学部教育研究棟地点出土哺乳類遺体における同定対象資料の比率



15 図　医学部教育研究棟地点出土哺乳類遺体組成グラフ

24表　医学部教育研究棟地点出土動物遺体出土傾向(複数のカテゴリ―出土)

種別	遺構No.	層位	面	区	時期	貝類	魚類	鳥類	哺乳類	カワラケ	塩壺
SU	0139		G	07	17末	アカガイ(5)，サザエ(1)			イヌ(2)	○	○
SP	0395		E	03・04	明治前	サザエ(1)			イヌ(1)	－	－
SK	0465		A～B	03	大正	アワビ類(1)		ニワトリ(1)	イヌ(1)	－	－
SK	2049		G	08	17前～中	サザエ(2)			ニホンジカ(1)，ウマ(1)	○	－
SK	2288		G	08	17前	サザエ（3），アカガイ（2），クロアワビ（1）		カモ類(1)		○	－
SK	2472		G	08	17後	シジミガイ属(17)，サザエ(10)，ハマグリ(5)，キクスズメ（2），ミルクイ，ハナエガイ（各1）	キス属(78)，ハモ属(33)，アジ亜科/マアジ(23)，アユ(21)，ハゼ科(18)，タラ科，タイ科/マダイ亜科/マダイ(各16)，スズキ属(14)，サヨリ科(13)，サバ属(11)，コイ科/コイ(9)，コチ科(5)，ボラ科(4)，カレイ科(3)，サケ属，カマス属，サワラ属(各1)	カモ類(13)，スズメ目(2)，ガン類(1)，キジ科(1)	ネズミ類(2)	○	○
SK	3014(・3072)		A～B	06	大正（・18前）	サザエ，ダンベイキサゴ(各1)		カモ類(1)，ニワトリ(1)	イヌ(2)，ウシ(1)，ウマ(1)	－	－
SX	3044		C	06	上層(明治)下層(17後)		コチ科(1)		イヌ(1)	×	
SK	2097・3082	1層	C	06	17前	ハマグリ(3)	マカジキ科(1)			○	－
		2層				ハマグリ(7)，サザエ，アサリ(各1)	マカジキ科(1)				
		3層				ハマグリ(1)					
		一括				ハマグリ(3)，サザエ，アサリ(各1)			ニホンシカ(1)		
SP	4091		D	02	17～18?	アカガイ(1)		ガン類(5)	ネコ(1)	×	
SK	4553	中層	F	02	17前	サザエ(21)，ハマグリ(10)，アカニシ(6)，アワビ類，アカガイ，アサリ，シオフキ(各1)	サバ属(8)，マダイ亜科(1)，マグロ属(3)	ニワトリ(1)		○	○
		一括	F	02	17前	ハマグリ(2)，アカニシ(1)	タイ科/マダイ亜科(2)，ヒラメ(1)	※同定対象外(4)	イルカ類(4)，イヌ(2)		
SE	4610		F	04	17前	サザエ(8)，バイ(2)，ナガニシ，アカガイ，シジミガイ属，ミルクイ(各1)	タイ科/マダイ(3)	※同定不可(1)		○	－
SK	4612		G	04	17前	サザエ(15)，アカニシ(4)，アカガイ(2)，カガミガイ(1)	タイ科？(1)			○	－
SK	4623		G	04	?	シジミガイ属(798)，サルボウ(60)，ハマグリ(37)，アサリ(32)，アカニシ(9)，サザエ，ナミマガシワ（各2）	タイ科/キダイ属/マダイ(9)，ハモ属，ハゼ科，マアジ(各1)			※食物残滓のみ	
SK	4628		G	04	17前～中	サザエ(3)		※同定不可(1)	イヌ(1)，ウマ(1)	－	－
―	Ⅱ-井戸脇sec			－		サザエ(2)，ダンベイキサゴ，アカガイ，マガキ，ハマグリ，シオフキ，陸産貝類(各1)	マダイ(1)	ワシ類(2)，ニワトリ(2)，カモ類(1)	イヌ(1)	?	?
―	B面		B	－	近世中～後	アカガイ(1)	マダイ亜科(1)				
―	B-G面		B～G	－	近世	アワビ類(1)			※同定対象外(1)		
―	B-J面		B～J	－	近世	サザエ，アカガイ，マガキ，ミルクイ(各1)			ウマ(1)		
―	C面		C	－	近世中～後	サザエ，マガキ(各3)，シジミガイ属(1)	タイ科(1)				
―	C-D面		C-D	－	近世中～後	アカガイ(10)，サザエ，ハマグリ(各4)，アカニシ(2)，メガイアワビ，バイ，シジミガイ属，ミルクイ(各1)	ボラ科(1)				
―	F面		F	－	近世前	サザエ(2)，アカニシ(1)	クロダイ属，ブリ属(各1)				
―	F-G面		F～G	－	近世前期	サザエ(2)，ハマグリ(1)			イヌ(3)		
―	遺構外			－	17後	サザエ(1)	マダイ亜科(1)	※同定不可(1)			
―	表土		－	－	?	サザエ(2)，アワビ類(1)			※同定不可(2)，同定対象外(1)		
―	攪乱		－	－	?	サザエ(8)，アワビ類，アカニシ，アカガイ，マガキ，イワガキ，ハマグリ，チョウセンハマグリ，同定不可(各1)			ウサギ科(1)		

25 表　医学部教育研究棟地点出土動物遺体出土傾向 (貝類のみ出土)

種別	遺構No.	面	区	時期	貝類
SB	0001-P09	A	05	明治前半	マガキ(1)
SK/SD	0087/0112	C	05・06	18後～19初/18後	同定不可(1)
SK	0468	A～B	03	明治	シジミガイ属，ハマグリ(各１)
SK	0542	A～B	03	明治	サザエ(1)
SX	0555北埋土（・4059）	C	01・02	19前	マガキ(4)
SX	0605石組下	C	01	17	サザエ(2)
SP	1135	E	04	17前	サルボウガイ(7)
SE	2001	G	08	17前～中	サザエ(7)，サルボウガイ(1)，ハマグリ(1)
SK	2014	G	08	19前	アカガイ，マガキ，ハマグリ(各1)
SK	2020	G	08	?	シジミガイ属(13)，サルボウガイ(7)
SP	2037	G	08	?	メガイアワビ(1)
SU	2052	G	08	17中	サザエ(4)
SK	2054	A	08	明治	サザエ，アカガイ，ミルクイ(各1)
SD	2058内側	C	06・08	17と19	クロアワビ，サザエ[各1)
SD	2058堀方	C	06・08	17と19	アワビ類(1)
SK	2121	G	07	17後	サザエ(7)，アカガイ(2)，クロアワビ(1)
SU	2159	G	08	17後	サザエ(3)
SK	2174	G	08	17前～中	サルボウガイ(12)，サザエ(1)
SU	2190	G	08	17中	サザエ(4)
SK	2210	D	06・08	17～18	マダカアワビ，サザエ，アカガイ（各1)
SK	2251	C	08	17前	バイ（１）
SD	2260	G	06	17前	ハマグリ(6)，アサリ，シオフキガイ(各1)
SK	2413（・0417）	G	08	17後	サザエ（2）
SK	2419	G	08	17前	アサリ（9），サザエ（1）
SP	2475	G	08	?	サザエ(3)
SK	3018	B	04	?	ミルクイ(1)
SD	3021（・0236・2095）	D	05～08	1682年［天和2］（17前・後）	アサリ(7)，サザエ，シジミガイ属(各6)，アカガイ(2)，クロアワビ，ハマグリ(各1)
SK	3033	A～B	04	明治	ハマグリ(1)
SK	3046	F	06	17前	サザエ(11)，アワビ類，アカニシ，ハマグリ(各1)
SP/SK	3091（・0114）/3092C層	C	06	18?（・19前）/18後	マガキ(1)
SD	3100（・0246）	D	05・06	17後	アカニシ(1)
SK	3112・3145	C	06	19?	バイ(2)，サザエ(1)
SP	3199	G	06	19	ハマグリ(1)
SK	3301	G	04	?	サザエ(1)
SK	3213	F	04	17前	サザエ(2)，アカニシ(1)
SK	3331	E～	06	17前～中	サザエ(1)
SP	3376	E～	04	?	サザエ(1)
SP	3229	E～	06	17	サザエ，シジミガイ属(各3)
SK	3271	E～	06	17前～中	サザエ(3)
SP	4032	C	02	17後	サザエ(1)
SP	4101	C	02	?	マガキ(2)
SP	4155	C	04	?	サザエ(1)
SP	4215	C	02	19	アカニシ(1)
SP	4224	D	04	?	サザエ(1)
SK	4246	C	02	17後	サザエ(2)
SP	4319	D	02	17末?	サザエ(1)
SK	4353	D	02	17後	サザエ，アカニシ(各1)
SP	4376	F	02	?	サザエ(1)
SK	4513	F	02	17前	サザエ(5)，アワビ類，アカニシ(各1)
SK	4532	F	02	17前	サザエ(5)，アカガイ(1)
SK	4556	F	02	19	サザエ(18)，ハマグリ(2)，アワビ類，アカガイ(各1)
SK	4569	F	02	17前～中	サザエ(9)
SK	4731	G	04	17前?	サザエ(1)
－	B-C面	B～C		近世中～後	サザエ，アカニシ(各2)，ハマグリ，ミルクイ，同定不可(各1)
－	B-C面(攪乱中含	B～C		近世中～後	アワビ類，サザエ，ハマグリ，アサリ，ミルクイ(各1)
－	B-D面	B～D		近世中～後(1682年以降）	アカガイ(5)，サザエ，シジミガイ属(各2)，バイ，タイラギ，ハマグリ，シオフキ，ミルクイ(各1)
－	D面	D		1682年(天和2)以前	サザエ(2)
－	D-G面	D～G		1682年(天和2)以前	サザエ(3)，アカニシ(1)
－	D-H面	D～H		1682年(天和3)以前	サザエ(2)

種別	遺構No.	面	区	時期	貝類
−	D-I面	D～I		1682年(天和2)以前	サザエ(3)，アカガイ(2)，アワビ類，アカニシ(各1)
−	E面	E		近世前期	サザエ(4)，アカニシ，サルボウ(各2)，アワビ類，アカガイ，マガキ，ナミマガシワ，アサリ，カガミガイ，同定不可(各１)
−	G面	G		近世前期	サザエ(2)
−	G-H面	G～H			アカガイ，マガキ，シオフキ(各1)
−	H面	H	−		アカガイ(1)
−	配管掘方内	−	−		サザエ(1)
−	Ⅳ期Ⅱ層	−	−		マガキ(1)
−	遺構外			17	アサリ(1)
−	遺構外			17中	サザエ(2)，ハマグリ(1)
−	遺構外				アカガイ(4)，サザエ(2)，メガイアワビ，ハマグリ，シジミガイ属，ミルクイ(各1)

26 表　医学部教育研究棟地点出土動物遺体出土傾向 (魚・鳥・哺乳類単独カテゴリ―のみ出土)

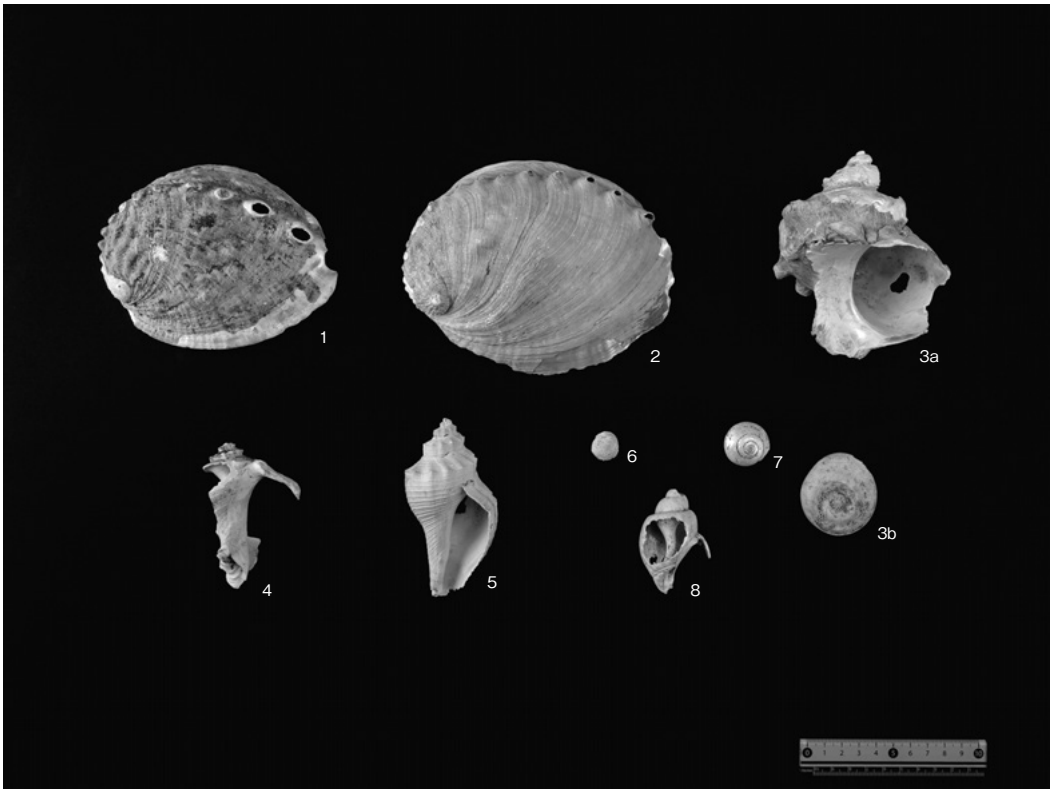
種別	遺構No.	面	区	時期	魚類
SB	0002	A	05	明治前半	マダイ亜科(1)
SU	0288	G	07・08	17後	マダイ亜科(1)
SP	3111	C	06	?	フグ科(1)
種別	**遺構No.**	**面**	**区**	**時期**	**鳥類**
SD	0233(・2160)	C	07・08	17～19	ハト科(1)
SP (SK)	0891 (0871)	D	01 (03)	？ (17中)	カモ類(2)，キジ科(2)
種別	**遺構No.**	**面**	**区**	**時期**	**哺乳類**
SK	0244	C	07	17中～19中	ウシ(1)
SP	0501	C～D	03	?	ウマ？(1)
SK	0539（・4225・4254） /0540(4291)	A～B /C～D	01・02 /02	19c後・明治前 /明治	※同定対象外(5)
SK	3312・3315	G	06	?	マイルカ科(1)
SP	4162	C	04	?	ネコ(1)
―	A面	A	―		※同定不可(1)
―	遺構外			17～19	ウマ(1)
―	不明				ニホンジカ(4)

27 表　医学部教育研究棟地点出土魚貝類遺体に関する『黒白精味集』における価値

種名	黒白			
	表示	季節	価値	記載内容
アワビ類	蚫	四季に有	上	上也
アワビ類	干鰒		下	下
サザエ	栄螺		中	中也
アカニシ	蓼嬴(ニシ)		中	中の下
バイ	海嬴		中	中の下
アカガイ	蚶	四季に有　夏子有間腸共に不用	上	上也
サルボウ	さるぼう		中	中の下
マガキ	蠣	秋より春迄有り	上	上也
ハマグリ	蛤	秋より春迄	中	中也
アサリ	蜊	秋より春迄	中	中也
シジミガイ属	蜆	四季に有　本庄成平蜆名物也	上	上也
ミルクイ	海松喰	四季に有り	上	上也
タイラギ	蛟	四季に用ゆ	上	上也
キス属	鱠残魚	四季	上	上
ハモ属	干鱧	［夏］	上	ごん切也　上置　取肴［※ごん切(五寸切)：小さいハモの干物。細かく刻んでなますなどにする。干鱧（ひはも）。小鱧。［季］ 夏。『大辞林（第3版）』］
タイ科	鯛	四季	上	上
クロダイ属	黒鯛	四季に有	下	下の上
アユ	鮎	春から秋まで	上	—
アジ亜科(マアジ)	鰺	四季に有　専夏	中	中の上
ハゼ科	沙魚	四季に有　秋冬多し	下	下の中　摺身中の中
サバ属	生鯖	四月多	下	下の中
	刺鯖		上	上也　能登　加賀吉　余は善悪有　塩鯖下　主酢
タラ科	生鱈	冬	上	—
スズキ属	鱸	夏秋多し	上	主二の汁上也　ふっこ鱸小き也　鮗　主炙物中也
	ふっこ・鮗(せいご)		中	
サヨリ科	細魚	冬春多し	上	「沖細魚性不同　下魚也」
コイ科(コイ)	鯉	四季	上	上
コイ科(フナ属)	鮒		上	上の中
コイ科(ウグイ属)	鮠	四季有	下	下の中
コイ科(オイカワ)	鮠(はえ)	四季有	下	下の中
コチ科	鮴		中	中の上
ボラ科	鯔	四季	中	中の上
ボラ科［すばしり：稚魚］	鯨	四季／春	中	中
カレイ科	石鰈	四季	上	上
マグロ属	まぐろ	夏なし	下	下の中
サケ属	鮭		上	
	鱒	春多し　小鱒秋より出る	上	
カマス属	鰳	冬春多	下	下の上
サワラ属	鰆	四季（春夏多し）	上	—
ブリ属	生鰤	秋多し	下	下の上
	塩鰤		上	丹後最上也　加賀　越後　能登上也　はまち　鰤　塩鰍下
フグ科	河豚		下	眞ふぐ赤［色赤色上］
ヒラメ	鰉	四季（専春）	中	中の上

ダンベイキサゴ，ナガニシ，ナミマガシワ，イワガキ，シオフキガイ，チョウセンハマグリ，カガミガイ，マカジキ科については記載なし

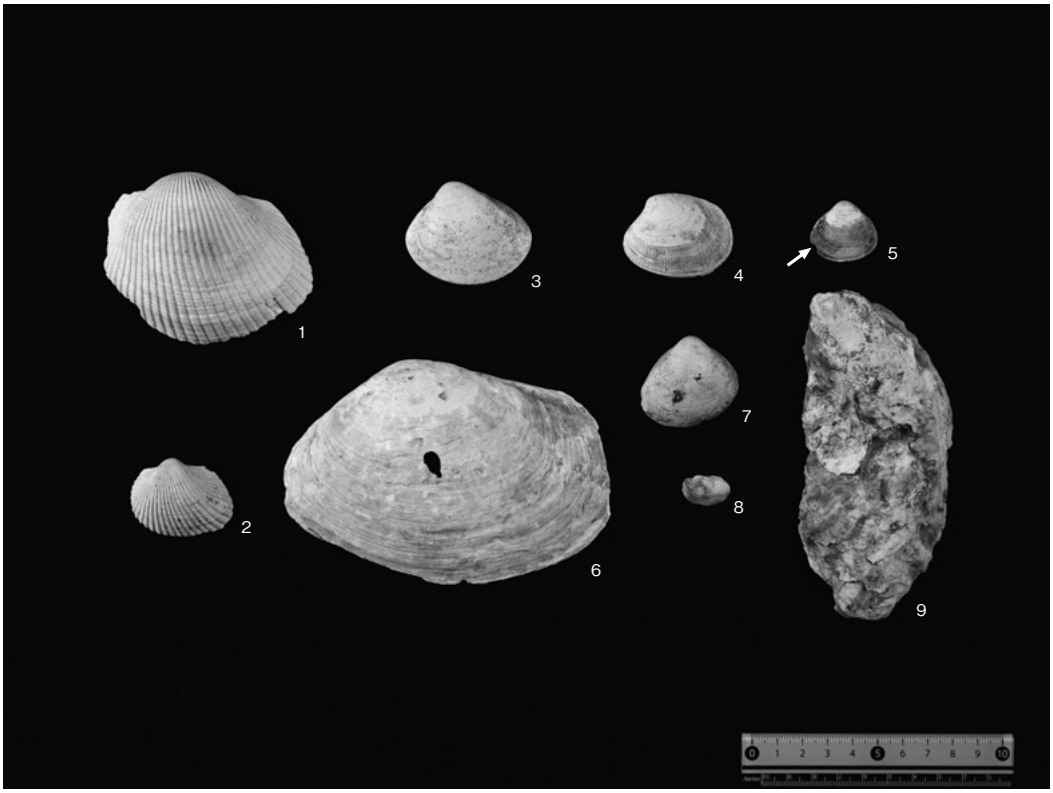
PL1. 巻貝類



１．マダカアワビ，２．クロアワビ，３．サザエ（a. 殻，b. 蓋），４．アカニシ，５．ナガニシ，６．キクスズメ，７．ダンベイキサゴ，８．バイ

※１．SK2210，SK2288，3・6. SK2472，４．SK4623，５・８．SE4610，７．Ⅱ-井戸脇　より出土。

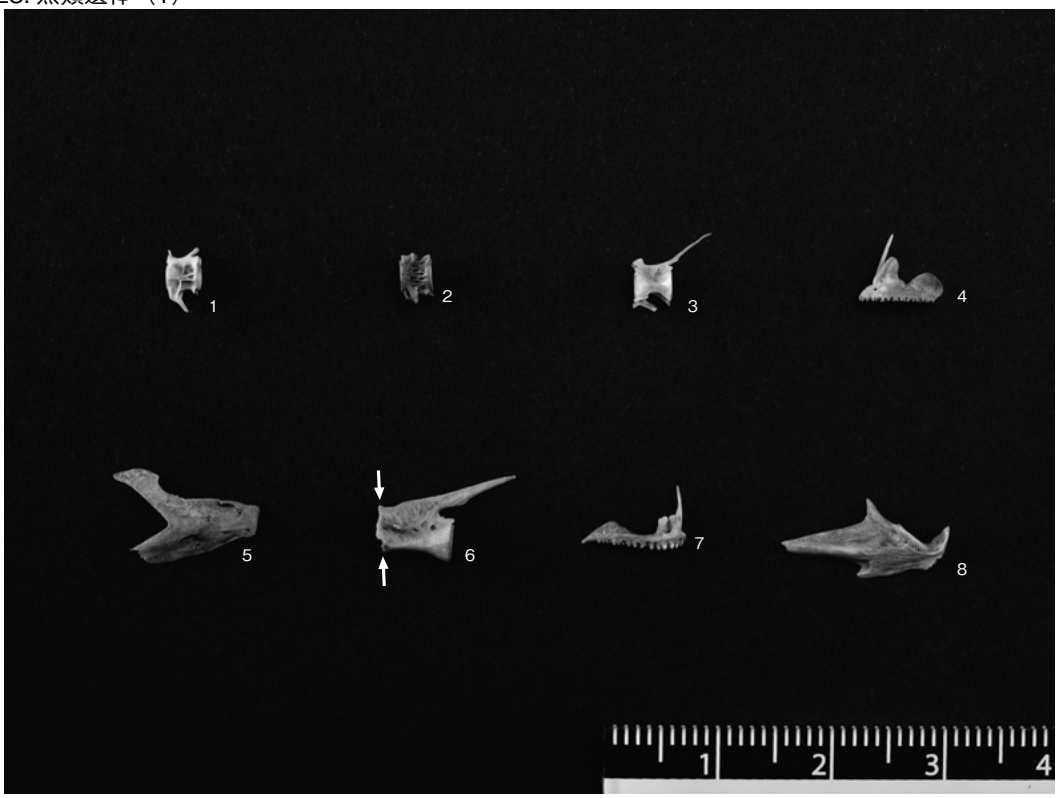
PL2. 二枚貝類



１．アカガイ，２．サルボウガイ，３．ハマグリ，４．アサリ，５．シジミガイ属，６．ミルクイ，７．シオフキガイ，８．ハナエガイ，９．マガキ

※１．SU0139，２～５．SK4623，６．SE4610，7. Ⅱ-井戸脇，８．SK2472，９．SX0555　より出土。
７．が右殻、それ以外は左殻，→：小剥離

PL3. 魚類遺体（1）



1．ハモ属　尾椎，2．アユ　尾椎，3．サヨリ科　尾椎，4．キス属　前上顎骨 (左)，5．アジ亜科　歯骨 (右)，
6．カマス属　腹椎，7．ハゼ科　前上顎骨 (右)，8. カレイ科　角骨 (左)
※すべて SK2472 より出土，→←: 切断面

PL4. 魚類遺体（2）

1．コイ　下咽頭骨 (右)，2．サケ属　腹椎，3．タラ科　腹椎，4．コチ科　尾椎，5．スズキ属　尾椎，6．ブリ属　腹椎，
7．マダイ　前頭骨，8．キダイ属　前頭骨，9．クロダイ属　前上顎骨 (右)，10. ボラ科　尾椎，11. サバ属　尾椎，
12. サワラ属　尾椎，13. マグロ属　椎骨，14. マカジキ科　吻部，15. ヒラメ　腹椎，16. フグ科　歯骨 (右)
※6･9. F 面，8．SK4623，13･15. SK4553，14. SK3082［2 層］，16. SP3111 より。それ以外は、すべて SK2472 より出土，
→←: 切断面

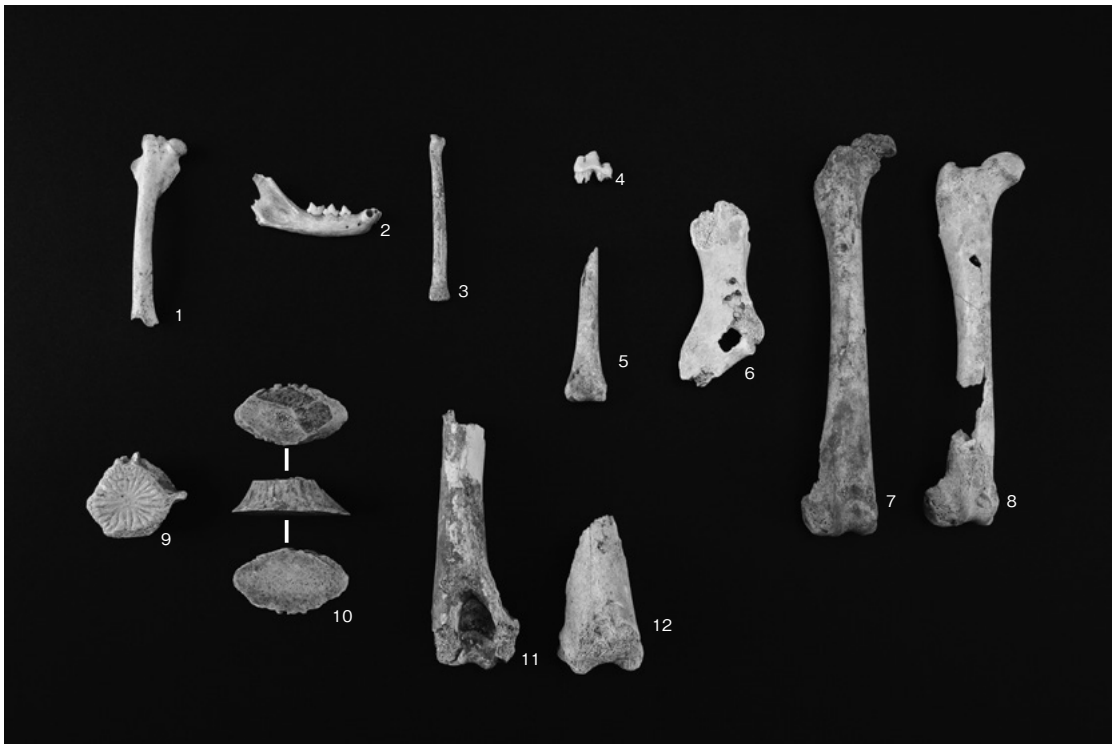
PL5. 鳥類遺体（1）　　ガン・カモ類

1. 烏口骨（左），2. 上腕骨（右），3. 上腕骨（左），4･5. 手根中手骨（左），6･7. 脛足根骨（左），8･9. 足根中足骨（右），10. 上顎骨
※1. SK3014, ２. SK0892, ３. Ⅱ-井戸脇,, ４. SK4091, ５～９. SK2472, 10. SK2288　より出土。

PL6. 鳥類遺体（2）　　タカ科、キジ科（ニワトリ）、ハト科、未同定

１. タカ科　烏口骨（左），２. タカ科　上腕骨（左），３. ハト科　大腿骨（右），４. 未同定　脛足根骨（右），５. ニワトリ　上腕骨(右)，6. ニワトリ　大腿骨(右)，7. キジ科　脛足根骨(左)，8. キジ科　脛足根骨(右)，9. キジ科　足根中足骨(右)
※１・２・５・８. Ⅱ-井戸脇，３. SD0233, ４・９. SK2472, ６. SK4553, ７. SK0891　より出土。

PL7. 哺乳類（1）



1．ウサギ科　大腿骨（右），2．ネコ　下顎骨（右），3．ネコ　橈骨（右），4．イヌ　下顎第１後臼歯（左），5．イヌ　橈骨（右），6．イヌ　寛骨（左），７・８．イヌ　大腿骨（右），９．イルカ類　椎骨，10．ニホンジカ　角（上：上面観，中：正面観，下：下面観），11．ニホンジカ　上腕骨（右），12．ニホンジカ　大腿骨（右）

※1．攪乱，2．SP4162，３．SP4091，4．F-G 面，5. Ⅱ-井戸脇，６．SU0139，7．SX3044，8・9．SK4553，10．出土地不明，11．SK2049，12．SK3082

PL8. 哺乳類（2）

1．ウシ　上腕骨（右）※現生標本，２．ウシ　上腕骨（右）（上：正面観，下：下面観），３．ウシ　上腕骨（左）（上：正面観，下：下面観），４．ウシ　上腕骨（右），５．ウマ　基節骨

※2.A 面，3．SK0244，4．SK3014，５．SK3044 より出土。

表御殿における応接

―「賓客応接記事」をもとに―

増田　晴夫

はじめに

調査地点である医学部教育研究棟は、東京大学本郷キャンパスの中央部にある育徳園から南側に立ちあがる台地上部に位置している。本郷キャンパスはかつて加賀藩江戸屋敷であったが、その屋敷地の利用状況は元禄期まで遡ってうかがい知ることができる。本調査地点は元禄期以来、御殿空間に該当し、とりわけ享保期以降は表御殿の居間書院が建てられていた。文政７年（1824）にはこの居間書院周辺を改築し[1]、独立した能舞台を建設するが、本調査ではこの能舞台遺構を検出している。

大名屋敷の表御殿は、儀礼・応接空間・政務空間・居住空間から構成され、書院群がその中核をなしている。加賀藩本郷上屋敷も、元禄期には大書院・小書院・奥書院を、享保期には大書院・小書院・居間書院・居間を備えていた。

平井聖氏は表御殿の書院群と儀礼や応接との関係について明らかにしている[2]。一般的な書院群が大書院・小書院・居間書院・居間から構成され、居間は主人の居住空間であり、対面や接客には大書院・小書院・居間書院を格式に応じて１つもしくは複数使用し、儀礼には１つの書院を用いて行われると指摘している。ただ、論拠としているのは、江戸城での事例がほとんどであり、江戸の大名屋敷の事例が不足していることは否めない。そのために応接の具体像を結ぶことが難しくなっている。

本稿では、「賓客応接記事」を用いて、19 世紀初頭の加賀藩本郷上屋敷の表御殿における応接の有り様を検証していくことで、上記課題の解決の一助としたい。特に同時代の絵図資料も豊富に遺されているので、絵図上で応接を復元することもひとつの到達点としていきたい。

１．研究資料

１－１．「賓客応接記事」

「賓客応接記事」[3]（以下、「記事」と略す）は、乾と坤の２冊からなる。

乾には、「上使并重キ御客一件」「御客取次方」「御客江御料理等指出候心得」「御客方ニ付雑事心得等」「組頭御門外等之節之事」「仮奏者一件」「御使者取次方」「御女中様方取次方」「御前様江之御使者取次方」「法梁院様江之御使者取次方」「御使者之分饗応方心得等」「御使者之分取次方心得等」「取次方雑心得等」「御両敬之御方并被御口上之御方・附御名順」「御続書三様」の 15 点が収録されている。

坤には、「御帳附方心得等・附附方古近例」「御番方心得等・附古近例」「御番中心得雑記」、「装束年中行事・附御殿詰装束之覚古近例共上使之部雑之部常御客之部」の４点が収録されている。

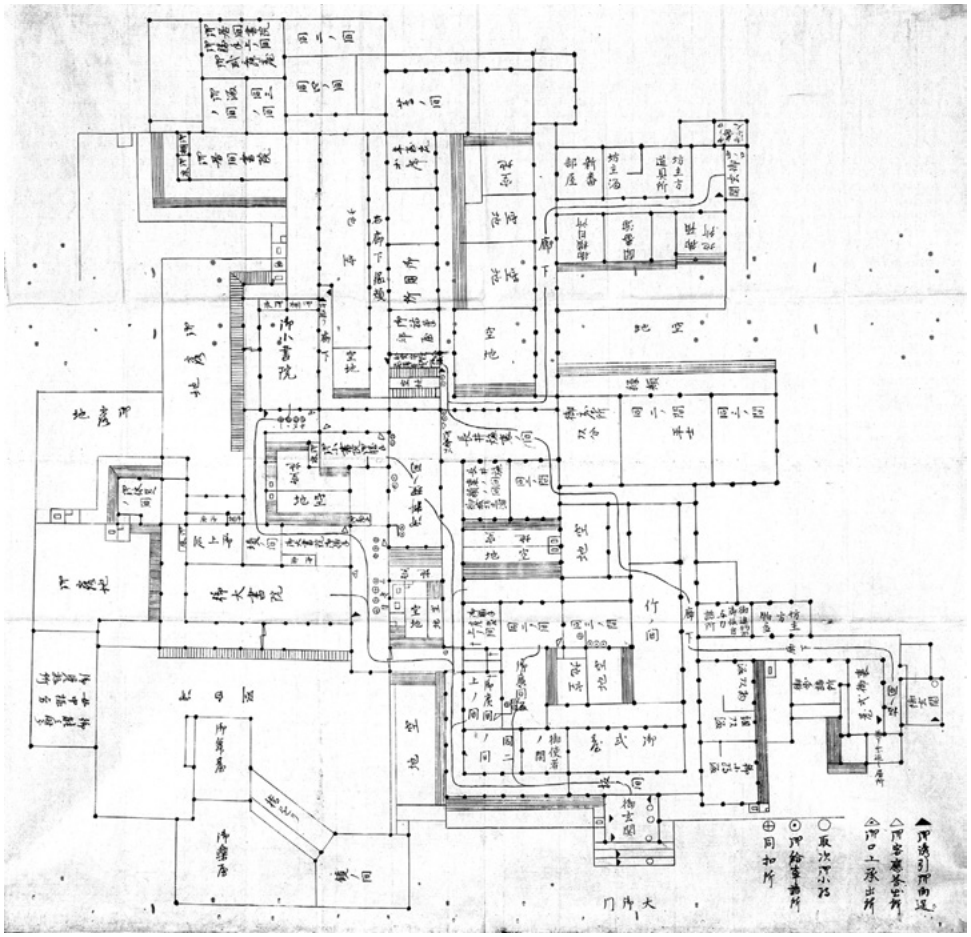
いずれも過去の記録を参照しながら、文化・文政期の本郷上屋敷における応接について纏めている。また、その内容から、①来訪者を応接するための手順と規則、②その応接を補助する藩士が注意すべき細則、③両敬帳や続書といったリスト、に分類することができる。

本稿では、①のなかでも応接の全体像が記されている、乾の「上使并重キ御客一件」と「御客取次方」を詳細に検討していく。

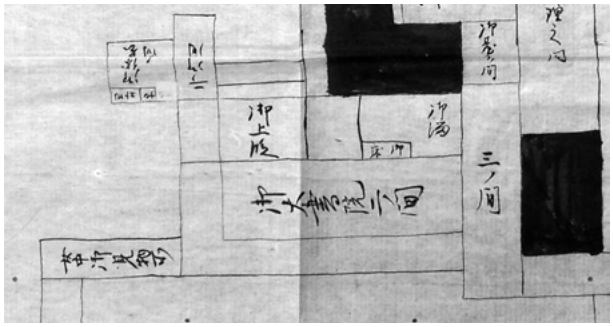
「上使并重キ御客一件」には、11 代藩主治脩が在府していた、寛政８年（1796）４月から翌９年４月までに来訪した幕府の使者を応接するための作法書が収録されている。作法書とは事前に作成された式次第のことで、藩主と使者の動きを中心に記している。この１年のあいだに、12 代藩主斉広が治脩の養嫡子となり、また将軍世子家慶が袴着や元服といった人生儀礼を迎え、幕府から使者を派遣される機会が例年にくらべて多かったものとみられる。

「御客取次方」には、来訪者を応接するための手順が書かれている。「取次」とあるが、これは来訪者の口上を取り次ぐということを意味している。口上は季節の挨拶や病気の見舞い、弔事のお悔やみなど、その内容は多岐にわたる。口上を取り次ぐ対象として、斉広・治脩の正室法梁院・斉広の正室夙姫が挙げている。

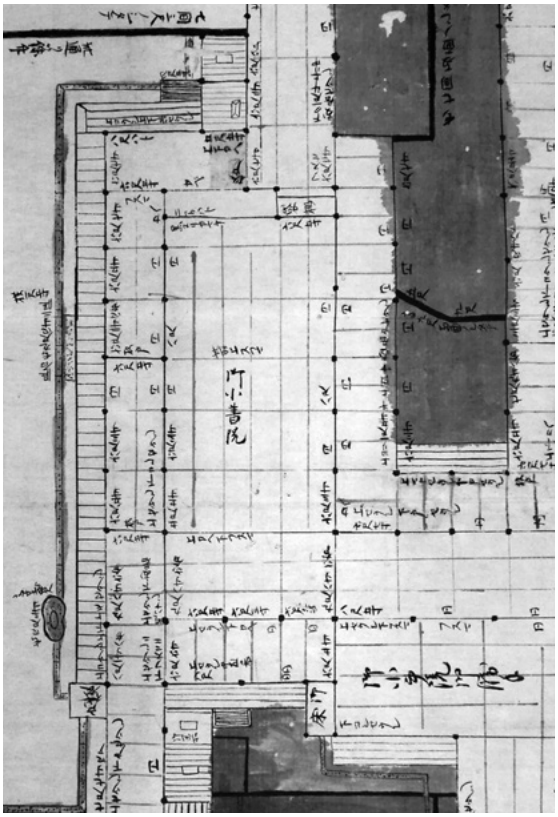
治脩は明和８年（1771）から安永４年（1775）までの５年間にわたり日記[4]をのこしている。27 歳のときに僧侶から還俗し、兄の 10 代藩主重教から家督を継いだため、治脩には大名としての立居振舞が身についていなかった。日記には、備忘のためか、儀礼の細かな動作やその意図するところが記されており、より詳細に動きが分かる場合にはこの日記からも参照していく。



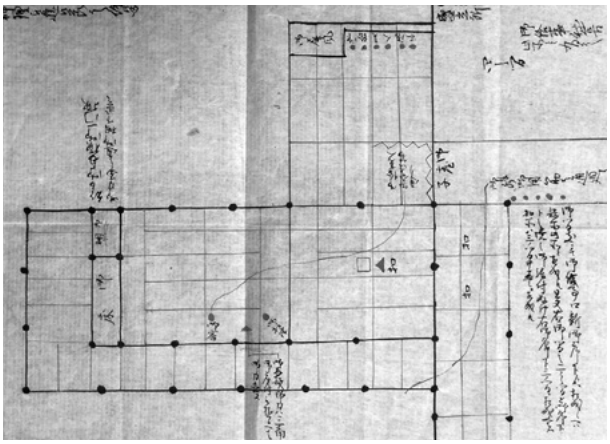
1図　「江戸上屋敷来客御誘引御向送配置図」（横山家文書）



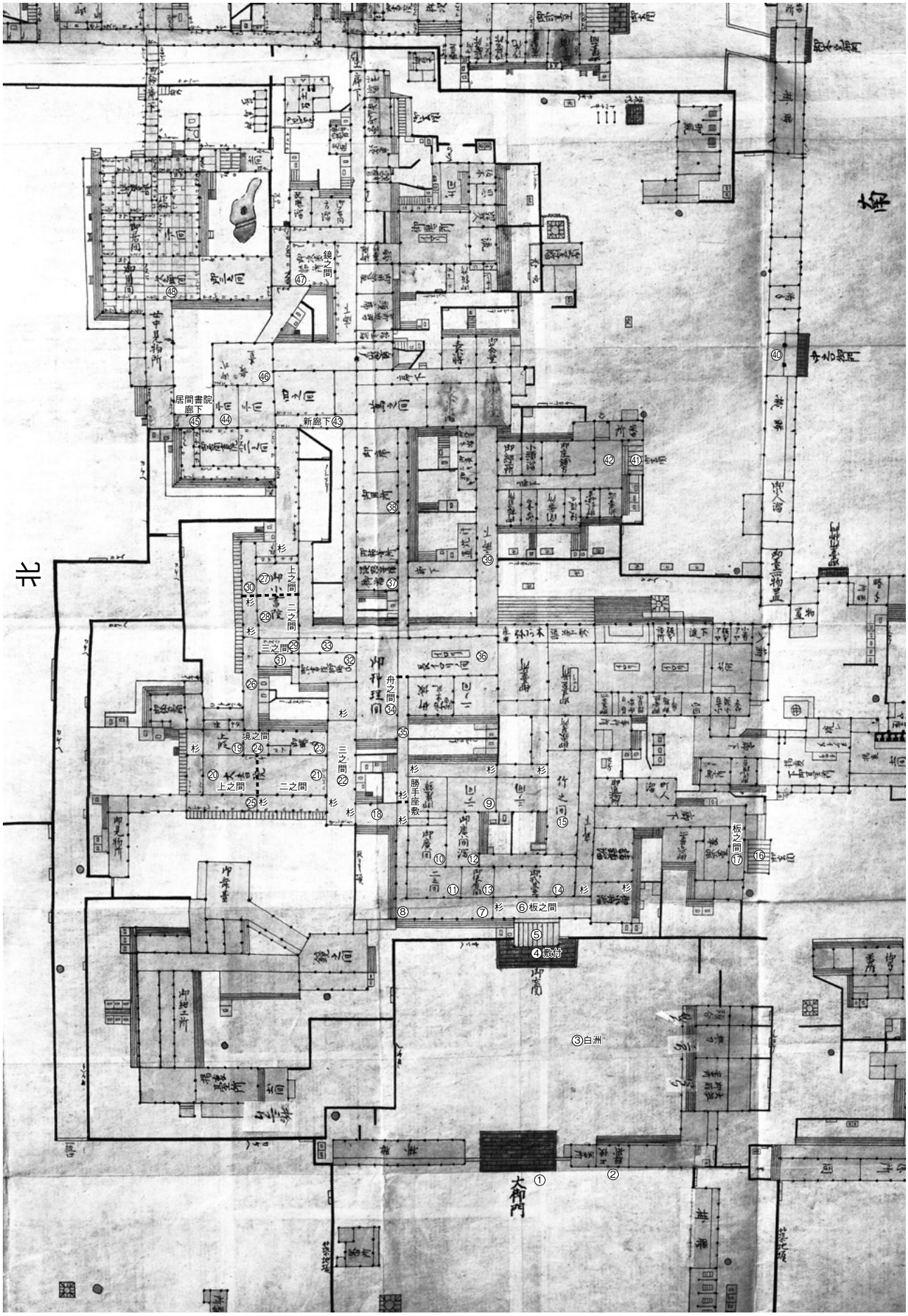
2図　「本郷上屋敷大書院等之図」
（金沢市立玉川図書館蔵）部分



3図　「加賀前田家江戸屋敷図」
（江戸東京博物館蔵）部分



4図　「御居間書院ニ御料理被進候節之絵図」
（金沢市立玉川図書館蔵）部分



５図　「江戸御上屋舗御殿御広式絵図」（金沢市立玉川図書館蔵）部分に加筆

なお末尾に本稿で用いる「記事」の「上使并重キ御客一件」と「御客取次方」の翻刻を付した。括弧内の数字はその翻刻の番号に対応している。

１－２．表御殿の絵図

「江戸上屋敷来客御誘引御向送配置図」[5]（1図）には、来訪者を各部屋へ誘導するための経路や、給事役などの応接を補助する藩士の待機場所、屏風や衝立、台子の設置場所が描かれている。この誘導の経路は「御客取次方」の内容とほぼ一致しており、「記事」の内容を絵図上で理解するのを助けてくれる。

一方で、「記事」は1図に記載されていない部屋名を使用しているほか、同一の部屋に対して複数の名称を用いていて、混乱を招いている部分もある。そこで基礎作業として、他の絵図も参照しながら、部屋名の整理をしていきたい。

1図の「御玄関」前は板敷となっていて、「記事」はここを「敷付」と呼んでいる。また「裏御式台ニ而表向御客等取次之節は、敷附壱枚敷有之」（144頁（43））と記していて、裏玄関から来訪者を迎える際には敷付1枚を置いており、敷付が可動することがわかる。おそらく玄関先の石畳に板を3枚並べて仮設していた場所であったとみられる。玄関階上の「板ノ間」について、「記事」は「板之間」「鑑板」「板」を併用している。

「記事」によれば、大書院と小書院は「上之間」「二之間」「三之間」から構成される。「本郷上屋敷大書院等之図」[6]の大書院（2図）には「二ノ間」「三ノ間」と書き込まれているので、その位置を比定することができる。小書院も奥の「御床」「御棚」から上之間・二之間・三之間が並ぶものとみられる。ここで問題となるのは上之間と二之間の境がどこになるのかということである。1図の大書院縁頬の中程に建具が入っていて、これは杉戸を示しているが、おそらくこの柱列が上之間と二之間の境と考えられる。このことは小書院でより明確となる。「記事」に「御小書院ニ而御縁頬上之間・二之間境之御杉戸」（144頁(34)）とあり、縁頬の杉戸が上之間と二之間の境であった。「加賀前田家江戸屋敷図」[7]の小書院（3図）では、この柱列上に「此所上スフマ」（フスマの誤り）とあり、上部の欄間に襖が入り、空間の仕切りがより可視化されていたものと考えられる。

大書院にはさらに上段が備わる。「記事」は上之間の上段際を「上段下」と記しているので、上段の床は一段高くなっていたと推測される。

1図の「御大書院御勝手」は、2図では「御溜」と表記されている。「記事」でも「勝手」と「溜」を併用していて、この併用は小書院勝手と広間溜にも認められる。

1図の「長囲炉裏之間」の隣には「御料理ノ間」が接しているが、「記事」はこの名称を一度も使用していない。かわりに「長囲炉裏之間ニ而舟之間御唐紙後ニシテ出向」（144頁（37））とあり、長囲炉裏之間の隣を「舟之間」としている。「記事」は「料理ノ間」を「舟之間」と呼んでいる。

「記事」によれば、居間書院周辺に居間書院廊下と新廊下が通っている。居間書院廊下について、敷舞台の見物所に用い、また狭小であると記しているので（後述）、おそらく居間書院の東脇を通る廊下が該当するものとみられる。

「御居間書院ニ御料理被進候節之絵図」[8]（4図）で、三之間から居間書院を横切っている曲線が給事人の動線である。その始点の屏風囲いが給事口であるが、これについて「御給事口新御廊下ゟニ相成候」と記しているので、給事口が接している四之間隣の廊下が新廊下とみられる。

整理した内容を「江戸御上屋敷御殿御広式絵図」[9]の表御殿（5図）に示した。複数の名称を併用している場合は1図に倣うこととし、大書院勝手・小書院勝手・広間溜・料理之間・板之間に統一した。6～12図はこの5図を利用して作成した。

２．来訪者の応接

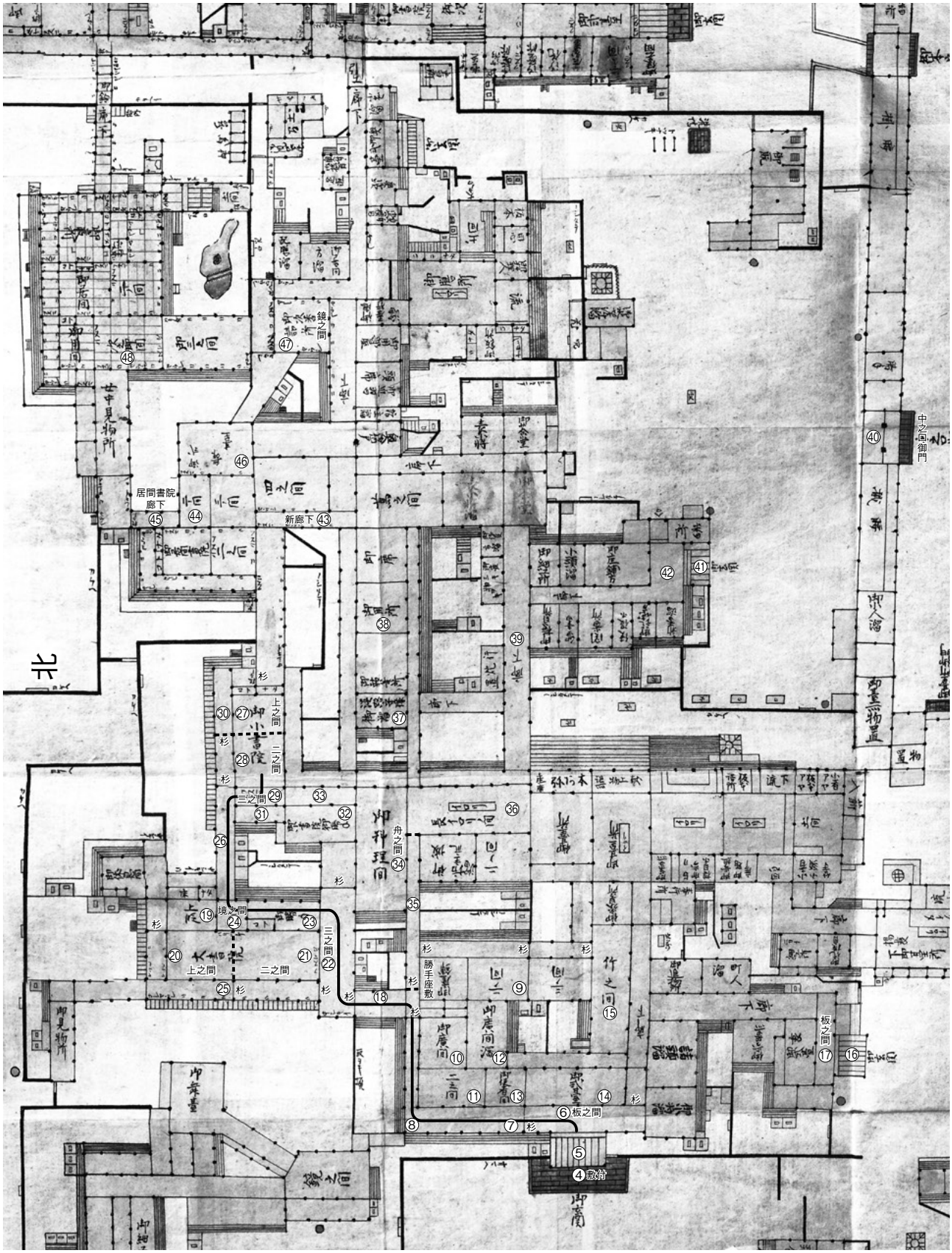
「御客取次方」は、来訪者ごとに記述される部分と通される部屋ごとに記述される部分から構成される。前者は、姻戚関係を結んだ家と、分家の富山前田家と大聖寺前田家を除くと、その記述量が少なく、応接の全体像が不明であるので、ここでは割愛した。姻戚関係を結んだ家は小書院に、富山前田家と大聖寺前田家は御用所続之間にそれぞれ通されるので、それぞれ部屋ごとに分類してみていく。

括弧内の数字は末尾の139～147頁の翻刻の番号に対応している。また丸番号についてはそれぞれの図を参照されたい。

２－１．小書院

小書院（㉗･㉘）には、姻戚関係を結んだ家を通す（6図参照）。

その応接のおおまかな流れを見ていこう（11、12）。まず、組頭と物頭4、5人が敷付端（④）に出迎える。両役の員数が足りない場合は小将が補う。そして組頭の案内で、広間縁頬（⑧）→大書院三之間（㉒）→大書院



６図　小書院への経路（「江戸御上屋舗御殿御広式絵図」金沢市立玉川図書館蔵）部分に加筆

勝手（㉓）→境之間（㉔）→休息之間前の廊下（㉖）を通り、小書院三之間（㉙）に入る。案内を終えた組頭は、三之間隣の廊下（㉛）→小書院勝手（㉜）→料理之間（㉞）と進み、三之間つづきの廊下（㉝）に入り、三之間の敷居際に控える。この間に、給事役は来訪者の刀を上之間縁頬（㉚）に鐺を庭に向けて置き（34）、煙草盆と茶を出す。組頭は二之間（㉘）の敷居際まで進み、来訪者から口上を取り次ぐ。組頭はすぐに御次（㊽）に行き、そこに控える近習頭を介して、斉広に口頭で口上の大意を伝え、対面の有無を確認する。対面が行われる場合は、組頭がその旨を来訪者に伝える。法梁院と夙姫への口上も伝達され、斉広との対面前に、両者からの返答や用件は済まされる（13）。組頭は対面中も三之間つづきの廊下（㉝）の敷居際に待機する。退出時には、斉広が見送るため、組頭は斉広の前を先導する。斉広が見送りに出る場所は来訪者の格式に応じて異なっている。広島藩浅野家は板之間（⑥）まで、盛岡藩南部家と姫路藩酒井家は使者之間縁頬（⑦）まで見送ることになっている。その先は組頭が敷付（④）まで見送る。

対面が行われない場合も組頭がひきつづき応対する（14、16）。御次（㊽）で対面できない理由（多忙や不調など）を近習頭に確認し、来訪者にその事情を説明する。法梁院と夙姫からの返答や用件もこの時に一緒に済ませる。そのまま来訪者は退出するので、組頭が敷付（④）まで見送る。

すでに見てきたように、来訪者の口上はまず口頭で斉広に伝える。組頭は小紙に口上を控えておき、来訪者の退出後に斉広はこの小紙で改めて確認する。また用人にも小紙を回覧させる（25）。御用所（㊳）の終業後であれば、用人宅へ届ける必要があった。法梁院と夙姫にも両者への口上を抜粋した写しを届ける（13）。

最終的に口上は御帳に記録される。対面があれば、「御対顔」と頭書をし、すでに斉広は小紙によって確認しているので御覧札を貼る（19）。対面がなければ、「御使出ル」と記し、斉広の確認後にやはり御覧札を貼る（20）。小書院ではなく、玄関やその途中で口上を受けた場合は、小紙に口上を受けた場所も記す必要があった（22）。明和６年（1769）には、玄関で小将が口上を受けた場合は、御帳にその小将の名前も記すよう定めている（24）。

斉広の外出時にも（21）、口上は取り次ぎ、帰宅後に小紙で伝える。小紙には来訪者とのやりとりも記す。法梁院と夙姫への口上は取り次ぎ、両者からの返答や用件も済ませる（17）。法梁院と夙姫の外出時には、口上を受ける際にその旨を伝え、御帳にも記録する（23）。

斉広の在国中も（32）、来訪があった場合は口上を取り次ぎ、また料理を振る舞うこともある。斉広への口上は国許へ届ける。法梁院と夙姫の口上も取り次ぎ、両者からの返答や用件を済ませる。

２－２．御用所続之間

「御用所続之御間」とは、御用所（㊳）の並びにある「淡路守様御溜」（㊲）（以下、溜と略す）のことである（7図参照）。1図では「出雲守様・飛騨守様御溜」と記しているように、分家である富山前田家と大聖寺前田家を通す。

富山・大聖寺両支藩主は中之口御門（㊵）－中之口玄関（㊶）から入ることになっている（37）。中之口番人から来訪が知らされると、物頭１人が中之口玄関の階上（㊷）に出迎える。そのまま物頭の案内で、廊下（㊴）→長囲炉裏之間（㊱）を通り、溜（㊲）に入る。途中の廊下には横目が、長囲炉裏之間には給事役が待機している。刀は溜の入口近くに、柄を支藩主に向けて置く（38）。物頭は御次（㊽）に行き、近習頭に支藩主が溜での応対を希望していることを伝える。ここからは近習頭が応対をする。煙草盆と茶を出したら、近習頭は溜（㊲）に出向き、斉広との対面の有無を伝える。そして対面中は溜の入口の外に控えている。退出時には、物頭が先導し、中之口玄関の階上（㊷）まで見送る。

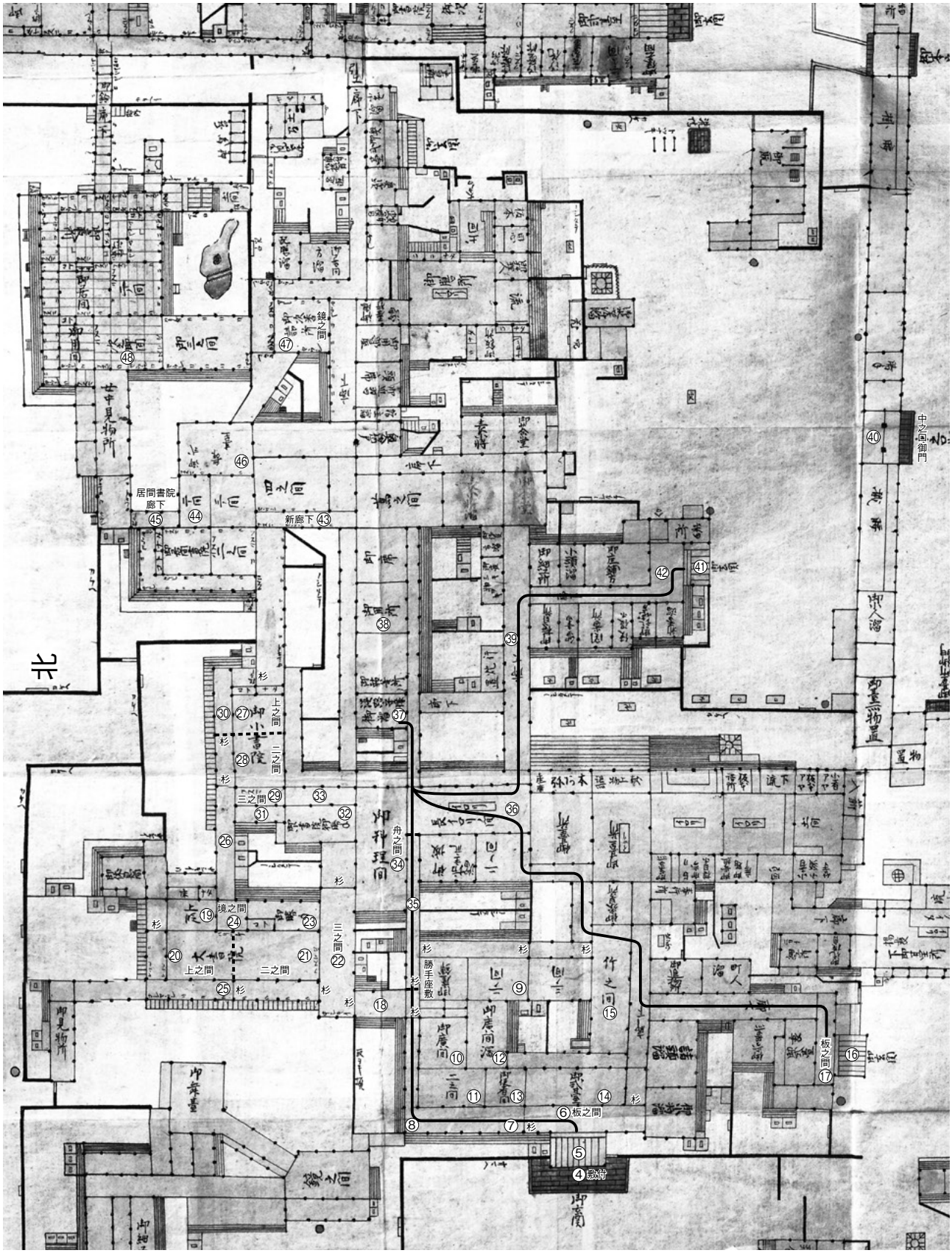
ただ、表玄関（⑤）と裏玄関（⑯）から入ることも想定している。表玄関では、物頭と小将の２人が敷付（④）に出迎え、物頭の案内で、広間縁頬（⑧）→料理之間前の廊下（㉟）→長囲炉裏間（㊱）と進んで、溜（㊲）に通す（42）。裏玄関でも、物頭と小将が板之間（⑰）に出迎え、竹之間（⑮）→長囲炉裏之間（㊱）を通る（43）。

料理や菓子は、長囲炉裏之間（㊱）で盛り付けられ、物頭の指示で配膳される（45）。

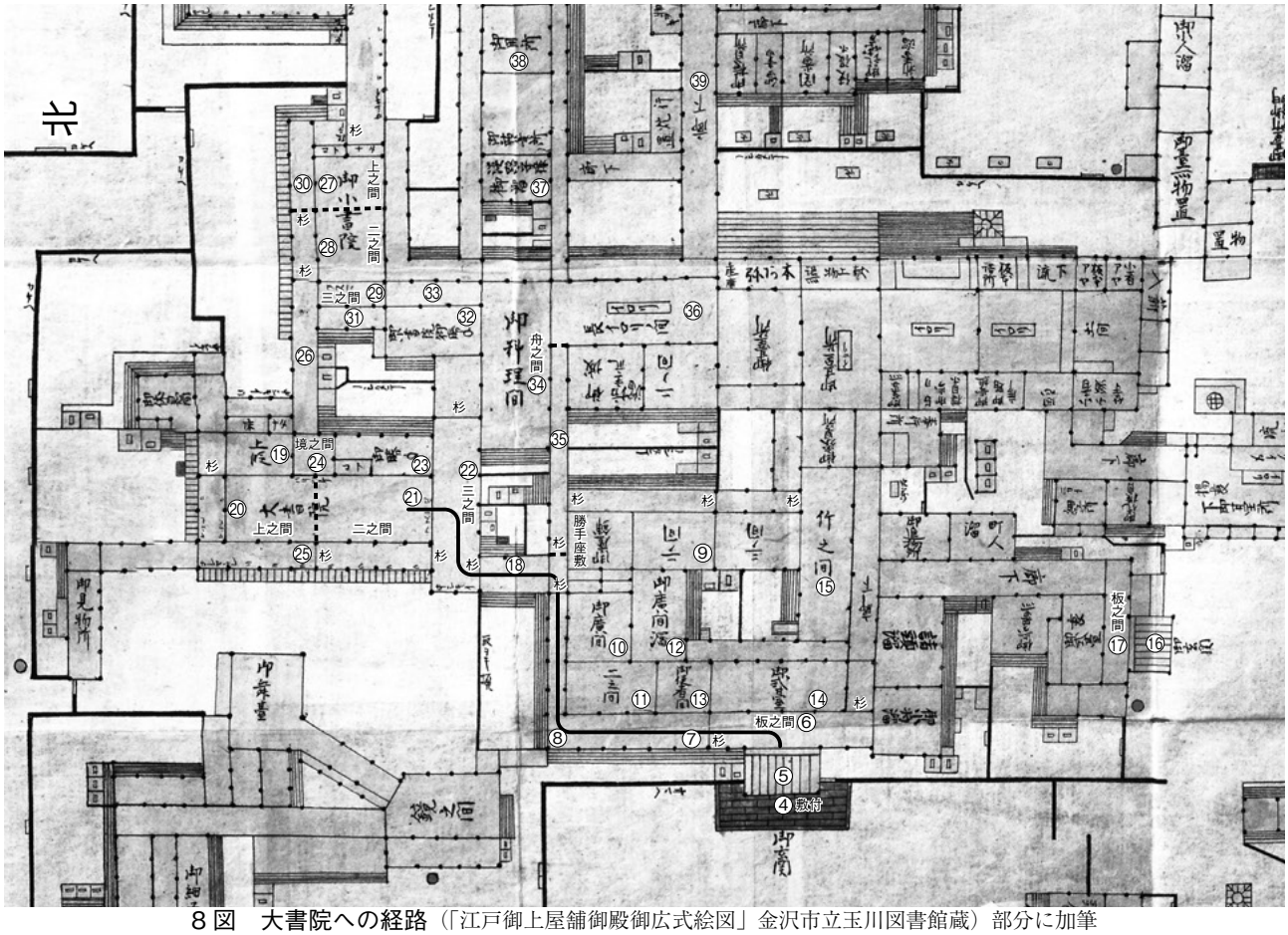
斉広の外出時には、近習頭も不在となるので、物頭が口上を取り次ぎ、半切紙に控えておく（41）。

斉広の在国中は、用人が支藩主の応対をする（46）。用人が不在であれば、物頭が応対し、口上を半切紙に控える。急用でなければ、当日もしくは翌日に御用所（㊳）の用人へその半切紙を届ける。緊急な用件で、しかも御用所が終業している場合には、すぐに用人宅へ届ける必要があった。

幕府から加賀藩に上使が派遣される際に、両支藩主は加賀藩主の名代や取持を務めることがある（47）。上使の到着時には、上使の通過を連絡するために戻ってきた昌平橋の付人が溜（㊲）から式台（⑭）へ案内してくれる。上使の退出時には、加賀藩主の名代を務める場合は上使の先導をする。取持の場合は番頭が式台（⑭）まで誘導



７図　御用所続之間への経路（「江戸御上屋舗御殿御広式絵図」金沢市立玉川図書館蔵）部分に加筆



８図　大書院への経路（「江戸御上屋舗御殿御広式絵図」金沢市立玉川図書館蔵）部分に加筆

してくれる。支藩主の誘導は本来物頭が務めるが、上使の来訪時に物頭は白洲で控えなければならないので、番頭が代わりを務める。

両支藩主は式舞台（㊻）で催される能や囃子を鑑賞したり、また自ら演能することもあった。そのときには見物所が居間書院廊下（㊺）に屏風囲いで仮設される（48）。溜（㊲）から見物所までは物頭が誘導する。また大小将が刀を運び、座席の後ろに置く。

両支藩主が仕舞を演ずる場合は（49）、見物所（㊺）もしくは溜（㊲）から、新廊下（㊸）を通って、鏡之間（㊼）に入る。鏡之間と居間書院二之間（㊹）までは、物頭が誘導し、大小将が刀を運ぶ。その先の居間まわりでは、近習頭が誘導し、表小将が刀を運ぶ。

演能をする場合は（50）、装束所が新廊下（㊸）に屏風囲いで仮設される。装束所までは物頭が誘導し、大小将が刀を運ぶ。装束所内には支藩の家来が控えているので、彼に刀を渡す。

式舞台で催しを行うときに、料理や菓子を振る舞うことがある（50）。その場合、溜（㊲）で提供することが通例である。おそらく見物所（㊺）が狭小で、煙草盆を出すのが限界であったためであろう。どうしても見物所で料理や菓子を提供する場合は、給事役は帯刀せずに配膳をするように求めている。

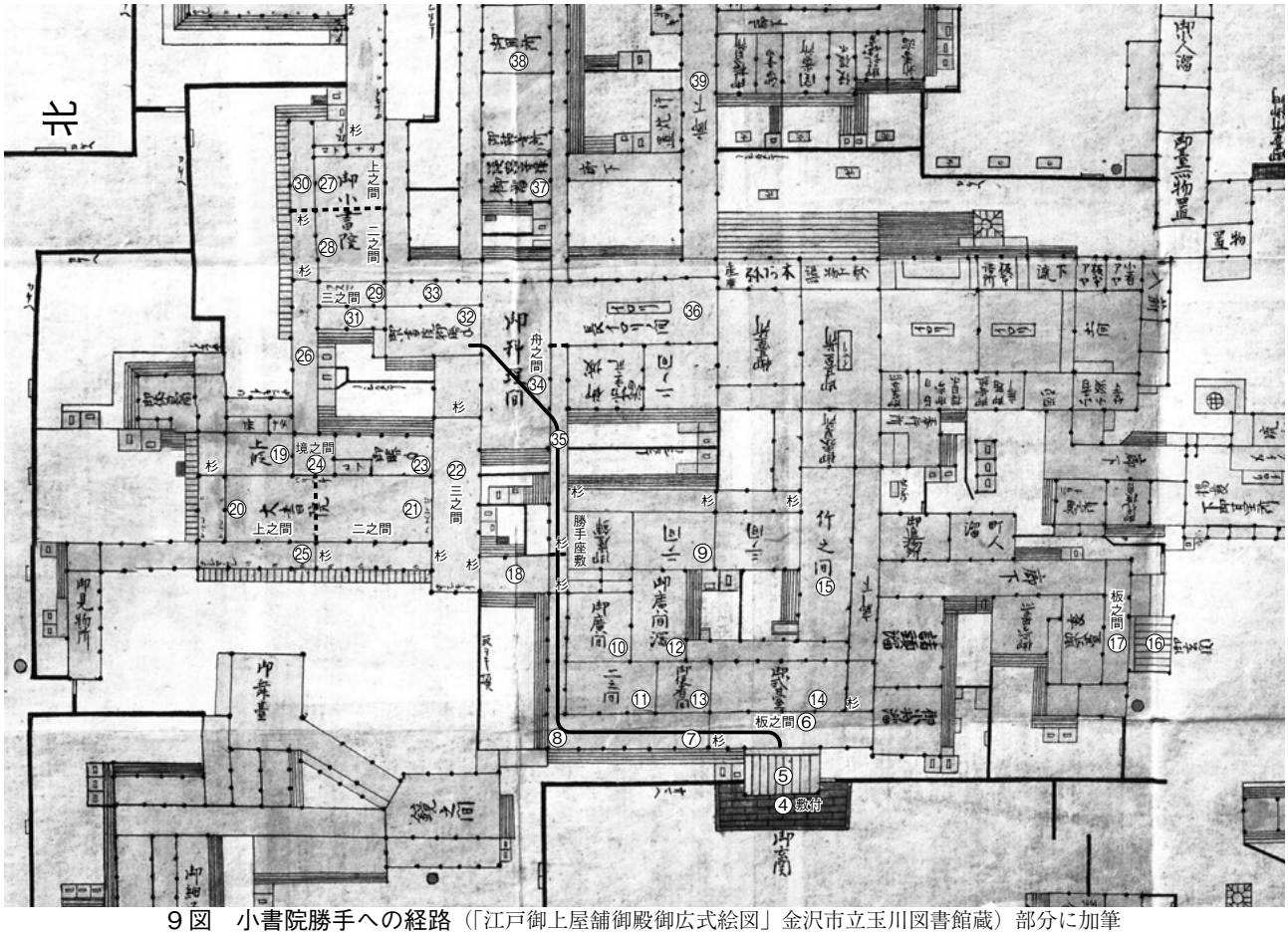
２－３．大書院

大書院（⑳・㉑）に通される来訪者は２グループに分類される（55）（８図参照）。

１つは、国持大名・国持大名格・御三家分家・老中・側用人・京都所司代・十万石以上の大名・姻戚関係を結んだ家の分家・仙石家・相馬家・越智松平家・形原松平家・桜井松平家・出羽高畠藩織田家・若年寄・八ヶ寺・越前松平家からなる。

もう１つは、一万石以上の大名・大坂城代・側衆・高家・駿府城代・伏見奉行・留守居・三番頭（大番頭・小姓組番頭・書院番頭）からなる。両者には、出迎え方や口上の取り扱いにおいて差別化が図られている。

前者は小将１人が敷付（④）に出迎えるが、さらに格式に応じて、小将の位置が中央と端に分けられる。後者は小将２人が板之間（⑥）に出迎える。そのまま小将の案内で、広間縁頬（⑧）→大書院三之間（㉒）と通り、大書院（⑳・㉑）に入る（56）。刀は来訪者が手もとに置いておく（61）。基本的に斉広との対面は行われず、来訪者は口上を伝えて、そのまま退出する。見送る場所は出迎え時と同じである。



９図　小書院勝手への経路（「江戸御上屋舗御殿御広式絵図」金沢市立玉川図書館蔵）部分に加筆

口上は組頭が取り次ぐが、不在時には物頭が代わりを務める。前者の口上は、退出後すぐに小紙によって斉広へ伝えられ、用人にもこの小紙を回覧させる(59)。一方、後者の口上は夕方に同日中の他の口上とともに御帳で確認がなされる。

来訪者がその場で返答を求めている場合は（57)、口頭で口上の大意を斉広に伝え、やはり対面は行われないので、組頭が斉広からの返答を取り次ぐ。

稀に斉広が対面する場合（58)、組頭は三之間（㉒）の奥の杉戸周辺に待機する。斉広は来訪者の格式に応じて見送りにでるので、その先は組頭が案内をする。

２－４．小書院勝手

小書院勝手（㉜）には、七日市前田家・高家前田家・広島藩浅野家の分家・丹波柏原藩織田家・林家・出入を希望する高家・番頭をつとめる出入旗本を通す（66）（9図参照)。

小将が板之間端（⑥）で出迎え、そのまま小将の案内で、広間縁頬（⑧）→料理之間前の廊下（㉟）→料理之間（㉞）を通り、小書院勝手（㉜）に入る（69)。大名と高家の刀は床前に鎗を庭（西）に向けて置き、そのほかは入口の屏風内側に置く（72)。

組頭が口上を取り次ぐが、不在時には物頭が代わりを務める(67)。来訪者がその場で返答を求めている場合は、斉広に口上を記した小紙を渡し、対面の有無を確認する。対面が行われない時には来訪者に伝達する（68)。

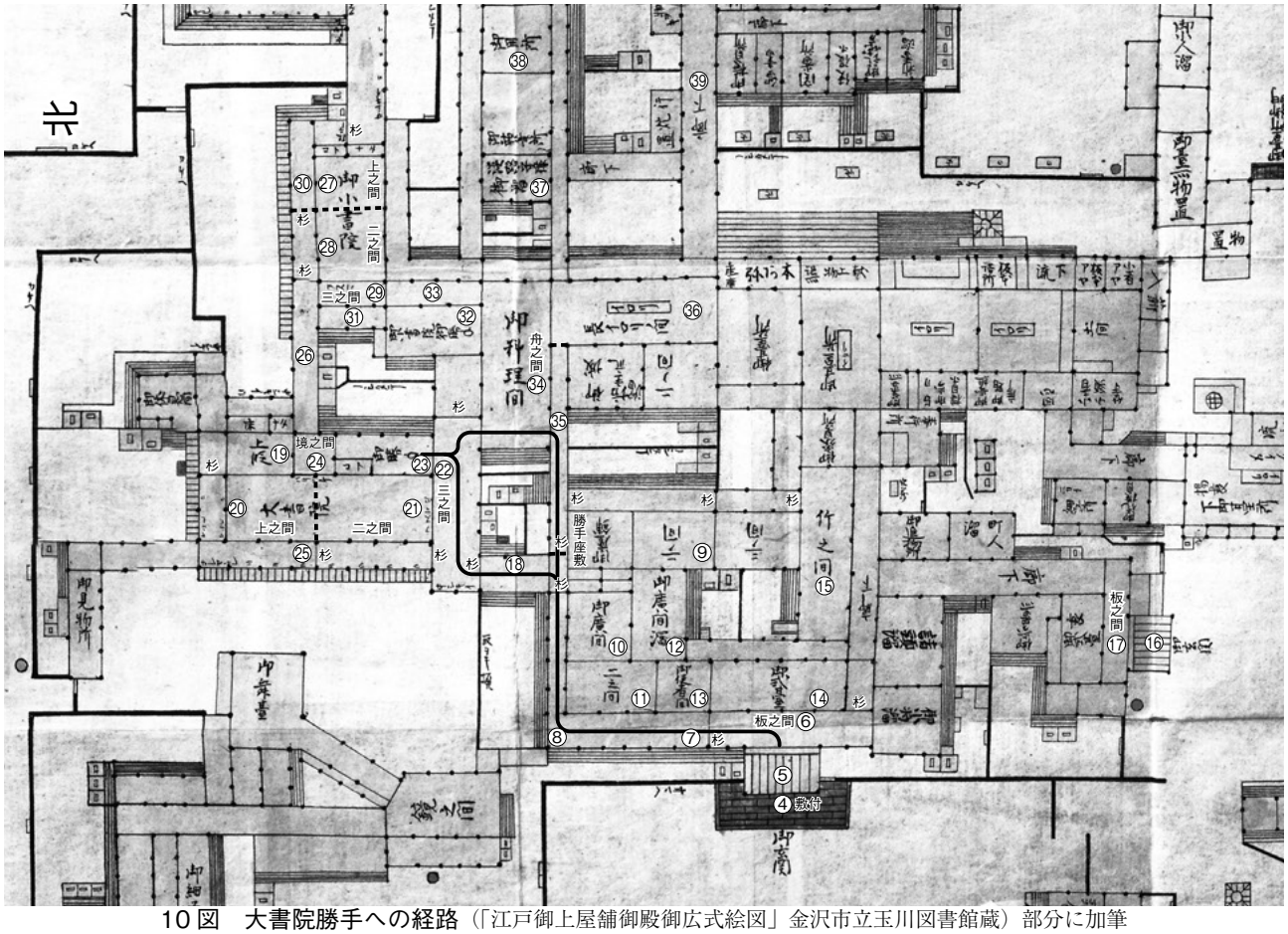
来訪者が再訪を希望した場合は、敷付（④）で応対する（69)。この場合も口上を小紙に控えるが、浅野家分家の口上はすぐに小紙で斉広に伝え、用人にも回覧させる。しかし、そのほかの口上については、夕方に御帳で伝達される。

御帳には、対面があれば「御対顔付」と、対面がなければ「御使出ル」と記す（70)。対面時に料理を提供する場合には、その謝意の言葉も御帳には記録する（67)。

２－５．大書院勝手

大書院勝手（㉓）には、番頭をつとめる出入旗本（小書院勝手に通されない）を通す（74）（10図参照)。

その応対は小書院勝手に準ずる（75)。小将が板之間端（⑥）に出迎え、そのまま小将の案内で、広間縁頬（⑧）→大書院三之間（㉒）を通り、大書院勝手（㉓）に入る。大書院(⑳･㉑)に別の来客がある場合には、広間縁頬(⑧)→料理之間前の廊下（㉟）→料理之間（㉞）→三之間（㉒）を通る。組頭が口上を取り次ぐが、不在時には物頭が代



10図　大書院勝手への経路（「江戸御上屋舗御殿御広式絵図」金沢市立玉川図書館蔵）部分に加筆

わりを務める。

2－6．式台周辺

Ⅰ　勝手座敷二之間

勝手座敷二之間（⑨）には、出入役人と出入旗本を通す（77）（11図参照）。

小将が板之間中央（⑥）に出迎え、そのまま小将の案内で、使者之間縁頬（⑦）→広間二之間（⑪）→広間溜（⑫）を通り、勝手座敷二之間（⑨）に入る（78）。広間溜（⑫）に別の来客がある場合には、広間縁頬（⑧）を進み、奥側から回り込む。組頭が口上を取り次ぐが、不在時には物頭が代わりを務める。

出入衆は佳節や月次登城日（1、15、28日）、慶事に来訪することになっている。それ以外の平日は、口上を伝えて、すぐに退出する。口上は小紙に控え、斉広には夕方に御帳で伝える。

佳節と月次登城日には（79）、一定数の出入衆が来訪するが、その口上は似たようなものとなるので、1枚の小紙にまとめて斉広に渡す。対面が行われる場合は、組頭に小紙が返却されるので、「御対顔付」と記す。さらに料理などを振る舞い、来訪者が謝辞を述べた時には、その内容も記録しておく。対面が行われない場合は御帳に「御使出ル」と記す。対面の有無に関わらず、御覧札は貼らない。佳節には料理を振る舞う。

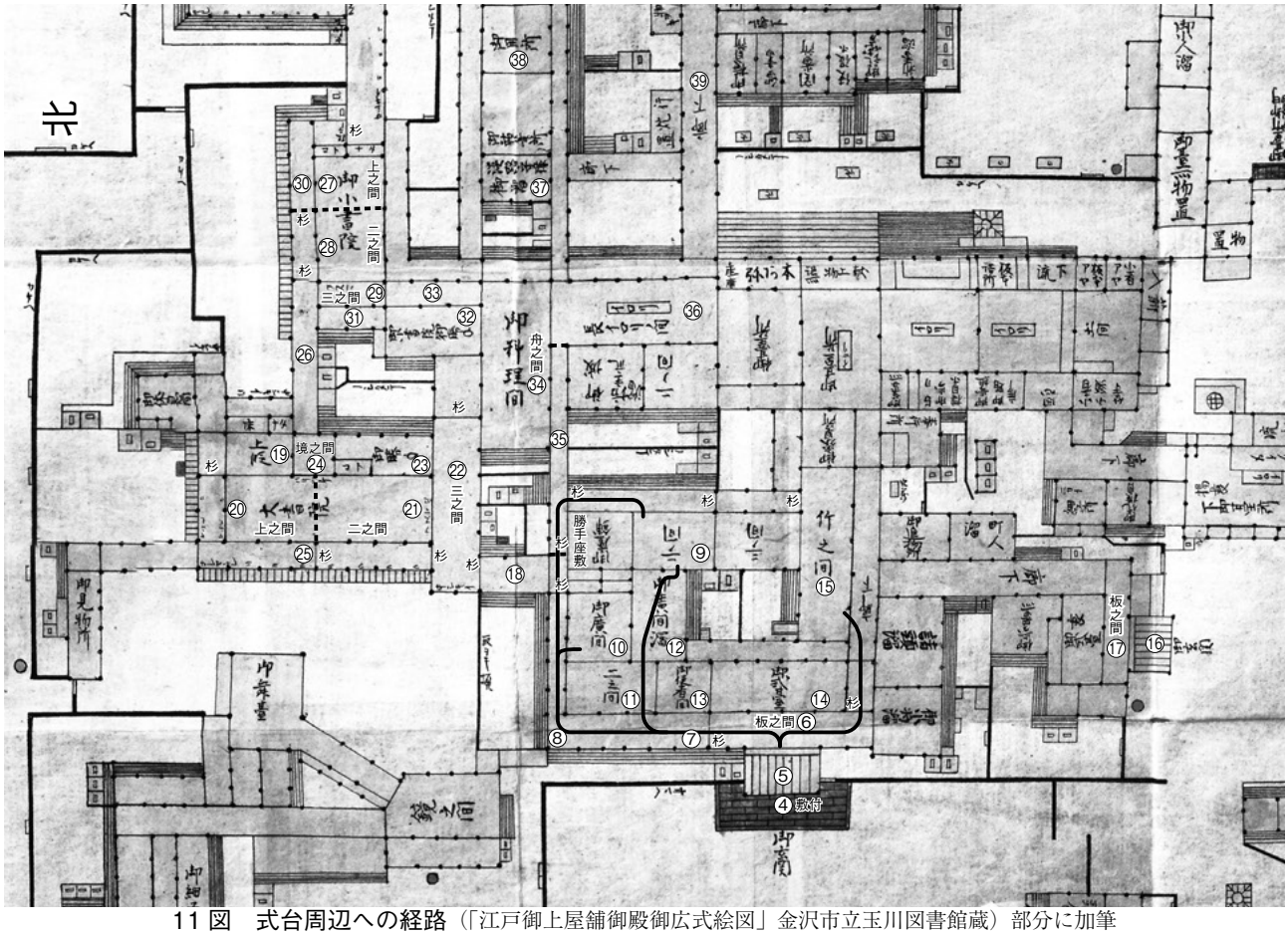
慶事の際に（80）、組頭が多忙で小紙に口上を控えるのが難しい場合には、来訪者の名前だけを近習頭から斉広に伝えてもらう。口上は後で小紙に控えておく。斉広に小紙で確認した場合は御覧札を貼る。

出入衆からの口上が祝詞である場合は（82）、口上の大意を口頭で斉広に伝え、組頭が返答をする。そして、出入衆の退出後、斉広には改めて小紙を確認してもらい、御帳に御覧札を貼る。

Ⅱ　広間上之間

広間上之間（⑩）には、出入旗本以外の旗本と僧侶を通す（84）（11図参照）。応対は勝手座敷二之間に準ずる（85）。小将が板之間中央（⑥）に出迎え、小将の案内で、広間縁頬（⑧）を通り、広間上之間（⑩）に入る。斉広との対面は行われないので、来訪者は口上を伝えたら、そのまま退出する。口上は組頭が小紙に控え、斉広には夕方に御帳で伝達する。斉広の在国中も応対は変わらない（86）。

Ⅲ　広間二之間



11 図　式台周辺への経路（「江戸御上屋舗御殿御広式絵図」金沢市立玉川図書館蔵）部分に加筆

広間二之間（⑪）には下級役人と僧侶を通す（87）（11 図参照）。小将が板之間中央（⑥）に出迎え、小将の案内で広間縁頬（⑧）を通り、二之間に入る（88）。来訪者は口上を伝えて、そのまま退出する。物頭が口上を取り次ぎ、小紙に控えておく。斉広には夕方に御帳で伝える。見送る際の会釈は、来訪者の格式に応じて差異がある。斉広の在国中も応対は変わらない（91）。

Ⅳ　広間溜

広間溜（⑫）には小規模寺院の僧侶を通す（89）（11 図参照）。応対は広間二之間に準ずる（90）。小将が板之間中央（⑥）に出迎る。広間溜までの経路は記載されていないが、1 図によれば、使者之間縁頬（⑦）→使者之間（⑬）を通り、広間溜（⑫）に入る。物頭が口上を取り次ぐ。斉広の在国中も応対は変わらない（91）。

Ⅴ　竹之間

竹之間（⑮）には出入の町医師を通す（92）。徒が御殿内を誘導するが、その経路は記されていない。おそらく板之間（⑥）→廊下を通ったものとみられる。御機嫌伺による来訪であるので、物頭は口上を受けるが、その場で返答して、御帳にも記録されない。また退出時は特に応対はしない。

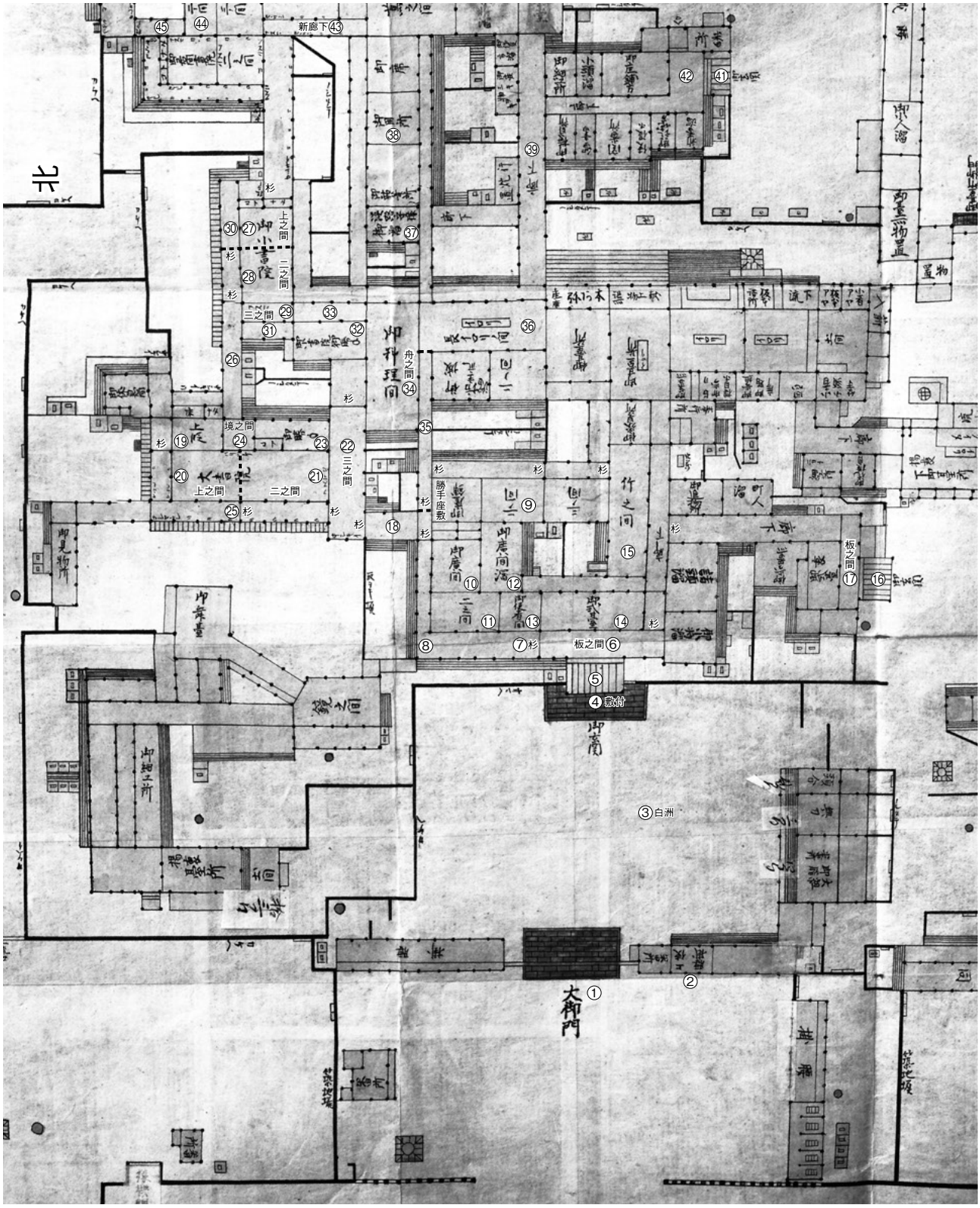
３．幕府からの使者の応接

「上使并重キ御客之一件」には 10 点の作法書が収録されている。しかし、将軍と大奥から同じ目的で使者が派遣されているケースが 2 件あり、それらは別々に作法書が作成されている。ここでは、同じ目的の使者はまとめて記述していくこととし、全 8 件の幕府からの使者の応接についてみていく。

括弧内の数字は末尾の 148 ～ 157 頁の翻刻の番号に対応している。丸番号についてはいずれも 12 図を参照されたい。また、文中の左右は進行方向から見たときの向きを示している。

３－１．参勤

寛政 8 年（1796）4 月 18 日、治脩は江戸に到着する。そのまま老中に挨拶まわりをするのが通例であるが、治脩が足を痛めていたため、28 日に延期している。翌 29 日に老中太田資愛から将軍の命が伝えられ、治脩は 5 月 1 日に参府御礼のために登城している[10]。ここでは 4 月 29 日に来訪した老中太田を応接するための作法書を



12図　幕府からの使者の応接（「江戸御上屋舗御殿御広式絵図」金沢市立玉川図書館蔵）部分に加筆

見ていく。

当日、幕府目付から小人目付が派遣され、老中の来訪が通知される。これを受けて、大手門・昌平橋・本郷三丁目に付人を２名ずつ派遣し、また老中にも同行させる(2)。彼らは移動する老中の位置を把握するために派遣され、大手門の付人から老中通過の連絡があれば、治脩は小書院勝手付近（㉜）に待機し、昌平橋からの連絡で広間縁頬（⑧）に、本郷三丁目からの連絡で式台（⑭）に移動する[11]。

老中が到着すると、治脩・家老・聞番は御門外（①）に出迎える（4)。聞番は駕籠から降りた老中を治脩のもとへ案内し、治脩が老中を先導して玄関に迎え入れる[12]。御門内の白洲（③）には左手に人持頭分が平伏している（138)。敷付（④）では、左手に富山藩８代藩主前田利謙・大聖寺藩８代藩主前田利考・高家前田長禧・七日市藩９代藩主前田利以が、右手に取持をつとめる先手衆が出迎える。

そのまま治脩が老中を大書院へ案内する。治脩が二之間（㉑）の敷居際に着座したら、老中は上之間（⑳）に進み、縁頬を背にして着座する[13]。刀は表小将が上之間縁頬（㉑）の刀掛けに置く。治脩は老中の手前まで歩み寄り、着座し、さらに擦り寄り、平伏して、将軍の上意を賜る[14]。それが済むと、老中と治脩は二之間（㉑）の方に下がり、老中を縁頬側にして対座し、挨拶を交わす[15]。ここで熨斗を出し、治脩は大書院勝手（㉓）にいったん下がる。ふたたび治脩は老中のもとに戻り、二之間（㉑）→境之間（㉔）→休息之間前の廊下（㉖）と進み、老中を小書院へ案内する。

老中が縁頬側に着座し、老中と治脩は上之間（㉗）で対座する[16]。刀は表小将が上之間縁頬（㉚）の刀掛けに置く。ここで煙草盆と茶を出され、両者はまた挨拶を交わす。料理の準備が整うと、治脩は料理を振る舞い、相伴をつとめることを告げ、小書院勝手（㉜）の近くに移動する[17]。二汁六菜の料理を振る舞い、向詰は治脩が、肴は前田利謙・前田利考・前田長禧・前田利以が配膳する。

吸物が出された後、土器と肴をそれぞれ素木の三方に載せ、盃事がはじまる（5)。治脩は老中と向かい合い、老中→治脩の順に、酒盃を交わし、互いに肴を進め合う。これを２度繰り返し、盃事を終える。つづいて湯が進められるが、これは治脩→老中の順に注がれる。治脩は小書院勝手（㉜）に下がり、自ら濃茶を運ぶ。濃茶・茶請、薄茶・後菓子による茶事が行われる。これが終わると、取持をつとめる先手衆から老中へ挨拶をするよう促され、治脩は老中へ謝辞を述べる。そして老中は治脩の案内に従って退出する。治脩は御門外（①）まで見送るが、他の者も出迎えた場所で見送る。

３－２．御鷹之雲雀

８月３日、11代将軍家斉から使番屋代求馬が派遣され、「御鷹之雲雀」を拝領する。

当日、幕府目付から小人目付が派遣され、使番の来訪が通知される（136)。これを受けて、大手門・昌平橋・本郷三丁目に付人を２名ずつ派遣し、使番にも同行させる（6)。本郷三丁目にはさらに拝領物に同行する付人を派遣する（7、147)。

拝領物が到着したら、使番（藩士）が敷付（④）で受け取り、聞番の先導で大書院上之間（⑳）に運ぶ（8)。

使番が到着すると（9～11)、家老と聞番が御門外（①）に出迎え、聞番が敷付（④）まで案内する。御門内の白洲（③）には組頭と物頭が控える。敷付では、左手に富山藩８代藩主前田利謙・大聖寺藩８代藩主前田利考・高家前田長禧・七日市藩９代藩主前田利以が、右手に先手衆が出迎える。治脩は玄関をあがった板之間（⑥）の左手で出迎える。

治脩が使番を大書院へ案内する（12)。使番は上之間（⑳）に着座し、刀は表小将が二之間（㉑）の床に置く。治脩は二之間の床の前に着座する[18]。ここで将軍からの上意と拝領物を賜る（13)。その際に拝領物の雲雀に近寄るので、拝領物に直接触れることで頂戴したことを示すものとみられる[19]。使番と治脩は二之間（㉑）の方へ下がり、対座して挨拶を交わす[20]。ここで拝領物を大書院勝手（㉓）に下げ、熨斗を出す。治脩も勝手（㉓）にいったん下がり、その間に煙草盆と茶を進める。

ふたたび治脩は使番のもとに戻り（14)、飲食を振る舞うことを告げる。相伴をつとめる先手衆の希望により、菓子か麺類のどちらかを振る舞い、治脩は肴を配膳する。

吸物が出された後、土器と肴がそれぞれ素木の三方に載せられ、盃事がはじまる（15)。使番→治脩の順に、酒盃を交わし、互いに肴を進め合う。これを２度繰り返し、盃事を終える。治脩は大書院勝手（㉓）に下がる。つづいて濃茶を進める。これが終わると、取持衆から使番へ挨拶をするよう促され（16)、治脩は使番へ謝辞を述べる。そして使番は治脩の案内に従って退出する。治脩は板之間（⑥）まで見送るが、他の者も出迎えた場所で見送る。

使番の退出後に（17)、徒目付には広間溜（⑫）で、小人目付には使者之間（⑬）で料理を振る舞う。拝領物の運搬者には御門につづく腰懸（②）で菓子と酒を振る舞う。

３－３．斉広の養子縁組

11 月 14 日、斉広を治脩の養嫡子とすることが許され[21]、23 日に将軍家斉・世子家慶・正室広大院から祝儀として巻物・樽・干鯛を拝領する[22]。家斉と家慶からは奏者番本庄道利が、広大院からは広式番頭植山三郎兵衛と本多金左衛門が派遣された。しかし、治脩と斉広は風邪気味であったため、大聖寺藩 8 代藩主前田利考が名代を務めている。

奏者番と広式番頭のどちらが先に来訪したかは定かではない。将軍と大奥から使者が派遣される場合は、時間をずらして対応している。ただ拝領物は先に本郷上屋敷に届け、大書院勝手（㉓）で保管していた可能性がある[23]。ここでは便宜的に奏者番→広式番頭の順に見ていく。

当日、幕府目付から小人目付が派遣され、奏者番の来訪が通知される。これを受けて、大手門・昌平橋・本郷三丁目に付人を 2 名ずつ派遣し、また奏者番にも同行させる（18）。本郷三丁目にはさらに拝領物に同行させる付人を派遣する（19）。

拝領物は玄関（⑤）で整えてから、徒が大書院につづく廊下（⑱）まで運ぶ（20）。ここで大小将が受け取り、組頭と番頭の指示のもと、大書院上之間（⑳）の上段（⑲）際に飾る。斉広の拝領物も一緒に受け取り、治脩の拝領物の隣に飾る。

奏者番が到着すると（21 ～ 22）、家老と聞番が御門外（①）に出迎え、聞番が敷付（④）まで案内する。御門内の白洲（③）には頭分が控える。治脩は敷付 2 枚目の左手に、斉広は 3 枚目の左手に出迎える。富山藩 8 代藩主前田利謙・大聖寺藩 8 代藩主前田利考・高家前田長禧は治脩の後ろで、先手衆は敷付の右手に出迎える。

治脩が奏者番を大書院へ案内する（23）。斉広はその後ろを付いていく。奏者番は上之間（⑳）に着座し、刀は表小将が上之間縁頬（㉕）の刀掛けに置く。ここで治脩→斉広の順に、将軍からの上意と拝領物を賜る（24）。その際に拝領物に近寄ることから、拝領物に直接触れて頂戴したことを表していたと考えられる。いったん治脩と斉広は大書院勝手（㉓）に下がり、ここで熨斗が出される。

ふたたび治脩と斉広は奏者番のもとに戻り、二之間（㉑）→境之間（㉔）→休息之間前の廊下（㉖）を通り、小書院へ案内する（25・26）。斉広は奏者番の後ろを付いていく。奏者番の刀は表小将が上之間縁頬（㉚）の刀掛けに置く。斉広は小書院勝手（㉜）の近くに着座する。煙草盆と茶、火鉢を出す。この間に拝領物を大書院勝手（㉓）に下げる。奏者番の希望により、料理か菓子のどちらかを振る舞う。料理の場合は、二汁六菜・向詰・引菜を振る舞い、引菜は治脩が配膳する（27）。菓子の場合は、肴を治脩が配膳する（28）。相伴は高家前田長禧がつとめる（30）。

吸物が出された後、土器と肴をそれぞれ素木の三方に載せ、盃事がはじまる（29）。まず奏者番→治脩の順に、酒盃を交わし、互いに肴を進め合う。もう一度奏者番に酒盃を進めたところで、治脩は自席に戻り、かわりに斉広が肴を進める。奏者番が斉広に酒盃と肴を進め、また奏者番に酒盃を進めたところで、斉広は小書院勝手（㉜）に下がり、治脩が肴を進める。そして奏者番が治脩に酒盃と肴を進めて、盃事を終える。ここで治脩も小書院勝手に下がる。濃茶と後菓子による茶事が行われる。これが終わると、治脩と斉広は奏者番へ謝辞を述べる（31）。そして奏者番は治脩の案内に従って退出する。治脩は敷付（④）まで見送るが、他の者も出迎えた場所で見送る。

奏者番の退出後に（32）、拝領物に同行した徒目付には広間溜（⑫）で、小人目付には使者之間（⑬）で、一汁三菜の料理を振る舞う。拝領物の運搬者には御門につづく腰懸（②）で菓子と酒を振る舞う。

つぎに広大院が派遣した広式番頭の植山と本多の応接について見ていこう。

平川口門・水道橋・本郷三丁目に付人を 2 名ずつ派遣し、また広式番頭にも同行させる（33）。本郷三丁目にはさらに拝領物に同行させる付人 2 名を派遣する（35）。

拝領物は玄関（⑤）で整えてから、徒が大書院につづく廊下（⑱）まで運ぶ。ここで大小将が受け取り、組頭と大小将番頭の指示のもと、大書院上之間（⑳）の上段（⑲）際に飾る（36）。斉広の拝領物も一緒に受け取り、治脩の拝領物の隣に飾る。

広式番頭が到着すると（37・38）、家老と聞番が御門外（①）に出迎え、聞番が敷付（④）まで案内する。御門内の白洲（③）には組頭と物頭が控える。治脩は板之間（⑥）の中央に、斉広は板之間端の後方に出迎える。富山藩 8 代藩主前田利謙・大聖寺藩 8 代藩主前田利考・高家前田長禧は敷付（④）の左手に出迎える。

治脩が広式番頭を大書院へ案内する（39）。斉広はその後ろを付いていく。広式番頭は上之間（⑳）に着座し、刀は表小将が二之間（㉑）の床に置く。そして、治脩→斉広の順に、広大院からの命と拝領物を賜る（40）。その際に拝領物に近寄ることから、拝領物に直接触れて頂戴したことを表していたとみられる。表小将が拝領物を大書院勝手（㉓）に下げ、また治脩と斉広も勝手（㉓）に下がる。そして熨斗を出した後に、煙草盆と薄茶、火鉢を出す。

ふたたび治脩は広式番頭の前に出る（43）。相伴をつとめる取持衆の希望により、料理と菓子のどちらかを振る舞う。料理の場合は、二汁六菜・引菜・肴を振る舞い、引菜は治脩が配膳する。菓子の場合は、肴を治脩が配膳する。

吸物が出された後、土器と肴をそれぞれ素木の三方に載せ、盃事がはじまる（44）。広式番頭→治脩の順に酒盃を交わし、互いに肴を進め合う。もう一度広式番頭に酒盃を進めたところで、治脩は自席に戻り、かわりに斉広が肴を進める。広式番頭が斉広に酒盃と肴を進め、また広式番頭に酒盃を進めたところで、斉広は大書院勝手（㉓）に下がり、治脩が肴を進める。そして広式番頭が治脩に酒盃と肴を進めて、盃事を終える。ここで治脩も大書院勝手に下がる。濃茶と茶請、後菓子による茶事が行われる。これが終わると、治脩と斉広はそれぞれ広式番頭へ謝辞を述べる。そして広式番頭は治脩の案内に従って退出する。治脩は板之間（⑥）まで見送り、他の者も出迎えた場所で見送る。

広式番頭の退出後に（46）、徒目付には広間溜（⑬）で、小人目付には使者之間（⑬）で、一汁三菜の料理を振る舞う。拝領物の運搬者には御門につづく腰懸（②）で菓子と酒を振る舞う。

３－４．歳暮

12 月 21 日に広大院から歳暮の祝儀を拝領している。例年、広式番頭が派遣され、干鯛一箱と白銀十枚を拝領する[24]。

平川口門・水道橋・本郷三丁目に付人を２名ずつ派遣し、また広式番頭にも同行させる（48）。

拝領物は玄関（⑤）で整えてから、徒が大書院につづく廊下（⑱）まで運ぶ。ここで大小将が受け取り、組頭と大小将番頭の指示のもと、大書院上之間（⑳）の上段（⑲）際に飾る（50）。

広式番頭が到着すると（51・52）、家老と聞番が御門外（①）に出迎え、聞番が敷付（④）まで案内する。御門内の白洲（③）には組頭と物頭が控える。治脩は板之間（⑥）に、斉広は板之間端の後方に出迎える。富山藩８代藩主前田利謙・大聖寺藩８代藩主前田利考・高家前田長禧は敷付（④）の左手に、先手衆がその右手に出迎える。

治脩が広式番頭を大書院へ案内する（53）。広式番頭は上之間（⑳）に着座し、刀は表小将が二之間（㉑）の床に置く。斉広は大書院勝手（㉓）に控えている（54）。そして、治脩は広大院からの命と拝領物を賜る（55）。その際に拝領物に近寄ることから、拝領物に直接触れて頂戴したことを表していたとみられる。これが済むと、表小将が拝領物を大書院勝手（㉓）に下げる。熨斗が出され、治脩は勝手（㉓）に下がる。煙草盆と薄茶、火鉢を出す。

ふたたび治脩は広式番頭の前に出る（56）。相伴をつとめる取持衆の希望により、料理と菓子のどちらかを振る舞う。料理の場合は、二汁六菜・引菜・肴を振る舞い、引菜は治脩が配膳する。菓子の場合は、肴を治脩が配膳する。

吸物が出された後、土器と肴をそれぞれ素木の三方に載せ、盃事がはじまる（57）。まず治脩が酒盃を飲む。次に嘉儀を務める先手衆が広式番頭へ酒盃と肴を進める。もう一度治脩に酒盃が進められ、盃事を終える。最初に治脩が酒盃を飲むときに、広式番頭が肴を進めることも想定されている。治脩は大書院勝手（㉓）に下がる（58）。濃茶・茶請・後菓子による茶事が行われる。これが終わると、取持衆が挨拶をし、治脩は広式番頭へ謝辞を述べる。そして広式番頭は治脩の案内に従って退出する。治脩は板之間（⑥）まで見送り、他の者も出迎えた場所で見送る。

広式番頭の退出後に（59）、徒目付には広間溜（⑬）で、小人目付には使者之間（⑬）で、一汁三菜の料理を振る舞う。拝領物の運搬者には御門につづく腰懸（②）で菓子と酒を振る舞う。

３－５．家慶の袴着

寛政９年（1797）１月 22 日、将軍世子家慶の袴着の祝儀として、奏者番稲葉正諶が派遣され、治脩は干鯛一箱・昆布一箱・樽代千疋を拝領している[25]。

当日、幕府目付から小人目付が派遣され、奏者番の来訪が通知される。これを受けて、大手門・昌平橋・本郷三丁目に付人を２名ずつ派遣し、また奏者番にも同行させる（60）。本郷三丁目にはさらに拝領物に同行させる付人を派遣する（61）。

拝領物は玄関（⑤）で整えてから、徒が大書院につづく廊下（⑱）まで運ぶ。ここで大小将が受け取り、組頭と番頭の指示のもと、大書院上之間（⑳）の上段（⑲）際に飾る（63）。

奏者番が到着すると（64）、家老と聞番が御門外（①）に出迎え、聞番が敷付（④）まで案内する。御門内の白洲（③）には頭分が控える。治脩は敷付２枚目の左手に、斉広は３枚目の治脩の後方に出迎える。大聖寺藩８代藩主前田利考・高家前田長禧は治脩と斉広の後方に、先手衆は敷付の右手に出迎える。

治脩が奏者番を大書院へ案内する（65）。奏者番は上

之間（⑳）に着座し、刀は表小将が上之間縁頬（㉕）の刀掛けに置く。斉広は奏者番の後ろを付いていき、大書院勝手（㉓）に控える（66）。ここで治脩は将軍からの上意と拝領物を賜る（67）。その際に拝領物に近寄ることから、拝領物に直接触れて頂戴したことを表していたと考えられる。これが済むと、治脩は大書院勝手（㉓）に下がり、熨斗が出される。

ふたたび治脩は奏者番のもとに戻り、二之間（㉑）→境之間（㉔）→休息之間前の廊下（㉖）を通り、小書院へ案内する（67）。奏者番の刀は表小将が上之間縁頬（㉚）の刀掛けに置く。煙草盆と茶、火鉢を進める。この間に拝領物を大書院勝手（㉓）に下げる。

奏者番の希望により、料理か菓子のどちらかを振る舞う（68）。料理の場合は、二汁六菜・向詰・肴を振る舞い、向詰は治脩が配膳する。菓子の場合は、肴を治脩が配膳する（69）。相伴は高家前田長禧と先手衆がつとめる（71）。

吸物が出された後、土器と肴をそれぞれ素木の三方に載せ、盃事がはじまる（70）。奏者番→治脩の順に、酒盃を交わし、互いに肴を進め合う。これを２度繰り返して、盃事を終える。治脩は小書院勝手（㉜）に下がる。これが終わると、治脩は奏者番へ謝辞を述べる（74）。そして奏者番は治脩の案内に従って退出する。治脩は敷付（④）まで見送るが、他の者も出迎えた場所で見送る。

奏者番の退出後に（75）、拝領物に同行した徒目付には広間溜（⑫）で、小人目付には使者之間（⑬）で、一汁三菜の料理を振る舞う。拝領物の運搬者には御門につづく腰懸（②）で菓子と吸物を振る舞う。

小書院は老中の来訪時のみ飾り付けていたが、近年は将軍家の慶事で奏者番が来訪する際にも飾り付けるようになったという（73）。

３－６．御鷹之鶴

正月下旬から２月上旬にかけて、将軍から使番が派遣され、御鷹之鶴を拝領するのが慣例であった[26]。

当日、幕府目付から小人目付が派遣され、使番の来訪が通知される（136）。これを受けて、大手門・昌平橋・本郷三丁目に付人を２名ずつ派遣し、使番にも同行させる（77）。本郷三丁目にはさらに拝領物に同行する付人を派遣する（78）。

拝領物が到着したら、使番（藩士）が敷付（④）で受け取り、聞番の先導で大書院上之間（⑳）に運ぶ（79）。

使番が到着すると（80・81）、家老と聞番が御門外（①）に出迎え、聞番が敷付（④）まで案内する。御門内の白洲（③）には組頭と物頭が控える。敷付では、大聖寺藩８代藩主前田利考・高家前田長禧が左手に、先手衆が右手に出迎える。治脩は玄関をあがった板之間（⑥）の左手に、斉広はその後方で出迎える。

治脩が使番を大書院へ案内する。使番は上之間（⑳）に着座し、刀は表小将が二之間（㉑）の床に置く。斉広は大書院勝手（㉓）に控えている（82）。治脩は二之間の床の前に着座し[27]、将軍からの上意と拝領物を賜る（83）。その際に、治脩は拝領物の鶴に近寄り、鶴の腿に手を添えて[28]、頂戴したことを表している。使番と治脩は二之間（㉑）の方へ下がり、対座して挨拶を交わす。ここで拝領物を大書院勝手（㉓）に下げ、熨斗を出す。治脩も勝手（㉓）にいったん下がり、その間に煙草盆と茶を進める。

ふたたび治脩は使番のもとに戻り（84）、飲食を振る舞うことを告げる。使番に菓子を振る舞う。肴は治脩が配膳する。相伴は先手衆が務める。

吸物が出された後、土器と肴がそれぞれ素木の三方に載せられ、盃事がはじまる（85）。使番→治脩の順に、酒盃を交わし、互いに肴を進め合う。これを２度繰り返し、盃事を終える。治脩は大書院勝手（㉓）に下がる。つづいて濃茶を進める。これが終わると、取持衆から使番へ挨拶をするよう促され（86）、治脩は使番へ謝辞を述べる。そして使番は治脩の案内に従って退出する。治脩は板之間（⑥）まで見送るが、他の者も出迎えた場所で見送る。

使番の退出後に（87）、徒目付には広間溜（⑫）で、小人目付には使者之間（⑬）で料理を振る舞う。拝領物の運搬者には御門につづく腰懸（②）で菓子と酒を振る舞う。

３－７．家慶の元服

３月８日、将軍世子家慶の元服を祝って、奏者番水野忠韶が派遣され、治脩は二種一荷を、斉広は一種一荷を拝領している[29]。

当日、幕府目付から小人目付が派遣され、奏者番の来訪が通知される。これを受けて、大手門・昌平橋・本郷三丁目に付人を２名ずつ派遣し、また奏者番にも同行させる（89）。本郷三丁目にはさらに拝領物に同行させる付人を派遣する（90）。

拝領物は玄関（⑤）で整えてから、徒が大書院につづく廊下（⑱）まで運ぶ。ここで大小将が受け取り、組頭と番頭の指示のもと、大書院上之間（⑳）の上段（⑲）際に飾る（92）。斉広の拝領物も一緒に受け取り、治脩の拝領物の隣に飾る（93）。

奏者番が到着すると（94）、家老と聞番が御門外（①）に出迎え、聞番が敷付（④）まで案内する。御門内の白

洲（③）には頭分が控える。治脩は敷付２枚目の左手に、斉広は３枚目の治脩の後方に出迎える。大聖寺藩８代藩主前田利考・高家前田長禧は治脩と斉広の後方に、先手衆は敷付の右手に出迎える。

治脩が奏者番を大書院へ案内する（95）。奏者番は上之間（⑳）に着座し、刀は表小将が上之間縁頬（㉕）の刀掛けに置く。斉広は奏者番の後を付いていき、大書院勝手（㉓）に控える（96）。ここで治脩は家慶からの上意と拝領物を賜る（97）。その際に拝領物に近寄ることから、拝領物に直接触れて頂戴したことを表していたと考えられる。いったん治脩は大書院勝手（㉓）に下がり、熨斗が出される。

斉広も上意と拝領物を賜る場合には、治脩に続いて、斉広が賜る（98）。それが済むと、治脩と斉広は大書院勝手に下がり、熨斗が出される。

ふたたび治脩は奏者番のもとに戻り、二之間（㉑）→境之間（㉔）→休息之間前の廊下（㉖）を通り、小書院へ案内する（97）。奏者番の刀は表小将が上之間縁頬（㉚）の刀掛けに置く。煙草盆と茶、火鉢を進める。この間に拝領物を大書院勝手（㉓）に下げる。

奏者番の希望により、料理か菓子のどちらかを振る舞う（100）。料理の場合は、二汁六菜・向詰・肴を振る舞い、向詰は治脩が配膳する。菓子の場合は、肴を治脩が配膳する（102）。相伴は高家前田長禧と先手衆がつとめる（105）。

吸物が出された後、土器と肴をそれぞれ素木の三方に載せ、盃事がはじまる（103）。奏者番→治脩の順に、酒盃を交わし、互いに肴を進め合う。これを２度繰り返して、盃事を終える。治脩は小書院勝手（㉜）に下がる。そして濃茶と後菓子による茶事が行われる。

斉広も盃事に加わる場合には（104）、奏者番→治脩の順に酒盃を交わし、互いに肴を進め合う。もう一度奏者番に酒盃を進めたところで、治脩は自席に戻り、かわりに斉広が肴を進める。奏者番が斉広に酒盃と肴を進め、また奏者番に酒盃を進めたところで、斉広は小書院勝手（㉜）に下がり、治脩が肴を進める。そして奏者番が治脩に酒盃と肴を進めて、盃事を終える。

茶事が終わると、治脩と斉広は奏者番へ謝辞を述べる（107・108）。そして奏者番は治脩の案内に従って退出する。治脩は敷付（④）まで見送るが、他の者も出迎えた場所で見送る。

奏者番の退出後に（109）、拝領物に同行した徒目付には広間溜（⑫）で、小人目付には使者之間（⑬）で、一汁三菜の料理を振る舞う。拝領物の運搬者には御門につづく腰懸（②）で菓子・吸物・酒を振る舞う。

３－８．御暇

３月21日、御暇の上使として将軍家斉からは老中安藤信成が、将軍世子家慶からは西丸老中水野忠友が派遣され、白銀と巻物を拝領している。また広大院からも広式用人中島三左衛門が派遣され巻物を拝領している[30]。

老中と広式用人のどちらが先に来訪したかは定かではないので、ここでも便宜的に奏者番→広式番頭の順番で見ていく。

当日、幕府目付から小人目付が派遣され、老中の来訪が通知される。これを受けて、大手門・昌平橋・本郷三丁目に付人を２名ずつ派遣し、また老中にも同行させる（111）。本郷三丁目にはさらに拝領物に同行させる付人２名を派遣する（112）。

拝領物は徒が敷付（④）で受け取り、大書院につづく廊下（⑱）まで運ぶ。ここで大小将が受け取り、組頭と大小将番頭の指示のもと、大書院上之間（⑳）の北東隅に飾る（114）。

老中が到着すると、治脩・斉広・家老・聞番は御門外（①）に出迎える（115）。聞番は駕籠から降りた老中を治脩のもとへ案内し、治脩が老中を先導して玄関に迎え入れる。御門内の白洲（③）には左手に頭分が平伏している（138）。敷付（④）では、大聖寺藩８代藩主前田利考・高家前田長禧が左手に、取持衆と先手衆が右手に出迎える。

そのまま治脩が老中を大書院へ案内する（115）。老中は上之間（⑳）に、治脩は二之間（㉑）の敷居際に着座したと考えられる。刀は表小将が上之間縁頬（㉑）の刀掛けに置く。斉広は老中の後ろを付いていき、大書院勝手（㉓）に控えている。

治脩は老中の手前まで歩み寄り、平伏して、将軍家斉の上意を賜る（116）。つづいて、家慶の上意→家斉からの拝領物→家慶からの拝領物の順に賜る。それが済むと、老中と治脩は二之間（㉑）の方に下がり、対座して、挨拶を交わす。そして熨斗を出し、治脩は大書院勝手（㉓）に下がる。ふたたび治脩は老中のもとに戻り、二之間（㉑）→境之間（㉔）→休息之間前の廊下（㉖）と進み、老中を小書院へ案内する。

老中は縁頬側に着座し、刀は表小将が上之間縁頬（㉚）の刀掛けに置く。そして煙草盆と薄茶を進める。斉広は小書院勝手（㉜）に移る（117）。料理の準備が整うと、治脩は料理を振る舞い、相伴をつとめることを告げ、小書院勝手（㉜）の近くに移動する。二汁六菜の料理を振る舞い、向詰は治脩が、肴は前田利考・前田長禧が配膳する。

吸物が出された後、土器と肴をそれぞれ素木の三方に

載せ、盃事がはじまる（119）。治脩は老中と向かい合い、老中→治脩の順に、酒盃を交わし、互いに肴を進め合う。これを２度繰り返し、盃事を終える。つづいて湯が進められるが、これは治脩→老中の順に注がれる。治脩は小書院勝手（㉜）に下がり、斉広が濃茶を運ぶ。濃茶・茶請、薄茶・後菓子による茶事が行われる。これが終わると、取持衆から老中へ挨拶をするよう促され、治脩は老中へ謝辞を述べる。老中は治脩の案内に従って退出する。治脩は御門外（①）まで見送るが、他の者も出迎えた場所で見送る。

つぎに広大院が派遣した広式用人中島の応接を見ていこう。

平川口門・水道橋・本郷三丁目に付人を２名ずつ派遣し、また広式用人にも同行させる（122）。本郷三丁目にはさらに拝領物に同行させる付人２名を派遣する（124）。

拝領物は徒が敷付（④）で受け取り、大書院につづく廊下（⑱）まで運ぶ。ここで大小将が受け取り、組頭と大小将番頭の指示のもと、大書院上之間（⑳）の上段（⑲）際に飾る（125）。

広式用人が到着すると（126・127）、家老と聞番が御門外（①）に出迎え、聞番が敷付（④）まで案内する。御門内の白洲（③）には組頭と物頭が控える。治脩は板之間中央（⑥）に、斉広は板之間端の後方に出迎える。敷付（④）では、大聖寺藩８代藩主前田利考・高家前田長禧が左手に、先手衆が右手に出迎える。

治脩が広式用人を大書院へ案内する（128）。広式用人は上之間（⑳）に着座し、刀は表小将が二之間（㉑）の床に置く。斉広は大書院勝手（㉓）に控えている（129）。そして、治脩は広大院からの命と拝領物を賜る（130）。その際に拝領物に近寄ることから、拝領物に直接触れて頂戴したことを表していたとみられる。これが済むと、拝領物は表小将が大書院勝手（㉓）に下げる。熨斗が出され、治脩も勝手（㉓）に下がる。煙草盆と薄茶を出す。

ふたたび治脩は広式用人の前に出る（131）。相伴をつとめる取持衆の希望により、料理と菓子のどちらかを振る舞う。料理の場合は、二汁六菜を振る舞い、向詰は治脩が、肴は取持衆が配膳する。菓子の場合は、肴を治脩が配膳する。

吸物が出された後、土器と肴をそれぞれ素木の三方に載せ、盃事がはじまる（132）。広式用人→治脩の順に酒盃を交わし、互いに肴を進め合う。これを２度繰り返し、盃事を終える。治脩は大書院勝手（㉓）に下がる。つづいて濃茶・茶請・後菓子による茶事が行われる。これが終わると、取持衆が挨拶をし、治脩は広式用人へ謝辞を述べる。広式用人は治脩の案内に従って退出する。治脩は板之間（⑥）まで見送り、他の者も出迎えた場所で見送る。

広式用人の退出後に（133）、徒目付には広間溜（⑬）で、小人目付には使者之間（⑬）で、一汁三菜の料理を振る舞う。拝領物の運搬者には御門につづく腰懸（②）で菓子と酒を振る舞う。

おわりに

本稿では、19世紀初頭の加賀藩本郷上屋敷の表御殿における応接の一端を解明することができた。

来訪者への応接は、加賀前田家との関係や来訪者の格式に応じて、差別化が図られていた。それは、通される部屋や出迎える藩士の立ち位置などにとどまらず、来訪者の口上の取り扱いにまで及んでいる。

最も優遇されていたのは、姻戚関係を結んだ家と血縁関係にある分家である。姻戚関係を結んだ家は小書院に通され、その口上は即座に口頭で藩主に伝えられた。分家の富山・大聖寺両支藩主には、表御殿内に専用の部屋が用意され、奥にある居間書院で応接されたり、敷舞台の催しに参加することもあった。

一方、そのほかの来訪者は、大書院・小書院勝手・大書院勝手・式台周辺の諸部屋に通された。基本的に口上は退出後に小紙や御帳などに記したもので藩主に伝達された。藩主と対面することも稀であったようである。

幕府からの使者の応接も、使者の役職に応じて違いが規定されていた。例えば、藩主が使者を出迎える場所は、老中は御門外、若年寄は御門内の白洲、奏者番は敷付、それ以下は板之間と定められている。いずれの応接も上意の伝達・拝領物の頂戴・饗応・盃事から構成されることに違いはみられない。しかし、老中と奏者番の場合は、大書院で上意の伝達と拝領物の頂戴が、小書院で饗応と盃事がそれぞれ執り行われている。一方、使番・広式用人・広式番頭の場合は、すべて大書院のみで執り行われている。

最後に、冒頭で触れた文政７年（1824）の居間書院周辺の改築について少し述べておきたい。この改築は翌８年にはじまる溶姫の御住居の建設に先立って行われた。溶姫は11代将軍家斉の21女で、文政10年に13代藩主斉泰へ輿入れをする。居間書院の改築は、北側に建設される溶姫の御住居と表御殿を接続することが一義的な目的であった。しかし、能に並々ならぬ情熱を注いでいた斉泰は、これを機会にと、座敷との兼用であった敷舞台を、専用の能舞台として独立させることを考える。実際、能舞台の空間を確保するために、自身が生活する居間棟

を東側に移している。また、「記事」で指摘されていたように、飲食ができないほど狭小であった見物所を充実させている。もともと北側にあった見物所は２間幅から４間幅となり、さらに居間書院の北側にも見物所を配置している。

【註】

(1) 小松愛子「溶姫の引移り婚礼」『赤門－溶姫御殿から東京大学へ』（東京大学出版会、2017 年）77 頁。

(2) 平井聖『日本の近世住宅』（鹿島研究所出版会、1968 年）144 ～ 170 頁。

(3)「賓客応接記事」（金沢市立玉川図書館近世史料館・加越能文庫、特 16.13-99）。

(4) 前田育徳会尊経閣文庫編『太梁公日記』第一（続群書類従完成会、2004 年）、第二～五（八木書店、2008－14 年）。

(5)「江戸上屋敷来客御誘引御向送配置図」（横山家文書、33「江戸藩邸絵図」(5)）。金沢城調査研究室編『金沢城史料叢書５金沢城代と横山家文書の研究』117 頁参照。

(6)「本郷上屋敷大書院等之図」（加越能文庫、特 16.18-158）。

(7)「加賀前田家江戸屋敷図」（江戸東京博物館所蔵、86200951）。

(8)「御居間書院ニ御料理被進候節之絵図」（加越能文庫、特 16.14-16）。

(9)「江戸御上屋敷御殿御広式絵図」（金沢市立玉川図書館近世史料館・清水文庫、特 18.6-29）。加筆は以下のとおりである。①大書院・小書院・勝手座敷脇の廊下に部屋境を示す点線を引いた。②長囲炉裏之間と料理之間の間に廊下は通っていないので、廊下を表わす線を消した。③整理した部屋名と杉戸を示す「杉」をゴシック体で書き込んだ。④便宜的に部屋を示すための丸数字を書き込んだ。

(10)『加賀藩史料』第 10 編（清文堂出版、1970）692 頁。「前月（４月：筆者）十八日御着府之処、御脚痛被遊、御老中方御廻勤御延引之処御快、同二十八日御廻勤、同二十九日上使太田備中守殿を以、御参勤に付被為蒙上意、翌晦日御老中御連名之御奉書到来、当朔日御登城御参勤之御礼被仰上候」。「御留主諸事」の引用。

(11)『加賀藩史料』第８編（清文堂出版、1970）985 頁。安永３年（1774）７月 27 日条。参勤に際して、老中松平武元が上使として来訪した。「御登城下りの附人来り次第、先小書院溜の方へ出懸る。水道橋の附人来候と一時、広間縁頬之方へ出懸る。夫より本郷三丁目の附人来候と、右案内次第敷台畳の上正面に出居り」。「太梁公手記」の引用。

(12) 註（4）第四の 201 頁。安永２年（1773）７月 25 日条。帰国に際して、老中松平康福が上使として来訪している。「上使之左りノ方へツキ、先立シタルカ宜シ」。

(13) 註（12）。「大書院襖際敷居之内際ニ着座、上使ズツト上へ縁頬を後ロニ着座」。

(14)註(12)。「扇子を取、歩ミ行、上使ゟ九尺計こなたに而着座、上使の側へスリ寄、平伏、此時上意之趣演述」。

(15) 註（11）986 頁。「少々下之方へそろそろ立上り退き候時、上使茂下へさがり、縁頬を後に着座。此時対座にして」。

(16) 註（11）986 頁。「小書院へ通る。…上之間之方縁頬を後に着座。対座になして」。

(17) 註（11）987 頁。「料理宜時分出、対座よりは少し下り、料理致進上候。是に而致御相伴候旨及挨拶、勝手之方着座」。

(18) 註（4）第二の 238 頁。安永元年（1772）12 月 23 日条。使番建部広般が派遣され、御拳之雁を拝領している。「最初誘引之時茂中ノ床下ノ邊ニ扣居へ宜候」。

(19) 註（18）。「最初上意拝聴、畢而雁（那百助持之、）之方へ歩ミ寄、竹共ニ受取頂戴」。上意を賜った後に、近習頭横浜玄英が雁を刺した竹を持っており、そこに近寄り、横浜からその竹を受け取り、頂戴したことを示している。

(20) 註（18）239 頁。「上使ハ下へ披ク、対座ニテ、厳冬之砌、別而御大儀ト挨拶」。

(21) 註（10）718 頁。「翌十四日治脩公御登城被成候処、…亀萬千様御儀御養子被成、御嫡子被成度段、（御養嫡御願九月十九日也）。御願之通被仰出候旨、御用番松平伊豆守演述」。「三守御譜」の引用。

(22) 註（10）721 頁。「亀萬千様御養子就被仰出候、前月二十三日以上使御奏者番本庄甲斐守殿、公方様より巻物十巻・御樽一荷・干鯛一箱、従若君様御樽一荷・干鯛一箱御拝領被成、従御台様同日御使御広式番々頭植山三郎兵衛殿を以、御樽一荷・干鯛一箱御拝領被成。亀萬千様江右以甲斐守殿、公方様より御樽一荷・干鯛一箱、従若君様干鯛一箱御拝領被成、従御台様茂御使御広式番々頭本多金左衛門殿を以、干鯛一箱御拝領被成、御懇之被蒙上意候。相公様・亀萬千様にも少々御風気被為在候付、御名代飛騨守様御頼被成、御拝聴被成候」。「横山氏日記」の引用。

(23) 註（10）409 頁。寛政５年（1793）３月 28 日条。「従御台様も御拝受物巻物五つ到来、…右御大書院溜に指置、伊豆守殿御退出之上右同断御上段際に飾之」。「政隣記」の引用。帰国に際して、広大院から拝領物を賜るが、はじめに大書院溜に保管し、将軍上使の退出後に大書院上之間に飾ることになっている。

(24) 註（10）489 頁。寛政５年（1793）12 月 21 日条。「十二月廿一日、…四時前歳暮之為御祝儀、従御台様御使御広式番之頭清水新左衛門殿を以、干鯛一箱・白銀十枚御拝受。…但、去年迄は公辺三ヶ年御省略中に付、干鯛迄御拝受之処、今年より如最前両種御拝受也」。「政隣記」の引用。歳暮の祝儀として、広大院から広式番頭清水新左衛門が派遣され、干鯛一箱・白銀十枚を拝領している。

(25)「横山氏日記」第三（加越能文庫、特 16.41-130-3）寛政９年（1797）２月６日条。「若君様御袴着為御祝義、前月廿二日従若君様上使御奏者番稲葉丹後守殿を以干鯛一箱・昆布一箱・御樽代千疋御拝領被遊候旨等表方江申来候事」。

(26) 註（10）。寛政９年の御鷹之鶴の拝領に関する情報は見出せなかった。しかし、前後の状況を見てみると、寛政３年

（1791）正月 23 日・使番朝比奈弥太郎（177 頁）、同 5 年 2 月 2 日・使番筧助兵衛（393 頁）、同 7 年正月 21 日・使番徳永小膳（586 頁）、同 11 年 2 月 4 日・使番坂本小太夫（862 頁）がそれぞれ派遣されている。以上から、御鷹之鶴を拝領する際には、使番が派遣されていたとみられる。

(27) 註（4）第二の 287 頁。安永元年（1772）正月 21 日条。使番松平忠英が派遣され、御鷹之鶴を拝領する。「大書院へ誘引、中ノ床邊ニ着座、上使ハ上へ被通候」。

(28) 註（27）。「鳥之ソバヘヨリ、上段之者（和平也）、鶴之足ニ一寸手ヲソヘル也、予ハ鶴ノモヽ邊ニ一寸手ヲソヘ、謹而頂戴之内、上使座ヲサガル、対座」。

(29) 註（25）。寛政 9 年（1797）3 月 22 日条。「大納言様御元服・御官位為御祝儀、去九日従大納言様上使御奏者番水野壱岐守殿を以相公様江二種一荷、筑前守様へ一種一荷御拝領被成候旨、昨日表方江申来候事」。

(30) 註（10）746 頁。「前月（3 月：筆者）廿一日以上使安藤対馬守殿、御国許江之御暇被仰出、白銀・御巻物御拝領。従大納言様も水野出羽守殿を以、御巻物御拝領。将又従御台様、中島三左衛門殿を以御巻物御拝受。去朔日右為御礼御登城被成候」。また、寛政 5 年（1793）3 月 28 日条に「従御台様御使御広式御用人中嶋三左衛門殿を以て、前記之通御拝受物有之」（410 頁）とあり、帰国の際に広大院からは広式用人中嶋三左衛門が派遣され、祝儀を拝領している。両者とも「政隣記」の引用。

（92）一、御出入之町医師為伺御機嫌罷出候段、御歩中ゟ及案内候ハヽ、物頭罷出候而承リ可及挨拶置候、尤罷帰候節不及貪着候、口上御帳ニ記申義等無之、引捨ニ承置申迄ニ候事

申候

但、御退出送道筋、御広間溜ゟ同二之間ゟ御使者之間御椽類通リ之事、若御広間溜ニ御客有之等ニ而指支候ハヽ、上之口ゟ御広間御椽側通リ之事

(79) 一、嘉節・朔望・廿八日之儀は追而御越、嘉節は御料理も出候故、御居留リ候ニ付、取次候ハヽ先御口上小紙ニ相記置、尤同様之御口上ニ而取次申者も、同人之分は幾人ニ而も小紙一紙ニ記、能程ニ考、小紙御近習頭を以指上、御対顔之儀伺置、宜時分申上、御対顔有之候へハ、其上ニ而上置候小紙御近習頭より被相返候間、御対顔付并御退出之節御対顔・御料理等之御礼御申述之趣、段下リニ為記置可申候、御覧札ハ付不申候、若又御対顔無之候得は、右上置候小紙御近習頭ゟ相渡、御使勤候様可被仰出候間、御使勤御帳ニ御使出ルト為記置、御覧札ハ付不申候

(80) 一、御慶事等之節ニ而御客も諸席甚御用多之時分は、品ニ寄御口上小紙為記申儀も難成程之事も有之、其刻は御名前迄御近習頭を以上之、御口上ハ追而小紙ニ記可申之旨申達置、御対顔等相済、追而小紙ニ記、入御覧申事も有之候、此分ハ御覧済候ハヽ御覧札付させ置可申候

(81) 一、何卒品有之御口上ニ候は、可申達旨申述、小紙ニ記、入御覧、御対顔又御使勤申儀等ハ被仰出次第相心得可申候、此分も御覧札付させ置可申候

(82) 一、若御口上之振、何ぞ御祝詞等之趣ニ而、追而以奉札御挨拶等無之而ハ難成趣ニ候ハヽ御申置、御退出可有之旨御申候共、追付相達候旨申述、先御口上之大意、口達を以申上、御使相勤可申候、左候得は分而奉札ニ不及、済申分も有之候間、右之通心得可申候、尤如此節は猶御退出後、小紙ニ記、入御覧可申候、此分も御覧札付させ置可申候

(83) 一、御対顔中ハ三之間御衝立内ニ可致伺公候、御料理中ハ二之間御敷居内ニ扣可罷在候、尤御対顔被仰出候ハヽ御客衆江前方其段可申述置候

御広間上之間　板中ニ而取次之

(84) 御出入ニ而無之御旗本衆并寺庵方

(85) 右御面々御越候得は、先御勝手坐敷同格、併御対顔と申儀は無之候、依而多分御申置被成候、若御申置之御申　述無之候は、追而可申聞哉之旨申述、左候ハヽ尤御序ニ宜と御申聞候間、都而御口上小紙ニ相記、夕方御帳ニ而入御覧候、若何卒品有之御口上申上、御使勤申様之節ハ、御勝手坐敷之振ニ可心得、御帳方も同断也

但、御退出道筋御椽類通リ之事

(86) 一、右御小書院溜以下数席之分、御留守年ニ而も相替儀無之候事

御広間二之間　板中　出向送板　引上送障下　引上送板　引上送戸

(87) 軽キ御役人中并寺庵方等

(88) 右席江被通候方々被罷越候得は、御小将中誘引、物頭江申聞有之候間罷出、口上承リ、都而後刻可相達旨申入、退出之節御会釈階級之通ニ送リ可申候、尤口上小紙ニ記置可申、不及入御覧、夕方御帳ニ而入御覧申候事

但、送リ道筋御椽類通リ之事

御広間御勝手　板中　出向送板　引上送戸　引上不送

(89) 軽キ寺庵方等

(90) 右席江被通候方々被罷越候得は、御小将中誘引、物頭江被達候間、都而御広間二之間同様ニ相心得可申候

(91) 右両席共御留守年ニ而も相替儀無之事

竹之間

(64) 一、此御席江御通之御面々、御留守中御前様・法梁院様江之御口上有之候ハヽ、後刻可相達旨申述候而、御帳ニハ引直シ後刻宜申上旨被仰聞候趣ニ可相記候、阿方ゟ多分後刻宜申上旨被仰聞候事

但、御在府中ニ而も右之通ニ相心得可申候事

(65) 一、敷付ニ而取次候御面々等、平日即刻小紙入御覧申分も、御不幸之為御悔御出之分は不及其儀旨、宝暦十二年三月廿八日相極候事

御小書院御勝手　板端ニ而取次之、当時之御面々袖扣折本ニ而可参考

(66) 前田家（上州七日市家）・前田家（高家之御家柄之方、但御子弟共）・松平（芸州侯之御末家）・織田家（丹波柏原家）・林家・右之外御出入御申込之高家衆并各別之家筋之御出入衆御番頭以上ニ御成候方

(67) 右、御定席之御面々御通被成候得ハ、御小将中御誘引、組頭罷出御口上可承候、組頭不在合歟、又は指支候節ハ物頭罷出御口上可承之候、後刻共御席〔序〕共被仰聞無之候は退キ、御口上小紙ニ記御次へ持参、御近習頭を以入御覧可申候、御対顔有之候は御客へ其段申述、常之扣所扣有之、御前御出ヲ見懸、御客モ下モ坐へ御下リ候故、御客方も少退キ候而、御対顔中相扣可罷在候、御対顔有之、且御料理等出候得は、御退出之刻右之御礼も被仰述候間、御帳段下リニ其段相記置可申候

(68) 一、御対顔無之候は御使可相勤旨可被仰出候間、御対顔無之訳承リ、其趣を以御使相勤可申候

(69) 一、後刻宜申上旨被仰聞候は、敷付ニ而取次候、松平家之分ハ小紙即刻入御覧、御用所へも為見置可申候、其外之分ハ御口上小紙ニ記置、不入御覧、夕方御帳ニ而一集ニ入御覧申候事

但、此席御客御退出御送リ道筋、舟之間ゟ同御廊下、夫ゟ御広間御椽側通リ之事

(70) 一、右御対顔有之候ハヽ、御帳ニ御対顔付為調、御使勤候ハヽ、御使出ルト為調、御覧札為付置可申候

(71) 一、此御席御料理出候刻ハ、御客御目通、御給事人扣所之後角ミ之方ニ、扣所ニ障リ不申様ニシテ扣罷在、御馳走方并御給事指引可仕候事

(72) 一、此御席御客御刀、御大名方并ニ高家之分ハ、御床之下ニ御鐺御障子之方ニシテ直之、其外ハ入口御屏風外抔ニ有之候得ハ、内へ入置申筈之事

(73) 一、御前様・法梁院様江之御口上有之候は、後刻可申上旨被仰聞候趣ニ相斗ヒ可申事

御大書院御勝手　板端ニ而取次之（当時御定席之御面々御名袖扣折本ニ而可参考）

(74) 此御席は御出入衆之内御番頭以上之重役被仰付候方御通也

(75) 右、御定席之方御越候得は、御小将中致御誘引、組頭罷出取次、不在合等之節物頭罷出取次、都而御小書院御勝手と同様之取捌ニ候事

但、御退出御道筋、御大書院御客之通、若御大書院ニ御客有之候得は三之間ゟ舟之間へ出、御廊下ゟ御広間御椽側通ニ候事

(76) 一、御対顔有之候へハ、御大書院三之間ニ而此席御給事人扣所之下之方ニ相扣可罷在候、御料理出候節は、扣所ゟ入口御敷居際ニ御客之御着坐次第、御敷居内外之内見斗扣罷在可申事

御勝手座敷二之間　板中ニ而取次之（当時御定席之御面々名前被扣折本ニ而可参考）

(77) 御出入之御役人并御旗本衆

(78) 右御面々御越之節ハ、取次御小将中致御誘引、組頭罷出御口上可承之、組頭不在合等之節は物頭罷出御口上可承之候、平日は多分後刻宜トカ御序宜トカ御申聞候間、御退出之上御口上小紙ニ記置、夕方御帳ニ而入御覧候、若後刻共御序ニ共御申聞無之候は、追而可申聞哉と申述候得は、多分御序ニ宜と御申聞候間、右之通ニ心得可

当時不用為後例記之

(52) 享和二年三月

相公様御隠居以後、同年十月迄御在府被成御坐候内、御両様御出之刻相公様江之御口上御取次、相公様之御近習頭罷出申候、御国へ被為入候上ハ表向物頭取次御帳ニ記置申候事

右同断

(53) 当淡路守様御相続已後御願ニ而、享和三年十二月ゟ是以後都而備後守様御同様之御取扱ニ相成候、其已前ハ富山侯ニハ御様子違ヒ申候、御出之刻裏御式台御往来ニ而物頭壱人・取次御小将壱人鏡板端江罷出、御溜リ江御誘引、御口上物頭取次小紙ニ記、入御覧候、御対顔有之候得は其段御近習頭申聞之趣を以可申上候、御対顔無之候得は其訳承リ御使相勤候、都而御口上小紙ニ記上之候事

右同断

(54) 故飛騨守様（天明ゟ寛政之始頃迄）御幼年之時分ハ、御先詰ニ阿方御近習頭罷越候ニ付、御料理等上申儀右御先詰之者を以申上候事

御大書院

(55) 国主家・准国主家・御三家之御連枝・御老中方・御側御用人・京都所司代・拾万石以上之御大名・御一門様之御連枝・仙石家・相馬家・松平（越智家）・松平（形原家）・松平（桜井家）・織田家（本家迄）・若年寄衆・八ヶ寺・松平（越前本家・作州）

右、鋪附ニ而御小将両人罷出取次、但端中之階級有之、委曲袖扣折本ニ而可参考

万石以上之御大名・大坂御城代（若年寄転役之方ハ先役御会釈、持込敷付中也）・御側衆・高家衆・駿府御城代・伏見奉行・御留守居年寄衆・三御番頭衆

右、鑑板端ニ而御小将壱人罷出取次之

(56) 右、御方々御通被成候得は、御小将中致御誘引、御大書院江御通、組頭罷出御口上可承候、組頭不在合節は物頭罷出御口上可承之候、被仰置御退出候ハヽ、御並ニ随ヒ敷付端中・板端之内へ御送リ可申候、畢而御口上小紙ニ記、敷附ニ而取次申御並ハ小紙即刻入御覧可申候、其外ハ小紙不入御覧、御帳ニ記置、夕方御帳ニ而一集ニ入御覧候、尤敷附之分小紙即刻入御覧候は、御帳ニ御覧札為付置可申候

但、御退出送リ道筋、御大書院三之間ゟ御広間御椽頬通リ之事

(57) 一、右御面々御口上被仰述、後刻共御序共無之御扣御坐候は、御口上可相達旨申述、御客前退キ御次へ罷出、御近習頭を以御口上之荒増可申上候、御対顔ハ多分無之候間、猶更承候上、御対顔於無之は御使勤可申候、御退出之上、猶御口上小紙ニ記、入御覧可申候、尤御帳ニ御覧札為付置可申候

(58) 一、万一御対顔有之候は、其段御客へ申上置、御大書院三之間江舟ノ間ゟ入口之御杉戸際ニ見斗、御客ゟ御見通之所ニ始終御対顔中も相扣罷在、御退出之時分は先様次第御前御送リ可有之候間、御前ゟ引除キ御先江相立御送リ之所ニ扣、其所ゟ御客之御先立仕御送リ可申候

(59) 一、右敷附ニ而取次申御面々御通、御口上取次候ハヽ、小紙即刻入御覧候上、御用所へも早速相達可申候、御用人退出以後は下小屋へ以添紙面可遣之候

但、寺庵方之分は即刻入御覧、御用所へハ不及相達候（如斯ニ候得共、寺庵之分も御用所へ相達候而宜候旨文化七年十二月懸合極ル）

(60) 一、右御客御手水御用候共、御給事役右御用相廻申ニ不及候事

但、御閑所御尋候ハヽ御給事役江申談、御道しるへ可有之候事

(61) 一、右御客衆御刀、御手寄ニ直之申筈之事

(62) 一、右御客衆、御留守年ニ而も御客方心得、尤替事無之候事

(63) 一、敷付ニ而取次申御面々ニ而も、御留守年ハ御前様・法梁院様江之御口上有之候は、即刻御用所へ小紙可達之候、御二方様江之御口上無之候得ハ即日達申ニ不及候事

但、右御用所へ相達候分、役所済以後ハ御用人下小屋へ遣申義、御在府同様也

候而、御用所初リ候ハヽ御用人江可達候、夕方御用所済申上ニ候ハヽ一通リ品無之分ハ翌日相達宜候、若品有之御口上之振ニ候ハヽ御用人下小屋へ以添紙面為持可指置候事

但、御留守年は御口上被仰述候得は、多分直ニ御退出被成候間、御取次罷出候時分御給事役中へ申談、御供不指支哉為尋置、御取次人退キ候ハヽ、御給事人ゟ御供宜旨可為申上候事

表物頭御取次罷出候節ハ、御溜入口下之方御目通へ出、只今（御近習頭・御用人）詰合不申候間、私江御口上可被仰聞哉之旨申上、近ク罷出候様被仰候ハヽ、入口御屏風内迄相進ミ可承之（御在府ニ而御近習頭不詰合時ハ御口上承、畢而只今御他出被成候間、御帰殿ニ可申上旨可申上候、御留守年ハ御国元へ可申上旨申上退可申候）、右之節時候之義等御意被成候儀有之候間、其刻は応シ御請申、終リニ蒙御意難有仕合奉存候旨申述、退キ可申候事

（47）一、上使等有之御名代并為御取持御出被成候節、上使御出之刻御出向之時分、昌平橋御附人ニ而御案内申上、其者直ニ御先立可仕候、依而此時は上ノ口ゟ御出故、則上之口ゟ罷出申上、直ニ御先立可仕候、上使御通候得は跡ニ御付、御通之御間迄御越被成候ニ付、此時ハ不及御先立、上使御退出之節ハ御送リ御出ニ付、此時も御式台迄御先立仕、御送リ畢而御式台ゟ御溜迄御先立仕候事

但、本文は御取持御出之節之事ニ候、上使御退出之節御式台迄御送リニ御出之節は御先立無之共不苦候、且御名代御勤之節ハ御附人ハ御城下ゟ申上候、やはり御出向ハ昌平橋御附人ニ而宜候得共、猶更此義は何方御好も可有之、先ハ右之通ニ而宜候、尤御名代之節ハ上使御退出ニハ御先立被成候様、此所之御先立ニは不及、御送リ畢而御溜リ之御先立仕義本文之通之事、但、右御先立物頭は多分御白洲詰罷在候故、御番頭中江申入、右御先立被勤候様示合可申事

（48）一、御両様御敷舞台ニ而御能・御囃子有之為御見物御出之刻は、御居間書院御廊下ニ御見物所御屏風囲ニ而出来ニ付、御溜ゟ其所迄表向物頭御先立仕、御大小将中ゟ御刀持参、御着坐後ロニ直之、物頭・御小将共入ロニ扣有之、御溜へ御往来之御先立等御用相勤候事

（49）一、御両様ニも御仕舞被成候時分ハ、右御見物所又ハ御溜ゟニ而も新御廊下通リ御先立仕、鏡之間入口・御居間書院二之間御敷居之外御唐紙際迄表向物頭御先立仕、御刀も御大小将持参之、夫より御近習頭御先立仕、御刀も御表小将へ渡之候、同所ニ物頭・御大小将も御仕廻中相扣罷在、御仕舞済候而御退之節御先立、御見物所・御溜之内江御誘引可仕候

但、御脇刺持申、阿方御家来壱人、御近習頭出向居申所へ相廻リ有之、御用勤之候事

（50）一、御両様御出御能被成候刻ハ、新御廊下之内ニ御装束所出来候故、右御屏風囲入口迄表向物頭御先立仕、御刀御大小将中持参、御装束所ニ阿方御家来中相扣候故、御刀渡之、物頭・御刀持共右之所ニ御能中相扣罷在、御能済候上御溜等江之御先立勤之候事

但、右之様之節は必時々御料理・御菓子等被進候、宜時分相調於御溜上之可申候、御見物所は至而狭ク候故、御たはこ盆迄上之候、若々於御見物所何ゾ召上リ物指上候節ハ、御給事人無刀之筈ニ候条、心付可申候事

（51）当公様御部屋住之節之振如斯為後例記置

御嫡子様被成御坐候時ハ、御在府・御在国共御口上御取次表向物頭勤之、御在府ニ候得は御口上被仰述候上、後刻可申上旨申上、御退出之上御帳ニ記置、書抜小紙夕方可上之候、御在国ニハ御便ニ可申上旨申上、御帳ニ記置可申候、御在府御殿ニ御出御対顔被成候ハヽ、夫前物頭ゟ其段申上候、外替事無之事

但、御前之口上御取次之者退候上罷出、其段申上御取次可申事

(33) 一、御一門様御出之節、御一足前御門迄申来候ハヽ、当番人承受、御近習頭を以達御聴、組頭・御番頭呼出可申候、御留守年ニ而も同様ニ候事

但、聞番中迄申来通達有之節も、組頭等江彼方ゟ不申遣旨ニ候ハヽ、当番物頭ゟ可申遣候事

(34) 一、御一門様方御刀、御小書院ニ而御椽頬上之間・二之間境之御杉戸之内、御鐺御椽之方ニシテ直之申筈ニ候

(35) 一、御装束御用有之候得ハ御給事役中江可申談候事

(36) 紀州公御連枝紀州公ニ御厄介

松平修理太夫殿　御帳ニ御苗字省キ殿付、御口上国主付之事

右、先達而相知、御出之節は組頭壱人・御小将壱人敷付端江罷出、御小書院江御誘引可申筈之事

但、指懸リ御出之節は、外御連枝方同様御小将二人敷付端江罷出、御通候ハヽ御大書院江御誘引可申筈之事

両御末家様　御定席　御用所続之御間

(37) 右、御出之刻、中之口番人ゟ及案内候ニ付、早速物頭壱人中之口階上杉戸際内ゟ右之方江罷出、致御先立、長囲炉裏之間通リ、御定席江御誘引仕、御溜之入口敷居外ニ相扣可申、其所ニ而御取次被召候趣被仰聞候間、御次へ罷越、御近習頭呼出其段可申入候、夫ゟ御溜前御廊下ニ相扣可罷在候、御近習頭御取次罷出候儀は、尤御茶・たはこ盆出候上罷出申様ニ可示合候、御対顔有之候得は、其段御近習頭ゟ申上候、御対顔中御溜入口御障子外ニ扣罷在、御退出之節如初御先立仕、中之口初メ出向申所ニ相扣可申候事

但、中ノ口ゟ鳶之間之方御廊下ニ御横目罷出有之、且御給事役は長囲炉裏之間ニ而舟之間御唐紙後ニシテ出向、御刀取於御溜直之候、右罷出有之人々江御会釈有之候間、御先立之者其節中坐可仕候事

(38) 一、御刀は御溜入口向御障子際ニ、御柄御客之方ニシテ直之、且又御対顔有之時分、御刀下へ御下ケ被成候間、其趣有之候は御給事役中江申入如元直所江為直可申候事

(39) 一、御手水御用有之候得は、御給事役壱人罷出、御手水鉢之水を以御用相勤候事

(40) 一、御供御尋被成候得は、御給事役江申談為相尋、御給事人ゟ直ニ為申上候事

(41) 一、御前御他出中ニ而御近習頭詰合不申候は、其段申上、表物頭御口上取次可申候、御口上半切紙ニ調置候而御近習頭罷出候は相達可申候

但、遠方御出等ニ而御待請ニ成、御近習頭一旦引取候共、多分夕方は罷出居申候間其刻可相達候

(42) 一、御両様表御式台ゟ御出被成候は、敷付端へ物頭壱人・取次御小将一人罷出、物頭御先立御広間御椽頬ゟ舟之間御廊下通リ、長囲炉裏之間へ出、御溜入口ニ而扣可申候

(43) 一、裏御式台ゟ被為入候は、物頭壱人・取次御小将壱人鑑板端へ罷出、物頭御先立、竹之間ゟ長囲炉裏之間通リ御誘引可仕候

但、表御式台御修覆中ニ而裏御式台ニ而表向御客等取次之節は、敷附壱枚敷有之ニ付、其刻は敷付へ罷出可申事

(44) 一、御両様御茶、御番頭・御横目之内見届ニ而、御給事人江相渡候、両役詰合無之候得は物頭見届可申事

(45) 一、御両様江於御溜御料理・御菓子等出候節は、宜時分御台所へ申談為相廻置罷出、御料理指上候旨申上候上可指上候、長囲炉裏之間ニ而御盛立仕、御番頭・御横目之内御膳部見届候、物頭は御客前ニ罷出相扣有之、御給事指引可仕候事

但、御料理等出候前、御たは粉盆引候儀御給事人江可心付候事

(46) 一、御留守年は御取次御用人罷出候故、御取次召候は御用人江可申入候、若詰合不申内ニ候得は其段申上、物頭御取次可仕候、取次候は御口上半切紙ニ相調

但、右御他出之儀申上候ハヽ、御前様等之御口上ハ多分後刻宜申上旨可被仰聞候、尤被仰述次第之事

(18) 一、御通被成被仰置候歟、又ハ御定席江御通無之、御間之内ニ而被仰置、或ハ御玄関ニ而被仰置候儀も可有之候、御間之内ニ而被仰置候節は、御口上承之、其所ゟ押返御先立御送リ可申候事

(19) 一、御対顔有之時分ハ、御口上初メ口達を以申上候得共、御退出之上、小紙ニ記、猶更入御覧申候、御覧済候上、御対顔ト頭書為調、御覧札為付置可申候

(20) 一、御対顔無之御使勤候節も、御口上ハ初メ口達を以申上候得共、御使勤御退出之上、御口上小紙ニ記、右同様猶更入御覧申候、御覧済候上、御使出ルト為相調、御帳ニ御覧札為付置可申候、但御前御不快ニ而御対顔無之、御使勤候上、右御見廻被仰述候は、小紙段下リニ其段も記可申事

(21) 一、御他出中ニ御出被成候節、御他出之趣申述候は、御口上小紙ニ為記、御他出之趣申述候趣、脇付ニ為記置、御帰殿之上、早速小紙入御覧、御帳ニ御覧札為付置可申候

(22) 一、御通被仰置候節は、御口上小紙ニ記、即刻入御覧可申候、御覧札為付置可申候

但、御定席ニ而無之、御間之内歟、又は御玄関ニ而被仰置候ハヽ、何方ニ而被仰置候と小紙ニ其所書頭記可申候

(23) 一、御前様・法梁院様ニも御他出中ニ候ハヽ、其段御口上承リ申刻申上、御帳ニも脇付ニ其段相記置可申候

(24) 一、御玄関ニ而被仰置候刻、頭分・御小将ト罷出候節、御小将江御口上被仰置候得ハ、承請候御小将名前ニ而御帳ニ記可申候、此義明和六年正月相極候事

(25) 一、御一門様御出之節、御口上小紙早速御用所へ為見可申候、御用所未初内ニ候ハヽ、初リ申候上可達、若役所相済引取申候上ニ候ハヽ、御用人下小屋へ以添状小紙可指遣候事

但、両御広式江上候小紙書抜も、即刻差上可申候事

(26) 一、御一門様御出之儀御門ゟ呼込候ハヽ、御給事役中御刀直出向候儀、心付可申候、御退出前御刀取候儀も心付可申候

但、御対顔有之候得は、御退出之刻御刀、表御小将ゟ罷出上之申儀も有之候、其刻は出向所へ御大小将中被出向候義可心付候、先ハ御大小将ゟ加人之方相勤可申候、猶心付可申候

(27) 一、御茶は御番頭・御横目之内見届、御給事人江相渡候、右両役差支候得ハ、組頭等見届可申候事

(28) 一、御手水ニ被為入候ハヽ、早速御給事役中江申談、右御用ニ為相向可申候事

(29) 一、右御一門様御出之刻、組頭詰合中ハ都而組頭中勤之候ニ付、物頭ハ御往来ニ敷付江罷出申迄ニ候、組頭未出席無之か退出以後ニ候得は、都而物頭ゟ各御客方勤之候ニ付、万事右之心得を以相勤可申候事

(30) 一、右御出之刻、組頭・御番頭不在合候は、早速両役共呼出可申候、右紙面物頭ゟ可遣筈ニ候得共、壱人之義弁兼候間、御小将中ゟ申遣候様、猶其時之心付可申入候事

(31) 一、組頭在合中、且不詰合節も呼出罷出候上は、物頭御客向之勤方無之ニ付御式台ニ相詰罷在、御退出之節敷付江罷出可申候

但、御往来共敷付内ゟ右江御先立組頭壱人出、左江物頭等弐人罷出候、組頭不在合候得は、物頭御先立ニ付右之趣を以罷出可申候事

(32) 一、御在国中ニ候得共、多分御通被仰置候、併時ニ寄御料理等出申義も可有之候、何レニも御前江之御口上承之候ハヽ、国許江可相達旨申上、御前様・法梁院様江之御口上被仰述候ハヽ、可相達旨申上退キ、追付出御使勤可申候、御料理出申義等も無之節は、御留守ニ而は多分御前様等江之御口上も後刻宜トカ御序ニ宜トカ可被仰聞事ニ候、外相替儀無之候、尤組頭不在合節は物頭勤之、御通之上自然御間在之候ハヽ、組頭・御番頭申遣候義等も心得同様ニ候事

御一門様　御定席御小書院

（11）右御出之節、組頭・物頭等之内敷附端江四五人、不足之時は御小将加リ罷出御取次可申候、御通被成候は御小書院江組頭御誘引可仕候、御刀直之、御たはこ盆・御茶出之候上、組頭罷出御口上可承之候

御誘引道筋、御広間御椽側ゟ御大書院三之間・同溜・境之御間、御休息之間前之御廊下ゟ御小書院三之間御敷居外迄御先立可仕候、御道筋之御間支候節は其時宜次第、外御間通リ御誘引可申事

右三之間御敷居際迄御先立仕扣、直ニ御小書院溜御床横之御廊下ゟ御小書院溜通リ舟之間江出、夫ゟ御小書院二之間取附之御廊下・三ノ間入口御敷居際ニ相扣罷在、御たはこ盆等出候上ニ而罷出、三之間・二之間境御敷居外ニ扣候ヘハ、必近ク相進ミ申様ニ可被仰聞、其上ニ而大抵御口上相届申程ニ相進ミ候而御取次可申候

但、右初御誘引御勝手江相廻リ之節、御小書院溜ニ御客有之候は、御大書院溜等之御間ゟ相廻リ可申候、何レ御客無之席往来可致候事

（12）一、右御通被成、御口上被仰述候上御扣被成御坐候は相退、早速御次江罷越、御近習頭を以口達ニ而御口上之大意を申上、猶後刻小紙ニ記可申上旨申達、御前御対顔被遊候哉否承リ可申候、御対顔可被遊旨被仰出候ハヽ、御客前ヘ罷出、御口上之趣相達候処、追付可懸御目旨申聞旨申上置、三之間入口扣所ニ相扣可罷在候、夫ゟ御対顔中も同所ニ扣罷在、御退出候之刻は御前御送被遊候ニ付、組頭は御前之御先江相立可申候、御送リニ先様次第階級有之ニ付、其所ゟ組頭御先立仕、敷付等迄御送リ可申候

御前御送リ安芸守様等は、御使者之間御椽頬御杉戸外板之間迄御送リ、南部様・酒井様ハ御使者之間御椽頬迄御送リ被遊候間、右所々ニ組頭相扣、夫ゟ御先立仕候

御退出之節、御出入衆等御出ニ而、鑑板迄御送リ、此方御家老中敷付迄被罷出候刻は、組頭等敷付ゟ居こほれ可申候、御取持衆御送リ無之候得は御家老中鏡板へ被出候ニ付、組頭等居こほせニ不及候事

（13）一、右御対顔御坐候節、法梁院様・御前様江之御口上有之候得は、御対顔之前ニ御両方様ゟ之御使相勤置可申候事

但、法梁院様・御前様江之御口上も、御前江申上、右之通取斗御使勤之可申候、小紙書抜、即刻御広式ヘ可上之候

（14）一、右御通之上御口上御次江申上候処、何卒御指障之義有之、御対顔無之候得は、御使勤候様可被仰出候間、御隙入ニ付而とか、又は御勝レ不被成ニ付而とか、其趣御取次之御近習頭江得と相尋承之、御使相勤可申候

右御使相勤候節ハ、御客ゟ御見通シ之所ヘ罷出、加賀守御答申上候ト申上、御客近クヘ相進ミ、御口上ニ随ひ御応答之趣、且御対顔不被成訳合取繕可申上候、此時法梁院様等ゟ之御使も一集ニ相勤可申候

（15）当公様御部屋之内之振如此、後例之為記、当時不用之条故朱書ニシテ別也

御嫡子様被成御坐候時ハ、御一門様方ヘハ必御対顔可在之候間、御口上小紙早速御附頭中迄添紙面を以指遣候得ハ、御対顔有無之儀返書ニ申来候、御対顔有〔之脱カ〕候得は都而御前御同事ニ候、御対顔無之候得ハ御使相勤可申候、若右返書未来内、御退出之節ハ取斗、御使相勤可申候、其時ハ御応答申述、追付罷出可懸御目候得共、暫遅ハリ可申抔と申様成御答ニ取斗可申上候事

（16）一、右御対顔無之、御使相勤候得は、直ニ御退出可被成候間、御先立仕御送リ可申候事

（17）一、右御出之刻、御前御他出中ニ候は御口上承請候節、他出仕候間帰宅ニ可相達旨申上、御前様・法梁院様江之御口上有之候は、奥方等江之御口上は可相達旨申上退キ、追付罷出御使相勤可申候、若又御他出中ニ而も後刻可申上旨之被仰述ニ候ハヽ、其時ハ御他出之儀不及申上候

取次方雑記

弐　御客取次方

御三家様

（1）右御出之節、組頭・物頭・御番頭之内、御白洲左右江三人（内ゟ右ニ組頭、左江跡ニ人出ル）罷出、御下乗ヲ見懸、其所江組頭相進ミ、御口上可承之、右三役不足候得は御小将加リ罷出可申候

紀州様ニは御門下ニ而御下乗御通リ被成候、水戸様ニハ御門内ニ而御下乗被仰置候、御通之刻は先達而申来候、尾張様ニは先達而御招請ニ而一度御出在之、右之節は物体御作法も違申候、御平生御出之儀是迄無之候事

（2）一、御太刀・馬代御持参之節、御馬代は御戻リ後、追付御歩体之者持参ニ付、取次之御小将御進物揚足軽召連罷出、敷附ニ而請取之候、御太刀は御供之御家老相渡候ニ付、取次之頭分御白洲ニ而請取可申候

但、御出之刻御見廻帳ニ相記可申旨相極ル（明和四年申談也）、且紀州様ニハ御太刀・馬代御持参之節は、御前御出向ニ而御通リ、御太刀等御対顔之刻披露有之候、依而御帳ニは御名迄記、御対顔ト頭書仕置申事ニ候

（3）一、御三家様方御通被成候得は、尤御小書院江御誘引之筈、其刻は先達而御作法書を以申談も有之候事

（4）一、水戸様年頭初而御出之節、前廉相知候得は、取次等ニ罷出候組頭・物頭等服紗小袖上下着用可仕候、尤御式台当番人は常服ニ候得共、頭分不足ニ加リ出候御小将は上下可致着用旨相極ル（寛政十三年正月廿八日申談也）

但、尤正月十五日以後ニ至御出之節之事也

喜連川殿

（5）右御出之節、組頭・物頭等之内両人敷附ゟ九尺程御白洲江罷出、取次可申候、右両役等之内不在合候得は、御小将加リ可申候、両役共不在合節は御小将両人罷出申筈ニ候事

但、右御会釈享保七年正月二日被仰出ニ而相極候事

（6）一、喜連川殿御口上ハ御供之御家老申述、畢而宜と迄御直ニ被仰聞候、御帳ニも尤其段相記申事

両本願寺殿

（7）右御出之刻、敷付端ニ而組頭・取次一方へ頭分出ル、組頭不在合節は頭分二人、是も不足候得は御小将加リ、頭分不在合時は御小将弐人罷出可申候

但、右は享保八年四月十五日御会釈方極ル、東本願寺殿ハ御出之義有之、其刻御駕籠敷付横付ニ成候由、西本願寺殿ニは未御出之義無之候得共、右東本願寺殿同様之旨、享保十一年二月十日相極候事

（8）一、御持参之御進物、先達而参リ候得は、取次御小将中取次預リ置申旨及挨拶、御使者相返申筈之事

仏光寺御門跡

（9）右御出之節、敷附端ニ而頭分二人罷出取次、御通候得は御大書院江御誘引之節、頭分不足ニ候得ハ御小将加リ、頭分不在合候得ハ御小将両人罷出取次申筈之事

但、右御会釈延享二年二月七日相極候事

高辻殿　四辻殿

（10）右御出之節、御小将両人敷付端江罷出取次、御通候得は御小書院江御誘引仕候筈之事

但、右御会釈方宝暦十一年八月三日相極候事

方之袖ゟ罷出候、草履直ハ御横目中ゟ兼而申渡置、表御式台脇喰違ヒ小遣小者相向罷在候間、呼立草履為直可申候、雨天之節は手傘も右小遣指向有之候間、相用ヒ可申候、御前御式台へ御出カ、上使御門外へ御越カ、両御末家様敷付へ御出等之所ニ而蹲ヒ可申候、雨天ニ而傘用ヒ居候は、此時小遣へ相渡、腰懸簾之内カ喰違之内へ為退可申候、御在府は右草履直之者御小人頭罷出在之致指引筈ニ候

(138) 一、御白洲出所は内ゟ右之方ニ而、御玄関ト御門ト之半ハ程ニ、御玄関●ニ対シ申位之並ミニ罷出候、御往来共御玄関之方ヲ頭ニシテ列シ可申候、上使御通リ之時分、急度平伏可仕候、御書院へ御通リ之間は御玄関へ上リ有之、舟ノ間ニ詰申人々聞番中等後御菓子出申ヲ兼合ニ御玄関江廻リ被申候間、夫ヲ目当ニ御退出前如最前御白洲江罷出可申候、外替事無之、尤脇刺迄帯之候事

(139) 一、両御末家様御出向之節御先立も物頭勤方ニ候得共、物頭人少ニ候得は難相勤候ニ付、御番頭中江御先立之儀申談候而、当日御作法之勤方御白洲詰ヲ相勤申候事

(140) 一、御家老衆ハ脇指迄被帯、御門外内ゟ右江被出候、聞番ハ帯刀ニ而御門外内ゟ左江出、内壱人ハ上使御下乗ゟ御前御出向之所迄上使之御先立仕候、上使之品ニゟ敷付ゟ内へ御前御出向ニ候得ハ、敷付先迄聞番御先立仕候事

(141) 一、大御門請取之物頭ハ鑓建ニ飾鑓二本（印付テ）与力鑓共（御在府三人、御留守弐人）為飾之、頭は帯刀ニ而、幕番所前へ罷出、御往来蹲踞仕候、与力ハ脇指迄ニ而、番所雨落内へ下坐仕候、割場奉行帯刀ニ而、裏御式台之方喰違之辺ニ罷出有之候

(142) 一、御前ニハ御老中上使ニハ御門蹴込外迄御出向送、尤御脇指迄也、若年寄衆御白洲、御奏者番敷付弐枚目、其以下ハ都而鏡板中へ御出向送也、何も内ゟ御右之方へ御出被為成候、両御末家様敷付内ゟ右之方、御先手衆等ハ同所左之方へ御出向候事

(143) 一、階上まいら戸はづれ、御勝手之方へ御刀取御大小将罷出、階上ニ御小将頭・御用人御番頭・御横目・御大小将等列居仕候、御帳ハ仕廻、与力ハ罷出列居之末ニ罷在候事

(144) 一、右之外都而御作法書之通ニ而替事無之候事

(145) 一、御一門様方等押立御出カ、又ハ御見廻懸之趣ニ而も前方ゟ被仰込有之御出之節ハ、御往来共物頭等御白洲江罷出申義も有之候、尤其時々御客方等ゟ申談有之候事

(146) 上使之儀ニ付御客方溜張出之写如左

上使之節案内所々

御用人・物頭中（但、御附人御門往来之儀大組頭へ可申達事）・御表小将御番頭・御大小将御番頭・御使番・御横目・御台所（但、御台所奉行不詰合節ハ会所奉行へ申達）・割場（但御附人之儀）・御作事所・三十人頭・坊主小頭・御茶堂方

(147) 一、御附人左之通

大手弐人・昌平橋弐人・本郷三丁目弐人・付廻弐人

御拝領物有之節　急切之ため

本郷三丁目弐人　詰人弐人

(148) 一、大奥ゟ御使之節

平川口弐人・水道橋弐人・本郷三丁目弐人・付廻弐人

御拝受物有之節、御付人上使之節同事

但、大手ゟ御下リ之節之ため大手江も弐人付置可申事

以上

寛政九年三月　御台様ゟ御使御坐候節御作法

(122) 一、御附人平川口・水道橋・本郷三丁目弐人宛付置、外付廻之者弐人差遣可申候

(123) 一、御使御出之儀相知次第、一統布上下着用仕、頭分并御給事人之分熨斗目着用可仕候事

(124) 一、御拝受物付人本郷三丁目弐人付置可申候

(125) 一、御拝受物来候は、御玄関江聞番出向指引仕、敷付江御徒罷出請取、御大書院取付之御杉戸際迄持参仕、夫ゟ御大小将請取御大書院上之方へ組頭并御大小将御番頭指引仕、御上段下ニ飾之可申候

(126) 一、御使御出之節、御門外へ御家老并聞番罷出、組頭・物頭御白洲江罷出、御下乗ゟ敷付先迄聞番御先立可仕候

(127) 一、御前御玄関鑑板中程へ御出向、筑前守様ニハ御同所端之方少シ御後ロ之方へ御引下リ御出向、飛騨守様・前田信濃守殿等敷付右之方へ御出向、左之方へ御先手衆等御出可被成候

(128) 一、御前御誘引ニ而御使御大書院上之間江御着坐、御刀同二ノ間御床之内上之間へ御表小将直之可申候

但、御玄関階上ニ御大小将扣罷在候而、御跡ゟ罷越、御刀御渡被成候ハ受取、御表小将へ相渡可申候

(129) 一、筑前守様ニは御大書院溜ニ御扣可被遊候

(130) 一、御使之方御口上御申述之上、御拝受物際へ被為寄、御頂戴相済、二之間御床際御襖明置、此所ゟ御表小将罷出、御拝受物御勝手江引之可申候、御前御挨拶被遊、御勝手へ被為入、御熨斗（木地三方）出之、引之、御たはこ盆・御薄茶出之可申候

(131) 一、御前重而御出御挨拶之上、御料理（二汁六菜、塗木具）・御菓子両様之内御取持衆之内御相伴可被成候、御料理ニ候は、向詰御前御持参可被遊候、御酒之上御肴御取持衆之内御引可被成候、御相伴へハ御給事人引之可申候、御菓子出申儀ニ御坐候は、御酒之上御肴御前御持参可被遊候、御相伴へハ御給事引之可申候

(132) 一、御吸物出、御土器（木地三方）・御肴（同）出之、御前御出御挨拶之上、御土器御使之方御初、此時御肴被遣、御前へ御土器被上、御肴も被上、御返盃、此時替之御肴出之、御肴も被進、御前へ被上、御肴も被上、御加御納可被遊候、御前御勝手江被為入、御茶請・御濃茶・後御菓子迄段々引替相済、御取持衆御挨拶有之、御前御出御請被仰述、御使之方御退出、御両殿様最前之所迄御送リ可被遊候、飛騨守様・信濃守殿等初御取持衆最前之通御出被成、御家老以下前条之通罷出可申候

(133) 一、御使之方御退出後、於御広間溜御歩目付、於御使者之間御小人目付、一汁三菜之御料理出之、才領持参人江は内腰懸ニ而御菓子・御酒等可被下候

(134) 右、御先例を以被奉伺候、以上

(135) 右、御在府一ヶ年中之上使等之御作法也、御留守年は、指定リ申ハ歳暮御祝儀之御使迄ニ而、両御末家様等之内御名代御勤被成候、御作法外ニ相替義無之ニ付不記之候、且御一門様方等押立御振廻等之儀も御作法為指義も無之ニ付、且又不記之候、猶端々之心得等左ニ一両条挙之

(136) 一、上使之御沙汰有之節は、前日又は当朝ニ而も御横目中ゟ夫々申談有之候ニ付、御殿揃刻限ニ常服ニ而一統可罷出候、弥上使有之旨御当番之御目付衆ゟ御小人目付を以申来候上ニ而、一統上下着用可仕候事

但、上使之品ニ寄、熨斗目又は服紗小袖之差ニ有之候事

(137) 一、上使之節、物頭は御白洲詰相勤申御作法ニ候、尤御横目中ゟ申談有之候、物頭人少ニ候得は、御大小将ゟ相加リ候（御近習頭は物頭等ゟも加リ罷出候、此方ゟ不及食着、不足候得は、夫々御横目ゟ御達申、向々被仰渡候）、昌平橋御附人来候ハヽ、御白洲へ罷出候人々申談可罷出候、表御式台敷付内ゟ左之

御前御請被仰述、少シ御退キ之所江筑前守様御出御請被仰述、上使御退出

(109) 一、上使御退出後、御拝領物ニ指添罷越候御徒目付御広間溜、御小人目付御使者之間ニ而、一汁三菜御料理出之、才領持参人江は大御門続内腰懸ニ而御菓子・御吸物・御酒被下之候

(110) 右、前々上使御奏者番衆御出之節之御例を以奉伺候、以上

寛政九年三月　御老中方を以、御暇之上使暨大納言様ゟ上使御兼御出之節御作法

(111) 一、上使御坐候旨、御当番御目付衆ゟ御小人目付を以御案内申来次第、御附人大手・昌平橋・本郷三丁目弐人宛附置、外付廻之者弐人指遣可申候

(112) 一、御拝領物付人本郷三丁目ニ弐人付置可申候

(113) 一、御小人目付来次第、一統布上下着用仕、頭分并御給事人之分熨斗目着用可仕候

(114) 一、御拝領物上使御勤之御老中方ゟ御使者指添来候は、御歩敷付江出向請取、御大書院取付之御杉戸際迄持参仕、夫ゟ御大小将請取、組頭并御大小将御番頭致指引、御上段下北之御椽類之方江段々飾之可申候

(115) 一、上使御出之節、御家老御門外、頭分御白洲江罷出、聞番御門外へ罷出有之、上使御下乗ゟ御前御先立之所迄暫聞番御先立可仕候、御両殿様御門外江御出向、筑前守様ニは御前之後之方ニ御扣御出向可被遊候、飛騨守様・前田信濃守殿等敷付内ゟ右之方江御出向、左之方江御取持衆・御先手衆等御出、御前御誘引ニ而、上使御大書院江御着坐、筑前守様ニハ上使之御跡ゟ御附被為入、御大書院溜ニ御扣被遊候、御刀御大書院御椽類中仕切御杉戸之内御刀懸出置、御表小将直之可申候

但、御玄関階上ニ御大小将扣罷在、御跡ゟ罷越、御刀御渡被成候所ニ而請取、御大書院取付之御杉戸際迄持参、御表小将江相渡可申候

(116) 一、上意被仰述、御拝聴、指続大納言様ゟ之上意被仰述、御拝聴、御拝領物際江被為寄御頂戴、次ニ大納言様ゟ之御拝領物御頂戴被遊、相済、上使御坐付被改候上、御挨拶被仰入、御勝手江被為入、御熨斗（木地三方）出之、引之、御前重而御出（此時御通筋二之間御床際御襖戸之上之方御表小将明之）、御挨拶被遊、御小書院へ御誘引、上使御椽類之方へ御着坐、御刀同所上之間御椽側之中程御刀懸出置、御表小将直之、御たはこ盆・御薄茶台ニ而出之可申候

(117) 一、上使御小書院へ御通之上、筑前守様ニは同所御勝手之方ニ御扣可被遊候

(118) 一、御前御出、御料理之御挨拶被遊、直ニ御勝手之方江御着坐、御たはこ盆引、御料理（二汁六菜、塗木具）出之、御前御相伴被遊、向詰御前御持参、御酒之上御肴飛騨守様・信濃守殿之内御持参ニ而可有御坐候、左候得は右御重御給事人罷出候所ニ而御渡被成、御前へは御給事人上之可申候

但、飛騨守様等若御指支ニ而、御出無御坐候は、御給事人引之可申候

(119) 一、御吸物出、御土器（木地三方）・御肴（同）出之、御挨拶在之、上使御初其時御肴被進、一献御加へ有而、御土器御前江被進、御肴も被進、御加有而、御返盃（此時替之御肴御表小将持出）御前御進ミ之所ニ上之、御肴被進、御加へ有而、重而御土器御前江被進、御肴も被進、御加御納可被遊候、御銚子等引之、御湯出、先御前江上之候而、上使江次相済、引之、御茶請と御本膳と上使迄引替、御前之御膳引之、御勝手江被為入、御濃茶筑前守様御持参被遊、御茶碗御表小将台持出、引之、御後菓子ト御茶受ト引替、御薄茶台ニ而出之、引之、後御菓子引之、御たはこ盆出之、御取持衆御指図次第引之、御前御出御請被仰述、上使御退出、御前御誘引ニ而御門外迄御送リ、筑前守様ニハ先達而御門外御出可被遊候、飛騨守様・信濃守殿等初御取持衆最前之通、敷付へ御出、御家老以下前条之通罷出可申候

(120) 一、大納言様ゟ上使御別段御坐候而も、御作法御同事ニ可有御坐候

(121) 右、前々之振を以奉伺候、以上

（93）此所ニ付札

筑前守様江御拝領物御坐候は、筑前守様江之御拝領物、御前御一集ニ受取、夫々飾様も御前御同様ニ而、御前御拝領物之次ニ飾之可申候

（94）一、上使御出之節、御門外へ御家老并聞番罷出、頭分御白洲江罷出可申候、上使御下乗ゟ御玄関敷付先迄聞番御先立可仕候、御前敷付二枚目内ゟ御右之方江御出向、筑前守様同三枚目御前ゟ三尺斗御引下リ御出向、飛騨守様・前田信濃守殿等同御後ロ之方江御出、御先手衆等同左之方江御出可被成候

（95）一、御前御誘引ニ而、上使御大書院上之間へ御着坐、御刀同所御椽側中仕切御杉戸之内一畳目中程ニ一腰懸御刀懸出置、御表小将直之可申候

但、御玄関階上ニ御大小将扣罷在、御跡ゟ罷越、御刀御渡被成次第請取、御表小将江相渡可申候

（96）一、筑前守様ニは上使之御跡ゟ被為入、御大書院溜ニ御扣可被遊候

（97）一、上意御拝聴、御拝領物際へ被為寄、御頂戴相済、御本坐ニ御直リ、上使江御挨拶被仰入、御前御勝手江被為入、御熨斗（木地三方）出之、引之、御前重而御出御挨拶之上、御大書院御床際御襖御表小将開之、御小書院江御誘引、御着坐、御刀同所御椽類御杉戸之内一腰懸御刀懸出置、御表小将直之、御たはこ盆・御茶出之、此間ニ御拝領物御勝手江引之可申候

此条ニ付札

御両殿様上意御拝聴之御次第

（98）一、上意御拝聴、御拝領物際江被為寄、御頂戴相済、御退キ、追付筑前守様御出、上意御拝聴、御拝領物際江被為寄、御頂戴相済、御本坐江御直リ之上、御両殿様御挨拶被仰入、畢而御勝手江被為入、畢而御勝手江被為入、御のし三方出之、引之

（99）一、御両殿様重而御出御挨拶被遊、御前御小書院江御誘引可被遊候

（100）一、御前重而御出御挨拶之上、御料理・御菓子之内出之、御料理ニ候は（二汁六菜、塗木具）、向詰御前御持参被遊、御相伴江は御給事人引之可申候、御酒之上御肴御取持衆之内御引可被成候、御相伴江は御給事人引之可申候

（101）此条付札

御料理出申義ニ而御坐候は、御酒之上御肴ハ筑前守様御引可被遊候哉

（102）一、御料理御断、御菓子出申義ニ候は、御酒之上御肴御前御持参、御相伴江は御給事人引之、二献目御銚子相済引之可申候

（103）一、御吸物出之、御土器（木地三方）・御肴（同）出之、御取持衆御会釈次第、御前御出御挨拶之上、御盃事上使御始之時御肴被遣、御加有之、御土器御前江被遣、御肴も被遣、御返盃（此時替之御肴出之）、御肴も被遣、御加有之、御前へ被進、御肴も被進、御納被遊、御前御勝手江被為入、御銚子等引之、御濃茶・御後菓子等段々出之可申候

此条付札

御両殿様御盃事之次第

（104）一、御吸物出之、御土器（木地三方）・御肴（同）出之、御取持衆御会釈次第、御前御出御挨拶之上、御盃事上使御初、其時御肴被遣、御加有而、御土器御前へ被進、御肴も被進、御加、御返盃、御前御本坐へ被為入（此時替之御肴御表小将出之）、追付筑前守様御出御挨拶之上、御肴被遣、一献御加有而、御土器筑前守様へ被進、御肴も被遣、御加、御返盃、筑前守様御勝手へ被為入（此時替之御肴御表小将出之）、重而御前御出御挨拶之上、御肴被進、御加有而、其御土器御前へ被進、御肴も被進、御加御納可被遊候

（105）一、前田信濃守殿并御先手衆之内御相伴可被成候

（106）一、御小書院御飾之儀、近年之通被仰付ニ而可有御坐候

（107）一、段々相済、御取持衆御会釈之上、御前御出御請被仰述、追付上使御退出、御前御先立ニ而最前之通敷付迄御送リ、筑前守様ニは先達而最前之所迄御出、飛騨守様・前田信濃守殿等御取持衆最前之所迄御出、御家老以下前条之通罷出可申候

（108）此条付札

出被遊、飛騨守様・前田信濃守殿等初御取持衆最前之所迄御出、御家老以下前条之通罷出可申候

(75) 一、上使御退出以後、御拝領物ニ指添罷越候御歩目付御広間溜ニ而、御小人目付御使者之間ニ而、一汁三菜御料理出之、才領持参人江は大御門続内腰懸ニ而御菓子・御吸物可被下之候

(76) 右、前々上使御奏者番衆御出之節之御例引合奉伺候、以上

寛政九年　御鷹之鶴御拝領上使之節御作法

(77) 一、上使御案内之御小人目付来次第、御附人大手・昌平橋・本郷三丁目弐人充附置、外付廻之者二人申付可指遣候

但、御小人目付来次第、一統布上下着用可仕候

(78) 一、御拝領之鶴付人本郷三丁目ニ付置可申候

(79) 一、御拝領之鶴来リ候は、聞番先立仕、御玄関敷付ニ而御使番請取之、御大書院上之間前々之通持出扣可罷在候

(80) 一、上使御出之節、御門外へ御家老并聞番罷出、組頭・物頭御白洲江罷出可申候

(81) 一、上使御下乗ゟ御玄関敷付先迄聞番御先立可仕、御前御玄関鑑板内ゟ御右之方江御出向、又左衛門様ニは御同所端之方少シ御後ロへ御引下リ御出向可被遊候、敷付右之方江飛騨守様・前田信濃守殿御出、同左之方へ御先手衆等御出可被成候、御前御誘引ニ而、上使御大書院上之間江御着坐、御刀同二之間御床之内上之方ニ御表小将直之可申候

但、御玄関階上ニ御大小将扣罷在、御跡ゟ罷越、御刀御渡被成次第受取、御表小将江相渡可申候

(82) 一、又左衛門様ニは御大書院溜ニ御扣被遊候ニ而可有御坐候

(83) 一、上意御拝聴、御拝領之鶴扣罷在候所へ被為寄、御拝〔頂〕戴相済、上使御坐付被改、御挨拶之内御拝領之鶴御勝手引之、畢而御熨斗（木地三方）出之、引之、御前御勝手江御退之時、御火鉢・御莨盆・御茶出之可申候

(84) 一、御前重而御出御挨拶之上、御先手衆御相伴ニ而御菓子指出、御酒之上御肴御前御持参可被遊候、御相伴江は御給事人引之可申候

(85) 一、御吸物出、御土器（木地三方）・御肴（同）出之、御前御出被遊御挨拶之上、御盃事上使御始、御前江被上、御肴も被上、御加被遊、上使江被遣、此時替之御肴持出、御肴も被遣、御加有之、重而御前江被上、御肴も被上、御納被遊、御勝手江御入可被遊候、御銚子御勝手江入、御土器三方・御肴三方引之、御濃茶等段々引替ニ可仕候

(86) 一、御取持衆御挨拶之上、御前御出、御請被仰述、追付上使御退出、御両殿様最前之所迄御送リ被遊、飛騨守様初御先手衆等最前之通御出、其外御家老以下前条之通罷出可申候

(87) 一、上使御退出後、御広間溜ニ而御歩目付、御使者之間ニ而御小人目付、御料理出之、且又御拝領物持参人江は大御門続之内腰懸ニ而御菓子・御酒出之可申候

(88) 右、前々之振を以奉伺候、以上

寛政九年三月九日　大納言様御元服為御祝儀上使御奏者番水野壱岐守殿御出之節御作法

(89) 一、上使有之旨、御当番御目付衆ゟ申来次第、御附人大手・昌平橋・本郷三丁目弐人宛附置、外付廻之者弐人充指出可申候

(90) 一、御拝領物御坐候は、附人本郷三丁目ニ付置可申候

(91) 一、御小人目付来次第、一統のしめ布上下着用可仕候

(92) 一、御拝領物御玄関ニ飾付候上、聞番会釈仕、御歩請取、御大書院取付之御廊下迄持参、夫ゟ御大小将請取組頭并御番頭指引仕、御大書院御上段下前々之所ニ飾之可申候

納可被遊候

但、御前御始之時、御使之方御肴御はさみ被成候ハヽ、替之御肴出可申候

(58) 一、御前御勝手江被為入、御銚子入、御茶請・御濃茶・後御菓子等迄段々引替相済、御取持衆御挨拶有之、御前御出御請可被仰述候、御両殿様最前之所迄御送リ被遊、出雲守様初御取持衆最前之通リ御出被成、其外御家老以下前条之通リ罷出可申候

(59) 一、御使之方御退出後、御拝受物指添罷越候御歩目付格之者御広間溜、御小人目付格之者御使者之間ニ而、一汁三菜之御料理出之、其外才領持参人候ハ、大御門続腰懸ニ而御菓子・御酒等被下候事、以上

寛政九年正月廿二日　若君様御袴着為御祝儀上使御奏者番衆御出之節御作法

(60) 一、上使有之旨、御当番御目付衆ゟ御案内申来次第、御附人大手・昌平橋・本郷三丁目弐人充付置、外付廻者弐人指遣可申候

(61) 一、御拝領物御坐候は、付人本郷三丁目付置可申候

(62) 一、御小人目付来次第、一統熨斗目布上下着用可仕候

(63) 一、御拝領物御玄関ニ飾付候上、聞番会釈仕、御歩請取御大書院取付之御廊下迄持忝、夫ゟ御大小将請取、組頭并御番頭指引仕、御大書院御上段下前々之所ニ飾之可申候

(64) 一、上使御出之節、御門外へ御家老衆・聞番罷出、頭分御白洲江罷出可申候、上使御下乗ゟ御玄関敷付先迄聞番御先立仕、御前敷付二枚目内ゟ御右之方江御出向、又左衛門様同三枚目江御前ゟ三尺斗御引下リ御出向、飛騨守様・前田信濃守殿等同御後ロ之方へ御出、御先手衆等同左之方江御出可被成候

(65) 一、御前御誘引ニ而、上使御大書院上之間江御着坐、御刀同所御椽類中仕切御杉戸之内一畳目中程ニ一腰懸刀懸出置、御表小将直之可申候

但、御玄関階上ニ御大小将扣罷在、御跡ゟ罷越、御刀御渡被成次第請取、御表小将江相渡可申候

(66) 一、又左衛門様ニは上使之御跡ニ御付被為入、御大書院溜ニ御扣可被遊候

(67) 一、上意御拝聴、御拝領物際江被為寄、御頂戴相済、御本坐江御直リ、上使江御挨拶被仰入、御前御勝手江被為入、御熨斗（木地三方）出之、引之、御前重而御出御挨拶之上、御大書院二之間御床際御襖御表小将開之、御小書院江御誘引、御着坐、御刀同所御椽類御杉戸之内一腰懸御刀懸出置、御表小将直之、御火鉢・御たはこ盆・御茶出之、此間ニ御拝領物御勝手江引之可申候

(68) 一、御前重而御出御挨拶之上、御料理・御菓子之内出之、御料理ニ候は（二汁六菜、塗木具）、向詰御前御持参被遊、御相伴江は御給事人引之、御酒之上御肴御取持衆之内御引可被成候、御相伴江は御給事人引之可申候

(69) 一、御料理御断、御菓子出申儀ニ候は、御酒之上御肴御前御持参被遊、御相伴へは御給事人引之、二献目御銚子相済引之可申候

(70) 一、御吸物出之、御土器（木地三方）・御肴（同）出之、御取持衆御会釈次第、御前御出御挨拶之上、御盃事上使御初、其時御肴被遣、御加有而、御土器御前江被進、御肴も被進、御返盃（此時替之御肴出之）、御肴も被遣、御加有而、御前江被進、御肴も被進、御納被遊、御前御勝手江被為入、御銚子等段々引之可申候

(71) 一、前田信濃守殿并御先手衆之内御相伴可被成候

(72) 一、御小書院御飾之義、近年之通被仰付ニ而可有御坐候

(73) 付札

御老中方上使之外先ツハ御飾無御坐候得共、公辺御慶事ニ而、上使御奏者番衆御出之節、近年御飾被仰付候間、今般も御飾可有御坐候哉

(74) 一、段々相済、御取持衆御会釈之上、御前御出御請被仰述、追付上使御退出、御前御先立ニ而、最前之通敷付迄御送リ、又左衛門様ニは先達而最前之所迄御

（43）一、御前重而御出御挨拶之上、御料理（二汁六菜、塗木具）・御菓子両様之内御取持衆御指図次第出之、御取持衆御相伴可被成候、御料理ニ候は、御引菜御前御持参可被遊候、御酒之上御肴御取持衆之内御引可被成候、御相伴へハ御給事人引之可申候、御菓子出申儀ニ候ハヽ、御酒之上御肴御前御持参可被遊候、御相伴へハ御給事人引之可申候

（44）一、御吸物・御土器（木地三方）・御肴（同）出之、御前御出御挨拶之上、御土器御使之方御初（御嘉儀御先手衆）此時御肴被遣、一献御加有而御土器御前へ被上、御肴も被上、御加、御返盃、御前御本坐へ被為入（此時替之御肴御表小将出之）、追付亀万千様御出御挨拶之上、御肴被遣、一献御加有而御土器亀万千様江被上、御肴も被上、一献御加御返盃亀万千様御勝手江被為入（此時替之御肴御表小将持出）、重而御前御出御挨拶之上、御肴被遣、御加有而其御土器御前江被上、御肴も被上、御加御納可被遊候、御前御勝手江被為入、御銚子入、御茶請・御濃茶・後御菓子迄段々引替相済、御取持衆御挨拶有之、御前御出御請被仰述、少シ御退キ之所江亀万千様御出御請被仰述、御使之方御退出、御前最前之所迄御送リ、亀万千様ニは先達而最前之所迄御出可被遊候、出雲守様等御取持衆最前之所迄御出被成、御家老以下前条之通罷出可申候

（45）此所ニ付札

御前迄之御盃事ニ御坐候得は、別紙御奏者番衆上使御同様ニ可有御坐候

（46）一、御使之方御退出以後、於御広間溜御徒目付、於御使者之間御小人目付一汁三菜之御料理出之、才領持参人江は内腰懸ニ而御菓子・御酒等可被下之候

（47）右御先例之趣を以引合奉伺候、以上

寛政八年十二月廿一日　従御台様歳暮為御祝儀御使御坐候節御作法

（48）一、御附人平川口・水道橋・本郷三丁目弐人充、外付廻之者両人差遣可申事

（49）一、御使御出之義相知次第、一統熨斗目布上下着用可仕候

（50）一、御拝領物御玄関ニ飾付候上、聞番会釈仕、御歩請取御大書院取付之御廊下迄持参仕、夫ゟ御大小将請取、御大書院上之間江組頭并御大小将御番頭指引仕、御上段之下ニ飾之可申候

（51）一、御使御出之節、御門外へ御家老并聞番罷出、組頭・物頭御白洲江罷出、御下乗ゟ敷付先迄聞番御先立可仕候

（52）一、御前御玄関鑑板江御出向、又左衛門様ニハ御同所端之方江少シ御後へ御引下リ御出向可被遊候、出雲守様・飛騨守様・前田信濃守殿敷付右之方へ御出、御先手衆ハ同左之方へ御出可被成候

（53）一、御前御誘引ニ而、御使御大書院上之間江御着坐、御刀同二之間御床之上御表小将直之可申候

但、御玄関階上ニ御大小将扣罷在、御後ゟ罷越、御渡被成候ハヽ請取、御表小将へ相渡可申候

（54）一、又左衛門様ニは御大書院溜ニ御扣被遊ニ而可有御坐候

（55）一、御使之方御口上御申述之上、御拝受物飾付有之所へ被為寄、御頂戴相済候時、二之間御床際御襖上之方明置、此所ゟ御拝受物御表小将御勝手へ引之、畢而御熨斗（木地三方）出之、引之、御前御勝手へ被為入、御火鉢・御茶・御たはこ盆出之可申候

（56）一、御前重而御出御挨拶之上、御料理（二汁六菜、塗木具）・御菓子両様之内御取持衆御指図次第出之可申候取持衆之内御相伴可被成候、御料理ニ候得ハ、向詰御持参可被遊候、御酒之上御肴御取持衆之内御引可被成候、御相伴ニは御給事人引之可申候、御菓子出候儀候は、御酒之上御肴御持参可被遊候、御相伴候ハ御給事人引之可申候

（57）一、御吸物等御土器（木地三方）・御肴（同）出之、御前御出御挨拶之上、御土器御前御始、御嘉義御先手衆御使之方へ被遣、御肴も被遣、御返盃御前ニ而御

（27）一、御前重而御出御挨拶之上、御料理・御菓子之内出之、御料理ニ候は（二汁六菜、塗木具）、向詰出、御引菜御前御持参被遊、御相伴江は右御重御給事人請取引之可申候

（28）一、御料理御断御菓子出申儀ニ候は、御酒之上御肴御前御持参被遊、御相伴江ハ御給事人引之可申候

（29）一、御吸物出之、御土器（木地三方）・御肴（同）、御取持衆御会釈次第、御前御出御挨拶之上、御盃事上使御初、其時御肴被遣、御加へ有而、御土器御前江被進、御肴も被進、御加へ、御返盃、御前御本坐江被為入（此時替之御肴御表小将出之）、追付亀万千様御出御挨拶之上、御肴被進、一献御加へ有而、御土器亀万千様江被進、御肴被進、御加、御返盃、亀万千様御勝手江被為入（此時替之御肴御表小将持出）、重而御前御出御挨拶之上、御肴被遣、御加へ有而其御土器御前へ被進、御肴も被進、御加へ有而御納可被遊候、御前御勝手江被為入、御銚子等引之、御濃茶・御後菓子等段々出之可申候

（30）一、前田信濃守殿御出被成候は、御相伴可被成候

（31）一、段々相済、御取持衆御会釈之上、御前御出御請被仰述、少シ御退之所へ、亀万千様御出御請被仰述、上使御退出、御前御先立ニ而、最前之通敷付迄御送リ、亀万千様ニは先達而最前之所迄御出可被遊候、出雲守様等御取持衆最前之所迄御出被成、御家老以下前条之通罷出可申候

（32）一、上使御退出後、御拝領物ニ指添罷越候御歩目付御広間溜、御小人目付御使者之間ニ而一汁三菜御料理出之、才領持参人江は大御門内腰懸ニ而御菓子・御吸物・御酒可被下候、以上

同月同日　従御台様御使御坐候節御作法

（33）一、御附人平川口・水道筋・本郷三丁目弐人宛付置、外付廻之者弐人指遣可申候

（34）一、御使御出之義相知次第、一統熨斗目布上下着用可仕候

（35）一、御拝受物付人本郷三丁目弐人付置可申候

（36）一、御拝受物御玄関ニ飾付候上、聞番会釈仕、御歩請取御大書院取付之御杉戸際迄持参仕、夫ゟ御大小将受取、御大書院上之間組頭并御大小将御番頭指引仕、御上段下ニ飾之可申候

亀万千様江之御拝受物、御前御拝受物と一集ニ請取、夫之飾様等御前御同様ニ而、御前御拝受物之次ニ飾之可申候

（37）一、御使御出之節、御門外へ御家老并聞番罷出、組頭・物頭御白洲江罷出、御下乗ゟ敷付先迄聞番御先立可仕　候

（38）一、御前御玄関鑑板中程江御出向、亀万千様ニは御同所端之方少シ御後へ御引下リ御出向、御使之御跡ゟ可被為入候、出雲守様・飛騨守様・前田信濃守殿等敷付右之方江御出可被成候

（39）一、御前御誘引ニ而、御使御大書院上之間ニ御着坐、亀万千様ニは御使之御跡ゟ可被為入、御前之御次ニ御着坐可被遊候、御刀同ニ之間御床之内上之方ニ御表小将直之可申候

但、御玄関階上ニ御大小将扣罷在、御跡ゟ罷越、御刀御渡被成次第受取、御表小将へ相渡可申候

（40）一、御使之方御口上御申述之上、御拝受物際江被為寄、御頂戴相済、御退之時、追付亀万千様御出、仰之趣御拝聴、御拝受物際へ被為寄、御頂戴相済、御退キ、此時ニ之間御床際御襖上之方明置、此処ゟ御拝受物御表小将御勝手江引之、御両殿様御挨拶被遊、御勝手江被為入、御熨斗（木地三方）出之、引之、御たはこ盆・御火鉢・御薄茶出之可申候

（41）此所ニ付札

亀万千様御出ニ無御坐、御同人様江之仰之趣御坐候は、御前御一集ニ御拝聴可有御坐候哉

（42）一、御前江之仰之趣御拝聴、指続亀万千様江之御口上御申述被成候は、御一集ニ御拝聴、御拝領物御順々御頂戴可有御坐候哉

但、御玄関階上ニ御大小将扣罷在、御跡ゟ罷越、御刀御渡被成次第受取、
御表小将江相渡可申事

(13) 一、上意御拝聴、御拝領之雲雀扣罷在候所江被為寄、御頂戴相済、上使御坐付御改御挨拶、御拝領之御鳥御勝手江引之、御熨斗（木地三方）出之、引之、御前御勝手江御退キ之時、御たはこ盆・御茶出之可申候

(14) 一、御前重而御出御挨拶被遊、御先手衆御相伴ニ而御菓子・麺類之内指出、御酒之上御肴御前御持参可被遊候、御相伴江は御給事人引之可申事

(15) 一、御吸物出、御土器（木地三方）・御肴（同）出之、御前御出御挨拶之上、御盃事上使御初、其時御肴被進、一献御加有而御前江被上、御肴も被上、御加被遊、上使江被遣、此時替之御肴指出、御肴も被遣、御加有而重而御前江被上、御肴被進、御納可被遊候、御銚子御勝手江入、御土器三方・御肴三方引、御勝手江被為入、御濃茶迄段々引替可仕候事

(16) 一、御取持衆御挨拶之上、御前御出御請被仰述、御誘引ニ而最前之所迄御送リ被遊、出雲守様・飛騨守様等并御先手衆等最前之所迄御出、其外御家老以下前条之通罷出可申候

(17) 一、上使御退出以後、御広間溜ニ而御歩目付、御使者之間ニ而御小人目付御料理出之、且又御拝領物持参人江は大御門続内腰懸ニ而御菓子・御酒出之可申候、以上

寛政八年十一月廿三日　上使御奏者番衆御出之節御作法

(18) 一、上使有之旨、御当番御目付衆ゟ御案内申来次第、御付人大手・昌平橋・本郷三丁目弐人宛、外附廻之者弐人差遣可申候

(19) 一、御拝領物御坐候は、附人本郷三丁目付置申候

(20) 一、御小人目付来次第、一統熨斗目布上下着用可仕候、御拝領物御玄関ニ飾付之上、聞番会釈仕、御歩受取、御大書院取付之御廊下迄持参、夫ゟ御大小将請取、組頭并御番頭指引仕、御大書院御上段下、前々之所ニ飾之可申候
亀万千様江之御拝領物、御前御拝領物と一集ニ受取、夫々飾様等御前御同様ニ而、御前御拝領物之次ニ飾之可申候

(21) 一、上使御出之節、御門外江御家老并聞番罷出、頭分御白洲江罷出可申候、御下乗ゟ御玄関敷付先迄聞番御先立可仕候

(22) 一、御前敷付二枚目内ゟ御右之方江御出向、亀万千様ニは敷付三枚目、御前ゟ少御引下リ御出可被遊候、出雲守様・飛騨守様・前田信濃守殿等ニは御前之御後之方へ御出可被成候、同左之方へ御先手衆等御出可被成候

(23) 一、御前御誘引ニ而、上使御大書院上之間へ御着坐、亀万千様ニは上使之御跡ゟ被為入、御前之御次ニ御着坐可被遊候、上使御刀御大書院御椽類中仕切御杉戸之内一畳目中程ニ一腰懸御刀懸出置、御表小将直之可申候
但、御玄関階上ニ御大小将扣罷在、御跡ゟ罷越、御刀御渡被成次第受取、
御表小将江相渡可申候

(24) 一、上意御拝聴、御拝領物際江被為寄、御頂戴相済、御退、追付亀万千様御出、上意御拝聴、御拝領物際江被為寄、御頂戴相済、御本坐へ御直リ之上、御両殿様御挨拶被仰入、畢而御勝手江被為入、御熨斗（木地三方）出之、引之

(25) 一、御両殿様重而御出御挨拶被遊（此時御通筋二之間御床際御襖御表小将明之）、御小書院江御前御誘引被遊、亀万千様ニは上使之御跡ゟ被為入、上使御着坐、御刀同所御椽類御杉戸之内一腰懸御刀懸出置、御表小将直之、御たはこ盆・御火鉢・御茶出之、此間ニ御拝領物御勝手江引之可申候

(26) 一、上使御小書院江御着坐之上、亀万千様ニは同御勝手之方御扣被遊ニ而可有御坐候
但、御自分ニ懸リ候御奏者番上使之節ハ、御大書院ニ而御饗応之御先例も御坐候得共、御近例本文之通ニ御坐候間、此度も御小書院ニ而御饗応可有御坐候哉

壱　上使并重キ御客之一件

（1）一、上使并重キ御客御饗応方は、組頭相勤申候、万一組頭故障等之義有之候得は、物頭ゟ御客方相勤申義、御家老衆ゟ被仰渡相勤申候、右御饗応方は、都而御作法書を以相伺、其趣を以相勤申義ニ而、外相替申心得等も無之候事

但、右御作法書為考合、御在府一ヶ年分之御作法書、左ニ記之

寛政八年四月廿九日　御参勤之上使御作法

（2）一、上使御坐候旨、御当番御目付衆ゟ御小人目付を以、御案内有之次第、御附人大手・昌平橋・本郷三丁目弐人宛付置、外付廻シ之者弐人指遣可申候

（3）一、右御小人目付来次第、一統熨斗目布上下着用可仕候

（4）一、上使御出之節、御家老御門外江罷出、人持頭分御白洲江罷出、聞番御門外江罷出、上使御下乗ゟ御前御先立之所迄、暫聞番御先立可仕候、御前御門外江御出向可被遊候、出雲守様・飛騨守様・前田信濃守殿・前田大和守殿等御出被成候は、敷付内ゟ右之方江御出、御取持之御先手衆等同左之方江御出可被成候、御前御誘引ニ而、上使御大書院江御通御着坐、御刀同所御椽側中仕切御杉戸之内、御刀懸出置、御表小将直之、上意被仰述、相済、上使江御挨拶被仰入、御前御勝手江被為入、御熨斗（木地三方）出之、引之、御前重而御出（此時御道筋二之間御床際御襖御表小将明之）、御挨拶被遊、御小書院御誘引、上使御椽類之方御着坐、御刀同所上之間御椽側中程ニ御刀懸出置、御表小将直之、御たはこ盆・御茶台ニ而出之、御前御出、御料理之御挨拶被遊、直ニ御勝手之方ニ御着坐、御たはこ盆引之、御料理（二汁六菜、塗木具）出之、御前御相伴被遊、向詰御前御持参、御酒之上御肴出雲守様・飛騨守様・前田信濃守殿・前田大和守殿之内御持参ニ而可有御坐候、左候ハヽ、右御重御給事人罷出候所ニ而御渡被成、御前江は御給事人上之可申候

但、出雲守様等御指支ニ而御出無御坐候ハヽ、御給事人引之可申候

（5）一、御吸物出、御土器（木地三方）・御肴（同）出之、御挨拶有之、上使御始其時御肴被進、一献御加有而御土器御前江被進、御肴も被進、御返盃（此時替之御肴御表小将持出）御前御進ミ之所江上之、御肴被進、御加有而重而御土器御前江被進、御肴も被進、御加御納可被遊候、御銚子等引之、御湯出シ、先御前江上之候而、上使江次相済、引之、御茶請と御本膳上使迄引替、御前之御膳引之、御勝手江被為入、御濃茶御前御持参可被遊候、御茶碗御表小将台持出、引之、御後菓子と御茶請迄引替、御薄茶台ニ而出之、引之、後御菓子引之、御たはこ盆出之、御取持衆御指図次第引之、御前御出、御請被仰述、上使御退出、御前御誘引ニ而御門外江御送リ、出雲守様等初御取持衆最前之通敷付江御出、御家老・人持頭分前条之通罷出可申候、以上

寛政八年八月三日　上使御使番昌代求馬殿を以、御鷹之雲雀御拝領之節御作法

（6）一、上使御案内御小人目付参次第、御附人大手・昌平橋・本郷三丁目弐人充附置、外附廻シ之者申付可指遣事

（7）一、御拝領之雲雀附人本郷三丁目ニ附置可申候

但、御小人目付参次第、一統布上下着用可仕候

（8）一、御拝領之雲雀来候は、聞番先立仕、御玄関敷付ニ而御使番受取之、御大書院上之間ニ前々之通持出扣可罷在候

（9）一、上使御出之節、御門外江御家老并聞番罷出、組頭・物頭白洲江罷出可申候

（10）一、上使御下乗ゟ御玄関敷付先迄、聞番御先立可仕候

（11）一、御前御玄関鏡板内ゟ御右之方江御出、敷付右之方江出雲守様・飛騨守様・前田信濃守殿御出、同左之方江御先手衆御出可被成候

（12）一、御前御誘引ニ而、上使御大書院上之間江御着坐、御刀二之間御床之内上之方ニ御表小将直之可申候

地下室を思考する

－医学部教育研究棟地点と他地点との比較から－

大成　可乃

はじめに

いわゆる地下室と呼称される遺構は医学部教育研究棟地点（以下、医研地点）では19基検出されている。その多くは調査区南側に集中し、東西方向に近接または重複する形で検出され、出土遺物から17世紀代に比定される地下室が多い。それ以外の場所で検出される地下室は単体あるいは少し距離をおいて検出され、出土遺物から窺える年代観にはバラツキがあることが確認された。このような地下室の検出状況の違いは、これまでの研究から藩邸内の空間利用の違いが大きく影響していることが想定された（成瀬1994）。

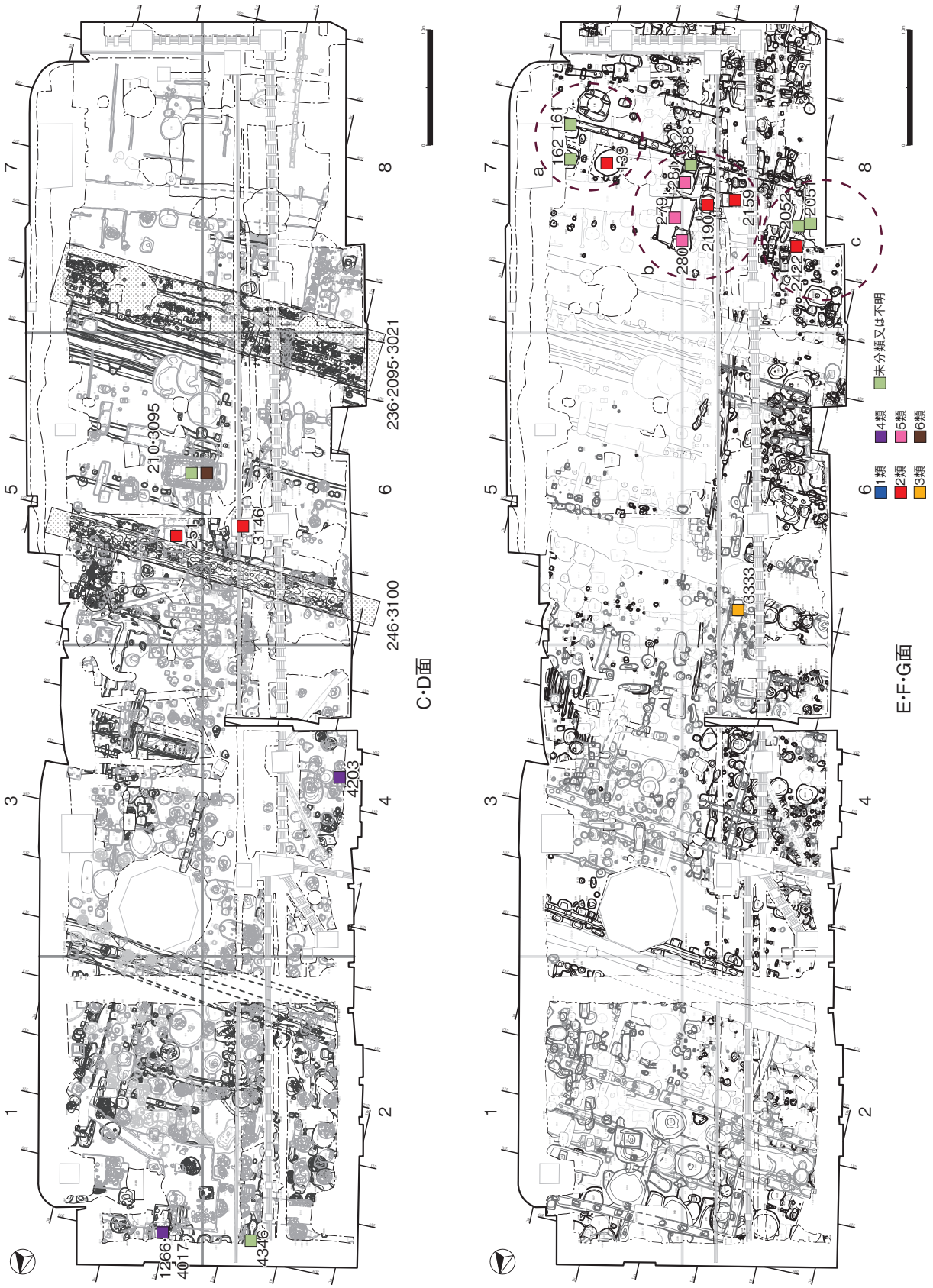
医研地点はこれまでの発掘調査、文献調査などから大きくは17世紀前半は加賀藩下屋敷と幕臣地、明暦3（1657）年の大火を契機に全域が加賀藩下屋敷、天和2（1682）年の火災後は加賀藩上屋敷が存在していた場所であることが確認されている。上屋敷となった後も、様々な行事や自然災害などを契機として土地造成や建物の新築、解体などを行い、空間利用を変化させている状況が明らかとなっている。特に本地点は加賀藩邸内の御殿の中でも表御殿を広く調査した唯一の地点であり、御殿空間における地下室の様相を確認し、これまで地下室の調査研究の中心であった詰人空間と比較検討ができる数少ない事例となると考える。そこで本稿ではまず19基の地下室の規模、形態、年代などを整理し、藩邸内の空間利用の変化によって地下室がどのように変化したのを明らかにするとともに、加賀藩の詰人あるいは御殿空間を調査した他地点と比較を行い、これまで余り注目する機会のなかった御殿空間における地下室のあり方について考えてみたい。

筆者は以前、SU210・3095新を「瓦積みの穴蔵」として注目[(1)]し、大阪で調査をした「瓦積みの穴蔵」と比較検討する中で、SU210・3095旧とした坑底四辺の壁際に、掘り方を有する柱穴が近接して複数並ぶ床下構造を取り上げ、断面観察や平面プランの検討から、「瓦積みの穴蔵」が作られる以前の遺構の可能性が高いと推測していた（大成1997）。本稿執筆に際し、改めて東京大学構内遺跡で検出された地下室を集成していく中で、同様の遺構が加賀藩邸を調査した医研地点東側に位置する薬学部新館地点（東京大学埋蔵文化財調査室1997）や薬学系総合研究棟地点（東京大学埋蔵文化財調査室2006）などで確認されたほか、加賀藩邸の支藩である大聖寺藩邸を調査した医学部附属病院入院棟A地点でも検出されていることが確認された（東京大学埋蔵文化財調査室2016）。そこでこのような形態の地下室の分布状況や、規模、年代などを比較し、このような地下室がどのような場所（空間）に、いつ頃から構築されたのかなどについても若干の検討を試みたい。

1. 医研地点で検出された地下室

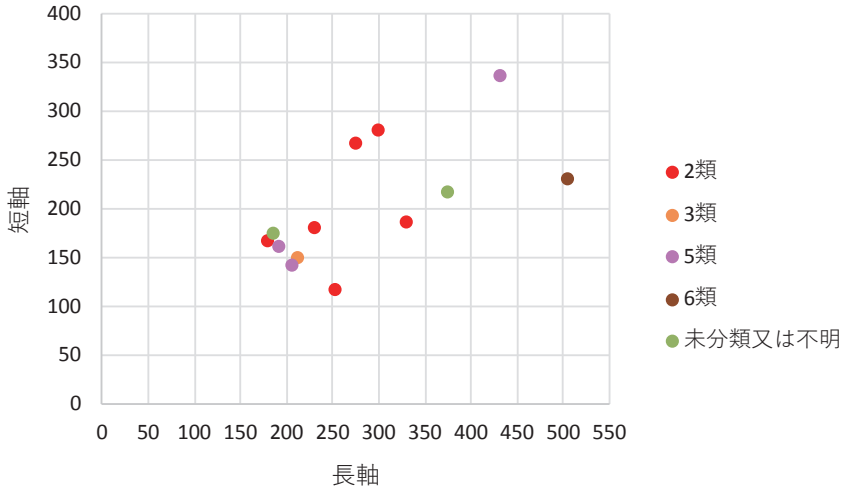
医研地点の調査では7つの遺構面（A～G面、G面はローム面）が確認され、遺構や遺物の様相からG～D面が加賀藩下屋敷と幕臣地の段階、C面が上屋敷の段階、A、B面が近代の前田侯爵邸や帝国大学時代の使用面に比定されている。従って1図C・D面（図上）は概ね加賀藩下屋敷から上屋敷の藩邸内の状況を、E・F・G面（図下）は概ね加賀藩下屋敷と幕臣地の状況を表しているということになる。なお概ねとしたのは、調査区南側7～8区は近代以降に大きく削平され江戸時代の盛土や生活面などが遺存しておらず、確認された江戸時代の遺構の多くがG面（ローム面）が確認面になっているものの、出土遺物の年代や遺構主軸などから、本来はG面（ローム面）より上位面にあった遺構も含んでいる事が確認されているからである。例えば後述する7～8区で検出された地下室群は全てG面（ローム面）検出の遺構であるが、遺構主軸や、17世紀後半に比定される遺物が出土している事から、本来は天和2（1682）年の火災を下限とするD面に帰属することが明らかとなっている。医研地点の遺構の帰属、主軸方位、各面の空間利用に考察を加えたものが本研究編研究1、2に述べられており、詳細はそちらを参照されたい。

一見して1図上下で5～6区を挟んで北と南で検出される遺構の状況が異なる事がわかる。1図上1～4区には根石を伴う大型の柱穴が重複し、1図下1～4区では東西、南北方向にのびる布堀基礎や小ピット、大型の植栽痕などが確認できる。また1図上7～8区には溝以外の遺構はあまり認められないが、1図下7～8区には少ピットと東西方向に連なる地下室が目に付く。また1図



1図　医研地点全体図（報告編Ⅱ-4図に加筆）

上５～６区には東西方向にのびる石組溝が２本（１図アミ部分）、その間に大型の地下室や長方形の土坑と小ピットが並列する複数条の溝が確認されるが、１図下の５区は小ピット以外の遺構は乏しく、６区には縦横にのびる細い溝と円形や不整形の土坑が比較的密集して確認される。以上のような遺構の検出状況から幕臣地と加賀藩下屋敷の段階、さらに上屋敷とで空間利用の状況が大きく変化したことが窺える。そこで19基の地下室について、７～８区で検出されたものとそれ以外でまとめ（１表、３図～10図･S=1/60）、分布状況の違いと地下室の形態、規模、遺物出土状況などに相関関係が認められるのか否かを検討し、本地点の空間利用の変化にともなって地下室の様相がいかに変わっていったのかを確認してみたい。



２図　地下室の規模（cm）

（1）19基の地下室の形態分類と規模について

１図には医研で検出された19基の地下室の形態分類を加えて示し、１表には主軸方位、分類、遺物年代、個々の地下室の特徴などを整理した。なお１図や１表で提示した地下室の分類は、1994年に成瀬晃司氏により関東ローム層を天井にもつ地下室に対して示された分類１～４類（成瀬1994）に、関東ローム層の天井をもたない地下室の分類（5、6類）を筆者が加えたものであり、撹乱などで全体的な形態が不明であったものは「-」、特異な形態は「未分類」とした。

具体的な分類内容は以下の通りである。

１類－入口部から直接室部へつながる地下室のうち、断面形は巾着形を呈し、床面の平面形は楕円形、もしくは隅丸方形を呈する。天井高が低く、室内で大人が活動する際、腰を屈めなければならない規模である。

２類－入口部から直接室部へつながる地下室のうち、断面形は凸形を呈し、床面の平面形は方形、長方形、台形を呈する。１類同様天井高が低く、室内で大人が活動する際、腰を屈めなければならない規模である。

３類－入口部から直接室部へつながる地下室のうち、天井高が高く、室内で大人が優に直立して活動ができる規模である。基本的に断面形は凸形を、床面の平面形は方形もしくは長方形を呈するが、中には複数の室部を有し、平面形がＬ形、Ｔ形を呈するものもある。また入口部直下の床面には梯子を固定したと考えられる柱穴を有したものや、壁面には棚状の掘り込みを有するものもある。

４類－入口部から作り付けの階段により室部へつながる地下室である。３類同様天井高が高く、室内で大人が優に直立して活動ができる規模である。開口部は階段部分のみで室部は全て天井に覆われている。床面の平面形は方形もしくは長方形を呈するが、３類同様バリエーションが多く、複数の室部や室内施設を有するものもある。

５類－ロームを掘削した天井をもたず、入口部から直接室部へつながる地下室。平面形は入口、坑底ともに方形または長方形を呈し、断面形は概ね方形を呈す。

６類－ロームを掘削した天井をもたず、入口部から直接室部へつながる地下室。５類と同形態であるが、坑底四辺に多数の柱穴を有す地下室。なお本分類の地下室で確認される柱穴は、柱痕と掘り方が明瞭に確認できるものであり、中には柱穴坑底に根石をもつものも確認される。

次に19基の地下室の坑底規模を確認してみた。計測に際しては入口部または開口部の規模は残存状況に左右される可能性が高く、それに比べて遺存状況が良い地下室坑底の長軸と短軸を測り、分布図を作成した（２図）。そうしたところ長軸200cm～250cm、短軸100cm～200cmの規模のものが中心で、その中には２類、３類、５類のものが含まれており、異なる形態であっても、坑底規模はほぼ同じ地下室が構築されていたことが判る。またこれらはすべてＧ面（ローム面）７～８区で検出された地下室（本来の帰属面はＤ面）であり、これらより大きな規模の地下室はＤ面SD236・2095・3021より北側で検出された地下室である。

(2) 19基の地下室の分析から（1図、1表）

①７～８区で帯状に分布する地下室と、それ以外の点在する地下室とでは形態、規模に違いが確認される

７～８区で東西方向に帯状に検出された地下室（東からSU139、SU161、SU162、SU279、SU280、SU281、SU288、SU2159、SU2190、SU2051、SU2052、SU2422）は２類あるいは５類に分類される。これら以外の地下室は、SD236・2095・3021より北側に点在し、SU3333は３類、SU251、SU3146は２類、SU210・3095は構築当初（旧）は６類､改築後（新）は瓦積みという特殊な形態、SU4203、SU1266・4017は４類に分類され、７～８区で検出された地下室よりも形態にバリエーションが認められる。

1、２類の小型の地下室は「詰人空間」に、3、４類の大型の地下室は「御殿空間」に属する傾向が強いことがすでに指摘されているが（成瀬1994)、医研地点で検出された地下室の形態と照合すると、７～８区の２類あるいは５類の地下室が分布する付近は「詰人空間」として、４類の地下室が点在するSD246･3100以北は「御殿空間」として機能していたことが推測される。

SU251（７図)、SU3146（９図）は２類に分類され、形態的には「詰人空間」に多い地下室である。ただしSU251は開口部に井桁状の痕跡がある変則的なものであり、SU3146は一般的にみられる２類よりも規模が大きく、14層からなる覆土がほぼ水平に堆積し、天井部から開口部までの間はローム土と焼土を互層に叩きしめるなど、埋戻しが丁寧に行われており、両遺構ともに詰人空間で一般的に確認される２類の地下室とは様子を異にするものである。両遺構は検出状況や出土遺物の年代観から天和２年の火災以降に構築され、元禄16（1703）年の火災前後に廃絶したと推定される地下室であり、この頃の藩邸の様子を描いたとされるは「上屋敷殿閣図」と照合すると、これら地下室が構築された場所は御殿の建物と建物の間で、御殿南側のオープンスペースにつながる場所に構築された地下室である。

②２つの主軸方位を確認

平面形が不整形または撹乱などで全体像が不明なものを除き、主軸方位を確認したところ、１図下７～８区の地下室は真北あるは真北より僅かに東へふれ、それら以外の点在する地下室は振り幅は一律ではないが、いずれも真北より西へふれていることが確認された。このような２つの遺構主軸の存在は、すでに加賀藩邸各所の調査で確認されており、真北あるいは真北より僅かに東へふれる主軸方位は藩邸内の「詰人空間」で、真北より西へふれる主軸方位は「御殿空間」で確認されることが明らかとなっている。よって主軸方位からも７～８区で検出された地下室は「詰人空間」に、点在する地下室は「御殿空間」に帰属する地下室である可能性が高いと推測され、これは①で推測された空間利用を裏付けるものである。

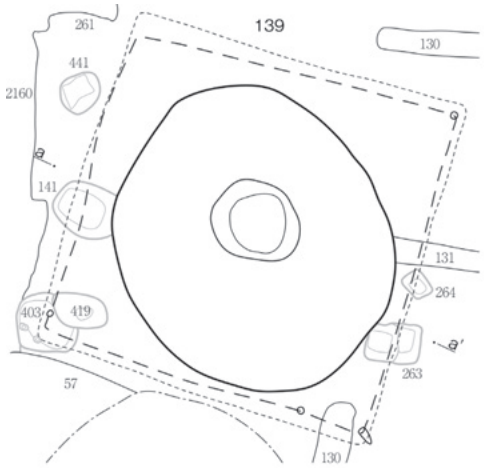
③７～８区で検出された東西方向に並ぶ地下室は、３ないし４つのまとまりを示す

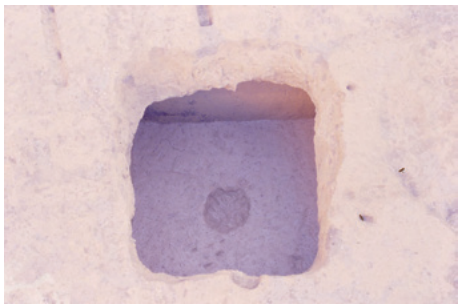
１図下７～８区で検出された地下室は大きくは３つにまとまっている（１図ａ～ｃ群)。ａ群とｃ群は撹乱のため遺構の遺存状況も悪く、地下室の分類や規模の比較が困難であるが、出土遺物の様相には違いが確認された（11～16図、報告編を50％縮小)。出土遺物の年代観を確認すると、前述したようにいずれも17世紀後半～末頃に比定され、同時期に廃絶した可能性が高い。陶磁器類の大半は破片で出土し、図化できたものは少ないが、一見してｂ群とした地下室（SU279、SU280、SU281、SU288、SU2159、SU2190）の遺物量が多く、同一の陶磁器類が複数枚まとめて廃棄される状況が確認されるのもｂ群の地下室のみである。SU280からは天箱６箱個分の瓦が出土し、その中心は「熨斗瓦」（12図9、10）である。SU280からは瓦以外にも、いわゆる内ぐもりのある上製かわらけ（12図２～５）が複数枚廃棄された状況も確認されているが、上製かわらけが複数枚出土する状況はSU280南側に位置するSU2190でも確認されている。SU279からは高台内に二重圏線のある肥前系磁器碗（11図１）や、景徳鎮窯系皿（JA1-2)、肥前系初期色絵段重破片、陶器碗は肥前系陶器碗と京都系の大振りな碗（11図５、外面に錆絵、高台内に「清閑寺」の刻印あるものも）が主体となっているなど、他の地下室よりいわゆる上質のものがまとまって廃棄された様子が確認される。以上のような遺物出土状況からは、ｂ群とした地下室が構築された場所は「熨斗瓦」を多量に使用あるいは保管するような場所（空間）であり、京都系陶器碗や上製かわらけを使用する宴席が開かれる機会もあったような場所（空間）であった可能性もある。

ａ群（SU139､SU161､SU162）やｃ群（SU2051､SU2052、SU2422）とした地下室からは、瓦や特定の陶磁器類がまとまって出土する状況は確認されなかったが、ａ群のSU139やｃ群のSU2422のように撹乱されていない地下室であっても、ｂ群の地下室のような遺物の出土状況は確認されず、廃絶時に意図的に精良な土で埋め戻した可能性もあるが、ｂ群の地下室の利用者とａ、ｃ群の地下室の利用者との階層差を反映している可能性もある。

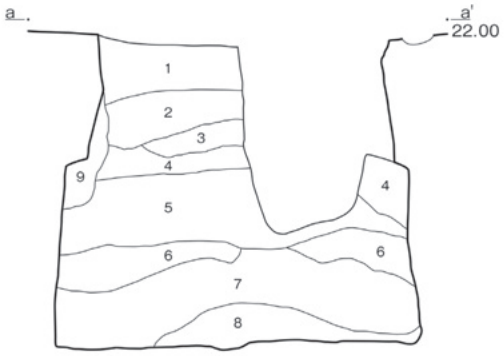
1表　医研地点地下室一覧

種別	遺構No.	区	面	空間	主軸方位	分類	附帯	火災	遺物年代	その他の特徴
SU	139	7	G	詰人	N-5°-E	2		○	17末	天井と壁の境に4cmほどの釘穴。板留の可能性あり。
SU	161	7	G	詰人	-	-		○	17末	覆土全体に焼土、炭化材含。被熱遺物を含。天和2年の火災に伴うものか。
SU	162	7	G	詰人	N-4°-E	-	階段？		17後、19前	東側へ屈曲する階段?
SU	279	7～8	G	詰人	N-4°-E	5	テラス？		17後	最下層は大型のロームブロックで埋まる上、覆土はほぼロームで構成。覆土の褶曲は重複する柱穴の添圧によるもの。
SU	280	7～8	G	詰人	N-4°-E	5			17後	東、南側でSU279と重複し、その部分のみに4基のピットを設置。土留めか。瓦と内ぐもりのある上製かわらけがまとまって出土。瓦の中心は「熨斗瓦」がしめるが、被熱しているものと、被熱していないものともにあり。
SU	281	7～8	G	詰人	N-4°-E	5			17後	
SU	288	8	G	詰人	N-4°-E	未分類			17後	半円形を呈す方が10cmほど高く、その境付近に径7cm程のピット。昇降施設痕跡か？
SU	2159	8	G	詰人	-	2		○	17後	東側でSU2190と重複、本遺構が新。奥壁にタール状の付着物。報告編で遺物が出土していなとあるが、遺物収納箱3箱分の遺物が出土、うち2箱は瓦。隣接するSU2190と遺構間接合。
SU	2190	8	G	詰人	N-0°-E	2			17後	西側でSU2159と重複、本遺構が旧。隣接するSU2159と遺構間接合する遺物あり。本遺構北側に位置するSU280と同じく、内ぐもりのある上製かわらけが数枚出土。報告編では17中葉と報告したが、陶器碗、皿の中心が肥前系が含まれる事などから、やや幅のある17世紀後半に修正
SU	2051	8	G	詰人	-	-			遺物なし	
SU	2052	8	G	詰人	-	-			17後	SU2051と重複
SU	2422	8	G	詰人	N-0°-E	2			遺物なし	上部をSD2096（17前半）に削平、それ以前の遺構か？
SU	3333	6	E～	御殿	N-7°-W	3			17末 ～18前	報告編では瓦が少量出土とあるが、遺物収納箱3箱分の瓦が出土、その大半が「海鼠瓦」であった。瓦以外の遺物をみると17末から18前に比定される遺物が出土しており、検出面がE面～上の遺構とされているが、本来はC面に帰属する遺構である可能性が高い。
SU	251	5	C	御殿	N-10°-W	2	開口部に長方形土坑、井桁状の痕跡	○	18前（一部17後含）	天和2年火災焼土ででパックされたSD246・3100と重複、本遺構が新。報告編では17後～18前とあるが、瀬戸・美濃系陶器の灰釉薄掛け碗は、五合あるいは1升の灰釉徳利と判断される破片が中心となっており、18前（一部17後含）に年代を修正
SU	210・3095	5～6	C	御殿	N-8°-W	新：未分類 旧：6		○	19中	慶應4（1868）年の火災で被熱した瓦や焼土で埋まる。坑底壁際に柱穴を有す遺構と重複、SU210・3095の前身遺構か？
SU	3146	6	C	御殿	N-12°-W	2		○	17末～18前	17末から18前の二次的な火熱を受けた陶磁器類が出土、元禄十六（1703）年の火災に伴う遺物か。
SU	4203	4	C	御殿	N-8°-W	4？	階段		18後	報告編では17後としていたが、京都・信楽系の貫入が多く認められる端反碗や軒桟瓦などを含むことから18後に年代を修正
SU	1266・4017	1	C	御殿	N-5°-W	4	階段	○	18後	
SU	4346	2	D	御殿	-	？			17後、19前	深度や規模から地下室の可能性が強いと判断された遺構。160cmまでの調査で坑底は未確認





SU139

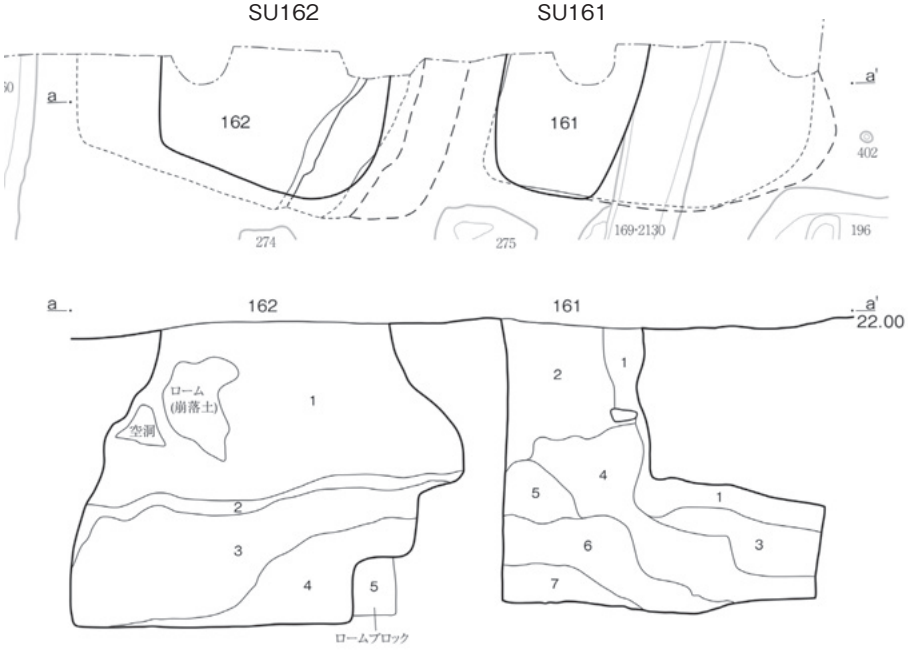


SU139

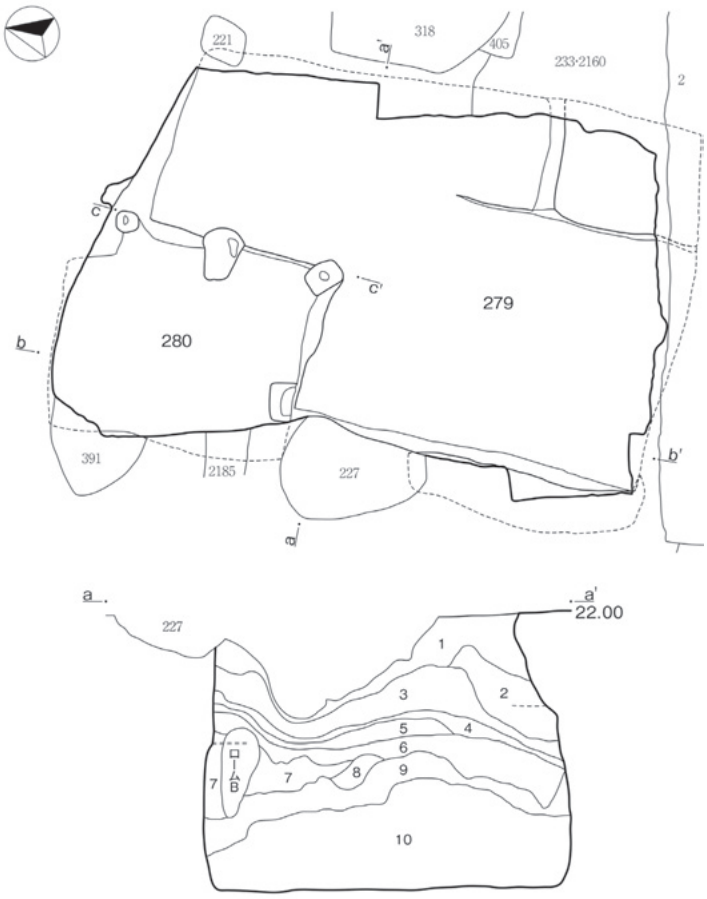
SU161

SU162

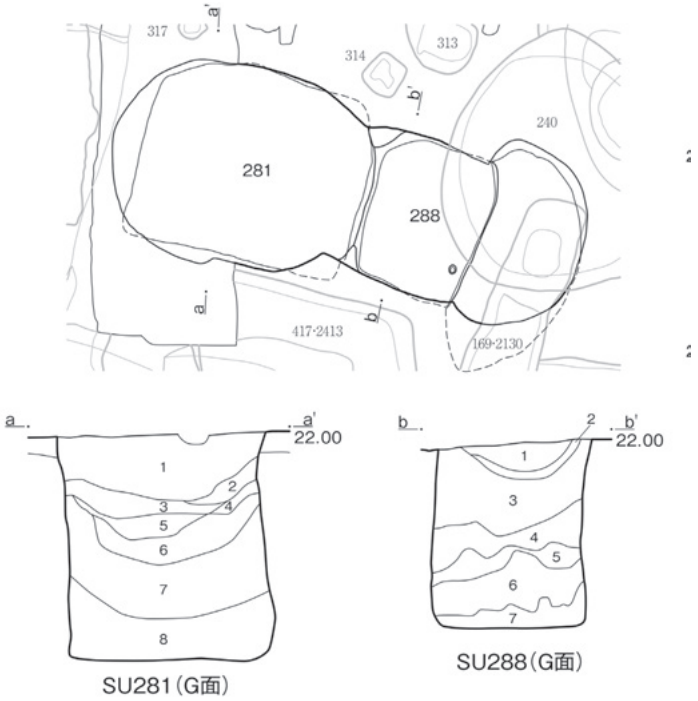
SU162　　SU161



3図　SU139、SU161、SU162（S=1/60）

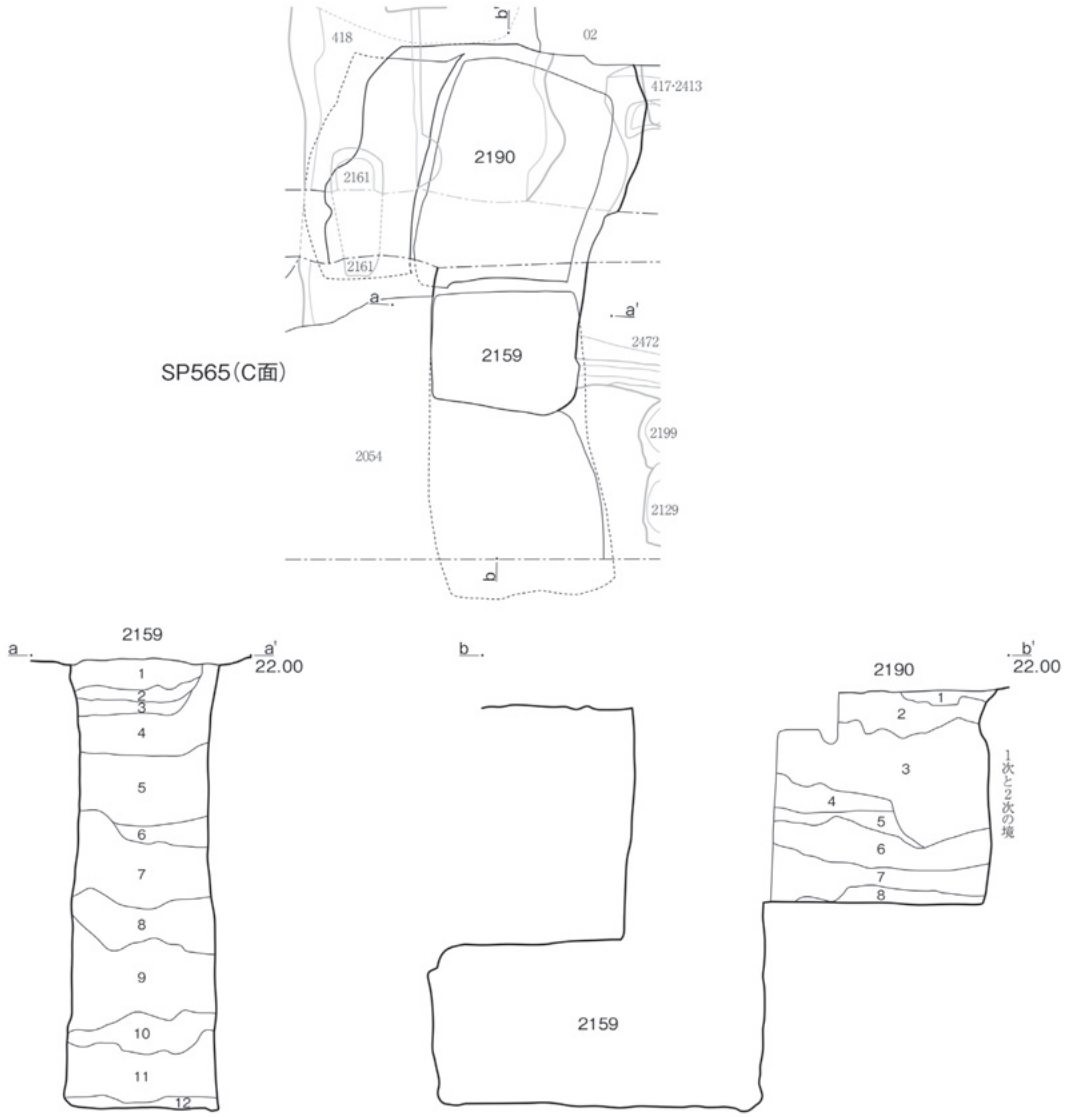


SU279・SU280



SU281・SU288

４図　SU279・SU280、SU281・SU288（S=1/60）



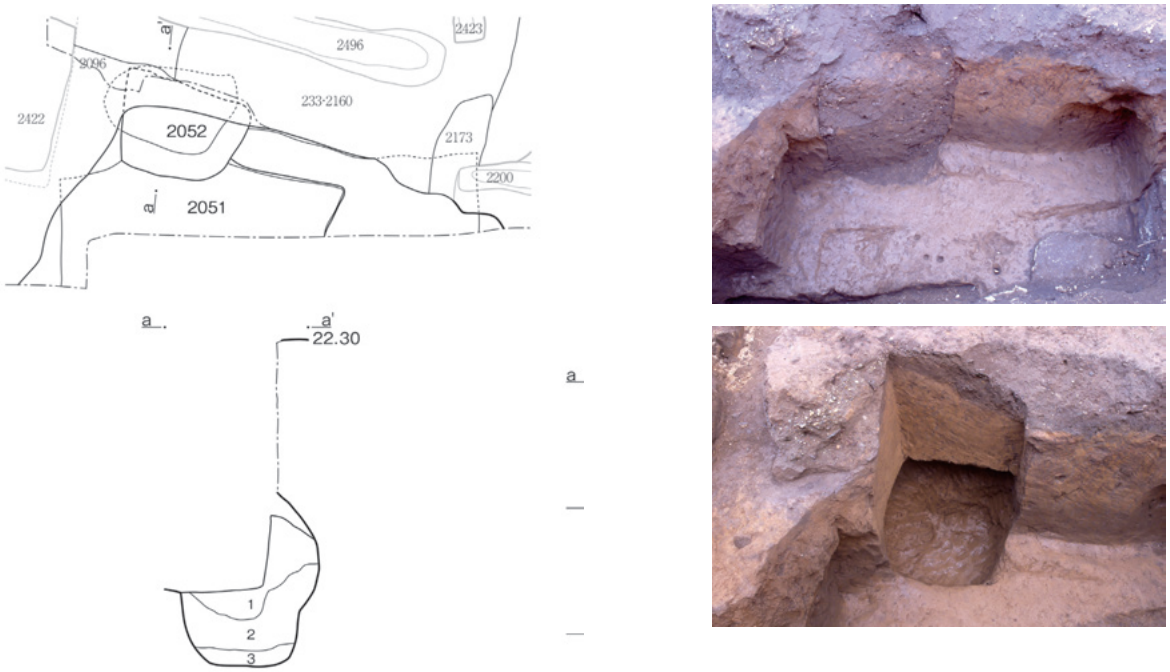
SU2159・SU2190

SU2159・SU2190

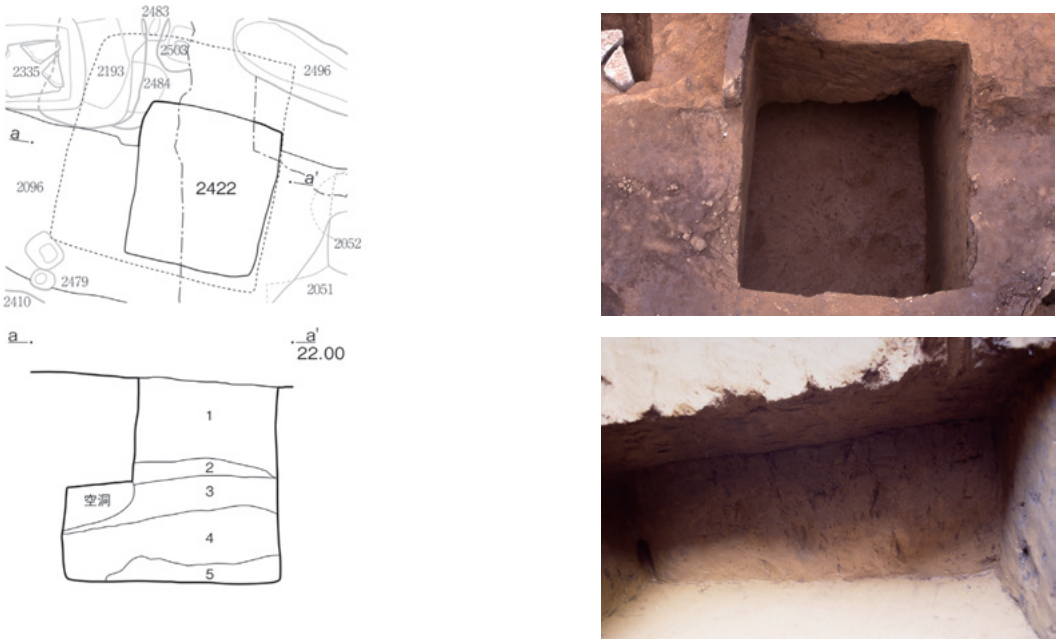
SU2190

SU2159

5図　SU2159・SU2190（S=1/60）

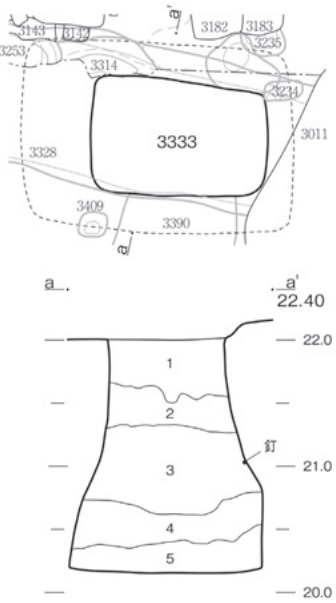


SU2051・SU2052

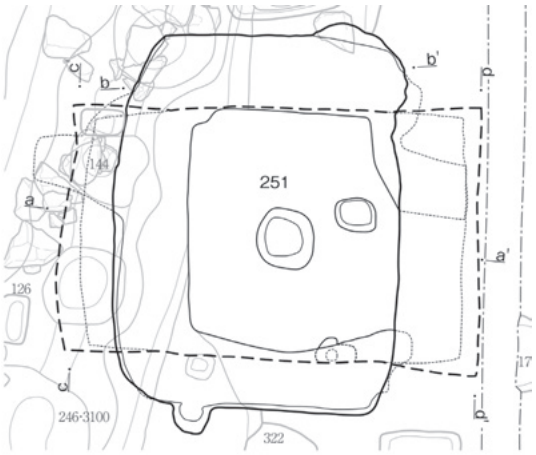


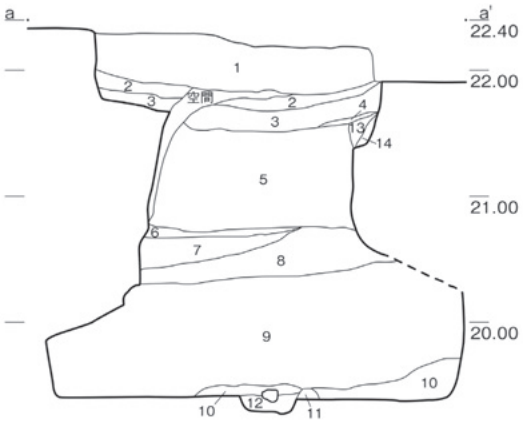
SU2422

６図　SU2051・SU2052、SU2422（S=1/60）



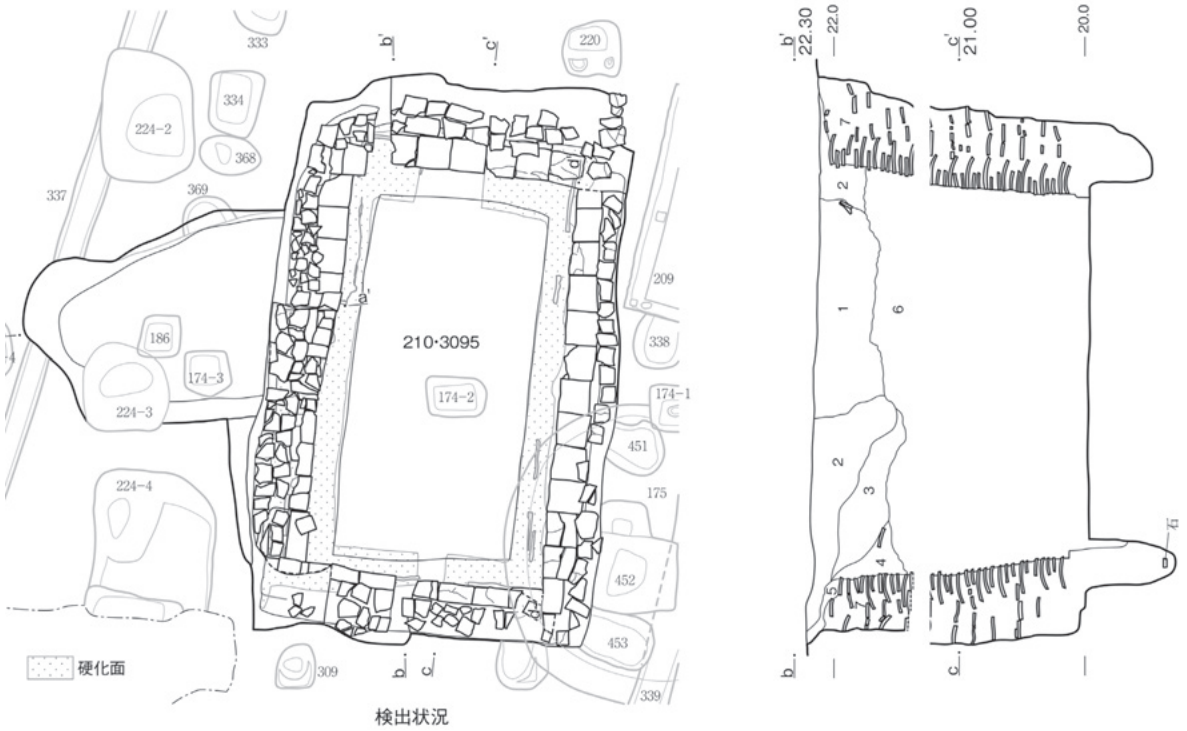
SU3333

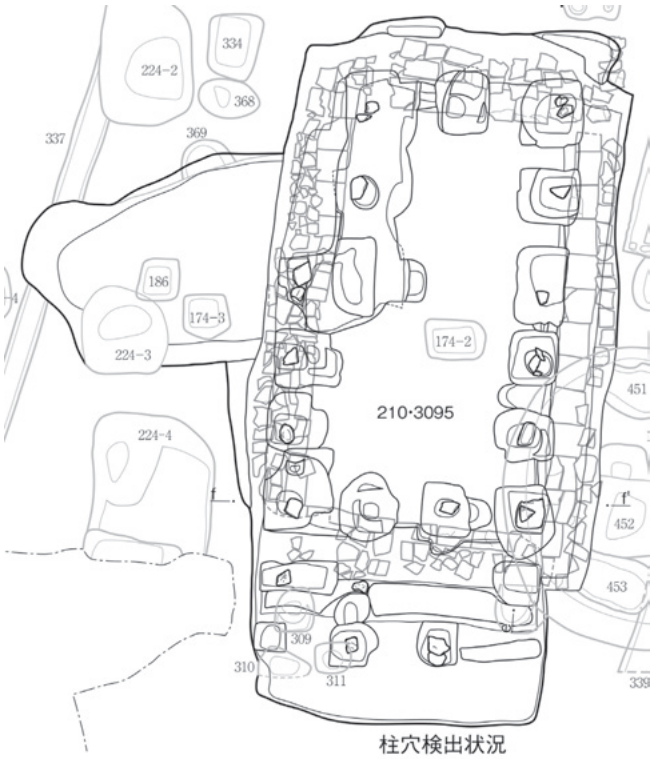




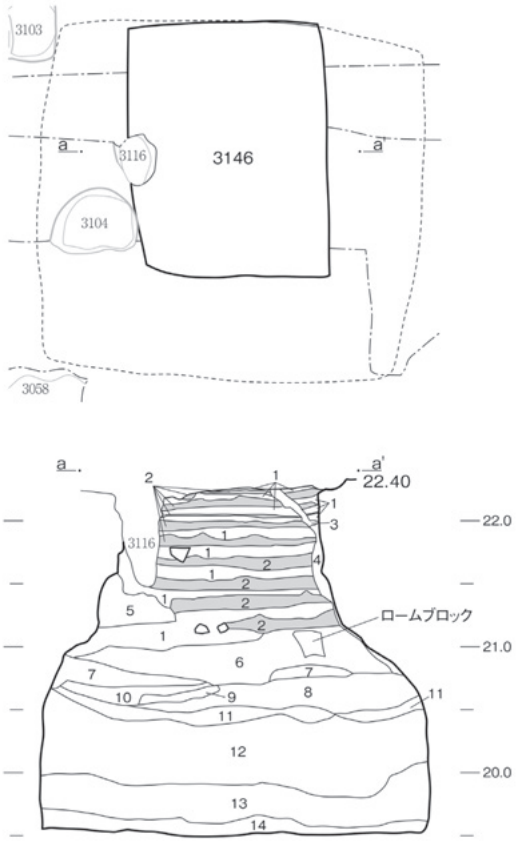
SU251

7図　SU251、SU3333（S=1/60）

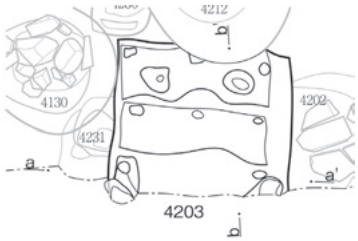


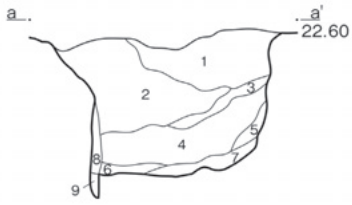


８図　SU210・SU3095（S=1/60）



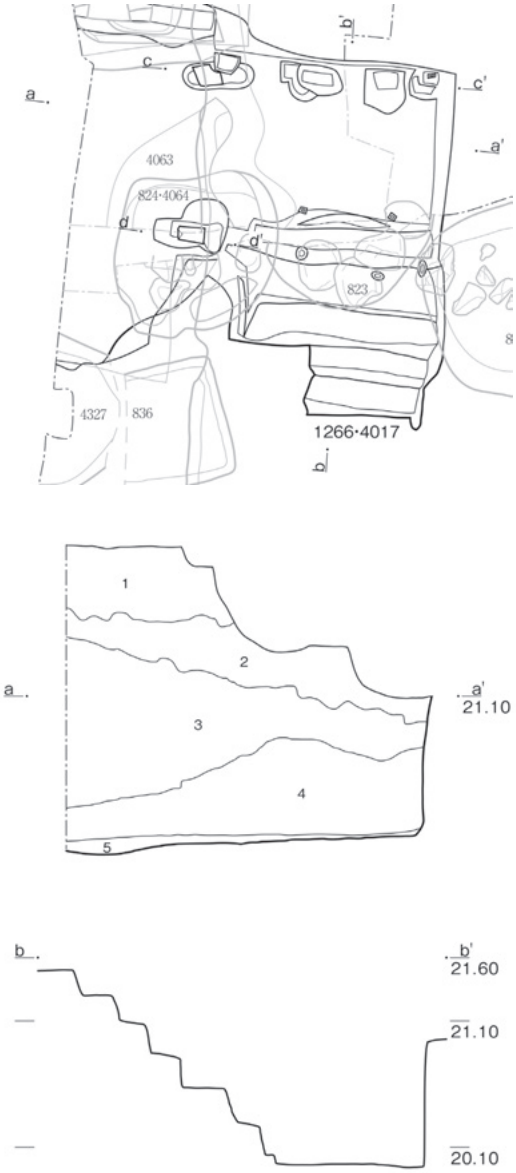
SU3146



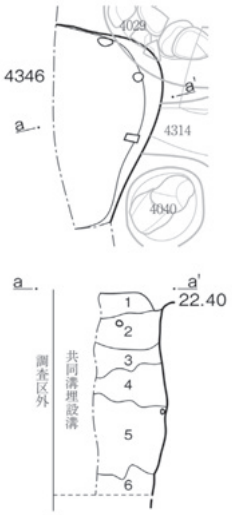


SU4203

9図　SU3146、SU4203（S=1/60）

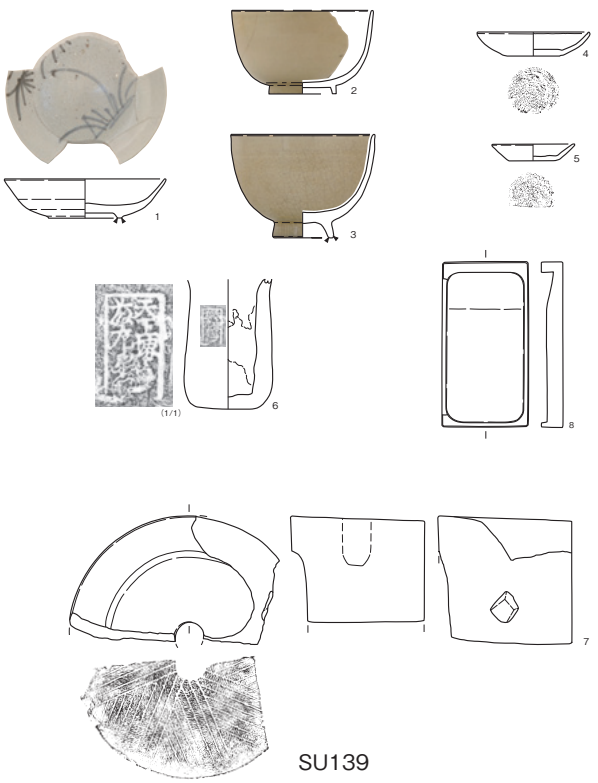


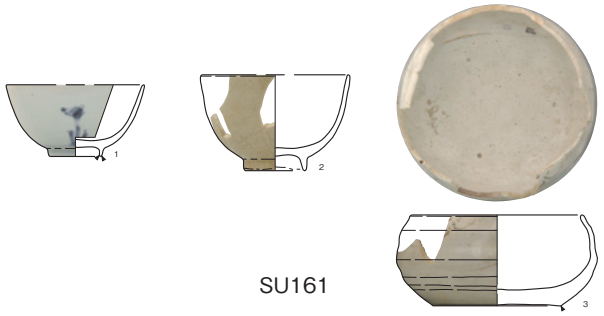
SU1266・SU4017

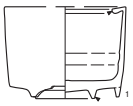


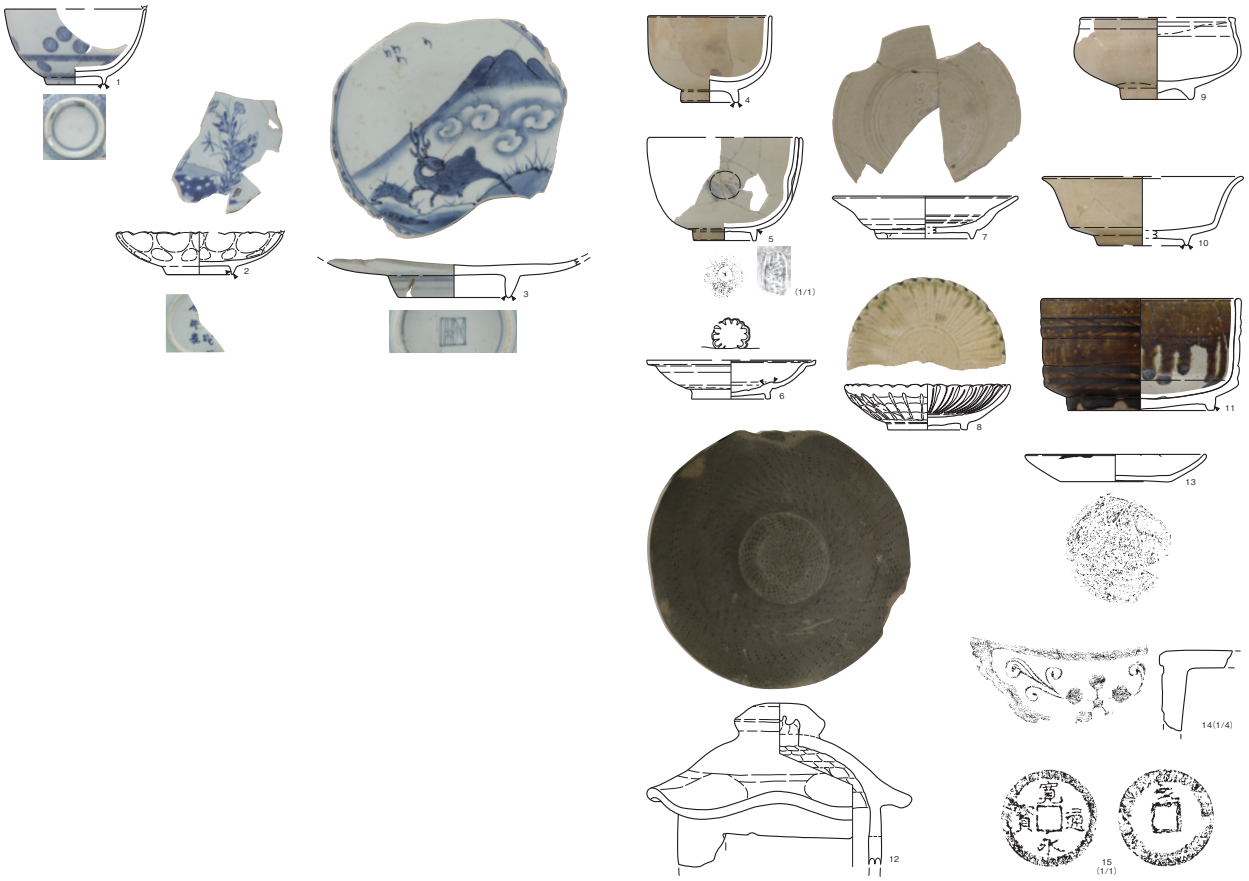
SU4346

10図　SU1266・SU4017、SU4346（S=1/60）

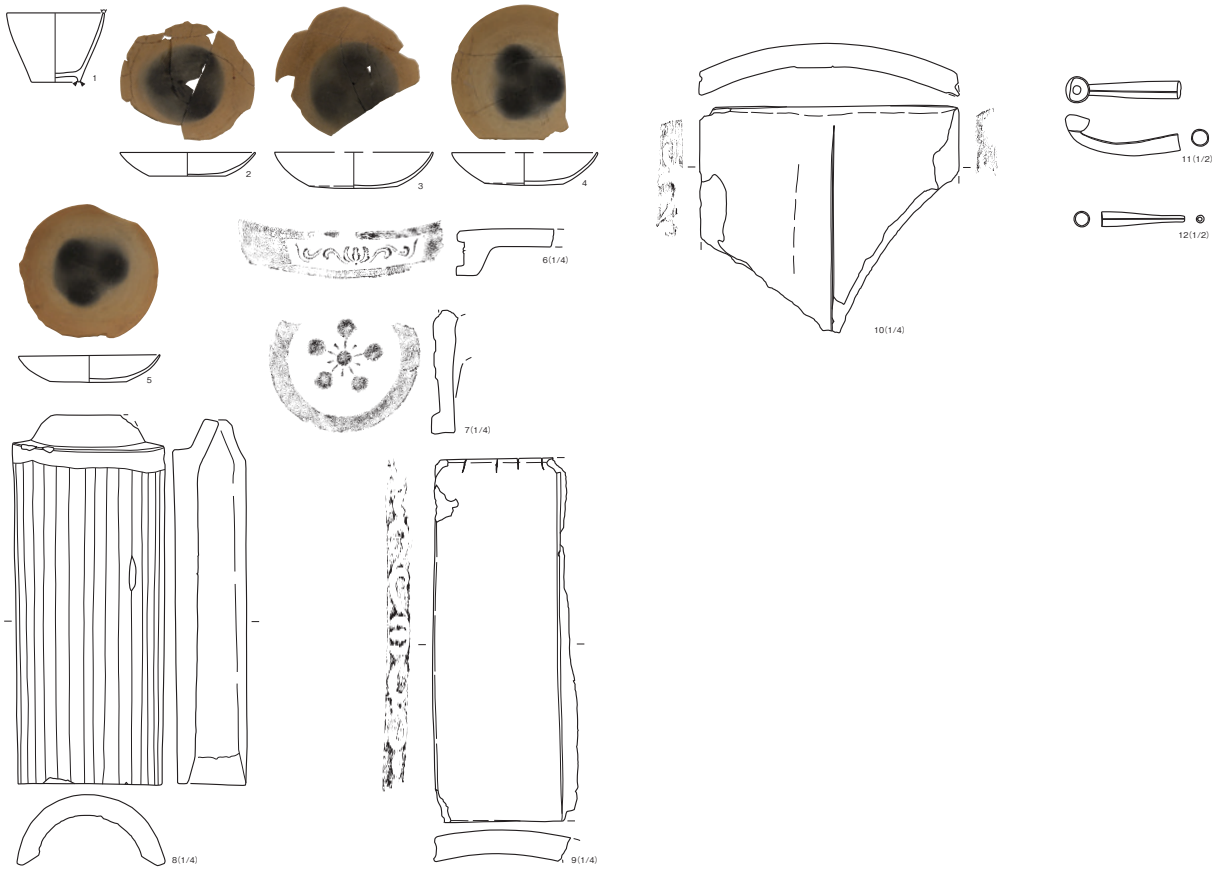




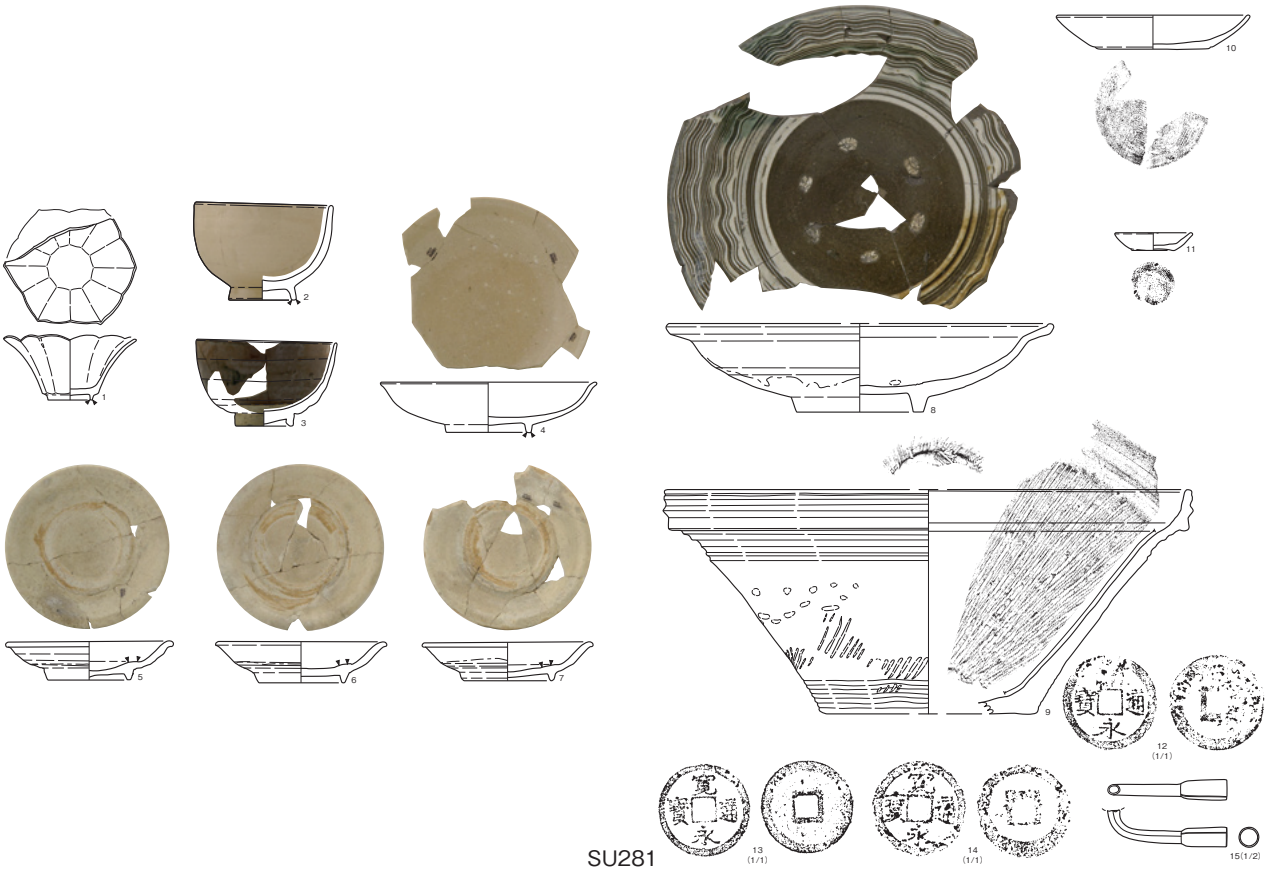




11図　SU139、SU161、SU162、SU279（スケールは報告編の1/2）

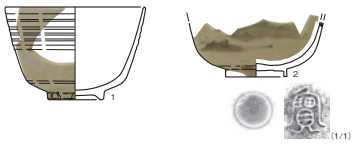


SU280



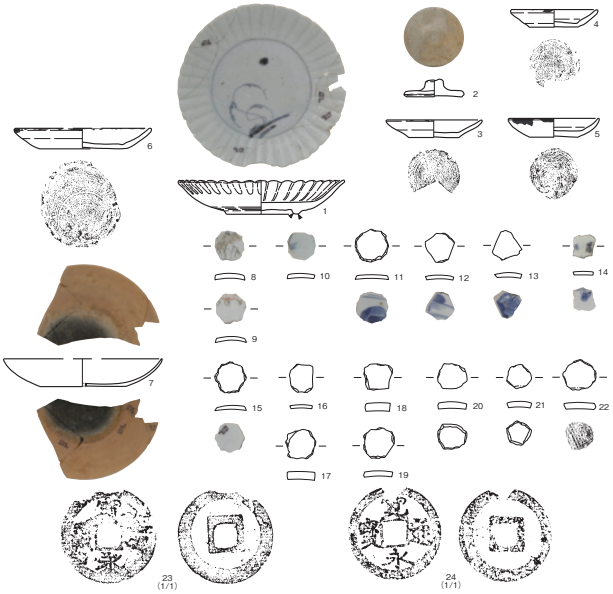
SU281

12図　SU280、SU281（スケールは報告編の1/2）

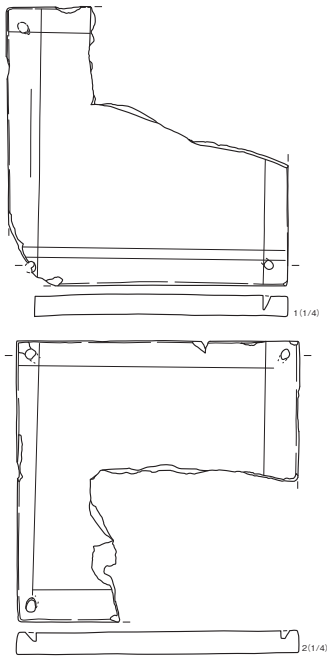


SU288

SU2052

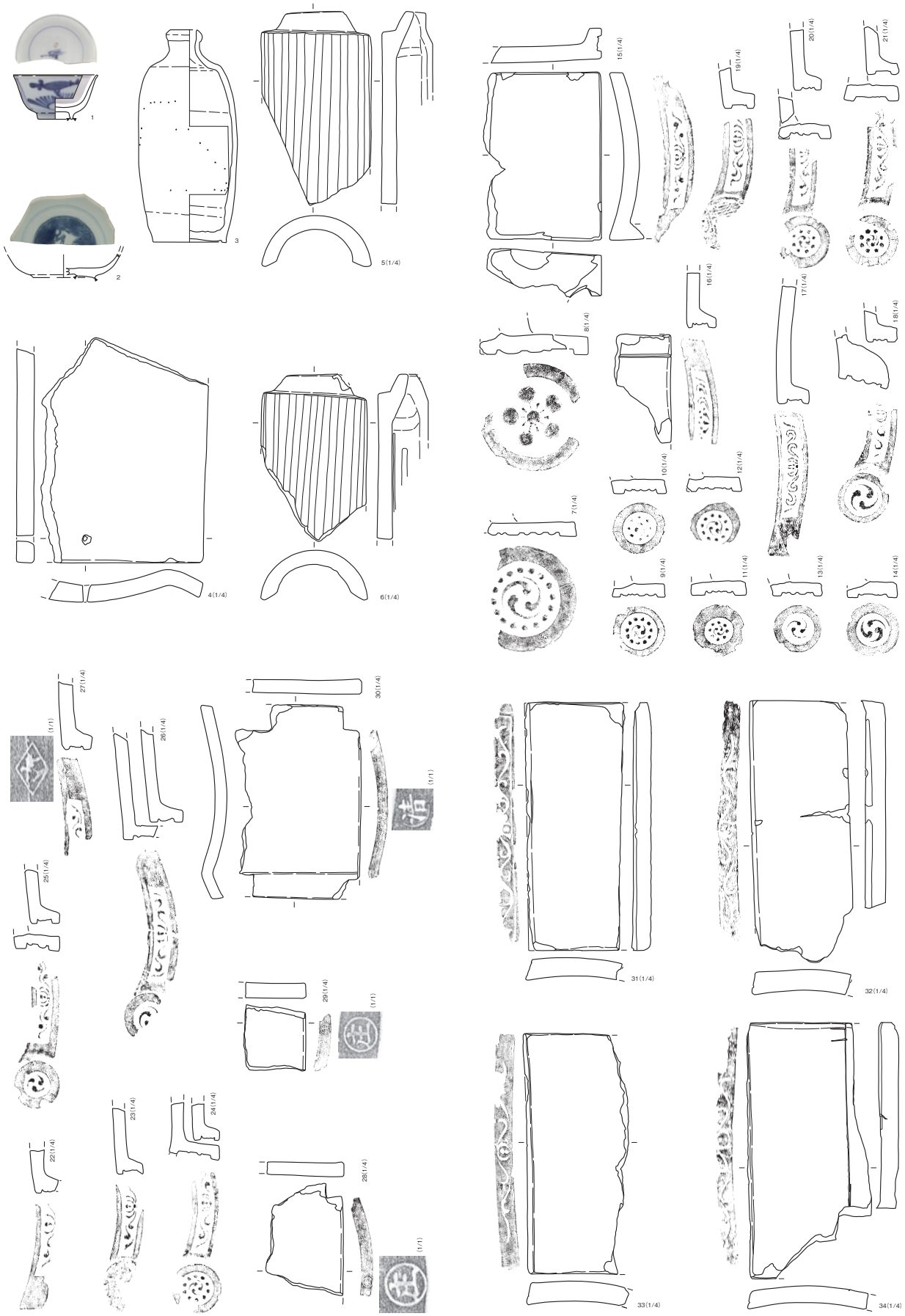


SU2190

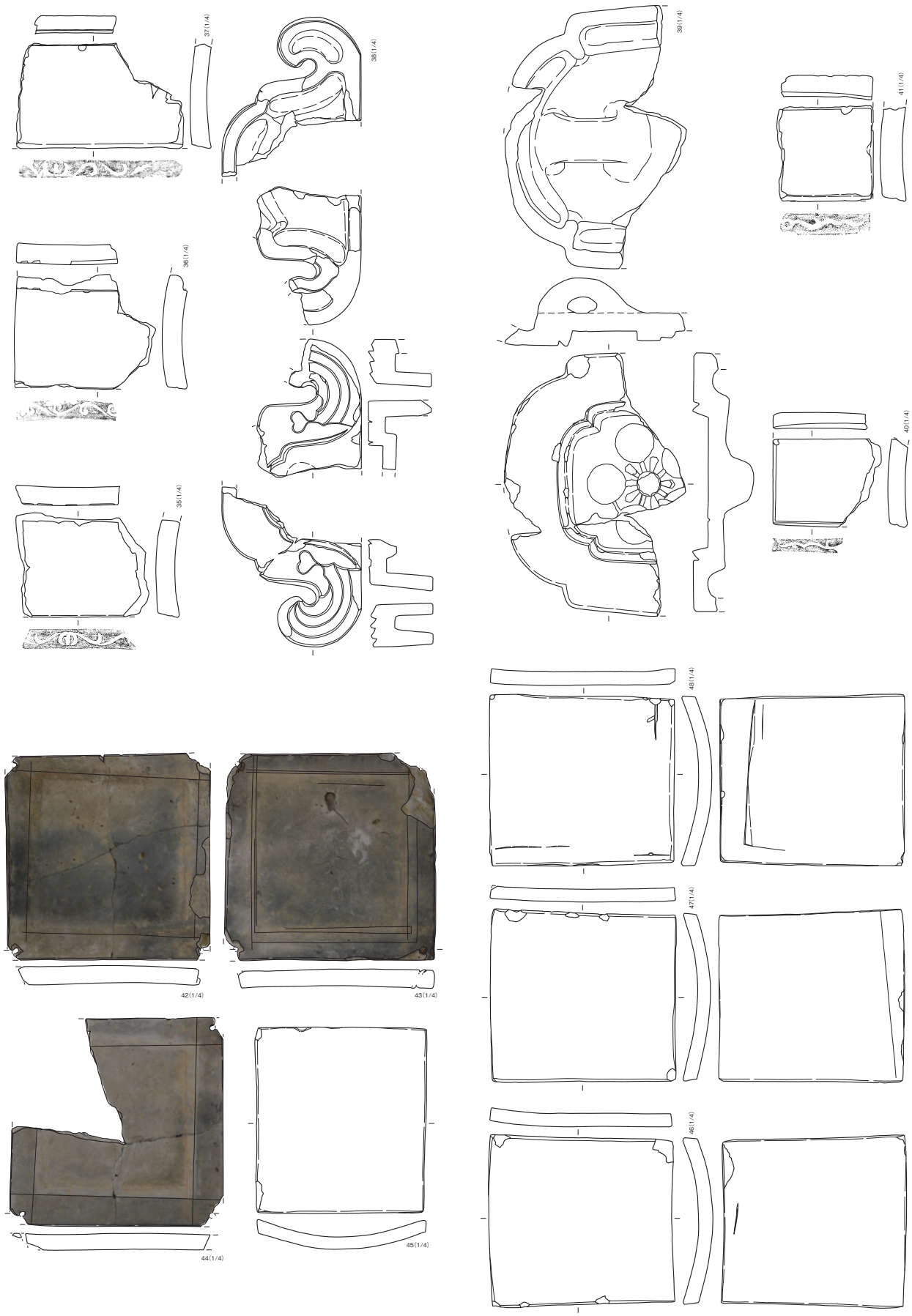


SU3333

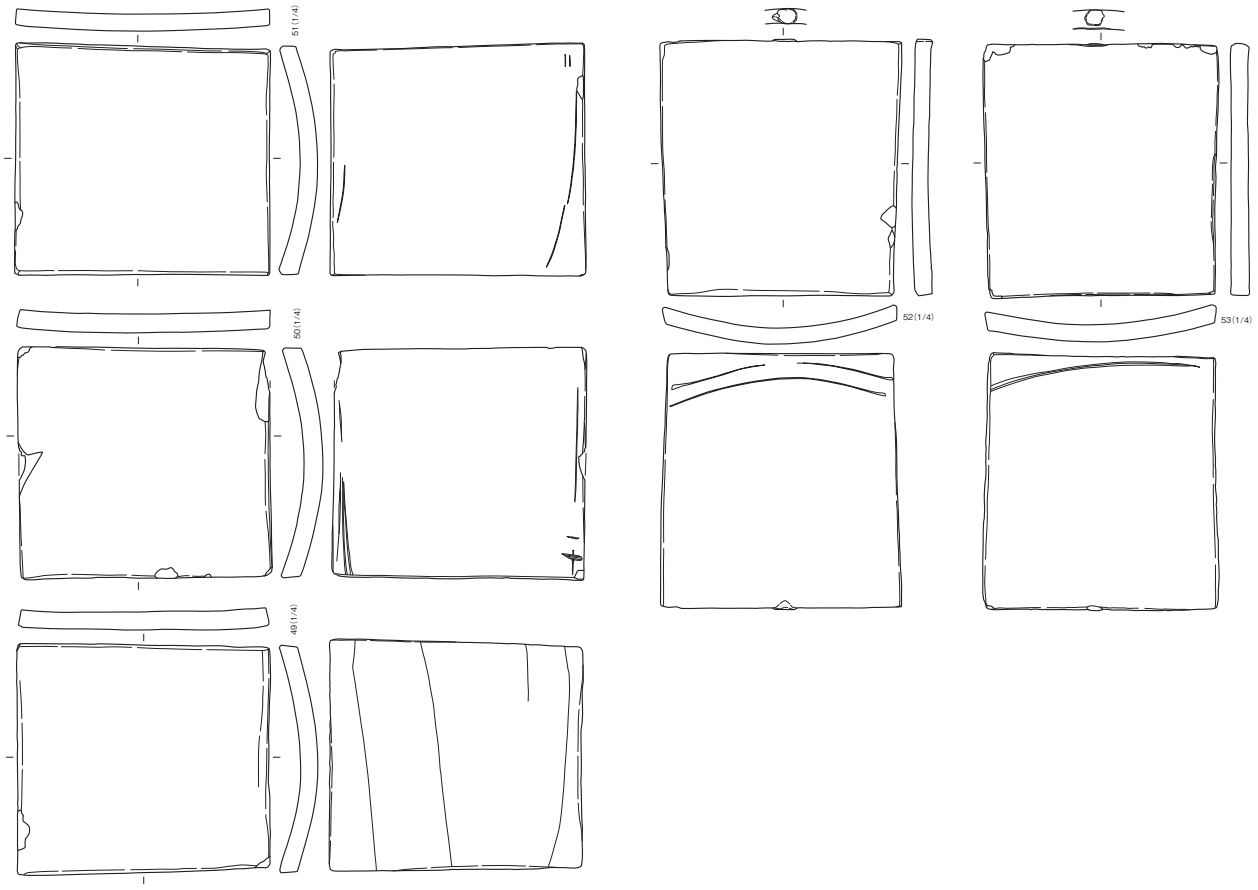
13図　SU288、SU2052、SU2190、SU3333（スケールは報告編の1/2）



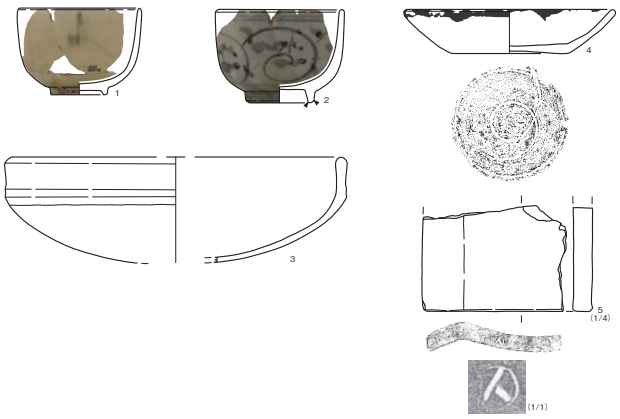
14図　SU210･3095(1)（スケールは報告編の1/2）



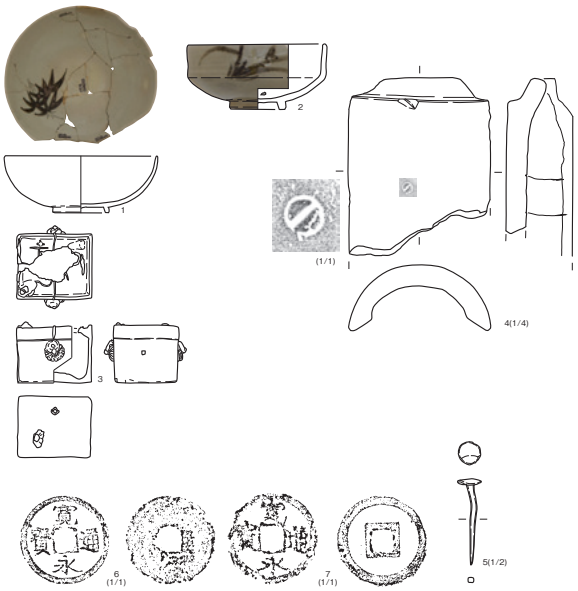
15図　SU210･3095(2)（スケールは報告編の1/2）



SU210･3095(3)



SU3146



SU4203

16図　SU210･3095(3)、SU3146、SU4203(スケールは報告編の1/2)

2. 医研地点の地下室と他地点の地下室

本節では医研地点と東大構内で加賀藩邸の調査をした地点の地下室の分布や形態、年代、規模などを比較、検討してみたい。比較するのは報告書が刊行されている地点で、本地点と同じく加賀藩御殿空間の調査をした山上会館地点、御殿下記念館地点、御殿と詰人空間の境付近を調査した法学部4号館・文学部3号館地点、詰人空間の調査をした理学部7号館地点、総合研究博物館新館地点、山上会館龍岡門別館地点である。

取り上げる地下室は基本的には各報告書で「地下室」として報告されているものを対象としているが、調査地点ごとに「地下室」として報告される遺構に少しずつ違いが確認されたことから、それぞれの地点でどのような遺構を「地下室」として報告し、それが本稿の分類とどのように対照するのかを以下に明示した。

御殿下記念館地点では「地下式土坑」と呼称され、次の6種類に分類し、ローム天井の有無については言及されていない。

1類は、長方形の平面形をもつ土坑で壁面がほぼ垂直に立ち上がるもの。本類には壁体の補強のために壁際に柱列をもつものや木枠をもつものがある。

2類は、長方形の土坑の長辺にスロープが付設されたもの。

3類は、不整方形の平面形をもち、壁体が内傾しながら立上がりそのまま入口へ移行するもの。全体の形状は巾着形になる。底面中央には入口構造を支えるピットがしばしばみられる。

4類は、方形の平面形をもつ土坑本体に直接入口の縦坑が付設されるもの。入口は土坑中央ではなく、壁の一辺にかたよって設定される場合が多い。

5類は、縦坑の側壁に土坑入口が付設されるもの。縦坑には複数の土坑が付設される場合が多い。

6類は、方形あるいは不整方形の平面形の土坑本体に階段が付設された構造のもの。

以上の御殿下記念館地点の分類と本稿の地下室分類を対照すると、御殿下1類、4類が本稿での5類または6類、御殿下3類が本稿での1類または2類、御殿下5類が本稿の3類、御殿下6類が本稿の4類に対照できそうであるが、御殿下2類は本稿では分類外としている。

法学部4号館・文学部3号館地点でも「地下式土坑」と呼称され、「掘り方が深く、壁の一部あるいは全体がオーバーハングする遺構を仮にそう呼ぶ」（大塚 1990）とあり、これによると関東ロームを掘削した天井をもたない本稿の5類、6類が地下室からは除外されている可能性が高い。

理学部7号館地点でも「地下式土坑」と呼称され、「通常、入口部と室部を有する大型の土坑」とされ、断面形により以下の4つに分類されている。

A類：天井部と壁がそれぞれ直線上に掘り込まれ、断面形が「コ」の字形を呈し、両者の境界が明瞭に識別できる。概して床面積が大きく、入口部に対して三方向に天井部を設けたものが多い。

B類：天井部と壁との境界が不明瞭な断面アーチ形を有する形態。A類のような「コ」の字形を呈する断面形も認められる。入口部に対して二方向ないし三方向に天井部が設けられている。概して床面が深く掘り込まれたものが多い。

C類：天井部を一方向へ僅かに設け、他の三方向の壁が直線上にハングする形態。A、B類に比して小型。

D類：天井部が認められない形態。規模、床面表高がC類とほぼ同じ数値であり、壁、床が丁寧に整形されていることから地下式土坑としたが、形態的には土坑と同じであり、地下式土坑として扱うべきかどうか議論の余地があるとされている。

理学部7号館地点の分類と本稿の地下室分類を対照すると、A類が本稿の2類、B類が本稿の1類、D類が本稿の5類または6類と対照可能である。山上会館龍岡門別館地点、総合研究博物館新館地点では「地下室」と呼称されているが、どのような形態の遺構を地下室としたのかは特に明示されていない。

以上のような状況であることから、本稿で抽出した地下室は基本的には各地点で「地下式土坑」「地下室」として報告されているものを対象とし、形態的に本稿の地下室として分類した遺構も一部追加した。

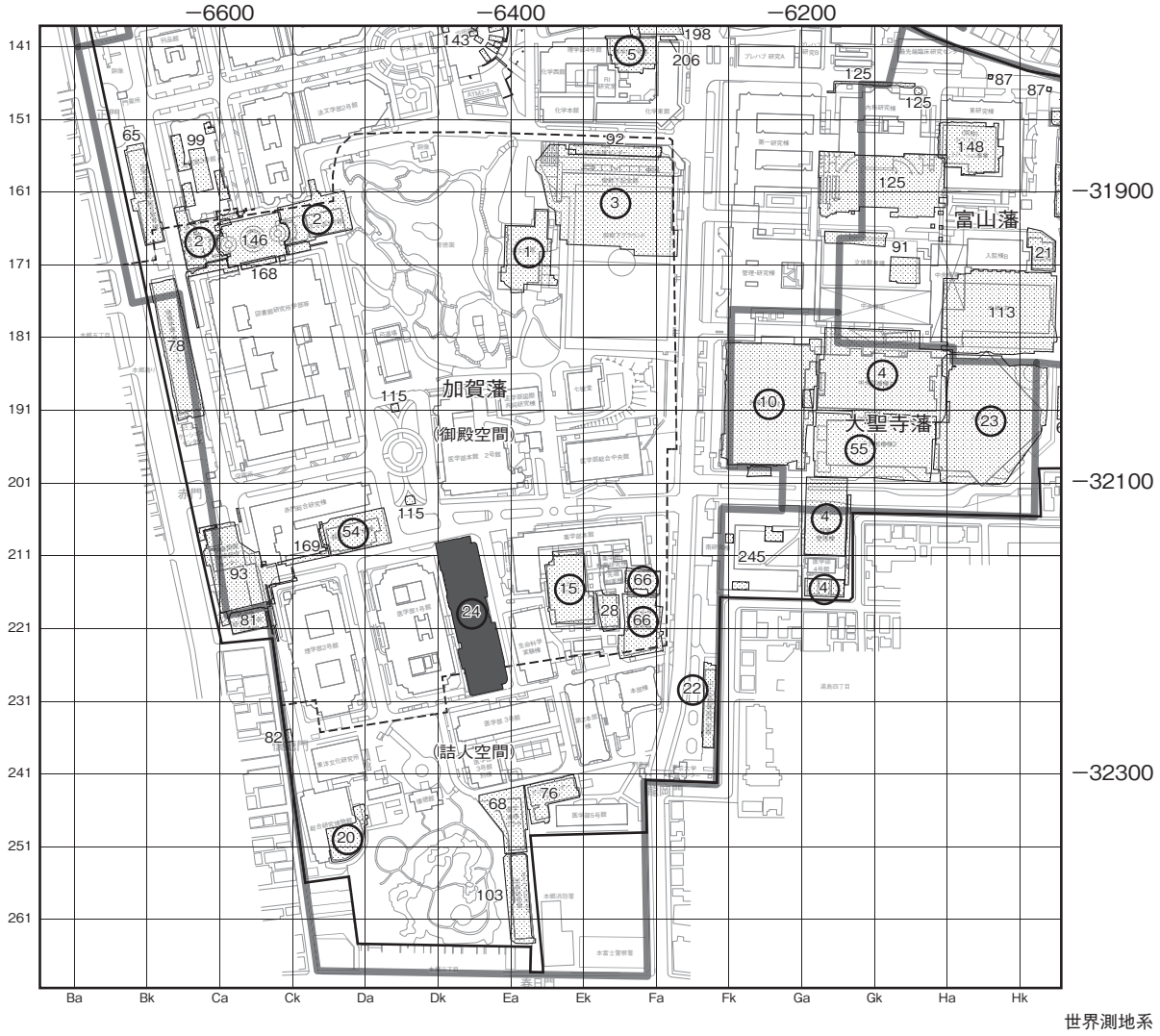
(1) 各地点の概要

調査地点直前の番号は17図に示した本郷地区南側調査地点番号と対応しており、本郷キャンパス内での各調査地点の位置は本図で確認されたい。なお地下室規模の確認は、医研地点と同じく坑底規模を実測図から計測している。

1 山上会館地点（18図）・3 御殿下記念館地点（19図）

山上会館地点、御殿下記念館地点は心字池の東側に位置している（17図1、3）。

山上会館地点は、「育徳園」という加賀藩邸の庭園を調査した地点であり、江戸時代の遺構を3期に分けて報告している。地下室が検出されたのはⅢ期（17世紀末から18世紀初め）であり、その時代の絵図面と現在も残る心字池南の高台上の東屋との位置関係から、加賀藩第六代藩主吉徳の正室松姫のための御守殿の一部が調査



世界測地系

1　山上会館(U)
2　法学部4号館(法)･文学部3号館(文)
3　御殿下記念館(G)
4　医学部附属病院中央診療棟(病中)･設備管理棟(エネセン)
･給水設備棟(給水)･共同溝(共同溝)
5　理学部7号館(理D)
10　医学部附属病院外来診療棟
15　薬学部新館
20　総合研究博物館新館
22　山上会館龍岡門別館
23　医学部附属病院入院棟A
(医学部附属病院病棟)
24　医学部教育研究棟(医研)
54　総合研究棟(文･経･教･社研)
55　医学部附属病院第2中央診療棟(2中)
66　薬学系総合研究棟2期

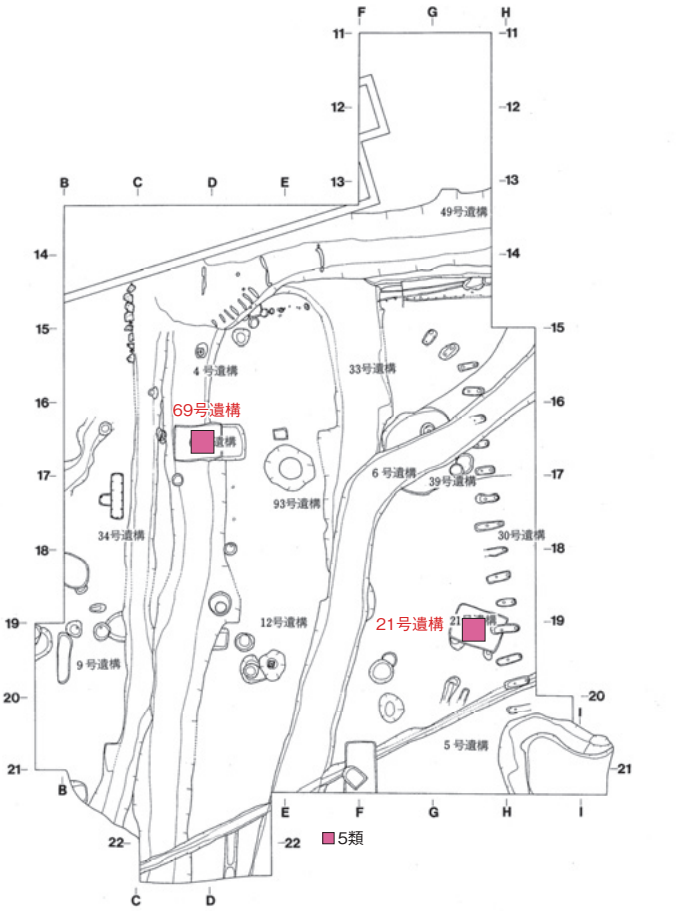
17図　本郷地区南側調査地点(○は本文中の地点名番号と対応)

地点に含まれ、検出された地下室や井戸などがこれに関連する遺構ではないかと推定されている。検出された2基の地下室は点在し、ともに5類に分類される。両遺構の坑底付近には木材を使用した痕跡が確認され、調査地点が心字池のほとりであり、地形の影響を回避するために貼床状の構造を有した地下室であった可能性が高い。規模はほぼ同じであり、長軸が300cm前後、短軸が200cm強を測る。2基のみの検出であり軽々にはいえないが、形態、規模ともに同じということは、構築に際して何かしら制約があった可能性も考えられる。

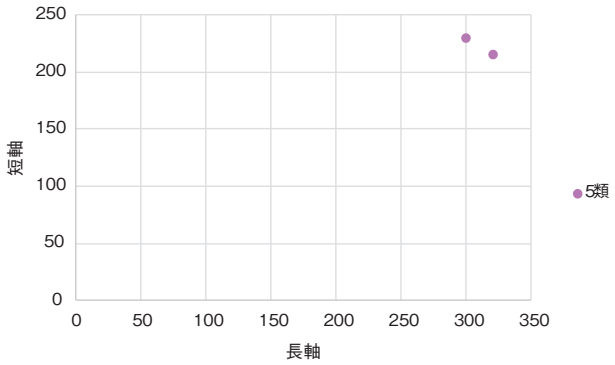
69号遺構からは大量の蛎殻と釘が出土し、その殻に漆喰が付着しているものがあり、蛎殻屋根に使用されたものが廃棄された可能性が推測されている。医研地点でも比較的多くの遺物が出土する御殿空間の地下室の出土遺物を確認すると、瓦がその大分部をしめている事が少なくなく、69号遺構も瓦ではないが、建物の屋根材が廃棄されるという点では医研地点の御殿空間で検出される地下室と共通している。陶磁器や食物残滓などの塵芥を廃棄することは避けられたが、建築構造材は御殿空間であっても廃棄が許されていたのであろうか。

御殿下記念館地点は、18世紀中葉以降は「御殿空間」の北東の一角であった地点である。報告された地下室は46基あり、Ⅴ期の281号遺構以外は、全て本地点のⅢ期の遺構群とされる。Ⅲ期の遺構群は元禄16（1703）年の火災層で覆われた遺構面で検出され、上屋敷成立（1683年）から元禄16年までに比定されている。報告によると、Ⅲ期の遺構群は調査区中央を東西、南北にT字状にのびた道状遺構（19図全体図破線「道」）に3区分される状況が確認され、このような区割りは元禄元年の絵図面「武州本郷第図」や「上屋敷殿閣図」とほぼ一致する。南北方向にのびる道の西側に南北に拡がる建物遺構は「外局」と描かれた役所建物に、東西方向にのびる道の北東側建物遺構は「頭分一」と描かれた上級武士の屋敷に比定されている。なお絵図には「頭分一」と描かれた建物遺構の西側や、東西方向にのびる道の南側にも「役所四」「役所五」「役所六」と描かれた方形建物施設が確認されるが、それらと照合可能な建物遺構は発掘調査では確認されていない。しかし、検出された地下室や井戸などの遺構がそれら建物遺構に付随する施設であった可能性も考えられる。

地下室は道状遺構を除く調査区全域で検出されているが、形態をみると5類が最も多い。集中箇所が2箇所確認され、1箇所は調査区西端付近に南北方向に帯状に、「外局」と推定されている建物遺構の近くには5類が、少し西へ離れて1、2類が分布している。もう1箇所は東西にのびる道の北東側、「頭分一」と推定される建物遺構の内側には2類が、建物の周囲には5類が認められ、形態の違いによる検出場所の違いも確認できる。なお建物遺構内で検出された592号遺構と同じく、開口部に

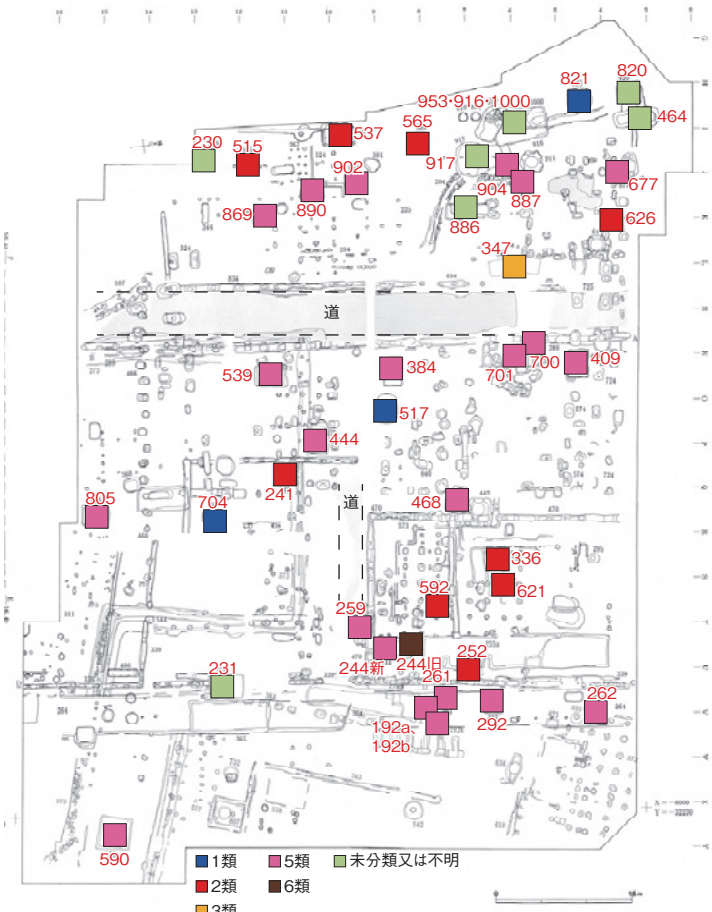


全体図

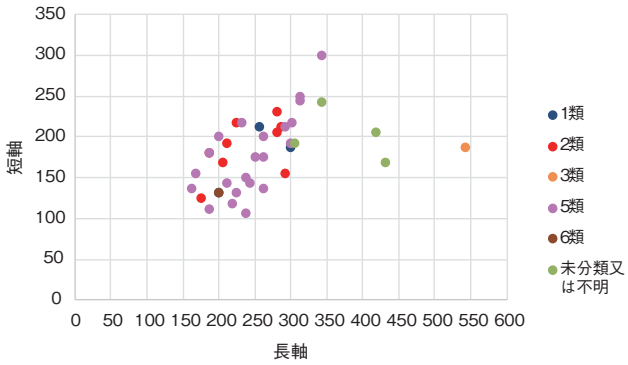


地下室の規模（cm）

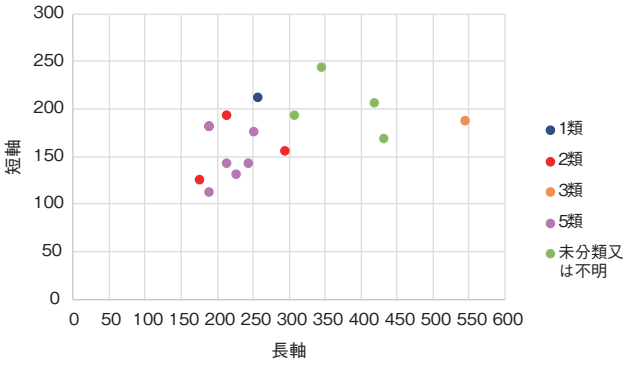
18図　山上会館地点



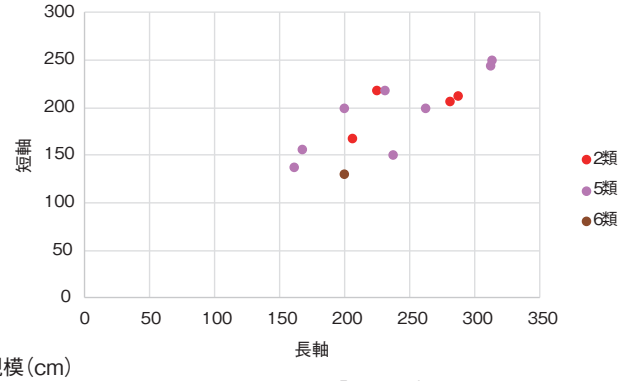
全体図（右が北）



全体



調査区西側、「外局」



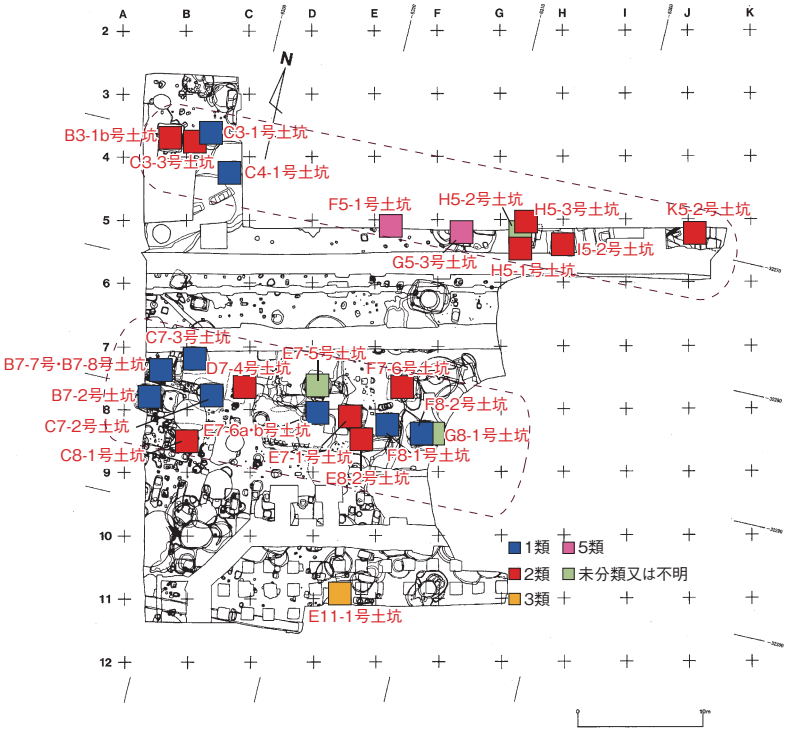
地下室の規模（cm）

調査区北東部、「頭分一」

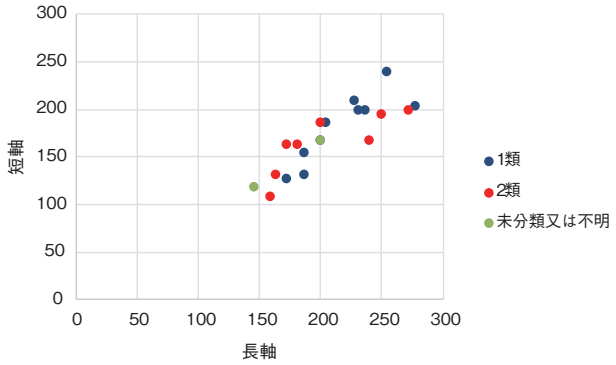
19図　御殿下記念館地点

井桁状の痕跡をもつ地下室が医研地点でも確認（SU251、2類に分類）されている。御殿下記念館地点の報告では、井桁状の痕跡を根拠に592号遺構が「建物の床から直接出入りできる構造となっていたことを示しているものと考えられる」とされるが、医研地点のSU251の周囲には建物遺構はなく、また絵図との照合からは建物と建物間の空閑地に位置すると推定され、同形態でも設置される場所に違いが確認されるということであろう。

地下室の規模をみると、長軸150cm～300cm、短軸100cm～250cm辺りに4類と不明を除く全ての形態の地下室が確認できる。この中から前述の地下室集中箇所を抽出してみると、「外局」と描かれた建物遺構西側で検出された地下室は、概ねドットが集中しており、異なる形態でも、規模はほぼ同じ地下室が構築されていた事がわかる。それとは逆に「頭分一」と描かれた建物遺構付近で検出された地下室は、ドットがやや散在し、規模にバラツキが認められる。このような地下室の様相からは、「頭分一」と描かれた建物遺構に付随する地下室は個人利用であり、構築に際してある程度の自由度が認められていて、「外局」と描かれた建物遺構に付随する地下室は共有建物で利用されるため、制約があったとの推察もできる。



全体図



地下室の規模（cm）

20図　法学部4号館地点

2 法学部4号館（20図）・文学部3号館地点（21図）

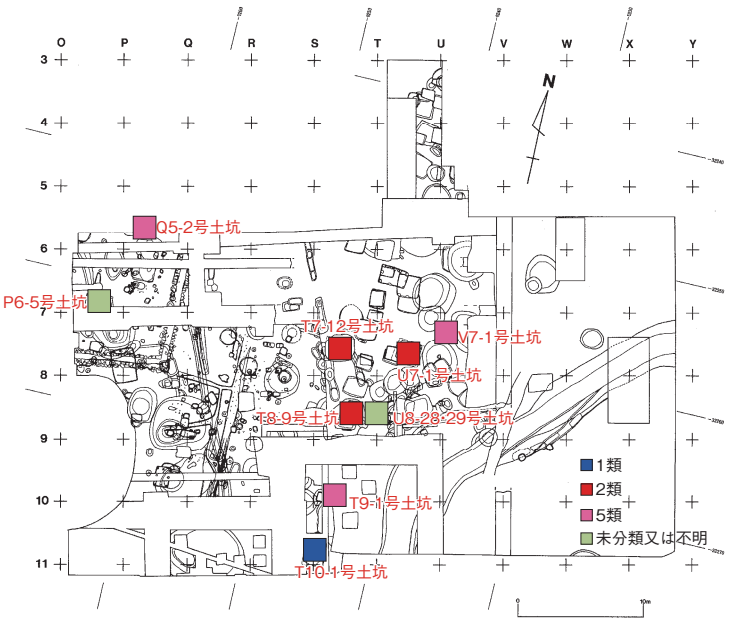
法学部4号館・文学部3号館地点は、三四郎池の北西部に位置し（17図2）、絵図面との対比から「詰人空間」と「御殿空間」の境界付近に位置づけられる場所である。本地点で検出された38基の地下室は、概ね出土遺物の年代観から17世紀後半から18世紀前半代までには廃絶あるいは破棄されたと考えられ、当該期の絵図面との照合から、その多くは「詰人空間」の長屋に帰属することが明らかにされている。

法学部4号館地点では、東西方向に連なる地下室群が南、北に確認されている（20図、破線）。調査区の状況もあるが、南側の地下室群の方が密集度が高く、地下室間の重複も多く確認できる。また大量の遺物が出土する地下室が確認されるのも南側の地下室群である。建物利用頻度が南側の方が高く、それに伴う施設として地下室の建て替え頻度も高かった可能性もある。形態的には南、北ともに1類、2類が確認されるが、5類が確認できるのは北側のみであり、1類、2類の地下室ほどは密集していない。なおこれら地下室群とは離れた位置で検出された3類のE11-1号土坑は、出土遺物の年代観から17世紀後半頃には廃絶または廃棄された地下室であり、帯状に分布する地下室群より先行して存在していた地下室と考えられる。E11-1号土坑と地下室群の間には塀址と考えられる礎石列が検出されていて、その主軸方位とE11-1号土坑の主軸が「御殿空間」内の建物遺構と同一

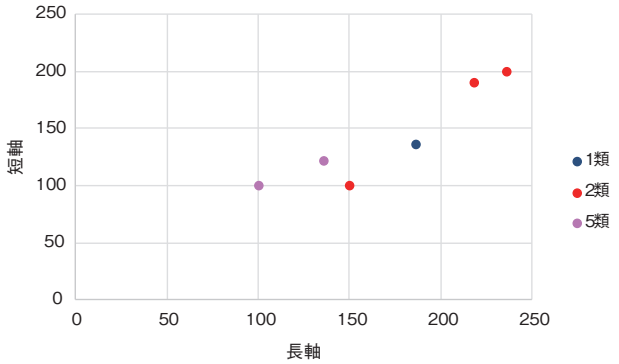
であることから、E11-1 号土坑は「御殿空間」に帰属する地下室ではないかと推測されている（成瀬 1994）。

地下室の規模をみると、長軸 150cm 強～200cm 弱、短軸 100cm ～ 200cm と、長軸 200cm 強～ 250cm 強、短軸 150cm ～ 250cm の２つのピークが確認でき、その分布を確認すると、前者には北側の地下室群が、後者には南側の地下室群が中心となってることがわかる。前述したように地下室の密集度や遺物量に南北で違いが確認されたが、地下室の坑底規模にも違いがあることが確認された。

文学部３号館地点は、法学部４号館地点ほど地下室が密集しておらず、地下室同士が重複する状況も少ないが、調査区中央付近に南北に連なる状況が確認できる。遺物が大量に出土するような地下室も確認されない事から、法学部４号館地点ほど建物の利用頻度が高くなく、それに伴う地下室の建て替えなども少なかったと考えられる。形態的には法学部４号館地点と同じく１類、２類、５類の地下室が確認されるが、５類に分類される地下室が文学部３号館地点の方が僅かだが多い。地下室の規模をみると個々の差が大きく、前述のように形態も様々なものが確認されることから、地下室の構築に比較的制約が少なく、利用状況や階層などに応じた付設がなされたのであろうか。



全体図



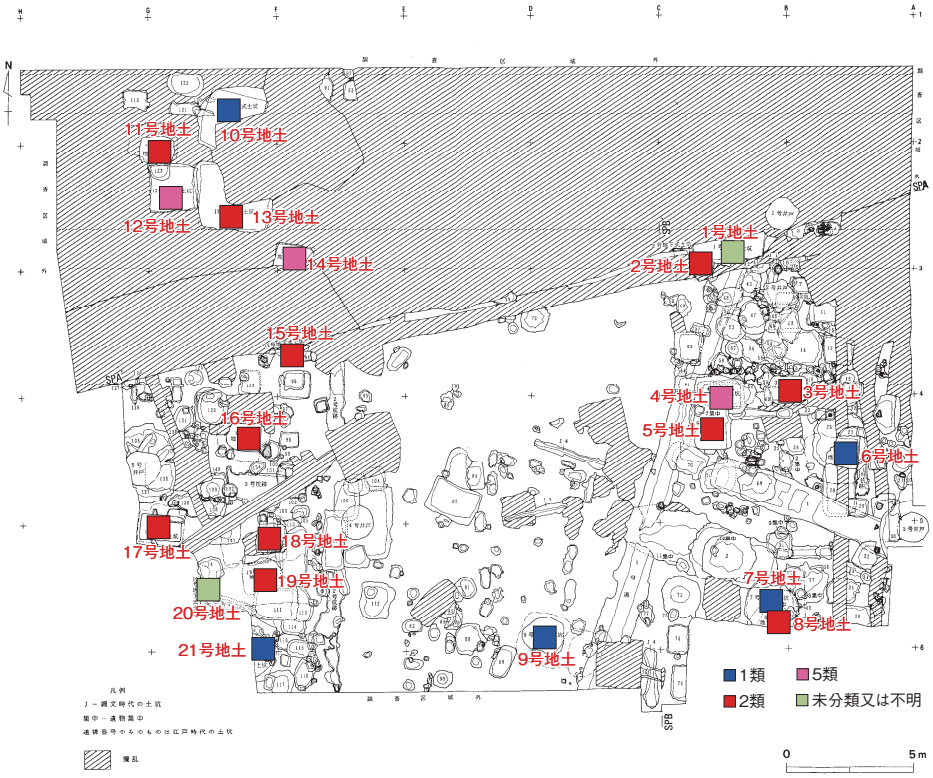
地下室の規模（cm）

21図　文学部3号館地点

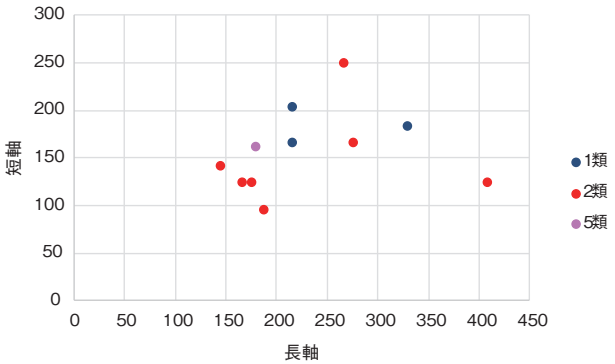
５理学部７号館（22 図）

理学部７号館地点は、心字池の北東側に位置し（17 図５）、元禄元（1688）年から幕末まで「八筋長屋」と呼ばれる「御貸小屋」群の一角、三番・四番長屋の中央付近に相当する。地下室は 21 基確認され、9 号地下式土坑を除き、調査区東寄りと西寄りに南北方向に帯状に分布している。調査区中央付近には地下室も含め遺構はほぼ認められず、このような遺構の分布状況は絵図面の建物配置と一致する。すなわち遺構が分布する範囲は長屋建物の「空地」部分に、遺構が希薄な中央付近は三番長屋と四番長屋の間の「道」（往来筋）に相当する部分であることが確認される。地下室の形態をみると、２類を中心に、１類、５類が確認され、１類からは 17 世紀中葉から 18 世紀中頃に比定される遺物が、２類からは 17 世紀中頃から 18 世紀代に比定される遺物が、５類からは 18 世紀後半から 19 世紀前半に比定される遺物が出土しており、形態毎に廃絶時期に時期差が確認される。

地下室群は半数近くが重複して検出され、地下室間での遺構間接合を確認すると、10 号地下式土坑と 19 号地下式土坑のような大きく離れた遺構間接合や、５号地下式土坑と 19 号地下式土坑のような「道」を挟んだ遺構間接合も確認できる。ただし５号地下式土坑と 19 号地下式土坑は廃絶時期の異なる地下室間での遺構間接合（出土遺物の年代観から５号地下式土坑は 18 世紀中葉から後葉に、19 号地下式土坑は 18 世紀前半に廃絶したと推定）であり、長屋建物がほぼ同じ位置で修繕、改築などを繰り返し、それに付随する地下室などの施設も構築場所を少しずつ替えながら、新たに構築（あるいは修繕）した場所の土を脚土し、古い地下室を埋め戻すような作り替えが繰り返される状況があったことが推察される。地下室の規模をみると、ややバラツキが大きいが、長軸 150cm ～ 200cm 前後、短軸 100cm ～ 200cm の規模の



全体図



地下室の規模(cm)

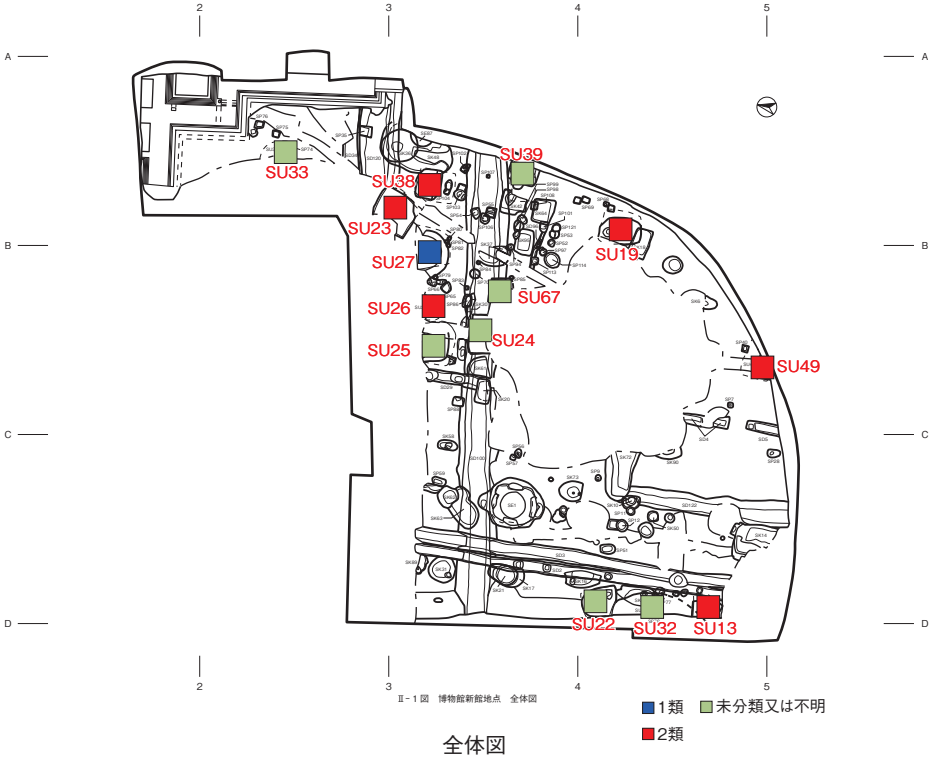
22図　理学部7号館地点

ものが中心で、その中には理学部7号館地点で確認される全ての形態が含まれており、形態を異にしても同規模の地下室が構築されていたことが判る。なお三番長屋と四番長屋で地下室の規模、形態に違いは確認されないようである。

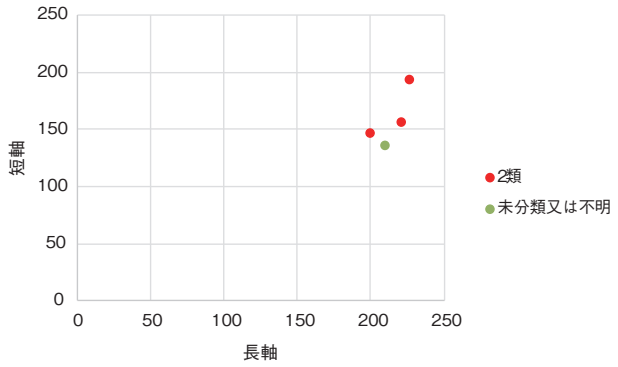
20 博物館新館地点（23図）

博物館新館地点は東京大学総合研究博物館東洋文化財研究所の南西隅に近接する地点（17図20）であり、絵図面と照合すると、元禄元年から幕末期に至るまで南北に主軸をもつ長屋と馬場が描かれ、空間利用に大きな変化があまりない場所であったと推定され、長屋建物は絵図面の分析から中級以上の藩士が居住する長屋建物であったことが指摘されている（田中 1995）。

地下室は14基検出され、その分布をみると調査区東寄りと西寄りに南北方向に帯状に拡がり、重複する地下室が比較的多い。出土遺物をみると17世紀第3四半期から19世紀初めに比定され、地下室毎に年代幅が認められることから、同時期に存在していたというよりは構築と廃棄が繰り返された可能性が高い。理学部7号館の地下室と同じく、長屋建物の耐久年数や利用者の変化などに伴う改築や新築が繰り返される中で、地下室も構築数や構築場所を少しずつ替えながら、構築あるいは、作り替え、廃棄（廃絶）が繰り返される空間利用があったことが推察される。



全体図



地下室の規模(cm)

23図　博物館新館地点

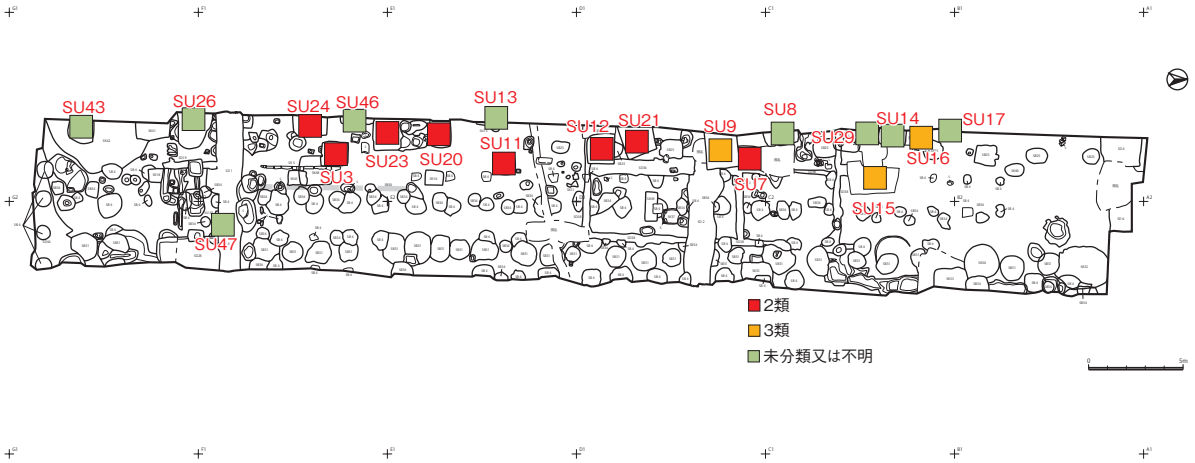
地下室の大半が撹乱あるいは調査区外まで拡がる状況で検出されているため、形態や規模が確認できたものは半数ほどにとどまるが、形態的には１類と２類が確認できる。坑底規模は 14 基中４基の確認にとどまるが、概ね長軸 200cm 強、短軸 150 ～ 200cm 弱であり、ほぼ同規模であることが確認される。

22 山上会館龍岡門別館地点（24 図）

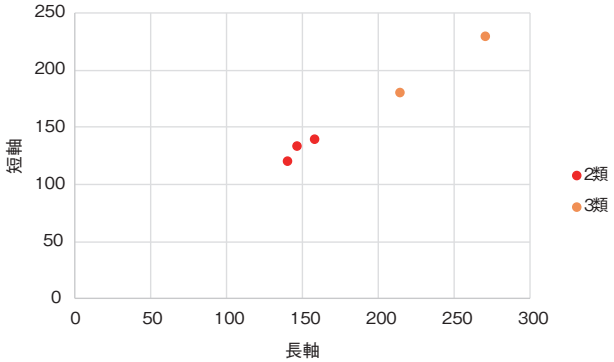
山上会館龍岡門別館地点（以下、龍岡門地点）は、当初、本郷福利施設地点と呼称されていた地点であり、東京大学本郷キャンパスの南側、現在の龍岡門付近に位置する（17 図 22）。文久３（1863）年頃の様子が描かれたとされる「加賀藩江戸御上屋敷長屋絵図」の「東御長屋上壇」の長屋建物状況と、検出された建物遺構とが一致することが確認された地点である。

龍岡門地点では、元禄 16（1703）年の火災層を鍵層として、遺構の重複関係から４段階の遺構変遷（1 ～ 4 期）が設定されている。1 期は概ね本郷邸が下屋敷であった段階、2 期は本郷邸が上屋敷となってから元禄 16 年の火災で焼失するまで、3 期は前述した「東御長屋」が安政二（1855）年の大地震で損壊するまで、4 期は安政大地震後、幕末までである。各期それぞれに主軸方位を南北に有す建物が検出されているが、それらを構成する柱穴あるいは礎石などは重複して検出されていることから、建物が同じような場所に繰り返し構築されていたことがわかる。

地下室は１期に２基、2 期に４基、3 期に 12 基、所属不明が２基の計 20 基検出されているが、一見して調査区西寄りに、南北に連なる状況が確認できる。これを前



全体図



地下室の規模(cm)

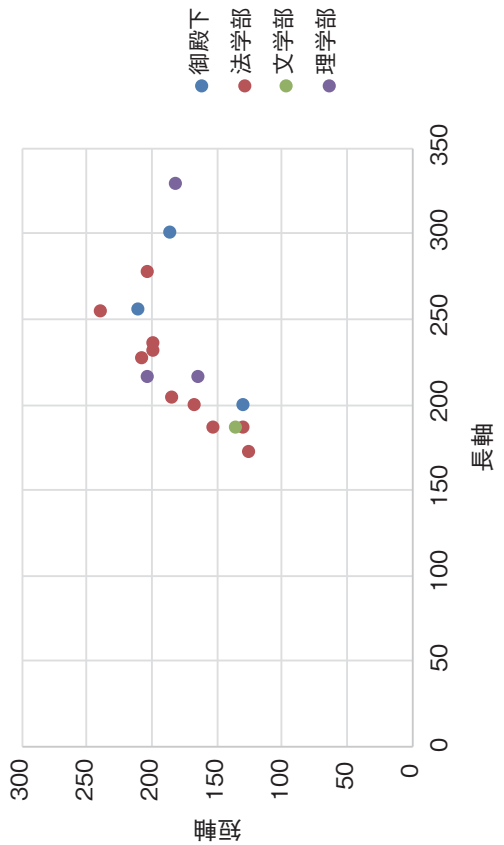
24図　龍岡門別館地点

述した建物遺構の検出状況と照合すると、建物遺構の内側に地下室が構築されたものはなく、いずれも建物遺構の西側に位置している状況が確認できる。地下室同士が重複するものは3期のSU7とSU9意外には確認できず、隣接して地下室を構築するような例も確認できない。地下室の形態を確認すると調査区外となって形態が判然としないものも多いが、1期には3類、2期と3期には2類と3類が確認される。2期と3期で検出された地下室は、掘り方に礎石を伴う堅牢な基礎構造をもった「表長屋」に帰属する地下室である。この長屋建物は絵図面の分析から中級以上の藩士が居住する長屋建物であったことが指摘されている（田中1995）。前述した地下室の検出状況や、遺物が大量に出土する地下室が認められない点なども、中級藩士が居住する外部に面した「表長屋」であったという事が影響していると推察される。また重複して構築される地下室があまりないという点は、下級藩士が居住する長屋建物より地下室を構築する空間の確保が少しは容易であったということが影響している可能性もある。

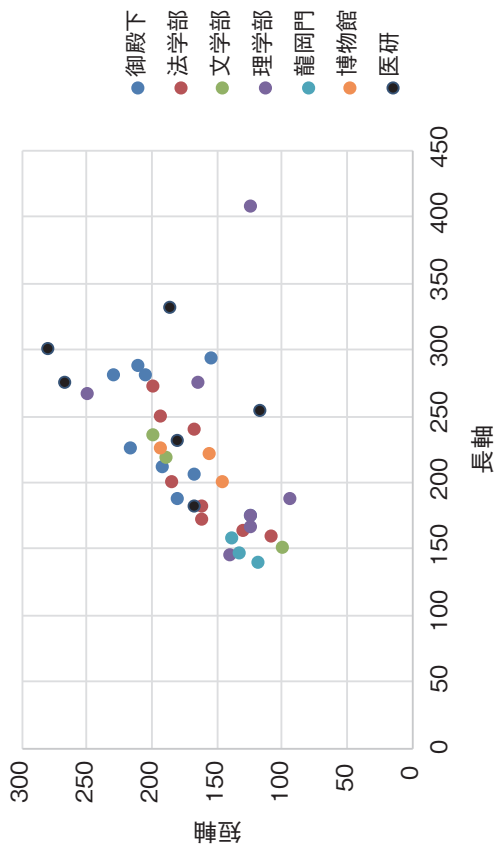
坑底規模が確認できた地下室は20基中5基と非常に少ないが、2類は長軸150cm前後、短軸100cm～150cmの規模にまとまり、調査区中央から南寄りに分布し、3類は大きさが一律ではないが、北寄りに分布している状況が確認された。長屋建物での利用状況などに応じた地下室が選択され、構築された可能性もある。

(2) 医研地点の地下室との比較

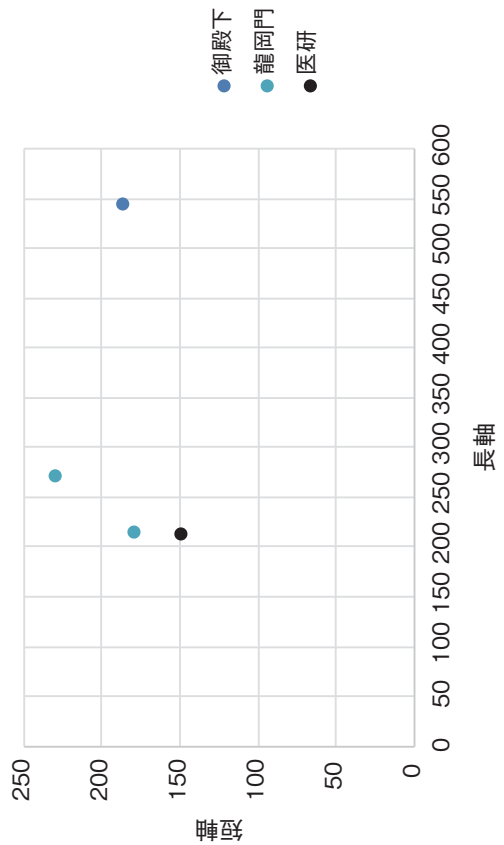
調査地点毎に地下室の分布や形態、年代、規模などをそれぞれの地点の空間利用と照らし合わせてみてきた。その中で医研地点の7、8区で検出された地下室群と同じく帯状に分布し、地下室同士が重複する状況などが確認される地点は詰人空間を調査した事例に多く、医研地点のSD236・2095・3100より北側で検出される地下室のように点在し、重複する地下室も余り多くない状況は御殿空間を調査した事例に多い傾向が確認された。また2類や5類は概ね全ての地点で確認されるが、3類、4類、6類が検出される地点や空間は比較的限定される事も確認できた。すなわち1章で触れた「1、2類の小型の地下室は「詰人空間」に、3、4類の大型の地下室は「御殿空間」に属する傾向が強い」という成瀬の指摘を再確認し、さらに今回分類に加えた5類と6類の地下室につ



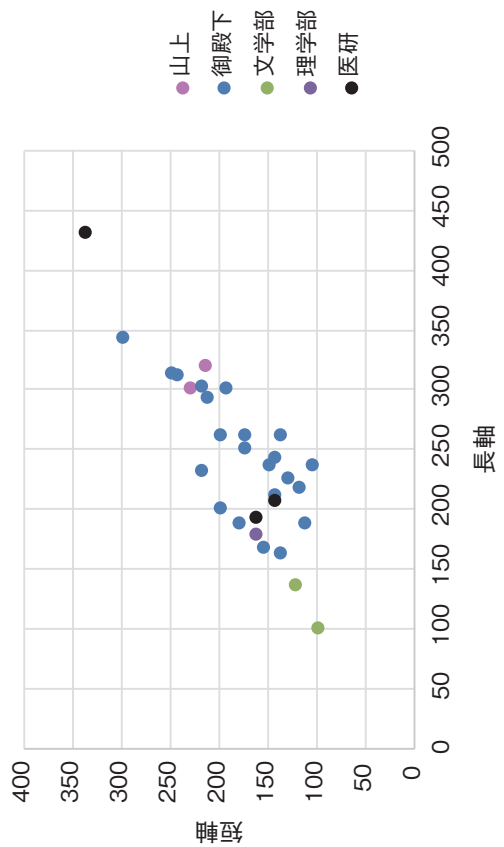
1類



2類



3類

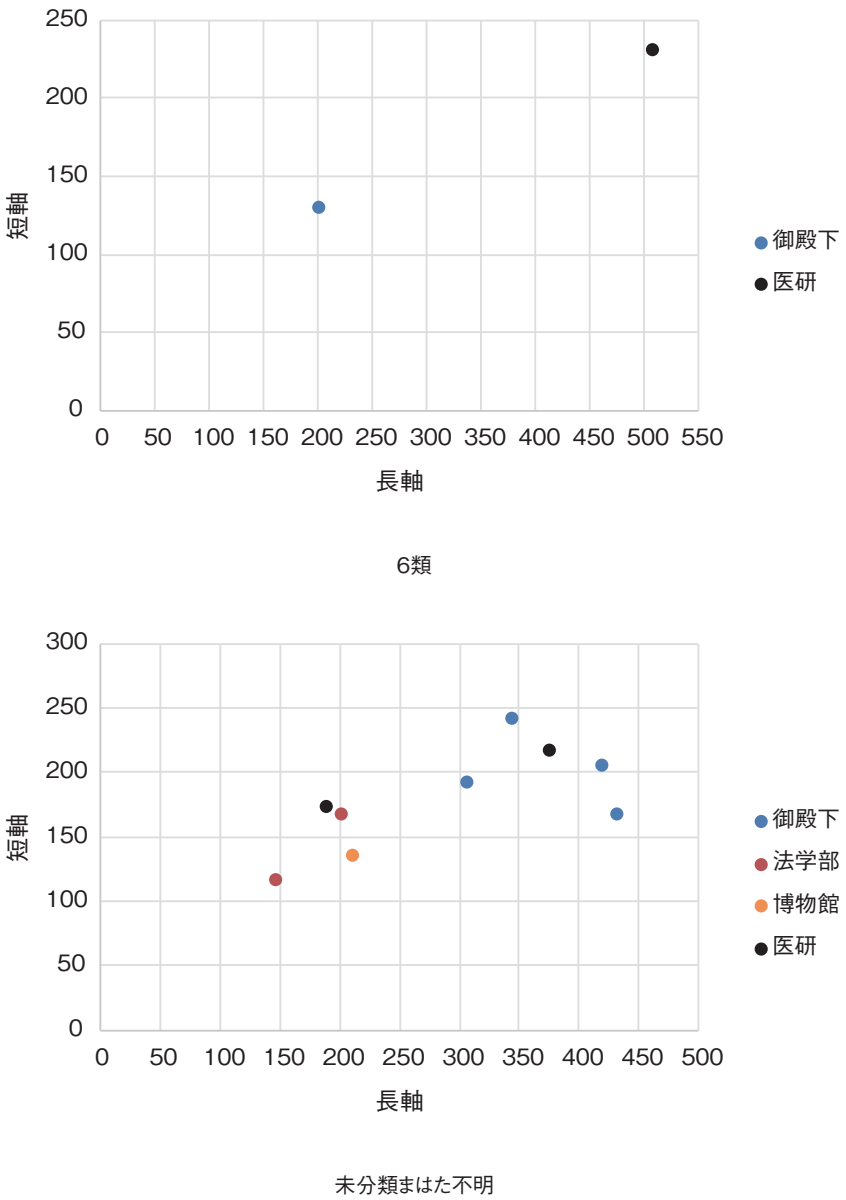


5類

25図　各地点の地下室の規模（cm、形態別）（1）

いても、5類は概ね全ての空間に、6類は御殿空間に帰属する傾向がうかがえる。

次に各地点の地下室と医研地点の地下室の坑底規模を形態別に比較してみた（25、26図）[(2)]。一見していずれの形態も医研地点や御殿下記念館地点のような御殿空間に帰属する地下室の規模の方が大型傾向にあり、これはその他とした形態が類型化できない地下室についても同様である。ほぼ全ての地点で検出されている2類をみると、同じ詰人空間の中でも理学部7号館地点や博物館新館地点のような上級あるいは中級以上の藩士が居住する長屋建物に帰属する2類の方が、法学部4号館地点、文学部3号館地点のような下級藩士が居住する長屋建物に帰属する2類より大型である。また同じ御殿空間でも御殿下記念館地点のような周縁部の役所建物や上級藩士の居宅などに帰属する2類よりも、医研地点のような表御殿内に相当する空間で検出される2類の方が大型であるという傾向も確認される。1類、2類、5類は各地点で規模を確認すると、ある程度グルーピングができるが、3類はそれがみられない。検出数の差ということもあろうが、1類、2類、5類は構築に際してある程度規定の規模のようなものがあり、3類はそのような規定がなく自由度が高かったということがあるのかもしれない。



26図　各地点の地下式の規模（cm、形態別）(2)

同じ詰人空間、御殿空間でも形態や分布、規模などに違いが確認されるが、その要因は成瀬がすでに指摘しているように空間利用以外の要素が少なからず影響していると考えられる。例えば地下室が個人利用なのか共同利用なのかといった利用状況、地下室の帰属先がどのような階層、規模のところなのかといった帰属先の階層差、構築場所が長屋建物の前庭のようなところなのか、外界と隣接する長屋塀のような場所なのか、建物と建物の間の坪庭のような場所なのかといった構築場所の状況やスペースの広狭、周辺環境の違いなど様々な要因で選択され、それが地点毎の地下室の形態や規模などの様相差に反映している事は容易に想定される。

3.6 類とした地下室

本節では入口、坑底ともに平面形が方形または長方形を呈し、坑底四辺に多数の柱穴を有す地下室（6類）について考察する。これまでに確認された6類は、医学部附属病院中央診療棟地点（東京大学遺跡調査室 1990）、医学部附属病院設備管理棟地点（東京大学遺跡調査室 1990）、医学部附属病院外来診療棟地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2005）、薬学部新館地点（東京大学埋蔵文化財調査室 1997）、医学部附属病院入院棟A地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）、総合研究棟（文･経･教･社研）地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2002）、医学部

附属病院第２中央診療棟地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2004）、薬学系総合研究棟地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2006）の８地点で計 31 基である（2 表、27 ～ 32 図）。

各地点の概要と６類の検出状況を確認していくが、2 節と同じく地点名直前の番号は 17 図に示した本郷地区南側調査地点の番号と対応しており、本郷キャンパス内での位置は本図を参照されたい。なお 15、54、55、66 は現在整理作業中であり、調査地点や地下室の詳細は後日明らかにしたい。また地下室の文中表記に「SK」と「SU」が混在しているが、表記は各地点の報告に準じている。

（1）６類が確認された調査地点

４医学部附属病院中央診療棟地点

医学部附属病院中央診療棟地点（以下、中診地点）は東大病院の中央やや南寄り、現在の中央診療棟１に当たる地点である（17 図 4）。江戸時代には北側部分が加賀藩の支藩である富山藩邸に含まれるが、大半は同じく支藩である大聖寺藩邸に該当する。６類に分類される地下室は G28-1、I20-3 の２基確認され（27 図）、出土遺物の年代観から G28-1 は 17 世紀中葉に、I20-3 は 18 世紀前半頃に比定される。120-3 の坑底の柱穴は布堀りで構築されたものであり、壁と柱の間には丸竹を横積みにし、竹壁を構築したような痕跡が確認されている。

４医学部附属病院設備管理棟地点

医学部附属病院設備管理棟地点（以下、設備管理棟地点）は先述した中診地点の南側に位置し、江戸時代には無縁坂に続く道を挟み、北側に大聖寺藩、南側に越後高田藩が位置していた藩邸境を調査した地点である（17 図 4）。６類に分類される地下室は越後高田藩側で検出されているが、調査面積も限定され、藩邸内のどのような空間に構築された地下室かは報告されていないが、周囲に礎石や柱穴列などがほとんど確認されず、土坑や地下室などが比較的密に重複している状況が確認されることから、藩邸内の表向きの場所というよりは縁辺部の空閑地であったと推測される。６類の地下室は４基（AE34-5、AE35-6、AE36-4、AE36-6。27、28 図）確認され、出土遺物からそれらは概ね 17 世紀末から 18 世紀前半ぐらいに比定される。AE36-4 以外は他遺構と比較的密に重複しており、壁面補強の目的で６類のような地下室が構築された可能性がある。

10 医学部附属病院外来診療棟地点

医学部附属病院外来診療棟地点（以下、外来地点）は医学部附属病院の西部、龍岡門から南北にのびるバス通りに面した位置にあり（17 図 10）、絵図面と照合すると加賀藩邸と加賀藩の支藩である大聖寺藩邸の地境付近に比定され、発掘調査でもその地境塀の痕跡が確認されている。報告によると地下室は 63 基検出され（半地下室 [3] を含む）、そのうち６類に分類される地下室は６基（SK134、SK139、SK166、SK176、SK269、SU313。28、29 図）確認される。本地点は出土遺物の年代観と文献資料との対比から大きく３つの画期が確認され、６類は２期（天和３（1683）年の屋敷割り変更以降から文政 12（1829）年に調査地点の東側約 1/3 が大聖寺藩邸、西側約 2/3 が加賀藩邸に含まれた段階）に SK134、SK139、SK176、SU313 が加賀藩邸内において、３期（文政 12 年から幕末に本地点の大部分が再び大聖寺藩邸に含まれた段階）に SK166、SK269 が確認される。報告では２期の SK134、SK139、SK176、SU313 は加賀藩作事方役所の附属施設＝共有施設として構築され、３期の SK166、SK269 は形態や検出状況などが２期で検出された SK139 や SK176 などと類似することから、大聖寺藩邸の詰人空間内の何らかの共有施設に附属する施設であった可能性が高いと推定されている [4]。

SK139 は東大編年Ⅳｂ期、SK166 は東大編年Ⅷｃ期の主要遺構として定量分析されるなど 100 個体以上の陶磁器類が出土し、さらに SK166 からは比較的多くの動物遺体も出土していることから、両地下室とも廃絶後は塵芥溜に利用された様子がうかがえる。

15 薬学部新館地点

薬学部新館地点（以下、薬新地点）は薬学部本館地点南側に位置する（17 図 15）。本地点は絵図面との照合から「御膳所」「御末」などと書かれた奥御殿付近に比定される。調査では近世の盛土や生活面は確認されなかったが、約 100 基の遺構が検出され、そのほとんどが出土遺物の年代観から 17 世紀前半から中葉に比定される遺構である。地下室は５基確認されており、うち４基（SU51、SU95、SU98、SU103）が６類に分類される地下室である（29 図）。SU51 からは 17 世紀中葉、SU95 からは 17 世紀後葉から 18 世紀中葉、SU98 からは 18 世紀中葉から後葉、SU103 からは 18 世紀代の遺物が出土しており、奥御殿において６類の地下室が 17 世紀中葉から 18 世紀代に存在していたことが確認できる。

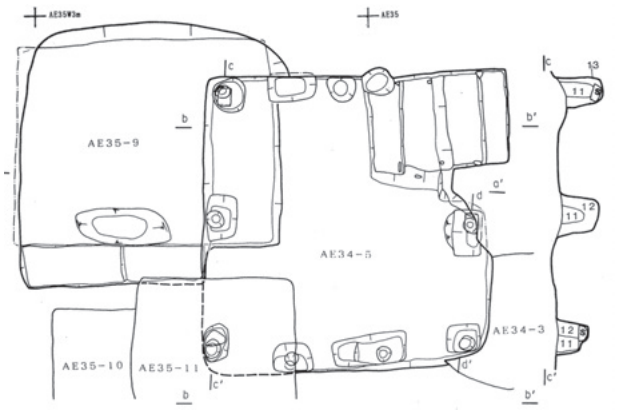
23 医学部附属病院入院棟Ａ地点

医学部附属病院入院棟Ａ地点（以下、入院棟Ａ地点）は医学部附属病院南東部に位置し（17 図 23）、調査区大半は天和２（1682）の火災までは加賀藩邸（黒多門邸）、火災後は大聖寺藩邸となる。また東側部分は一部講安寺の寺域も含む地点である。６類に分類される地下室は５基（SU131、SK1115-2、SK1140、SU1182、SU1194。30、31 図）確認され、いずれも大聖寺藩邸で検出され

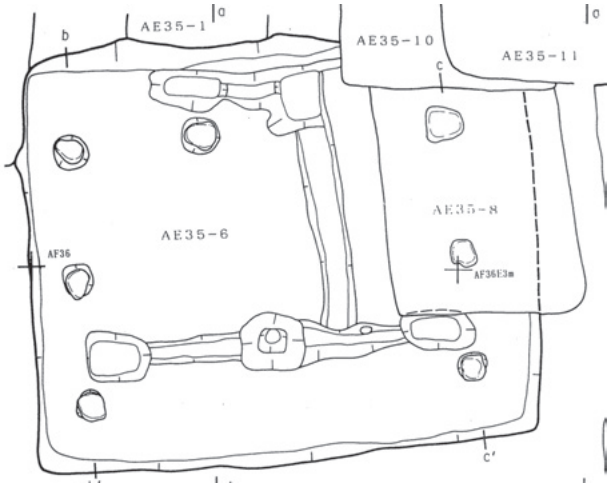
2表　6類地下室検出状況

地点	遺構No.	種別	重複	年代	藩	帰属	
医研	210·3095旧	SU		?	加賀	御殿・表御殿	
御殿下	244		○		加賀	御殿・頭分一	壁面に板材圧痕
中診	I20-3	SU		18前半	大聖寺	御殿？・ 廣式入口付近	テラスあり。坑底の柱穴は布堀り？壁と杭の間に丸竹を横積みにして壁を構築
	G28-1	SU		17中	大聖寺	御殿？・ 長局と廣式の間	
設備管理棟	AE34-5		○	17末～18前半	越後高田	?	坑内に階段付設。覆土焼土層中から「享保弐（1717）年」銘のある瓦燈出土
	AE35-6		○	18前半	越後高田	?	坑底に水溜あるいは仕切りと推定される溝あり。
	AE36-4			18前～中	越後高田	?	坑底杭穴と壁面との間に幅2、3cmの板材が横積みされていた痕跡あり
	AE36-6		○	?	越後高田	?	ロームブロック主体の黄褐色土で貼床。
外来	134	SK		17後～18前	加賀	詰人・役所一（作事方）？	元禄十六（1703）年火災一括資料
	139	SK	○	17末～18前	加賀	詰人・役所一（作事方）？	元禄十六（1703）年火災一括資料
	166	SK	○	Ⅷc	大聖寺	詰人・共有空間？	16箱におよぶ大量の遺物出土
	176	SK	○	17c 末	加賀	詰人・役所一（作事方）？	坑底が三重の入れ籠状を呈す
	269	SK	○	18c 後～ 19c 前	大聖寺	詰人・共有空間？	何らかの理由により、東側に拡張し、方形のピットを伴うものに作り替え、遺構の廃絶まで機能
	313	SU	○	17c 末	加賀	詰人・役所一（作事方）？	元禄十六（1703）年火災一括資料
薬新	51	SU		17中（混入あり）	加賀	御殿・奥御殿	98と重複
	95	SU		17後～18中	加賀	御殿・奥御殿	
	98	SU	○	18中～後	加賀	御殿・奥御殿	51と重複
	103	SU		18？	加賀	御殿・奥御殿	出土遺物はほぼ釘のみ
入院棟A	131	SU	○	18前半	大聖寺	御殿？・ 表御殿付近？	柱穴上に角材を口の字状に組み、その上にローム主体土を貼り、さらにその上に切石を口の字状に設置。切石周囲には玉砂利、破砕礫を含む暗黄褐色土を充填し、突き固めた重層状況を呈す。
	1115-2	SK		19前半	大聖寺	詰人？・役場長屋建物間の空閑地	5段階にわたって基礎を構築、床下が沈下しない為の工夫？最上段は口の字状の板材（？）痕跡あり。厚い板囲いと推定
	1140	SK	○	18前半	大聖寺	詰人？・裏門と廣式との間の空閑地	東、西部分の立ち上がりが二重になっており、上部構造があった可能性が指摘されている
	1182	SU		18前半	大聖寺	詰人？・役場長屋建物間の空閑地	
	1194	SU		18後半	大聖寺	詰人？・裏門と廣式との間の空閑地	掘り方内側に階段を敷設。坑底柱穴の上に貼床を確認。貼床上には倒れた状態の板材や、その板材と貼床の間に瓦片が多く確認される状況から、瓦を使用した上部構造を有す？
経済	286	SU		18中～後	加賀	御殿・表御殿	
2中	217	SU		17後？	大聖寺	御殿？	
薬総	10	SU		18中～後？	加賀	御殿・長局	
	11	SU		18中～後	加賀	御殿・長局	
	118	SU		18中～後？	加賀	御殿・長局	井桁状の張り出し
	120	SU		18中～後	加賀	御殿・長局	井桁状の張り出し
	125	SU		18前半？	加賀	御殿・長局	井桁状の張り出し
	136	SU		18中～後（一定量18前含）	加賀	御殿・長局	井桁状の張り出し

医研　SU210.·3095



設備管理棟　AE34-5

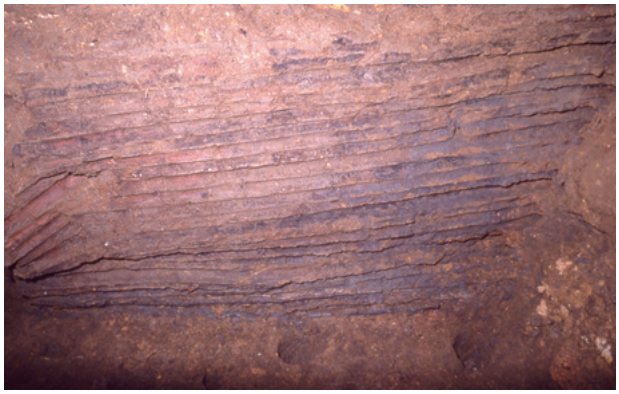


設備管理棟　AE35-6

御殿下　244号

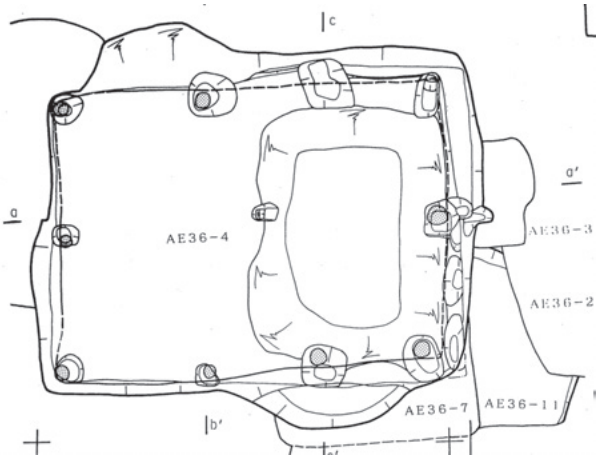
中診　G28-1

中診　I20-3

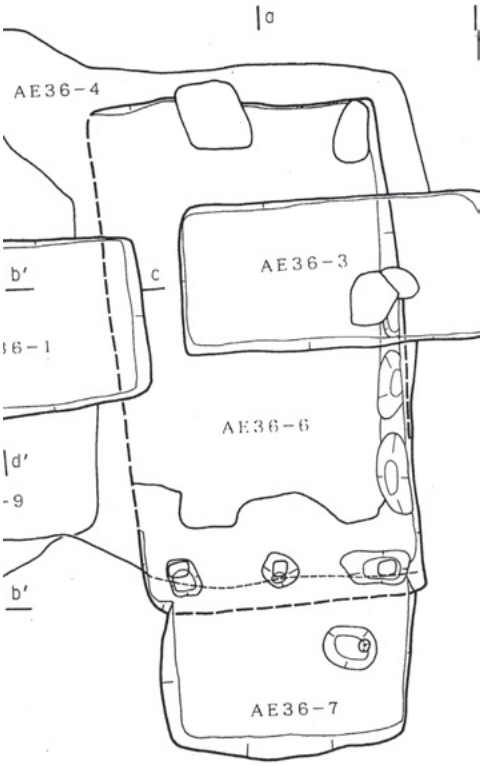


中診　I20-3壁面

27図　医研、御殿下、中診、設備管理棟（1）地点



設備管理棟　AE36-4



設備管理棟　AE36-6

外来　SU134

外来　SU139

外来　SU166

外来　SU176

28図　設備管理棟(2)、外来(1)地点

外来　SU269

外来　SU313

薬新　SU51

薬新　SU98

薬新　SU95

薬新　SU103

29図　外来(2)、薬新地点

入院棟A　SU131

入院棟A　SU131床面下2

入院棟A　SU131床面下1

入院棟A　SU131床面

入院棟A　SK1115-2

入院棟A　SK1115-2石検出

入院棟A　SK1115-2木材痕

入院棟A　SK1115-2板材痕

30図　入院棟A(1)地点

入院棟A　SK1140

入院棟A　SU1182

入院棟A　SU1194

経済　SU286

2中　SU217

薬総　SU10

薬総　SU11

薬総　SU118完掘

31図　入院棟A(2)、経済、2中、薬総(1)地点

薬総　SU118根太?検出

薬総　SU120

薬総　SU125

薬総　SU136

32図　薬総(2)地点

ている。大聖寺藩邸は元禄16（1703）年の火災によって被災し、新たに藩邸構築が行われるが、それに伴う盛土造成された面（A面）で6類の地下室は全て検出されている。地下室から出土した遺物の年代観をみると、SU131、SK1140、SU1182が18世紀前半、SU1194が18世紀後半、SK1115-2が19世紀前半に比定され、大聖寺藩邸では18世紀から19世紀前半に6類の地下室が構築されていたことが確認される。成瀬は入院棟A地点の南側1/3ほどが御殿空間、残り北側2/3は詰人空間に該当すると予測されており（成瀬2016）、それによると入院棟A地点で確認されたSU131が御殿空間に、それ以外は詰人空間に帰属する可能性が高い。

54 総合研究棟（文・経・教・社研）地点

総合研究棟（文･経･教･社研）地点（以下、経済地点）は経済学部本館南側に位置し（17図54）、発掘調査の成果と絵図面との照合から19世紀前葉は加賀藩十三代藩主前田家斉の妻・溶姫の居宅である「御住居」内の「膳所」付近と推定される地点である。調査では2つの生活面（A、B面）が確認され、A面が溶姫御守殿に伴う生活面であると推定され、その面からは「膳所」の附属施設と推定されている間知石組の地下室（SK107）も確認されている。6類に分類されるSU286（31図）はA面の下、B面で検出された地下室であり、18世紀中～後葉の遺物が出土している[(5)]。

55 医学部附属病院第2中央診療棟地点

医学部附属病院第2中央診療棟地点（以下、2中地点）は、先述した中診地点の南側、入院棟A地点の西側に近接し、現在の中央診療棟2の地点（17図55）である。両地点と同じく、天和2（1682）年の火災を契機として、火災以前は加賀藩邸、火災後は大聖寺藩邸に該当する。傾斜面の造成に伴う生活面が9面確認され、6類に分類されるSU217は2～3面で検出された享保15（1730）年を下限とする遺構である（31図）。

66 薬学系総合研究棟地点

薬学系総合研究棟地点（以下、薬総地点）は龍岡門から北へのびるバス通り沿いに位置する（17図66）。本地点は絵図面との照合から、御殿空間奥向きの長局付近に比定される。6類に分類される地下室6基（SU10、SU11、SU118、SU120、SU125、SU136。31、32図）は、宝永の火山灰降灰（1707年）以降の生活面において、SU11、SU125、SU120の1列とSU118、SU136の1列の東西2列の地下室群が北辺を揃えて並ぶように検出されている。なお本地点の6類の地下室は、6基のうち4基が開口部に井桁状の張り出しを有す特徴的な形態を呈す。出土遺物をみると、SU125が概ね18世紀前半、それ以外のSU10、SU11、SU118、SU120、SU136からは18世紀中葉から後葉に比定される遺物が出土している。18世紀後半の藩邸を描いたとされる絵図面「江戸御上屋敷惣御絵図」や「江戸屋敷総絵図」と照合すると、いくつかは「新側」と記載された長局北側の「物置」と記載のある部分に該当する可能性がある。詳細な検討は報告書に委ねるが、絵図面で「穴蔵」と描かれる以外の地下室が存在する可能性があり、注目される。

（2）各地点で検出された6類地下室の比較

これまで概観してきた調査地点に、医研地点、御殿下記念館地点を加え、各地点で確認された6類地下室の年代、帰属先、個々の特徴などを確認し、分布図と合わせると以下のような事がみえてきた。

1. 谷筋や斜面地などの地盤の良くない場所に構築される傾向が強い（2表、33図）

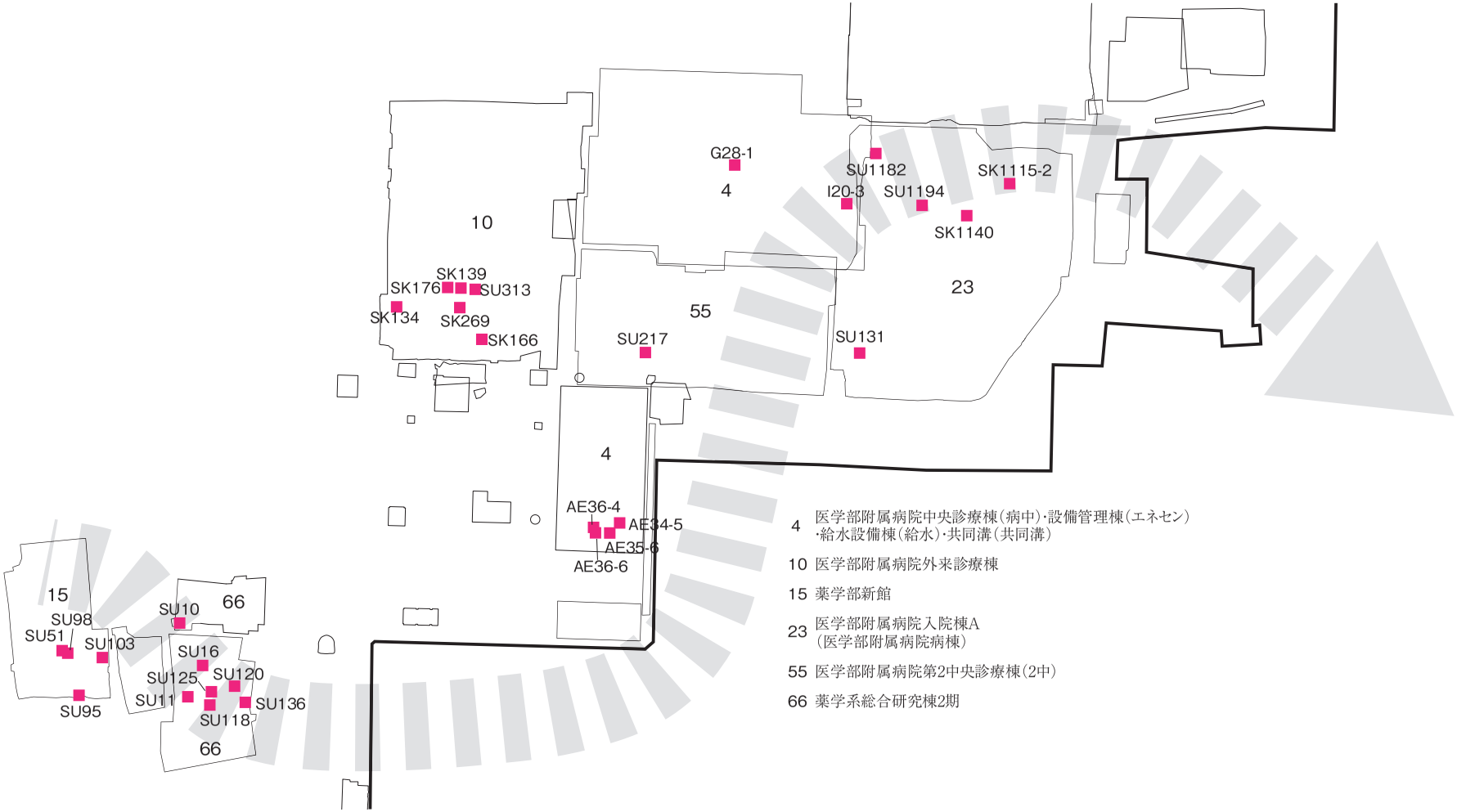
2表に示したように、6類は御殿空間だけでなく詰人空間においても検出され、加賀藩以外にもその支藩である大聖寺藩や越後高田藩においても構築されている状況が確認された。医研地点、御殿下記念館地点以外の6類の分布状況を確認してみたところ、33図に示した状況であることが明らかとなった。灰色破線は病院地区における旧地形の開析谷の位置を示している（成瀬2016）が、これをみると6類は谷筋や斜面地などの地盤的に良くない場所に構築される傾向が強い地下室であることが確認できる。

しかし、医研地点も御殿下記念館地点も斜面地ではなく、33図で示したように谷筋あるいは斜面地ではない10の外来地点においても6類が構築されている状況が確認されることから、地形的要因以外にも6類が選択された要因があることが想定される。

2. 役所あるいは共有施設の空閑地などに構築される傾向が強い

確認された31基のうち17基が御殿空間、10基が詰人空間で確認されるなど御殿空間で確認される事例は確かに多い。さらに両空間のどのような建物あるいは場所に構築されるのかを確認したところ、御殿下記念館地点の244号遺構新以外は、役所あるいは共有施設の空閑地などに構築されている事例が多い事が確認できた。ちなみに御殿下記念館地点の244号遺構新は、第2節で触れたように上級藩士居宅の附属施設である可能性が高く、今回確認できた唯一の個人利用の6類であり、他の6類と比較してかなり坑底規模が小さいのもそれが影響していると推測され、利用状況に応じた規模の6類の地下室が構築されたのであろう。

また6類地下室の規模を御殿空間と詰人空間で比較し



33図　開析谷と6類地下室の分布(成瀬2016に筆者が加筆)

てみると、御殿空間の６類の方が規模が少し大きく、また同じ御殿空間であっても加賀藩の方が大聖寺藩の６類より大きい傾向が看取される（34 図）。ただし個々に６類をみると、御殿空間、詰人空間にかかわらず規模のバラツキが大きく、帰属先の利用状況や構築スペース、費用などに応じて構築されるオーダーメイド色の強い形態の地下室であったと推測される。

経済地点の SU286 は突出して規模が大きく、６類以外の地下室をみても SU286 のように長軸、短軸がともに 500cm 以上を測るものはない。詳細は報告書に委ねるが、SU286 は他の６類の地下室と異なり、坑底中央付近が周囲より少し高く、一辺の柱穴の検出状況が他三辺のとは全く異なる様相を呈すなど、規模、構造からは、地下室とは異なる建物遺構である可能性も考えられる。

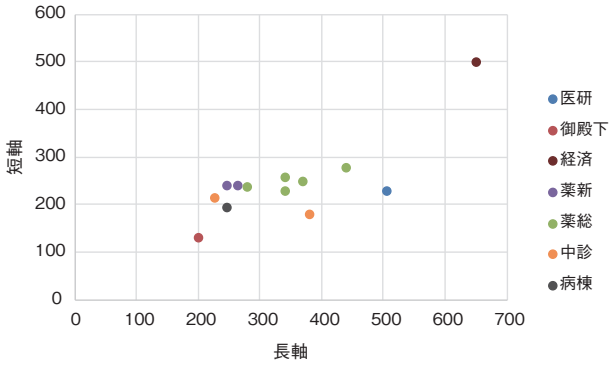
3. バリエーションが豊富

６類とした地下室の基本的な特徴は「根石や柱痕を有す柱穴が坑底四辺に多数めぐる」というものであるが、それ以外の部分では地下室毎に異なる特徴を有すものが存在することが確認された。例えば薬総地点の SU10 や SU118 のように柱穴の上に根太状の横木痕跡が確認できるもの（31、32 図）、同地点 SU120 や SU125 などのように開口部に井桁状の張り出しを有すもの（32 図）、入院棟 A 地点の SU131 のように柱穴の上に「ロ」の字状に切石や板材が確認できるもの（30 図）、同地点の SU1194 のように階段を有すもの（31 図）、外来地点 SU313 のように柱穴設置位置の壁面を掘削しているもの（29 図）などである。複雑な構造を呈すものは御殿空間に多い傾向はあるが、必ずしもそうとは言い切れず、地下室の規模と同様に帰属先の利用状況や構築スペース、費用などにより最終的な形態は選択、構築されたと推測される。なお入院棟 A 地点 SU131 のように坑底の柱穴が貼床上で検出されない事例もあり、６類地下室の形態が地下室床下を地固めするための基礎構造の１つであったことも確認される。

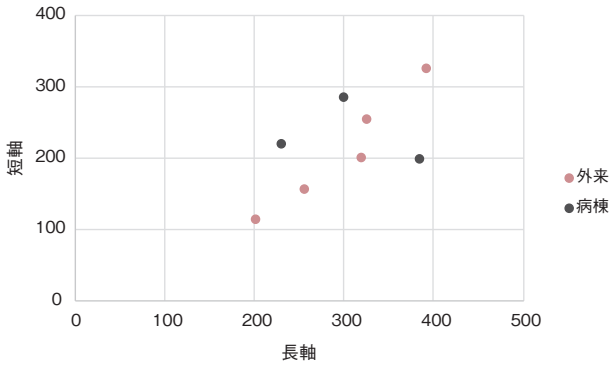
4.17 世紀中頃から確認され、幕末まで継続的に確認される

最も古い６類の地下室は 17 世紀中葉頃に比定される中診地点の G28-1 や薬新地点の SU51 であるが、その後も６類は幕末まで継続的に確認される。現状では空間利用や帰属先の違いによって６類の出現時期や利用期間などに違いは確認できない。

６類が構築された場所は、地形的な要因や限られたスペースに地下室を繰り返し構築あるいは改築せざるえない場所で、地下室補強を目的として構築されたものであ



御殿空間



詰人空間

34図　6類地下室の規模（cm）

ることなどが確認されたが、外来地点の SK134、医研地点の SU210・3095 旧、経済地点の SU286 などはその例になく、６類の地下室には前述してきような要因以外で選択、構築されるものがある事も確認された。

おわりに

医研地点で検出された 19 基の地下室のあり方を検討していくと２つの異なる分布状況が確認された。それぞれの形態、年代、遺物の出土状況などを分析したところ、形態や遺物の出土状況、埋戻し方なども異なる事が看取された。そこでこのような様相差が生じた要因を他地点の地下室と比較する中で探っていくと、医研地点で確認された地下室の２つの異なる様相が、単純に御殿空間と詰人空間の違いではなく、それぞれの空間のどのような場所（中心部なのか、縁辺部なのか）で、どのような使われ方をしたのか（居住区？役所？個人宅？空閑地？）、構築スペースの広狭、階層差など複数の要因が影響している状況が確認できた。例えば同じ御殿空間であっても役所あるいは上級藩士？の居宅に伴うとされる御殿下地点の地下室の様相と、奥御殿の膳所付近とされる薬新地

点の地下室の様相と、長局とされる薬総地点の地下室の様相は三者三様で、それはまた表御殿から中之口御門付近にいたる空閑地を含む医研地点の地下室の様相とも異なっている。藩邸内の様子が詳細に描かれた「江戸屋敷絵図」などを見ると、表御殿付近は多数の部屋が廊下によって複雑につながり、部屋と部屋の間に様々な広さの空閑地が存在し、その空閑地や周囲に建物のない空閑地に「穴蔵」と描かれた構築物が点在している状況を確認する事ができ、医研地点の地下室がSD246・3100以北で点在して検出される状況は、このような絵図の状況を投影していると思われる。

御殿空間で検出される地下室に様相差が確認される一方で、次のような共通する点も確認された。すなわち①比較的規模が大型のものが多い。②同時期に比定される地下室同士が重複する例は余りない。③地下室の廃絶に際し塵芥溜に転用される例は余りなく、塵芥が廃棄される場合も構築材として再利用が可能な瓦などが中心で、基本的には塵芥（遺物）を含まない比較的精良な土で埋め戻しているなどである。①の要因は役所などの共有施設で使用する地下室が多いためと思われる。②の要因は重複させなくても十分なスペースを確保することが可能であった事に加え、御殿空間では「穴蔵」が井戸などと同じく絵図に描かれる事がある施設であり、「穴蔵」を新設する際には絵図に明示された既存の「穴蔵」を避けて新設することは可能であったと推測できる。③の要因は地下室の廃棄、廃絶理由が空間利用の変化に伴うものでなければ、その場所（空間）はひき続き御殿空間として利用されるのであり、地面の陥没や塵芥の飛散がないように埋戻しなどに神経を払ったことは容易に想像できる。

今回の論考において瓦積みの穴蔵（SU210・3095新）についてはほとんど触れなかったが、医研地点の調査後も「瓦積み」の地下室は本郷構内では検出されていない。ただ経済地点で検出された溶姫御殿の膳所付近に描かれた施設に比定される可能性の高い「間知石組」地下室（SK107）と類似する地下室が、和歌山城二の丸大奥[(6)]や岡山城本丸中の段[(7)]でも確認されており、御殿空間における地下室の1形態として「石組」が採用されていた状況は確認できる。

中之口御門前の空閑地に構築された地下室であるSU210・3095は、形態を替えてまでも使用を続けるだけの必要性や利用状況があった地下室ということになるのだろうが、SU210・3095に求められた機能や利用方法がどのようなものであったのか、形態を替えた理由が利用状況の変化によるものなのかといった点も今後思考していきたい。

本稿の執筆に際し、成瀬晃司氏には地下室の形態分類などをはじめ様々なご教示を頂きました。また図版作成に際し、香取祐一氏にご助力頂きました。記して感謝いたします

【註】

(1)「東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要」執筆時にはSX210として取り上げた。しかし、執筆後も医研地点では断続的に発掘調査が行われ、最終的にⅣ次調査まで行われた。結果、Ⅰ次調査で調査されていたSX210もⅢ次調査時に更に西側に拡がることが確認され、その際にはSU3095として調査されたため、報告書報告編刊行時にはSU210・3095に統合し、報告している。

(2) 報告書が刊行されている加賀藩の調査では、4類が確認されたのは医研地点のみであり、その医研地点の4類地下室はともに計測不可であったためグラフ化していない。

(3) 外来地点では関東ロームによる天井をもたない地下室は半地下室として「SU」でなく「SK」として報告されていると本稿執筆中、成瀬より指南を受けた。

(4) 成瀬は筆者が6類としたSK269（報告書中では大型方形土坑と分類）のような遺構が外来地点の2-1期～2期の加賀藩邸側に位置し、御殿空間や役所などの共有空間部分に構築される遺構であることを指摘している。

(5)『東京大学構内遺跡調査研究年報』3には「SU268」として報告され、「17世紀後半の遺物が出土している」とあるが、後日、整理作業中に「SU286」の誤りであることが判明した。またそれに伴って出土遺物も18世紀中～後葉のものであることが確認された。詳細は今後刊行される報告書を参照されたい。

(6) 和歌山城二の丸地点の地下室は、絵図面の「御数寄屋」前の垣根で囲まれた「茶庭」の外、奥庭の空閑地にある「穴蔵」に比定されている。その地下室のものと思われる覆屋工事見積り（棟梁が藩の大普請方へ提出した工事見積「覚」）があり、そこには上屋の部材の名称・寸法や費用、施工方法などが記され、上屋構造を読み取ることができるとして、検出された地下室とを比較検討されている（高橋2019）。

(7) 岡山城本丸中の段は表書院であり、元禄絵図（1700年）、寛保絵図（1744年）には表書院北西部に集中して4基ないし3基の穴蔵が描かれている。発掘調査では3基が確認され、うち穴蔵1に比定されるものが豊島石製の石組の穴蔵であり、元禄・寛保の両絵図に記載がある。また絵図面の穴蔵に描かれた「□」の注記位置が、調査で確認された穴蔵坑底の梯子固定穴（坑底の対角線上に2箇所確認）と一致するという。改築あるいは修繕がどのくらいの頻度で

行われたかは不明であるが、絵図からは少なくとも岡山城の石組の穴蔵１は同じ場所に40年以上存続し続けた事がわかる。

【参考文献】

大成　可乃 1997「「瓦積みの穴蔵」について」『東京大学構内遺跡調査研究年報 1』東京大学埋蔵文化財調査室
岡山市教育委員会1997『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』
髙橋　克伸 2019「補論１　和歌山城二之丸の大奥穴蔵について」『史跡和歌山城第 31 ～ 38 次発掘調査報告書 - 二の丸西部保存整備事業に伴う発掘調査 -』和歌山市産業交流局観光国際部和歌山城整備企画課
田中　政幸 1995「加賀藩上屋敷本郷邸における長屋類型と詰人空間構成」『東京大学史紀要』第 13 号　東京大学史史料室
東京大学総合研究博物館 2000『東京大学コレクションＸ　加賀殿再訪』
東京大学総合研究博物館2017『赤門－溶姫御殿から東京大学へ』
東京大学遺跡調査室 1989『東京大学本郷構内の遺跡　理学部７号館地点』
東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡　法学部４号館・文学部３号館建設地遺跡』
東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』
東京大学埋蔵文化財調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』
東京大学埋蔵文化財調査室 1997『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
東京大学埋蔵文化財調査室 2002『東京大学構内遺跡調査研究年報』3
東京大学埋蔵文化財調査室 2006『東京大学構内遺跡調査研究年報』5
東京大学埋蔵文化財調査室 2005『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院外来診療棟地点』
東京大学埋蔵文化財調査室 2016『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟Ａ地点』
成瀬　晃司 1990「江戸藩邸内の土地利用研究の一指針」『東京大学本郷構内の遺跡　法学部４号館・文学部３号館建設地遺跡』
成瀬　晃司 1994「江戸藩邸の地下空間－東京大学本郷構内の遺跡を例に－」『武家屋敷　空間と社会』山川出版社
成瀬　晃司 2016「加賀藩本郷邸における斜面地開発と変遷」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟Ａ地点研究編』
藤本　強 1990『埋もれた江戸』平凡社

加賀藩江戸屋敷における能

－ 13 代藩主斉泰の時代を中心に －

*村上　尚子

はじめに

赤門を象徴とする東京大学の本郷キャンパスは、かつて加賀藩前田家上屋敷本郷邸であったことは、よく知られている。中でも医学部教育研究棟の建つ位置は、「上屋敷内の御殿空間南部、育徳園の南側の台地上部に位置し、18 世紀以降には中之口御門から詰人空間を含むエリアに該当」するという。前田家がこの地を屋敷地として使用するようになった早い時期－遅くとも元禄期には－既に御殿が建築されていたと、この約 1,200 ㎡にわたる区域の発掘調査にあたった堀内秀樹氏は報告されている [(1)]。

その報告の中で、能舞台の遺構が発見されたとある。舞台の大きさ南北 7.2m、東西 4.6m で、東南より橋掛りが約 8m 伸びている。舞台の音響効果を高めるために、その床下は掘り下げられており、全体に 10 ㎝ほどの漆喰で塗り固められていた [(2)]。堀内氏によると、これは 18 世紀以降本郷邸に存在した二つの能舞台のうちの一つであり、公式な用途ではなく、藩主などの観劇や舞の練習等を行った場所という。加えて、文献（古文書類）や絵図等の検討から、加賀藩 13 代前田斉泰（1811 ～ 84）の治世期にあたる天保（1830 ～ 44）年間以降の能舞台跡と推定されている。

本論では、加賀藩江戸屋敷における能について考察すべく、加賀藩の能楽史について概観し、特に 13 代斉泰の時代については、古文書や伝存する能装束をとおして具体的な検討を試みたい。

1.「加賀宝生」以前
－藩祖利家から４代光高まで－

加賀藩の能楽史については、『金沢の能楽』（北国出版社 1972）が詳しい。これは「加越能文庫」（金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵）と称される加賀藩の政治経済から文化活動まで幅広く記録された 1,107 件（34,405 点）におよぶ古文書類の中から [(3)]、梶井幸代・密田良二の両氏が主に能番組を中心に地道に拾い上げて著したものである。以下、同書に従いつつ、近世の能楽史の特徴と近年の研究史に触れながら述べてみよう。

（1）藩祖利家

藩祖利家（1538 ～ 99）の時代は、同時代の能狂として知られた豊臣秀吉（1537 ～ 98）の影響が大きく、秀吉が贔屓とした金春流より能を学んだとある。秀吉は当時の能楽社会、ひいては「式楽期」とされる江戸時代の能へも影響を及ぼしているため、あらかじめ秀吉についても述べておきたい [(4)]。

秀吉といえば、文禄 2（1593）年 10 月に禁裏で行った 3 日間の禁中能が知られるが、天野文雄氏はこれを「前代未聞の禁中能」として、2 点の理由を挙げている [(5)]。ひとつめは「武将と言う能の素人による催しであること」で、規模の大きさと「権力者」自らが大半を演じた能として「空前にして絶後」と語る。ふたつめは、金春安照などの専業猿楽の役者が出演したことである。能役者には、観世や金春といった寺社の祭礼奉仕を専らとする専業猿楽と、武士や町人など素人による能である手猿楽があった。禁裏における能については、後者の手猿楽が勤めることと習慣化されていたが、これが破られたのである。秀吉が専業猿楽、特に大和猿楽四座（観世・金春・金剛・宝生）の保護に努めたことは、やがて四座が江戸幕府の支配に入ることへとつながる。能が幕府や諸藩の儀式に用いられ「式楽」化するには、秀吉によるこうした前段階があった。

禁中能では、利家は初日に〈源氏供養〉、3 日目に〈江口〉を舞う。秀吉の能好きは、利家をはじめとした他大名へも明らかに影響を与えていた。

翌文禄 3（1594）年 4 月 8 日に行われた京都前田邸への秀吉御成の際には、四座の大夫による能で迎えている。5 番中、金春流のみ大夫安照（62 世 1549 ～ 1621）と子の氏勝（のち 63 世）で 2 番のシテを勤めているのは、秀吉の金春贔屓を配慮してのことだろう。氏勝はその後、慶長 3（1598）年に金沢にて勧進能を行う。

前田家と金春流の関係で外せないことが、もうひとつある。この時代に能の名手として知られた下間少進（仲

* 石川県立美術館

孝 1551 ～ 1616）という本願寺の坊官の存在である。少進は安照の父喜勝（61 世岌連　1510 ～ 83）に師事し、自らの演能記録である『能之留帳 [6]』（法政大学能楽研究所所蔵）を遺している。記された見物者から少進と諸大名との幅広い交友がうかがえるだけでなく、近世初期の演能を知る貴重な能楽史料でもある。この少進の妻が、利家のめい（弟秀継の女）であった。同書には、利家と 2 代利長（1562 ～ 1614）の名がみえる。

利家の名の初見は、文禄 3（1594）年 4 月 15 日。京都の聚楽第で行われた関白豊臣秀次（1568 ～ 95）主催の能においてである。織田信雄（常真　1558 ～ 1630）による〈邯鄲〉にはじまり、秀次による〈忠度〉〈江口〉〈黒塚〉、徳川家康（1543 ～ 1616）による〈松風〉ののち、利家は〈杜若〉を舞った。その後、再び秀次による〈隅田川〉、前田侍従の〈通小町〉、信雄の〈海士〉と続き、少進の〈西行柳〉、秀次の〈祝言高砂〉の 11 番で終わっている。

（2）2 代利長

『能之留帳』において利家より早く名前を確認できるのが、利長である。文禄 2（1593）年閏 9 月 9 日、利長や他の大名を京都本願寺門跡邸へ招き、春日大夫による〈高砂〉〈真盛〉〈善知鳥〉〈鵜飼〉、少進による〈松風〉〈葵上〉〈海士〉〈藤戸（門）〉の能 8 番が演じられた。利長は、その後も少進と春日大夫による能に招かれており、文禄 5（1596）年 12 月 7 日と慶長 3（1598）年 6 月 15 日も本願寺門跡邸を訪れている。しかし、利長については、利家のように能を演じた記録は、今のところ確認できない。

なお、同書によると、少進は金沢でも演能を行っている。利長が亡くなる前年の慶長 18（1613）年、3 代利常（1593 ～ 1658）の在国能として、金沢城にて 8 月 11 日と 12 日の 2 日間行われた。初日 9 番、2 日目 11 番のうち、少進は初日〈矢卓鴨〉〈実盛〉〈湯谷〉〈葵上〉〈邯鄲〉〈三井寺〉〈烏頭〉7 番と、2 日目は〈高砂〉〈頼政〉〈井筒〉〈船弁慶〉〈自然居士〉〈角田川〉〈山姥〉〈女郎花〉〈鵺〉の 9 番も舞っている。この演能は、加賀藩政史を編纂した郷土史家日置謙（1873 ～ 1946）氏による『加賀藩史料』（侯爵前田家編輯部　1929 ～ 36）にも『金沢の能楽』にも見当たらないため、他のシテを勤めた石黒と徳左衛門とはどういう人物なのか、なども含めて今後の検討が待たれよう。

利長時代について、もうひとつ特筆すべきは、金沢の寺中という、海の玄関口である金石の近くにあった佐那武社の神事能の復興である。この神事能は、元来白山の猿楽座とも関わりが深いとされており、中世に入りこの地を治めた富樫氏の庇護を受けた諸橋氏が、大夫を勤めたと伝えられている。慶長 9（1604）年、利長は浅井畷の合戦に勝利したことを感謝し、この神事能を復活させた [7]。そして、これは「大野湊神社の寺中神事能」（金沢市指定無形民俗文化財）として、現在も続いている。なお、当時諸橋氏は金春流であった。

（3）3 代利常

3 代利常の時代にあたる寛永 5（1628）年、金春流の竹田権兵衛安信（? ～ ?）を知行 400 石で召し抱える。加賀藩が最初に召し抱えた能大夫であった。安信は金春氏勝の 3 男にあたり、同家は幕末まで在京のまま加賀藩より知行を受けている。加賀藩といえば「加賀宝生」と語られるが、利家に始まる金春贔屓が、一方で脈々と続いていた。

ではこの頃、加賀藩の江戸屋敷では、どのような演能が催されていたのだろうか。元和 3（1617）年には、2 代将軍徳川秀忠（1579 ～ 1632）による加賀藩江戸屋敷御成があった。当時の上屋敷は辰口邸である。将軍を迎える御成にあたって、能が欠かせないものであることは、古くは室町幕府による管領家訪問による観能、そして先述の秀吉の御成に引き継がれていた。利常の室は、秀忠の 2 女珠姫（天徳院）である。秀忠による最初の御成がこの加賀藩の江戸屋敷であることから、将軍家と前田家の関係性、および御成における能の重要性がうかがえよう。5 月 13 日は能 7 番、翌日の後宴能にも 7 番が、四座の大夫によって演じられた。

こうした加賀藩江戸屋敷御成において、どのような演目がなされたかなど、番組の内容については、西村聡氏によって「加越能文庫」を中心とした史料紹介と、特に利常期の御成について諸史料との比較検討がされている [8]。加賀藩の能楽史研究においては、前述の『金沢の能楽』および『加賀藩史料』は基本書であるが、これらは「地元の歴史を編纂する目的」が主であるため、江戸屋敷での能の催しには触れられていないと西村氏は指摘する。その上で、未活用となっている御成の能番組史料については、演目の把握が可能であるだけでなく、「その時々の主要な役者の動向がうかがえる貴重資料」であると着目する。

例えば、元和 3（1617）年 5 月 13 日の御成では〈翁〉〈加茂〉〈八島〉〈夕顔〉〈鍾馗〉〈蘆刈〉〈三輪〉〈祝言〉が、後宴には〈翁〉〈白髭〉〈箙〉〈熊野〉〈花月〉〈藤戸〉〈山姥〉〈祝言〉が演じられたと『天寛日記 [9]』（『加賀藩史料』における典拠）に記すとするが、ここに記されるのは曲

名のみで、演者や狂言の曲名まで記すものとして、『古之御能組』と『御城諸家御能組』（ともに「江戸初期能番組七種[10]」のうち）を紹介する。ただし、演じられた曲名に差異（〈夕顔〉ではなく、〈江口〉）があり、特に後宴能については全く異なる[11]という。一方、加越能文庫所蔵の史料の中では、『御成次第等写』（一連番号460　以下番号のみ記す）に唯一曲名が記されているとし、演目の内容は『天寛日記』に近いとしている。

寛永6（1629）年4月26日の3代将軍徳川家光（1604～51）の本郷邸御成については、『寛永御成之記』の番組中に「御所望」の文字があることから、この時、家光は北七大夫による〈熊坂〉を所望したと考えられる。その上で、『御成次第等写』にのみこの曲の記載がないことは、乞能として後に追加されたからと推測する。このように各史料を比較検討し、その差異が生まれた理由の考察など、地方の能楽資料の新たな発掘は、地方の能楽だけでなく､江戸時代の能楽の詳細な把握につながると、その重要性を説く。

演目だけでなく、役者ついても述べている。同年の御成の後に行われた後宴能については、加越能文庫の諸史料には記録があるものの『加賀藩史料』には記載がないとその脱落を指摘し、金春七郎（64世 重勝？～1634）・権兵衛・庄五郎のみがシテを勤めており、加賀藩における金春流優位を示す好例と述べている。

またその中で、ワキとしてその前年に小姓となった竹田市三郎の名があることに着目し、能における利常の趣向を紹介する。後に利常に殉死する市三郎は、この時わずか14歳。幼い子小姓までも能を身につける環境にあったこと、利常が幼い子小姓に直面のワキを勤めさせることにより、招いた観覧者を喜ばせようとしたと考える。当時の将軍家光にもその嗜好はあったようで、4代藩主光高（1615～45）の時期まで散見できる。

なお、加賀藩の江戸屋敷のうち、本郷邸拝領の時期は古い。元和（1615～24）年間のはじめとされているが、本格的な整備に取りかかるのは寛永5（1628）年以降、まさに翌年の家光御成に備えてのことであった。御成御殿や数寄屋、育徳園が新築整備されたことは既に報告されており[12]、「寛永六年」の墨書を持つ遺物も確認されている[13]。ただ、本郷邸は下屋敷のままであり、上屋敷は引き続き辰口邸であった。本郷邸が上屋敷となるのは天和3（1683）年、5代綱紀（1643～1724）の時代のことである[14]。

一方、金沢における利常時代の能については、藩政期をとおして続いた卯辰山観音院の神事能の始まりに触れておかねばならない。これは元和3（1617）年に行われた利常の2男千勝丸（のち利次　富山藩初代　1617～74）の宮参りを祝して、町人たちが11月3日と4日の両日、囃子を興行したことに始まる。先に紹介した寺中神事能とあわせて、両神事能は金沢の町人たちの間でも能が親しまれた好例とされている[15]。明治2（1869）年まで続いた両神事能については、『両御神事古今御番組』（金沢市立玉川図書館近世資料館藤本文庫所蔵）に番組が記されている。

さて、利常はしばしば今日に続く加賀文化の祖を築いた藩主と語られる。利常によって京都より金沢に招かれた茶道の仙叟宗室[16]（裏千家4代　1622～97）、蒔絵の五十嵐道甫[17]（?～1678）などはよく知られている。そして、利常の文物収集における関心の高さを示す一例が、長崎において買い求めた豊富な名物裂である。

『三壺聞書[18]』の「利常公長崎御調物の事」によると、寛永14（1637）年、2人の家臣と京都の商人を長崎へ遣わし、「長崎・平戸の其の内に無雙の古き切共、有るに任せて價構はず買取」らせたという。帰国した家臣からこれらを受け取った利常は「御意に応じ、御機嫌殊の外よかりける」であったようだ。こうした名物裂は、今日に至るまで質量ともに国内最良のコレクションとして伝えられている[19]。名物裂は、茶器の仕覆や掛け軸の表装に用いられるのが主だが、前田家の場合、甲冑の佩楯の裂や能装束[20]に仕立てられるなどしていた。小さな裂地を愛でる楽しみ方とは異なり、甲冑や能装束に使用するとは、裂地を大量に所有しなければできないことである。今日伝存する名物裂による能装束は、嘉永5（1852）年に仕立てられたものだが、利常の時代にもたらされた名物裂は、歴代藩主のもと幕末に至るまで珍重されていた。

（4）4代光高

利常の嫡男である光高が、利常の隠居にともない家督を嗣いだのは、寛永16（1639）年6月のこと。藩主として初めての入国を祝う儀式能が、翌寛永17（1640）年正月5日に行われた。歴代藩主によるお国入り能は、光高にはじまると『金澤の能楽』には記されている。

同年3月28日には、家光による本郷邸御成があった。『三壺聞書』の「利常公御屋形へ御成の事」に、「寛永十五年春・夏の内」と記されたのは誤りであるが、ここには「扨常々御取立の兒小将をどりをご覧なさる」とある。能ではなく、当時流行した子小姓躍を披露したというのだ。この時、能ではなく子小姓躍であったことの理由は、正式な御成というよりも、家光が駒込の鷹野へ出御した後、「本郷邸の裏門より御通り」、「裏門より還御」

する簡易な性格であったからではないか。なお、この子小姓躍については、後日老中酒井忠勝邸でも披露された[21]。

ところが、光高は正保2（1645）年に急逝する。嫡男綱紀はまだ幼く、利常が後見として再び藩政の表舞台に上がる。実に利常が没する万治元（1658）年にまで及んだ。綱紀に与えた利常の影響は少なくない。

2.「加賀宝生」のはじまりとそれ以降 －5代綱紀から11代治脩まで－

（1）5代綱紀

いわゆる加賀藩で宝生流の能が盛んであることを意味する「加賀宝生」のはじまりは、5代綱紀の時代とされている。これまで金春を重用した前田家が、宝生贔屓となった経緯を語るには、あらかじめ当時の5代将軍徳川綱吉（1646～1709）の能狂ぶりについて、触れておかねばならない[22]。

①　将軍徳川綱吉の能狂と宝生贔屓

徳川家は、家康が駿府城にあった頃から能に親しんでいたが、重用したのはもっぱら観世流であった。一時期、家康の梅若後援、2代秀忠・3代家光の北七大夫（長能1586～1653）贔屓はあっても、各大夫の筆頭は観世大夫と変わることはなく、当時名誉とされた初日の脇能は、観世大夫が勤めていた。

家光の4男であった綱吉は、上野舘林藩主時代（1661～80）より宝生流に親しんでいたが、将軍に就くや否や、型破りな能が始まる。延宝8（1680）年閏9月から10月にかけて行われた将軍宣下祝賀能は、初日の〈翁〉こそ観世重賢（後に12世　1658～1746）が勤めたが、3日目と4日目には指田五郎右衛門という五座（四座＋喜多座）に属さない、自身が贔屓する無名の役者にシテを勤めさせた。「稀代の能狂だった綱吉に能界全体が揺さぶれ、未曾有の盛況と混乱とを共有した時代」のはじまりである。

綱吉の能の特徴については、5点にまとめられている。[1] 自分自身が能や仕舞を舞うことに熱中し、また人に見せることを好んだこと、[2] 小姓などの側近や他大名に、能を舞うように強制したこと、[3] 能役者の追放や登用、配置替えを自由に行ったこと。[4] 五座や諸藩の能役者を武士に取り立て、城内の非公式の能に従事させたこと、[5] 稀曲・珍曲を好み、多くの廃曲を復活させたことである。

なお、綱吉の宝生贔屓を裏付けるのが、綱吉在職中に行われた唯一の勧進能といえよう。貞享4（1687）年7月22日より26日の4日間、江戸の本所で行われた勧進能は、宝生九郎友春[23]（9世 1654～1728）による一世一代勧進能である。江戸時代の勧進能は、もはや本来の寺社建立等の寄附募集が目的ではなく、能役者自身の収益のために催された。開催には当然ながら幕府の許可が必要で、当時もっとも勢いのある役者の証となった。

②　綱紀の能稽古の再開

[2] の影響を受けたのが、まさに綱紀であった。綱吉は貞享3（1686）年4月3日、綱吉の命により江戸城内にて〈桜川〉を舞う。初めての演能にあたって、綱紀が能稽古を再開させる様子を、長山直治氏は『葛巻昌興日記[24]』（加越能文庫　3984）をもとに、子細に述べている[25]。

長山氏によると、綱紀は20代の頃に小鼓の稽古をしていたが中断しており、貞享2（1685）年10月10日に再開させた。ただ、稽古中断の間も能には親しんでいたとし、例えば、天和元（1681）年の江戸屋敷で行った将軍宣下の祝賀能（8～9月）、他大名を招いての能（9月）、拝領品披露の能（11月）などを紹介する。そして、綱紀の小鼓稽古の再開には、前日9日の江戸城内での能見物が影響していると長山氏は記す。

それは、綱吉の命により、12名の大名が能を舞うものであった。12名の大名とは、豊後岡藩4代中川久恒・備中生坂藩初代池田輝録・安芸広島藩2代 浅野光晟（1617～93）・陸奥盛岡藩4代南部行信・陸奥八戸藩2代南部直政などで、綱吉が大名に舞わせた最初の能である。これまで綱吉は、自身が舞い、側近たちにも舞わせていたが、とうとう大名にまで及んだのである。綱紀は後に6代将軍となる甲府藩の徳川綱豊（家宣）・尾張藩2代徳川光友・紀州藩2代徳川光貞・水戸藩2代徳川光圀・綱條父子とともに綱吉にお目見得し、いわゆる御三家と同席で、この能を見物したという。

その途中、綱紀は老中より「なり物等何も不被遊候哉」と尋ねられていた。「曽て不調法御座候」と答えたが、再度尋ねられる可能性もある。翌日、礼を述べるために登城した綱紀は、その帰り道、利常の3女満（広島御前）の嫁ぎ先であり、前日〈野々宮〉を舞った浅野光晟邸を見舞う。光晟とこうした綱吉への対応も話し合ったかもしれないと、長山氏は推察する。自身にもやがて能を舞うよう命が下ることを、綱紀は察したのだ。綱紀が「大鼓も兼芸とした紙細工人」の加藤市丞・勘左衛門と小鼓の惣大夫の三兄弟を招き、小鼓の稽古を再開させたのは、その晩のことである。

ところで、長山氏は紙細工人に小鼓の稽古相手をさせたことについて、「綱紀の稽古は内々のことであり、身

近に仕え、能を本芸としていない、細工者が相手を務める方が、目立たなくて都合がよかったのである（傍点筆者）[26]」と記す。細工者とは、甲冑・弓矢・鉄砲・刀槍・馬具・衣類・立物・指物・旗・母衣・羽織などの補修や補充を行う組織として金沢城内に設けられた御細工所の細工人のことである[27]。加賀藩ではこれら細工人に能のワキ方や囃子方を兼芸として勤めさせることによって、役者の層が厚くなったとその特徴として語られている[28]が、この加藤三兄弟とその父の場合について、ひとつ検討を加えたい。

③　加藤三兄弟とその父は、兼芸か？

『加陽細工所始末[29]』（加越能文庫　2176）によると、加藤三兄弟の父である加藤理右衛門は、大蔵源右衛門の弟子として大鼓を覚え、加賀藩にて能を勤めていた人物という。「是先年より加藤理右衛門大鼓を覚へ御能をも相勤候テ紙細工人に被召出（罫線筆者）」とあり、「理右衛門」の横には「大蔵源右衛門弟子」と朱書されている。そして、この「是先年より」という記載－これは、御細工所が貞享４（1687）年の格式改めにより正式に体制を整える以前を示すと解釈されている－から、加藤理右衛門は「加賀藩における御細工者の兼芸」、つまり御細工所の細工人に能のワキ方や囃子方を兼芸されたことの先例としてしばしば挙げられる。

理右衛門の師匠である大蔵源右衛門について、表章氏の「『大鼓金春流』考（上）[30]」など[31]を頼りに述べてみよう。大蔵源右衛門家とは、金春座の大鼓方で、初世の大蔵道加は金春禅竹（1405～?）の子、２世九郎能氏は観世信光の弟子であったと伝える。室町末期に活躍した大蔵二助虎家（1600または1601没）は、織田信長に贔屓された名手であった。源右衛門は、虎家の子・平蔵が没する慶長10（1605）年前後から、助三（正重）の名で活躍する。虎家の孫（娘の子）にあたるという。

文禄２（1593）年以降の近世初期の演能記録がデータベース化された『国文学資料館－連歌・演能・雅楽データベース－[32]』によると、助三の名は慶長８（1603）年以降に登場する。３月５日、京都七条の新門跡の能にて、金春大夫安照がシテを勤めた能が初見であるが、それ以降は徳川家康の将軍宣下能や有力大名家での能を勤めている。金春大夫だけでなく、金剛大夫や観世大夫の大鼓方も勤めたほか、『能之留帳』にもしばしば登場する。後に大鼓金春流の祖となる金春三郎右衛門（?～1663）が、はじめ源右衛門の弟子であったように、助三は当時人気実力とも兼ね備えた大鼓方であった。源右衛門を名乗るのは、慶長20（1615）年からのようで、元和10（1624）年以降は、江戸にて将軍秀忠の紀伊徳川邸御成能や江戸城本丸や西の丸で北七大夫の大鼓方も勤めている。

源右衛門正重が没した承応３（1654）年の後、子の助三正幸（?～1671）が源右衛門を継ぐ。寛文（1661～73）年間に記された『金春座中石高控』（法政大学能楽研究所般若窟文庫所蔵）によると、当時幕府より100石の配当米があったという。以上のように加賀藩で大鼓を勤め、細工人でもあった加藤理右衛門の師匠とは、時の有力大名や将軍家の能を勤めた、幕府お抱えの大鼓方だった。

理左衛門の子である市丞・勘左衛門・惣大夫の三兄弟は、市丞・勘左衛門については葛野九郎兵衛、惣大夫は幸清五郎の弟子とある[33]。父と異なる流派、あるいは小鼓方に付かねばならなかったのには、その後に起こった大蔵源右衛門家断絶と無関係ではなかろう。延宝３（1675）年、源右衛門正幸の子で後を継いだ源六が、弟子を殺害し自害するという事件を起こしたのだ。市丞と勘左衛門が付いた葛野九郎兵衛は素人出身の家柄であるが、秀忠の時代に召し抱えられた観世座の大鼓方。惣大夫がついた幸清五郎は、金春座座付の小鼓方幸小左衛門一宗の２男清五郎に始まる別家の祖で、当時は宝生座の座付として有力大名家や将軍家の能を勤めていた。果たしてこうした家柄の弟子に、本職を紙細工とする者が、すんなりとつけるものであろうか。つまり、加藤家とは、元来より大名家や将軍家の勤めを行う家元級の役者を師匠とした囃子方の家筋であり、どのような経緯があったかは不明だが、理右衛門の代より加賀藩で催される能を勤め、やがて御細工所の制度が整うに伴い、細工人として召し抱えられるに至ったのではないか。

平成17（2005）年頃より、竹本幹夫氏を代表とする「加賀藩能楽関係資料研究会」によって、加越能文庫中の綱紀時代の能楽を含めた学芸関連資料の調査が進められている。その中で『葛巻昌興日記』に記された、延宝５（1677）年から貞享３（1686）年４月に至る能楽関係記事について、詳細な解説がなされている[34]。この期間は、綱吉が将軍となる以前から、綱吉の影響を受けた綱紀が小鼓の稽古を再開し、その命により初めて〈桜川〉を演じるまでの時期にあたる。つまり、綱紀が次第に能に傾倒し、藩主だけでなく家臣たち、能役者たちが関わっていく様子がよくうかがえる。この間、加藤三兄弟においては、既に延宝年間（1673～1981）中に、様々な演能に出演していることを『葛巻昌興日記』より確認したい。

延宝５（1677）年２月21日に金沢で行われた御恭様（綱紀７女　実父は七日市藩２代前田利意　延宝２年に金沢移徒）御慰能には、〈淡路〉〈小督〉において市丞が、〈忠則〉〈春日龍神〉において勘左衛門が大鼓を勤めている。

この能のシテのほとんどは竹田権兵衛が勤めており、春藤勘右衛門・杉長左衛門・糟屋次郎兵衛・石井甚兵衛・小寺金七・大蔵金右衛門といった加賀藩より扶持を受けた京都在住の役者も多く出演している。権兵衛が取り仕切った能と推察されるが、生駒右近直政・生駒万兵衛重信をはじめとした家臣も多く観覧した能であった。市丞・勘左衛門両人の名は、同月26日の前田直作（加賀藩に仕えた八家のひとつ前田土佐守家3代　1642～89）と御恭様御慰能、翌3月9日の陽広院様（4代光高）33回忌慰労能にも見える。

同年4月に綱紀は江戸へ参勤するが、彼らも江戸へ移る。9月10日、江戸屋敷において利常の3女満（浅野光晟室）を招いた能が催された。利常の5男で大聖寺藩2代前田利明（飛騨守　1637～92）や七日市藩2代前田利意（右近　1625～85）とその弟孝矩（帯刀　1627～93）なども来邸する。この時、市丞は竹田平四郎シテの〈忠則〉と〈藤永〉、北七大夫の〈龍田〉の大鼓を、勘左衛門は諸橋市十郎シテの〈鵺〉の大鼓を勤めた。その後も翌延宝6（1678）年2月22日の式部少輔浅野長照（浅野光晟2男　母は満）招請能にも、両名は出勤している。

以降も、市丞と勘左衛門は、綱紀が在国時は金沢にて演能を、江戸参勤中は江戸屋敷にて能を勤めた。末の惣大夫の名は、江戸屋敷にて浅野光晟とその室満を招いて行われた能において、市丞とともに囃子方を勤めた延宝7（1679）年10月以降見ることができる。

綱紀が稽古を再開する直前、貞享2（1685）年夏ごろはどうであろうか。綱紀がこの年江戸へ着いたのは4月。6月17日には仙渓院（利常9女・陸奥会津藩2代保科正経室）を招いて能が催されているが、『葛巻昌興日記』によると、シテに「宝生将監」と「二男数馬」を迎えている。加賀藩で催される能について、シテに宝生だけを迎えたことはほとんどなく、この日が宝生愛好のはじまりともいえよう。「宝生将監」は同年8月に亡くなる8世将監重友ではなく、後の9世将監友春。「二男数馬」は、のちの左大夫。重友の子重世で、友春の弟と考えられている。演じられたのは、〈氷室〉〈経政〉〈定家〉〈張良〉〈三輪〉〈柏崎〉〈弓八幡〉の7番で、市丞は〈経政〉、勘左衛門は〈張馬〉、惣大夫は〈弓八幡〉、いずれも数馬がシテとなった能の囃子方を勤めている。

以上、加藤三兄弟とその父の出自と、綱紀が能に傾倒する貞享3(1686)年以前から出勤していることがわかった。「細工者の兼芸の先駆け」ともいわれる加藤三兄弟およびその父であるが、本芸こそが囃子方で、後に細工人という形で召し出されたものと推察する。

④　江戸屋敷における能稽古の日々

さて、小鼓稽古の再開に続いて、やがて仕舞稽古の準備も、慌ただしく行われる。江戸屋敷における舞台の準備や能稽古の様子がわかるので、引き続き長山氏の論稿[35]と『葛巻昌興日記』の翻刻解説[36]を参考に概略しよう。『金澤の能楽』にも『加賀藩史料』にも記載されない事柄も多い。

貞享3（1686）年閏3月1日、江戸城に上った綱紀に対し、側用人より近日中に綱吉の能を拝見するよう伝えられる。これは綱紀へも能を舞うよう命じられたことを意味したと、長山氏は解釈する。

翌々日の3日、駒込邸の桐之間に舞台を設ける作業が行われる。その命を受けたのが、本日記の筆者である葛巻昌興で、竹田平四郎にたずねながら進めたとある。橋掛りは屏風で設えたようだ。この桐之間は3間四方であったため、御料理間として9尺仕切られた。橋掛りは本式どおり幅7尺、長さはできる限り長くするよう指示があったが、大書院を楽屋とし、5間余となった。まず明日使用するので、床は畳のままとした。

4日、表御居間にて、家臣の青山織部・松平主膳・小幡大学・青地弥四郎・山崎主税に舞の稽古が命じられ、平四郎と市十郎が指南した。綱紀の相手が務まるよう、舞の稽古が家臣にまで及んだことがうかがえる。続いて、大書院にて平四郎が〈芭蕉〉を舞い、綱紀が小鼓を打った。あわせて加藤市丞が扇拍子を、山東作左衛門が笛を勤めた。その後、桐之間にて〈通盛〉〈桜川〉〈呉服〉の3番が、市十郎・平四郎・波吉左平次をシテとして披露された。なお、3日と4日の両日、奥村兵部・多賀新左衛門・加藤三兄弟ほか、お抱えのワキ方や囃子方に誓詞が申し渡されており、稽古の体制が整えられたことがわかる。

5日以降も、家臣の稽古に関する記事が続く。6日、昌興は〈桜川〉と〈自然居士〉のワキを稽古するよう命じられ、早速7日に春藤流のワキ方山本平次を招いて稽古を行う。5日には桐之間も畳から板張に替えられた。

11日、加賀藩の江戸屋敷へ召された宝生友春のお目通りがあった。部屋は表御居間。これまで前田家と友春の間を取り次いでいたのは、竹田平四郎である。この時綱紀は「平四郎に〈石橋〉を伝授するよう」「諸橋市十郎を弟子にするよう」友春に命じた。金春家の分家である竹田家の当主に他流の伝授を命じ、諸橋家に宝生流への転流を命じるとは、今日では考えられない。江戸時代の能楽社会が、将軍・大名をはじめとした武家社会の強い影響下にあったことがうかがえよう。そして、これが加賀藩における宝生流の正式採用で、「加賀宝生」の始まりであった。『金澤の能楽』では、「この日に師弟の契

約ができたものであろう[37]」と記す。

翌々日の13日より綱紀に対する友春の稽古が始まり、ほぼ一日おきに友春は駒込邸を訪れることになる。15日、登城した綱紀は、同月21日に綱吉の能を拝見するよう、あわせて後日綱紀も舞うように命じられた。同日夜、友春は駒込邸を訪れ、夜半まで綱吉は稽古に励み、翌日の16日には早速〈桜川〉をワキや囃子方を従えて舞っている。この日は他に〈羽衣〉〈源氏供養〉〈海士〉〈弓八幡〉の4番が演じられており、昌興も〈羽衣〉のワキを勤めるなど、家臣がワキ方を勤めた。〈桜川〉の稽古は、17日と18日と今度は装束をつけて行われている。

19日には本郷邸にて、老中戸田山城守忠昌を招いて能が催された。これは当初同月11日に予定されていたが、延期したものである。この時期の老中招請は、やはり間近に迫った江戸城での能拝見と演能に関する情報収集が目的と思われる。友春による〈老松〉、平四郎の〈江口〉、市十郎の〈猩々〉の3番が演じられた。

この日、綱紀は招請能を終えた後駒込邸へ戻り、桐之間の能舞台で稽古能を行う。平四郎や市十郎は招請能同様シテを勤め、綱紀は〈桜川〉を舞った。翌20日、同月25日に江戸屋敷にて身内や家臣を招いて能が催されることが決まる。

21日、江戸城二の丸にて綱吉の能拝見を終えた綱紀は、駒込邸へただちに戻り、再び〈桜川〉の稽古に励む。22日は友春が来邸し、稽古は深夜にまで及んだ。24日も夜に稽古が行われている。

25日には、内記・前田宮内・前田相模守・前田伊勢松・横山内記・横山左門・本多弥兵衛ら家臣を招いて、綱紀による初めての能が催された。友春による〈氷室〉で始まり、前田孝效（伊勢松　七日市藩2代利意の9男　前田式部家の祖　1675～1712）の〈田村〉、友春の〈江口〉、横山左門の〈羽衣〉の後、綱紀は〈桜川〉を舞った。ワキは春藤六郎次郎、大鼓は金春三郎右衛門、小鼓は幸清六、笛は一曽六郎左衛門が勤めた。中入後は、友春の子・正之丞（?～1699）による〈小鍛冶〉、平四郎の〈龍田〉、再び綱紀による〈海士〉、市十郎の〈善界〉、友春の〈野守〉〈熊坂〉で終わった。綱紀をはじめ、家臣も連日稽古に励み続けていたが、いわばリハーサルであったといえよう。

翌26日には、六郎次郎と三郎右衛門が前日の礼を述べに参上。銀5枚と「御国染」3反（端）が下された。友春に対しては、自身の能を首尾よく執り行えたことを祝い、「御国染」10反と箱肴が、子の正之丞には白銀10枚が下された。平四郎を使わせた。「御国染」とは、加賀染であろう。

27日、友春と正之丞が祝儀の礼を述べに参上。綱紀に請われ、正之丞が〈羽衣〉を舞った後、綱紀の稽古が始まった。28日、綱紀登城。綱吉所望の大名家による演能が、翌月3日の開催と決まった。夜には稽古能が行われ、綱紀は〈芭蕉〉と〈桜川〉を舞う。この2番の稽古は、翌29日、4月1日にも行われている。

⑤　はじめての能披露と宝生流援助

迎えた4月3日、紀州藩3代徳川綱教（紀伊中将様）の〈羽衣〉に続いて、綱紀は〈桜川〉を舞った。ワキと囃子方は、前月25日とほぼ同じだが、大鼓は葛野市郎兵衛となった。1日の稽古を以て、変更したようである。後見は友春と竹田平四郎が勤めた。引き続いて、徳川光友（尾張中納言様）が〈江口〉を、徳川綱豊（甲府宰相様）が〈春日龍神〉を、徳川光貞（紀伊中納言様）が〈龍田[38]〉を、徳川光圀（水戸宰相様）が〈海人〉を、尾張藩3代徳川綱誠（尾張中将様）が〈杜若〉を、徳川綱條（水戸少将様　のち水戸藩3代[39]）が〈小鍛冶〉を舞った。

綱教と綱誠を除いて、すべて前年10月9日の能を拝見した人物である。綱紀のように、それぞれが自身に次こそ声がかかると推察し、稽古に励んだにちがいない。『葛巻昌興日記』3月29日条には、友春は紀州藩徳川光貞の屋敷から、葛野市郎兵衛・幸清六・観世左吉・一噌六郎左衛門は甲府藩徳川綱豊の屋敷から、加賀藩邸へ参上したことが記されており、能役者たちも本番に向けて、大名の江戸屋敷をハシゴする日々を送っていたのだ。

10日には陸奥会津藩3代保科正容（1669～1731）招請能、13日には浅野光晟招請能が催される。綱紀が舞うことはなかったようだが、稽古能は14日、17日と続いた。〈源氏供養〉〈海士〉〈大仏供養〉〈六浦〉〈雲雀山〉など、新たに稽古した曲のうち〈六浦〉〈雲雀山〉〈海士〉は、26日の仙渓院様招請能において披露された。これらをすべて終えた翌5月4日、綱紀は帰国の途に就いた。

以降、綱紀は友春への援助を惜しまず、翌貞享4（1687）年の一世一代勧進能の際は、あらかじめ金子200両の目録を遣わせている。さらに初日を控えた前日には「不足はないか」と確認し、初日は白銀や能装束を贈り届けた。こうした綱紀の宝生贔屓は、元禄5（1692）年に友春の2男吉之助（のち嘉内）を分家し、大夫として召し抱えることになる。これが宝生嘉内家であった。宝生嘉内家は幕末まで扶持を受け、やがて大正時代には宝生宗家を出すに至る[40]。これが「加賀宝生」という言葉を生む。

⑥　元禄期の能

では当時、「将軍の能を拝見すること」「江戸屋敷で能を催すこと」にはどのような意味があるのかについて、考えてみたい。

元禄7（1694）年、家臣である本多安房守・前田駿河守・前田主税・長九郎左衛門・横山左衛門・村井出雲に対して送った綱紀の書状がある。前月登城したところ、綱吉による『論語』の講釈を拝聴し、能を拝見したと記されている。あわせて菓子と茶、料理を頂戴し、能[41]が済んだ後、文台と硯箱拝領の目録を賜ったという。講釈の拝聴は、綱紀が数年来懇願していたことで、それが許され、しかも席次と待遇が御三家同様の扱いであったことは非常に名誉なことであり、家臣にも伝えられたのだ。当時、四書五経の講釈し、演能を行い、饗膳を設けるというのが、綱吉の好みで、各大名にとっては、登城時どのような扱いを受けるか、非常に重要であったことがうかがえる。

藩邸に戻った藩主は、家臣に対して、講釈拝聴と能拝見について報告を行うだけでなく、拝領物は藩邸において披露された。その際も必ず能が催されている。元禄3（1690）年4月26日、登城し、綱紀は御三家とともに能[42]を拝見したのち、狩野祐清による龍虎が描かれた屏風を賜った[43]。5月10日、この屏風を披露するため、広島藩浅野光晟とその孫綱長（のち4代1659～1708）、光晟の2男で備後三次藩3代浅野長澄（1671～1718）、陸奥会津藩3代松平正容を招いて、本郷邸にて能が9番催されている[44]。13日には今度は宝生九郎友春父子を招いて能が催された[45]。本屏風については、帰国した後、金沢においても披露されている。10月6日金沢城内の表御居間の上段の間に屏風は広げられ、能も催され、綱紀は〈葛城〉〈船弁慶〉を舞う。

なお、綱紀時代に加賀藩の江戸屋敷へ招かれた人物をみると、権力の象徴である将軍の御成のほか、政治的な中枢を担う老中の招請に加え、他大名、とりわけ浅野光晟のように姻戚関係にある人物が目立つ。光晟については、綱紀より先に綱吉の命に従って能を舞った大名であるがゆえに、情報を仕入れる政治的目的もあったであろう。いわば藩邸へ招き能を催すという行事から、情報収集に努めた藩主の交遊がうかがえる。これは後年まで引き継がれ、やがて加賀藩前田家に伝存する能装束が、こうした交遊の中から贈られ、披露されていたことも判明する。

⑦　綱吉による本郷邸御成

元禄14（1701）年12月22日、登城した綱紀に対し、綱吉に御成の考えがあることが伝えられ、年が明けると御成御殿の新築が始まった。この準備については、『政隣記』および『御成一巻』（加越能文庫　471）に詳しく、慌ただしく準備にあたった様子がうかがえる[46]。4月18日、御成の日が26日と告げられた。

迎えた当日の様子は『徳川実紀』にも細かく記されるとおり、たいへん盛大に催された。この日は綱吉だけでなく、柳沢吉保（美濃守　1659～1714）・阿部正武（豊後守　1649～1704）・土屋政直（相模守　1641～1722）などの老中も同行した。当日は7,330人分の料理を用意したというから、驚かされる。

催された能は、観世織部（13世重記　1666?～1716）による〈翁〉に始まり、同じく〈高砂〉、権兵衛による〈東北〉、権進による〈祝言呉服〉が披露された。友春の名がない理由は、不明である。その後、綱吉による『論語』の「君子不器」の講書拝聴が行われ、仕舞へと移る。綱吉が〈高砂〉〈羽衣〉〈国栖〉を、綱紀が〈自然居士〉〈老松〉、浅野綱長が〈田村〉を、浅野吉長（備後守　1681～1752）が〈放下僧〉を舞った。

客人を招いての能は、御成を終えた後も続いたようで、5月21日には老中招請能が行われている。〈翁〉に始まり、金剛大夫による〈弓八幡〉、宝生大夫による〈羽衣〉、権兵衛による〈祝言金札〉と催された。この御客御能は同月26日、翌6月4日、同13日、同16日、同19日、同21日、7月10日、8月2日と続いた[47]。

しかしながら、この本郷邸は元禄16（1703）年の11月、小石川の水戸藩邸からの失火が広がったことにより類焼してしまう。

（2）6代吉徳

綱紀の4男にあたる吉徳（1690～1745）は、享保8（1723）年に藩主を嗣いだ。綱紀の時代に始まった「加賀宝生」の時代は、ひとつの転換期を迎える。

①　転換期の能

同じころ、江戸においても、綱吉および6代将軍家宣（1662～1712）と続いた「行き過ぎた能楽耽溺の弊害」は、享保元（1716）年に8代将軍吉宗（1684～1751）の将軍宣下祝賀能が行われたことを境に「転換期」となる。いわゆる「享保の改革」で知られる吉宗は、能を好みながらも、自らが演じることはなかったようだ[48]。宝生をのぞく四座の大夫が交替期を迎えたことも大きいといえよう。

『触流し御能組[49]』（法政大学能楽研究所鴻山文庫などに所蔵）は、享保6（1721）年から幕末に行われた幕府による能楽関連の催しを記したものであるが、こうした記録の整備も吉宗の能楽統制策のひとつとされている。自身は舞わずとも、子に能は勧めたようで、その指南役には五座の大夫を登用した。家重（のち9代　1712～61）の能指南役が観世大夫14世清親（1693～1747）であったことは、続く15世元章（1722～74）による観

世全盛期へとつながる。

一方、加賀藩においても享保年間に大夫の交替期が訪れた。享保10（1725）年に『御入国御祝能相勤候役者等』（加越能文庫 9926）によると、「江戸御役者」の宝生斎宮は23歳。宝生嘉内家の３世を享保３（1718）年に継いだが、享保19（1734）年に病没。分家弟子筋の古春左衛門の２男弥三郎明喬が跡を継いだ。一方「京都御役者」として竹田権兵衛の名は見えない。３世竹田権兵衛（広貞）が没した直後の記録と推測できる。その後、享保19（1734）年に行われた２女總姫誕生の祝賀能に出仕した４世竹田権兵衛は17歳とあるから、この間に大夫不在の時期があったと推測される。金沢の大夫である諸橋は、権進が享保19（1734）年に病没。波吉も左平次が宝永６（1709）年に、右内も享保19（1734）年に没したとある[50]。

② 本郷邸で披露されたもの

享保８（1723）年に家督を相続した吉徳は、家督相続披露のため老中たちを江戸藩邸へ招いている。『政隣記』によると同年７月26日、老中水野忠之（和泉守　三河岡崎藩４代　1669～1731）・安藤信友（対馬守　備中松山藩２代　1671～1732）、若年寄の石川総茂（近江守　常陸下館藩初代　1671～1733）などを招き、能３番と料理三汁十菜でもてなしたという[51]。この家督相続披露は、29日には前田家の一門を招いて行われ、８月以降は出入衆や町人も能を見物したという。16日は広島藩５代浅野吉長（安芸守　室は綱紀の１女節）、因幡鳥取藩３代池田吉泰（因幡間守　1687～1739　室は綱紀の３女敬）らも招かれている。

こうした慶事にあたり、老中をはじめ、徳川家の人々を招くことは、前田家にとっても名誉であったにちがいない。老中の臨邸を請い、後日招請能が催される例は他にも確認できる。元文３（1738）年８月、吉徳は竹千代様（のち10代将軍家治　1737～86）の誕生を祝うため、老中の臨邸を請う。それは９月７日に実現し、老中松平信祝（伊豆守　遠江浜松藩初代　1683～1744）、若年寄西尾忠尚（隠岐守　1689～1760）などが本郷邸を訪れた。能は伝右衛門による翁三番と、三十郎による〈高砂〉、宝生友精（11世　1714～72）による〈羽衣〉、嘉内による〈祝言金札〉、狂言の〈福の神〉が演じられた[52]。

続いて21日には前田家と姻戚関係にある浅野吉長ほか20名、前田家に仕える出入衆などおよそ233名が招かれた。老中たちには二汁七菜が、それ以外の者にも料理がふるまわれたというから、その規模の大きさがうかがえる。演じられたのは弥太夫による〈翁三番叟〉、弥三郎の〈弓八幡〉、十左衛門の〈八島（嶋）〉、何次郎の〈六浦〉、波吉宮門の〈藤戸〉、弥太夫の〈末広〉、忠蔵の〈素袍落〉であった。

吉徳が参議に任ぜられた寛保元（1741）年も老中方の臨邸を請い、５月４日老中松平信祝・本多忠良（中務大輔　下総古川藩初代　1690～1751）、若年寄板倉勝清（佐渡守　陸奥泉藩２代）らを招き、能でもてなしている。演じられたのは〈翁〉〈高砂〉〈六浦〉〈金札〉〈龍田〉〈養老〉であった。

ところで、本郷邸の舞台で演じられたのは、能だけではなかったようだ。享保12（1727）年２月16日には、菊川圓之助・市川源之助・松本勘太郎・四宮次郎八なる歌舞伎役者による芝居が行われたとある[53]。暮れには堺町の中村座・市村座からも大勢の役者を召し寄せたというから、ずいぶん賑わったことがうかがえる。

本郷邸は享保15（1730）年正月12日、再び火災に遭い、翌２月より再建に着手。４月18日に斧初の儀、５月28日に上棟式が行われ、８月には竣工した。同月16日、重熙（亀次郎殿　のち８代　1729～53）が本郷邸へ移徒し、翌９月１日には本郷邸の大御門が開かれ、来客などは御式臺より通された。同月10日には吉徳が江戸へ到着し、本郷邸へ入る。11月15日には、本郷邸の新築に貢献した者たちに、白銀や羽織、染物などが与えられたという。

そんな本郷邸に、翌享保16（1731）年８月５日、象が現われた。将軍家の別邸である浜御殿にいる象を引き寄せたのだ。御徒並以上で希望した者は見物できたという。象の高さは７尺４寸、胴の太さは１丈３寸４歩余、前足は３尺７寸余、長さ１丈１尺との記録[54]があるとおり、その大きさに皆が驚いたことであろう。先の歌舞伎役者による舞台といい、象といい、本郷邸とは、珍しき流行物が観られる貴重な場であったのではないだろうか。

③ 加賀藩における家臣たちの能
　　－前田土佐守家を例に－

この時代の加賀藩において、家臣たちの間で能が浸透した様子を、加賀藩に仕えた八家のひとつであり、藩祖利家の２男利政を祖とする前田土佐守家を例に紹介しよう[55]。土佐守家５代前田直躬（1714～74）が享保19（1734）年に宝生流に入門した『入門誓詞案文』が前田土佐守家資料館に所蔵されている。

宛先は宝生丹次郎。享保15（1730）年に没した10世暢榮（1699～1730）の跡を継いだ11世友精のことである。ワキ方宝生流宝生新次郎の３男で、将軍吉宗・家重（9代　1712～61）・家治（10代　1737～86）の３代に仕える大夫となった。日付は10月４日で、藩主吉徳の参

勤に伴って直躬も江戸に滞在していた時期にあたる。加賀藩にはシテ方として召し抱えた宝生流分家の嘉内家があったが、直接本家の大夫に稽古を請うたところに、その執心さがうかがえる。直躬と丹次郎は同じ年ということもあったのだろうか、江戸滞在中に稽古を受けたことはもちろん、金沢へ帰国後も書状によって指導を受けていた。享保21（1736）年から翌年元文2（1737）年までの間に、直躬から丹次郎へ宛てた7通の書状の写しも伝わる[56]。

1通目（正月20日）は、前日に行った能について報告したもので、直躬自身は〈東岸居士〉では小鼓を打ったこと、〈高砂〉と〈龍田〉を舞い、〈高砂〉の後場では「あやかし」の面を用いたことなどを伝えている。2通目（2月26日）も1通目同様、装束を付けて行った能について触れ、直躬は〈班女〉と〈小督〉を舞ったこと、ワキ方は「皆々家来之内ニて事済申候」と記している。もはや家中を挙げて能に勤しむ様子がうかがえる。3通目と4通目（4月13日）は同じもの（書き損じのある3通目を、4通目は書き直したもの）と考えられ、直躬は〈自然居士〉を舞ったと報告し、〈融〉における所作について細かくたずねている。また年内に「勝丸殿」（のち7代藩主宗辰 1725～46）がはじめて出府する旨も伝えている。5通目（5月23日）も直躬が〈春日龍神〉と〈楊貴妃〉を舞ったことの報告。6通目（6月18日）では、酷暑であること、参勤の時期が近付いていることに触れながら、直躬が〈八島（嶋）〉〈葛城〉〈橋弁慶〉を舞ったこと、波吉宮門を稽古に遣わすことなどを記している。7通目（正月10日）は最近の稽古の様子の詳細な報告するとともに、先にたずねた〈融〉と〈女郎花〉について、所作や「いか様成心持ニ御座候や」と再び問うている。

土佐守家では、直躬の孫である直養（1772～1805 正式に家督相続をする前に没したことから6代と7代の間の準代と称される）も天明8（1788）年に宝生九郎（13世友勝　1767?～91）に入門し、教えを請うていた。この時期、加賀藩の上級武士の間でも能は広まり、演能が繰り広げられていた。寛政6（1794）年に土佐守家が所有する文物を書き上げた『御土蔵御道具帳』には、女面から鬼神面に至るまで48面の能面が記録されていることも、それを裏付けている。

ところで、直養が入門した友勝は、観世織部清尚（1727～82）の3男である。加賀藩ではもっぱら宝生流であったが、江戸においてはこの観世流が全盛期を迎えていた。清尚は15世元章の弟で、分家観世銕之丞家の祖となった後、17世を継いだ人。観世流は元章の時代に幕府に分家の樹立を認めさせるなど、力を誇っていた。

なお観世中興の祖とも称される元章の時代に行われたのは、[1] 寛延3（1750）年の15日間にもおよぶ勧進能の興行、[2] 宝暦2（1752）年の弟織部清尚（のち17世 1727～82）による分家（観世銕之丞家）樹立、[3] 明和2（1765）の「明和改正謡本」刊行である。いずれも観世全盛の証である[57]。ただ、幕府の許可と援助を得て刊行された「明和改正謡本」だが、古語を用いた無用な改変が不評で、元章の没後間もなく当時の清尚によって廃止された。10代将軍家治による命もあったと考えられている[58]。

（3）7代宗辰・8代重熙・9代重靖

吉徳以降の藩主はいずれも吉徳の子、それぞれ嫡男・2男・5男が続いた。宗辰・重熙（1729～53）・重靖（1735～53）とも藩主であった期間は短く、重靖に至っては4か月に過ぎない。ただ宗辰と重熙については、どのように能に親しむようになったかはうかがえるため、記してみたい。

宗辰が生まれたのは金沢だが、嫡男として早くより能を学んでいたようである。指南していたのは、吉徳ではないか。享保19（1734）年、10歳の時、金沢城の表舞台にて初舞台を踏んでいる。演じたのは〈右近〉〈橋弁慶〉〈大仏供養〉〈殺生石〉で、吉徳は〈小督〉〈羽衣〉〈経政〉にて鼓を披露したという[59]。家臣の津田政隣が著した『政隣記』（加越能文庫　2470）によると「若殿様御能御達者成御儀、無比類御事も奉恐感候」であったという。御近習の人々がシテや囃子方を仰せつかったというから、家臣を相手に能を催すことが、もはや定着していたようだ。宗辰が初めて江戸に赴いた元文元（1736）年、江戸に生まれた8歳の重熙とともに宝生大夫友精より仕舞を習っている[60]。

本郷邸には重熙が居たこともあり、宗辰が江戸に着いた際は、中屋敷の駒込邸に入った。室として陸奥会津藩3代松平正容の女常（1725～45）を迎えたのも、駒込邸であった。延享元（1744）年4月22日に婚儀が行われ、翌5月16日、宗辰は常のために能5番狂言3番を舞った。宝生友精や御手役者が勤めたほか、宗辰は〈乱〉を披露したという。翌延享2（1745）年5月2日も常を招いて駒込邸にて能が催され、〈西行桜〉〈融〉を演じている。

吉徳の死去にともない、宗辰は駒込邸より本郷邸へ移り、同延享2（1745）年7月に家督を継いだ。翌延享3（1746）年正月27日には、前年将軍となった家重を祝うため、本郷邸に老中堀田正亮（相模守　下総佐倉藩初代 1712～61）、若年寄水野忠定（壱岐守　安房北条藩初代　1691～1748）らを招き、料理と能でもてなしている。

2月に入ると御一門様方も招かれており、こうした能は吉徳時代より踏襲されたようだ。しかし前年11月には常が男子を死産の後死去。宗辰も翌延享3（1746）年12月に江戸滞在のまま逝去する。

重熙が兄宗辰の嗣子となり、延享4（1747）年に家督を嗣ぐ。翌寛延元（1748）年2月金沢にて家督相続と入国を祝う能がのべ6日間にわたって行われた。翌3月に重熙は再び江戸へ向かうが、当時加賀藩はいわゆる加賀騒動[61]の渦中にあった。8月18日に本郷邸にて家督相続を祝う祝賀能が2日間にわたって催されている（演目演者は不明）。翌寛延2（1749）年2月28日には、松平容貞（陸奥会津藩4代　1724～50）を本郷邸に招請するが、演能はなかったようである。以降、重熙は体調も優れず、演能記録は見当たらない。寛延3（1750）年には一時、体調の回復した重熙を祝って能が催され、宝生大夫友精が〈望月〉を演じた。その後、江戸では宝暦元（1751）年に将軍吉宗が逝去する。

翌宝暦2（1752）年3月11日には、松平頼恭（讃岐守　讃岐高松藩5代　1711～71）を本郷邸に招請する。この際は能3番〈立（龍）田〉〈江口〉〈融〉につづいて仕舞があり、弥三郎が〈羽衣〉と〈桜川〉、頼恭が〈西行桜〉、友精が〈巻絹〉を舞った。この時期こうした他大名招請の際は、馬の披露もされたようで、この日の記録には「御客馬之次第」として11頭の馬の記録－産地・歳・毛の色－が残る。

重熙の病状悪化を受け、吉徳の5男である重靖が重熙の嗣子（眞如院を生母とする4男利和は、加賀騒動にて幽閉）となり、宝暦3（1753）年4月に重熙没。重靖が9代藩主となり本郷邸に入るも、金沢入国ののち麻疹を患い、そのまま卒去した。

（4）10代重教・11代治脩

重靖の跡を嗣いだ重教（1741～1821）は、吉徳の7男。宝暦3（1753）年に重靖の嗣子となり、家督を相続する。重教が「能に沈溺する藩侯」であったことは既に『金澤の能楽』に詳しいが、重教が能に親しんだ経過と、江戸屋敷における能について改めて述べてみたい。

『加賀藩史料』によると、重教の家督相続を祝って宝暦4（1754）年5月25日、老中西尾忠尚（隠岐守　遠江横須賀藩2代　1689～1760）・松平武元（右近将監　越智松平家3代　1714～79）、若年寄小出英持（信濃殿　丹波園部藩5代　1706～67）などを本郷邸に招き、〈翁〉〈弓八幡〉〈羽衣〉が演じられた。翌6月22日は浅野宗恒（安芸守　安芸広島藩6代　1717～88　室は吉徳の1女喜代）ら御一門様などを招いて、〈翁〉〈白髭〉〈田村〉〈熊野〉〈張良〉が披露された。

同年9月には、室として迎える予定となっている千間の父である徳川宗将（紀州和歌山藩7代　1720～65）とその父宗直（和歌山藩6代　1682～1757）を本郷邸に招き、〈翁〉〈鷺〉〈高砂〉〈東北〉〈祝言猩々〉が演じられた。この能には宝生大夫友精が出勤し、〈高砂〉を舞ったほか、客が帰ったあと友精は〈熊坂〉を勤めた。江戸における他大名家を招いた家督相続祝賀能は、久しぶりのことである。重教といえば能の稽古はまだ行っておらず、翌宝暦5（1755）年正月より、太鼓・仕舞の稽古をはじめる。正月12日、加賀藩観世流太鼓御手役者の藤本太左衛門より太鼓を習い、18日には嘉内家の宝生弥三郎を召し出し仕舞の稽古を始め、翌2月1日にはじめて囃子を演じた。

本郷邸における招請能も続く。同宝暦5（1755）年12月16日、光高の室（清泰院）の100回忌の法事を執り行った伝通院和尚を招いて行われた能には、能役者の幼い子弟が初めて出勤したことでも着目できる[62]。「寶生九郎せがれ丹次郎　十歳」とは、友精の養子となったのちの12世友通（？～1775）のこと。「宝生新丞せがれ万作　十歳」とは、ワキ方宝生流新之丞（英蕃）の子のこと。「金春三郎右衛門せがれ五郎兵衛　八歳」とは、大鼓金春流5世三郎右衛門の子（養子か[63]）、のちの6世三郎兵衛盛勝のことである。

宝暦12（1762）年3月7日、紀州の徳川宗将を本郷邸に招請した際は、能も催された（演目演者とも不明）。重教の能稽古は続いていたようで、同宝暦12（1762）年閏4月22日、〈道成寺〉の伝授を友精より受けたことのお礼として、友精に対し白銀30枚・絹3疋、子丹次郎に白銀10枚・絹2疋が下されている。しかし翌5月、重教の浮腫が悪化し、そのまま江戸に滞在。徐々に快方へ向かった翌宝暦13（1763）年正月18日、〈翁〉の伝授を受けた。翌2月6日に再び徳川宗将を招請した際は、〈翁〉のほか5番が催され、重教は〈高砂〉と〈龍田〉、友精が〈芭蕉〉、丹次郎が〈頼政〉、弥三郎が〈祝言金札〉を演じている。

重教が江戸滞在時に本郷邸へ招請した人物は、老中・若年寄といった幕府重臣のほか、紀州徳川家など、姻戚関係にある人々であった。明和元（1764）年10月11日に招かれた南部利雄（信濃守　陸奥盛岡藩8代　1724～80）と嫡男利謹（のち廃嫡　1746～1814）については、利謹の生母が吉徳の養女（実父は大聖寺藩4代利章）の弓である。権兵衛の〈淡路〉、利雄による〈八嶋〉、友精の〈卒都婆小町〉、大膳による〈鉢木〉、重教による〈望月〉、弥三郎による〈百萬〉、演者不明の〈融〉が演じら

れたという。南部藩も宝生流の能が盛んな土地として知られており[64]、加賀藩前田家との関係も興味深いところである。

さて、重教の後継者とされていた弟利実（吉徳9男 1743～66）が明和3（1766）年に没し、にわかに後継問題が浮上する。結局、越中の勝興寺の住職となっていた弟治脩（1745～1810）に対し、明和5（1768）年還俗が命じられ、明和8（1771）年に重教は隠居、治脩が11代藩主となった。隠居した重教と、友精の跡を嗣いだ宝生大夫友通の間で〈安宅延年の舞〉伝授をめぐる問題が持ち上がったのは、安永4（1775）年、友通が没する直前のことである。

家督相続を祝して、歴代藩主は老中たちを本郷邸へ招請していたが、治脩が家督相続した翌年の、安永元（1772）年は延期となった。その年の春に、本郷邸は一部類焼し、道具などに差し支えがあったからである[65]。翌安永2（1773）年5月18日、改めて老中松平周防守・老中阿部豊後守、若年寄加納遠江守らを本郷邸に招き、能や三汁十菜の料理でもてなした[66]。演目は不明だが、金春大夫・宝生大夫・宝生新丞などが控えたという。3日後の5月21日には、同じく江戸に滞在していた重教を招いて、料理でもてなし、堺町から芝居役者を召し寄せている。

老中らの招請を延期する間、治脩は重教から鉄砲を学び、舞を学ぶよう命を受けていた[67]。共に蹴鞠をした記述も多い。その前年の安永元（1772）年8月21日、重教が演じた能を、治脩が観覧したとあるが、治脩の日記『大梁公日記[68]』には、以降こうした記述が増えることを、西村聡氏は指摘する[69]。この日の能は重教による〈善知鳥〉で、その相手役は御手役者が勤めたという。大聖寺藩5代利道（1733～81　2女正が治脩室）も仕舞を演じたとあるが、このことについて西村氏は「御手役者による共演・競演は重教の芸の水準が彼らにつり合うと見せる」ためであり、利道といった素人の舞は「重教の引き立て役」であったと、その演出について語る。そしてなにより、藩主である治脩を「拝見人」とすることで、「重教の舞台は荘厳され」たといい、重教の能に治脩の拝見は欠かせないものとなっていた。

『加賀藩史料』には、治脩がはじめて舞を学んだのが、安永2（1773）年4月9日のことと記されるが、『大梁公日記』から謡の稽古は既にその前年より始まっていたとわかる[70]。舞については、〈羽衣〉のクセ舞を稽古し、来月5月1日に披露することになったという[71]。5月1日、式舞臺において、治脩のほか、重教は〈飛鳥川〉〈氷室〉〈玉井〉を、宝生弥五郎は〈八島〉を舞った。

しかしながら、『加賀藩史料』の限りでは、演能の記録はもっぱら重教によるもので、治脩によるものは少ない。安永3（1774）年3月13日と4月18日には、治脩によって金沢にて慰能が催されたが、シテを勤めたのは権兵衛・宮門・権進であり、治脩は演じていない。6月13日に治脩が所持する謡本が出来上がったというから、急いで準備したさまがうかがえる。天明7（1787）年2月16日、前年に没した重教の室寿光院（千間）のために、囃子と狂言を行うが、弥五郎や唐沢屋八三郎といった御手役者や町役者が勤めている。治脩自身が脚の痛みを抱えていたこともあろうが、治脩がシテを勤めた記録は見つからない。寛政3（1791）年10月18日に金沢城二の丸で行われた慰能も同様である。治脩については、藩主たるべく能の習い始めも遅かったことが、一番の要因であろう。

本郷邸を他大名家が訪れた際も、能を催すことはなかったようだ。寛政元（1789）年3月21日、陸奥会津藩5代松平容頌（1750～1805）が来邸した際は、二汁六菜の料理に、酒・吸物・肴・茶・菓子でもてなしたあと、庭の見物を行っている。同3月27日、広島藩7代浅野重晟（1743～1814）父子来邸にあたっては、料理でもてなし、庭を見学したあと、馬場にて馬を観たり、諸々の宸翰や狩野伯圓の絵を観たりした。そのあとは素仕舞と一調一管が行われたのみである。ただ、こうした傾向は、治脩がそれほど能に心酔しなかったということもあろうが、吉徳の治政期である寛保年間以降続く藩政の混乱と財政危機、加えて天明の飢饉と、先行きの見えない情勢が続いたことも大きい。治脩と室正（1764～1819　大聖寺藩5代利道の2女）の婚儀が、天明4（1784）年から寛政11（1799）年まで、実に15年間延期されたことからも、厳しい藩情勢がうかがえる。

さて、重教には二人の男子があった。安永7（1778）年に生まれた嫡男斉敬は、治脩の嗣子として江戸城に登営していたが、寛政7（1795）に没し、2男斉広（1782～1824）が翌寛政8（1796）年に嗣子となる。翌年には宝生大夫英勝（14世　？～1811）が、斉広の師範御用を勤めることが決まった。斉広が能に心酔するきっかけであろう。

3. 加賀宝生の隆盛

（1）12代斉広

①　江戸における宝生流の再興

江戸時代後期、江戸においては再び宝生流が勢力を増すため、はじめにその経緯について述べておきたい。

天明6（1786）年に将軍となった11代家斉は、天明

元（1781）年より嗣子として江戸城西丸に入るも、能指南役であった観世清尚と子三十郎清充（のち18世 1756～1823）より能を習った形跡は見当たらない。家斉の実父徳川治済（一橋徳川家２代　1751～1827）による宝生贔屓がその理由である[72]。将軍の実父としての治済の影響は、政治的側面だけにとどまらず、宝生流は幕末再び隆盛期を迎える。

当時の宝生大夫は13世友勝（?～1791）。観世清尚の3男であった友勝は、家督を嗣いだ時はまだ幼かったため、分家である宝生嘉内家の弥五郎英勝（のち14世）が後見となった。この大夫後見の頃から、英勝には治済・家斉父子の援助があったのであろう。やがて早世した友勝の跡を嗣いで、英勝は寛政４（1792）年に14世宝生大夫となる。大夫後見役からは異例の出世であった。将軍嗣子の能指南役も、やがて観世大夫から宝生大夫へ移る[73]。

英勝が将軍の能指南役となった寛政11（1799）年、宝生流ははじめて謡本を刊行する。いわゆる「宝生流寛政版謡本」である。観世流、金春流に遅れながらも念願の謡本の刊行は、一橋家からの援助をもって可能となった。先に述べた「明和改正謡本」もそうであったように、謡本の刊行の背景には援助を行う権力者の存在がある。なお「寛政版」を元に、天保15（1844）年に刊行された横本「富山版」は、富山藩10代前田利保（1800～59）によるものであり、安政６（1859）年に刊行された「縁山本」と称される袖珍本は、13代斉泰の関与が指摘されている[74]。

②　斉広の文化年間の能と免状

斉広に話を戻そう。斉広がその後、どのように師範御用となった英勝より能を習い、能に親しむようになったかは、『加賀藩史料』にも記述がなく、明らかではない。家督相続のため江戸にあった享和２（1802）年３月、18世観世左近清充（?～?）より免状[75]がでているが、詳細は不明である。家督を相続するも、重教・治脩に同様、初入国祝賀能は実施されなかったことから、当時の加賀藩はまだ財政難にあったことがうかがえる。

斉広の能について考察した長山直治氏によると[76]、「斉広が藩主となって数年は殿中における演能が極めて少ない」と語る。その理由として「風俗および財政上の理由から藩士達に能を演じることの自粛を求めていたから」とする。ところが、文化３（1806）年８月９日に「役者を交えて能を演じることの禁止が撤回され」た。その後、金谷御殿に隠居する治脩の病気慰めの能が増加することから、撤回の理由はここにあり、加えてこれが「文化期の能楽の盛況をもたらすきっかけになった」と長山氏は述べている。

おそらく、斉広は家臣に自粛を求めていた間も、自身は稽古を続けていたのではないか。前田育徳会には斉広に宛てて文化年間に出された免状が３通伝えられている。１通目は、「辰正月」に英勝より出されたものだが、江戸滞在中の文化５(1808)年のものである。〈融 酌の舞〉と〈融 遊曲〉、〈海人 懐中舞〉、〈乱 七段〉と、いずれも小書であり、すでに熟達していることがうかがえる。２通目は文化６(1809)年７月、同じく英勝から出された。〈唐船〉〈照君〉〈俊寛〉〈船弁慶 前後之傳〉、〈鞍馬天狗 長刀〉、〈是界 白頭〉の６曲である。３通目は文化９（1812）年、大夫となったばかりの宝生友于（15世　1799～1863）より〈鷺〉の免状が渡されている。

文化３（1806）年以降に増加する斉広の演能記録について、曲目もわかるもののみ『加賀藩史料』より抽出してみよう。文化５（1808）年10月28日、金谷御殿にてこの年の春に伝授を受けたばかりの〈石橋〉を、翌文化６（1809）年２月７日も金谷御殿にて〈白楽天〉を、５月６日と７日は〈枕慈童〉と〈石橋〉を演じたとある。

しかしながら、長山氏が『政隣記』『御能等御番組附帳』等の史料より作成した『前田斉広時代の殿中における演能一覧（享和２年７月～文政７年６月）』によると、もっと頻繁に金谷御殿では能が催されており、斉広は様々な曲を演じていたことがわかる。例えば、文化６（1809）年の２月であれば、上記の２月７日以外にも、２日、９日、16日、22日、24日、26日、28日に金谷御殿にて能が行われ、斉広は〈竹生島〉（２日）、〈藤戸〉（22日）を演じている。

③　藩政期最大の儀式能

そして、文化８（1811）年の２月には、６日間にわたる規式能と翌閏２月に５日間の慰能が金沢城二の丸で催された。長い財政難を経たこの時期に、どうして藩政期最大とされる能が行われたのであろうか。それには文化５（1808）年の金沢城二の丸焼失と７年11月の再建が関わると長山氏は指摘する。

この２つの能には、３つの理由があった。金沢城二の丸の新築・斉広の家督相続・入国祝賀である。特に、力点が置かれたのは、二の丸造営の成就と考えられる。かつて宝暦年間に焼失した二の丸が、４年を経てようやく造成され、重教は入国入城するも、祝賀能は催されてはいない。この時期に前例のない祝賀能を開催した理由について、長山氏は「二ノ丸再建が諸士・庶民からの多額の資金・資材の献納によって賄われた」ため、「二ノ丸を披露することを目的に儀式能」が開催されたとする。

２月２日に規式能が初日を迎えるにあたり、正月24

日観覧者の心得が出された[77]。開催する6日間のうち、家中の者は5日間、残りの1日は寺方を招請する。隠居した者、人持の2男3男でお目見えが済んでいる者、これらの者で見物に罷り出る者は、27日までに名前を書き指し出すこと。初日の見物は人持頭分、隠居の人々、人持の嫡子に仰せ付けるので、大広間二之間と三之間、その横の廊下に並ぶこと。揃ったところで、菓子を出し、御中入の内に料理を頂戴することなど、細かく定められていた。2日目は初日に役割があった者、御奥小将・御表小将・御大小将など、頭分の嫡子・人持の2男3男。3日目は御馬廻、4日目は定番御馬廻・組外、5日目は御射手、御異風とその嫡子、跡組小頭のほか、御徒・御儒者・御医師などである。その心得が出された翌日の正月25日、斉広は〈石橋〉を演じ、平士以上の家臣が拝見した。

さて、その規式能であるが、斉広はまったくシテを勤めておらず、すべて御手役者が勤めた。初日は、権兵衛による〈高砂〉、波吉五郎兵衛による〈田村〉、弥三郎の〈羽衣〉、波吉宮門による〈張良〉、諸橋権進による〈祝言金札〉。2日目は弥三郎の〈難波〉、宝生十左衛門の〈八嶋〉、権兵衛の〈熊野〉、権進の〈春日龍神〉、金春流の加藤久米五郎による〈祝言養老〉。3日目は宮門の〈氷室〉、小三郎の〈兼平〉、弥三郎の〈東北〉、権兵衛の〈道成寺〉、源三郎の〈祝言右近〉。4日目は権兵衛の〈白楽天〉、権進の〈経政〉、宮門の〈吉野静〉、弥三郎の〈石橋〉、宝生流の松井左一郎の〈祝言呉服〉。5日目は弥三郎の〈竹生島〉、権兵衛の〈忠則〉、権進の〈半蔀〉、宮門の〈融〉、五郎兵衛〈祝言志賀〉、6日目は権進の〈弓八幡〉、金春流竹部万蔵〈箙〉、権兵衛の〈六浦〉、弥三郎の〈弦上〉、宮門による〈猩々〉であった。

シテを勤めた顔ぶれより、加賀藩は必ずしも宝生流一辺倒ではないことがうかがえよう。京都在住の金春流からは竹田権兵衛とツレの加藤久米五郎・竹部万蔵の名がある。宝生流からは江戸在住の弥三郎やツレの松林小三郎の名も見え、京都と江戸の各所より招いたこともわかる。

一方、翌月の慰能のシテはもっぱら斉広であった。1日目は6曲中〈翁〉と〈邯鄲〉の2曲、2日目も6曲中〈実盛〉〈道成寺〉の2曲、3日目6曲中〈玉井〉〈小原御幸〉、4日目は7曲中〈田村〉〈望月〉の2曲、5日目7曲中〈野々宮〉〈延年安宅舞〉の2曲という多彩ぶりである。

慰能も規式能同様、あらかじめ家臣たちに案内が出され、いつどのような家職の者が拝見するか、嫡子も拝見を希望するならば名簿を提出すること。服紗小袖に裃を着用すること、などが示された。

規式能に加えて、慰能も催された理由は、斉広がシテを勤めたかっただけではないようだ。長山氏は延享5（1748）年に行われた重熙の家督相続・入国祝賀能より盛大としたい思いがあったと推測する。自ら演じることによって「藩士や庶民をもてなし、二ノ丸造営成就を感謝する意味があった」という。こうして規式能と慰能をとおして、ほぼ1万人の家臣と庶民に二の丸が披露されたのである。まさに「藩の危急の際には領民が一致協力してこれに当たり、藩主はそれに応えて仁政に励む、そのような藩主と領民を象徴」こそが、文化の大儀式能であった。

④　斉広の江戸屋敷における能

一方、江戸においてはどのような能を催していたのだろうか。文化8（1811）年4月から翌文化9（1812）年3月の斉広の江戸滞在期間をみてみよう。

文化9（1812）年2月22日、阿波徳島藩11代蜂須賀治昭（1758～1814）・斉昌（のち12代徳島藩主　1795～1859）父子が本郷邸を訪ねて斉広の能を観ている。これは治昭より見物したいと頼まれて催されたものであった。弥三郎の〈九世戸〉に始まり、権兵衛の〈実盛〉、斉広による〈隅田川〉〈石橋〉、権兵衛の〈海人〉と続き、能の見物中には御料理が出されたという。『加賀藩史料』に演目まで記された能は、これのみである。

しかし、先と同様、長山氏による『演能一覧』をみると、江戸屋敷では他にさまざまな能が催されていたことがわかる。例えば、蜂須賀治昭については、文化8（1811）年10月18日にも訪れており、この時斉広は〈求塚〉と〈三笑〉を演じたという。

この能以外は、すべて身内を招いて行われたものである。4月13日、法梁院（治脩室正）招請能にて〈弓八幡〉と〈盛久〉を、大聖寺藩9代利之（備後守　1787～1836）らを招いて〈葵上〉〈夜討曽我〉を、9月13日利之を招いて〈綾鼓〉を、10月18日も利之らを招いて〈望月〉を演じている。年が明けた正月13日と22日には、斉広室隆（真龍院　1787～1870）と法梁院を招いて〈東北〉〈籠太鼓〉を演じている。

文政年間以降も、斉広の能に他大名家を招いたものは確認できない。ほとんどが稽古能か、あるいは富山藩の利保など身内を招いた能、身内の慶事を祝う能が多くを占めている。

（2）13代斉泰

①　『申楽免廃論』にみる斉泰の能のはじまり

13代斉泰は、斉広の嫡男として、文化8（1811）年に金沢に生まれた[78]。母は栄操院（藩臣小野木之庸の女

1789 ～ 1850）。父斉広の影響により、幼いころより能に親しみ、7 歳にあたる文化 14（1817）年 8 月 1 日、幼名勝千代は、〈猩々〉にてはじめて能を舞った。場所は金沢城内二の丸奥舞台である[79]。

斉広から、能を習うようういわば強いられたことについて、後に斉泰はその著『申楽免廃論』（加越能文庫 1262）において、「予七歳ノ幼キ頃ヨリ　家君自ラ教ヘ玉ヒテ此道ノ門ニ入ル初メハ更ニ面白カラス惟タ老相ノ厳命ニヨリテ勉強スル已」と、当初はその面白さもわからず、ただ斉広の命に従って学んだと記している。以降の演能について『加賀藩史料』にはほとんど記されないため、長山氏による演能一覧を参照すると[80]、同月 25 日には〈車僧〉を同じく奥舞台にて舞っている。

文政年間に入ると、演じる能の種類も増えていく。斉泰が江戸へ下る文政 5（1822）年 8 月までだけでも、〈舎利〉〈小鍛冶〉〈橋弁慶〉〈放下僧〉〈熊坂〉〈項羽〉〈大会〉〈枕慈童〉〈田村〉〈飛雲〉〈経政〉〈嵐山〉〈禅師曽我〉〈箙〉〈船弁慶〉〈鶴亀〉〈鵺〉〈芦刈〉〈田村〉〈竹生島〉〈黒塚〉〈龍田〉〈鍾馗〉〈羽衣〉など、実に多彩な曲を演じている。中には〈烏帽子折〉や〈望月〉のツレを演じたとの記録もあり、次第に様々な形で能を楽しむようになったことがうかがえる。

『申楽免廃論』には、「然レトモ其ノ芸術ノ上達ニシタカヒ次第ニ其道ノ妙理ナル事万事ニワタリテ利益アルコトヲ自得シ又、父ノ深ク好ミ玉ヒシモ斯ノ如キ所ナル歟此ノ如キ理ナルヤト云フ事マテモ姐悟リ其レハ心ニ楽キ事極リ無シ」と記されている。能の上達にともない、能には道理があり、すべてにおいて有益であることに気づき、父である斉広が能を好んだ理由もわかるようになったというのだ。藩主となるより早く、江戸へ下る以前に、既に能に対する理解と楽しみを持っていたことがわかる。

②　江戸屋敷における能と免状

家督相続を前に、初めて江戸へ下った文政 5（1822）年 11 月 10 日、本郷邸において能が催された。おそらく、斉泰はこの日を待ち望んだにちがいない。宝生友于が〈昭君〉1 番であったのに対し、斉泰は〈龍田〉と〈土蜘〉の 2 番を舞っている。この日は富山藩 9 代前田利幹（1771 ～ 1836）と利保父子も招かれ、利幹は〈通盛〉、利保は〈藤戸〉を演じた。能好きの利保はもちろん、斉泰においても、この日の能は特別のものとなった。

はじめての江戸滞在は、文政 7（1824）年 3 月まで及んだ。この間、勝千代から勝丸、犬千代、利候と改名し、若狭守に就き、徳川家斉の諱を以て、斉泰となった。家督相続を経て、加賀守となり、また室として家斉の 21 女溶（のち偕　1813 ～ 68）を迎えることも決まる[81]。このように慌ただしい江戸滞在となった斉泰の演能記録を、これ以外には見ることはできない。しかし、友于の稽古は続いていたとうかがえ、帰国する直前、〈石橋〉と〈融〉の免状[82]を、友于より受けた。

免状については、前田育徳会には 3 通が残されている。残りの 2 通が出されたのは、天保 5（1834）年と嘉永 4（1851）年で、いずれも江戸に参勤した際のことである。江戸滞在時には、本郷邸の稽古用の舞台において、稽古を重ねていたのであろう。

天保 2（1831）年の江戸滞在時に催された能を、『諸事要用雑記』（加越能文庫 4299）からみてみよう。4 月 22 日、真龍院（斉広後室　1787 ～ 1870）を招請して、金春大夫を召し、御囃子を催した。8 月 15 日、能を催したが、友于は江戸城西の丸の囃子と重なり、断ったとある。9 月 12 日、能を催すことを大聖寺藩の利平（備後守　1823 ～ 49）と富山藩の利保（出雲守）、七日市藩の利豁（大和守　富山藩 9 代利幹 7 男　1823 ～ 77）にも伝えたが、利平父子と利豁は断り、利保のみが出てきた。見物所には菓子が出されたという。この日の能は観世方の弟子が召し出され、日吉市十郎が〈実盛〉を、福王甚五郎が〈海人〉を勤め、甚五郎については若いが上手であったとある。狂言方の野村万蔵も詰めており、狂言 2 番も演じられた。10 月 6 日、嫡男慶寧（のち 14 代　1830 ～ 74）の宮参りが済んだことを祝って能が催され、料理が出た。弥五郎が以前のように出入りするようになって、初めてとあることから、8 月 15 日の能を断って以来、友于の出入りは許されなかったようだ。9 月の能に「観世方の弟子」が召し出された理由もわかる。この日斉泰は〈野々宮〉を披露した。

斉泰が他大名の江戸屋敷を訪ねた例もある。10 月 26 日、斉泰は利平・利保・利極（鍛太郎　のち大聖寺藩 10 代　1812 ～ 38）とともに、陸奥盛岡藩 12 代南部利済（1797 ～ 1885）邸を訪ね、能を観ている。前田家と南部家には、斉泰の妹厚（斉広 2 女　1813 ～ 52）がはじめ南部利用（盛岡藩 11 代　1808 ～ 25）に嫁いだという関わりがあり、同じく宝生流の能を愛好するという共通点があった[83]。「鋌丸様今日初テ御対顔」とあるから、利済の嫡男利義（のち 13 代　1824 ～ 88）との対面が目的であったか。その利義が〈鷺〉を舞い、利済が〈花筐〉、弥五郎が〈安宅　延年の舞〉を披露したという。

斉泰が金沢へ帰国する翌天保 3（1832）年 4 月までの記録は以上のとおりで、以降の演能記録は激減するが、天保 5（1834）年には〈道成寺〉〈江口〉〈三山〉〈柏崎〉〈誓願寺〉〈草紙洗〉〈藤戸〉〈阿漕〉〈照君〉〈夕顔〉〈絃上

早舞〉にて2通目の免状が出ていることから、稽古は続いていたのであろう。天保6（1835）年12月22日には、装束は付けず、祝言とも6番を稽古したとある。稽古の相手は御手役者が勤めたようだ[84]。

③　斉泰の〈翁〉初演と真龍院

さて、2通目と3通目の許状の間が20年近く空いたのは、天保7（1836）年9月に家臣から演能を廃するよう進言があったことと[85]、天保13（1842）年夏より脚気を患ったことにある。このような状況にあって、斉泰と真龍院との能を通した交流がうかがえるため、記しておきたい。

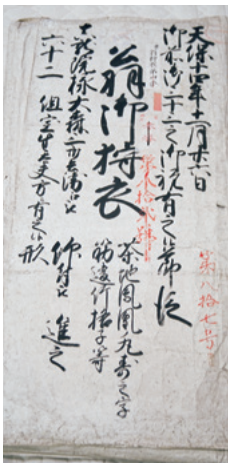
天保9（1838）年9月1日、金沢へ帰国した真龍院を招請して、能が催された。権進による〈弱法師〉などのほか、斉泰は〈藤〉と〈融　遊曲〉を舞っている[86]。長く暮らした江戸を離れ、金沢へ移った真龍院を慰める想いがあったにちがいない。翌々年の天保11（1840）年5月27日、斉泰ははじめて〈翁〉を演じた[87]。『官私随筆』（加越能文庫　4214）によると、〈翁〉はその前年江戸にて伝授されたとある。これは「真龍院様」へもご覧に入れなくては、となったようだ。〈翁〉のほか、〈高砂〉〈花筐〉〈安宅〉なども演じられ、鯛の吸物や酒なども出された。

天保14（1843）年11月26日、前年より脚気を患う斉泰のもとへ、真龍院より翁狩衣が贈られた。33歳を迎えた斉泰を祝ったものであるが、脚気の治癒を願う真龍院の思いもあったにちがいない。

この翁狩衣は、今日彦根城博物館に所蔵されている（1図）[88]。〈翁〉に用いる狩衣とは、幾何学的なデザインが特徴の蜀江模様と定められている。しかし、この狩衣は「寿」という文字に、竹や桐・菊、鳳凰といった吉祥の意匠が、まるで蜀江模様のように構成されており、たいへん珍しく面白いデザインの能装束である。

1図　茶地寿字桐竹鳳凰模様翁狩衣
（彦根城博物館所蔵）

畳紙には「天保十四年十一月廿六日／御前御三十三之御祝有之節従／真龍院様大森三郎兵衛被仰付被進之／但宝生大夫方ニ有之候形（2図）と記されている。真龍院が京都の呉服商人の大森三郎兵衛に用意させたもので、友于のところにも同じものがあるという。斉泰の真龍院に対する心遣いや、〈翁〉の披露があったことへの感謝の気持ちが、この能装束には込められているのではないだろうか。



2図　茶地寿字桐竹鳳凰模様翁狩衣 畳紙
（彦根城博物館所蔵）

④　斉泰の脚気治癒と御本復御祝能

天保13（1842）年夏に発症した脚気に苦しむ間、斉泰は江戸参勤の延期を度々願い出た。完治したのは弘化2（1845）年の正月で、治癒には約3年を要した。江戸へ赴かず、友于より稽古を受けることはなかったが、その治癒に役立ったのが、まさに能を舞うことであった。

医師より「気血運動ノ為メ」舞うことを勧められ、近臣と試してみたところ、意外と難しくなかった。それから日課を立てて、素仕舞2,3番から5,6番から始めた。やがてそれが10番となり、装束をつけて舞うことも可能となったという。「此意ヲ詳ニ記シテ後人ノ為ニ解釈セン」と記したように、こうした経緯について記し、「申楽ノ稗益」を家臣に知らしめんと著したのが、先述より紹介する『申楽免廃論』であった。そして弘化2（1845）年には脚気治癒を祝うのべ6日間の能が金沢城内で催された。

この「御本復御祝能」については、その際斉泰に贈られた能装束とともに、既に詳しく述べたことがある[89]。脚気を患う以前より、能を愛好した斉泰であったが、天保年間は藩情勢もあり、稽古は行いつつも演能は控えていた。しかし、脚気を能によって治癒させたことから、能は脚気予防にも欠かせない手段だとして、弘化2（1845）年以降はより積極的に演能を催すようになる。その嚆矢が同月11日より、のべ6日間にわたった「御本復御祝能」で、それを前に4日に行われた「御本復御祝の儀」において、様々な人物よりお祝いの能装束が斉泰へ贈られていた。

該当する能装束は現在7点確認されており[90]、能装束を包む畳紙に記された墨書から、4点についてその贈り主が判明する。室である溶姫からは、紺色の狩衣（高

島屋史料館所蔵『紺地竹立涌松梅丸模様金襴袷狩衣』）が、斉広室である真龍院からは格子模様の厚板（野村美術館所蔵『茶浅黄地段鶴菱桐丸模様厚板』）が、生母である栄操院からは紫地の長絹（野村美術館所蔵『紫地巻物筆源氏車模様長絹』）が、妹の厚（松平容敬室　和田倉御前）からは、源氏香の模様が散らされた摺箔（松坂屋美術館所蔵『白地源氏香散模様摺箔』）が贈られた。この「御本復御祝能」において、恐らく斉泰はこれらを早速着用し披露しただろう。斉泰は〈弓八幡〉〈須磨源氏〉〈羽衣〉〈鷺〉〈実盛〉〈船弁慶〉など、各日２～３番舞ったが、〈弓八幡〉〈松風〉〈実盛〉あたりで着用したと考える。この能にあわせて、連日２～300 人の家臣たちが観覧し、領民たちには盆正月[91]という休日が与えられた。まさに藩あげての祝福であった。

続いて、江戸本郷邸においても斉泰の脚気治癒を祝う能が催されている。斉泰が江戸に到着した翌月の５月 21 日、溶姫を招いて行われた。多くの家臣が観覧した金沢での演能とは異なり、富山藩 10 代前田利保・利友（のち 11 代　1834 ～ 53）、大聖寺藩 11 代前田利平といった身内のみを招いた能であった。演目は不明だが、この日は斉泰のほか、利保も演じている。あらかじめ斉泰に能装束を贈った溶姫であったが、この場で改めて快気を祝う能が催された[92]。

⑤　本郷邸における能

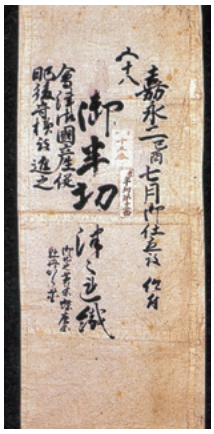
さて、以降本郷邸で行われる能については、おおよそ３つに区分することができよう。[1] 他大名の来邸に伴い催される能、[2] 身内を招いて催される能、[3] 家臣に観覧させる能、である。そして、いずれの能についても、しばしば宝生友于ならびに子石之助（のち 16 世九郎知栄　1837 ～ 1917）が出演していることは興味深い。こうした加賀藩と宝生家の親密ぶりは、のちの能〈来殿〉の創作や引退後の友于（紫雪）が金沢へ身を寄せたことへとつながる。

[1] については、弘化４（1847）年９月４日に讃岐高松藩 10 代松平頼胤（1811 ～ 77）、陸奥会津藩８代松平容敬（1804 ～ 52）・容保（1836 ～ 93）を招いて行われた能が、早い例として挙げられる[93]。演目については〈玉井〉以外は不明だが、吸物をはじめさまざまな料理でもてなした。この「御三方様」を舞招いての能は、嘉永２（1849）年の同じく９月４日にも行われている。ただ、前年の嘉永元（1848）年に因幡鳥取藩の家督を継いだ斉泰４男の池田慶栄（1834 ～ 50）や斉泰の妹にあたる容敬室の厚も同席しているので[94]、[2] の性格も含まれると解釈できよう。

この日演じられたのは、友于による〈草子洗〉に始まり、石之助の〈経政〉、斉泰による〈天鼓〉、利鬯（斉泰７男　のち 14 代大聖寺藩主　1841 ～ 1920）の〈皇帝〉、斉泰の〈俊寛〉、石之助による〈橋弁慶〉、友于の〈海人〉という能７番と、狂言〈墨塗〉〈棒しばり〉〈法師母〉〈犬山伏〉の４番が行われた。

ところで、この日斉泰は、同年７月に容敬より贈られた半切を着用して〈天鼓〉のシテを勤めたと考える。これは、現在京都国立博物館に所蔵される半切（黄地唐花模様綴錦半切（３図））で、能装束を包む畳紙には「御半切 / つづれ織 / 御地色黄茶蝶唐花牡丹から花 / 会津御国産従肥後守様被進之 / 嘉永二年巳七月仕立被仰付（４図）」と記されている。能好きであった斉泰の元には、斉泰を喜ばせるべく、有卦入りの祝い、先に述べたような快気祝いなどの際は、様々な裂地が届けられたのだ。

３図　黄地唐花模様綴錦半切（京都国立博物館所蔵）



４図　黄地唐花模様綴錦半切畳紙（淡交社『一歩進めて能鑑賞 演目別にみる能装束』より京都国立博物館所蔵）

その他、本郷邸を訪ねて能を観た人物として、豊前小倉藩７代小笠原忠徴（1808 ～ 56　室は斉広の１女直と後室は斉広の４女寛）と筑後久留米藩 11 代有馬慶頼（のち頼咸　1828 ～ 81）の名が、弘化５（1848）年２月 21 日に確認できる（曲名は不明）。

[2] については、嫡男慶寧の成婚を祝し、慶寧とその室崇（東御前　？～ 1856）、喬松丸（のち敬栄）、和田倉御前、寿正院（斉広３女勇大聖寺藩 10 代利極室　1813 ～ 52）を招いて催された弘化４（1847）年５月２日の能にて斉泰は〈望月〉を演

じている。溶姫を招いて行われた嘉永2（1849）年4月21日の能は、慶寧の帰国、喬松丸の引っ越しと元服を祝して、和田倉御前と寿正院も同席して行われた。演目は〈嵐山〉〈箙〉〈井筒〉〈邯鄲〉〈春日龍神〉〈祝言金札〉で、斉泰が〈井筒〉、友于が〈春日龍神〉を演じている。

また、支藩である富山藩の利友や大聖寺藩の利義（12代　斉泰3男　1833～55）、七日市藩利豁（富山藩9代利幹8男　1823～77）と共に演じることも多かった。こうした傾向は、既に文政天保年間頃から、江戸金沢両方の演能においてみることができ、既に述べたことがある[95]。文政天保年間の演能記録は家臣からの進言もあって少ないものの、支藩の人物や母や子など身内を共にした能は行われていた。料理・吸物・酒・菓子などが用意され、藩主の慰みとしてだけでなく、社交の場として機能し、宗藩と支藩のつながりを深める役割が果たされていた。富山藩と大聖寺藩の江戸屋敷が、本郷に隣接していたことも大きい。

特に、自身が父斉広の影響の元、能を始めたように、子にも同様に勧めていたことは、「斉泰の能」におけるひとつの特徴といえる。慶寧が友于より能を習うようになったのは、嘉永3（1850）年3月17日以降のことで、25日にはさっそく〈田村〉を演じているが、その前年の閏4月23日に「保養と運動のために乱舞を始めるのがよろしい」と勧められている。のちの安政年間以降、金沢江戸双方において、慶寧と利鬯とともに演じる能が顕著になるのは、斉泰の能の特徴である。

家臣たちに観覧させる[3]については、嘉永2（1849）年閏4月4日に〈飛雲〉と〈梅枝〉を演じたもの、嘉永3（1850）年5月18日に行われた能（曲目不明）がある。しかしながら、家臣も観覧した能については、寿正院や利義が同席、あるいは利義も演じた能も多く、[2]としての性格も持ち合わせていたといえよう。[2]と[3]の間に明確な区別はないものの、藩主が演じる能を家臣に見せたのは、能への理解を求めたかったのではないか。本郷邸の2つの能舞台では、『加賀藩史料』にも記されない多くの能があるものと思われる。

そして、家臣に能あるいは謡を勧める例は、先の『申楽免廃論』にも見ることができる。その冒頭『申楽免廃論小叙』には「此意ヲ詳ニ記シテ後人ノ為ニ解釈セント思へ」と、後の人に理解を求める旨が記されており、「舞曲ヲナシテ弱トセス武術同等ナル事云フ俟スシテ弱トセス。武術同等ナル事言ヲ俟スシテ明白ナリ」と、舞曲は武術と同等であるということを伝えようとしている。家臣たちが同書を模写し広まったことは、加越能文庫に複写された同本が伝わることや、昭和9（1934）年に印刷頒布されたことからもうかがえる。

⑥　能〈来殿〉の創作とその意図

もうひとつ、嘉永4（1851）年友于とともに取り組んだ〈来殿〉の創作も、能の普及を試みた例として挙げられよう。

同年3月26日より江戸に滞在する斉泰は、しばしば友于と演能を催している。8月27日の能では、〈千手〉〈融〉を斉泰が、〈経政〉を利義が、〈鉄輪〉を友于が舞い、翌9月21日にも〈八島〉〈草子洗〉を斉泰が、〈岩船〉を利義が、〈羽衣〉を友于が舞っている。斉泰はこの月に、「白頭」の小書のある能ばかる記された免状を友于より出されている[96]。おそらく、友于が頻繁に本郷邸を訪れる中で、菅原道真をシテとした能〈来殿〉創作の話が出たのであろう。斉泰がその創作に着手したのには、理由がある。

翌嘉永5（1852）年は、前田家が家祖として崇める菅原道真の没後950年にあたる。斉泰が記した『新曲来殿濫觴[97]』によると、「今嘉永四年にて九百四十九年に及べり。されば明年任子の春二月二十五日をもて九百五十年忌の神事、時いたれば世を挙て尊信之輩は祭祀の禮もあるべきか」と、年忌を迎えることと祭祀を行うことの必要性について冒頭で触れ、「夫は兎も角當家は菅公正統の傳系なればその祭りいと篤かるべきと、かの年忌祭事の砌は風雅の舞曲をも奏したき志にて」と、加賀藩前田家は道真を祖とするため[98]、より篤く祀らねばならず、祭祀の際は「風雅な舞曲」を奏でたいと考えたと語る。

それゆえ、「謡曲舞曲をも企んものと二百有餘の曲中事跡常に嗜好ましましたる梅花松樹等にいたる迄、此社に所縁ある作曲撰りだして番組になさむ」と、あらゆる能の中から道真に縁のある能を選び出して番組にしたいと考えたという。そうした中に道真をシテとした〈雷電〉という能があるが、これは亡霊となって尊意僧正（ワキ）の前に現れた道真（シテ）が、生前の恨みを晴らさんことを前場で告白し、後場で鳴雷となって現れる内容のため、斉泰は「菅公御忿怒の事を専らにして作りたる曲なれば、此曲を催したるにも却而聖慮にそむく恐れもがなと」と思い、「ひたすら思慮をめぐらし」たという。その結果「幸謡曲にかざしといふのあれば、其例にならひ、文句等の忌嫌をさりて叱るべきやと心付、予が曾て覧したる書籍中、菅家の事跡有るをかれこれとりまぜ謡曲文句に綴」った。「かざし」という差しさわりのある言葉を、他の言葉に替える手法を用いて、道真に関する「事跡」をあれこれ取り混ぜ謡の詞章とし、「當流宗主寶生友于へかくと示し」たのだ。道真に関する「事跡」とは、

前田家に所蔵されるあらゆる書籍から調べ出したと推測される。藩祖利家以来天神信仰を有し、3代利常の時代に藩祖は道真と公言するようになった前田家では、代々道真関連の書籍文物の収集に励んでいた。

斉泰が改変したのは、後場である。鳴雷となって鬼神姿で登場し雷を落とす〈雷電〉に対し、〈来殿〉は貴人姿で舞う「大冨天神」となった[99]。特に、道真について「天満天神」ではなく、「大冨天神」としたのがその特徴で、その典拠が育徳会に蔵される亀井昭陽の『菅公略傳』にあることが判明している。この「大冨天神」には、斉泰は特別な思い入れがあったようで、「大冨天神」の神号を斉泰が記し、溶姫がその文字を飾るように梅花を描いた掛軸が伝わっている[100]。

迎えた嘉永5（1852）年2月25日、〈来殿〉が演じられたのは、斉泰が留守の金沢においてであった。シテは波吉宮門である[101]。その2日前に慶寧より〈来殿〉を演奏してもよい旨、許可が下りた[102]。つまり、〈来殿〉は斉泰が演じたり、斉泰が観たりすることを目的として創作されたのではなく、家臣たちが観覧し、家臣たちが謡うことを目的としてつくられたのである。事実、翌閏2月25日、斉泰が滞在する江戸において菅公950年祭が終わったことを祝して能が催されたが、〈来殿〉は演じられていない。

本郷邸で行われたこの日の能をみてみよう。年寄役として仕えた奥村栄通の記録[103]によると、縮緬でつくられた袱紗小袖と裃を着て、六時頃に出席。能は始まっており、すぐさま拝見処へ向かったという。この日、能を拝見しようとする者はすこぶる多く、着座処よりさらに下がって屏風が囲まれていた。鷹司政通（1789～1868）からは閑院宮愛仁親王所持の道真直筆の扇面が贈られた。演じられたのは、〈翁〉、斉泰による〈鶴亀〉、狂言〈恵比寿大黒〉、〈八島〉、狂言〈以呂波〉、友于による〈姥捨〉。中入りののち、斉泰による〈道成寺〉、狂言〈釣狐〉、利義による〈松虫〉、狂言〈素襖落〉、利鬯による〈張良〉、石之助による〈猩々 七人乱〉である[104]。斉泰の妹である勇（池端御前）も同席したという。

結局、藩政期に〈来殿〉が演じられたのは、この嘉永5（1852）年2月25日と、その後は万延元（1860）年4月27日[105]だけであった。

「謡うことを目的」という点では、明治13（1880）年頃「文句節合等穏かならず。謡う人も謡い悪く、聞く人も耳障りありて落付あしし」と、一部が改変されている。〈来殿〉については、その成立後、能番組に確認することはほとんどない中で、こうした意見が出てくることは、加賀藩内で謡われることが多かったからと解釈できよう。改変されたのは、まさに斉泰が『新曲来殿濫觴』中に「北野物狂等の文句と取捨し、今此曲中へ併せつづ」った「秋の初なれと読しも梅か枝にかつ色見する花紅葉の」の箇所であった。

〈来殿〉が成立した当初、「後来此曲を公になすべし」と友于が言ったと『新曲来殿濫觴』には記されているが、明治26（1893）年、16世宝生九郎知栄によって『謡曲備考』中に掲載され、37年以降の宝生流謡本には〈雷電〉にかわって採用された。利鬯が後語ったことによると、明治の終わり頃、〈来殿〉は、「前田家の能のよふに相心得居候者多有之[106]」であったという。〈来殿〉の浸透ぶりがうかがえるエピソードである。

⑦　斉泰、子たちとの共演

安政年間に入ると、斉泰の能は子とともに演じるものが増えていく。

江戸においては安政2(1855)年4月18日、前年に睦(慶寧1女　1854～1899）が誕生したことを祝い、溶を招請して能を催している。斉泰は〈志賀〉〈融　笏之舞〉を、慶寧は〈杜若　笏之舞〉の太鼓を勤め、大夫を嘉永6(1853)年に継いだばかりの知栄が〈弱法師〉を演じた。斉泰の〈志賀〉の相手は宝生金五郎(7世　蕃弥　？～?)、〈融〉の相手は金五郎の子喜勢太郎（のち8世　新朔　1836～98）が勤めている。太鼓を勤める慶寧を家臣たちは初めて観たようだ。

先述のとおり、慶寧は嘉永3（1850）年3月より友于から能を習っていたが、太鼓も好んだようで、安政年間以降名前がみえる。安政4（1857）年4月28日には本郷邸を訪ねた松平容保[107]を前に能が演じられているが、利鬯がシテを勤めた〈小鍛冶〉にて、慶寧は太鼓を勤め、加えて〈松風〉も演じている。斉泰は〈氷室〉と〈鉄輪〉を、知栄は〈清経〉を演じた。この日の能は、後に「明治の三名人」のひとりと称される知栄、三名人を超える名手ともいわれた新朔の若き日の舞台としても着目できよう。

その4日前にあたる24日にも能は催されており、斉泰・慶寧・利鬯に加えて、「紫雪」の名が見える。友于が隠居後も加賀藩の能を勤めていたのだ[108]。

安政5(1858)年4月13日の能では、斉泰が演じる〈右近〉と〈綾鼓〉にて太鼓を勤めた慶寧は、さらに〈夕顔〉〈藤〉ではシテを勤めている。この日はその他、利鬯が〈石橋〉と〈浦島〉を、知栄が〈三山〉を演じた。この月のはじめ、慶寧は通（後室　鷹司政通の養女　1846～64）との婚儀を執り行ったため、その祝いも兼ねて行われたものと推測される。同月16日も、斉泰、慶寧、利鬯と知栄で能が催されている。斉泰が〈女郎花〉と〈求塚〉、

慶寧が〈唐船〉と〈乱〉、利鬯が〈加茂物狂〉と〈項羽〉、知栄が〈東岸居士〉を演じた。なお『加賀藩史料』に記された江戸における演能記録は、これが最後となる。

⑧　斉泰と能、その後

こうした子とともに演じる傾向は、江戸金沢双方において見えるが、この頃の加賀藩政に触れながら、能との関わりについて考えてみたい。

斉泰には12人の男子があり、早世した4人（2男釣次郎・6男純六郎・9男亮麻呂・10男簡之允）を除く8人はそれぞれに藩主や他家を継ぐなどしている。3男利義は大聖寺藩12代、4男慶栄（1834～50）は鳥取藩11代、5男利行（1835～56）は大聖寺藩13代、7男利鬯は大聖寺藩14代、8男直会（1847～56）は藩臣である前田土佐守家9代、11男利同（1856～1921）は富山藩13代、元治元（1864）年に生まれた利武（のち男爵）である。幕末の加賀藩、支藩である富山藩も大聖寺藩は、斉泰の支配下にあった。

大聖寺藩に関しては、斉泰の妹にあたる勇（池端御前、寿正院）が、大聖寺藩10代利極に嫁いだことに始まるといえよう。嫡子がなく、弟にあたる利平が11代となるも、その嫡男はいずれも早世したため、斉泰の3男利義が12代となった。しかし利義も安政2（1855）年に卒し、継いだ斉泰7男利行も4同年に没、利鬯が大聖寺藩14代となった。いずれにせよ、斉泰および勇の意向が大きかったものと思われる。

富山藩については、10代利保の隠居後、御家騒動が起こる。弘化3（1846）年、11代藩主となった利友（1834～54）はまだ若く、病弱でもあったことから、次第に生母の毎木が藩政に関わるようになった。これが江戸派（毎木）と富山派（利保）の対立に発展。嘉永6（1853）年の利友の没後に利聲（1835～1904）が12代となり江戸派と手を結ぶと、ますます抗争は激化した。この対立を収めたのが、利保と手を結んだ斉泰であった。毎木は蟄居、利聲も政務から外され、利保が再び実権を握った。そして、利保が没した安政6（1859）年に利聲は隠居となり、斉泰の11男利同が13代藩主となる。利同はまだ幼かったため、実質は斉泰が藩政を掌握した。

斉泰の演能記録を考察すると、妹である寿正院をはじめ、大聖寺藩と富山藩の人々が頻繁に登場している。まるで幕末における本藩である加賀藩と支藩の大聖寺藩富山藩の関係をみるようである。そして、江戸の本郷邸には大聖寺藩邸と富山藩邸が隣接していた。この成り立ちについて筆者は詳しくないが、隣接していたからこそ、本郷邸では能を介して盛んに交流していたと理解できる。

「富山様」と称された利保より、万延元(1860)年8月に譲られたという前田家伝来の能装束が7点確認されているが、利保が没したのはその前年である。筆者はかつてこれら譲られた装束について、「斉泰と利保、互いに能好きであった」ため「利保の嗜好に沿った模様」の装束であるならば「斉泰にとってもたいへん魅力的で」、「加賀藩へ渡った経緯も容易に推測できる」と述べたことがあったが[109]、富山藩の情勢を考えると、能装束の譲渡はその「藩政をも」譲り受けた象徴とみてとれよう。

ところで、隠居となった利聲が所持した能装束が、現在は三井記念美術館に所蔵されている。利聲の4女苞(苞子　1869～1946)が、三井北家10代当主高棟(1857～1948)に嫁いだからだ[110]。能装束が収められた木箱には「従二位前田利聲様御遺物」と「明治三十七年」とその没年が記されており、義父の遺品として三井家へ入ったことを伝える。利聲は恐らく、能を愛好したのであろう。明治期に入って仕立てたと思われる珍しい生地の法被や側次が収められている。同館には江戸時代以前の能装束も伝えられるが[111]、それらを「斉泰へ譲られなかった能装束」と考えると、伝存することはまた奇縁ではないだろうか。

4. 能装束より探る前田家の能

筆者はかねてより伝存する加賀藩前田家伝来の能装束が、どのような理由で仕立てられ、どのような場で用いられてきたかに着目している。それは能装束を包む畳紙に記される文字を頼りとするものだが、畳紙に文字が「記録」され、能装束とともに伝わる例は今のところ加賀藩以外になく、能装束研究においても注目されている。

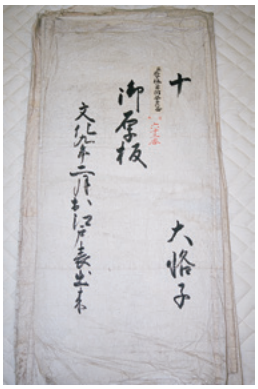
記されるのは、能装束の種類・模様・番号などで、元々台帳整理が目的と推察されるが、中には「真龍院様より」「栄操院様より」など贈り主の名、「御本復御祝之節」といったその理由、年代まで記されるものもあり、当時の演能記録と照らし合わせることによって、具体的な使用状況を推察することができるのである。ここでは、「江戸表」と記されたもの、江戸屋敷滞在中に他大名より贈られたものを中心に紹介し、どのように使用されたか考えてみたい。

(1)「御厚板 / 大格子 / 文化九年二月於江戸表出来」畳紙のみ（5図）

文化9（1812）年2月、「江戸表」にて出来たとされる能装束である。能装束がどこで仕立てられたかについてはよく聞かれる質問だが、金沢城内の装束方が勤めたと考えられるほか、富山藩においては八尾で仕立てられ

たことも判明している[112]。京都の西陣から裂地を仕入れたと畳紙に記されたものもある。

この畳紙のとおり、江戸で仕立てられたこともあるようだ。この時期の能装束については、既に長山直治氏の指摘がある。治脩・斉広に仕えた家臣津田政隣が著した『政隣記』中の同年同月晦日条には、当時江戸詰であった横山隆盛が能の稽古に励んだ様子が記されている。能の披露を命じられていた隆盛は、斉広の相手を勤める江



５図　「御厚板 / 大格子 / 文化九年二月於江戸表出来」畳紙（彦根城博物館所蔵）

戸の役者たちと稽古を重ね、宝生大夫からも秘曲を伝授されるに至り、同月の 19 日には江戸屋敷において〈葵上〉を披露した。この時、隆盛はあわせて 2,500 両ほどかけて能装束も整えたのである。本装束はこの中のひとつであろう。

彦根城博物館には、昭和 11（1936）年の売り立てにより購入した前田家伝来の能装束 34 点が所蔵されているが、それ以外に畳紙のみ 18 点が伝わっており[113]、これはその中のひとつである。大きな格子模様が装束全体に施された厚板と推察できる。

文化 9（1812）年は 12 代斉広の時代にあたり、斉広は前年の 3 月より江戸にあった。ちなみに嫡男斉泰が誕生するのは、同年 7 月である。畳紙にある 9 年 2 月の演能記録といえば、先にも記したとおり、22 日の阿波蜂須賀治昭・斉昌父子による本郷邸での観能記録がある。〈九世戸〉〈実盛〉〈隅田川〉〈石橋〉〈海人〉の能五番と狂言〈千切木〉が演じられ、斉広は〈隅田川〉と〈石橋〉のシテを勤めた。『加賀藩史料』に収められたのは、『政隣記』の本記録のみであるが、『政隣記』には同月、江戸藩邸にて様々な能が催されたことがうかがえる。こうした他大名家を招いて行われた能は表舞台で催された。

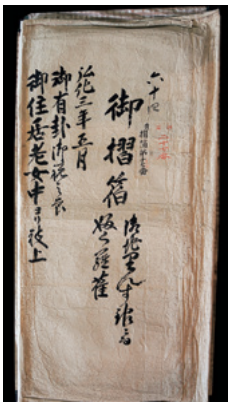
瑛姫を招請しての〈道成寺〉、幕府から拝領した鶴の披き祝能として〈当摩〉、備後守などを招請しての〈項羽〉、前田鶴心斎・小笠原平兵衛父子が見物した〈通小町〉である。これら『政隣記』等より能の記載を抜き出し、斉広の能について調査を続けた長山直治氏によると、この 2 月は「帰国を前にしていたためか、能の回数も多」いと指摘し、文化 5（1808）年に 9 月に人持組の士に対して無用な参会の禁止の厳守が改めて出されているものの、「斉広自らがそれに反して」おり、「藩士達にその徹底をよびかけても実効性に乏しかったと思われる」と述べている。

（2）綸子地ふくら雀模様摺箔（銕仙会所蔵）（6 図）

畳紙に「御摺箔 / 御地りんず銀にてふくら雀 / 弘化三年五月 / 御有卦御祝の節 / 御住居老女中ヨリ被上（7 図）」とあるとおり、江戸の溶姫の住まいである「御住居」にて仕える老女中より、弘化 3（1846）年 5 月、斉泰の有卦入りを祝って贈られた能装束である。まるで宝珠のように丸くデザイン化された、ふくら雀模様が全体に施されている。他にこの時期、同じく斉泰の有卦入りを祝って贈られた能装束が 3 点確認されている。溶姫（御住居様）から贈られた唐織（国立能楽堂所蔵「紅地有卦船模様唐織」[114]）、慶寧より長絹（野村美術館所蔵「紫地白富士金霞二葉模様長絹」）、妹の勇（池端御前）による半切（銕仙会所蔵「紺地風竹模様半切」）である。有卦入りという、めでたい節目に贈る装束であることから、いずれも「ふ」で始まる模様が散らされている。（有卦船模様とは、畳紙に記されるとおり「舟」「縁雪」「筆」「文」「藤袴」「福寿草」である）

その有卦を祝った能も同月 19 日に金沢にて行われているが、〈伏見〉〈藤戸〉〈富士〉〈二人静〉〈富士太鼓〉〈船橋〉〈舟弁慶〉と、こちらも「ふ」づくしで、遊び心がみてとれる。斉泰は〈伏見〉〈藤〉〈舟弁慶〉を演じた。この能は 5 月 3 日に斉泰が帰国した直後に行われており、能装束は、溶姫と溶姫に仕える老女中から斉泰の江戸滞在

６図　綸子地ふくら雀模様摺箔部分（銕仙会所蔵）



７図　綸子地ふくら雀模様摺箔　畳紙（銕仙会所蔵）

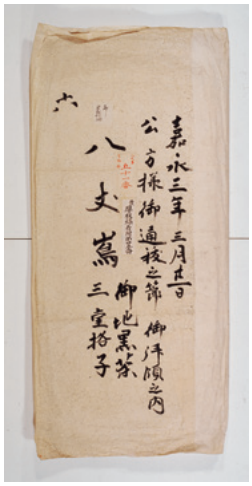
中に贈られたものと思われる。

(3) 黒地茶三重格子厚板（前田育徳会所蔵）（8図）

畳紙に「嘉永三年三月廿一日 / 公方様御通抜之節　御拝領之内 / 八丈嶋 / 御地黒茶三重格子（9図）」とある。嘉永3（1851）年3月21日、12代将軍家慶（1793～1853）が妹にあたる溶姫の住む本郷邸御通抜の際に拝領した「八丈嶋」を能装束に仕立てたもの。

本御通抜と無事に終えたことを祝った能については、前章にて触れていないため、述べておきたい。この日家慶は、（昌平坂）学問所へ御成ののち、本郷邸を訪れた。御通抜は、新しく御殿を造り迎える御成とは異なり、経済的な負担は少ない。とはいえ、前田家側は家慶・家定（右大将様　のち13代　1824～58）・その室秀子（御簾中様　1825～50）それぞれに宛てた献上物を、斉泰・慶寧・真龍院・東御前それぞれが用意した。同席した池田慶栄・富山藩利友・大聖寺藩利義も、塩鯛などを家慶へ献上している。一方、家慶より斉泰へ下賜されたのが、御肴一折と10反の「八丈織」で、本能装束はこの裂で仕立てられたものと考える。

8図　黒地茶三重格子厚板（前田育徳会所蔵）



9図　黒地茶三重格子厚板 畳紙（前田育徳会所蔵）

伊豆諸島の八丈島で作られる織物は、黄色を主とした縞模様がその特徴で八丈縞と呼ばれる。畳紙には「格子」と記されるが、本装束は黄・茶・黒・白による縦縞模様である。八丈縞は江戸後期には庶民の間でも広く着られるようになり、人々の間で流行した[115]。本装束は能装束の区分としては「厚板縞着附」として整理されている。なお、「八丈織」は慶寧・慶栄にも下賜されたが、同じものかは不明。

翌4月2日、無事に御通抜が終わったことを祝い、能が催された。家臣は朝六半時に服紗袷に裃姿で出席した。五時過に能は始まり、「今日は拝見人多く候」と『官事拙筆』（加越能文庫　4245）には記されている。石之助による〈鶴亀〉に始まり、慶寧の〈鷺〉、友于の〈熊野〉、斉泰による〈求塚〉、利義の〈芦刈〉、友于による〈鉢木〉、斉泰による〈護法附祝言〉であった。〈鉢木〉は、弘化5（1848）年の弘化勧進能でも演じられた友于の代名詞ともいえる能で、この演能に対する思い入れがうかがえよう。ただ、演目と出立を考えると、この「八丈織」の披露はされてはいない。

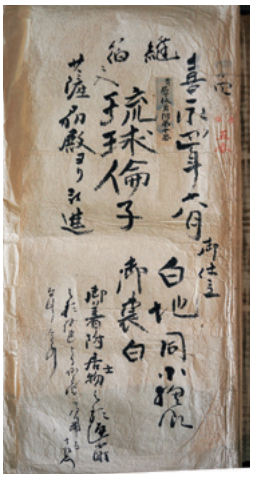
(4) 白地小模様琉球綸子厚板（10図）

畳紙に「嘉永四年六月御仕立 / 琉球綸子 / 白地同小模様　御裏白 / 薩州殿ヨリ被進」とある。

当時薩摩藩が統治する琉球で織られた綸子を、藩主である薩摩藩11代島津斉彬（1809～58）が斉泰に贈り、それを嘉永4（1851）年6月に能装束に仕立てたもの。柔らかな光沢を放ち、全体に細かく配された唐花模様が美しい。こうした珍しい裂地で仕立てられた能装束を、前田家旧蔵品では時々散見でき、他藩の藩主は斉泰に贈っていたことがわかる。

あわせて畳紙には「御着付居士物之類通小町之類」とも記されており、〈自然居士〉〈東岸居士〉といった居士物や〈通小町〉にふさわしいと記されている。

加賀藩政の記録である『加賀藩史料』には、同年同月およびその前後に薩摩藩との関わりは見えないが、斉泰は江戸滞在中につき、対面する機会があったのかもしれない。斉彬が藩主に就いたのは、同年2月のことである。



10図　白地小模様琉球綸子厚板 畳紙（銕仙会所蔵）

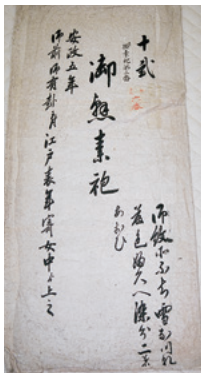
(5) 縁雪二葉葵模様掛素襖（11 図）

装束は高島屋史料館に所蔵されるが、畳紙（12 図）は彦根城博物館に伝わる。先に彦根城博物館に所蔵される文化 9（1812）年と記された畳紙のみ残るものを紹介したが、こちらもそのひとつで、畳紙が彦根城博物館に、納められた装束は高島屋史料館と、別々に伝わっている。高島屋史料館所蔵される能装束の由来については、長崎巌氏によって井伊家旧蔵のものがあり、その中には前田家旧蔵の能装束も含まれていることが指摘されている [116]。本装束はその一例といえよう。

彦根城博物館に伝わる畳紙には「御掛素襖 / 御紋所ふち雪なつな藤色ふくへ染分二葉あおひ / 安政五年御前御有卦ニ付江戸表年寄女中より上之 [12 図]」とある。こちらも弘化 3（1846）年同様、安政 5（1858）年に斉泰の有卦入りを祝って、江戸屋敷に勤める年寄女中より贈られたものである。模様はやはり「ふ」づくしで、縁起のよい模様の装束を仕立てたことがわかる。

同時期に贈られた装束は他に 2 点確認されている。勇

11 図　縁雪二葉葵模様掛素襖
（高島屋史料館所蔵）



12 図　縁雪二葉葵模様掛素襖 畳紙
（彦根城博物館所蔵）

（寿正院）より贈られた舞衣（前田育徳会所蔵「花色地福包二つ戻り笛振太鼓模様舞衣」）、慶寧から贈られた縫箔（国立能楽堂所蔵「紅地白鷺太藺模様縫箔」）で、こちらの模様もいずれも「ふ」づくしである。縫箔を包む畳紙には「風標公子太藺」と記されており、「ふ」が意識されている [117]。

なお、同年 12 月金沢で行われた有卦入りを祝う能では、〈右近〉〈元服曽我〉〈井筒〉〈鉢木〉〈飛雲〉〈松虫〉〈須磨源氏〉が演じられ、斉泰は〈井筒〉を舞った。頭文字をとると「うけいはひます」となる。

おわりに

明治時代に入り、前田家は本郷の地をいったん離れることになる。明治 5（1872）年根岸に別邸を構え斉泰と慶寧が移るも、慶寧の没後に当主となった 15 代利嗣（1858 ～ 1900）は再び本郷に暮らし始めた。前田家は斉泰が住まいする根岸と、本郷に分かれてしまったのである [118]。前田家にとって由緒ある本郷の地に、新たな邸宅の建設がようやく決定するのは、明治 35（1902）年のことで、明治天皇の行幸を意識してのことであった [119]。

こうした流動的な時代にあって、斉泰と利鬯は岩倉具視らと能楽社の設立に尽力し、能楽の復興に務めていた。そして、それぞれが関わった 2 つの能舞台は、今日も伝わっている。

ひとつめは、斉泰により根岸邸に建てられた能舞台で、これは今日の横浜能楽堂の能舞台である。前田家の根岸邸で用いられた後、染井にあった松平頼寿（高松藩 11 代頼聰の 8 男　1874 ～ 1944）邸に移築されたため、「染井能舞台」と称されている。鏡板に松だけでなく道真にちなんだ梅が描かれていることで知られる [120]。

もうひとつは、利鬯が現在の江東区深川の富岡八幡宮へ寄進した能舞台で、明治 45（1912）年に静岡県伊豆市修善寺の旅館あさばに移築されたものである [121]。「月桂殿」と称されるこの能舞台について筆者は未見であり、また利鬯が寄進した経緯、元々どこにあった能舞台なのか等、利鬯の動向も含めて今後の課題としたい [122]。

以上、加賀藩における歴代藩主の能について概観した。既に『金澤の能楽』にて述べられていることをまとめただけのような箇所もあり、反省するばかりである。ただ、同書が刊行されてまもなく半世紀を迎えるこの間、能楽研究は進み、変化した。世阿弥の能を主流とした能楽研究から、近世以降の能楽に対する関心の高まり [123]。加賀藩だけでなく、上方 [124]、尾張藩、南部藩、岡山藩 [125] など、地方における江戸時代の能楽史研究も充実してきた。加賀藩であれば、家臣たちが遺した史料からの能楽関連記事の読解と史料紹介 [126] や、囃子方から出た史料を解読し、まとめたものもある [127]。本論は、「加賀藩江戸屋敷における能」を主としたため、触れられなかった研究も多く、お詫び申し上げたい。

また、番組などの能楽史料が、広くホームページ等において公開されるようになったことは、大きい。かつては所蔵者の元へ直接足を運び、ひとつひとつ書き写していたというご苦労には、ただただ頭が下がるばかりであるが、広く公開されることによって、新たな発見も待たれよう。番組などのデータベース化は、演目だけでなく、役者の動向の解明にもつながり、今後の研究の進展が期待できる。

文字史料だけでなく、絵画史料や美術作品 [128] も近

年は能楽研究においては調査対象としている。本論の最後に述べた能装束の紹介もその一例であると筆者は考えているが、技法や意匠の紹介にとどまらない作品紹介こそが、「どのように用いられてきたのか」という考察になり、真の作品理解へつながると考えている。

本論の執筆にあたり、西村聡先生のご教示を賜りました。また、写真の掲載にあたりご許可くださいました各ご所蔵者の方々に感謝申し上げます。最後になりましたが、このたび執筆の機会をくださいました東京大学埋蔵文化財調査室の堀内秀樹先生・成瀬晃司先生、小松（武部）愛子さん、編集ご担当の小林照子さんに対し、深くお礼申し上げます。

【註】

(1)　堀内秀樹 1999「医学部教育研究棟地点新営に伴う埋蔵文化財発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報 2 1997 年度』東京大学埋蔵文化財調査室

(2)　本郷邸能舞台跡については、宮崎勝美 2008『日本史リブレット 87　大名屋敷と江戸遺跡』山川出版社、にも紹介されている。

(3)　金沢市立図書館 1981『加越能文庫解説目録　上下巻』、金沢市教育委員会 1999『金沢市文化財紀要 148 金沢市の指定文化財と指定保存建造物』

(4)　表章・天野文雄 1987「豊臣秀吉と能楽」『岩波講座 能・狂言 Ⅰ 能楽の歴史』岩波書店 p.80

(5)　天野文雄 1997『能に憑かれた権力者 秀吉能楽愛好記』講談社選書メチエ

(6)　法政大学能楽研究所 HP 上の能楽資料デジタルアーカイブにて、写真が公開されている。
https://nohken.ws.hosei.ac.jp/nohken_material/htmls/index/

(7)　大野湊神社所蔵『前田利長判物写』（石川県立歴史博物館 2000 展覧会図録『能楽－加賀宝生の世界－』出品番号 6）

(8)　西村聡 2009「加賀藩江戸藩邸御成記録と能番組－前田家三代利常治藩期を中心に－」『能と狂言 7』能楽学会、西村聡 2009「元和・寛永期加賀藩御成能番組集成－加越能文庫蔵御成記録を主として－」『金沢大学国語国文』第 34 巻 金沢大学国語国文学会

(9)　江戸幕府の右筆所において編集され、文化 8（1811）年に完成。天正 18（1590）年～寛永 7（1630）年まで記載。合計 88 巻と伝える（吉川弘文館 1998『国史大辞典』第 9 巻）。前田育徳会尊敬閣文庫には、文禄 2（1593）年～寛永 2（1625）年分の 71 冊が伝わることから、侯爵前田家嘱託であった日置謙はこれを参照したと思われる。

(10)　表章氏を代表として、1991 年より行われた「演能記録の全国的総合調査と演能年表」（文部省科学研究費補助金－総合研究（A）－）において、寛文年間以前の 7 種類の能番組（『小鼓大倉家古能組』『天正慶長元和御能組』『古之能組』『江戸初期能組控』『御城諸家御能組』『寛永雑記』『寛文御能組』）を、「日時」「名称」「主催」「客」「場所」「内容」等の項目別にデータベース化された。演能記録調査研究グループ編「江戸初期能番組七種－「番組要綱」と曲名・演者索引－」法政大学能楽研究所 1994、1995、2000『能楽研究』第 18、19、24 号に詳しい。

(11)　西村（8）「加賀藩」によると、〈翁〉〈竹生島〉〈小塩〉〈松風〉〈鵜〉〈三井寺〉〈錦木〉〈祝言〉

(12)　宮崎勝美 2000「江戸本郷の加賀屋敷」、追川吉生 2000「本郷邸の御殿空間－考古学からのアプローチ－」東京大学総合研究博物館 2000『加賀殿再訪 東京大学本郷キャンパスの遺跡』など

(13)　東京大学遺跡調査室編 1990『東京大学史跡調査室発掘調査報告書 3 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属拠点病院地点－医学部附属病院中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点－』東京大学医学部附属病院

(14)　辰口邸・本郷邸といった加賀藩の江戸屋敷の概要については、前田育徳会　1970『加賀藩史料 編外備考』に詳しい。

(15)　長山直治 2009「近世金沢における町方の能興行と出演者」『能と狂言』7 ぺりかん社、長山直治 2013「空から謡が降って来る－金沢町人と能－」『加賀藩を考える－藩主・海運・金沢町－』桂書房

(16)　石川県立美術館・茶道史料館 1996 展覧会図録『仙叟宗室－人と茶の湯－』

(17)　加賀蒔絵については、本谷文雄 1995「江戸時代の加賀蒔絵」『加賀ゆかりの蒔絵展 加賀蒔絵の源流をさぐる』（金沢美術青年会）が基本資料である。

(18)　石川県図書館協会 1972『三壺聞書 復刻』なお、『三壺聞書』については、木越隆三 2014「『三壺聞書』伝本を検証する」（石川県金沢城調査研究所）に詳しい。

(19)　梶山伸 1968『前田家伝来能衣裳』講談社、京都国立博物館 1979『京都国立博物館蔵　前田家伝来　名物裂』紫紅社、などに掲載されるほか、前田育徳会・東京国立博物館・京都国立博物館が所蔵する。

(20)　前田育徳会に所蔵される 2 領の能装束だか、これらについては別稿に改めたい。

(21)　『加賀藩史料』寛永 17（1640）年 5 月 2 日

(22)　表・天野（4）p.110「徳川綱吉の能狂ぶり」

(23)　宝生流の系譜については、柳沢英樹 1944『宝生九郎伝』（わんや書店）のほか、平凡社 1987『能・狂言事典』を参照した。

(24)　内蔵助と称し利常に仕えた葛巻久俊（万治元年没　知行 800 石）の第 3 子。延宝元（1673）年に綱紀の近侍、天和 2（1682）年に奥小将となる。850 石。元禄 6（1693）年配流となり、宝永 2（1705）年没。奥小将勤務の際に記したのが同日記で、延宝 5 年正月から元禄 5 年 12 月にかけての綱紀の様子がうかがえる。（日置 謙 1983『加能郷土辞彙』北国新聞社、および（25）

(25)　長山直治 1996「『葛巻昌興日記』にみる前田綱紀の能稽

古の途端」『石川郷土史学会々誌』第 29 号 石川郷土史学会発行

(26)　長山直治 2013 『加賀藩を考える 藩主・海運・金沢町』桂書房 p.197

(27)　金沢美術工芸大学美術工芸研究所 1993『加賀藩御細工所の研究（一）（二）』

(28)　『金澤の能楽』p.164「加賀藩の細工所と細工人の兼芸」、こうした兼芸については、これまで加賀藩の特徴とされてきたが、陸奥国南部藩でも「御歩行と能役者を兼任する職制」があったと近年指摘があったことを付記しておく（青柳有利子 2012『博士論文　武家と能楽をめぐる歴史的研究』）

(29)　(27)（一）に翻刻掲載

(30)　法政大学能楽研究所 1999『能楽研究』第 23 号

(31)　西野春雄・羽田昶編 1999『新訂増補　能・狂言辞典』平凡社 p.255

(32)　http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/G0004017REG

(33)　『加陽細工始末書』には「其子市之丞、寛文十年に紙細工ニ被召出、御能之時分大皷役を勤、同弟勘左衛門延宝六年ニ両役を兼召出、同弟惣太夫貞享元年小皷・紙細工を兼勤来るの例を以其後段々被召出之（罫線筆者）」とあり、「大皷役」の横に「葛野九朗兵衛弟子」、「勘左衛門」の横に「同じ九郎兵衛弟子」、「小皷」の横に「幸清五郎」の弟子と朱書されている。

(34)　江口文恵ほか 2009「『葛巻昌興日記』所引能楽記事稿」『演劇映像学 2008 第 3 集』早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」、青柳有利子ほか 2014「『葛巻昌興日記』所引能楽記事稿（天和 2 年・3 年分）」『演劇研究 第 37 号』早稲田大学、青柳有利子ほか 2015「『葛巻昌興日記』所引能楽記事稿（天和 4 年・貞享元年分）」『演劇研究 第 38 号』早稲田大学、入口敦志ほか 2016「『葛巻昌興日記』所引能楽記事稿（貞享二年分）」『演劇研究 第 39 号』早稲田大学、入口敦志ほか 2017「『葛巻昌興日記』所引能楽記事稿（貞享三年正月・二月・三月）」『演劇研究 第 40 号』早稲田大学、入口敦志ほか 2018「『葛巻昌興日記』所引能楽記事稿（貞享三年閏三月・四月分）」『演劇研究 第 41 号』早稲田大学

(35)　長山（25）に同じ

(36)　(34) のうち、貞享閏 3 月・4 月分より

(37)　『金澤の能楽』p.58

(38)　『金澤の能楽』では欠落。

(39)　『葛巻昌興日記』に「紀伊少将様」とあるは、誤り。

(40)　17 世宝生九郎重英（1900 ～ 74）のこと。宝生嘉内の 2 男で大正 6（1917）年宗家を継承。

(41)　『徳川実紀』によると、〈江口〉〈安宅〉〈乱〉であったという。

(42)　〈老松〉〈自然居士〉〈小鍛冶〉

(43)　『加賀藩史料』元禄 3（1690）年 4 月 26 日

(44)　『加賀藩史料』元禄 3（1690）年 5 月 10 日

(45)　『加賀藩史料』元禄 3（1690）年 5 月 13 日　なお元禄期の能については、棚町知彌ほか 2006「前田綱紀と加賀藩の能－前田綱紀書簡抄－」『演劇卦研究センター紀要 Ⅶ』早稲田大学 21 世紀 COE プログラム〈演劇の総合研究と演劇学の確立〉、江口文恵ほか 2008「前田綱紀時代の加賀藩資料にみる能楽追考－『元禄雑記』補遺－」『演劇映像学 2007 第 3 集』早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」にて史料紹介されている。

(46)　『加賀藩史料』元禄 15（1702）年 4 月 26 日

(47)　『御成一巻』

(48)　(4) p.122「徳川吉宗時代の制度改革」

(49)　演能記録調査研究グループ（代表 表章）編「『触流し御能組』演者名総覧と索引（一）～（六）」（『能楽研究』第 31 ～ 34、36、38 号　2007 ～ 2010、2012、2014）

(50)　『金澤の能楽』p.99-100

(51)　『政隣記』享保 8（1723）年 7 月 26 日（高木喜美子校訂編集 2013『政隣記　享保元年～廿年』桂書房）

(52)　『政隣記』元文 3（1738）年 9 月 7 日（高木喜美子校訂編集 2013『政隣記 元文元～延享四年』桂書房）

(53)　『政隣記』享保 12（1727）年 2 月 16 日

(54)　『御年表』享保 16（1731）年 8 月 5 日

(55)　竹松幸香 2018「加賀藩士の能の受容について」『古典演劇研究の対象と視点』金沢大学人間社会研究学域附属国際文化資源学研究センター東アジア古典演劇研究会、および東アジア古典演劇研究会第 3 回「日本古典演劇と近世・近代」（2016 年 3 月 23 日 於金沢大学サテライトプラザ）における竹松氏の発表による。金沢市 2001『前田土佐守家資料館目録』学芸 1214

(56)　竹松（55）および『前田土佐守家資料館目録』学芸 1258

(57)　表・天野（4）p.130「『明和改正謡本』前後」

(58)　表章 2010「観世元章の改革運動の背景」『能楽研究講義録』笠間書院

(59)　『政隣記』享保 19（1734）年 4 月 25 日・28 日

(60)　『政隣記』元文元（1736）年 11 月朔日

(61)　加賀騒動については、若林喜三郎 1979『加賀騒動』（中公新書）などに詳しい。

(62)　『政隣記』宝暦 5（1755）年 12 月 16 日（高木喜美子校訂編集 2013『政隣記 延享四年～宝暦十年』桂書房）

(63)　表章 2001「『大鼓金春流』考（中）－金春三郎右衛門家の歴代、他－」『能楽研究』第 25 号 法政大学能楽研究所 本論中に史料 M として挙げられている。

(64)　千葉常樹 1956『南部藩能楽史』盛岡宝生会、青柳有利子 2014『早稲田大学モノグラフ 104 南部藩の能楽』早稲田大学出版部

(65)　『加賀藩史料』安永元（1772）年 8 月 16 日（高木喜美子校訂編集 2015『政隣記　宝暦十一年～安永七年』桂書房）

(66)　『加賀藩史料』安永 2（1773）年 5 月 18 日

(67)　『加賀藩史料』安永 2（1773）年 4 月 4 日、4 月 9 日

(68) 前田育徳会尊經閣文庫編 2004、2008 ～ 14『史料纂集 大梁公日記』第 1（群書類従完成会）、第 2 ～ 5（八木書房）
(69) 西村聡 2016「『大梁公日記』から見た加賀藩能楽事情－明和末・安永初期の重教・治脩を比較して－」『加賀藩研究を切り拓く－長山直治氏追悼論集』桂書房
(70) 『大梁公日記』安永元（1772）年 12 月 26 日
(71) 『加賀藩史料』安永 2（1773）年 4 月 9 日
(72) 宮本圭造 2018「一橋徳川家と能」『国立能楽堂平成 27 年度特別展示　一橋徳川家の能』独立行政法人日本芸術文化振興会
(73) 表・天野（4）p.140「寛政以降の能楽」
(74) 西野春雄 1999「宝生流謡本縁山版考」『能楽研究』第 23 号 法政大学能楽研究所
(75) 前田育徳会所蔵「乱 / 一挺 / 右御伝授奉申上被 / 享和二年壬戌年三月 / 観世左近（花押）」
(76) 長山直治 1994「能と藩主－加賀藩 12 代藩主前田斉広の場合－」『石川県郷土史学会々誌』第 27 号
(77) 『加賀藩史料』文化 8（1811）年正月 24 日
(78) 斉泰については、石川県立歴史博物館 1995 展覧会図録『加賀藩主　前田斉泰』が詳しい。
(79) 『勝千代様初テ被遊候御能組』（加越能文庫　9940）
(80) 長山（76）に同じ
(81) この経緯については、小松愛子 2017「溶姫の引移り婚礼」（堀内秀樹・西秋良宏編『赤門－溶姫御殿から東京大学へ』（東京大学総合研究博物館）に詳しい。
(82) 「石橋 / 融 / 遊曲 / 酌之舞 / 以上 / 宝生大夫 / 文政七甲申歳 / 三月 / 友于（花押）」（前田育徳会所蔵）
(83) 千葉（64）、p.58 に饗宴能として記されているが、日付は 25 日。
(84) 『諸事要用雑記』天保 6（1835）年 12 月 22 日
(85) 『諸雑要用雑記』天保 7（1836）年 9 月 12 日
(86) 『加賀藩史料』天保 9（1838）年 9 月 1 日
(87) 『加賀藩史料』天保 11（1840）年 5 月 27 日
(88) 茶地寿字桐竹鳳凰模様錦翁狩衣
(89) 村上尚子 2015「加賀藩主前田斉泰の弘化 2 年御本復御祝能と能装束について」『国立能楽堂調査研究』vol.9 独立行政法人 日本芸術文化振興会
(90) 石立（村上）尚子 2017「狩野芳崖筆『加州家蔵能装束模様（東京藝術大学大学美術館所蔵）の調査結果について－前田家旧蔵能装束に関する考察－』『人間社会環境研究』第 33 号（金沢大学人間社会環境研究科）の【表 2】「仕立てた年代が判明する能装束一覧」に掲載
(91) 石川県立図書館には、その際発行された一枚刷りが所蔵される。
(92) 『諸事要用雑記』弘化 2（1845）年 5 月 21 日
(93) 『諸事要用雑記』弘化 4（1847）年 9 月 4 日
(94) 『官事拙筆』嘉永 2（1849）年 9 月 4 日
(95) 村上（89）に同じ
(96) 前田育徳会所蔵
(97) 五雲生 1911「来殿に就きて（一）（二）」『能楽時報』第 8 号 第 9 号、佐藤芳彦 1940「来殿に就いて」『宝生』3 月号所収
(98) 加賀藩の天神信仰については、橋本芳雄 1969「石川富山県下の天神信仰」『神道史研究』第 17 巻 第 5、6 号、西山郷史 1984「天神・人神・藩祖の信仰－都市型信仰の展開試論－」『都市の民俗・金沢』国書刊行会、西山郷史 2001「金沢の天神信仰」『北國文華』第 8 号 北國新聞社、小倉学 1985「加賀藩主前田家の天神信仰の一考察」『石川郷土史学会々誌』第 18 号 石川郷土史学会、濱岡伸也 2010「江戸時代の天神信仰・太子信仰と城下町金沢の文化」武田佐知子編『太子信仰と天神信仰』思文閣出版、に詳しい。
(99) 村上尚子 2018「道真像の変遷－菅丞相・雷電・来殿における面と装束より考える－」『古典演劇研究の対象と視点』金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター
(100) 堀内秀樹・西秋良宏編 2017『赤門－溶姫御殿から東京大学へ』東京大学総合研究博物館 p.92 資料 22「温敬公親筆菅公神号及景徳夫人画梅図」（前田育徳会所蔵）なお、溶姫の絵画学習については、同書所収の木下はるか「溶姫の絵画稽古」に詳しい。
(101) 『天満宮九百五十歳御神忌ニ付御能組』（加越能文庫 9951）
(102) 『毎日帳書抜』嘉永 5（1852）年 2 月 23 日（加越能文庫 3982）
(103) 『官事拙筆』
(104) 『天満宮九百五十歳御神忌ニ付御能組』（加越能文庫 9951）
(105) 『御用方手留』（加越能文庫　3996）
(106) 1906「雷電に就て前田子爵の書簡」『能楽』第 4 号、第 5 号
(107) 『加賀藩史料』に松平容敬とあるは、誤り。
(108) 『御用方手留』安政 4（1857）年 4 月 24 日
(109) 村上尚子 2009「畳紙墨書より探る加賀藩主の能、そして富山藩の場合について－野村美術館・彦根城博物館所蔵能装束より－」『野村美術館研究紀要』第 18 号　野村文華財団
(110) 三井文庫 2002『三井家文化人名録』
(111) 三井記念美術館 2005 展覧会図録『三井家伝来の能装束展』
(112) 村上（109）に同じ
(113) 村上（109）に同じ
(114) 門脇幸恵 2011 「国立能楽堂保管加賀藩前田家伝来能装束の畳紙の紹介」『国立能楽堂調査研究』vol.5 独立行政法人日本芸術文化振興会
(115) 小笠原小枝 1998『染と織の鑑賞基礎知識』至文堂　p.224「黄八丈」の項
(116) 長崎巌 2007「髙島屋史料館所蔵能装束について」『髙島屋コレクション－華麗なる能装束－』独立行政法人日本芸

術文化振興会

(117) 門脇（114）に同じ。

(118) 前田利為侯伝記編纂委員会 1986『前田利為』

(119) 木下直之 2000 「前田侯爵家の西洋館－天皇を迎える邸－」『加賀殿再訪 東京大学本郷キャンパスの遺跡』東京大学総合研究博物館

(120) 岡山理香 1997 「近代能楽堂の成立における山崎静太郎の果たした役割について」『武蔵野美術大学研究紀要』27 武蔵野美術大学、西和夫 2001「旧染井能舞台の復元」『建築史研究の新視点 3 －復原研究と復原設計－』、奥冨利幸 2009『近代国家と能楽堂』大学教育出版、など

(121) 本谷文雄氏のご教示による。

(122) 深川東京モダン館 2013 『深川東京モダン館だより』第 18 号に、「八幡宮にかつてあった能舞台」というコラムがある。

(123) 能楽史研究の基本書を挙げるには紙面が足りないが、戦後の能楽研究史を知るには、表章 2010『能楽研究講義録』笠間書院が、能楽研究の第一人者であった氏の歩みとともに述べられておりわかりやすい。また、能楽学会第 7 回大会は「江戸時代と能楽」（於早稲田大学　2008）がテーマであった。

(124) 宮本圭造 2005『上方能楽史の研究』和泉書院

(125) 西脇藍 2005『池田綱政と「能」元禄期の大名の生活と能』吉備人出版

(126) 高木喜美子 2010「『大野木克寛日記』に見る能について－江戸中期加賀藩上級武士の能－」『市民大学院論集』第 5 号 金沢大学市民大学院

(127) 長山直治・西村聡 2005 『大鼓役者の家と芸－金沢・飯島家十代の歴史－』能登印刷出版部

(128) 能楽学会 2013 『能と狂言』11 ぺりかん社の特集は、「能・狂言の絵画資料」であったほか、能楽学会第 17 回大会テーマは「美術工芸と能楽」であった。

共同研究　東京大学本郷構内遺跡出土「白色系手づくねかわらけ」の研究

* 西本右子、** 丸山毅真、*** 長佐古真也、**** 堀内秀樹、小林照子

1. 問題の所在

東京大学本郷構内は江戸時代初期から加賀藩前田家の江戸屋敷として利用されてきた。本郷邸の歴史は３代利常が元和２～３（1616-17）年に大久保忠隣邸跡地を拝領したことに始まる。実際に開発が始まったのは寛永初期で、徳川将軍秀忠、家光の御成に伴う大規模な殿舎の建築と整備のためと考えられている（宮崎 1990）。

白色系手づくねかわらけ [(1)] が最初に確認されたのは、病院地点池遺構である。池遺構からは 70kg を越える白色系手づくねかわらけと共に多量の木製品が出土した。その中に「寛永六年三・・」紀年の木簡があったことから、これらの遺物は寛永６(1629) 年４月の徳川将軍秀忠、家光の御成に関する儀礼的な宴会に伴う資料と評価された（東京大学遺跡調査室 1990）。医学部教育研究棟地点からは、最下層のＥ～Ｇ面から、白色系の手づくねかわらけが金箔瓦、金泥かわらけとともに出土しており、江戸初期の武家儀礼にとって、重要な役割をもつ可能性が考えられていた（東京大学埋蔵文化財調査室 2019）。

江戸遺跡では白色系手づくねかわらけの出土例は、加賀藩以外でも少量確認されているが、それらの資料と本郷邸出土白色系てづくねかわらけの類似性は低く、むしろ加賀藩の国元である金沢の手づくねかわらけとの類似性が高い点が指摘されてきた（滝川 1992）。

こうした生産地に関わる課題を解決する目的で、神奈川大学理学部西本右子氏、東京都埋蔵文化財センター長佐古真也氏と協議を行った結果、2016 年から共同研究として、白色系手づくねかわらけの蛍光Ｘ線による元素分析がスタートすることとなった。さらに研究開始後、石川県埋蔵文化財センターの協力を得ることができ、金沢城・城下町出土の資料も含めて行うこととなった。

2. 本研究の概要と経過

・分析方法と対象資料

分析法は蛍光Ｘ線による非破壊分析である。分析対象は東京大学本郷構内遺跡出土かわらけ、金沢城出土かわらけ、金沢城下町出土かわらけ、また対比資料として溜池遺跡、愛宕下遺跡出土かわらけおよび燈明皿である。

検討は下記の日程で行われ、分析方法と対象資料について議論を行った。

第１回　2016 年６月 15 日
　　分析対象試料、分析部位、試料の量等の検討
第２回　2016 年 10 月５日
　　東京都港区溜池遺跡、医学部附属病院地点池遺構測定部位の再検討
第３回　2016 年 12 月 24 日
　　溜池遺跡、医学部附属病院地点池遺構分析
第４回　2018 年１月５日
　　医学部教育研究棟地点 測定部位再検討
第５回　2018 年６月 26 日
　　医学部教育研究棟地点分析
第６回　2018 年８月 21 日
　　東京都港区愛宕下遺跡、医学部教育研究棟地点分析

3. 研究の成果

詳細は各研究を参照されたいが、「研究 10 東京大学本郷構内出土白色かわらけの消長」では、東京大学本郷構内出土の白色系手づくねかわらけの集成とその消長にふれ、「研究 11 東京大学本郷構内遺跡出土かわらけ試料の蛍光Ｘ線分析による元素分析」では今回の分析の詳細と分析結果を、「研究 12 東京大学本郷構内遺跡出土手捏ねかわらけの元素分析による生産地推定」では分析結果による生産地推定と今後の可能性の提示を行っている。

今回の分析によって、本郷構内出土の白色系手づくねかわらけが、可視的に類似しているのみでなく、胎土の面からも金沢出土資料の組成と同様であることが確認できた。また考古資料の非破壊分析の有効性について、一定の方向性を得られたことも大きな成果といえよう。

* 神奈川大学　** 神奈川大学大学院　*** 東京都埋蔵文化財センター　**** 東京大学埋蔵文化財調査室

【註】

「白色系手づくねかわらけ」の呼称は、執筆者ごとに異なるが、いずれも胎土が白色に近く、非ロクロ成形の土師器皿を指している。

【引用・参考文献】

滝川重徳 1992「土師器皿について」『特別名勝兼六園（江戸町後推定地）発掘調査報告』石川県立埋蔵文化財調査室

東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室

東京大学埋蔵文化財調査室 2019『東京大学本郷構内の遺跡　医学部教育研究棟地点』東京大学埋蔵文化財調査室

宮崎勝美 1990「加賀藩本郷邸とその周辺」『東京大学本郷港内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点　第 3 分冊』

本郷構内出土白色系かわらけの消長

小林　照子

はじめに

1984 年、医学部附属病院地点（以後「病院地点」）の調査で、池遺構から大量の白色胎土で非ロクロ成形のかわらけ（以下「白色系かわらけ」）が出土した。これらの白色系かわらけは、共伴した木簡から秀忠、家光の御成の饗宴に使用されたものであると評価された。このかわらけ群は手づくねで成形され、底部に蓆痕がみられる点、色調が明るい淡黄色であることなど、在地系かわらけにはみられない特徴をもっていたため、その出自はさまざまな議論を呼んだ。

その後、他地点でも白色系かわらけの出土例が確認されてきたが、本地点でも、最下層 E ～ G 面に帰属する遺構から、白色系かわらけがまとまって出土した。

今回池遺構と本地点 SK4553、SK4513 出土かわらけの胎土分析が行われ、その結果白色系かわらけは、加賀藩国元である金沢で出土したかわらけと同様の組成を持つという結果が示され、白色系かわらけは国元と強い相関関係を持つことが確認された（本編研究 12 参照）。

本稿の目的は、現時点までに確認されている本郷構内出土の白色系かわらけを集成し、器形、法量、調整技法から分類を行うこと、また共伴するかわらけとの対応関係から、白色系かわらけの出現と消滅について若干の考察を行うことである。

1．研究小史

はじめに病院 _ 池遺構出土の白色系かわらけと金沢出土のかわらけの類似に言及したのは滝川重徳である。滝川は特別名勝兼六園（江戸町跡推定値）遺跡（以下兼六園）で出土したかわらけを器形的特徴により 3 種に分類し、その中の江戸町 I 類とした一群が病院地区池遺構の白色系かわらけと酷似していると指摘した。「「池」出土の一括廃棄資料が儀礼用として用意されたものであるなら、前田家の国元金沢で流行している土師器皿と関連づけることも、あながち無理な想定といえないのではなかろうか」としている（滝川 1992）。

また、北陸中世考古学研究会・北陸近世遺跡研究会を中心として開かれた遺物検討会「北陸における中世後半～近世前半の土師質皿について」では、京都、北陸の 15c ～ 17c のかわらけ（文中では土師器皿だが、ここでは煩雑さを避けるため「かわらけ」で統一する）の検討とともに、池遺構出土のかわらけとの関係についての討議が行われた。そこでも滝川が兼六園出土かわらけと池遺構出土かわらけの外形的特徴が類似していることに加え、病院地点は加賀藩の下屋敷にあたることから、加賀から江戸藩邸に持ち込まれた可能性を示唆したのに対し、小林謙一は類似点も多いが、細部において差異がみられ、直接搬入されたものと考える必要はないとしている。また胎土が類似している点に関して小林は、たまたまの類似の可能性もあるため胎土分析が望まれるとしている（小林 1998）。

翌年、小林は金沢城跡石川門前土橋盛土 3 出土土器について検討を行い、以前は直接的な移入には否定的だったが、石川橋と池遺構双方に「ダルマ形」と呼ばれる焼塩壺が出土している点、同年代に比定される丸の内三丁目 52 号土坑と金沢の資料は類似性が低い点から、「土師器皿についても直接的な関係をより強く考えるに至った。こうした点については、土器の胎土分析や、さらなる技法、形態的特徴の検討を重ねるべきである」と再度分析の必要性を提示している（小林 1999）。

その後しばらく白色系かわらけの研究は途絶えていたが、2009 年梶原は江戸遺跡の手づくねかわらけ出土地点と拝領者および普請者の関係に注目し、手づくねかわらけは「豊臣恩顧の外様大名の領地にみられ、譜代大名と旗本にはみられない」ことから権力者とかわらけの関係に着目する。（梶原 2009）。翌年梶原は問題をより鮮明にするために、色調を第一義に据えたかわらけ分類を提唱し、研究を進めていき（梶原 2010）、2012 年に行われた江戸遺跡研究会では「江戸在地系かわらけの成立」と題し、江戸在地かわらけの系譜に加え、権力者とかわらけの関係について議論をおこなった（江戸遺跡研究会 2012）。

一方、加賀藩の国元である金沢では、16 世紀後半から 17 世紀前半にかけての土師器皿の分類と変遷を進めており、白色系かわらけの変遷については「15 世紀後半以来、加賀・能登に浸透した京都系土師器皿（B 類）は、金沢地域において、文禄・慶長年間は漸進的な変化傾向にあって土師器皿の主体を占めていたが、慶長から元和にかけて著しく退潮する。この間は、少数となった京都系を補完するように、多様な形状の土師器皿（C 1

①類

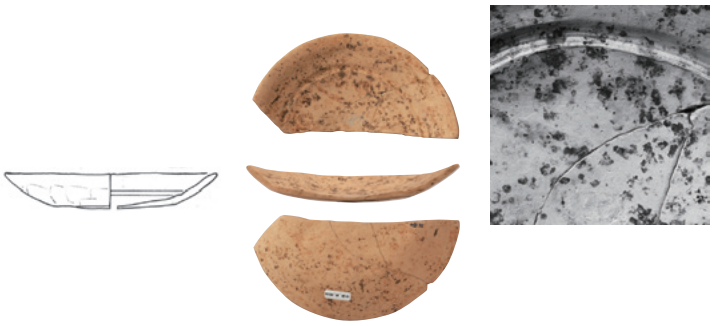
器形：底径口径差が小さく器高は高め
口唇部：摘まみ上げ内弯する
内面調整痕：一定方向又はＺ字状のナデ
内面圏線　：不明瞭もしくは無し
外面体部　：指頭圧痕が顕著
外面底部　：蓆状の痕跡をもつものが多い
胎土：淡黄色、白色小礫を多含

②類

器形：底部大、器高低、歪みが激しい
口唇部：摘まみあげ内弯する
内面調整痕：不定方向のナデ
内面圏線　：棒状工具で圏線を施す
外面体部　：指頭圧痕が顕著
外面底部　：蓆痕は不明瞭なものが多い
胎土：①類より明るい淡黄色、白色小礫多含

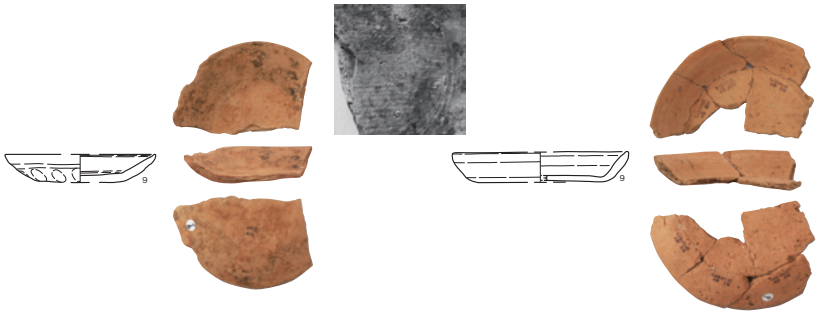
③類

器形：体部が長く、開き気味に立ち上がる
口唇部：内部に端面をもち口縁下部は若干肥大し全体に厚みがある
内面調整痕：不定方向のナデ
内面圏線　：棒状工具で圏線を施す
外面底部　：蓆痕不明瞭、体部指頭圧痕薄
胎土：淡黄色、①、②類より精良



④類

器形：①類に類似するもの、断面が箱状のものなどバリエーションがあり、細分が可能
内面調整痕：一定方向の条痕、または不定方向のナデ
内面圏線　：明瞭なものが多い
外面底部　：簾痕明瞭、不明瞭どちらもあり
胎土：明橙褐色、白色粒子、小礫含



１図　白色系かわらけの分類

類）が形成されるが、短期間のうちに多様性は終息を迎え、「金沢型」と言うべき特定器形（C2 類）へ集約されるという、極めて急激な形で推移する」としている（滝川 2018）。

2. 白色系かわらけの分類

本郷構内出土白色系かわらけは、色調、器形、調整痕などから、大きく 4 つのタイプに分類することができる。白色系かわらけは、東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類コード（以下東大分類）では、すべて手づくね成形 DZ-2-g（かわらけの分類表記、文中の略称についての詳細は「4. 共伴するかわらけ」の項参照）に分類されるため、下位分類として便宜的に①～④で表す（1 図、2 図）。

①類：器形は底径口径差が小さく器高は高めである。口径／器高は 3.5 ～ 6.0 を示す。口唇部は摘まみ上げ内湾する。内面底部に一定方向もしくは Z 字状のナデを施す。内面底体間の圏線は不明瞭もしくは無し。外面体部は指頭圧痕が認められ、外面底部に蓆状の痕跡をもつものが多い。胎土は淡黄色で白色小礫を多量に含む。口径 12 cm前後と 14 cm前後のものがあり、12 cm前後を主体とする。滝川分類：C2 Ⅰ 1a,b に比定される。

①ａ　口径 12 cm前後、平均約 95g

①ｂ　口径 14 cm前後、平均約 170 ｇ。色調は黄白色で①ａより若干明るい。

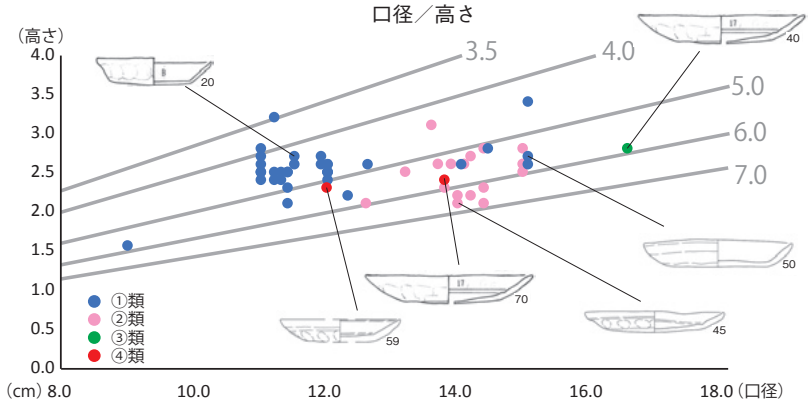
②類：器形は底部が大きく器高が低く歪みが激しい。口径／器高は 5.0 ～ 6.8 を示す。口唇部はつまみあげ内湾する。内面底部は不定方向のナデ、内面底体間に棒状工具で圏線を施す。外面体部は指頭圧痕が顕著で、外面底部の蓆痕は不明瞭なものが多い。胎土は①類より明るい桃色がかった淡黄色で、白色小礫を多量に含む。口径 14 cm前後、平均約 145 ｇ。滝川分類：C2 Ⅰ 1a,b に比定される。

③類：器形は体部が長く、開き気味に立ち上がる。口径／器高は 5.9 を示す。口唇内部に端面をもち、口縁下部は若干肥大し全体に厚みがある。内面調整は不定方向のナデ、内面底体間に棒状工具で圏線を施す。外面底部の蓆痕は不明瞭、外面体部の指頭圧痕は薄い。胎土は淡黄色で①類、②類より精良である。口径 14 cm前後、約 230g。滝川分類：B 厚手に相当か。

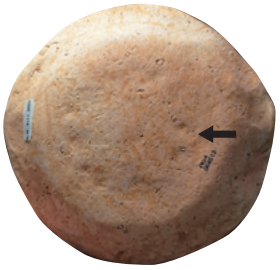
④類：器形は①類に類似するもの、断面が箱状のものなどバリエーションがあり、細分が可能である。内面底部は一定、または不定方向のナデを施し、内面底体間に圏線が認められる。色調は明橙褐色で、胎土は白色粒子、小礫を含む。

①類は全期間にわたり確認されている。正円に近く比較的整った器形で、口径と内径が比例するものが多く、型を利用して成形している可能性も考えられる（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）。②類は医研 _SK4513 からまとまって出土している。厚みが一定ではなく、ゆがみもひどく粗雑な作りである。内面を不定方向にナデているため中央が薄くなり、穴があいた部分に粘土をつぎ足し塞いでいるものもあり、熟練した工人の手によるものとは考えにくい。③類は池遺構でのみ確認されており、その後の出土はみられない。④類は現段階では 2 点のみの出土で、2 点とも器形、胎土が異なるため、生産地が異なる可能性も考えられる。

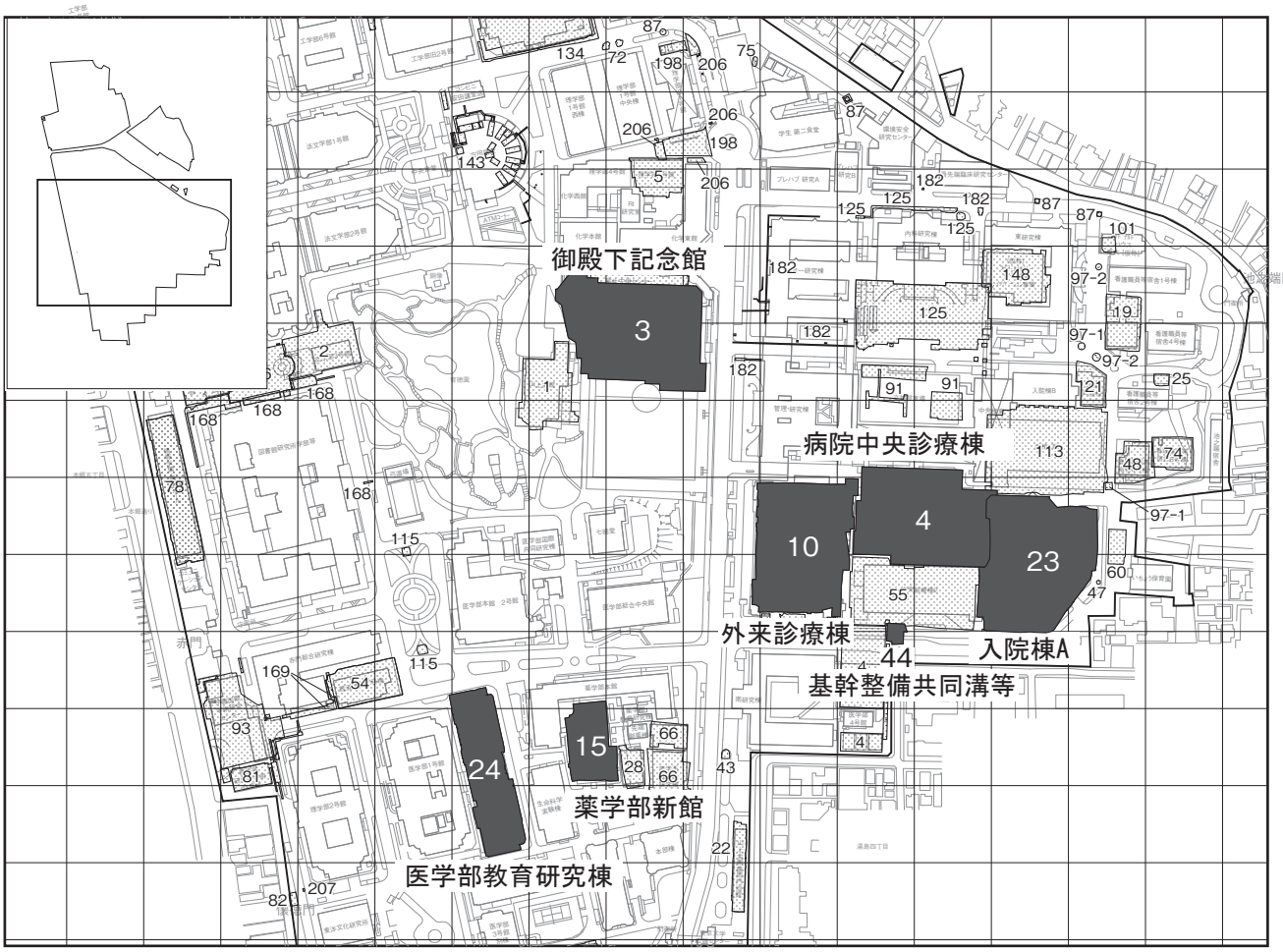
①、②類の外面底部には中心に直径 5 cm程度の円形のくぼみ [(1)] が確認されるものが多く、粘土円盤に粘土紐を貼り付けて成形した痕跡の可能性も考えられる（3 図）。



２図　類型別口径／高さ比率



３図　底部裏の円形のくぼみ



4図　調査地点位置図

3. 出土遺構と遺物の概要

東大構内遺跡では、現段階で約70点の白色系かわらけが報告されている。

白色系かわらけの出土地点は医学部附属病院中央診療棟地点、医学部附属病院基幹整備共同溝地点、外来診療棟地点など本郷邸の東側および、御殿下記念館地点、薬学部新館地点、医学部教育研究棟地点など本郷邸中央部に分布している（4図）。以下地点ごとに出土遺構と遺物の概要を示す（5図～7図、1表）。

御殿下記念館地点（略称：HGS　調査番号3、以下「御殿下」（5図1～7）

532号：長辺が20m以上の長方形を呈する大型土坑である。陶磁器、瓦、魚骨など大量の遺物が出土しており、なかでも「ミなと藤左衛門」の刻印をもつ焼塩壺DZ-51-aがまとまって確認され、肥前磁器の様相と合わせⅡ期（1630-50年代）に比定される。白色系かわらけは5点出土しており、2、4、5は内面底部に黒色処理が施されている。

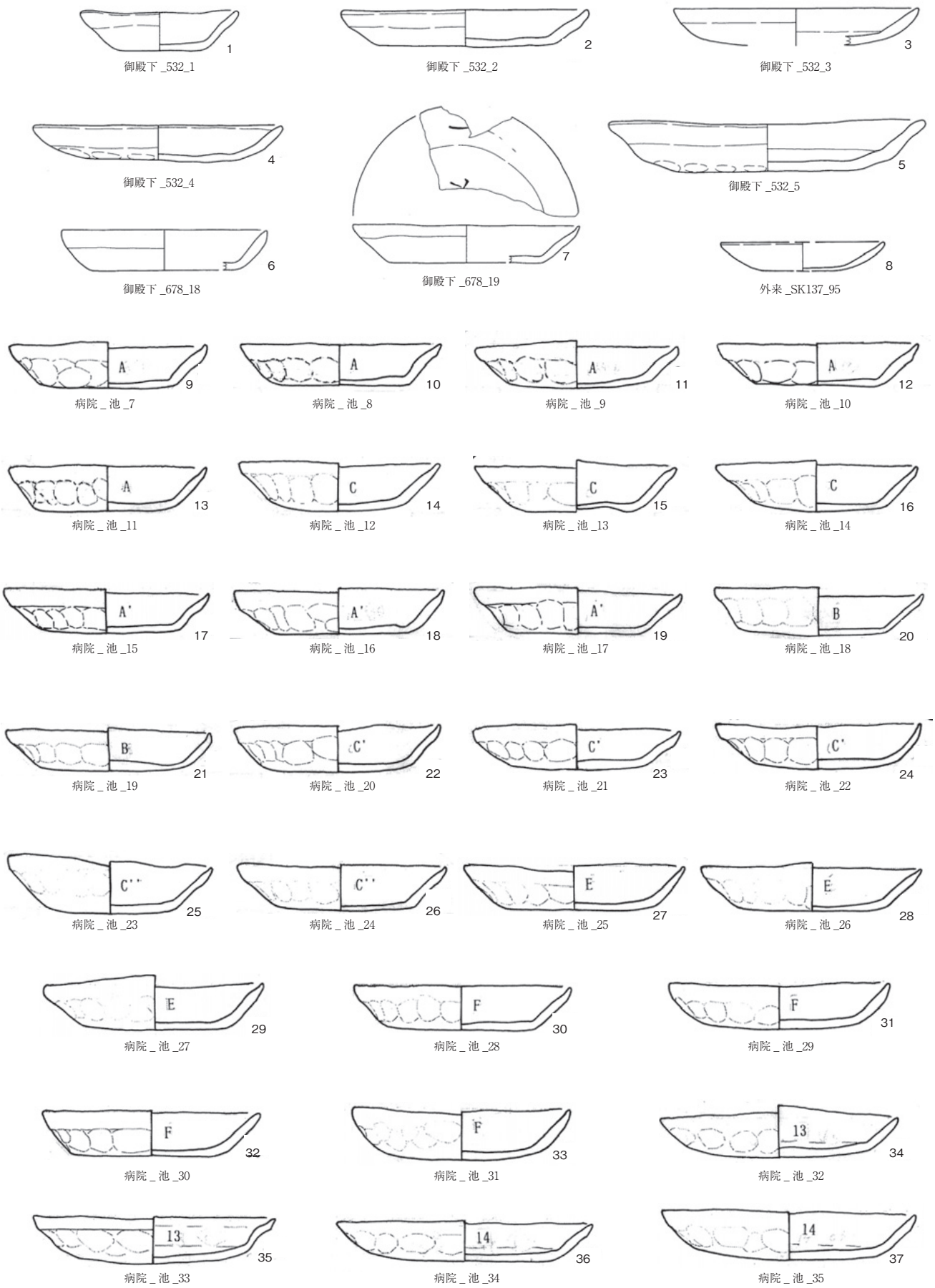
678号：長辺が25m以上、深さ6mの長方形を呈する大形土坑である。最下部は泥炭化した土壌が堆積しており、大量の木製品が出土している。遺物の年代は1650-60年代に比定される。白色系かわらけは2点出土しており、6は胎土はにぶい橙色で、口縁下部が肥大し、断面箱状を呈している。口唇部には灯芯痕がみとめられる。7は内面体部と底部に墨書がみられる。共伴かわらけは薄手DZ-2-a、耳DZ-2-e、磨平DZ-2-d。DZ-2-aには7と類似する墨書のあるものが多数認められる。

医学部附属病院外来診療棟地点（略称：HG　調査番号10　以下「外来」）（5図8）

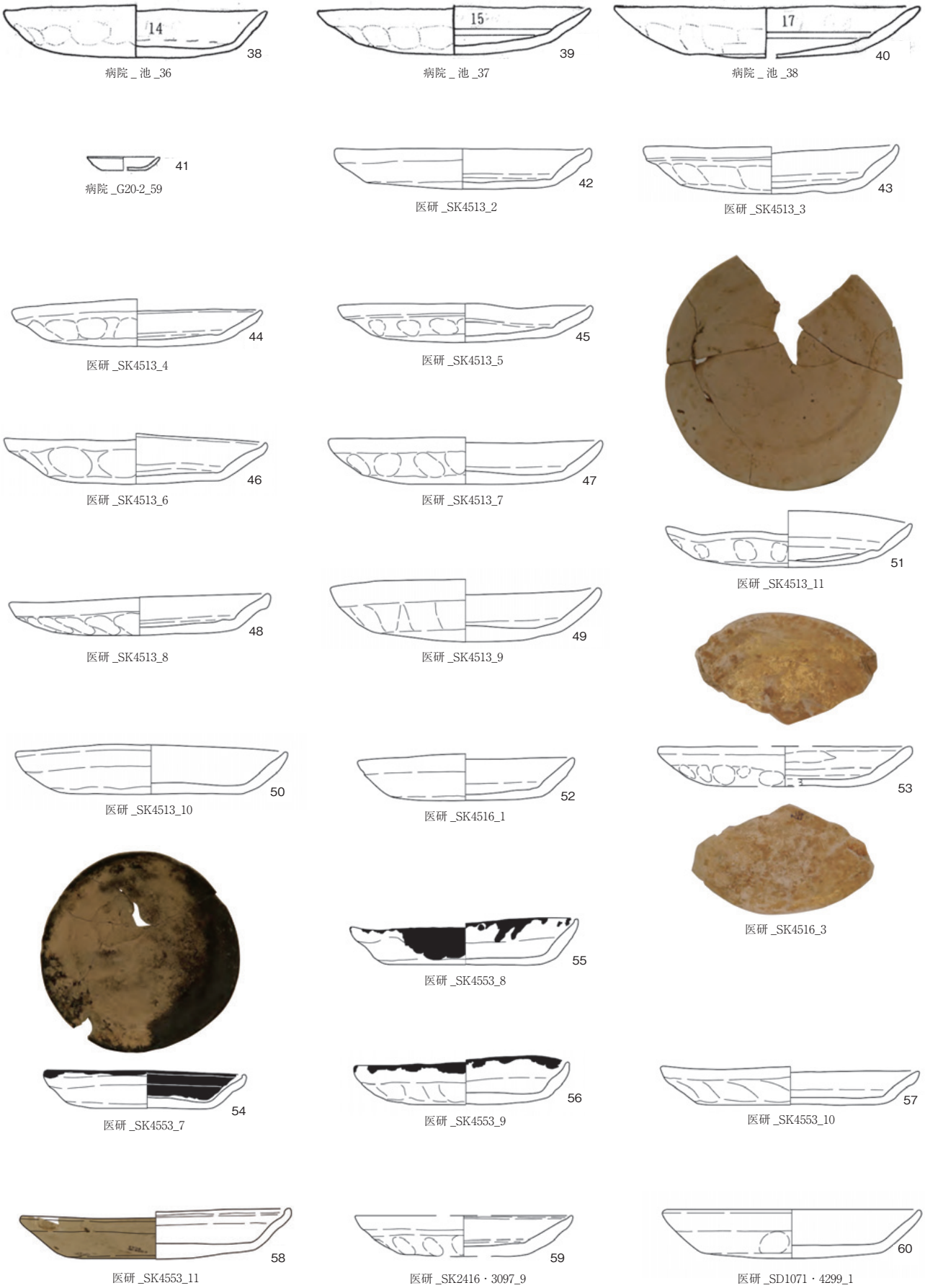
SK137：長方形の土坑である。遺物はくらわんか手の碗、「サカイ泉州磨生」、「泉湊伊織」の刻印をもつ焼塩壺などⅤb期の一括資料のほか、瓦、釘、鳥骨類の自然遺物が出土している。白色系かわらけは1点で、8の内面は、ウールマーク状にナデ調整が施されている。

医学部附属病院・中央診療棟地点（略称：HHC　調査番号4　以下「病院」）（5図9～6図41）

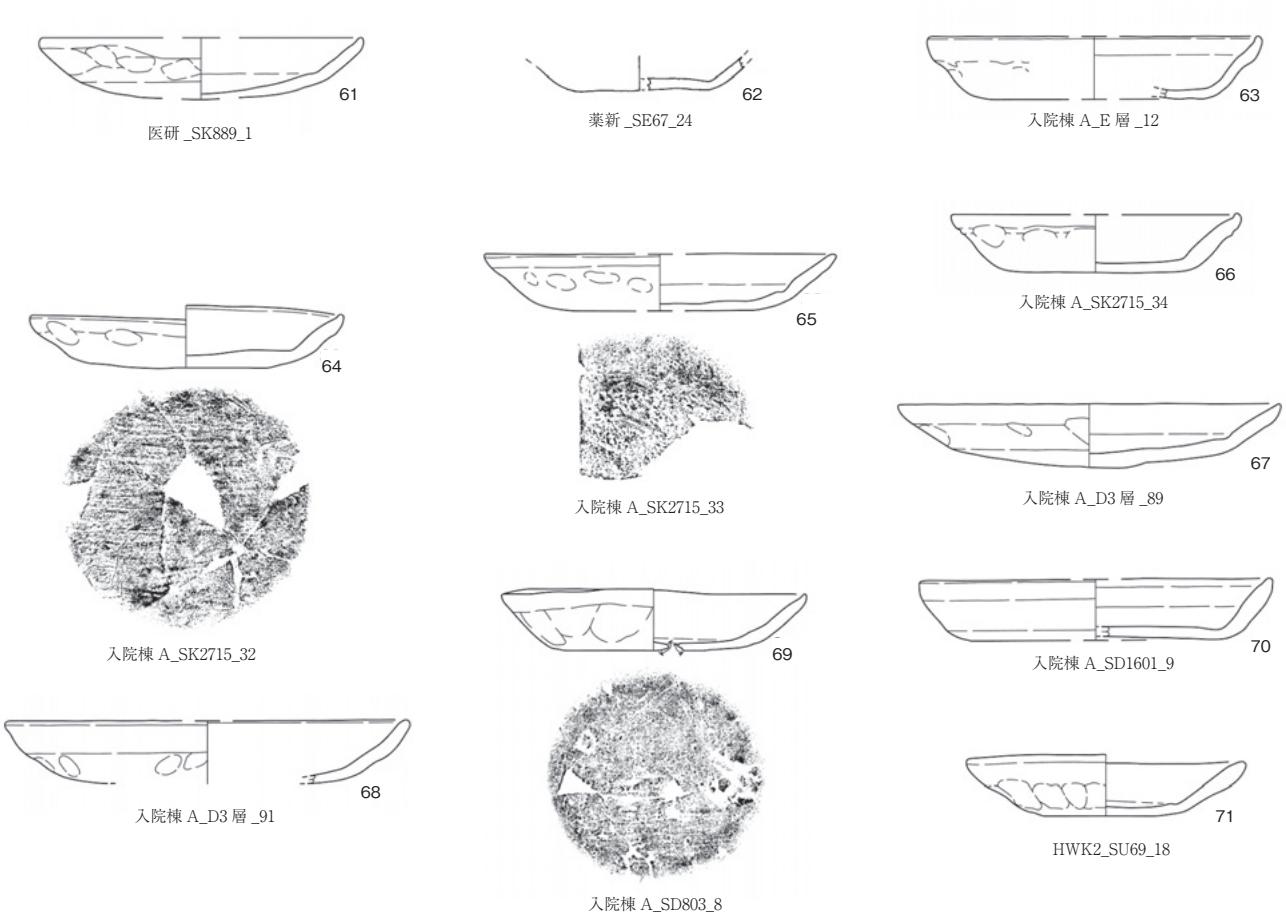
池：南北9m東西7.3mを測る不整形の大型土坑である。寛永6（1629）年の紀年銘のある木札を含む大量の



5 図　本郷構内遺跡出土白色かわらけ（1）



6 図　本郷構内遺跡出土白色かわらけ（2）



病院：医学部附属病院中央診療棟（4）、入院棟 A：医学部附属病院入院棟 A（23）、医研：医学部教育研究棟（24）、薬新：薬学部新館（15 未報告）、御殿下：御殿下記念館（3）、外来：医学部附属病院外来診療棟（10）、HWK2：医学部附属病院基幹整備共同溝等（44）　　（　）内は調査番号

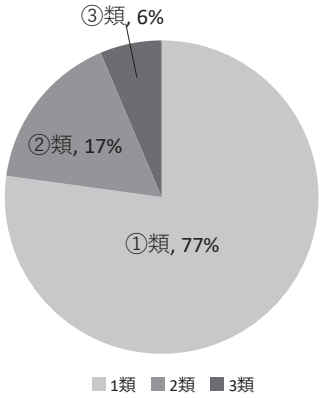
７図　本郷構内遺跡出土白色かわらけ（3）

1表　本郷構内遺跡出土白色系かわらけ一覧表

掲載番号	分析番号	地点略称	遺構番号	遺物番号	口径cm	底径cm	器高cm	類型	内底圏線	外底蓆痕	内底調整痕	色調	灯芯痕	年代	備考
1		HGS	532	1	8.5	4.4	2.3	-	-	-	-	-	-	Ⅱ期(1630-50年代)	
2		HGS	532	2	13.4	9.4	2.0	-	-	○	-	-	×	Ⅱ期(1630-50年代)	底部内外面黒色
3		HGS	532	3	13.5	—	2.0	-	-	-	-	-	-	Ⅱ期(1630-50年代)	
4		HGS	532	4	13.6	8.3	1.8	-	-	-	-	-	×	Ⅱ期(1630-50年代)	底部内外面黒色
5		HGS	532	5	17.4	10.0	2.8	-	-	-	-	-	×	Ⅱ期(1630-50年代)	底部内外面黒色
6		HGS	678	18	11.3	8.0	2.2	-	-	-	-	鈍橙色	○	Ⅲa期(1650-60年代)	
7		HGS	678	19	12.6	8.4	2.1	②	-	○	-	浅黄橙色	×	Ⅲa期(1650-60年代)	内面墨書あり
8		HG	SK137	95	9.0	5.7	1.56	①	△	-	Z字	淡黄	○	Ⅴb期(1710-20年代)	
9	東01	HHC	池	7	11.0	7.2	2.5	①	△	○	Z字	淡黄	×	1629	
10		HHC	池	8	11.0	7.0	2.4	①	△	○	Z字	淡黄	×	1629	
11	東02	HHC	池	9	11.0	7.6	2.5	①	△	○	一定	淡黄	×	1629	
12		HHC	池	10	11.0	6.6	2.3	-	-	-	-	-	-	1629	
13		HHC	池	11	11.0	6.7	2.5	-	-	-	-	-	-	1629	
14	東03	HHC	池	12	11.0	7.4	2.7	①	△	×	一定	淡黄	×	1629	
15		HHC	池	13	11.0	6.0	2.6	①	△	○	一定	淡黄	×	1629	
16		HHC	池	14	11.0	7.0	2.8	①	△	△	Z字	淡黄	×	1629	
17	東04	HHC	池	15	11.2	7.2	2.4	①	△	○	一定	淡黄	×	1629	
18		HHC	池	16	11.5	7.2	2.4	-	-	-	-	-	-	1629	
19	東05	HHC	池	17	11.4	7.0	2.5	①	△	×	一定	淡黄	×	1629	
20		HHC	池	18	11.5	7.8	2.7	①	△	△	Z字	淡黄	×	1629	
21	東06	HHC	池	19	11.3	7.4	2.4	①	×	△	一定	淡黄	×	1629	
22		HHC	池	20	11.3	7.2	2.5	①	×	×	Z字	淡黄	×	1629	
23	東07	HHC	池	21	11.4	7.2	2.5	①	×	○	Z字	淡黄	×	1629	
24	東08	HHC	池	22	11.2	7.2	2.5	①	×	×	一定	淡黄	×	1629	
25	東09	HHC	池	23	11.2	6.2	3.2	①	×	×	Z字	淡黄	×	1629	
26		HHC	池	24	11.5	7.2	2.6	①	×	△	一定	淡黄	×	1629	
27	東10	HHC	池	25	12.0	7.5	2.5	①	△	△	Z字	淡黄	×	1629	
28		HHC	池	26	12.0	7.2	2.6	①	△	△	Z字	淡黄	×	1629	
29		HHC	池	27	12.0	7.4	3.0	-	-	-	-	-	×	1629	
30		HHC	池	28	12.0	8.0	2.5	-	-	-	-	-	×	1629	
31		HHC	池	29	12.0	8.2	2.5	①	△	△	一定	淡黄	×	1629	
32		HHC	池	30	12.0	8.0	2.4	①	△	△	一定	淡黄	×	1629	
33		HHC	池	31	12.0	7.2	2.6	①	×	△	一定	淡黄	×	1629	
34		HHC	池	32	13.0	8.0	2.8	-	-	-	-	-	×	1629	
35		HHC	池	33	13.2	8.4	2.5	②	○	-	一定	淡黄	×	1629	
36		HHC	池	34	14.0	8.4	2.2	②	○	-	一定	淡黄	×	1629	
37	東11	HHC	池	35	14.0	10.2	2.6	①か	△	△	Z字	淡黄	×	1629	
38	東12	HHC	池	36	14.4	8.4	2.8	①	×	△	Z字	淡黄	×	1629	
39	東13	HHC	池	37	15.0	8.8	2.6	②	◎	○	Z字	明淡黄	×	1629	
40	東14	HHC	池	38	16.6	9.8	2.8	③	◎	△	不定	明淡黄	×	1629	
41		HHC	G20-2	59	5.3	5.5	1.0	-	-	-	-	-	×	Ⅴ期(1700-40年代)	
42	東15	HIKN	SK4513	2	14.2	10.4	2.2	②	◎	△	不定	桃黄白	×	17前	
43	東16	HIKN	SK4513	3	14.1	10.0	2.6	②	◎	△	不定	桃黄白	×	17前	
44	東17	HIKN	SK4513	4	13.7	9.8	2.6	②	◎	△	不定	桃黄白	×	17前	

掲載番号	分析番号	地点略称	遺構番号	遺物番号	口径 cm	底径 cm	器高 cm	類型	内底圏線	外底蓆痕	内底調整痕	色調	灯芯痕	年代	備考
45	東18	HIKN	SK4513	5	14.0	9.0	2.1	②	◎	△	不定	桃黄白	×	17前	
46	東19	HIKN	SK4513	6	14.4	9.3	2.8	②	○	△	不定	桃黄白	×	17前	
47	東20	HIKN	SK4513	7	15.0	11.0	2.6	①	△	○	Z字	明淡黄	×	17前	
48	東21	HIKN	SK4513	8	14.4	10.0	2.3	②	◎	△	不定	桃黄白	×	17前	
49	東22	HIKN	SK4513	9	15.0	10.0	3.4	①	×	△	Z字	明淡黄	×	17前	
50	東23	HIKN	SK4513	10	15.0	10.0	2.7	①	×	△	Z字ヵ	明淡黄	×	17前	
51	東24	HIKN	SK4513	11	13.6	10.0	3.1	②	◎	○	不定	桃黄白	×	17前	
52		HIKN	SK4516	1	11.9	8.4	2.6	①	△	◎	Z字	淡黄	×	17前	
53		HIKN	SK4516	3	13.9	8.4	2.6	②	○	△	不定	淡黄	×	17前	
54		HIKN	SK4553	7	11.4	6.4	2.1	①	△	○	Z字	淡黄	○	17前	
55		HIKN	SK4553	8	12.6	8.8	2.6	①	×	○	一定	淡黄	○	17前	
56	東25	HIKN	SK4553	9	11.9	7.8	2.7	①	×	△	Z字	淡黄	○	17前	
57		HIKN	SK4553	10	14.4	9.8	2.1	②	○	△	不定	桃黄白	×	17前	
58	東26	HIKN	SK4553	11	15.0	10.5	2.8	②	△	△	不定	明淡黄	×	17前	
59	東27	HIKN	SK2416・3097	9	12.0	7.0	2.3	④	◎	×	一定	明橙褐色	×	17前	
60		HIKN	SD1071・4299	1	14.2	10.0	2.7	②か	○	-	Z字	明淡黄	×	17c前～中	
61		HIKN	SK889	1	12.8	-	2.4	不明	◎	△	不定	明淡黄	×	17c前～中	
62		YS	SE67	24	-	5.6	-	①か					-	Ⅰb期(1610-30年代)	
63		HW	E層	12	13.0	8.5	2.5	不明	△	-	-	灰淡黄	×	E層(1616-30年代)	
64		HW	SX2715	32	12.3	8.0	2.2	①	△	○	Z字	淡黄	○	Ⅱ期(1630-50年代)	
65		HW	SX2715	33	13.8	7.0	2.3	②	△	○	Z字	明淡黄	×	Ⅱ期(1630-50年代)	
66		HW	SX2715	34	11.4	7.0	2.3	①	△	△	Z字	桃黄白	×	Ⅱ期(1630-50年代)	
67		HW	D3層	89	15.0	-	2.5	②	○	-	-	桃黄白	×	D3層(1630-40年代)	
68		HW	D3層	91	15.8	-	-	不明	-	-	-	灰淡黄	○	D3層(1630-40年代)	
69		HW	SD803	8	12.0	6.5	2.5	①	△	○	-	淡黄	○	Ⅲa期(1650-60年代)	
70	東35	HW	SD1601	9	13.8	9.8	2.4	④	○	-		明橙褐色	×	Ⅲ期(1650年代-82)	
71		HWK2	SU69	18	11.0	4.8	2.4	①か	△	-	-	淡黄	○	Ⅱ-Ⅲa期（1630-60年代）	

◎　非常に明瞭　　青字：推定値
○　明瞭
△　不明瞭
×　なし



８図　池遺構 類型別出土割合

木製品と、70kg を超える白色胎土のカワラケが出土している。儀礼的な宴会の食器セットの一括廃棄と考えられ、徳川家光、秀忠の御成に関係する資料とされる。白色系かわらけの総破片数は 5,216 点で、①～③類が確認される。比率は①類 75％、②類 17%、③類 6％で、①ａとした口径 11 ㎝前後のものを主体としている。③類は池遺構以外では出土していない。埋土が鉄分を多く含む土のため、変色した破片は多数みうけられるが、明らかに灯芯痕とみられる痕跡があるものは確認されていない（2 表）。

G20-2：不整長方形を呈する土坑である。東大陶磁器編年Ｖ期のまとまった資料が出土している。かわらけは 115 点出土しており、全遺物の 33.5％にあたる。手づくね DZ-2-g が 2 点、磨き底部平滑 DZ-2-d が 4 点、耳 DZ-2-e が 1 点以外は薄手 DZ-2-a もしくは江戸式 DZ-2-b で、b は口径 18 ㎝以上の大型品も含んでいる。Ｖ期（1710-40 年代）の基準資料とされている遺構であるが、報告書では手づくねかわらけ 2 点は混入の可能性が示唆されている。

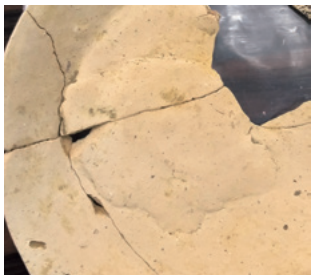
医学部教育研究棟地点（略称：HIKN　調査番号 24、以下「医研」）（6 図 42 ～ 7 図 61）

SK889：E 面（17 世紀前～中葉）で検出された土坑である。遺物は 61 のみで①類に分類される。

SD1071・4299：石組溝と推定される溝である。遺物は金箔瓦がまとまって出土しているほか、17 世紀前～中葉の陶磁器、土器が出土している。60 は明るい淡黄色で外面底部に簾状圧痕が明瞭である。厚手 DZ-2-k と共伴している。

SK2416・3097：植栽痕と思われる不整円形を呈する土坑である。遺物は 17 世紀前半の陶器土器類が出土している。59 は④類とした明橙褐色の手づくねかわらけである。外面底部には簾状圧痕、内面調整は板目状の一定方向ナデ、内面底体間には明瞭な圏線がめぐる。59 と同様の、明橙褐色の胎土で内面に板目状のナデがみられる資料が御殿下 448 号遺構 (2) から出土している。

SK4513：F 面で確認された不整形の土坑である。金彩かわらけが出土した SK4516 の西側に位置する。白色系かわらけは坑底から複数枚重ねた状態で出土している。47、49、50 は①類、42 ～ 46、48、51 は②類でいずれも口径 14 ㎝前後である。②類のかわらけは①類と色調が異なり、明るい桃色がかった白色で、内面底体間の圏線が明瞭である。内面調整痕は不定方向で、多方向からナデ調整を行っているため、中央部の器壁が薄くなっており、51 の底部中央は穴が開いたところを粘土を貼り付け補修している（9 図）。底部は指頭圧痕がめだち、莚痕跡は不明瞭である。①類の内面調整痕は Z 字状で、47 は外面底部の莚痕跡が明瞭である。



９図　内面補修痕跡

SK4516：F 面で確認された長方形の土坑である。52、53 は白色系かわらけに金彩を施している。輪積袋状の焼塩壷 DZ-51-ah と共伴している。

SK4553：F 面で確認された大型土坑である。歪な長楕円形を呈し、一部がハングしている。54 ～ 56 は①ａ類で、口縁部は灯芯痕が全周している。57、58 は胎土の色調と器形から②類に分類したが、58 は内面圏線が不明瞭で、色調も 57 より若干黄色がかっている。

薬学部新館地点（略称：YS　調査番号 15　以下「薬新」）（7 図 62）

SE64：素掘りの井戸である。全体的に遺存度が低い。壁面に足掛け穴とみられる小穴があり、「17 世紀中葉以前に廃絶された井戸に共通する特徴を持っている」とされている（東京大学埋蔵文化財調査室 1996）。遺物は「三なと久左衛門」の刻印をもつ焼塩壷 DZ-51-t、笠原鉢などＩｂ期（1610-30 年代）に比定される遺物が出土している。62 は①類に分類される (3)。

入院棟Ａ地点（略称：HW　調査番号 24、以下「入院棟Ａ」）（7 図 63 ～ 70）

E 層：緩斜面の平準化による藩邸開発の開始による初期造成土で 1616 ～ 30 年代に比定される。63 は内面底体間に圏線はなく、断面箱形で口縁部は内湾し、内部にわずかに赤色付着物がみられる。

D3 層：調査区北側に部分的に堆積している盛土で 1630 ～ 40 年代に比定される。67 は明るい淡黄色で、内面底体間に圏線が明瞭にめぐる②類、68 は内面中央部を欠損しているが、精緻で灰色味のある胎土、直線的に開く体部と、内面中央部に黒色処理がみられる点からへそかわらけの可能性が高い。薄手 DZ-2-a、厚手 DZ-2-k と共伴している。DZ-2-a には灯芯痕がみとめられる。

SD803：東西 31.34m、南北 24.23m の逆 L 字形の溝である。近世最下面に帰属することから藩邸内で最も古い開発行為に伴う遺構とされている。遺物はⅢ a 期（1650-60 年代）を下限としている。69 は①類に分類される。色調は淡黄色で、外面底部に簾状圧痕が明瞭である。底部中央には二次穿孔があり、口縁には灯芯痕がみとめられる。薄手 DZ-2-a、厚手 DZ-2-k と共伴しており、どちらも灯芯痕がみとめられる。

SX2715：藩邸開発初期に、ひな壇状の平坦面を作出するための切土造成にともなう不整形の遺構。遺物は東大編年Ⅱ期（1630-50 年代）に比定される。64、66 は①類、65 は②類に分類される。64 は灯芯痕が全周している。共伴かわらけは薄手 DZ-2-a、厚手 DZ-2-k で多数に灯芯痕がみとめられる。

SD1601：調査区南北に延びる溝である。北側は石組、南側は木枠構造をとる。遺物年代はⅢ期（1650 年代-82）である。70 は色調が明赤褐色だが、江戸在地かわらけに多くみられる赤褐色の色調よりは若干明るく、胎土には白色小礫を多量に含んでいる。底径は大きく、口径底径差が小さい。断面形は箱状である。口唇部は薄く、つまみ出したように内湾している。同じ 4 類である 59 とは器形も胎土の色調も異なっている。共伴するのは薄手 DZ-2-a である。

医学部附属病院基幹整備共同溝等（略称：HWK2　調査番号 44　以下「病院共同溝」）（7 図 71）

SU69：調査区西端に位置する地下室で、隣接する病院・設備管理等地点で検出された W33-1 遺構と同一遺構である。出土遺物はⅡ～Ⅲ a 期（1630-60 年代）、Ⅴ a 期（1710-20 年代）の 2 時期が確認されている。Ⅴ a 期の遺物の殆どは被熱している。本遺構は上面に 2 度の火災による焼土層が堆積しており、71 を含む主体となった遺物は被熱していないため、Ⅴ a 期の資料は 2 次廃棄と考えられている。71 は①類で口唇部には灯芯痕が全周している。共伴かわらけは薄手 DZ-2-a で、いずれも灯芯痕が著しい。

特徴的な出土状況がみられるのは病院 _ 池遺構と医研 _SK4513 である。

池遺構 折敷出土状況

池遺構 かわらけ出土状況

医研 _SK4513 かわらけ出土状況（1）

医研 _SK4513 かわらけ出土状況（2）

10 図　遺物出土状況

池遺構は前述したように不整多角形の大型土坑で、大量の白色系かわらけは西側のくぼみに折り重なって出土している。土製品の上面に、西側から南北の方へ箸、折敷、木札などの饗応に使用されたと思われる大量の木製品が確認されており、土製品、木製品が一括廃棄された状況を示している。

医研 _SK4513 は、坑底と壁には凹凸が激しく、平面系は不整形で、坑底近くから白色系かわらけが、数枚整然と重なった状態で検出された。覆土は砂利を多く含む単層で、一気に埋まった様子が伺える。白色系かわらけ以外の遺物は出土しておらず、埋設したような状況がみてとれる（10 図）。

4. 共伴するかわらけ

ここでは、白色系かわらけ以外も含む、かわらけ全体の出土状況を遺構単位にみていきたい。対象とするのはおもに本地点でかわらけが一定量出土しており、年代が推定できる遺構および今回分析を行った病院 _ 池遺構、入院棟 A 地点のカウント対象遺構である [(4)]。

（1）東大かわらけ分類

各遺構のかわらけ共伴関係をみていく前に、東大分類におけるかわらけ分類コードの定義を確認しておきたい。

現在使用している東大分類 ver.4（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）では、かわらけを 9 タイプに分類している。ver.4 以前は糸切回転方向が右回転：a、左回転：b の 2 種類だったものから大きく変わったため、ここで詳細を表記しておく。

DZ-2-a ：小林 C 類・E 類、梶原Ⅱ b 群
b ：小林 F 類、梶原Ⅱ c 群
c ：磨きかわらけ、底部に渦巻状の沈線
d ：磨きかわらけ、底部平滑
e ：耳かわらけ
f ：へそかわらけ
g ：てづくね
h ：透明釉
i ：底部穿孔
j ：見込みに浮文
k ：底径大、器壁厚、小林 B 類、梶原Ⅱ a 群含む

DZ-2-a、DZ-2-b、DZ-2-k については他分類を引用しているため若干説明を加える。

a：ロクロ成形。器壁は薄く、底径が大きい。口径底径比が小さく器高は比較的低い。口縁部は外反するものと内湾するものがあり、内面底体間に圏線状のくびれを有するものが多い。底部糸切痕は右、左、離しがあり、糸目間は密である。口径 18 ㎝以上の大型品は含まない。いわゆる江戸式につながるプロトタイプのかわらけ。

b：ロクロ成形。器壁は薄い。内面底体間に圏線状のくびれを有し、裏面の外面底体間には溝状の筋がみられる。いわゆる江戸式。底部糸切痕は右、左あり、口径 18 ㎝以上の大型品で離し糸切がみられるものも含む。

k：ロクロ成形。器壁は厚い。底部は厚く突出し体部が直線的に立ち上がるものと、体部が丸みを帯びて立ち上がるもの、外面体部にヨコナデがみられるものなど、細分が可能である。

文中では、薄手 DZ-2-a、江戸式 DZ-2-b、磨渦 DZ-2-c、磨平 DZ-2-d、耳 DZ-2-e、へそ DZ-2-f、手づくね DZ-2-g、透明釉 DZ-2-h、底部穿孔 DZ-2-i、浮文 DZ-2-j、厚手 DZ-2-k と記載している。

（2）年代別かわらけ出土状況（2 表）

2 表は池遺構と医研地点および入院棟 A 地点の遺構単位のかわらけ出土状況である。これらの遺構の概要と出土かわらけについて、段階ごとにみていきたい。

医研地点は元禄以降幕末まで継続して御殿として使用されていた場所にあたり、遺物量が少ないため、補完資料として入院棟 A 地点の組成表カウント対象遺構を加えている。表中の数量は、医研地点は破片数、入院棟 A 地点は個体数でカウントしているため、表記は「個体数（破片数）」、破片数が非計測の場合は「-」で示している。

・17 世紀前半

肥前磁器を含まない段階の遺構として、病院 _ 池遺構、医研 _SK938、SK4513、SK4516、SK2416・3097 があげられる。

本郷邸内で最も早く白色系かわらけが出土するのは病院 _ 池遺構である。前田家が本郷邸を拝領したのは元和 2・3（1616・17）年だが、「寛永 3（1626）年　初めて周囲を木柵をもって囲む」（宮崎 1990）とあり、これ以前はほとんど利用されていなかったと考えられるため、この段階が初現と考えてもよいだろう。肥前産の鉄絵皿 TB-2-c、瀬戸美濃産の天目茶碗 TC-1-a、輪積袋状塩壺 DZ-51-ah と共伴している。手づくね白色系かわらけの他に、白色胎土のろくろ成形かわらけも数点出土しており、病院 _ 池 _39 [(5)] は内面を黒色処理し、見込みに圏

２表　段階別かわらけ出土状況

段階	地点	遺構番号	a(江戸式以前)		b(江戸式)		c (磨渦)		d （磨平）		e(耳)		f(へそ)		g(手づくね)		h(透明釉)		i(穿孔)		j(浮文)		k(厚手)	
			個体数（破片数）	灯芯痕	個体数（破片数）	灯芯痕	個体数（破片数）	灯芯痕	個体数（破片数）	灯芯痕	個体数（破片数）	灯芯痕	個体数（破片数）	灯芯痕	個体数（破片数）	灯芯痕	個体数（破片数）	灯芯痕	個体数（破片数）	灯芯痕	個体数（破片数）	灯芯痕	個体数（破片数）	灯芯痕
1629	HHC	池	(2)	0									24(36)	0	585(4645)	0								
17前	HIKN	SK938	1(15)	0																			2(1)	1
17前	HIKN	SK4513	(2)	0									(2)	0	10 (95)	0								
17前	HIKN	SK4516											(1)	0	2(84)	0								
17前	HIKN	SK2416・3097	2(0)	1											1	0							2(0)	2
17前（上限1637）	HIKN	SK4553	(2)	2											5	3							(1)	1
Ⅱ～Ⅲa (1630-60年代)	HW	SK2352	42(－)	○	4(－)	-			1(－)	0					1(－)	0							2(－)	-
Ⅲa (1650-60年代)	HW	SK1023	48	○	7	-			1	-					0 (－)	-							2	-
17中	HIKN	SK871	23(23)	8																				
17後(下限1682)	HIKN	SK2472	(2)	1			1	0							3	1								
1683	HW	C2層	23(－)	○	11(－)	○			1(－)	-			1(－)	-					1(－)	-			3(－)	-
1682-1703	HW	SK3	385(－)	○	185(－)	○			2(－)	-	1(－)	-			0 (－)	-			1(－)	-			21(－)	○
17末	HIKN	SK280	2(5)	5					9(15)	0														
Ⅳb-Ⅴa (1690-1720年代)	HW	SU1264	13(－)	-	12(－)	-			46(－)	-														
Ⅵa (1750-60年代)	HW	SK1131	11(－)	○	9(－)	-			2(－)	-							1(－)	-						
Ⅶ (1780-90年代)	HW	SU446	1(－)	○	3(－)	-			0 (－)								2(－)	○						
Ⅷd (1850-60年代)	HW	SK1160			1(－)	-			1(－)	-							1(－)	-			1(－)	-		

「－」：非計測

「○」：数量非計測だが存在

※カウント基準を満たす個体資料はないが、破片資料が存在しているとき「0」で示す

※表中のDZ-2-gはすべて白色胎土

線がみとめられる。へそDZ-2-fが多いのも特徴的である。推定個体数は24個体で、すべて白色胎土であるが、白色系かわらけより色調はグレーがかり、精緻な胎土である。江戸在地かわらけは薄手DZ-2-aが2点のみである。

医研_SK4513は白色系かわらけが10個体、破片数95点が出土しており、破片には金彩された破片2点を含んでいる。前述のように埋設したような出土状態を示しており、灯芯痕が認められる資料はない。共伴資料はへそDZ-2-f、薄手DZ-2-aの破片および輪積袋状塩壺DZ-51-ahである。

医研_SK938からは金箔瓦、鯱瓦が出土している。共伴するかわらけは薄手DZ-2-a糸切回転方向は不明、厚手DZ-2-k糸切痕は左回転である。DZ-2-kには灯芯痕が認められる。近接するSK940・941からは金箔瓦、鯱瓦とともに白色系かわらけが出土している。

医研_SK4516では、白色系かわらけ2個体、破片84点が出土しており、白色系かわらけに金彩したかわらけを含む。共伴資料は白色胎土の手づくね小形皿DZ-2、へそDZ-2-f、輪積袋状塩壺DZ-51-ahで、袋状の焼塩壺と小型の手づくね小型皿は池遺構、SK4513でも出土しており、白色系かわらけと共伴する例が多い。

医研_SK2416・3097では④類とした明橙褐色の手づくねDZ-2-gが出土しており、白色胎土の手づくねかわらけは出土していない。共伴するのは薄手DZ-2-a糸切右回転、厚手DZ-2-k離し糸切のかわらけで、a、kどちらにも灯芯痕が認められる。

・17世紀中葉～天和2（1682）年

肥前磁器を含み、下限を天和の火災にもつ遺構で、医研_SK4553、SK871、SK2472、SK280、入院棟A_SK2352、SK1023があげられる。白色系かわらけの出土数は激減し、江戸式につながる薄手DZ-2-a、磨きかわらけで底部に渦巻き状の沈線をもつ磨渦DZ-2-c、磨きかわらけで底部が平滑なDZ-2-dがあらわれる。また、この時期の白色系かわらけには煤が付着するものが確認される。

医研_SK4553は、1630年代に比定される遺構である。医研_SK4553_12は薄手DZ-2-aに分類されるかわらけで、外面底部に「寛十四　丑九月廿日　申時　三度入」と刻書があり、製作年代がわかる資料である（11図）。白色系かわらけは①類3個体と②類2個体の5個体出土しており、そのうち①類3点には灯芯痕が確認される。内面には灯芯痕がみとめられる。その他厚手DZ-2-k、2重角枠「ミなと藤左衛門」刻印の焼塩壺DZ-51-aが共伴する。

入院棟A_SK2352は、遺物年代がⅡ～Ⅲa期（1630-60年代）に比定される遺構である。磁器は肥前磁器を主体に貿易陶磁を含み、陶器は瀬戸・美濃系が中心で、天目碗、長石釉皿、菊皿、肥前系では呉器手碗、「ミなと藤左衛門」刻印の焼塩壺DZ-51-aが共伴する。かわらけは薄手DZ-2-a、腰折れ条痕のみられる江戸式DZ-2-b、厚手DZ-2-k、磨平DZ-2-d、手づくねDZ-2-gと新旧入り混じったかわらけが確認される。主体はDZ-2-aで42個体確認されている。同遺構75は内外を比較的丁寧に調整しており、外面底体間に削りがみられる。また、同遺構77は外面体部下部に1㎝幅で削りを施し、内外面は丁寧に調整し、内面底部には黒色処理が認められる。磨きかわらけに酷似するが右回転の糸切痕が残っている（12図）。

入院棟A_SK1023は遺物年代はⅢa期（1650-60年代）に比定され、1660年代に廃絶したと想定される遺構である。肥前磁器は「角福」銘をもつ皿、肥前陶器では刷毛目大平鉢、陶器碗では呉器手碗と天目でほぼ構成されている。焼塩壺は「天下一堺ミなと藤左衛門」銘が出土している。共伴するかわらけは薄手DZ-2-a、江戸式DZ-2-b、厚手DZ-2-k、磨平DZ-2-d、手づくねDZ-2-gでSK2352と同様の組成を示す。糸切痕はDZ-2-aは半数、DZ-2-bは全点左回転である。右回転のものは離し糸切のものも含む。

医研_SK871は木枠の残存する土坑で、薄手DZ-2-aが多数出土している。いずれも口径、高さがそろっており規格化されたかわらけである。糸切痕の左回転と右回転の割合は5：3、離し糸切も散見される。手づくねDZ-2-gは出土していない。

医研_SK2472は17c後半で1682年を下限とする遺構である。「大明成化年製」銘をもつの染付碗JB-1-ｃ、「天下一堺ミなと藤左衛門」刻印の輪積成形塩壺DZ-51-ｃが出土している。手づくねDZ-2-g、磨き底部渦DZ-2-ｃの内面に金彩を施したもの、薄手DZ-2-aが共伴している。手づくねDZ-2-gには灯芯痕が認められる。

・1682年～1703年

上限が天和2（1682）年の火災、下限が元禄16（1703）年の火災とする入院棟A_C2層、SK3、同時期の医研_SK280があげられる。

入院棟A_C2層は天和2（1682）年火災後の屋敷割変更に伴う焼土主体の造成土である。C2層出土遺物は、医研地点の同火災による被災資料と10数点接合しており、盛土造成に乗じて加賀藩御殿空間内から搬出された遺物群とされている。かわらけは薄手DZ-2-aが23個体、江戸式DZ-2-bが11個体とaの割合が高く、a、b双方

に灯芯痕が認められる。この他、底部穿孔 DZ-2-i、へそ DZ-2-f、厚手 DZ-2-k が出土している。底部穿孔 DZ-2-i は 1650-60 年に比定される入院棟 A_D1 層 _471 (9)、元禄 16（1703）年の火災瓦礫片付層とされる入院棟 A_C 面焼土 _860 (10) にみられ、471 は底部がナデ調整され糸切痕が消されている。860 は磨渦 DZ-2-c に焼成前穿孔を施したかわらけである。どちらも小孔の周囲に煤の痕跡がみとめられる。17 世紀中葉には灯火具用として焼成前に穿孔されたかわらけが製作されていたことがわかる資料である。この他へそ DZ-2-f、厚手 DZ-2-k が共伴する。手づくね DZ-2-g は確認されていないが、天和の火災による瓦礫層とされる入院棟 A_D 焼（D 面焼土）からは出土しているため、この時期に使用がないとはいえない。

入院棟 A_SK3 は南北約 54m 東西約 20 m を測る大型土坑で、最小個体数 3716 点を数える大量の遺物が出土している。遺構年代は天和 2（1682）年火災を上限、元禄 16（1703）年を下限とするが、遺物は 1680-90 年代が主体である。かわらけは薄手 DZ-2-a が 385 個体、江戸式 DZ-2-b が 185 個体と大量に出土しており、a、b の割合は 2：1 と a の割合が高い。磨き底部平滑 DZ-2-d、耳 DZ-2-e、底部穿孔 DZ-2-i、厚手 DZ-2-k とともに手づくね DZ-2-g が確認されている。DZ-2-k はこれ以降の遺構からは出土していない。

医研 _SK280 は 17 世紀末に比定される遺構である。磨平 DZ-2-d が 9 個体以上出土している。いずれも非常に薄い器壁ととがった口唇部をもち、内面底部にはっきりした 3 点の黒円がみとめられる「内曇り」である。共伴するかわらけは薄手 DZ-2-a で糸切痕は右回転で離し糸切のものを含む。手づくね DZ-2-g、厚手 DZ-2-k は出土していない。

・18 世紀以降

元禄の火災（1703 年）以降幕末までの遺構として入院棟 A_SU1264、SU446、SK1160 があげられる。

入院棟 A_SU1264 は元禄の火災の瓦礫廃棄と 18 世紀前葉の遺物が混ざる遺構である。薄手 DZ-2-a と江戸式 DZ-2-b は 1：1 の割合で出土しており、いずれも灯芯痕は認められない。磨平 DZ-2-d が 46 個体と大量に出土している。手づくね DZ-2-g は出土していない。

入院棟 A_SK1131 は出土遺物に小丸碗 JB-1-j、筒形碗 JB-1-l を含み、ろくろ無印塩壺 DZ-51-w の蓋受が明確であることからⅥa 期（1750-60 年代）とされている。かわらけは薄手 DZ-2-a、江戸式 DZ-2-b がほぼ 1：1 の割合で出土している。糸切痕は大半が左回転で離し糸切を含む。灯芯痕は a のみにみられる。他の共伴資料は磨平 DZ-2-d、透明釉 DZ-2-h。DZ-2-h の糸切痕は右回転で、口縁部には灯芯痕が認められる。手づくね DZ-2-g は出土していない。

入院棟 A_SU446 は広東碗 JB-1-m を含み、瀬戸・美濃産の磁器を含まないことからⅦ期（1780-90 年代）に比定される。かわらけは薄手 DZ-2-a と江戸式 DZ-2-b の割合は 1：3 と DZ-2-b 主体である。磨平 DZ-2-d、透明釉 DZ-2-h も確認されている。灯芯痕は DZ-2-a、DZ-2-h にみられる。全体にかわらけの出土数は減少する。

入院棟 A_SK1160 はⅧd（1850-60 年代）に比定される遺構である。磁器は瀬戸・美濃 JC を含む端反形碗 JB-1-n、JC-1-d を中心とし、湯呑碗（JB-1-o、JC-1-e）を含む。薄手坏 JB-6-c、JC-6-d も比較的多く認められる。かわらけは江戸式 DZ-2-b、磨平 DZ-2-d、透明釉 DZ-2-h、浮文 DZ-2-j が出土している。

入院棟 A_SK1160_110 (11) は口径 18.5 ㎝の大型品で、江戸式 DZ-2-b に分類される。糸切痕が中央にある離し糸切である。同遺構 111 (12) は磨平 DZ-2-d とされる上製かわらけであるが、白色胎土である。非ロクロ成形白色系かわらけとは色調も胎土も全く異なり、産地が異なると思われる。同遺構 112 (13) はいわゆる「内曇り」だが内面中央には金彩を施した寿字の浮文が認められるため DZ-2-j に分類されている。

ここまで、本郷構内出土の白色系かわらけおよび共伴しているかわらけの出土状況を年代別に概観してきた。

白色系かわらけの推移は以下の通りである。

本郷邸では白色系かわらけの初現は 1629 年で、御成の饗宴に伴い持ち込まれたと考えられる。大量廃棄が確認された池遺構では、白色系かわらけ①②③類が出土しており、④類を含まない。ロクロ製品で白色胎土のかわらけがみられ、江戸在地系のかわらけはほとんど含まれていないのは、この段階では江戸在地での生産体制が整っていなかったためと推察される。初期の段階では医研 _SK4513 のように、埋設されたような出土状況が確認されているうえ、灯芯痕は全く認められないことから、2 次利用はされておらず、特別な器としての扱いがうかがえる。③類はこの時期以降出土がみられない。④類を含まない点については、④類はさまざまな形状がみられ、出土例もから、儀礼のために用意された一式ではなく、個人使用などのため持ち込まれた可能性などが考えられる。

1630 年代後半になると、白色系かわらけに灯芯痕が認められるようになり、これまでのように一度きりの使

用で廃棄されなくなったと考えられる。灯芯痕が認められるのは①a類のみである。精製かわらけ（DZ-2-c、DZ-2-dを総称して精製かわらけとよぶ）が現れるのもこの時期である。

1640 - 50年代になると、白色系かわらけの出土量は減少し、かわりに薄手DZ-2-aが増加し始める。DZ-2-aの糸切痕跡は、離し糸切痕や一つのかわらけに複数の糸切痕が残る特殊糸切痕がみられ、法量もさまざまで規格性は低い。また、へそDZ-2-fは、現段階ではこの時期以降の出土例は確認出来ていない。

1680-90年代では、白色系かわらけおよび、厚手DZ-2-kの出土はほぼ確認されなくなる。精製かわらけはこの時期の出土が最も多い。薄手DZ-2-aに加え江戸式DZ-2-bが激増するのもこの時期である。

18世紀代の白色系かわらけの資料は、病院_G20-2_59、HWK2_SU69_18、外来_SK137_95の3点である。このうち病院_G20-2は混入の可能性が高いとの記載があり、HWK2_SU69は2次廃棄と考えられている。残るのは外来_SK137である。外来_SK137はⅤb期（1730-40年代）の基準資料であるが、白色系かわらけは1点のみの出土であり、混入の可能性は否定できない。しかし同じ外来地点で同時期に比定される外来_SK18でも、白色系かわらけが2片確認されている。18世紀初めの当該地点は大聖寺藩の上屋敷にあたる。大聖寺藩ではわずかながら白色系かわらけが使用されていたのか、単なる混入であるかの判断は、今後の資料の増加を待ちたい。

5. 白色系かわらけ消滅後（13図）

白色系かわらけの最大の特徴は色調である。明るい淡黄色の胎土、手づくね成形、内面底体間にみられる圏線、これらは京都産のかわらけを意識したものとされている（滝沢1992）。白色系かわらけに加えられる加飾は、金彩と内面底部黒色処理[14]である。ここではこの2点の加飾が施された在地かわらけについてみてみたい。

内面底部黒色処理は、内面底部に円形の黒点を三つ三角形に施す「内曇り」、内面中央部を広く黒色に焼くだけの2タイプがみられる。内面中央を黒色処理している資料として外来_SE100_25、入院棟A_D2層_228、入院棟A_C3層_582があげられる。いずれも磨平DZ-2-dで、外来_SE100は17世紀後半、入院棟A_D2層は1650-60年代、入院棟A_C3層は1683年に比定される遺構である。また内面に円形の黒点を3か所施す「内曇り」の資料は入院棟A_SK2535_4、御殿下_678号_12～15、医研_SK280_2～5などがあげられる。これらも磨平DZ-2-dで、入院棟A_SK2535は1630-40年代、御殿下_678号は1650-60年代、医研_SK280は17c末に比定される遺構である。

江戸在地かわらけに金彩を施した資料として、医研_SK2472_10、入院棟A_D2層_226、入院棟A_SK3_546があげられる。医研_SK2472_10は磨渦DZ-2-cで内面に金彩の痕跡が確認されている。入院棟A_D2層_226、入院棟A_SK3_546は磨平DZ-2-dで、内外面に金彩の痕跡がみられる。これらは精製かわらけに金彩を施した資料であるが、それ以外の資料として医研_SK2185があげられる。この資料は外面体部下部と外面底部外周部を1㎝幅で削り、外面体部上部に金彩がみられる。外面体部下部に削りを施すという調整は、内外を丁寧に磨き調整しているが底部に糸切痕が残る、精製かわらけの前身ともいえる入院棟A_SK2352_75、77にもみられる技法である（前述）。医研_SK2472は1682年を下限、入院棟A_D2層は1650-60年代、入院棟A_SK3は天和2（1682）年の火災を上限にし元禄16（1703）年の火災を下限としている。

入院棟A_SK1160_112は丁寧に磨かれたかわらけに、内曇りと金彩の寿を浮文している。このかわらけが慶事に用いられた事は「寿」の文字からも明らかである。入院棟A_SK1160はⅧd期（1850-60年代）の指標遺構で、上述した資料の遺構より大分時代は下るが、黒色、金彩という加飾の意味を考えるには興味深い資料である。

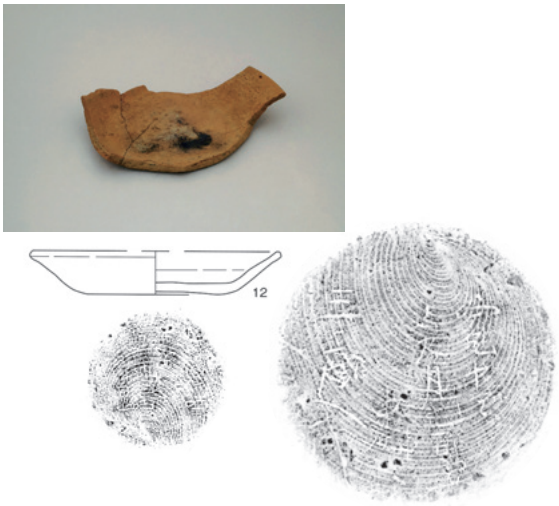
以上、内面黒色処理は1630年代以降、金彩は1650年代以降に現れる加飾であり、これらは全て精製かわらけに施されている。白色系かわらけは17世紀半ばを境に激減するが、白色系かわらけが減少する時期と精製かわらけが増加する時期が重なること、白色系かわらけに施された加飾が精製かわらけに移っていることから、白色系かわらけの担っていた機能が変化し、その一部が精製かわらけに転化されていったと考えることは、不自然ではないだろう。

まとめ

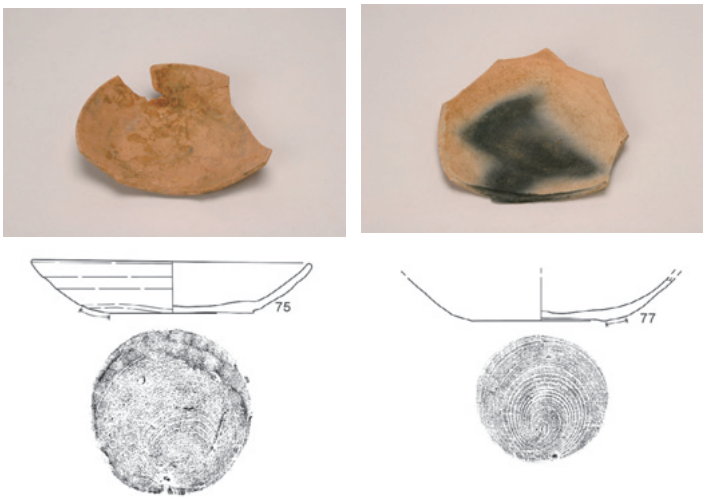
以上東大構内出土白色系かわらけの消長をみてきた。

白色系かわらけの消滅の理由として、一点は白色系かわらけが激減した1650年代は、江戸在地かわらけの供給が安定してきた時期とされていることである（落合1989）。国元からの搬入に頼らなくても、在地での供給が可能になってきたと考えられる。

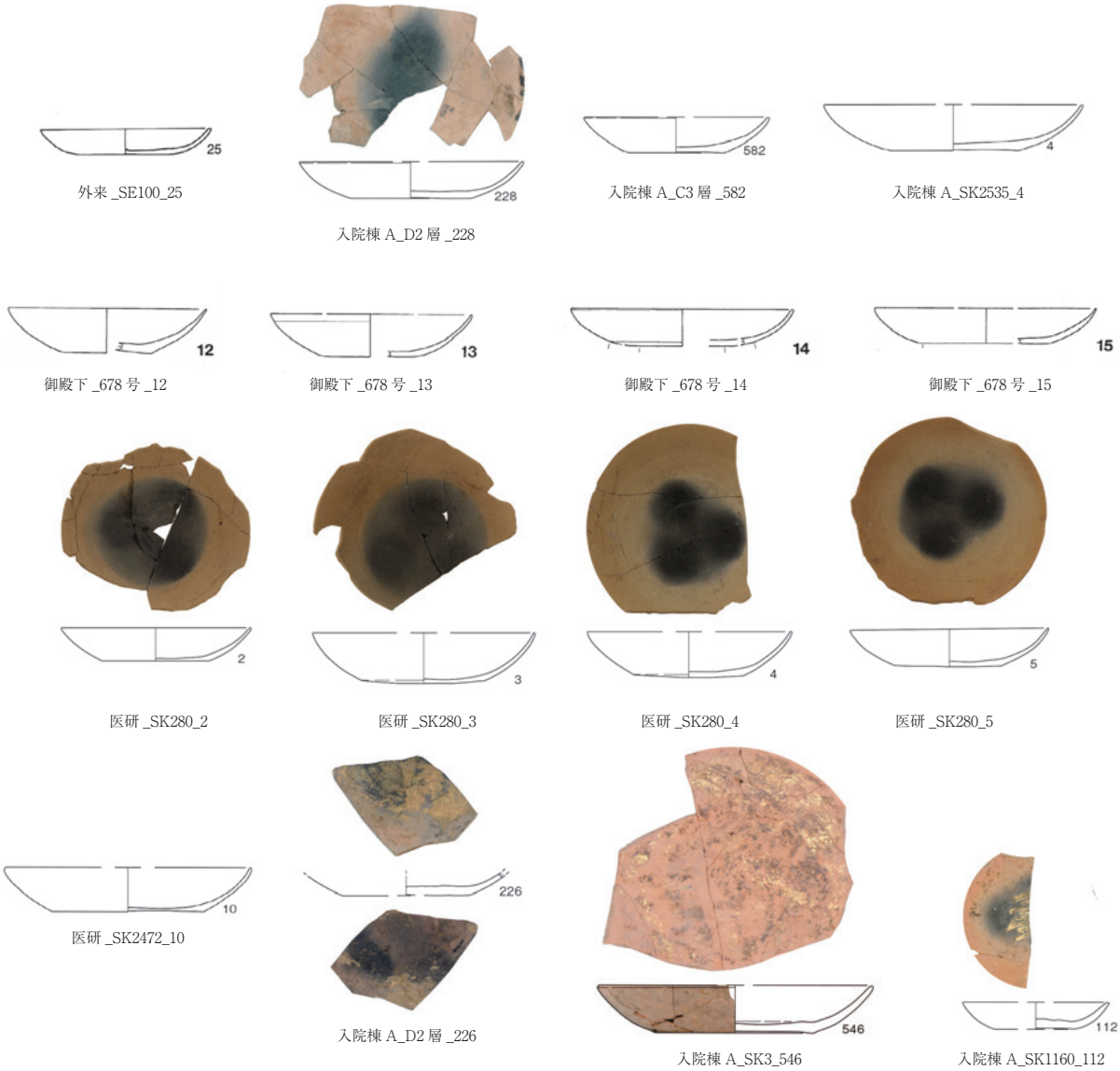
もう一点は儀礼の変化である。寛永の御成の後、1702年に5代将軍綱吉が本郷邸を訪れている。この元禄の御



11 図　医研 _SK4553 出土紀年銘かわらけ (S=1/4)



12 図　入院棟 A_SK2352 出土かわらけ (S=1/4)



13 図　内面黒色処理および金彩かわらけ (S=1/4)

成りでは、式三献の順序がかわるなど、儀礼に変化があったとされる（堀内 2000）。この頃には白色系かわらけが担っていた、武家儀礼における饗応の食膳具という役割に変化がみられる可能性が考えられる。

本郷構内遺跡の白色系かわらけの消長が、加賀藩特有の様相を示しているのか知るためには、他藩との比較が必要である。

謝辞

本稿の執筆にあたり下記の方々にさまざまなご教示をいただきました。記して感謝いたします。

小川望、梶原勝、小林謙一、滝川重徳、長佐古真也、西本右子、堀内秀樹、両角まり（敬称略）

【註】

(1) 分析を担当された長佐古氏から、①、②類のかわらけの中に、外面底裏に爪を立てたような窪みが、一定の間隔をあけて、径 5 ㎝程の円形を描くようにみられるものがあるとご指摘を受け、他のかわらけも調べたところ、同様の痕跡をもつ資料が多数観察された。

(2) 東京大学埋蔵文化財調査室 1990『山上会館・御殿下記念館地点』第二分冊　210 図

(3) 2020 年 1 月現在、報告書未刊行

(4) 組成表のカウントは、100 点以上の遺物が出土した遺構を対象としている。個体数のカウントの仕方は皿の場合、中央部が残存しているものを 1 個体とカウントする

(5) 東京大学埋蔵文化財調査室 1990『医学部附属病院地点』Ⅳ -114 図

(6) 東京大学埋蔵文化財調査室 2019『 医学部教育研究棟地点 報告編』Ⅳ -67 図

(7) 東京大学埋蔵文化財調査室 2016『医学部附属入院棟 A 地点　第 4 分冊』 Ⅳ -509 図

(8) 東京大学埋蔵文化財調査室 2016『医学部附属入院棟 A 地点　第 4 分冊』 Ⅳ -510 図

(9) 東京大学埋蔵文化財調査室 2016『医学部附属入院棟 A 地点　第 4 分冊』 Ⅳ -292 図

(10) 東京大学埋蔵文化財調査室 2016『医学部附属入院棟 A 地点　第 4 分冊』 Ⅳ -329 図

(11) 東京大学埋蔵文化財調査室 2016『医学部附属入院棟 A 地点　第 4 分冊』 Ⅳ -439 図

(12) 同上

(13) 同上

(14) 非在地産の灰色胎土精製かわらけに、内面底部黒色処理を施した資料は、肥前佐賀藩鍋島家屋敷遺跡にも出土例が報告されている（(株) 四門文化財事業部 2018）

【引用・参考文献】

江戸遺跡研究会 2012『江戸遺跡研究会第 25 回大会発表要旨－江戸在地系カワラケの成立－』

落合則子 1989「江戸今戸焼き史に関する一試論－江戸窯業変遷史における位置づけ－」『生活文化史』第 15 号

梶原勝 2009『近世・江戸における「手づくね型成形」カワラケの消長とその歴史的意義』『江戸在地土器の研究Ⅶ』江戸在地土器研究会

梶原勝 2010「近世・江戸における白色系カワラケの消長とその歴史的意義」『江戸遺跡研究会第 23 回大会発表要旨－都市江戸のやきもの－』江戸遺跡研究会

(株) 四門文化財事業部 2018『肥前佐賀藩鍋島家屋敷跡遺跡発掘調査報告書』

高知市教育委員会 2007「第 3 節 消費地遺跡出土の尾戸焼とその製品流通」『尾戸窯跡』

小林謙一 1998『17 世紀前葉の土師質皿　－丸の内三丁目遺跡 52 号土坑出土土師質皿の位置づけ－』『江戸在地土器の研究』江戸在地土器研究会

小林謙一 1999「金沢城石川門前土橋盛土 3 出土土器について」『江戸在地系土器研究会通信』 No.70・71　江戸在地系土器研究会

滝川重徳 1992「土師器皿について」『特別名勝兼六園（江戸町後推定地）発掘調査報告』石川県立埋蔵文化財センター

滝川重徳 2018「金沢城跡の土師器皿－ 16 世紀後半～ 17 世紀前半」『近世成立期の土器・陶磁器様相－カワラケを中心に－』（公財）石川県埋蔵文化財センター

滝川重徳 2019「金沢城跡・金沢城下の遺跡における土師器皿と陶磁器の様相」『北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相』（公財）石川県埋蔵文化財センター

東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』

東京大学埋蔵文化財調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室 1996『東京大学構内遺跡調査研究年報 1』

東京大学埋蔵文化財調査室 2005『医学部附属病院外来診療棟地点』

東京大学埋蔵文化財調査室 2019『東京大学本郷構内の遺跡 医学部教育研究棟地点 報告編』

東京大学埋蔵文化財調査室 2016「東京大学構内の遺跡出土陶磁器・土器分類見直しの経緯」『医学部附属病院入院棟 A 地点 報告編第 4 分冊』

堀内秀樹 2000「史料から見た御成と池遺構出土史料」『東京大学コレクションⅩ加賀殿再訪』東京大学総合研究博物館

宮崎勝美 1990「加賀藩本郷邸とその周辺」『東京大学本郷港内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点 第 3 分冊』

東京大学本郷構内遺跡出土かわらけ試料の蛍光 X 線分析による元素分析

* 丸山毅真、** 西本右子

1. 試料

用いた試料は東京大学本郷構内遺跡の 3 地点（中診、医研、入院棟 A）出土の計 35 試料である。表 1・2 に後述の金沢出土分を含めた試料の一覧とエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置による分析値を示す。なお、試料の詳細については、本紙「研究 12」を参照されたい。

2. 測定

測定には日立ハイテクサイエンス SEA5120A を使用し、測定径 ϕ 1.0 mm、真空条件下で測定した。測定部位は底面 5 点、凹凸や変色の少ない、できるだけ離れた位置で測定し、平均を求めた。測定元素は Na（原子番号 11）以降であり、定性分析で検出された元素 Mg, Al, Si, K, Ca, Ti, Fe について検量線法で定量した。結果は酸化物表記で表した。Fe のようにいくつかの酸化物の形態をとる元素もあるが Fe_2O_3 で代表しているため、総計に誤差が生じている場合もある。また Na より軽元素は結果に含まれない。また比較として用いた波長分散型蛍光 X 線分析装置はリガク ZXS Primus Ⅱである。

3. 結果

3－1 元素濃度

表 2 に中診（HHC）池出土 14 試料、医研（HIKN）SK4513 出土 10 試料及び SK4553 出土の 2 試料、入院棟 A（HW）SX2715 出土の 6 試料及び SD1601 出土の 1 試料の定量結果をそれぞれ示した。各表の値は 5 カ所の平均値とを示している。また表 3 の東 18 の試料は色の異なる部位がみられたため、赤色の部分と白色の部分でそれぞれ平均値を示した。赤色の部分は Fe が若干多く、白色の部分は Al, Si が若干多い。表 4 の東 29 も黒色部分と白色部分でそれぞれ平均値を示した。黒色部分は Fe が多く、白色部分は Al, Si が多い。また東 33 は大きな 2 片であったため、それぞれで平均値を示した。同一試料でも部位によって偏りがあることがわかる。

また我々は東大構内出土試料に加えて、1620-30 年代と推定される、金沢城跡　本丸附段（2004-1 地点）SK11 及び五十間長屋台下層Ⅵ面出土のかわらけ計 15 試料（石川県金沢城調査研究所保管）、特別名勝兼六園（江）第 3 遺構面出土のかわらけ 9 試料及び前田氏（長種系）屋敷跡出土のかわらけ 12 試料（石川県埋蔵文化財センター所蔵）、愛宕下遺跡出土のかわらけ 4 試料及び 18 世紀中葉、後葉と推定される溜池出土の燭台 17 試料（東京都埋蔵文化財センター保管）（長佐古 1996）についても同様の手法で分析を行っている。なお溜池出土試料の燭台は釉薬の部分を削り落として内部を測定している。以上全ての測定結果を主要成分である SiO_2 の含有量と次に多く含まれる Al_2O_3、またその次に多く含まれる Fe_2O_3 の含有量をそれぞれプロットした。図 1 は SiO_2 と Al_2O_3 の相関、図 2 は SiO_2 と Fe_2O_3 の相関を示した。医研（HKN）と入院棟 A（HW）において SK4513 と SX2715 では元素濃度の分布が異なることがわかる。

3－2　金箔痕跡他

金箔の痕跡があるとされる医研（HIKN）SK4516（東 27）と SK2416・3097（東 28）の元素分析結果を図 3 に示した。測定した 5 カ所においていずれも Au は定量下限以下であった。そのため SK4516 について 1mmΦ で Au のマッピング測定を行った。図 4 に結果を示した。Au が検出されている部分がある。SK2416・3097 については Au がどの部位でもほとんど検出されなかったため、マッピング測定は行わなかった。

3－3　測定手法の比較

これまでエネルギー分散型蛍光 X 線分析による結果を示してきた。試料形状が限定されるがさらに低元素まで測定できる波長分散型蛍光 X 線分析による結果と比較した。破片が測定できる試料についていずれも 1 mm Φの測定結果を示した。代表例として東 15（SK4513）の測定結果を図 5 に示した。これらの試料では測定値の有意差は観測されなかった。一部試料（東 20, 東 22, 東 23, 東 26）では 1％程度の Na が波長分散型でのみ測定された。

* 神奈川大学大学院　** 神奈川大学理学部

3−4　表面と内部との比較

破片の断面が測定できる一部試料（東 29，32，32，34）について断面の元素濃度の測定を行った。結果を図 6-1 から図 6-4 に示した。いずれの試料においても数％程度の差異はみられることがわかった。

3−5　試料表面での元素分布

破片試料（東 29 破片 2 個，34 破片 1 個）について表面の元素分布を測定した。Si, Al, Fe, K, Mg, Ti, Fe についてマッピング測定を行った。3 測定結果共に Si, Al, Mg, K の元素分布は類似していること、Fe が多い部分は Ti が少なく、Fe が少ない部分は Ti が多いといった Fe と Ti は相補的な分布にあることがわかった。この結果は一部断面について行ったマッピング測定においても同様であった。

4. まとめ

東京大学本郷構内遺跡の計 35 試料について蛍光 X 線分析による元素濃度の測定を行った。測定部位による差異、表面と内部の差異はみられるものの、主要元素の Si と Al や Fe の濃度の相関などから濃度分布が分かれることがわかり、元素濃度から胎土の情報を得ることができ、産地推定が行える可能性が示されたと考える。この結果は形態的考察とも一致するものであった。さらに表面や断面の元素分布から Si, Al, Mg, K の元素分布が類似することがわかり、作成方法との関連も考えられた。

5. 謝辞

本研究は東京大学埋蔵文化財調査室堀内秀樹博士及び小林照子氏、東京都埋蔵文化財センター長佐古真也氏との共同研究として実施しました。深謝いたします。

【引用・参考文献】

長佐古真也，蛍光 X 線分析法による焼塩壺胎土の元素組成分析，「溜池遺跡　第 1 分冊」（1996）都内遺跡調査会

1 表　試料の一覧　（東京大学本郷構内遺跡：17 世紀第二四半期）

#	遺跡名	出土地点	図番号	所蔵略	口径	器高	型式	推定年代	記号
TKAP001	金沢城跡	五十間長屋台下層Ⅵ面SD01	P313	金研	11.6	2.1	C2 Ⅰ 1a？	1620年前後	金01
TKAP002	金沢城跡	五十間長屋台下層Ⅵ面SD01	P315	金研	12.0	2.6	C2 Ⅰ 1a	1620年前後	金02
TKAP003	金沢城跡	五十間長屋台下層Ⅵ面SD01	P318	金研	12.8	2.4	C2 Ⅰ 1a	1620年前後	金03
TKAP004	金沢城跡	五十間長屋台下層Ⅵ面SD01	P319	金研	13.0	2.0	C2 Ⅰ 1a	1620年前後	金04
TKAP005	金沢城跡	五十間長屋台下層Ⅵ面SD01	—	金研	—	—	C2 Ⅰ 1a	1620年前後	金05
TKAP006	金沢城跡	本丸附段(2004-1地点）SK11	—	金研	—	—	C2 Ⅰ 1a	1630年前後	金06
TKAP007	金沢城跡	本丸附段(2004-1地点）SK11	—	金研	—	—	C2 Ⅰ 1a	1630年前後	金07
TKAP008	金沢城跡	本丸附段(2004-1地点）SK11	—	金研	—	—	C2 Ⅰ 1a	1630年前後	金08
TKAP009	金沢城跡	本丸附段(2004-1地点）SK11	—	金研	—	—	C2 Ⅰ 1a	1630年前後	金09
TKAP010	金沢城跡	本丸附段(2004-1地点）SK11	—	金研	—	—	C2 Ⅰ 1a	1630年前後	金10
TKAP011	金沢城跡	本丸附段(2004-1地点）SK11	—	金研	—	—	C2 Ⅰ 1b	1630年前後	金11
TKAP012	金沢城跡	本丸附段(2004-1地点）SK11	—	金研	—	—	C2 Ⅰ 1b	1630年前後	金12
TKAP013	金沢城跡	本丸附段(2004-1地点）SK11	—	金研	—	—	C2 Ⅰ 1b	1630年前後	金13
TKAP014	金沢城跡	本丸附段(2004-1地点）SK11	—	金研	—	—	C2 Ⅰ 1b	1630年前後	金14
TKAP015	金沢城跡	本丸附段(2004-1地点）SK11	—	金研	—	—	C2 Ⅰ 1b	1630年前後	金15
TKAP016	特別名勝兼六園(江)	第3遺構面	第24図6	石埋	11.0	2.5	Ⅱ	1620年代	江01
TKAP017	特別名勝兼六園(江)	第3遺構面	第24図28	石埋	13.4	2.7	Ⅱ	1620年代	江02
TKAP018	特別名勝兼六園(江)	第3遺構面	第24図25	石埋	12.6	3.0	Ⅱ	1620年代	江03
TKAP019	特別名勝兼六園(江)	第3遺構面	第24図20	石埋	11.4	2.5	Ⅱ	1620年代	江04
TKAP020	特別名勝兼六園(江)	第3遺構面	第24図5	石埋	11.2	2.2	C2 Ⅰ 1a	1620年代	江05
TKAP021	特別名勝兼六園(江)	第3遺構面	第24図35	石埋	14.4	2.1	C2 Ⅰ 1a	1620年代	江06
TKAP022	特別名勝兼六園(江)	第3遺構面	第24図18	石埋	11.6	2.2	C2 Ⅰ 1a	1620年代	江07
TKAP023	特別名勝兼六園(江)	第3遺構面	第24図11	石埋	9.8	2.0	C2 Ⅰ 1a	1620年代	江08
TKAP024	特別名勝兼六園(江)	第3遺構面	第24図30	石埋	12.2	2.4	C2 Ⅰ 1a	1620年代	江09
TKAP025	前田氏(長種系)屋敷跡	SX12下部	第41図197	石埋	13.6	2.4	C2 Ⅰ 1a	1630年代	前01
TKAP026	前田氏(長種系)屋敷跡	SX12下部	第41図193	石埋	12.5	2.8	C2 Ⅰ 1a	1630年代	前02
TKAP027	前田氏(長種系)屋敷跡	SX12下部	第41図194	石埋	12.5	2.3	C2 Ⅰ 1a	1630年代	前03
TKAP028	前田氏(長種系)屋敷跡	SX05	第41図246	石埋	10.2	1.9	C2 Ⅰ 1a	1630年代	前04
TKAP029	前田氏(長種系)屋敷跡	SX03	第41図287	石埋	10.0	1.9	C2 Ⅰ 1a	1630年代	前05
TKAP030	前田氏(長種系)屋敷跡	SX12上部	第41図192	石埋	10.0	2.0	C2 Ⅰ 1b	1630年代	前06
TKAP031	前田氏(長種系)屋敷跡	SX12下部	第41図198	石埋	14.2	2.6	C2 Ⅰ 1b	1630年代	前07
TKAP032	前田氏(長種系)屋敷跡	SX12下部	第41図201	石埋	15.7	2.8	C2 Ⅰ 1b	1630年代	前08
TKAP033	前田氏(長種系)屋敷跡	SX12	第41図196	石埋	13.2	2.8	C2 Ⅰ 1b	1630年代	前09
TKAP034	前田氏(長種系)屋敷跡	SX03	第41図296	石埋	16.2	2.4	C2 Ⅰ 1b	1630年代	前10
TKAP035	前田氏(長種系)屋敷跡	SX12下部	—	石埋	—	—	C2 Ⅰ 1b	1630年代	前11
TKAP036	前田氏(長種系)屋敷跡	SX12下部	—	石埋	—	—	C2 Ⅰ 1b	1630年代	前12
TKAP037	愛宕下遺跡		—	東埋	10.9	2.1	(江在系)	1620年代	愛01
TKAP038	愛宕下遺跡		—	東埋	11.3	2.4	(江在系)	1620年代	愛02
TKAP039	愛宕下遺跡		—	東埋	11.9	2.2	(江在系)	1620年代	愛03
TKAP040	愛宕下遺跡		—	東埋	9.2	2.1	(江在系)	1620年代	愛04
TKAP041	溜池遺跡	B区58号	第1図 1	東埋	12.3	2.5	A　Ⅱ	18世紀中葉	溜01
TKAP042	溜池遺跡	C区8号	第1図 2	東埋	11.6	2.1	A　Ⅱ-2	18世紀中葉	溜02
TKAP043	溜池遺跡	B区53号	第1図 3	東埋	10.0	—	A　Ⅱ-2	18世紀中葉	溜03
TKAP044	溜池遺跡	B区53号	第1図 4	東埋	—	—	A　Ⅱ-2	18世紀中葉	溜04
TKAP045	溜池遺跡	B区52号	第1図 5	東埋	10.1	2.1	A　Ⅲ	18世紀中葉	溜05
TKAP046	溜池遺跡	B区56号	第1図 6	東埋	9.4	2.1	A　Ⅳ	18世紀中葉	溜06
TKAP047	溜池遺跡	B区8号	第1図 7	東埋	9.6	1.8	A　Ⅳ	18世紀中葉	溜07
TKAP048	溜池遺跡	C区4号	第1図 8	東埋	9.2	1.5	B　Ⅲ	18世紀後葉	溜08
TKAP049	溜池遺跡	B区8号	第1図 9	東埋	8.5	—	B　Ⅳ	18世紀後葉	溜09
TKAP050	溜池遺跡	B区8号	第1図 10	東埋	7.9	1.6	B　Ⅳ・Ⅴ	18世紀後葉	溜10
TKAP051	溜池遺跡	B区8号	第1図 11	東埋	8.3	1.9	B　Ⅳ・Ⅴ	18世紀後葉	溜11
TKAP052	溜池遺跡	C区4号	第1図 12	東埋	8.2	2.0	B　Ⅴ-1	18世紀後葉	溜12
TKAP053	溜池遺跡	C区4号	第1図 13	東埋	8.2	7.5	B　Ⅴ-1	18世紀後葉	溜13
TKAP054	溜池遺跡	C区4号	第1図 14	東埋	8.2	7.8	B　Ⅴ-1	18世紀後葉	溜14
TKAP055	溜池遺跡	B区7号	第1図 15	東埋	7.9	1.7	B　Ⅴ-1	18世紀後葉	溜15
TKAP056	溜池遺跡	C区29号	第1図 16	東埋	8.0	1.9	B　Ⅴ-1	18世紀後葉	溜16
TKAP057	溜池遺跡	B区56号	第1図 17	東埋	13.5	2.9	C　Ⅳ	18世紀後葉	溜17
TKAP058	東京大学本郷構内遺跡	中診（HHC）　池	Ⅳ-114図 7	東大	11.0	2.5		17世紀2Q	東01
TKAP059	東京大学本郷構内遺跡	中診（HHC）　池	Ⅳ-114図 9	東大	11.0	2.5		17世紀2Q	東02
TKAP060	東京大学本郷構内遺跡	中診（HHC）　池	Ⅳ-114図12	東大	11.0	2.7		17世紀2Q	東03
TKAP061	東京大学本郷構内遺跡	中診（HHC）　池	Ⅳ-114図15	東大	11.2	2.4		17世紀2Q	東04
TKAP062	東京大学本郷構内遺跡	中診（HHC）　池	Ⅳ-114図17	東大	11.4	2.5		17世紀2Q	東05
TKAP063	東京大学本郷構内遺跡	中診（HHC）　池	Ⅳ-114図19	東大	11.3	2.4		17世紀2Q	東06
TKAP064	東京大学本郷構内遺跡	中診（HHC）　池	Ⅳ-114図21	東大	11.4	2.5		17世紀2Q	東07
TKAP065	東京大学本郷構内遺跡	中診（HHC）　池	Ⅳ-114図22	東大	11.2	2.5		17世紀2Q	東08
TKAP066	東京大学本郷構内遺跡	中診（HHC）　池	Ⅳ-114図23	東大	11.2	3.2		17世紀2Q	東09
TKAP067	東京大学本郷構内遺跡	中診（HHC）　池	Ⅳ-114図25	東大	12.0	2.5		17世紀2Q	東10
TKAP068	東京大学本郷構内遺跡	中診（HHC）　池	Ⅳ-114図35	東大	14.0	2.6		17世紀2Q	東11
TKAP069	東京大学本郷構内遺跡	中診（HHC）　池	Ⅳ-114図36	東大	14.4	2.8		17世紀2Q	東12
TKAP070	東京大学本郷構内遺跡	中診（HHC）　池	Ⅳ-114図37	東大	15.0	2.6		17世紀2Q	東13
TKAP071	東京大学本郷構内遺跡	中診（HHC）　池	Ⅳ-114図38	東大	16.6	2.8		17世紀2Q	東14
TKAP072	東京大学本郷構内遺跡	医研（HIKN）　SK4513	Ⅳ- 66図 2	東大	14.2	2.2		17世紀2Q	東15
TKAP073	東京大学本郷構内遺跡	医研（HIKN）　SK4513	Ⅳ- 66図 3	東大	14.1	2.6		17世紀2Q	東16
TKAP074	東京大学本郷構内遺跡	医研（HIKN）　SK4513	Ⅳ- 66図 4	東大	13.7	2.6		17世紀2Q	東17
TKAP075	東京大学本郷構内遺跡	医研（HIKN）　SK4513	Ⅳ- 66図 5	東大	14.0	2.1		17世紀2Q	東18
TKAP076	東京大学本郷構内遺跡	医研（HIKN）　SK4513	Ⅳ- 66図 6	東大	14.4	2.8		17世紀2Q	東19
TKAP077	東京大学本郷構内遺跡	医研（HIKN）　SK4513	Ⅳ- 66図 7	東大	15.0	2.6		17世紀2Q	東20
TKAP078	東京大学本郷構内遺跡	医研（HIKN）　SK4513	Ⅳ- 66図 8	東大	14.4	2.3		17世紀2Q	東21
TKAP079	東京大学本郷構内遺跡	医研（HIKN）　SK4513	Ⅳ- 66図 9	東大	15.0	3.4		17世紀2Q	東22
TKAP080	東京大学本郷構内遺跡	医研（HIKN）　SK4513	Ⅳ- 66図10	東大	15.0	2.7		17世紀2Q	東23
TKAP081	東京大学本郷構内遺跡	医研（HIKN）　SK4513	Ⅳ- 66図11	東大	13.6	3.1		17世紀2Q	東24
TKAP082	東京大学本郷構内遺跡	医研（HIKN）　SK4553	Ⅳ- 67図 9	東大	11.9	2.7		17世紀2Q	東25
TKAP083	東京大学本郷構内遺跡	医研（HIKN）　SK4553	Ⅳ- 67図11	東大	15.0	2.8		17世紀2Q	東26
TKAP084	東京大学本郷構内遺跡	医研（HIKN）　SK2416・3079	Ⅳ- 54図 9	東大	12.0	2.3		17世紀2Q	東27
TKAP085	東京大学本郷構内遺跡	医研（HIKN）　SK4516	—	東大	—	—		17世紀2Q	東28
TKAP086	東京大学本郷構内遺跡	入院棟A（HW）　SX2715	Ⅳ-519図19	東大	11.4	2.4		17世紀2Q	東29
TKAP087	東京大学本郷構内遺跡	入院棟A（HW）　SX2715	Ⅳ-519図21	東大	13.5	2.6		17世紀2Q	東30
TKAP088	東京大学本郷構内遺跡	入院棟A（HW）　SX2715	Ⅳ-519図22	東大	13.4	2.5		17世紀2Q	東31
TKAP089	東京大学本郷構内遺跡	入院棟A（HW）　SX2715	Ⅳ-519図25	東大	12.0	2.4		17世紀2Q	東32
TKAP090	東京大学本郷構内遺跡	入院棟A（HW）　SX2715	Ⅳ-519図27	東大	10.8	2.0		17世紀2Q	東33
TKAP091	東京大学本郷構内遺跡	入院棟A（HW）　SX2715	Ⅳ-519図29	東大	8.7	1.8		17世紀2Q	東34
TKAP092	東京大学本郷構内遺跡	入院棟A（HW）　SD1601	Ⅳ-460図 9	東大	13.8	2.4		17世紀2Q	東35

２表　分析値一覧

記号	SiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	TiO_2	K_2O	MgO	CaO	Sum
東01	59.2	18.4	5.55	0.85	1.84	0.96	0.64	87.4
	4.70	8.90	5.40	23.7	12.4	27.2	19.3	5.80
東02	61.1	18.2	5.39	1.13	2.13	0.57	0.89	89.5
	2.00	2.90	3.40	23.7	9.40	30.1	13.2	2.70
東03	60.6	18.5	5.87	0.80	1.98	0.78	0.61	89.1
	2.00	5.80	3.90	18.8	11.4	29.5	25.9	3.00
東04	60.8	18.0	5.42	0.81	1.89	1.04	0.68	88.6
	2.60	6.70	4.30	9.80	5.90	19.4	14.5	3.40
東05	60.0	17.7	5.56	0.77	1.99	0.96	1.27	88.2
	1.80	4.10	6.00	8.20	5.00	27.8	12.8	1.70
東06	61.6	18.3	5.68	0.94	1.90	1.18	1.02	90.6
	2.90	3.40	6.40	15.9	5.10	26.1	15.7	3.00
東07	61.3	18.2	5.30	1.13	2.14	0.40	1.08	89.5
	3.20	3.60	7.00	14.5	9.20	49.9	16.9	2.20
東08	59.3	18.7	5.91	0.81	1.86	0.99	0.13	87.6
	5.00	2.50	5.10	11.0	11.3	28.5	36.9	3.80
東09	59.8	16.3	6.08	0.93	1.98	0.28	0.61	86.1
	1.90	8.00	5.80	8.80	6.30	60.9	13.1	2.80
東10	61.0	18.7	5.80	0.84	1.87	1.24	0.75	90.2
	4.00	8.20	2.80	8.80	9.90	13.1	28.5	5.10
東11	65.6	20.5	4.69	0.95	2.38	1.99	N.D.	96.1
	3.40	4.40	10.2	8.00	5.40	9.50	—	3.30
東12	65.8	17.8	3.50	0.96	2.52	0.11	0.32	90.9
	1.50	3.50	12.7	8.00	5.10	384	38.7	2.20
東13	66.6	19.5	3.85	0.87	2.36	1.10	N.D.	94.2
	3.80	9.50	7.10	17.4	9.70	41.5	—	5.30
東14	60.1	18.8	5.44	0.79	2.14	1.20	N.D.	88.4
	3.80	7.30	2.80	19.0	6.80	27.4	—	4.80
東15	64.6	19.0	4.19	0.95	3.25	1.04	N.D.	92.9
	2.80	6.40	7.70	13.7	19.6	32.6	—	4.20
東16	65.7	19.6	4.34	0.87	2.33	0.95	N.D.	93.8
	2.70	7.10	10.1	10.7	5.50	42.4	—	3.60
東17	63.4	18.4	4.33	0.87	2.14	0.78	N.D.	89.9
	2.70	2.10	2.80	7.00	5.40	28.0	—	1.90
東18赤	63.9	18.3	4.12	0.81	2.17	0.83	N.D.	90.2
	3.10	6.20	7.30	16.8	7.20	47.4	—	3.70
東18白	65.4	19.1	3.69	0.87	2.29	0.69	N.D.	92.1
	3.40	6.70	6.20	17.3	9.60	69.4	—	4.30
東19	65.9	18.3	4.12	0.81	2.17	0.83	N.D.	92.1
	2.90	6.20	7.30	16.8	7.20	47.4	—	3.70
東20	65.9	19.3	3.95	0.87	2.65	0.93	N.D.	93.6
	2.90	6.20	2.50	12.6	10.2	17.3	—	3.60
東21	65.8	17.2	3.15	0.82	2.32	0.25	0.28	89.8
	2.60	5.00	16.1	20.9	5.70	73.7	15.0	3.50
東22	65.9	17.7	3.34	0.81	2.25	0.94	0.29	91.3
	3.50	5.80	6.60	18.9	10.2	133	42.8	4.00

記号	SiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	TiO_2	K_2O	MgO	CaO	Sum
東23	64.2	16.9	3.90	0.86	2.18	0.42	0.47	89.0
	1.30	2.50	6.40	15.7	2.80	23.0	19.2	1.20
東24	65.0	19.3	3.92	0.93	2.29	0.60	N.D.	92.0
	2.90	4.10	4.70	9.00	7.60	54.8	—	3.40
東25	63.1	16.8	4.97	0.83	2.01	0.79	1.06	89.6
	2.50	5.50	5.40	5.10	7.80	38.8	12.9	3.30
東26	65.3	15.5	3.31	0.66	2.86	0.37	1.09	89.1
	4.30	10.1	6.70	12.6	6.90	74.4	9.00	4.80
東27	59.7	18.2	5.26	0.94	2.35	1.02	N.D.	87.4
	4.17	7.32	24.6	13.8	6.94	38.9	—	3.93
東28	57.7	14.8	8.22	1.02	1.92	1.11	0.54	85.2
	3.55	6.58	10.2	8.22	5.09	44.0	7.11	3.41
東29黒	48.2	9.1	13.04	0.38	0.94	N.D.	0.71	72.4
	0.80	1.60	4.50	28.6	5.80	—	22.9	1.00
東29白	54.8	12.2	9.74	0.50	1.29	N.D.	0.80	79.3
	4.00	7.90	5.80	14.0	12.9	—	28.9	3.70
東30	55.2	13.6	10.06	0.63	1.45	1.19	1.02	83.1
	3.70	6.90	2.20	19.8	7.90	25.0	8.90	4.40
東31	54.9	13.8	10.53	0.83	1.36	1.27	0.64	83.3
	2.60	5.90	7.00	34.6	6.30	30.8	12.6	3.40
東32	57.2	15.0	9.43	1.09	1.67	1.06	0.51	85.9
	2.70	5.50	7.40	6.80	6.40	28.3	27.4	2.90
東33a	55.7	13.9	8.97	0.81	1.30	0.72	0.64	82.1
	5.00	11.0	15.2	13.5	9.30	65.5	24.6	5.20
東33b	61.3	16.6	7.76	0.85	1.69	1.49	0.81	90.3
	2.80	5.40	9.10	16.1	13.5	16.2	13.5	3.40
東34	56.4	14.0	9.67	0.87	1.44	1.21	0.83	84.4
	3.80	6.60	7.10	14.2	8.70	26.6	16.1	3.90
東35	57.2	18.2	7.32	1.22	2.44	1.29	0.05	87.7
	1.70	2.50	5.60	5.60	8.40	16.4	180	1.70

上段；濃度／mass%　下段；RSD／%

記号	SiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	TiO_2	K_2O	MgO	CaO	Sum
金01	60.7	16.9	4.84	0.93	1.71	0.71	1.40	87.2
	2.04	3.15	4.55	11.4	13.9	33.9	36.3	2.36
金02	64.5	17.0	3.17	1.33	2.37	0.34	0.90	89.6
	1.14	2.90	5.40	6.79	7.43	97.4	1.99	1.52
金03	62.0	16.7	3.99	1.14	2.03	0.39	1.35	87.6
	2.87	6.67	10.3	13.2	2.12	145	25.2	3.45
金04	62.2	16.2	5.23	1.13	1.92	0.45	0.87	88.0
	1.76	6.14	10.2	14.8	8.80	51.6	21.2	3.15
金05	64.3	18.5	3.53	1.27	2.08	0.89	1.27	91.9
	1.87	4.90	12.2	8.02	5.66	37.4	21.1	2.41
金06	66.0	16.8	3.36	0.96	2.75	0.34	0.96	91.2
	3.03	4.65	9.52	7.09	11.6	—	11.9	3.05
金07	65.5	16.4	4.99	0.98	3.31	0.44	0.38	92.0
	2.88	4.84	1.85	16.0	6.27	62.4	26.3	3.51

記号	SiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	TiO_2	K_2O	MgO	CaO	Sum
金08	64.9	16.8	3.53	0.88	2.34	0.52	0.84	89.8
	2.00	7.25	4.34	23.6	6.00	48.0	22.2	3.48
金09	64.6	16.0	3.45	0.90	2.41	0.07	0.61	88.0
	4.01	5.78	5.36	29.7	7.78	137	18.3	4.40
金10	65.1	16.8	3.83	0.95	2.24	0.51	0.83	90.2
	2.60	8.06	9.27	11.2	5.98	45.8	16.9	3.38
金11	65.0	3.4	3.43	1.01	2.62	5.33	0.77	81.5
	2.43	3.40	2.95	8.61	3.95	64.2	29.2	2.95
金12	65.4	7.3	3.46	1.02	2.55	0.34	0.83	81.0
	0.95	3.30	1.21	5.82	2.37	34.6	14.4	1.21
金13	67.0	18.1	3.28	1.04	2.53	0.46	0.44	92.9
	3.77	7.32	12.8	9.36	8.16	57.2	32.1	3.90
金14	65.8	15.8	3.25	0.95	2.52	0.11	0.86	89.2
	2.02	4.36	5.44	13.9	7.32	126	21.1	2.53
金15	67.4	17.8	2.87	0.96	2.43	0.45	0.55	92.5
	3.00	6.05	7.79	15.9	5.90	47.3	16.0	3.18
江01	63.2	18.6	4.10	1.33	2.06	0.93	0.51	90.7
	3.28	6.25	10.2	20.2	6.80	20.4	52.9	3.95
江02	60.0	16.7	4.07	1.50	3.30	0.96	0.96	87.5
	4.08	7.07	10.2	28.5	9.52	31.2	18.9	2.68
江03	61.8	17.5	3.85	1.24	1.85	0.61	0.90	87.8
	3.36	4.41	6.56	20.5	8.38	42.7	22.3	3.54
江04	64.2	17.1	3.28	1.44	2.18	0.51	0.42	89.2
	2.40	8.05	6.25	12.8	8.22	70.3	27.9	4.31
江05	60.3	17.3	5.14	1.12	2.45	0.83	0.55	87.8
	4.38	7.67	2.87	12.2	11.4	24.1	25.4	5.39
江06	61.4	16.5	5.34	0.99	2.01	0.84	0.62	87.7
	3.20	6.31	5.66	9.53	6.04	31.3	39.2	3.74
江07	60.7	18.4	4.57	1.24	1.91	0.71	0.56	88.0
	2.30	4.45	6.31	9.21	6.03	23.2	30.2	2.97
江08	60.8	16.1	5.27	1.18	1.99	0.40	0.57	86.3
	1.44	4.05	5.02	5.49	6.75	51.9	17.6	1.24
江09	61.3	16.3	5.25	1.18	2.15	0.52	0.66	87.4
	1.91	5.10	1.08	10.9	3.22	60.1	17.2	2.20
前01	64.3	17.8	4.22	1.51	2.91	0.29	0.57	91.6
	1.11	1.55	7.56	6.91	5.49	38.9	71.9	1.37
前02	65.4	18.0	3.59	1.44	2.32	0.23	0.42	91.4
	1.62	3.07	3.56	5.44	5.67	75.4	47.9	1.95
前03	65.6	17.3	3.64	1.30	2.92	0.39	0.38	91.6
	3.03	10.1	8.64	9.81	9.50	84.0	97.3	3.91
前04	62.3	15.5	5.65	0.80	1.98	0.57	1.72	88.5
	2.06	3.67	5.38	15.9	7.74	34.11	20.0	1.96
前05	61.1	16.2	5.22	1.11	1.98	0.42	0.56	86.6
	3.92	6.16	2.90	13.0	11.77	54.5	8.06	4.53
前06	60.8	17.8	5.57	1.34	1.87	1.02	0.08	88.5
	2.34	4.83	8.52	8.78	3.58	26.9	44.5	4.04
前07	63.8	17.3	3.77	1.35	2.36	0.29	0.33	89.3
	4.31	9.26	22.7	8.36	6.52	102	44.3	4.52

記号	SiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	TiO_2	K_2O	MgO	CaO	Sum
前08	60.0	16.4	5.66	1.49	1.95	0.39	0.79	86.7
	2.43	5.13	10.5	31.1	5.68	4.06	20.0	3.16
前09	56.5	15.5	6.49	1.07	1.91	0.53	0.05	82.1
	2.44	6.04	7.18	14.0	1.90	17.5	40.9	2.51
前10	55.8	14.7	6.75	1.25	1.80	0.28	0.13	80.7
	7.84	12.6	15.5	9.24	11.0	—	42.45	7.29
前11	64.4	15.5	4.06	1.05	2.70	0.32	0.25	88.3
	2.30	6.29	5.43	15.6	6.58	61.9	72.9	2.78
前12	61.1	16.4	5.88	1.23	2.08	0.30	0.65	87.6
	2.70	6.61	6.32	18.2	7.24	99.5	55.6	3.74
愛01	46.1	12.0	9.73	1.54	1.69	2.30	1.83	75.1
	6.65	6.82	10.6	20.8	9.72	10.6	15.2	4.87
愛02	47.7	13.1	8.60	1.47	1.62	2.59	2.13	77.2
	6.48	5.87	5.84	12.9	9.60	4.75	5.47	5.87
愛03	49.8	13.2	7.72	1.26	1.72	2.55	1.79	78.0
	4.57	7.60	17.6	13.6	5.36	18.7	6.79	1.05
愛04	49.5	14.3	8.33	1.41	1.84	3.13	1.68	80.2
	2.42	5.08	9.67	4.32	5.96	5.93	8.26	2.96
溜01	53.5	11.2	10.68	0.50	1.30	0.47	0.64	78.3
	6.49	14.3	20.6	27.5	16.1	83.9	13.7	4.99
溜02	51.0	10.5	10.86	0.51	1.26	0.37	1.17	75.6
	5.44	9.15	13.3	11.0	7.61	70.0	26.1	1.65
溜03	49.9	9.0	9.59	0.44	1.63	0.29	2.30	73.1
	3.14	9.45	6.86	23.9	8.14	69.3	24.7	3.84
溜04	51.4	9.2	8.57	0.52	1.65	0.36	2.99	74.6
	5.29	10.9	15.4	45.4	7.84	70.2	26.7	4.95
溜05	52.1	11.6	10.52	0.49	1.28	1.30	1.72	79.0
	5.26	10.45	7.26	13.7	11.0	15.6	39.5	6.33
溜06	55.8	12.4	10.19	0.55	1.39	0.87	0.61	81.8
	2.07	3.79	14.3	12.6	6.13	38.0	16.9	1.65
溜07	53.7	11.1	10.39	0.50	1.26	0.54	0.94	78.5
	2.56	4.47	12.2	12.5	3.27	37.7	40.6	3.06
溜08	59.0	15.3	9.38	0.67	1.72	1.60	1.11	88.7
	2.39	4.06	4.44	19.6	4.98	14.1	9.36	3.11
溜09	55.4	12.8	11.97	0.78	1.76	1.16	0.93	84.8
	1.5	4.0	3.42	15.4	4.00	8.24	8.51	1.59
溜11	56.0	13.2	9.43	0.55	1.60	1.20	0.83	82.8
	2.21	5.59	14.69	13.4	9.41	23.3	12.6	3.60
溜14	58.3	13.2	10.39	0.84	1.62	1.31	0.77	86.4
	1.61	2.58	8.40	31.5	3.49	15.0	11.8	1.61
溜15	57.2	13.2	10.60	0.74	1.70	1.06	1.28	85.7
	2.22	3.16	3.22	9.04	4.34	20.3	15.0	2.15
溜16	57.9	12.6	10.15	0.55	1.46	1.04	0.75	84.5
	2.07	4.49	3.85	14.8	6.58	28.0	16.9	2.71
溜17	56.5	13.6	7.63	0.59	1.61	1.20	1.14	82.3
	3.10	6.40	7.63	15.0	7.53	20.5	15.2	3.19

上段；濃度／mass%　下段；RSD／%

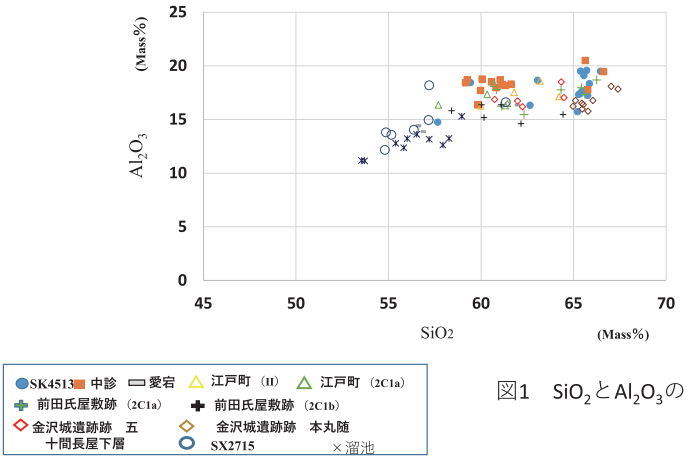


図1　SiO_2とAl_2O_3の含有量の相関

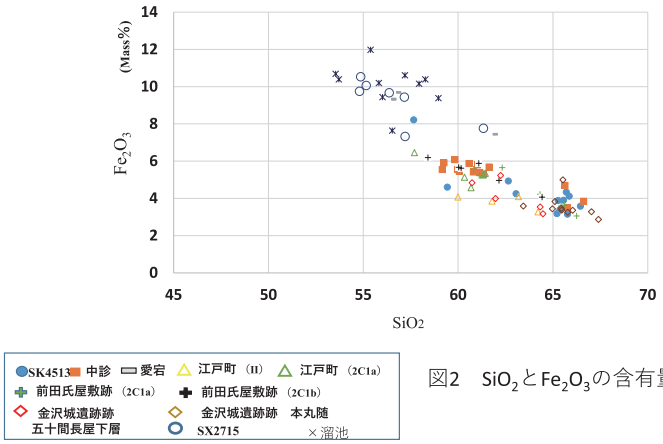


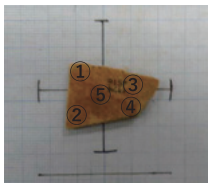
図2　SiO_2とFe_2O_3の含有量の相関

2416-9

単位 :(mass%)

	MgO	Al2O3	SiO2	K2O	CaO	TiO2	Fe2O3	総計
①	1.57	15.44	59.94	2.02	0.57	1.16	7.45	88.15
②	0.89	14.50	57.55	1.89	0.58	1.08	7.56	84.06
③	1.38	15.16	58.66	1.93	0.51	0.99	8.37	86.99
④	0.36	13.17	54.41	1.76	0.53	0.98	9.55	80.76
⑤	1.34	15.50	57.72	1.97	0.49	0.89	8.15	86.07

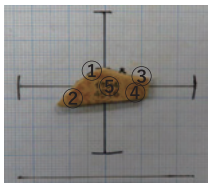
図3－1　2416－9の写真と測定結果



4516 a

単位 :(mass%)

	MgO	Al_2O_3	SiO2	K2O	CaO	TiO2	Fe2O3	総計
①	1.23	18.88	60.88	2.36	-	0.93	4.09	88.35
②	0.82	17.14	57.52	2.13	-	0.78	5.77	84.02
③	1.06	18.53	61.95	2.57	-	1.14	5.90	91.10
④	1.50	19.86	61.49	2.42	-	0.88	3.74	89.79
⑤	0.47	16.57	56.49	2.28	-	0.97	6.79	83.46



4516 b

単位 :(mass%)

	MgO	Al_2O_3	SiO2	K2O	CaO	TiO2	Fe2O3	総計
①	1.14	19.84	59.84	2.32	-	0.75	3.65	87.40
②	0.84	17.56	58.33	2.25	-	0.83	4.07	83.81
③	1.57	19.81	63.11	2.62	-	0.92	2.75	90.84
④	1.04	18.95	58.30	2.35	-	0.93	4.54	85.99
⑤	0.74	17.29	56.36	2.35	-	0.88	4.74	82.25

図3－2　4516a,bの写真と測定結果

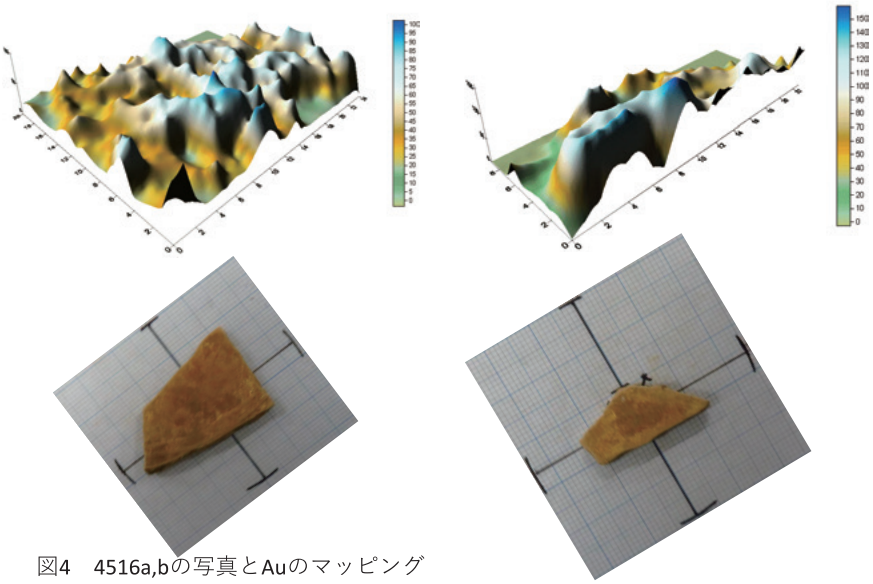
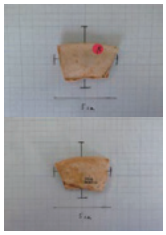
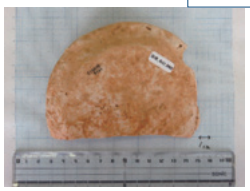


図4　4516a,bの写真とAuのマッピング

図5－1　SK 4513-2

図5－2　SK 4513-2　**EDS**





SK 4513-2-1

	平均値	%RSD
NaO	-	-
MgO	**2.10**	29.43
Al_2O_3	**19.76**	8.19
SiO_2	**63.92**	4.03
K_2O	**2.61**	13.71
CaO	-	-
TiO_2	**0.94**	14.47
Fe_2O_3	**3.51**	9.71
総計	**92.8**	4.36

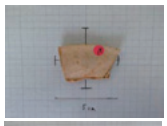
単位 :(mass%)

SK 4513-2

	平均値	%RSD
NaO	-	-
MgO	**1.04**	32.59
Al_2O_3	**18.95**	6.36
SiO_2	**64.55**	2.80
K_2O	**3.25**	19.64
CaO	-	-
TiO_2	**0.95**	13.71
Fe_2O_3	**4.19**	7.72
総計	**92.9**	4.18

単位 :(mass%)

WDS



SK 4513-2-1

	平均値	%RSD
NaO	-	-
MgO	**0.76**	13.68
Al_2O_3	**21.04**	5.37
SiO_2	**61.21**	2.81
K_2O	**2.37**	11.65
CaO	**0.34**	-
TiO_2	-	-
Fe_2O_3	**3.86**	11.26
総計	**89.2**	13.68

単位 :(mass%)

図6－1　東29（SK2715－19）

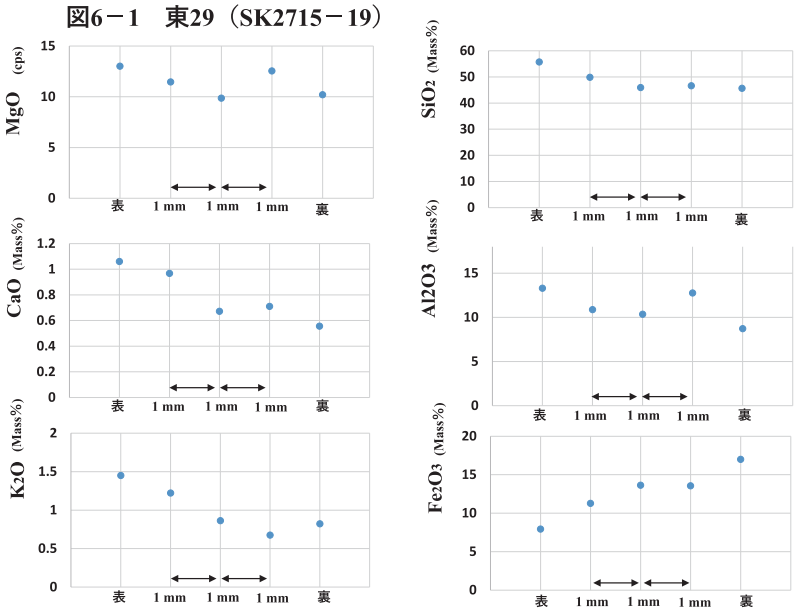


図6－2　東31（SK2715－22）

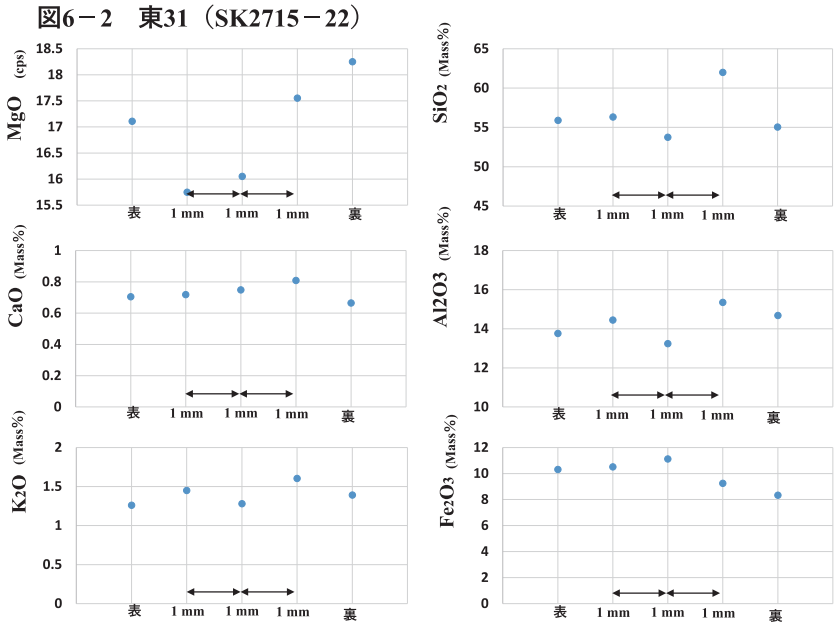


図6－3　東32（SK2715－25）

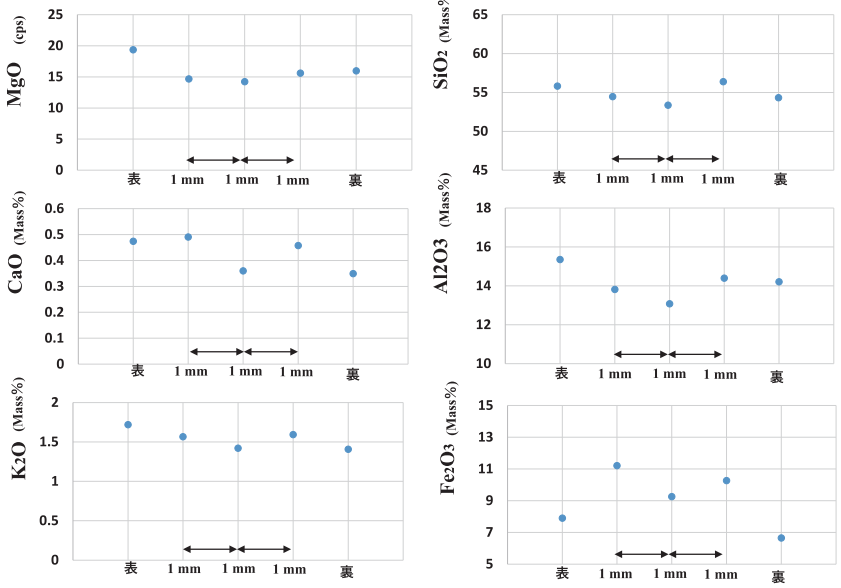
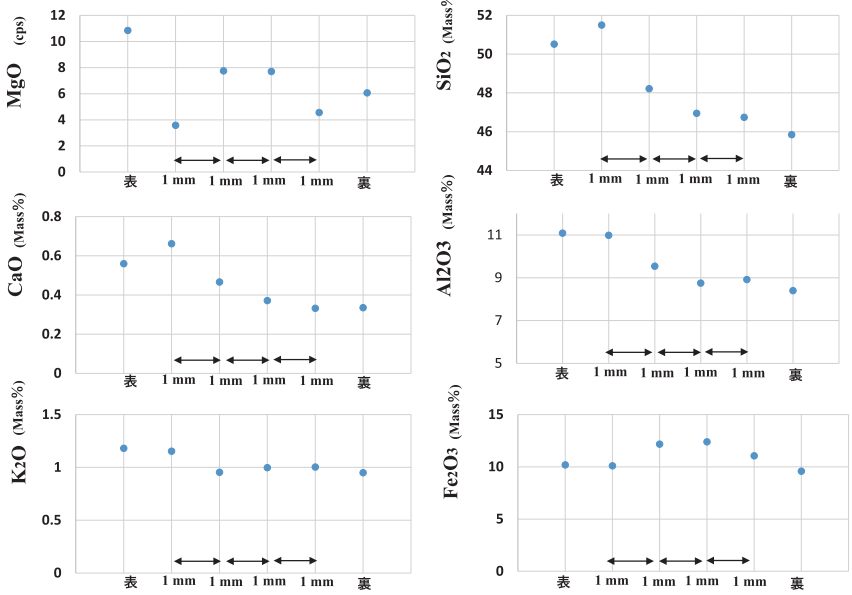


図6－4　東34（SK2715－29）



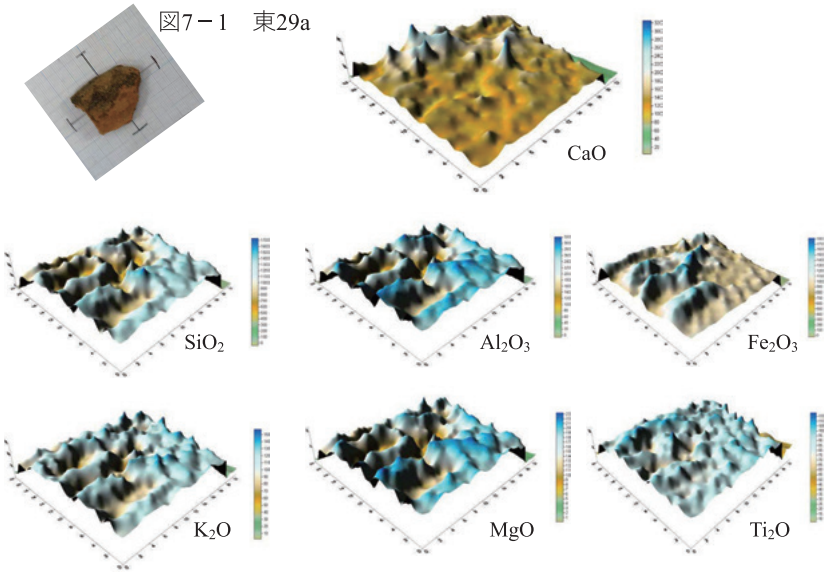


図7－1　東29a

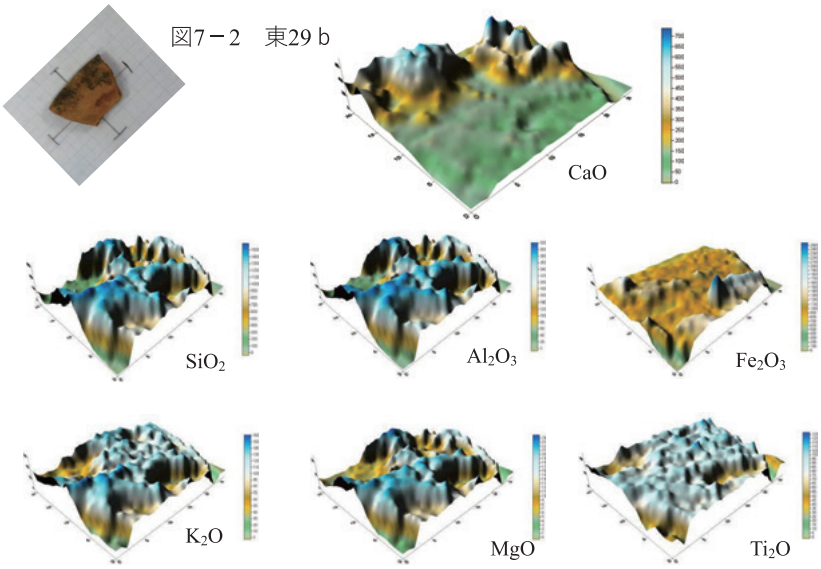


図7－2　東29 b

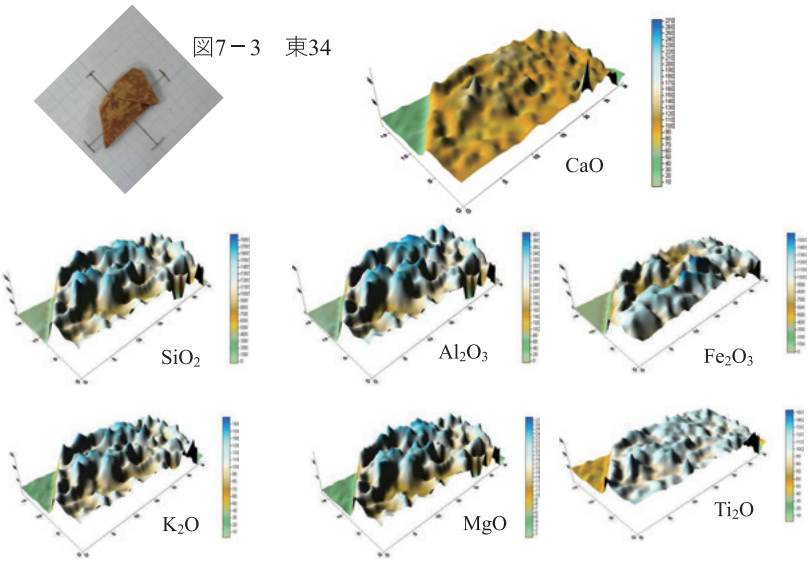


図7－3　東34

東京大学本郷構内遺跡出土手捏ねかわらけの元素分析による生産地推定

* 長佐古　真也

1　はじめに

今回の化学分析を用いた土器胎土に関する共同研究の主眼は、考古資料に対する非破壊元素分析の可能性を探った上で、加賀藩邸跡より出土した特徴的な“かわらけ”の生産地を明らかにすることにある。目的の前段に関しては前掲の丸山＝西本論文で論じられていることから、本稿においては、後段の考古学的解釈の部分、すなわち対象資料の生産地推定について扱う。

議論の対象となるかわらけは、灰白色の胎土を有し、手捏ね成形で制作されていることが最も大きな特徴である。加賀藩邸およびその支藩である大聖寺藩邸跡が主要な部分を占める東京大学本郷構内遺跡（以下、東大と略）の 17 世紀代の遺構に散見されるもので、同時期の江戸在地系かわらけが概ねロクロによる成形技法で制作されていること、一方、加賀・金沢城およびその城下町（石川県金沢市）の出土事例と良く類似していることから、国元からの搬入品、或いはその模倣品の可能性が指摘されている。

2　分析対象資料（1 ～ 3 図）

今回、東大出土土かわらけ 35 点（手捏ね 29 点、ロクロ成形 6 点）、金沢城出土かわらけ [(1)] 15 点、金沢城下町出土かわらけ 21 点、さらに対比資料として溜池遺跡・愛宕下遺跡出土のロクロ成形かわらけ・灯明皿 18 点の合計 89 点について、胎土の主成分元素組成を得た。先ず、これら分析対象に関する考古学的特徴について述べておく。

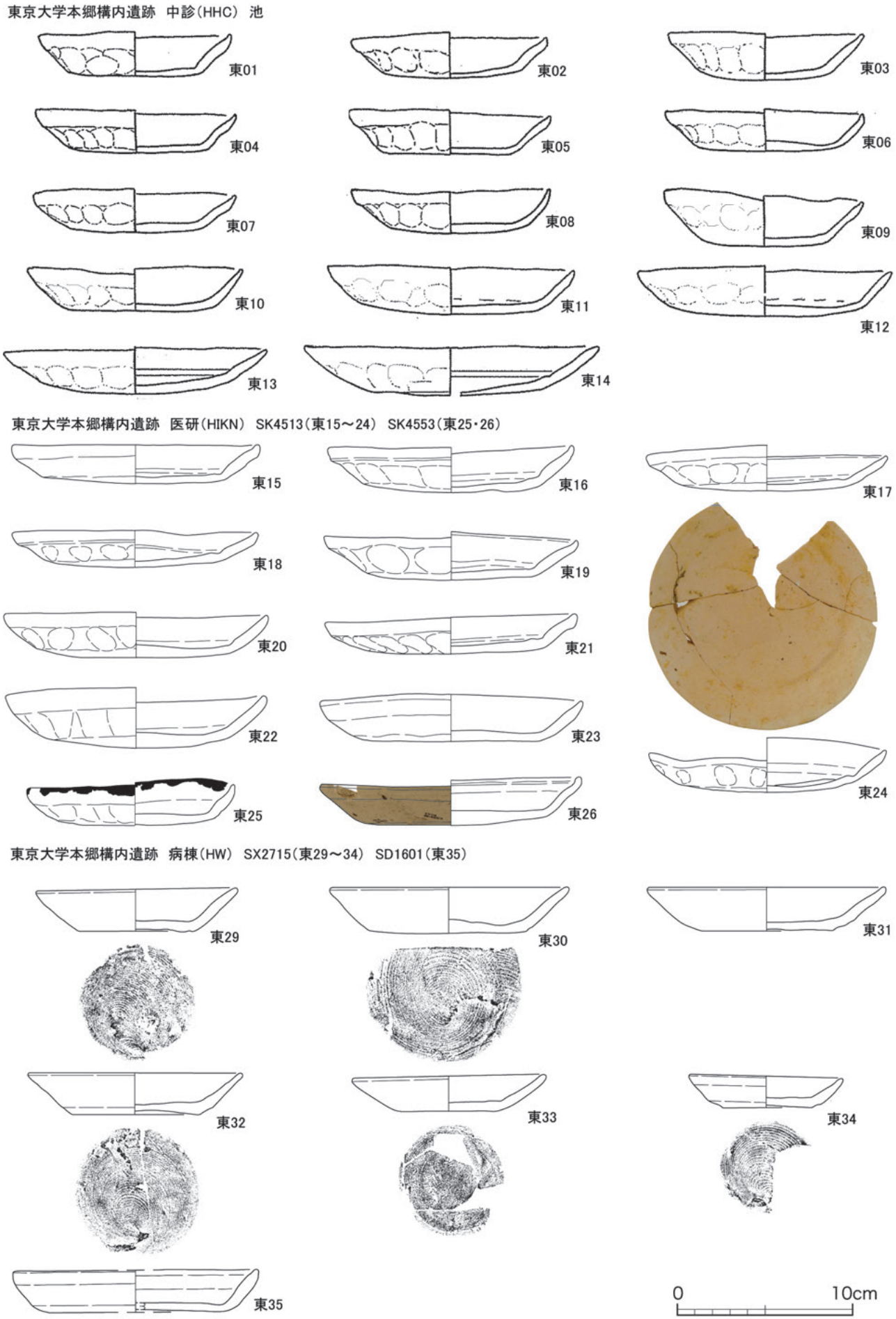
1 図は、東大出土資料である。このうち、東 01 ～ 14 は医学部附属病院中央診療棟地点（略称：中診 [HHC]、調査番号：4）“池”出土資料（東京大学遺跡調査室 1990）である。検出地点は、寛永 16（1639）年の富山藩、大聖寺藩成立以降は大聖寺藩、富山藩の上屋敷となった場所であるが、元和 2、3（1616、17）年以降からこの段階までは加賀藩が下屋敷として使用した空間である。その一角から検出された南北 9m、東西 7.3 m の不整形大型土坑は池跡と推定されており、その西側覆土中からは 634 点（70kg）もの灰白色胎土の手づくねかわらけが、南北の覆土中からは白木の折敷、箸、木簡など木製品が多量に検出されている。その儀礼的な内容に加え、共伴した木簡に寛永 6（1629）年の紀年銘が認められことから、寛永 6（1629）年四月に行われた家光、秀忠の御成に関係する資料とされている。かわらけは、法量に様々なヴァリエーションが認められるが、主体を占めるのは、口径 11 ～ 12cm 前後のやや小振りな一群（東 01 ～ 10）である。

東 15 ～ 28 は医学部教育研究棟地点（略称：医研 [HIKN]、調査番号：24）出土資料である（東京大学遺跡調査室 2019）。この地点は、加賀藩邸内にあった育徳園南側に位置し、元禄以降幕末まで加賀藩の御殿が設けられていた空間にあたる。手捏ねかわらけは、いずれも屋敷の拝領時期まで遡る最下層 F 面の遺構から出土している。中でも、東 15 ～ 24 は不整形土坑 SK4513 から入れ子状になって検出されたもので、前述例よりやや大きい口径 14 ～ 15cm のものが中心である。SK4553 出土の東 25・26 は SK4513 に近い特徴を有するが、SK2416・3097 出土の東 27（図未掲載）は、胎土が橙褐色を呈し、他とはやや異なった趣がある。また、SK4516 出土の東 28（図未掲載）は、表面に金箔を施すという他には無い特徴を有する。小片のため器形の特徴を覗うことはできないが、手捏ね成形で胎土が灰白色を呈する点で他の手捏ねかわらけと共通する。

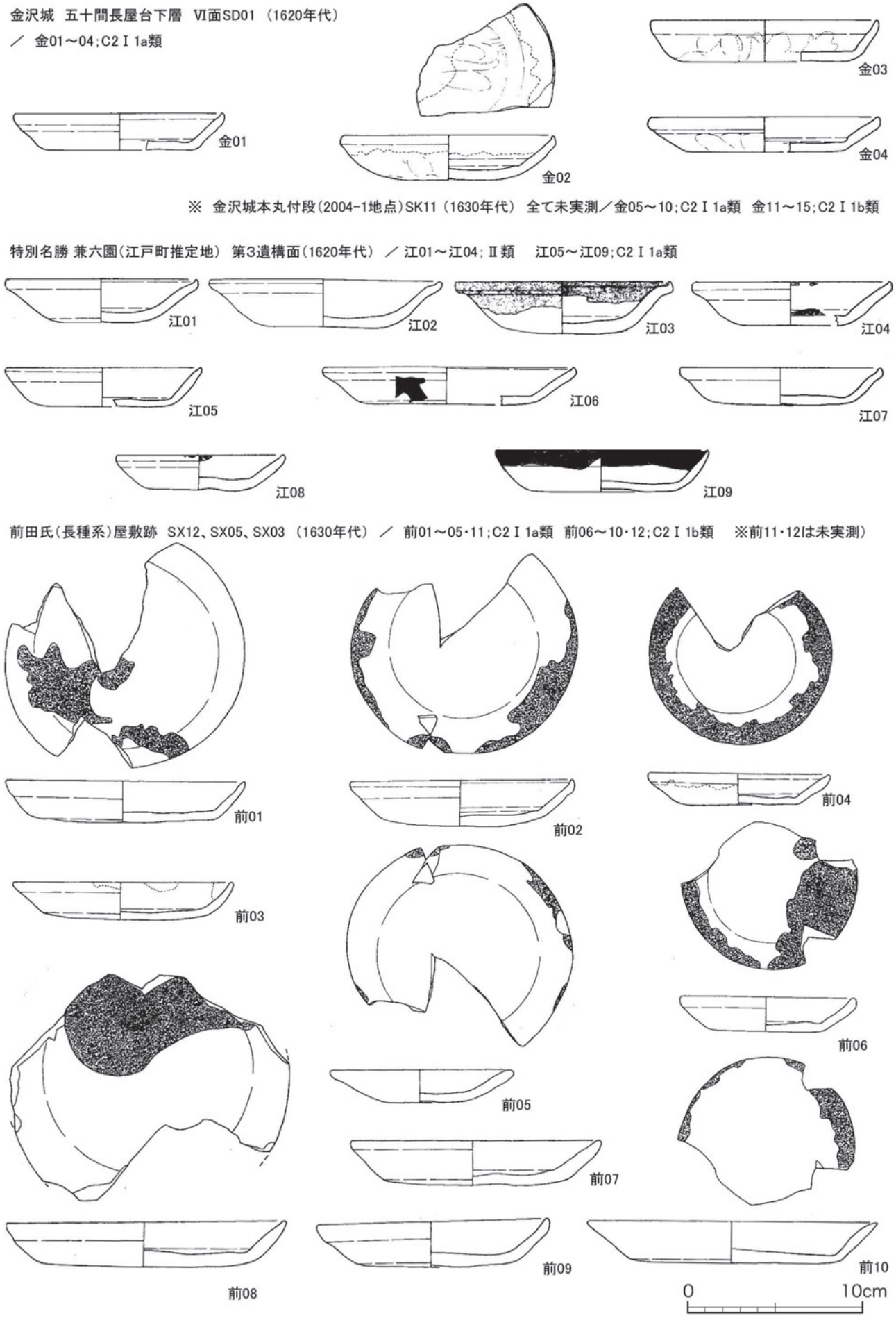
東 29 ～ 35 は、医学部付属病院入院棟 A 地点（略称：入院棟 A[HW]、調査番号：23）出土資料である。このうち SX2715 から検出された東 29 ～ 34 は、17 世紀中葉のロクロ成形のかわらけで、底部には右回転の糸切り痕が認められ、いわゆる江戸在地系土器と考えられるものである。SD1601 出土の東 35 は、手捏ねの技法で制作されているものの、胎土が橙褐色を呈することから、東 27 と共に、他の手捏ねかわらけとは異なる生産地の可能性も視野に入れて検討すべき事例である。

2 図には、加賀産土器の比較対象試料とした金沢城およびその城下町出土資料を示した。このうち、金 01 ～ 15 は、金沢城内から出土したものである。金 01 ～ 04 および図未掲載の金 05 は、金沢城跡五十間長屋台下層

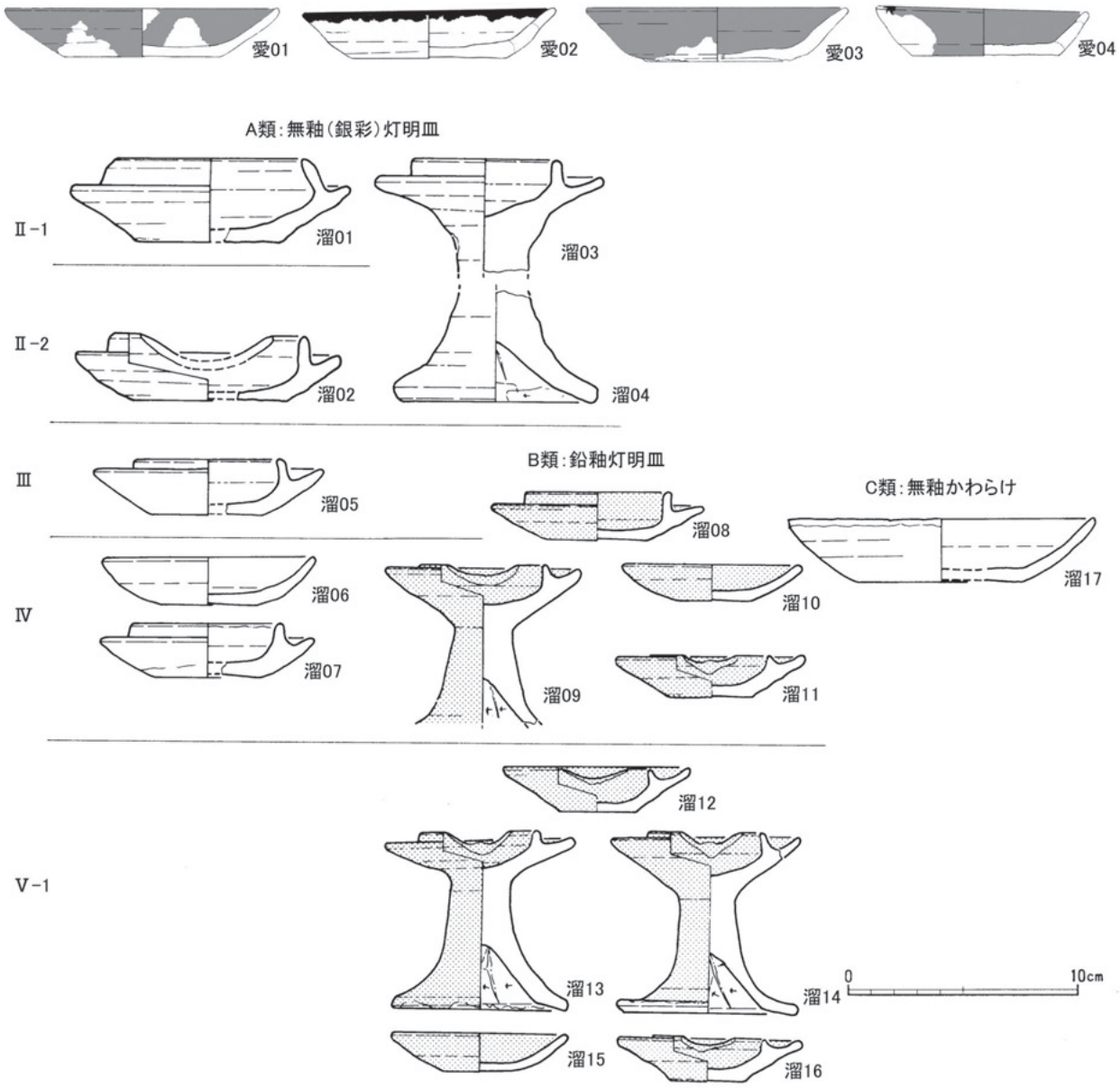
* 東京都埋蔵文化財センター



1図　分析試料（1）　東京大学本郷構内遺跡出土かわらけ



２図　分析試料（2）　金沢城および金沢城下出土かわらけ



３図　分析試料（3）　江戸在地系灯明皿・かわらけ

Ⅵ面 SD01 出土（石川県金沢城調査研究所 2012）で、いずれも滝川氏分類 C2I1a の特徴とされる内面の一方向ナデが認められるもので、帰属年代は 1620 年代とされる。同じく金沢城出土の金 06 ～ 15（図未掲載）は、1630 年代前後に比定されている本丸附段（2004-1 地点）SK11（石川県金沢城調査研究所 2008）から検出されたもので、金 06 ～ 10 は滝川氏分類 C2 Ⅰ 1a、金 11 ～ 15 は内面に不定方向のナデが施される同 C2 Ⅰ 1b に比定される。

江 01 ～前 10 は、金沢城の城下町エリアから出土した事例である。江 01 ～ 09 は、特別名勝兼六園（江戸町推定地）第 3 遺構面出土資料（石川県埋蔵文化財センター 1992）で推定帰属年代は 1620 年代である。口唇端部がはっきりと受け口状に内湾する江 01 ～ 04 は滝川氏分類Ⅱ、江 05 ～ 09 は同 C2 Ⅰ 1a に比定される。前 01 ～ 10 は、前田氏（長種系）屋敷跡 SX12 他出土資料（石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 2002）である。前 01 ～ 05 は滝川氏分類 C2 Ⅰ 1a に、前 06 ～ 12 は C2 Ⅰ 1b に比定されており、その帰属年代は 1630 年前後と推定されている。

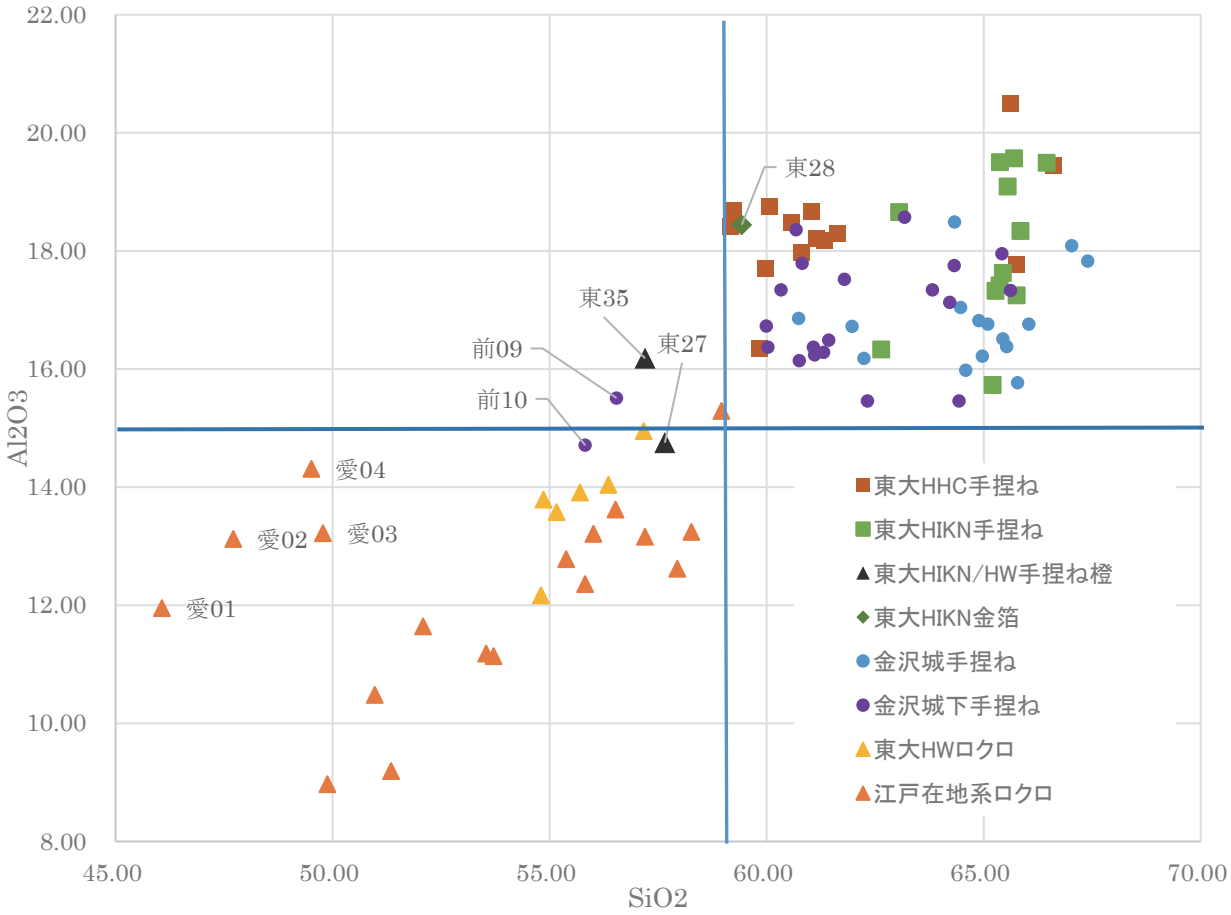
３図は、江戸産土器の比較対象試料とした灯明皿・かわらけ資料である。このうち、愛 01 ～ 04 は、愛宕下遺跡出土の右回転ロクロ成形のかわらけで、1620 年代頃の所産と推定される [(2)]。溜 01 ～ 17（10・12・13 は未測定）は溜池遺跡出土資料 [(3)] で、18 世紀を中心に江戸遺跡で普遍的に認められる土器類である。10・12・13 を除く 14 点について分析を行った。このうち、溜 08 ～

16 の受付灯明皿・灯明上皿は、低火度で溶融する鉛釉が施されている。

3　考察

今回の分析においては、一部の試料に対して波長分散型元素分析装置（WDS）等による分析も行っているが、本稿においては、全ての試料を同一条件で比較するため、エネルギー分散型元素分析装置（EDS）日立ハイテクサイエンス社 SII マイクロエレメントモニタ SEA5120A（神奈川大学理学部）による分析値を用いた。検討の対象とする元素は、すべての試料で分析値の得られている珪素（Si）・アルミニウム（Al）・鉄（Fe）・チタン（Ti）・カリウム（K）の五元素とし、すべて酸化物（SiO2、Al2O3、Fe2O3、TiO2、K2O）としての存在量で扱った。なお、異なる酸化状態の存在する鉄に関しては、すべて 3 価として扱った。また、色調の異なる部分を対象に 2 つの分析値が出ている東 33 については、他と類似性の高い東 33a の値を採用した。この他の分析の詳細については、本研究編研究 11 を参照されたい。

4 図に、珪素＝アルミニウムの二元分布（珪礬比）を示す。加賀産の指標とした金沢城および城下出土かわらけ（金 01 ～ 15、江 01 ～ 09、前 01 ～ 10）は、ほぼ珪素 59％以上、アルミニウム 15％以上の領域に分布し、ここから外れたのは、前 09・前 10 のみである。一方、江戸在地系の指標としたロクロ成形かわらけ（愛 01 ～ 04、溜 01 ～ 17、東 30 ～ 34）は、逆に珪素 59％未満、アルミニウム 15％未満の領域に大半が集中している。すなわち、江戸在地と金沢産の土器の間には、珪礬比において大きな差異が認められるのである。そして、東京大学構内遺跡出土の手捏ねかわらけは、灰白色の胎土をもつもの全てが珪素 59％以上・アルミニウム 15％以上の領域にプロットされ、金沢出土のかわらけとの高い共通性を示した。金箔を施した東 28 も金沢領域に包摂されることから、他の手捏ねかわらけと同様に捉え得る。一方、同じ手捏ね技法を用いながら色調が橙褐色を呈する東 27・東 35 については、江戸在地領域と金沢領域の中間にプロットされた。したがって、この二元分布図のみからは容易に判断できない状況となっているが、同じ加賀産と考えられる前 09、前 10 とは近接している。また、

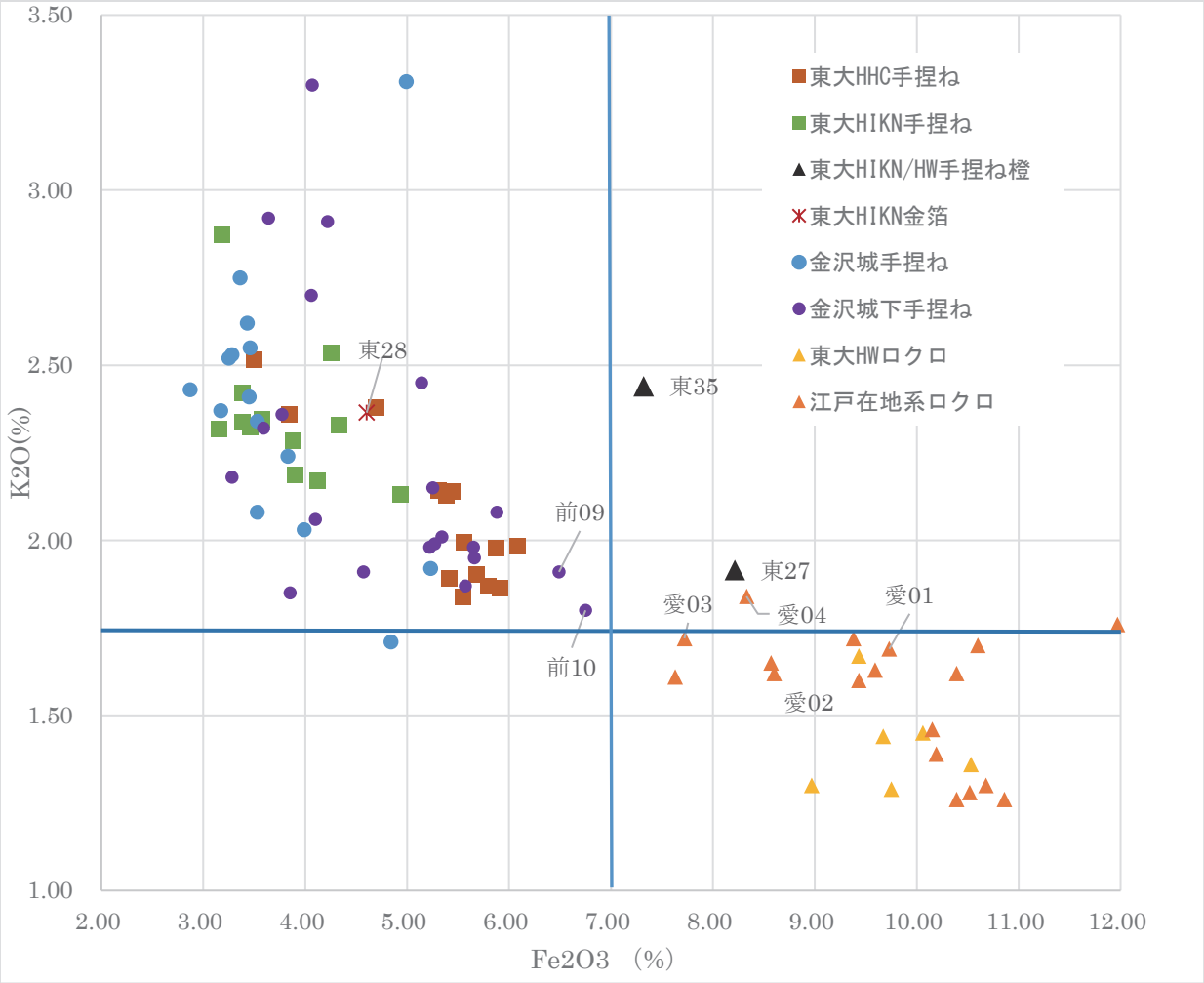


4 図　江戸および加賀出土かわらけ胎土の珪素＝アルミニウム存在量の二元分布

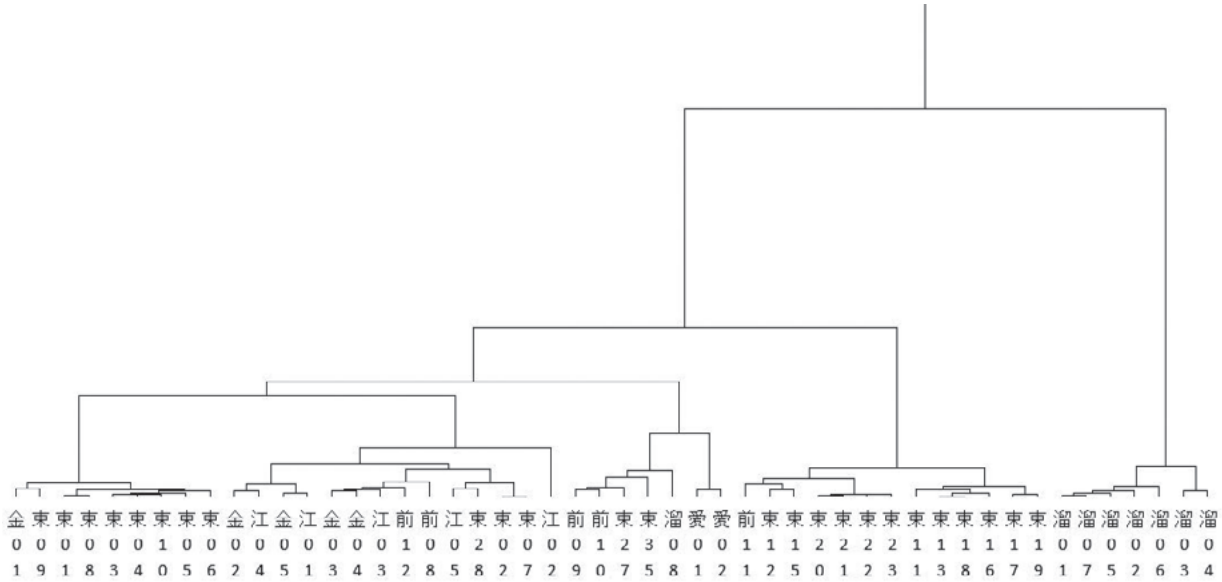
手捏ねかわらけの生産地推定とは直接関係ないが、江戸在地系の中でも近世初頭段階に帰属する愛宕下遺跡の4点（愛01～04）が他の江戸在地系群から大きく外れてプロットされる点も目を引く。

5図は、鉄＝カリウムの二元分布である。この場合も、金沢出土例と江戸在地系は、互いの分布域を大きく異にし、カリウムは約1.75％付近を挟んで金沢群は以上、江戸在地系群は以下の値を示し、鉄の場合は逆に金沢群が7.0％以下、江戸在地系群は7.0％以上となっている。この鉄の存在量の多寡が、両者の色調差の最も大きな要因となっているのであろう。そして、この場合も東大出土の手捏ねかわらけは、金箔を施した東28を含めて、そのほとんどが金沢領域に包摂される。珪礬比では金沢領域からやや外れる傾向が認められた前09、前10は、今回も金沢群の中で最も江戸在地系群に近い位置にプロットされている。また、胎土が橙褐色を呈する東27・東35に関しては、金沢出土群とは鉄が、江戸在地群とはカリウムが大きく異なる値を示している。4図の二元分布と総合すると、やはり第3の生産地の存在を想起せざるを得ない。今回の分析だけでは、これらが具体的に何処で生産されたかについてを明らかにすることはできないが、東35は肉眼的な胎土の特徴や器形・成形技法が、同じ加賀藩領でもある能登産かわらけと類似しているとの指摘がある[(4)]。

6図は、五元素を用いたクラスター分析（正規化･ユークリッド平方距離・ワード法）の結果である[(5)]。金沢出土および東大出土の手捏ねかわらけは互いに近い距離で併合される一方、典型的な江戸在地系群は他と最も大きな距離で併合され、二元グラフでも確認した通り、東大出土の手捏ねかわらけが国許から搬入された可能性を強く支持している。また、東27・東35の色調の異なる手捏ねかわらけは、金沢群の中からやや外れた前09・前10、江戸在地系の中からやや外れた愛宕下遺跡出土かわらけと共に独立したクラスターを形成した。色調の異なる手捏ねかわらけだけでなく、前09・前10、および愛宕下遺跡出土のかわらけについても、他のかわらけ



5図　江戸および加賀出土かわらけ胎土のカリウム＝鉄存在量の二元分布



６図　主成分５元素存在量を用いた江戸および加賀出土かわらけのクラスター分布

とは異なる生産単位の所産である可能性を吟味すべきであろう。愛宕下遺跡例の帰属する 17 世紀第 1 四半期段階は、いわゆる江戸在地系土器がまだ確立しておらず、形態的なバリエーションも多い段階である。今後、事例数を増やしていけば、江戸在地系土器成立期の様相についても重要な知見を得ることが期待できよう。

今回の分析値からは、他にも幾つかの興味深い傾向を読みとることができる。例えば、4・5 図においても、同一調査地点から出土した資料は分析値も比較的近接した位置にまとまってプロットされる傾向が認められる。その要因については、生産時期による母材成分の揺らぎや胎土調整技法の変化などに起因している可能性などが想定し得る。滝川重徳氏が指摘している胎土のヴァリエーション（滝川 2018 他）との対応を含め、今後、さらに検討を加えていけば、各地の土器生産の技法や生産体制、さらにはその変遷などに迫る上でも大きな知見が得られることが期待できよう。

5　まとめ

今回の分析を通して、東大出土の手捏ねかわらけは、国許から搬入されていた可能性が極めて高いことを確認した。また、橙褐色を呈する東 27・東 35 については、灰白色を呈する他の手捏ねかわらけとは異なる生産単位の所産の可能性が高いこと、各生産地内もさらに細別できる可能性があることを併せて指摘することができた。今後さらに検討を加えていくことにより、未だ充分に明らかになっていない近世段階における各地の土器生産の実態に迫っていくことが期待される。

また、非破壊による分析で生産地推定に関する一定の成果を挙げ、さらに新たな研究の方向性を見いだせたこと自体も大きな収穫である。試料調整の負担が少ないこと、何より考古資料としての原形を保つことができること、またこれにより破壊分析に供することの難しい貴重な出土資料を対象とすることが可能になることなど、非破壊分析の利点は非常に大きい。今回の分析においては、主成分元素の一つであるナトリウムの分析値が示せていないなど研究を深めていく上においては解決すべき課題も山積しているが、今回得られた所見を元に工夫・改良を加えていけば、非破壊での胎土分析の可能性はさらに広がっていくことになるだろう。

なお、本研究については、平成 30 年度環日本海文化交流史調査研究集会において口頭発表を行っている。要旨集の内容に一部異なる点があるが、本文をもって正式とする。

謝辞

今回の分析は、東京大学遺跡調査室、神奈川大学理学部との共同研究として実施したもので、堀内秀樹、小林照子、西本右子、丸山毅真の各氏の尽力なしでは成しえなかった。また、金沢城および城下の対比資料分析に関しては石川県埋蔵文化財センター、金沢城調査研究所のご厚意により実現し、藤田邦雄氏、岩瀬由美氏、滝川重徳氏に多くの便宜とご教示を賜った。記して、深謝致します。

【註】

(1) 金沢をはじめ北陸地方においては、江戸遺跡でかわらけと呼んでいる土器皿を、“土師器皿”と呼称しているが、ここではかわらけに統一する。

(2) 本資料は、故・門倉武夫氏、故・上條朝宏氏が東京都埋蔵文化材センター在籍時に黒色付着物の同定用サンプルとして発掘調査時に提供を受け、東京都埋蔵文化センターにて保管されていたものである。

(3) 本資料は、溜池遺跡整理作業時に胎土分析用の試料として、長佐古が東京都教育委員会より提供を受け、東京都埋蔵文化財センターにおいて保管されていたものである。

(4) 平成30年度環日本海文化交流史調査研究集会において口頭発表を行った際、石川県金沢城調査研究所滝川重徳氏からご教示を得た。

(5) 統計処理に用いたソフトウエアは、エスミ EXCEL 多変量解析 ver7.0 である。この関係で、比較資料数を 50 に減じてある。

【引用・参考文献】

石川県金沢城調査研究所 2008『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅰ』

石川県金沢城調査研究所 2012『金沢城跡―二ノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓Ⅱ―』

石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター 2002『金沢市　前田氏（長種系）屋敷跡』

石川県埋蔵文化財センター 1992『特別名勝 兼六園（江戸町推定地）発掘調査報告書』

石川県埋蔵文化財センター 2018『近世成立期の土器・陶磁器様相―カワラケを中心に―』平成29年度環日本海文化交流史調査研究集会 発表要旨・資料集

石川県埋蔵文化財センター 2019『北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相―城下町とその周辺遺跡の土師器皿（かわらけ）を中心に―』平成30年度環日本海文化交流史調査研究集会 発表要旨・資料

上條朝宏・長佐古真也 1996「溜池遺跡出土土器灯明皿の胎土分析」『溜池遺跡―総理大臣官邸整備に伴う埋蔵文化財調査報告書―』都内遺跡調査会

滝川重徳 2018「金沢城の土師器皿―16世紀後半～17世紀前半―」『近世成立期の土器・陶磁器様相―カワラケを中心に―』平成29年度環日本海文化交流史調査研究集会発表要旨・資料集　石川県埋蔵文化財センター

東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点』

東京都埋蔵文化財センター 2009『愛宕下遺跡Ⅰ』東京都埋蔵文化財センター調査報告第226集

東京都埋蔵文化財センター 2011『愛宕下遺跡Ⅱ』東京都埋蔵文化財センター調査報告第254集

東京都埋蔵文化財センター 2014『愛宕下遺跡Ⅲ』東京都埋蔵文化財センター調査報告第286集

都内遺跡調査会 1996『溜池遺跡―総理大臣官邸整備に伴う埋蔵文化財調査報告書―』

長佐古真也 1989「理学部7号館地点出土古九谷様式磁器片の蛍光X線分析」『東京大学本郷構内の遺跡　理学部7号館地点』

長佐古真也・西本右子・丸山毅真 2019「近世初期土師器皿の生産地推定(速報)～非破壊元素分析のポテンシャル～」『北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相―城下町とその周辺遺跡の土師器皿（かわらけ）を中心に―』平成30年度環日本海文化交流史調査研究集会 発表要旨・資料　石川県埋蔵文化財センター

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 14

東京大学本郷構内の遺跡

医学部教育研究棟地点
研究編

2020 年 3 月 31 日発行

編集・発行　東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場４－６－１
http://www.aru.u-tokyo.ac.jp

印　刷　　能登印刷株式会社